熊本県文化財調査報告第 256 集

二本木遺跡群Ⅲ

熊本合同庁舎 A 棟新営工事に伴う二本木遺跡群春日地区第 8 次埋蔵文化財発掘調査報告書

2010.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第 256 集

二本木遺跡群Ⅲ

熊本合同庁舎 A 棟新営工事に伴う二本木遺跡群春日地区第 8 次埋蔵文化財発掘調査報告書

2010.3

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、国の合同庁舎新営工事にともない、熊本市春日２丁目にあった旧月星化成の跡地の含まれる二本木遺跡群の発掘調査を平成 18 年から平成 19 年８月まで実施しました。本報告書はその発掘調査報告書として刊行します。

本遺跡群には古代末から中世にかけての国衙の推定地、さらには近年それよりさかのぼる８世紀代の国衙の一部と考えられる遺構の検出もありました。九州新幹線の開業に合わせてこの地域一帯の再開発が行われることに伴い、埋蔵文化財の調査も各所で行われており、様々な成果が知られる状況になってきております。

今回の調査では、古代・中世におけるこの地の特殊な状況を確認できました。出土遺物では輸入陶磁器の豊富さは群を抜き、古代の越州窯系青磁・国産陶器の多様性も目を引きます。中世の白磁・青磁の出土量の多さや質の点でこの地に居住した人々の階層の優位性を示しているようです。特にこの時期では遺構から出土した全国で２例目という白磁鳳首瓶片は貴重な資料となります。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与できれば、喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、多大の御協力をいただいた国土交通省九州地方整備局熊本営繕事務所ならびに貴重なご指導ご助言を賜りました諸先生方及び調査に関わられた皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成 22 年３月 31 日

熊本県教育長　　山 本 隆 生

例　　言

1　本書は、熊本合同庁舎新営工事に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2　本書は熊本県教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本営繕事務所の委託を受けて実施した、熊本県熊本市春日２丁目に所在する二本木遺跡群春日地区第８次調査区の調査報告書である。
3　二本木遺跡群第８次調査区は平成 18 年５月から平成 19 年８月までの期間、現地において熊本県教育庁文化課が発掘調査を実施した。
4　発掘調査にともなう遺構の実測ならびに現地の写真撮影は、坂田和弘・亀田学・横矢晋二郎・島浦健生・伊藤友美子・園田恭子・吉留広・遠山　宏・坂本亜矢子が行い、地形測量・遺構実測の一部を埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・株式会社九州文化財研究所に委託した。
5　調査区全体の４級基準点測量、メッシュ杭の設置は株式会社長田測量設計に委託した。
6　各調査区の全体写真は九州航空株式会社が撮影した。
7　整理作業・報告書作成は平成 19 年４月から平成 21 年３月まで、坂田和弘・赤星和美・戸田紀美子・永田礼香が熊本県文化財資料室で実施した。
8　一次整理は資料室での作業を主としたが、出土遺物の多さから株式会社九州文化財研究所・株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に一部委託した。
9　遺物の実測は赤星、戸田、岩下恵美子、清水千郷、金子美代子、竹原由里子が主として行った。一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
10　遺構はデジタル・トレースとし、株式会社九州文化財研究所に委託した。遺物の製図は手作業とデジタル化を岩下、清水、永田、金子が行ったほか、遺物のデジタル・トレースを株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。また写真図版掲載の遺物の写真撮影は坂田・村田百合子・木下勇が行った。
11　自然科学的分析は人骨を松下孝幸館長 (下関市立土井ヶ浜ミュージアム) が、樹種同定を株式会社吉田生物研究所が行った。
12　陶磁器の色調は『新彩色辞典カラーデータ集』(株式会社ジーイー企画センター) のマンセル記号を、その他の色調は『新版標準土色帖 2001 年版』(日本色彩研究所) を基準に使用した。
13　本書の執筆は、第６章自然科学的分析のうち人骨を松下孝幸館長 (下関市立土井ヶ浜人類学ミュージアム) が、樹種同定を株式会社吉田生物研究所が、それ以外を坂田が行った。
14　本書の編集は坂田が行い、戸田・永田が補佐した。

凡　　例

1　二本木遺跡群の全体図は１万分の１とした
2　現地での実測作業では遺構配置図は 100 分の１で作成し、付図とした。本書への掲載は 200 分の１とし図中に縮尺を示した。
3　現地での各遺構の実測縮尺は 20 分の１、10 分の１で行った。本書への掲載縮尺は基本的に 40 分の１、20 分の１で行い、図中に縮尺を示した。標高及び基準高は現地調査により記述しているが、基準点の選択ミスにより本来の標高より 146mm 高く表示されている。全体的な修正が間に合わないため調査時の標高をそのまま記載している。
4　遺構内より一括して出土している遺物出土状況図には、重要度に応じて平面図中に遺物番号を記し、その位置を実線で示した。
5　出土遺物は実測もしくは何らかの形で掲載する予定の遺物に全て通し番号を付し、報告書まで番号を変えないものとした。縮尺は土器では３分の１を基本とし、小型品を２分の１、大型品を８分の１とした。石器では４分の３、木器では５分の１、３分の１とした。縮尺は図中に表示した。
6　出土遺物のうち主なものの解説は本文中に記した。種別・形式・法量出土層位等については、別途一覧表を作成し、巻末に掲載した。
7　遺構名称は調査区ごとに「略記号＋遺構番号」で表すこととした。略記号は以下のとおりである。
竪穴建物 (SI)、墓壙 (ST)、土坑 (SK)、溝状遺構 (SD)、井戸 (SE)、掘立柱建物 (SB)、柵列 (SA)、不明遺構 (SX)
8　輸入陶磁器・施釉陶器の分類については、専門調査員の山本信夫氏 (山本考古研究所・早稲田大学非常勤准教授) によるほか、土器類についても以下の文献を参考にした。

古代陶磁器	太宰府市教育委員会	『大宰府条坊ＸＶ』太宰府市の文化財　第 49 集　2000 年
古代土器	山本信夫	「土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財　第７集 1983 年
	山本信夫	「土器分類の追加」『大宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財　第８集 1984 年
	山本信夫	「大宰府出土施釉陶器の編年について - 九州の緑釉・灰釉陶器の基礎資料集成 -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 82 集
	網田龍生	「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究　熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集』龍田考古学　1994 年『二本木遺跡群Ⅱ - 二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2007 年
	美濃口雅朗	「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会　1994 年

熊本県文化財報告第 256 集

『二本木遺跡群Ⅲ』

熊本合同庁舎 A 棟新営工事に伴う二本木遺跡群春日地区第 8 次埋蔵文化財発掘調査報告書

本文目次

序文
例言
凡例

第Ⅰ章　調査の概要
第 1 節　調査に至る経緯 1
第 2 節　調査の組織 1
第 3 節　調査の方法と工程 2
第 4 節　整理作業・報告書作成の方法と工程 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第 1 節　遺跡の位置と地理的環境 7
第 2 節　遺跡の歴史的環境 8

第Ⅲ章　第 8 次調査の成果
第 1 節　基本層序 13
第 2 節　調査Ⅰ区の遺構とその遺物
(1) 調査Ⅰ区の概要 13
(2) 掘立柱建物 15
(3) 竪穴建物 32
(4) 墓壙 58
(5) 土坑 59
(6) 井戸 81
(7) 溝状遺構 127
(8) ピット 159
(9) 不明遺構 165
(10) 調査Ⅰ区遺構外出土遺物 167
第 3 節　調査Ⅱ区の遺構とその遺物
(1) 調査Ⅱ区の概要 187
(2) 竪穴建物 188
(3) 土坑 201
(4) 井戸 209

(5) 溝状遺構 215
(6) ピット 215
(7) 調査Ⅱ区遺構外出土遺物 216
第 4 節　調査Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の遺物 217

第Ⅳ章　自然科学分析
第 1 節　二本木遺跡群第 8 次調査の自然科学分析 219
第 2 節　二本木遺跡群第 8 次調査出土の古代・中世人骨 221

第Ⅴ章　総括
第 1 節　遺構について
(1) 竪穴建物 235
(2) 掘立柱建物 235
(3) 墓壙 236
(4) 土坑 236
(5) 井戸 237
(6) 溝状遺構 237
(7) 遺構のまとめ 238
第 2 節　遺物について
(1) 縄文時代の遺物 239
(2) 古代・中世の土器類 239
(3) 輸入陶磁器について 240
(4) 硯 (獣脚・円面・風字・転用) について 245
(5) 瓦について 246
(6) 金属製品について 249
(7) 自然科学分析について 251
第 3 節　まとめ 253

挿図目次

第Ⅰ章　調査の概要

第 1 図　二本木遺跡群ブロック設定図 4
第 2 図　調査グリッド設定図 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第 3 図　熊本市および周辺地域の地形分布図 7
第 4 図　二本木遺跡群周辺遺跡地図 9

第 8 次調査の成果

第 5 図　調査Ⅰ区土層模式図 14
第 6 図　二本木遺跡群Ⅲ遺構配置図 15
第 7 図　Ⅰ区　SA10003 実測図 16
第 8 図　Ⅰ区　SB10001 実測図 17
第 9 図　Ⅰ区　SB10002 実測図 18
第 10 図　Ⅰ区　SB10006･10009 実測図 19
第 11 図　Ⅰ区　SB10007 実測図 20
第 12 図　Ⅰ区　SB10023 実測図 21
第 13 図　Ⅰ区　SB10031 実測図 22
第 14 図　Ⅰ区　SB10032 実測図 22
第 15 図　Ⅰ区　SB10039 実測図 23
第 16 図　Ⅰ区　SB10040 実測図 24
第 17 図　Ⅰ区　SB10041 実測図 25
第 18 図　Ⅰ区　SB10042･10043 実測図 26
第 19 図　Ⅰ区　SB10050 実測図 27
第 20 図　Ⅰ区　SB10053 実測図 29
第 21 図　Ⅰ区　SB10053 出土遺物実測図 30
第 22 図　Ⅰ区　竪穴建物と溝状遺構実測図 32
第 23 図　Ⅰ区　SI050 出土遺物実測図 33
第 24 図　Ⅰ区　SI050 出土遺物実測図 34
第 25 図　Ⅰ区　SI063 出土遺物実測図 34
第 26 図　Ⅰ区　SI051 出土遺物実測図 35
第 27 図　Ⅰ区　SI068 出土遺物実測図 36
第 28 図　Ⅰ区　SI052 実測図 37
第 29 図　Ⅰ区　SI052 出土遺物実測図 38
第 30 図　Ⅰ区　SI055 実測図 39
第 31 図　Ⅰ区　SI055 出土遺物実測図 39
第 32 図　Ⅰ区　SI064 実測図 40
第 33 図　Ⅰ区　SI064 出土遺物実測図 40
第 34 図　Ⅰ区　SI086 実測図 41
第 35 図　Ⅰ区　SI086 出土遺物実測図 42
第 36 図　Ⅰ区　SI086 出土遺物実測図 43
第 37 図　Ⅰ区　SI087 実測図 44
第 38 図　Ⅰ区　SI087 出土遺物実測図 44
第 39 図　Ⅰ区　SI088 実測図 45
第 40 図　Ⅰ区　SI088 出土遺物実測図 46
第 41 図　Ⅰ区　SI088 出土遺物実測図 47
第 42 図　Ⅰ区　SI096 実測図 49
第 43 図　Ⅰ区　SI105 実測図 50
第 44 図　Ⅰ区　SI195 実測図 51
第 45 図　Ⅰ区　SI195 出土遺物実測図 52
第 46 図　Ⅰ区　SI221 実測図 53
第 47 図　Ⅰ区　SI221 出土遺物実測図 53
第 48 図　Ⅰ区　SI279 実測図 54
第 49 図　Ⅰ区　SI279 出土遺物実測図 54
第 50 図　Ⅰ区　SI294 実測図 55
第 51 図　Ⅰ区　SI323 カマド実測図 56
第 52 図　Ⅰ区　SI357 実測図 57
第 53 図　Ⅰ区　SI503 実測図 57
第 54 図　Ⅰ区　ST040 実測図 58
第 55 図　Ⅰ区　ST040 出土遺物実測図 59
第 56 図　Ⅰ区　SK030 実測図 60
第 57 図　Ⅰ区　SK030 出土遺物実測図 61
第 58 図　Ⅰ区　SK067 出土遺物実測図 61
第 59 図　Ⅰ区　SK077 実測図 62
第 60 図　Ⅰ区　SK077 出土遺物実測図 62
第 61 図　Ⅰ区　SK098 出土遺物実測図 63
第 62 図　Ⅰ区　SK103 出土遺物実測図 63
第 63 図　Ⅰ区　SK104 出土遺物実測図 64
第 64 図　Ⅰ区　SK104 出土遺物実測図 65
第 65 図　Ⅰ区　SK107 出土遺物実測図 65
第 66 図　Ⅰ区　SK109 実測図 66
第 67 図　Ⅰ区　SK109 出土遺物実測図 66
第 68 図　Ⅰ区　SK116 実測図 67
第 69 図　Ⅰ区　SK116 出土遺物実測図 67
第 70 図　Ⅰ区　SK123 出土遺物実測図 67
第 71 図　Ⅰ区　SK124 出土遺物実測図 68

第 72 図　I区　SK133 実測図 69
第 73 図　I区　SK133 出土遺物実測図 70
第 74 図　I区　SK174 実測図 71
第 75 図　I区　SK174 出土遺物実測図 71
第 76 図　I区　SK187 実測図 72
第 77 図　I区　SK187 出土遺物実測図 72
第 78 図　I区　SK196 出土遺物実測図 73
第 79 図　I区　SK207 出土遺物実測図 73
第 80 図　I区　SK210~SK703 実測図 74
第 81 図　I区　SK211 実測図 75
第 82 図　I区　SK211 出土遺物実測図 75
第 83 図　I区　SK215 出土遺物実測図 76
第 84 図　I区　SK248 出土遺物実測図 76
第 85 図　I区　SK272 実測図 77
第 86 図　I区　SK272 出土遺物実測図 77
第 87 図　I区　SK342 出土遺物実測図 78
第 88 図　I区　SK897 出土遺物実測図 78
第 89 図　I区　SE045 実測図 82
第 90 図　I区　SE045 出土遺物実測図 82
第 91 図　I区　SE053 実測図 83
第 92 図　I区　SE053 出土遺物実測図 83
第 93 図　I区　SE060 実測図 84
第 94 図　I区　SE060 出土遺物実測図 85
第 95 図　I区　SE134 実測図 86
第 96 図　I区　SE134 出土遺物実測図 86
第 97 図　I区　SE134 出土遺物実測図 87
第 98 図　I区　SE161 実測図 88
第 99 図　I区　SE161 出土遺物実測図 88
第 100 図　I区　SE213 実測図 89
第 101 図　I区　SE213 出土遺物実測図 90
第 102 図　I区　SE214 実測図 91
第 103 図　I区　SE214 出土遺物実測図 92
第 104 図　I区　SE217 実測図 93
第 105 図　I区　SE219 実測図 93
第 106 図　I区　SE219 出土遺物実測図 93
第 107 図　I区　SE222 実測図 94
第 108 図　I区　SE222 出土遺物実測図 95
第 109 図　I区　SE222 出土遺物実測図 96
第 110 図　I区　SE229 実測図 97
第 111 図　I区　SE229 出土遺物実測図 98
第 112 図　I区　SE229 出土遺物実測図 99
第 113 図　I区　SE263 実測図 101
第 114 図　I区　SE263 出土遺物実測図 102
第 115 図　I区　SE263 出土遺物実測図 103
第 116 図　I区　I区　SE277 実測図 104
第 117 図　I区　SE277 出土遺物実測図 104
第 118 図　I区　SE288 実測図 105
第 119 図　I区　SE288 出土遺物実測図 106
第 120 図　I区　SE305・807・953 実測図 107
第 121 図　I区　SE049 実測図 108
第 122 図　I区　SE049 出土遺物実測図 109
第 123 図　I区　SE066 実測図 110
第 124 図　I区　SE066 出土遺物実測図 111
第 125 図　I区　SE066 出土遺物実測図 112
第 126 図　I区　SE066 瓦出土遺物実測図 112
第 127 図　I区　SE066 井戸枠材出土遺物実測図 113
第 128 図　I区　SE066 井戸枠材出土遺物実測図 114
第 129 図　I区　SE120 実測図 115
第 130 図　I区　SE120 瓦出土遺物実測図 116
第 131 図　I区　SE177 実測図 116
第 132 図　I区　SE247 実測図 117
第 133 図　I区　SE247 出土遺物実測図 118
第 134 図　I区　SE247 出土遺物実測図 119
第 135 図　I区　SE147 瓦出土遺物実測図 120
第 136 図　I区　SE249 実測図 122
第 137 図　I区　SE249 出土遺物実測図 123
第 138 図　I区　SE249 出土遺物実測図 124
第 139 図　I区　溝状遺構出土遺物実測図 127
第 140 図　I区　SD041 実測図 130
第 141 図　I区　SD041 出土遺物実測図 131
第 142 図　I区　SD041 出土遺物実測図 132
第 143 図　I区　SX004 実測図 134
第 144 図　I区　SX004 出土遺物実測図 135
第 145 図　I区　SD046 実測図 138
第 146 図　I区　SD046 出土遺物実測図 139
第 147 図　I区　溝状遺構出土遺物実測図 140
第 148 図　I区　溝状遺構出土遺物実測図 141
第 149 図　I区　溝状遺構出土遺物実測図 142

第 150 図　Ⅰ区　溝状遺構出土遺物測図..... 143
第 151 図　Ⅰ区　SD178 実測図..... 147
第 152 図　Ⅰ区　SD270 実測図..... 149
第 153 図　Ⅰ区　SD270 出土遺物実測図 150
第 154 図　Ⅰ区　SD270 出土実測図..... 151
第 155 図　Ⅰ区　SD270 実測図..... 152
第 156 図　Ⅰ区　SD270 出土遺物実測図 153
第 157 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図 154
第 158 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図 155
第 159 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図 156
第 160 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図 157
第 161 図　調査Ⅰ区内輸入陶磁器出土遺物実測図 163
第 162 図　調査Ⅰ区内国産陶器出土遺物実測図 164
第 163 図　Ⅰ区ピット内出土遺物実測図..... 165
第 164 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図..... 166
第 165 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図..... 167
第 166 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図..... 168
第 167 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図..... 169
第 168 図　Ⅰ区　SX 出土遺物実測図..... 170
第 169 図　Ⅰ区　SX 出土遺物実測図..... 171
第 170 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 172
第 171 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 173
第 172 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 174
第 173 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 175
第 174 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 176
第 175 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 177
第 176 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 178
第 177 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 179
第 178 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 180
第 179 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 181
第 180 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図 182
第 181 図　調査Ⅰ区内縄文土器遺物実測図..... 183
第 182 図　調査Ⅱ区遺構配置図..... 187
第 183 図　Ⅱ区　SI2001 実測図..... 188
第 184 図　Ⅱ区　SI2001 出土遺物実測図 189
第 185 図　Ⅱ区　SI2001 出土遺物実測図 190
第 186 図　Ⅱ区　SI2002 実測図..... 191
第 187 図　Ⅱ区　SI2002 出土遺物実測図 192
第 188 図　Ⅱ区　SI2002 出土遺物実測図 193
第 189 図　Ⅱ区　SI2004 実測図..... 194
第 190 図　Ⅱ区　SI2004 出土遺物実測図 195
第 191 図　Ⅱ区　SI2004 出土遺物実測図 196
第 192 図　Ⅱ区　SI2010 実測図..... 197
第 193 図　Ⅱ区　SI2010 出土遺物実測図 198
第 194 図　Ⅱ区　SI2013 実測図..... 199
第 195 図　Ⅱ区　SI2013 出土遺物実測図 199
第 196 図　Ⅱ区　SI2017 出土遺物実測図..... 200
第 197 図　Ⅱ区　SK2005 実測図..... 201
第 198 図　Ⅱ区　SK2005 出土遺物実測図..... 202
第 199 図　Ⅱ区　SK2009 実測図..... 202
第 200 図　Ⅱ区　SK2009 出土遺物実測図..... 203
第 201 図　Ⅱ区　SK2012・SK2016 実測図... 204
第 202 図　Ⅱ区　SK2012 出土遺物実測図..... 205
第 203 図　Ⅱ区　SK2016 出土遺物実測図..... 205
第 204 図　Ⅱ区　SK2016 土馬遺物実測図..... 206
第 205 図　Ⅱ区　SK2018 実測図..... 207
第 206 図　Ⅱ区　SK2018 出土遺物実測図..... 207
第 207 図　Ⅱ区　SK2018 出土遺物実測図..... 208
第 208 図　Ⅱ区　SK2019 実測図..... 209
第 209 図　Ⅱ区　SK2019 出土遺物実測図..... 209
第 210 図　Ⅱ区　SE2008・SE2015 実測図.... 210
第 211 図　Ⅱ区　SE2008 出土遺物実測図..... 211
第 212 図　Ⅱ区　SE2008 出土遺物実測図..... 212
第 213 図　Ⅱ区　SE2008 出土遺物実測図..... 213
第 214 図　Ⅱ区　SE2015 出土遺物実測図..... 214
第 215 図　Ⅱ区　SD2011 出土遺物実測図..... 216
第 216 図　Ⅱ区　包含層出土遺物実測図..... 216

第Ⅳ章　自然科学分析

第 217 図　遺跡の位置 222
第 218 図　遺跡の位置 (1/25,000).....222

第Ⅴ章　総括

第 219 図　出土瓦編年想定図 247
第 220 図　出土葉脈状圧痕瓦拓影.....247
第 221 図　出土瓦　凡例.....248
第 222 図　鉄製品集成図..... 250

表目次

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第 2 節　遺跡の歴史的環境
表 1　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表 10

第Ⅳ章　自然科学分析

第 1 節　二本木合同庁舎遺跡の自然科学分析
表 1　樹種同定結果 219
表 2　樹種同定結果 219
第 2 節　二本木合同庁舎遺跡出土の古代・中世人骨
表 1　出土人骨一覧表 223
表 2　年齢区分 223
表 3　上腕骨計測値 227
表 4　大腿骨計測値 227
表 5　脛骨 228
表 6　脳頭蓋 230
表 7　上腕骨 230
表 8　大腿骨 230
表 9　脛骨 231
表 10　形態小変異 231

第Ⅴ章　総括

第 2 節　遺物について
表 1　Ⅰ区　遺構出土輸入陶磁器一覧表 241
表 2　Ⅰ区　包含層出土輸入陶磁器一覧表 242
表 3　調査区内出土瓦一覧表 246

観察表目次

表 1　Ⅰ区　土器類観察表 257
表 2　Ⅱ区　土器類観察表 283
表 3　Ⅰ区　縄文土器観察表 289
表 4　Ⅰ区　輸入陶磁器観察表 290
表 5　Ⅱ区　輸入陶磁器観察表 295
表 6　Ⅰ区　国産陶磁器観察表 296
表 7　Ⅰ区　金属製品観察表 297
表 8　Ⅱ区　金属製品観察表 298
表 9　Ⅰ区　木器観察表 298
表 10　Ⅰ区　石器・石製品観察表 298
表 11　Ⅱ区　石器・石製品観察表 301
表 12　Ⅰ区　土製品観察表 301
表 13　Ⅰ区　土錘観察表 302
表 14　Ⅰ区　古銭観察表 304
表 15　Ⅰ区　近世陶器観察表 304

写真図版目次

P.L-1　二本木遺跡群周辺航空写真
P.L-2　調査Ⅰ・Ⅱ区航空写真
P.L-3　Ⅰ区　ST-040 出土遺物・
　　Ⅱ区　SK-2016 内出土土馬
P.L-4　Ⅰ区　錠前 (牡金具)・転用硯・鳳首瓶
P.L-5　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-6　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-7　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-8　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-9　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-10　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-11　Ⅰ区　輸入陶磁器
P.L-12　Ⅰ区　輸入陶磁器・国産陶磁器
P.L-13　Ⅰ区　国産陶磁器
P.L-14　Ⅰ区　国産陶磁器・調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-15　Ⅰ区　141-I・J-1・2 グリッド
　　竪穴建物群完掘状況
P.L-15　Ⅰ区　141-I・J-1・2 グリッド
　　SI-064 完掘状況 (北から)
P.L-15　Ⅰ区　141-I・J-1・2 グリッド
　　竪穴建物群完掘状況 (西から)
P.L-15　Ⅰ区　SI-086・087 完掘状況 (南から)
P.L-15　Ⅰ区　141-J・K-3~10 グリッド
　　SD-240 完掘状況 (東から)
P.L-15　Ⅰ区　141-K・L-8・9 グリッド
　　掘立柱建物群検出状況 (南から)

P.L-15　Ⅰ区　141-M・N-9・10 グリッド
SB-10025 検出状況 (東から)
P.L-15　Ⅰ区　141-J・K-5~7 グリッド
完掘状況 (東から)
P.L-16　Ⅰ区　141-J・K-6~8 グリッド
掘立柱建物検出状況 (南から)
P.L-16　Ⅰ区　141-J・K-6~8 グリッド
掘立柱建物検出状況 (南から)
P.L-16　Ⅰ区　SI-105 カマド断面確認状況
(南から)
P.L-16　Ⅰ区　SE-222 完掘状況 (北西から)
P.L-16　Ⅰ区　SE-263 完掘状況 (南東から)
P.L-16　Ⅰ区　ST-040　人骨出土状況 (南から)
P.L-16　Ⅰ区　ST-040　人骨出土状況 (西から)
P.L-16　Ⅰ区　SE-229 完掘状況 (西から)
P.L-17　Ⅰ区　SI-323 カマド断面確認状況
P.L-17　Ⅰ区　SE-277 完掘状況 (東から)
P.L-17　Ⅰ区　141-Q・R-9・10 グリッド
SB-10039 他検出状況 (南から)
P.L-17　Ⅰ区　141-Q・R-5~8 グリッド
SB-10050 他検出状況 (南から)
P.L-17　Ⅰ区　141-Q・R-7・8 他グリッド
SB-10045 検出状況 (南から)
P.L-17　Ⅰ区　SD-008 獣骨出土状況
P.L-17　Ⅰ区　141-O・P-7・8 グリッド
SE-229 完掘状況 (南から)
P.L-17　Ⅰ区　141-G-3・4 グリッド
SK-897 獣骨出土状況 (ウマ)(南から)
P.L-18　Ⅰ区　141-M・N・O-9・10 グリッド
SB-10023・10029 検出状況 (東から)
P.L-18　Ⅰ区　141-G・H-3・4 グリッド
SD-213 内人骨出土状況 (北から)
P.L-18　Ⅰ区　141-G・H-7・8 グリッド
遺構検出状況 (北から)
P.L-18　Ⅰ区　141-G・H-5・6 グリッド
遺構検出状況 (北から)
P.L-18　Ⅰ区　SD-004 検出状況 (南より)(俯瞰)
P.L-18　Ⅰ区　H~J-6~8 グリッド
SD-041 他完掘状況 (東から)
P.L-18　Ⅰ区　141-I・J-4・5 グリッド
遺構群完掘状況
P.L-18　Ⅰ区　SD-041 他完掘状況
P.L-19　Ⅰ区　西側竪穴建物・溝完掘状況
P.L-19　Ⅰ区　北側完掘状況
P.L-19　Ⅰ区　141-I・M-8~11 グリッド
遺構群完掘状況
P.L-19　Ⅰ区　141-I~K-7~10 グリッド
SD-056・057・110 検出状況 (南から)
P.L-19　Ⅰ区　SE-045 土層断面 (北から)
P.L-19　Ⅰ区　SI-084・087,SB-10009・10010
検出状況 (西より)
P.L-19　Ⅰ区　SE-066 獣骨出土状況 16 層 (南から)
P.L-19　Ⅰ区　SE-066 調査状況 (東から)
P.L-20　Ⅰ区　SE-066 完掘状況 (東から)
P.L-20　Ⅰ区　SE-066 他溝完掘状況
P.L-20　Ⅰ区　SE-066 人骨出土状況 (南から)
P.L-20　Ⅰ区　SE-066 井戸枠・獣骨出土状況
P.L-20　Ⅰ区　SI-279・280 完掘状況
P.L-20　Ⅰ区　141-O~R-5~12 グリッド
SD-010・011 完掘状況 (西から)
P.L-21　調査Ⅱ区遺構完掘状況 (南から)
P.L-21　調査Ⅱ区北側遺構群完掘状況 (北から)
P.L-21　調査Ⅱ区南側遺構群完掘状況 (南から)
P.L-21　SI-2001 完掘状況 (西から)
P.L-21　SI-2004 硬化面検出状況 (北から)
P.L-21　SE-2008 遺物出土状況 (北から)
P.L-21　SK-2016 土層断面 (南から)
P.L-21　SK-2016 土馬出土状況
P.L-22　Ⅰ区　掘立柱建物出土遺物
P.L-22　Ⅰ区　竪穴建物出土遺物
P.L-23　Ⅰ区　竪穴建物出土遺物
P.L-23　Ⅰ区　土坑内出土遺物
P.L-24　Ⅰ区　土坑内出土遺物
P.L-25　Ⅰ区　土坑内出土遺物
P.L-25　Ⅰ区　井戸内出土遺物
P.L-26　Ⅰ区　井戸内出土遺物
P.L-27　Ⅰ区　井戸内出土遺物
P.L-28　Ⅰ区　井戸内出土遺物
P.L-29　Ⅰ区　井戸内出土遺物

P.L-29　Ⅰ区　溝状遺構内出土遺物
P.L-30　Ⅰ区　溝状遺構内出土遺物
P.L-31　Ⅰ区　溝状遺構内出土遺物
P.L-32　Ⅰ区　溝状遺構内出土遺物
P.L-32　Ⅰ区　ピット内出土遺物
P.L-33　Ⅰ区　ピット内出土遺物
P.L-34　Ⅰ区　不明遺構内出土遺物
P.L-34　Ⅰ区　近世陶器遺物
P.L-35　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-36　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-37　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-38　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-39　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-39　調査Ⅰ区内出土転用硯
P.L-40　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-40　調査Ⅰ区内出土　葉脈状圧痕平瓦
P.L-41　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-42　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-42　調査Ⅰ区内出土　転用紡錘車
P.L-43　調査Ⅰ区内出土遺物
P.L-44　Ⅰ区　溝状遺構内出土杯
P.L-44　Ⅰ区　井戸内出土小皿
P.L-45　Ⅰ区　溝状遺構内出土小皿
P.L-45　Ⅰ区　井戸内出土小皿
P.L-46　Ⅰ区　土錘
P.L-46　Ⅰ区　土製品
P.L-47　Ⅱ区　竪穴建物内出土遺物
P.L-48　Ⅱ区　土坑内出土遺物
P.L-49　Ⅱ区　井戸内出土遺物
P.L-50　Ⅱ区　井戸内出土遺物
P.L-50　Ⅱ区　溝状遺構内出土遺物
P.L-50　Ⅱ区　SK-2016 内出土　土馬

第Ⅳ章　自然科学分析

第 1 節
　二本木遺構群第 8 次調査の自然科学分析
　二本木合同庁舎
　遺跡出土木製品樹種顕微鏡写真 220
第 2 節
　二本木遺構群第 8 次調査出土の古代・中世人骨
　頭蓋　二本木遺跡群 (合同庁舎)
　　SE-066　人骨 (女性・壮年) 232
　頭蓋　二本木遺跡群 (合同庁舎)
　　ST-040　人骨 (男性・壮年) 232
　二本木遺跡群 (合同庁舎)ST-040 人骨 (男性・壮年)
　　下肢骨 233
　　上肢骨 233

第 I 章　調査の概要

第 1 節　調査に至る経緯

熊本市内には大きく 2 箇所の合同庁舎がある。また、その 2 つに入り切れない事務所がそれ以外の場所にもある。そのうち、第一合同庁舎については国指定特別史跡である『熊本城跡』の範囲内に建設されていた。この施設について、熊本市が進める熊本城整備計画により立ち退きを迫られていた。一方、熊本市春日にある月星化成（現ムーンスター株式会社）の業務縮小によりその跡地利用が考えられていた。そのような状況の中で熊本県の仲介により土地の取得が行われ、月星化成の跡地に熊本地域の合同庁舎を一つにまとめることとなった。

そのような経過の中、熊本県が一旦月星化成から土地を買い取り、さらに国に転売することとなった。その際、その土地が二本木遺跡群の範囲に含まれ、周囲の調査状況から濃厚な埋蔵文化財の存在が予測された。そこで、熊本県が土地を入手した段階で、埋蔵文化財の有無について確認調査を実施することとなった。

埋蔵文化財の確認調査は、土地が月星化成から一時的に県の管理下に入っている時期に行った。県の担当部局である地域政策課より、平成 15 年 4 月 1 日付け地政第 1 号によって依頼を受け、平成 15 年 5 月 12 日 ~5 月 19 日に熊本県教育庁文化課の野田英治文化財保護主事により実施された。確認調査の結果、これまでの工場による破壊された部分はあるものの遺跡の大部分が残存し、しかも遺物包含層も厚く、その間の遺構密度も非常に高いことが確認できた。その結果について平成 15 年 6 月 10 日付け教文第 778 号で報告した。

その後、土地は県の仲介により国の所有となり、正式に新しい合同庁舎の建設予定地となった。建設計画に基づき、まず A 棟とその付帯施設等の工事が具体化してきたので、平成 17 年度中から埋蔵文化財の取り扱いについて、地域政策課が仲介し、九州地方整備局、熊本営繕事務所と文化課との間で協議がなされ、確認調査結果に基づき工事が予定通り実施されれば、埋蔵文化財の本調査が必要であること、やむをえず本調査を実施する場合は熊本県が受託事業として実施することとなった。数度の協議を重ね、本調査については、工事によって破壊される部分についてのみ行うこととし、遺構への影響のおよぶ範囲もできるだけ少なくなるよう設計もできるだけ配慮されることとなった。その結果、A 棟本体と外構施設のうち遺跡に影響の及ぶ 5 箇所を調査対象とした。

平成 18 年 3 月 20 日付け国九整熊営技第 25 号により文化財保護法第 94 条に基づく通知が九州地方整備局熊本営繕事務所長名でなされ、発掘調査の指示が平成 18 年 2 月 20 日付け教文第 2775 号でなされた。

平成 18 年 1 月 20 日付け国九整熊営技第 36 号で調査依頼が熊本県教育庁文化課あてでなされ、それを受けて文化課は平成 18 年 4 月 25 日付け教文第 258 号で文化財保護法第 99 条による発掘調査の通知を発し、本調査に入った。

第 2 節　調査の組織

平成 18 年度から 21 年度までの発掘調査及び整理作業・報告書作成に関わる組織は次のとおりである。

【本調査】（平成 18 年 7 月 ~ 平成 19 年 8 月）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　　梶野英二（文化課長　平成 18・19 年度）

　　江本　直（課長補佐　平成 18・19 年度）

調査総括　　髙木正文（課長補佐・文化財調査第一係担当　平成 18 年度 ~20 年度）
調査担当者　　坂田和弘（参事　平成 18・19 年度）・亀田　学（主任学芸員　平成 18・19 年度）
横矢晋二郎、島浦健生、園田恭子、伊藤友美子、遠山宏、吉留　広、坂本亜矢子（嘱託）

【整理・報告書作成】（平成 19 年 ~ 平成 21 年）
調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　　梶野英二（文化課長　平成 19 年度）
米岡正治（文化課長　平成 20・21 年度）
江本　直（課長補佐　平成 18~20 年度）
木﨑康弘（課長補佐　平成 21 年度）
調査総括　　高木正文（課長補佐・文化財調査第一係担当　平成 19~20 年度）
村崎孝宏（文化財調査第一係長　平成 21 年度）
整理担当者　　坂田和弘（参事　平成 19~21 年度）
赤星和美（嘱託　平成 19 年度）、戸田紀美子（嘱託　平成 19~21 年度）
永田礼香（嘱託　平成 21 年度）

【専門調査員、調査協力者等】

平成 18 年度から 19 年度までの発掘調査に関わる指導助言者ならびに平成 19 年度から 21 年度までの整理作業・報告書作成に関わる指導助言者及び調査全般へ協力頂いた方々は次のとおりである。記して感謝に意を表したい。

網田龍生、美濃口雅朗、赤星雄一、金田一精、林田和人、原田範昭、岩谷史記、
師富国博（熊本市教育委員会）、
山本信夫（山本考古研究所）、白木原和美（熊本大学名誉教授）、古森政次（合志市立合志中学校）、
松井　章（奈良文化財研究所）、丸山真史（京都大学）、松下孝幸（下関市立人類学ミュージアム）

第 3 節　調査の方法と工程

1　調査区の設定

本調査地は、A 棟本体部分と外構部分で遺構面まで掘削の及ぶ範囲及び調査の可能な幅 1m をこえるような工事に関して掘削部分が遺物包含層上面（Ⅲ層上面）に達する工事について本調査対象範囲とした。その結果、調査区は大きく 5 箇所に分かれ、A 棟本体とオイルタンクの場所を調査Ⅰ区、駐輪場を調査 2 区、藤棚を調査 3 区、地震計室を調査 4 区、防火水槽を調査 5 区とした。面積は調査Ⅰ区が 3,410㎡、調査 2 区が 190㎡、調査 3 区が 30.4㎡、調査 4 区が 66.8㎡、調査 5 区が 43.0㎡であった。その後、建設計画の変更により、藤棚・地震計室・防火水槽については場所の移動することになり調査 3 区から調査 5 区は一旦除去していた表土を埋め戻し遺跡の保護を図った。また、調査終了近くになって A 棟関係の掘削部分が増加し、調査Ⅰ区の面積が広がり、3,530㎡となった。

2　座標とグリッド設定

調査を進めるに当たって、これまで二本木遺跡群の調査を長く担当してきている熊本市と遺跡状況との整合性を持たせるため、熊本市でこれまで採用してきた平面直角座標系第Ⅱ系（旧日本座標系）を使用することとした。その際にグリッドの設定も共通化を測るため、県と市との間で協議し、遺跡範囲は熊本市教育委

員会の遺跡地図上の「二本木遺跡群」を基本とし、二本木遺跡群の将来の拡張を考慮したうえで、X=-23000.000、Y=-295000.000 を基点とし、一辺 100m 四方の方形区画としたものを大グリッドとし、西から東へ 15 区画、北から南へ 20 区画の計 300 の大区画を設定し、100m 四方の大グッドの 1 ブロックごとに北西角から南東角まで算用数字を振り、総計 1 から 300 までのブロックを設定した。さらに 1 ブロック内を 5m × 5m で分割し小グリッドとした。そして、それぞれの小グリッドに 1 ブロック内で北から南へ A → T のアルファベットを、西から東へ 1 → 20 までの数字を振り、その組合せにより、例えば 1 ブロックの北東隅を A-1 グリッドのように標記することとした（第 1 図）。

今回の調査では、調査 1 区がすでに協議前に調査に着手していたため、10m メッシュを採用していたので、他との整合性を保つため、10m グリッドを 1 ブロックとして、A・B － 1・2 グリッドのように標記することとした。そのため、10m グリッドで標記したり、細かく特定するとき 5m グリッドで標記したりするなど、後々に標記の混乱を招くこととなった。

今回の調査区は大グリッドとしては 140・141・156 に当たる。2 区が 140 内で、1 区は大部分 141 内に入り、一部 140 と 156 にまたがる。遺物の取り上げに際しては、グリッドの特定を測るために 140-A-1 グリッドのような表記を行っている。（第 2 図）

3　本調査工程

調査は平成 18 年 5 月 16 日よりまず第Ⅰ区の西側半分を表土剥ぎし、遺跡の状況を見て、工程を考慮しさらに残りの半分の表土剥ぎを行い、調査Ⅰ区として本格的に調査に着手した。

当初は工場基礎撤去等による撹乱の確認と中の土砂・礫等を除去し、遺跡の残存状況を確認した。その結果、予想以上に遺跡の残りは良好であった。また、撤去されていない煉瓦柱基礎が残っており、最終段階以前の工場の上屋構造が想定できる状況であった。煉瓦基礎が明治期まで遡るかどうかは不明である。

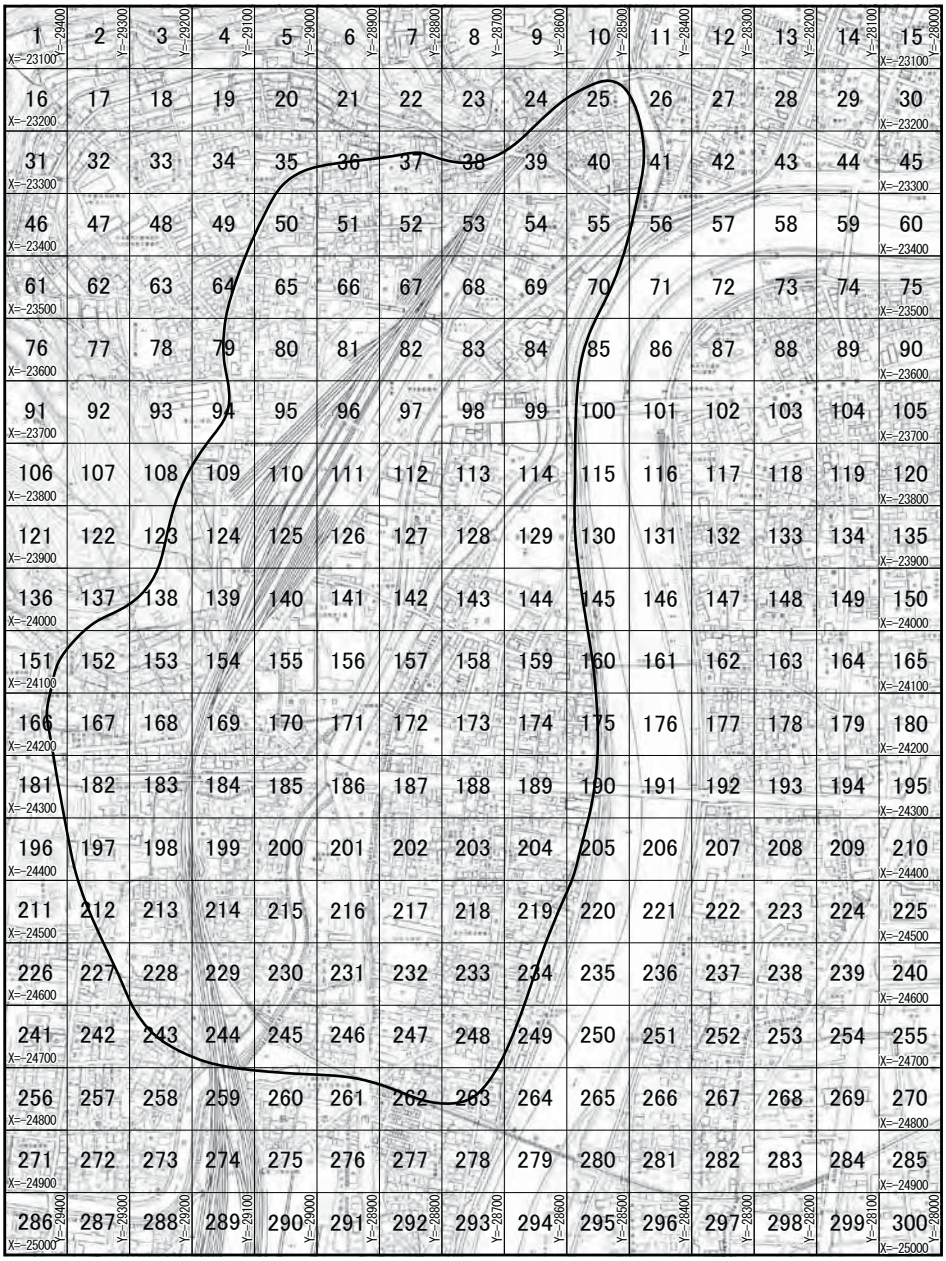
8 月までの段階で、調査区の半分の状況がつかめてきた。西側に竪穴建物の切りあい関係にあるものや、非常の多くの溝状遺構が切りあいながらほぼ南北方向に延びる状況などが見えてきた。ただ、遺構が非常に多く切りあっているため一つの遺構の検出に非常に手間取ってもきた。

9 月初旬からⅠ区の西側半分の表土除去を開始した。こちら側は確認調査時に広範囲に基礎撤去による撹乱があり、かなり遺構は失われていると予想していた場所である。確かにかなりの破壊された状況はあったが、遺物の出土量は多く、遺構もよく残されている範囲もあった。そのような中で 9 月後半に人骨が出土した。人骨の遺存状況は良好で輸入陶磁器・土師皿・短刀などが供献されていた。下関市立人類学ミュージアムの松下先生に取り上げと鑑定を行ってもらった。その結果、頭を北にし、顔は西を向いた仰臥屈葬であった。これは中世の時期として熊本市の調査地からの類例があった。また、他の遺構から出土していた人骨と思われるものも鑑定を依頼した。

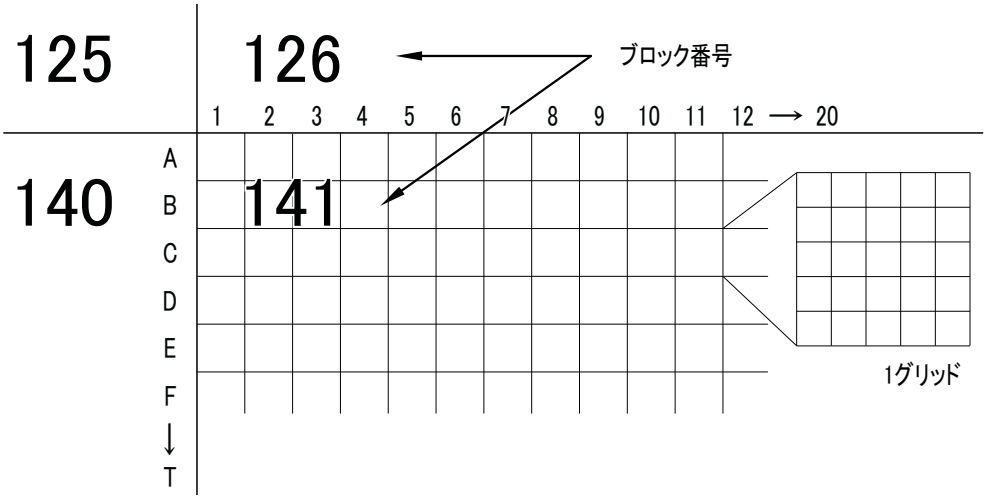
調査を進めていくにつれて、遺構確認がかなり厳しい状況になり、調査工程の遅れも顕著になってきた。特に調査Ⅱ区に手をつける余裕がなくなってもきていた。そこで営繕事務所側との工程の遅れを伝える一方で課での応援体制を要請した。その結果、12 月から亀田・伊藤・園田の 3 人の応援が可能となった。また、作業員の増員も行った。

応援を確認したうえで 12 月初旬からⅡ区の表土剥ぎを実施した。剥いだ結果、調査区の半分は撹乱で失われていることがわかった。また、包含層が薄かったのもあるが、Ⅲ層をほぼ除去したので、遺構の状況がよくわかった。そこには、その調査区は園田が主に担当した。

また、当初予定の 3 区 ~5 区も調査区を設定しいったん表土剥ぎまで実施したものの国側の計画変更により調査がなくなったため、調査Ⅰ区・Ⅱ区に専念することとなった。



第１図　二本木遺跡群ブロック設定図



第２図　調査グリッド設定図

応援を受けてより広範囲で遺構の確認と掘削を進めていくこととなった。各場所で遺構が検出された結果、掘削と実測のタイミングが合わず実測がやや滞る状況が出てもきた。特に掘立柱建物はピット群の多さから遺構のとらえ方に時間がかかり調査の時間を多く費やすこととなった。それは実測や写真にも影響を与えた。

一方Ⅱ区は遺構のわかりやすさはあったものの切りあい関係にあった竪穴建物に思った以上に時間がかかった。途中でほぼ完形の土馬の出土などもあった。確実に遺構をとらえて行きながら、平成 19 年の２月前半には調査を終了し埋め戻しを行った。

調査Ⅰ区では遺構の確認は徐々に進む一方で、調査期間が平成 18 年度のみでは不可能であることが判明してきたので、1 月後半に平成 19 年度への調査期間延長の協議を九州地方整備局及び熊本営繕事務所と持った。その結果、数か月の延長は可能となったが、予算的な問題は残った。

このような現場状況ではあったが、７月と 11 月には現場の公開を実施し、特に初回は国土交通省の行事である「土木の日」と提携し、多くの参加者を得た。11 月はあいにくの台風で人手は少なかった。さらに地元からの要望もあり、熊本営繕事務所主催で合同庁舎の建設予定と発掘調査の状況をアピールするため、２月 21 日にホテルを会場に説明会を実施した。

平成 18 年度は４月９日から開始した。一部調査員を入れ替えた。昨年度からの課題であった掘立柱建物の検出から始めた。それを進めるため溝状遺構の掘削や大きな遺構の掘削と掘削前の精査という複雑な工程を進めなければならなかった。実測作業も委託に出して効率化を図ったが、実際には掘削作業との調整がうまくいかず、図面も不完全な状況で進展することとなった。このことが最後まで調査に影響を与えた。調査自体は様々な課題を残しながら、７月末日には終了した。その後８月初めに埋め戻しを実施し、現場事務所の撤去、産廃の処理を８月 20 日までに終了して最終的な撤収をした。

平成 18 年度は７月末に現場説明会を実施した。現場の追い込みの中で忙しい状況ではあったが、台風で日を変えたにも関わらず、かなり力を入れてやったこともあり盛況であった。

第４節　整理作業・報告書作成の方法と工程

整理作業は平成 19 年度から始めることになったが、同時に現地の本調査も平行して実施していたため、あがった遺物の一部を整理作業に回すような形になった。整理作業が本格化したのは、本調査が終了し、文化財資料室で体制を整えてからであった。その後、一次整理作業では遺物量に対して資料室人員の不足から平行して一次整理業務の業者委託を行った。さらに二次整理でも実測やトレースを業者委託することで対応した。報告書作成をできるだけ簡素化、効率化のためにトレースや写真データをデジタル化し、報告書印刷に関してもレイアウトソフトで版下に近いデジタルデータで印刷に発注することとした。ただ、まだほとんど初めてに近い試みであったため、整理作業従事者への内容理解の不徹底と技術的な未熟さから構想どおりにはいかず、かえって２度手間などが生じたり、もれが発生したりといったことで工程が遅れていった。

さらに一番ネックになったのは現場調査における図面管理の甘さによる図面の不完全さが目立ち、明らかに整理作業に支障がでてきた。さらに遺物管理は良かったものの、あまりの多さに遺物を十分把握しないまま中途半端な委託を行い、あとから貴重な資料が現れ整理作業に混乱を招いたのも事実である。きちんとした構想立てとそれの工程を管理していくことに併せて、柔軟な修正能力の必要性が痛感させられた。

今後このような整理作業と報告書作成の方法を模索するうえで修正していく必要がある。さらに今回のように遺構や遺物が多量になる場合、より専門的に人的対応できるような体制が必要であると感じた。

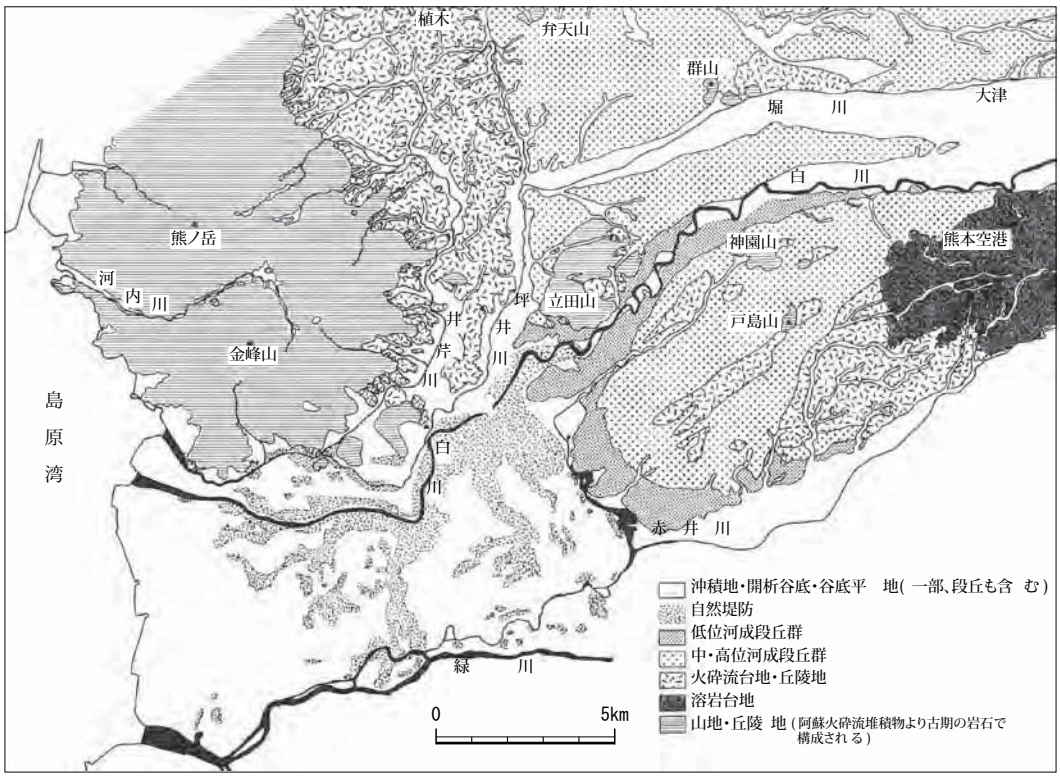
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第 1 節　遺跡の位置と地理的環境

熊本平野は、阿蘇外輪山西麓から西へ延びた肥後台地と南西部の沖積低地からなる。阿蘇周辺に降った雨水は台地に浸透し、豊富な伏流水となって肥後台地の端部に江津湖等の湧水地帯を形成する。また白川・緑川によって運ばれた砂礫や火山灰土は、肥後台地端部に扇状地を形成し、さらに広大な沖積平野を形成している。沖積平野には、白川・緑川およびその支流の両岸に微高地が形成されており、近年はこの微高地上での遺跡の確認が相次いでいる。

二本木遺跡群は白川下流右岸の沖積平野に臨む扇状地から微高地にかけて立地する。今回の調査区を中心に南北 1.6km、東西 1.0km の範囲に広がり、旧来の遺跡名では二本木国府跡及び関連遺跡、春日町遺跡、田崎本町遺跡、古町小学校校庭遺跡、延命寺塔心礎などを含んだ遺跡群としての総称である。この遺跡群は熊本平野でも近くに位置する花岡山の三日月状の低山稜と白川が緩く蛇行する部分に囲まれた一帯に位置する。白川と本遺跡の間には坪井川が南北方向に貫流しているが、中世末までは遺跡の北側で白川に合流していたものを、加藤清正が熊本城下整備の一環で石塀を築き白川と分流して掘削したものという。

今回の調査をした熊本合同庁舎 A 棟に係る範囲は、旧月星化成熊本工場跡地の一角である。緩扇状地上に立地し、調査時の標高は約 10m である。住所表記上は熊本市春日 2 丁目 551 番地・664 番地・672 番地他である。旧小字名は「稲荷」、「新屋敷」、「前原」の交差するところで、明治初期の春日村絵図と地籍図とを比較して確認すると、丁度 664 番地が「前原」内に、672 番地が「新屋敷」地内に、551 番地が「稲荷」地内に当たるようである。その境界域には里道なども地籍上は存在している。



※横山勝三「自然編　第二章　地形・地質　第一節　熊本市の地形」『新熊本市史　通史編第一巻　自然・原始・古代』熊本市 1998 より加筆、転載

第 3 図　熊本市および周辺地域の地形分類図

第 2 節　遺跡の歴史的環境

二本木遺跡群の周辺遺跡は、井芹川右岸の金峰山から東へ延びる丘陵上、先端に熊本城を有する京町台地、二本木遺跡群が立地する扇状地にかけて濃密に分布している。沖積平野部の遺跡は現在ほとんど地形変化を見分けるのが困難であるが、微高地上に立地している。

旧石器時代の遺跡は、金峰山系の丘陵上に数箇所の遺跡が知られているが、平野部では確認されていない。縄文時代早期の遺跡は、丘陵端部に立地するものが多い。野添平遺跡・島崎遺跡で、炉穴・集石等の遺構が確認されている。続く縄文時代前期から中期の遺跡としては、高橋町遺跡群の高橋貝塚が中期の貝塚としてわずかに知られているくらいである。後晩期になると、再び丘陵上に遺跡がみられるようになり、島崎遺跡・石神原遺跡・戸坂遺跡・野添平遺跡・高橋町遺跡群上高橋高田遺跡等で遺物が出土している。千原台遺跡群は、第 1 次調査区で鐘ヶ崎式から黒川式までのほぼ全型式の土器が出土しており、拠点的な集落であった可能性が指摘されている。また、石神原遺跡では打製・磨製石斧が多量に採集され、島崎遺跡では太郎迫式から山ノ寺式までの土器が出土している。熊本城跡では鳥井原式がまとまって出土し、京町台地の先端部にも縄文時代の遺跡が存在しているようである。本遺跡調査 1 区においても縄文時代晩期の土器・石器が出土し、花岡山丘陵の先端部に位置するこの付近にも生活痕跡が残されている。

弥生時代の遺跡としては、井芹遺跡・牧崎遺跡・京町台遺跡群・伝大道寺跡遺跡群・藤園中学校校庭遺跡・千原台遺跡群・石神原遺跡・戸坂遺跡・高橋町遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡・平田町遺跡等がある。前期の遺構・遺物が確認された遺跡はほとんどないが、当調査区で 1 点のみではあるが、板付Ⅱ式かと思われる刻目突帯文の口唇部が出土している。ただ、破片も小さく、数量もわずか 1 点ということから確実なものとは言いがたい。中期には、甕棺が井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡・船場町遺跡・高橋町遺跡群 (上高橋高田遺跡) （いずれも市教委調査）で出土し、古町遺跡・上高橋高田遺跡では竪穴住居が確認されている。後期になると集落遺跡が急増し、発掘調査が行われただけでも千原台遺跡群・石神原遺跡・戸坂遺跡・古町遺跡・八島町遺跡・平田町遺跡などで竪穴住居群が確認されている。特に八島町遺跡は二本木遺跡群から伸びる自然堤防上に立地し、九州新幹線に関連して調査され、弥生時代後期の竪穴住居跡が　棟検出され大きな集落を形成していたことが分かった。熊本市教委でも同じ八島町遺跡の別地点で弥生時代後期集落を確認しており関連が考えられる。戸坂遺跡からは小形彷製鏡と舶載の方格規矩鏡が、平田町遺跡・八島町遺跡でも小形彷製鏡が出土している。

古墳時代の遺跡は、周辺に多く存在し、花園山・万日山遺跡群・高橋町遺跡群・上代町遺跡群等で遺構・遺物が出土している。集落が確認されているのは本庄遺跡 (熊本大学埋蔵文化財調査室調査) で前期の竪穴住居群、千原台遺跡群第 2 次調査区（熊本市教委）、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡第 1・2 次調査区（熊本市教委）で前・中期の竪穴住居群が確認されている。今回報告する二本木遺跡群春日地区第 8 次調査では、この時代の遺物はほとんど確認されておらず、わずかに 7 世紀代のものが数点確認できたのみである。KAB の社屋の熊本市教委調査からはこの時代の溝・井戸が検出されている。花岡山・万日山遺跡群内には花岡山箱式石棺群・万日山古墳・万日山山頂古墳が存在する、もしくは存在したとされる。北岡神社横穴群については、新幹線関連の道路事業で本調査が実施され、横穴本体こそ破壊されていたものの、横穴の床面や前底部、さらに墓道まで確認された。さらにほぼ原位置に近い形で多量の遺物が出土している。これらの遺構のあり方を考えると、墳墓に関係する集落が、二本木遺跡群一帯の扇状地、自然堤防、沖積地にかけて存在すると想定できる。

古代になると、二本木遺跡群内及びその周辺の遺跡で生活痕跡としての遺構・遺物が非常に多く検出できるようになる。二本木遺跡群は、春日屯倉の想定地であったが、発掘調査で具体的な遺構は確認されていない。二本木遺跡群全体としては先に述べたように 7 世紀代から遺物がみられるようになり、8 世紀後半から

第４図　二本木遺跡群周辺遺跡地図

表１　二本木遺跡群周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	内容
1	野添平遺跡	縄文時代
2	戸坂遺跡	縄文時代、弥生時代、古代
3	千原台遺跡群	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
4	石神原遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代
5	迎田遺跡	弥生時代
6	熊本城遺跡群	熊本城跡・古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋横穴群・茶臼山廃寺跡･藤崎宮跡･段山遺跡 / 縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世、近代
7	藤園中学校校庭遺跡	弥生時代
8	花畑邸跡	近世
9	山崎古墳	古墳時代
10	辛島町遺跡	古墳時代
11	本庄遺跡	縄文時代、古墳時代、古代、中世、近世
12	古町遺跡 (唐人町遺跡)	縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世
13	船場町遺跡	新町２丁目甕棺遺跡 / 弥生時代、古代、近世
14	新馬借遺跡	古代、中世
15	吉祥寺横穴群	古墳時代
16	花岡山・万日山遺跡群	花岡山箱式石棺群・万日古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・万日山古墳参考地・妙解寺跡 / 古墳時代、中世、近世
17	二本木遺跡群	二本木国府及び関連遺跡・春日町遺跡・田崎本町遺跡・古町小学校校庭遺跡・延命寺塔心礎跡 / 弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世
18	石塘遺跡	近世
19	本山城跡 (本庄城跡)	中世
20	世安池田遺跡	古代、中世
21	八島町遺跡	弥生時代、古代
22	道城方遺跡	弥生時代
23	南新宮遺跡	弥生時代、古代、中世
24	平田町遺跡	弥生時代、古代

9 世紀前半にかけて遺構・遺物が急増し、9 世紀中葉以降は減少し、再び 11 世紀末から急増する。本庄遺跡第 1 次調査区、本庄遺跡 (熊本大学埋蔵文化財調査室調査)、京町台遺跡群第 1 次調査区、戸坂遺跡第 1 次調査区、古町遺跡第 4・5 次調査区、高橋町遺跡群上高橋高田遺跡第 1・2 次調査区で、竪穴住居群等が確認されている。また、古町遺跡第 5 次調査区では、土坑墓が確認されている。しかし、出土する遺物の質・量、遺構の密度は、二本木遺跡群が他を圧倒する。

中世も、古代からの傾向を引きずり二本木遺跡群が有力である。特に 12 世紀後半から 13 世紀にかけての遺構・遺物の質・量からは、肥後国の中心地であったと言っても過言ではない。中世の遺物で、龍泉窯系・同安窯系青磁や白磁、滑石製石鍋等は、量の多寡を問わなければほとんどの遺跡で出土するが、本調査地で出土数及び量は他の比ではない。発掘調査が行われた遺跡には古町遺跡、高橋町遺跡群 (上高橋高田遺跡)、南新宮遺跡、本庄遺跡がある。南新官遺跡第 1 次調査区では、12 世紀代の土坑墓が確認され、湖州鏡が副葬されていた。

近世になると加藤清正による城下町整備のため、二本木遺跡群はじめ周辺遺跡の状況も大きく変化する。二本木遺跡群周辺は中世末から近世初頭で急激に遺構・遺物が減少するが、城下町として整備された古町遺跡では近世前期以降の遺構・遺物が急増する。ただし、二本木遺跡群周辺も完全に生活が途絶えるわけではなく、近世を通して遺構・遺物は周辺の調査地で濃厚に分布している状況がある。ただ、この調査区が近代以降の工場用地ということで失われている可能性はある。多分に調査区一帯は、農村地帯であったようである。その中に屋敷や耕作地があったと想定される。

明治時代になって文明開化の名のもとにまず 1891 年（明治 24 年）に熊本機関庫が設置され、1891 年（明治 24 年）7 月 1 日に九州鉄道の駅として、玉名 - 熊本間の延伸と同時に開業している。その後 1907 年（明治 40 年）7 月 1 日には九州鉄道の国有化により国鉄の駅となっている。

明治以降のこの調査地の変遷としては、1896（明治 29）年、官営の熊本紡績会社熊本工場として工場が誕生し、不況下で 1902（明治 35）年には、鐘淵紡績株式会社に統合された。1942（昭和 17）年には、日華護謨工場株式会社（後の月星化成株式会社、現ムーンスター）が工場を借り受け、熊本工場とし、1950（昭和 25）年に買収して正式に月星化成の工場として操業してきた。この工場内には明治以降の変遷の中で工場自体が以前の施設の改修や増築の過程を経たため、明治期以来の建物が残っていた。熊本県が調査した近代化遺産の一つとして今後の保存対象にもなっていた。工場の廃止後、建物群の現地保存や移設の問題が起こったが、最終的にほぼ全て解体撤去と決まったため、工場の一部を熊本学園大学が自前で移築復元し、産業資料館として活用している。移設した建物は、明治 27（1894）年に建てられた熊本紡績（株）当時の赤れんが工場の一部（電気室）で、熊本では明治 22 年の旧五高本館・化学実験室に次いで古い赤れんが建物で、妻側は正面性を意識したデザインとなっており、軒の部分やコーナーのレンガ積みに独自のデザインが施されている。平成 16（2004）年 7 月 23 日付けをもって登録有形文化財（第 43-0072 号）に登録されている。本調査においても赤煉瓦建物の基礎が多く出土し、一部の基礎自体の重複もあることから少なくとも 1 回は同じ煉瓦造りの建物の改変が行われた可能性があるようである。

第Ⅲ章　第８次調査の成果

第１節　基本層序

調査区はⅠ区とⅡ区に分かれるが、基本的な層序はほぼ同一である。ただ、調査区の場所ごとに観察すると堆積状況や遺構の状況に応じてかなり厚さや部分的な差異が生じている。以下に基本層序と部分的な差異について述べる。

基本層序は、これまでの熊本市による調査成果に大きくは従う。

表土・整地層：当地は月星化成及びその前身の工場用地として明治末から整地されてきており、途中立て替えや造成が行われている。そのため、採石・礫や煉瓦・コンクリートなどが含まれる。

Ⅰａ層：にぶい黄褐色 (10YR4/3); 土粒子は細かく、ややシルトに近い。
　炭化物粒や焼土粒を部分的に含む。

第Ⅱ層：淡灰色砂質土層。粒子は細かく、砂質もしくはシルトに近い土で、しまりは全体的に弱い。近世以降の堆積によるものとされ、近世以降の遺構としたもの埋土はこの土層である。

Ⅱａ層：にぶい黄褐色 (10YR4/3); Ⅰａ層よりも粒状の粒が入り、しまりが少ない。

Ⅱｂ層：にぶい黄褐色 (10YR4/3); 中サイズの粒状の土塊を多く含む。

Ⅲ層：黒褐色土層。粒子は細かく、砂質もしくはシルト状である。しまりは弱い部分とややしまる部分があり、層の形成もしくは確認できなかった遺構の埋土かもしれない。細かい焼土粒・炭化物粒などが混入する。

Ⅲａ層：暗褐色（10YR3/4）；Ⅱｂ層に似た粒状の土粒を多く含みパサパサしている。
　Ⅱｂ層より暗く、やや硬質。

Ⅲｂ層：黒褐色（10YR2/3); 所々に極大（径 10㎜以上）の暗褐色の土粒を含む。
　全体的にしまりが強く遺物包含層と同時に遺構の埋土でもある。

Ⅲｃ層：黒褐色（10YR2/3）；Ⅲｂ層に似るがしまりが良く異なる。

Ⅳ層：褐色 (10YR4/6); 黄色味を帯びた土で、所々粒色を異にする。

Ⅳａ層：暗褐色粘質土。径 1㎝程の塊状となったⅡｂ層の土がわずかに入る。
　遺物の量は少ない。

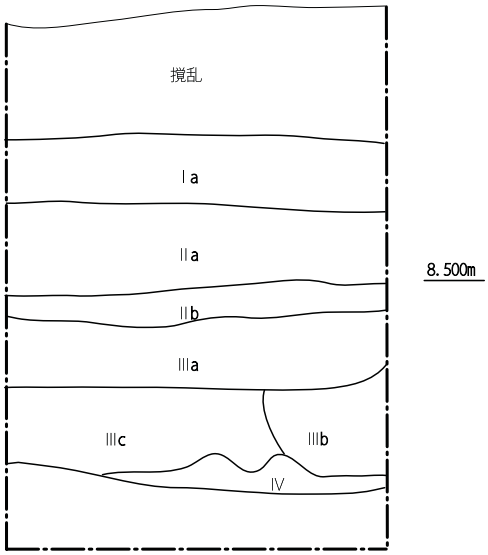
調査Ⅰ区の基準的な土層は第　図のようである。Ⅱ区はやや異なる層も含まれるが、基本的には同様である。

第２節　調査Ⅰ区の主な遺構とその遺物

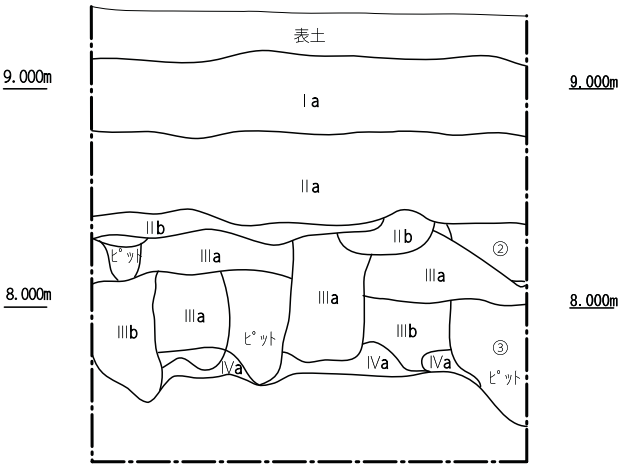
(1) 調査Ⅰ区の概要

調査Ⅰ区の範囲は、合同庁舎のＡ棟部分と電気室部分に当たる。掘削に係る部分の調査で、ほぼ長方形のＡ棟と地下駐車場への入口と玄関部分を含む。調査区は二本木遺跡群ブロックの 141 を主とし一部 140 と 156 に入る。

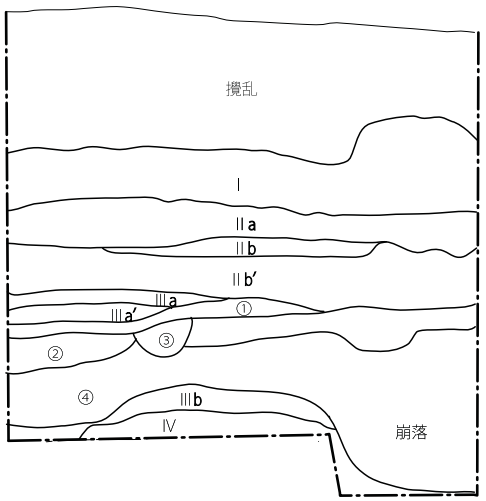
主な遺構は竪穴建物・掘立柱建物・井戸・溝状遺構・土坑・ピット・墓壙が検出できた。遺構の分布にはおおまかに調査区西側に竪穴建物が集中し、それに併行するかやや下った時期と考える幅 1m ほどの溝状遺構が調査区のやや西側で南北方向に走る。この溝状遺構は正方位に沿った掘立柱建物が形成される時期にも併存する。区画溝であろうか。溝状遺構の中には南東方向に走るものがあり、これに併行する掘立柱建物も存在する。これらの溝状遺構と掘立柱建物は先のものより時期的に下るものと想定している。さらに幅 5m ほどの大溝状遺構が調査区の北側で検出できた。この遺構は調査区の北西側付近で北側方向に屈曲するよう



調査Ⅰ区南壁土層断面図　1



調査Ⅰ区南壁土層断面図　2



調査Ⅰ区北壁土層断面図

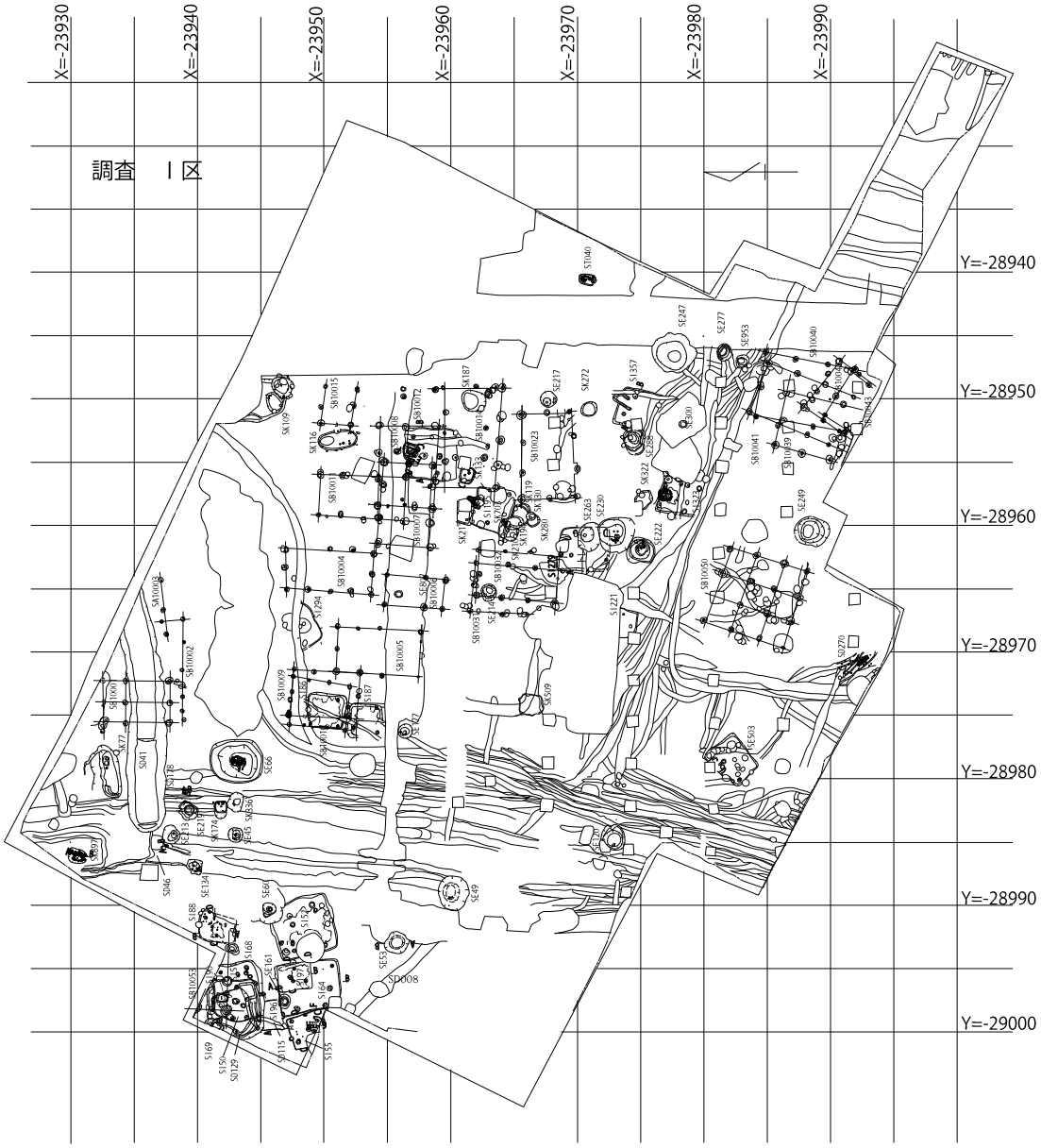
調査区南壁１　土層断面注記

Ⅰa層:にぶい黄褐色;土粒子は細かく、ややシルトに近い　。
　　炭化物粒や焼土粒を部分的に含む。
Ⅱa層:にぶい黄褐色;Ⅰa層よりも粒状の粒が入り、しまりが少ない　。
Ⅱb層:にぶい黄褐色;中サイズの粒状の土塊を多く含む。
Ⅲa層:暗褐色;Ⅱb層に似た粒状の土粒を多く含みパサパサし ている。
　　Ⅱb層より暗く、やや硬質。
Ⅲb層:黒褐色;所々に極大(径　10㎜以上)の暗褐色の土粒を含む。
　　全体的にしまりが強く遺物包含層と同時に遺構の埋　土でもある。
Ⅲc層:黒褐色;Ⅲb層に似るがしまりが良く異なる
Ⅳ層:褐色;黄色味を帯びた土で所々で粒色を異にす る。

調査区南壁２　土層断面注記
Ⅰ層・Ⅱ層:同上
Ⅲb層:暗褐色粘質土。良くしまる。焼土
Ⅳa層:暗褐色粘質土。径１㎝程の塊状と なったⅡb層の土がわずかに入る。
　　遺物の量は少ない。
①層:黒褐色粘質土;良くしまる。
②層:Ⅰ a層に似たにぶい黄褐色土。
③層:Ⅲ b層に似る。良くしまる。
④層:暗褐色土。あまりしま　っていない。
⑤層:暗褐色粘質土。Ⅲ　b層に似る。

調査区北壁　土層断面注記
Ⅰa層:にぶい黄褐色;土粒子は細かく、ややシルトに近い　。
Ⅱa層:にぶい黄褐色;Ⅰa層よりも粒状の粒が入り、しまりが少ない　。
Ⅱb層:にぶい黄褐色;中サイズの粒状の土塊を多く含む。
Ⅱb’層:にぶい黄褐色;Ⅱb層に似るがやや明るい。
Ⅲa層:暗褐色;　b層に似た粒状の土粒を多く含みパサパサし ている。
Ⅲb層:黒褐色;所々に極大(径　㎜以上)の暗褐色の土粒を含む。
①層:暗褐色粘質土。
②層:暗褐色粘質土。中粒子わ　ずかに含む。
③層:炭化物。
④層:遺構埋土。黒褐色粘質土。ほとんど土色差なし。良　くしまる土。
　　粒子の違いはさほど なし。
⑤層:暗褐色。
Ⅳ層

第５図　調査Ⅰ区土層模式図



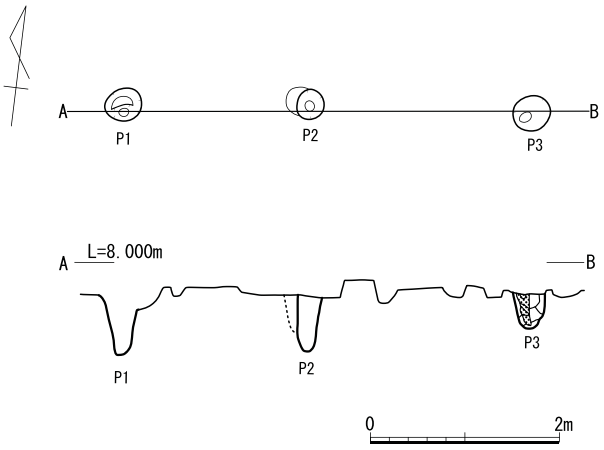
第６図　二本木遺跡群Ⅲ　遺構配置図（S=1/400）

な別溝と交差するのも検出できた。この遺構は遺物から 13 世紀代のものと考える。
その他、縄文後晩期の土器・石器が少なからず出土するため、遺構の存在を想定し検出に努めたが確認できなかった。古代・中世初期の遺物では輸入陶磁器・国産陶器の出土量は県内でも卓越している。

以下に各遺構とその出土遺物について述べていく。

(2)　掘立柱建物

調査 1 区では、柱穴と考えられるピットを多量に確認した。確認した段階はⅢ層上面からすでにできるものから徐々に掘削していく過程で確認できたもの、断面を確認中に確認し、精査を経てやっと確認できたものと掘り込みの状況と埋土の状況などによって様々な状況を呈した。その各段階において柱穴として確認



第 7 図　Ⅰ区　SA10003 実測図

できてはいたが、建て方がうまく想定できなかったために掘り下げを進めたため、ほとんど同じ層面で検出せざるを得なくなり、非常に困難な状況になった。

現場作業において想定できた遺構数は 54 棟まで設定したが、再検討の結果、柵列 1 基、掘立柱建物 25 棟とした。ただ、建物の図については全体図の中に掲載したが、個別には掲載していないものもある。

以下各建物について個別に述べる。

・SA-10003

［遺構状況］　この遺構は 141-G・H-7・8 グリッドで検出した遺構である。当初掘立柱建物という想定で対応する柱列の検出に努めたが、検出できなかったために柵列とした。ただ、3 穴のみであるため建物の一部である可能性が高い。P1-P2 間が 2.0m、P2-P3 間が 2.4m を測る。確認面での穴径は 20cm 前後を測る。深さは確認面から 30cm ほどを測る。軸方向はほぼ東西に延びる。

・SB-10001

［遺構状況］　この遺構は 141-G・H-5・6 グリッドで検出した。梁行 2 ×桁行 3 間以上の総柱の建物で倉庫の可能性がある。SD-041 及び攪乱により A-B 列と C-D 列の間にあったと想定できる柱や P9 に当たる柱が失われているが、全体的な並びから想定のとおりの建物跡で間違いないと考える。

桁行方向を主軸としてほぼ正確な南北をとる。柱間は梁行で 1.6m、桁行で 1.7m を測る。穴の径はややばらつきがあるが、確認面で 30cm 前後あるようである。確認面からの柱の深さは 40cm ほどである。柱の掘り込み面は確認面よりさらに上面であろう。上部構造は不明であるが、総柱のこのような建物の用途としては倉庫などが想定できる。

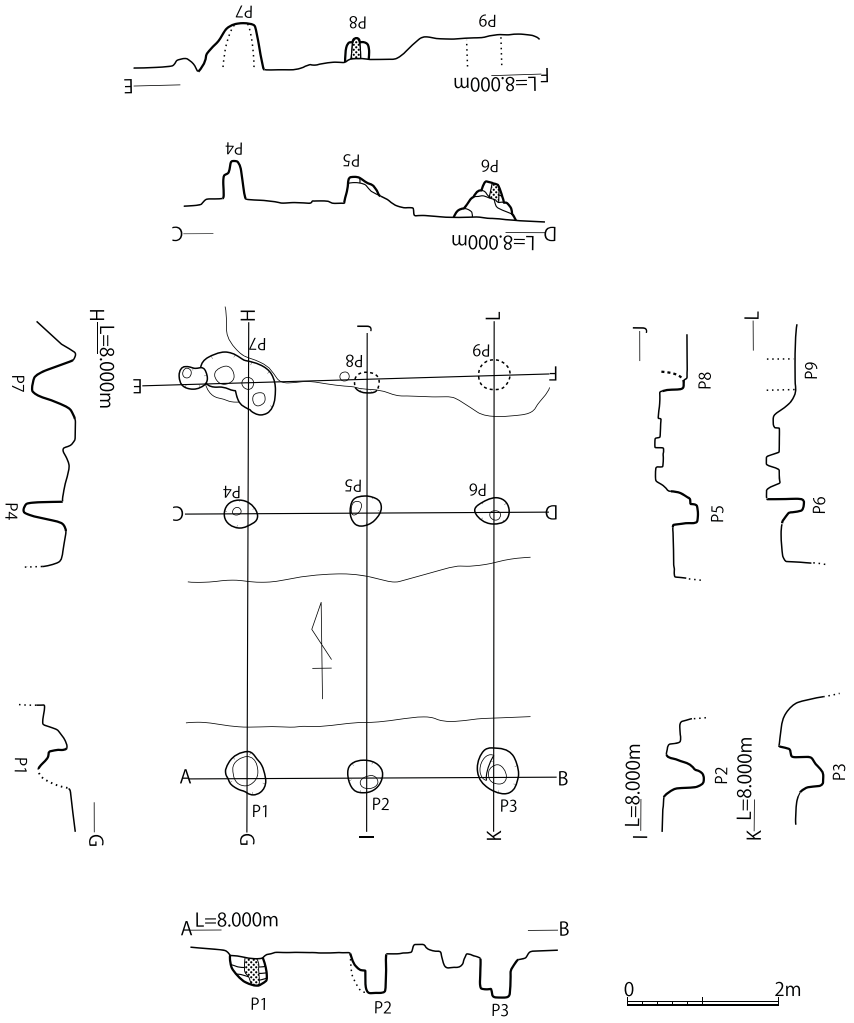
出土遺物が少なく時期判定には難があるが、建物がほぼ正確な南北方向を向くことから考えると古代のものであろう。

・SB-10002

［遺構状況］　この遺構は 141-G・H-5・6 グリッドで検出した。北側が SD-041 によりかなり破壊されているため東西 4 間×南北 1 間のみを確認した。A-B 間柱列と C-D 間柱列の並びのなす角度が鋭角になり、やや角度が不自然であるが、一応他に適当な柱跡がないのでこのように想定した。桁行方向はほぼ東西をとる。P1-P5 間が 176cm、P5-P4 間が 2.08m、P4-P6 間が 2.16m、P6-P3 間が 1.76m、P3-P2 間が 1.76m を測る。確認した柱穴径は 30cm 前後である。確認面からの深さは 24cm 前後であるため、掘り込み面は確認面よりかなり上位からと考える。

・SB-10004

［遺構状況］　この遺構は 141-J・K-7・8 グリッドで検出した。遺構として確実ではなかったので図面は省略したが、調査時に把握した範囲で述べれば、かなり攪乱により破壊されているため東西 4 間×南北 1 間のみを確認した。A-B 間柱列と C-D 間柱列の並びのなす角度が鋭角になり、やや角度が不自然であるが、一

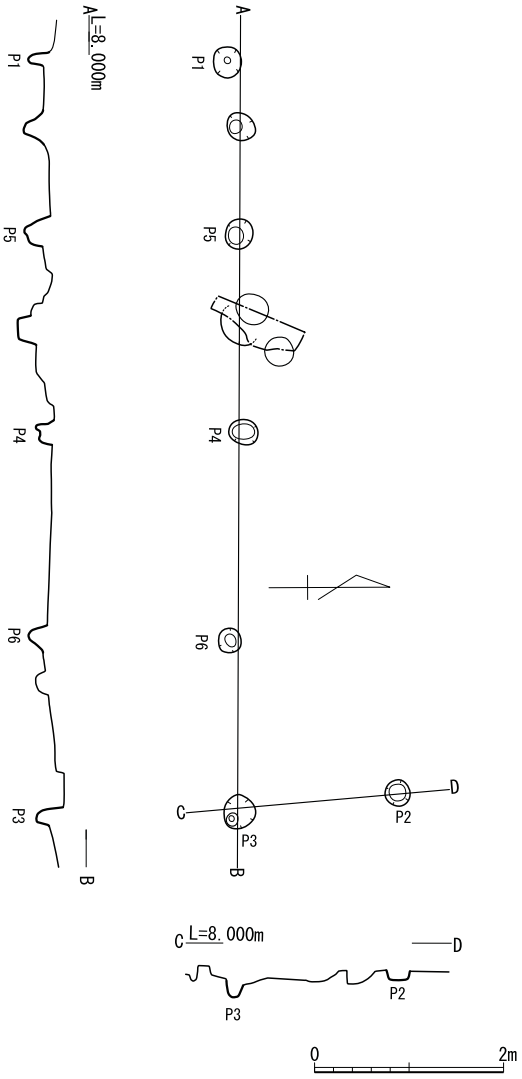


1層　黒褐　10YR3/1　シルト　しまり　弱い　粘性あり
2層　黒褐　10YR3/1　シルト　しまり　強い　粘性あり
3層　黒褐　10YR3/2　シルト　しまり　強い　粘性あり
4層　黒褐　10YR3/1.5 シルト　しまり　強い　粘性あり
5層　暗灰褐10YR4/2　シルト しまり　強い　粘性ほとんど ない　砂質が非常に 強い 6層
6層　褐灰　10YR4/1　シルト しまり　強い　粘性あり　遺物、炭化物含む
下層に 5 層　黄褐色土)ブロック 混じる
7層　褐灰　10YR4/1　シルト しまりやや強い　粘性あり　炭化物含む
1cm大の遺物多く　0.5cm 程度の礫やや 多く 混じる
炭化物含む
8層　灰黄褐 10YR4/2 シルト　しまり　強い　粘性あり　1cm大の遺物片混じる
下層に獣骨片あり
9層　黒褐　10YR2/1　シルト しまり　やや強い　粘性あり　下層に5層(黄褐色)
ブロック 混じる　炭化物混じる

第 8 図　Ｉ区　SB10001 実測図

応他に適当な柱跡がないのでこのように想定した。P1-P5 間が 1.76m、P5-P4 間が 2.08m、P4-P6 間が 2.16m、P6-P3 間が 1.76m、P3-P2 間が 1.76m を測る。確認した柱穴径は 30cm 前後である。確認面からの深さは 24cm 前後であるため、掘り込み面は確認面よりかなり上位からと考える。桁行方向を主軸としてほぼ東西をとる。

[出土遺物]　817(第 161 図) は柱穴から出土した内黒土器の高台付椀である。復元口径が 17.8cm、器高が 7.0cm、復元底径が 8.4cm を測る。内面にヘラ磨きを施す。



第 9 図　Ⅰ区　SB10002 実測図

・SB-10005

［遺構状況］　この遺構は 141-K・L-6・7 グリッドで検出した。桁行方向を南北にとり、南側が溝に撹乱により柱穴が失われているため、正確な間数は不明であるが、撹乱より南側に接続する柱穴がないことと、撹乱の縁に 2 穴の残が見えることから桁行 3 間と想定する。梁行は 2 間である。

・SB-10006

［遺構状況］　この遺構は 141-K・L-7・8 グリッドで検出した。桁行方向では P2-P3 間と P4-P5 間の柱穴が攪乱により失われていると考えられ、桁行き 3 間×梁行き 1 間の建物と想定した。かなり小規模な建物と考える。桁行方向を南北にとる。

梁間は 2.32m、桁間は 1.6m を測る。確認面での柱穴の径はばらつきがあるが、大きいもので 50cnm、小さいもので 40cm ほどを測る。確認面から柱穴の深さは場所によって異なるものがあるが、深いもので 1m ほどある。この建物の掘り込み面はさほど上面でないのかもしれない。

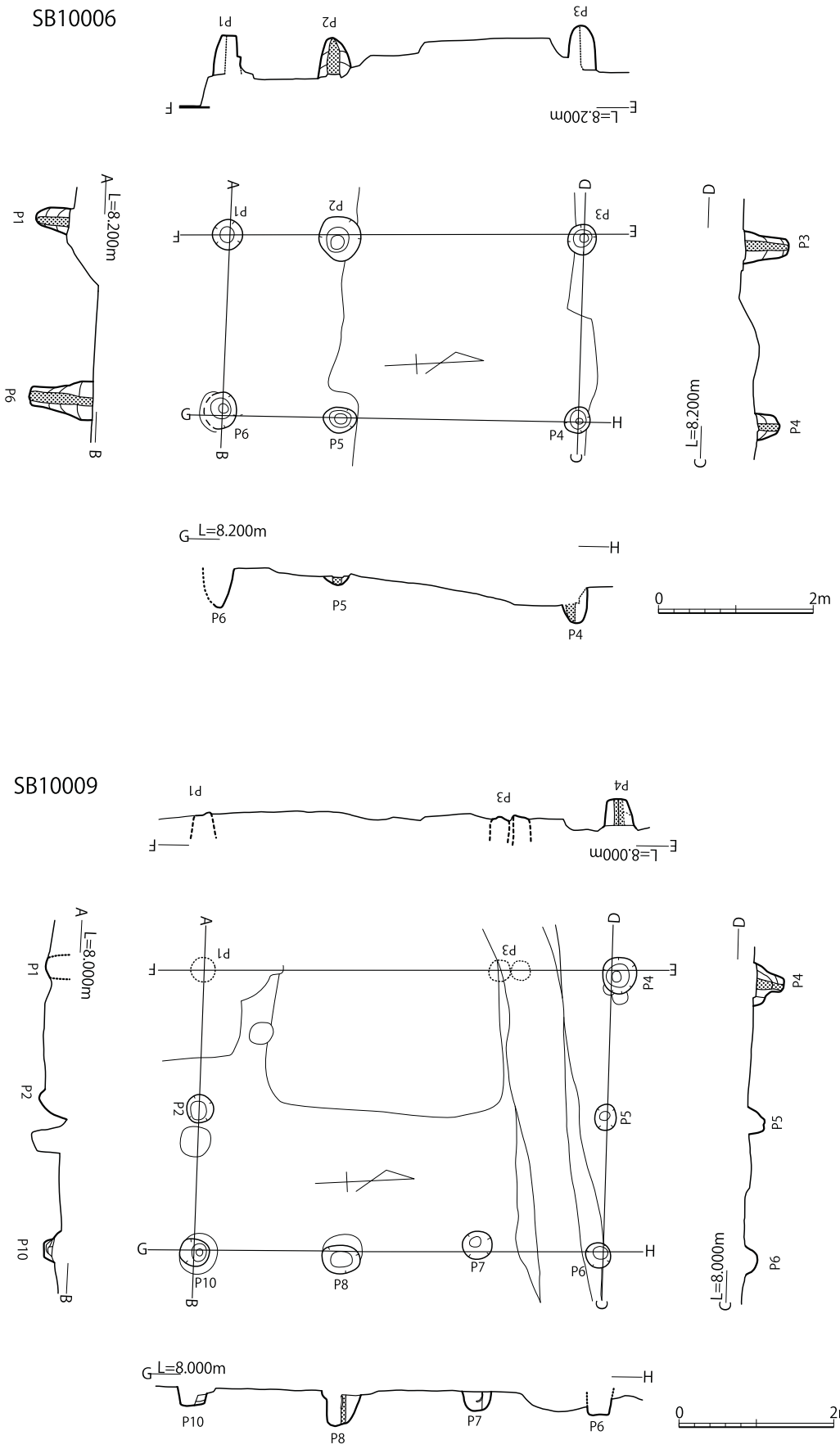
・SB-10009

［遺構状況］　この遺構は 141-J・K-5・6 グリッドで検出した。攪乱で西側の柱は失われているが、痕跡の残るものもあり、梁行 2 間×桁行 3 間の建物と想定した。梁間は 1.8m、桁間は 1.6~1.8m を測る。柱の深さは確認面から深くて 40cm 程度なので、実際の掘り込み面はかなり上層であると考える。桁行方向を主軸として南北である。

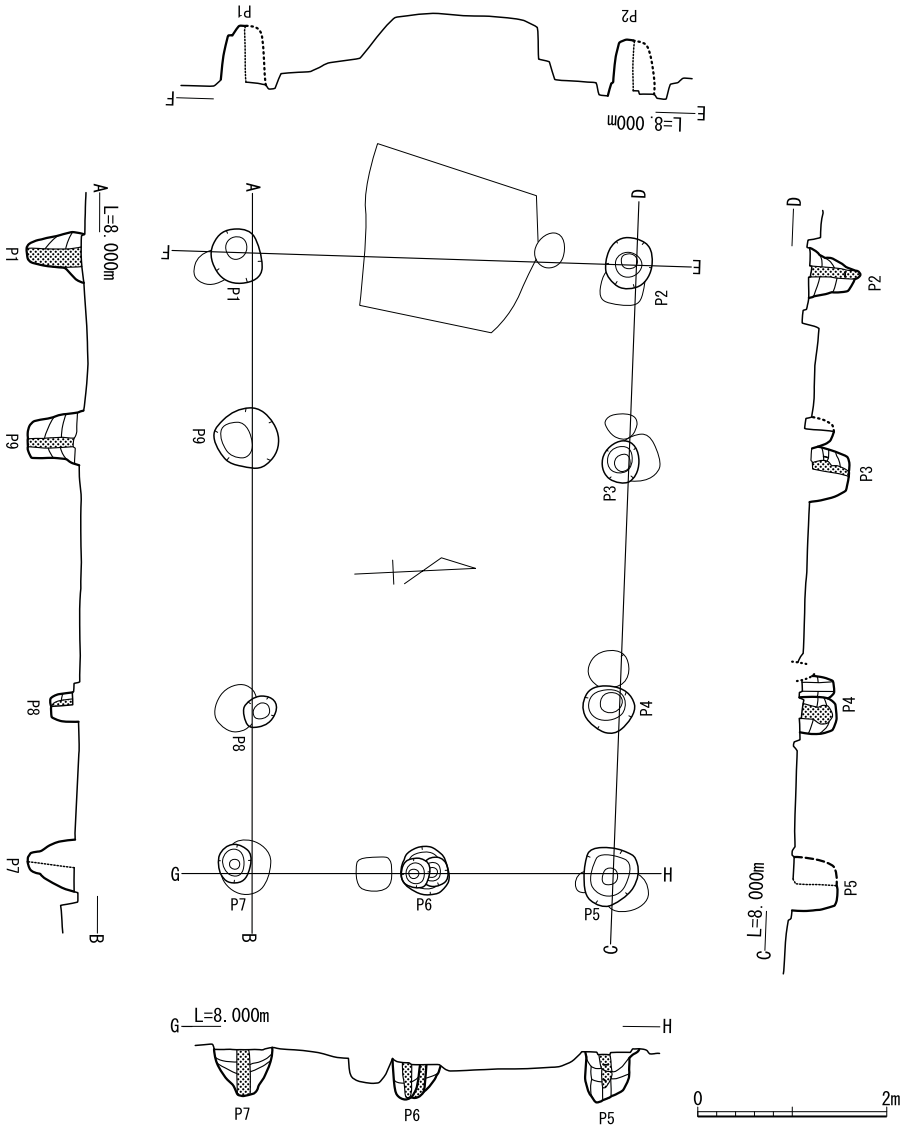
[出土遺物]　499（第 162 図) は土師器の高台付椀で、底部径が 6.85cm を測る。ヘラ切り離し後に高台を貼り付ける。

・SB-10007

［遺構状況］　この遺構は 141-K・L-9・10 グリッドで検出した。柱の並びは良いものの、P1-P3 間の柱が攪乱により確認できていない。その確認した P1、P3 についても対面の柱に対応する位置に柱の最下面のやや硬化したわずかな痕跡によりこの建物の大体の形を考えることができた。その結果、梁行 2 間×桁行 3 間の建物と想定した。ただ、桁行柱間が必ずしも一定していない。梁行では P7-P6 が 2m、P6-P5 間が 2m、P1-P2 間が 4.16m を測り、やや西側が広がる。桁行き方向では、P7-P8 間が 1.7m、P8-P9 間が 2.8m、P9-P1 間が 2m を測り、P5-P4 間で 1.8m、P4-P3 間で 2.48m、P3-P2 間で 2.16m を測りやや南北桁行き間でひずみがある。柱の掘り方をみると大きいものは確認面で 50cm ほどあるが、小さくても 30cm 前後はあり、全体的に柱穴径がやや大きめのものである。桁行方向を主軸として東西である。



第 10 図　Ｉ区　SB10006・10009 実測図



第 11 図　Ⅰ区　SB10007 実測図

確認面からの柱の深さは深いもので 60cm ほどを測り、この建物自体がさらに上層から掘り込まれていた可能性が大きい。

・SB-10011

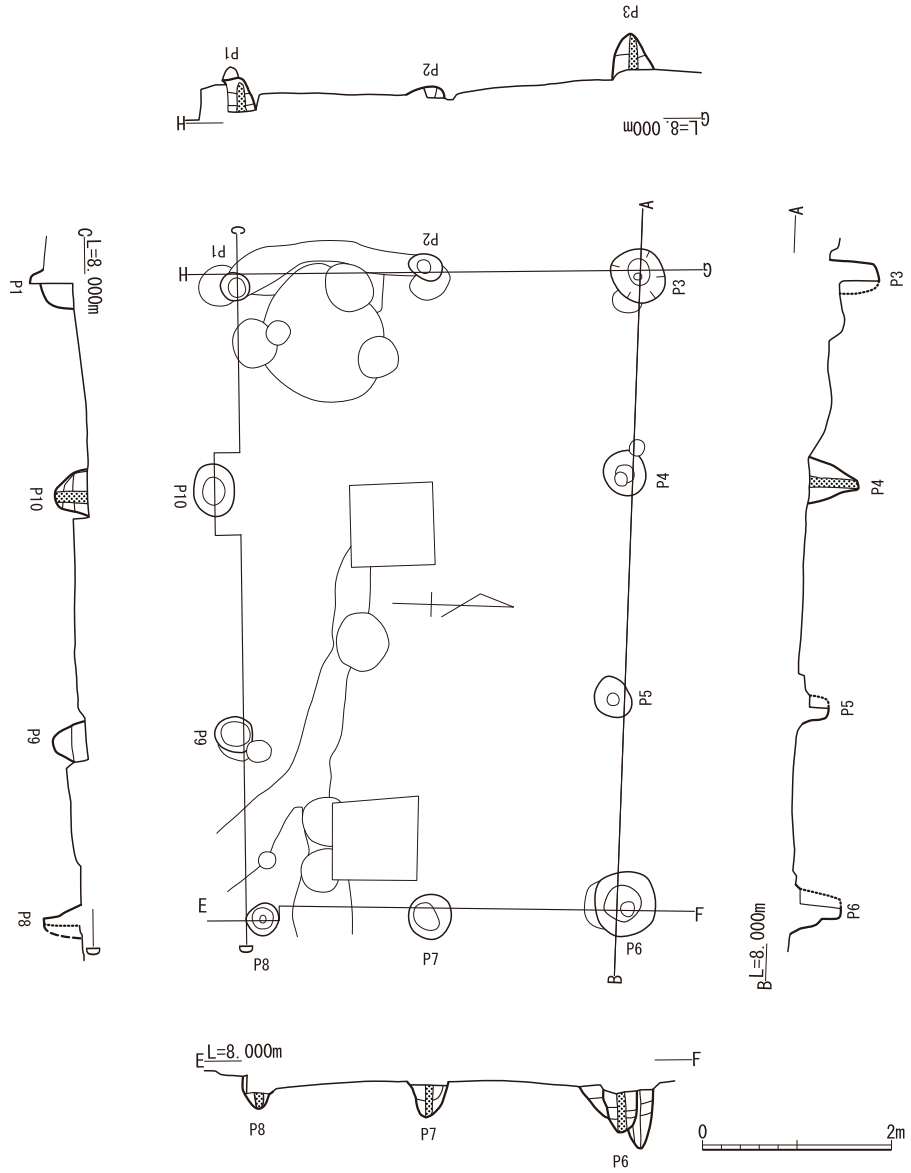
［遺構状況］　この遺構は 141-K・J-9・10 グリッドで検出した。桁行方向が南北で、2 間× 3 間の建物を想定した。ただ、柱間が不規則である。P-6 は浅いピットで、Ⅴ層上面での最終確認時には底まで削平され痕跡さえなくなった。P7~P11 の列は SB-10011 東側のピット列と土坑群と並ぶ可能性がある。

・SB-10012

［遺構状況］　この遺構は 141-L・M-10・11 グリッドで検出した。桁行方向は南北で、梁行 2 間×桁行 3 間の建物を想定した。Ⅳ層上面で確認できた。SB-10014 と切りあうが、前後関係は不明である。

・SB-10014

［遺構状況］　この遺構は 141-L・M-10・11 グリッドで検出した。桁行方向は東西である。建物規模は梁行



第 12 図　Ｉ区　SB10023 実測図

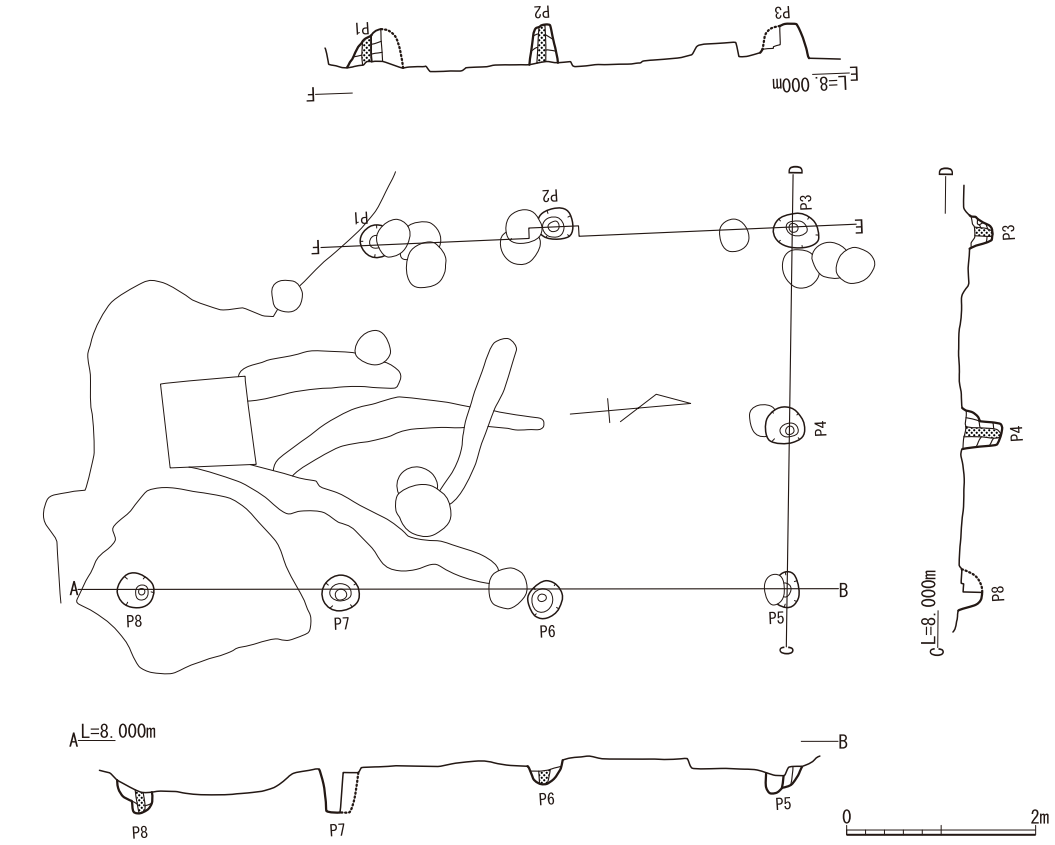
2 間×桁行 4 間の側柱建物を想定した。Ⅳ層上面で確認した。
SB-10012 と切り合う。

・SB-10015

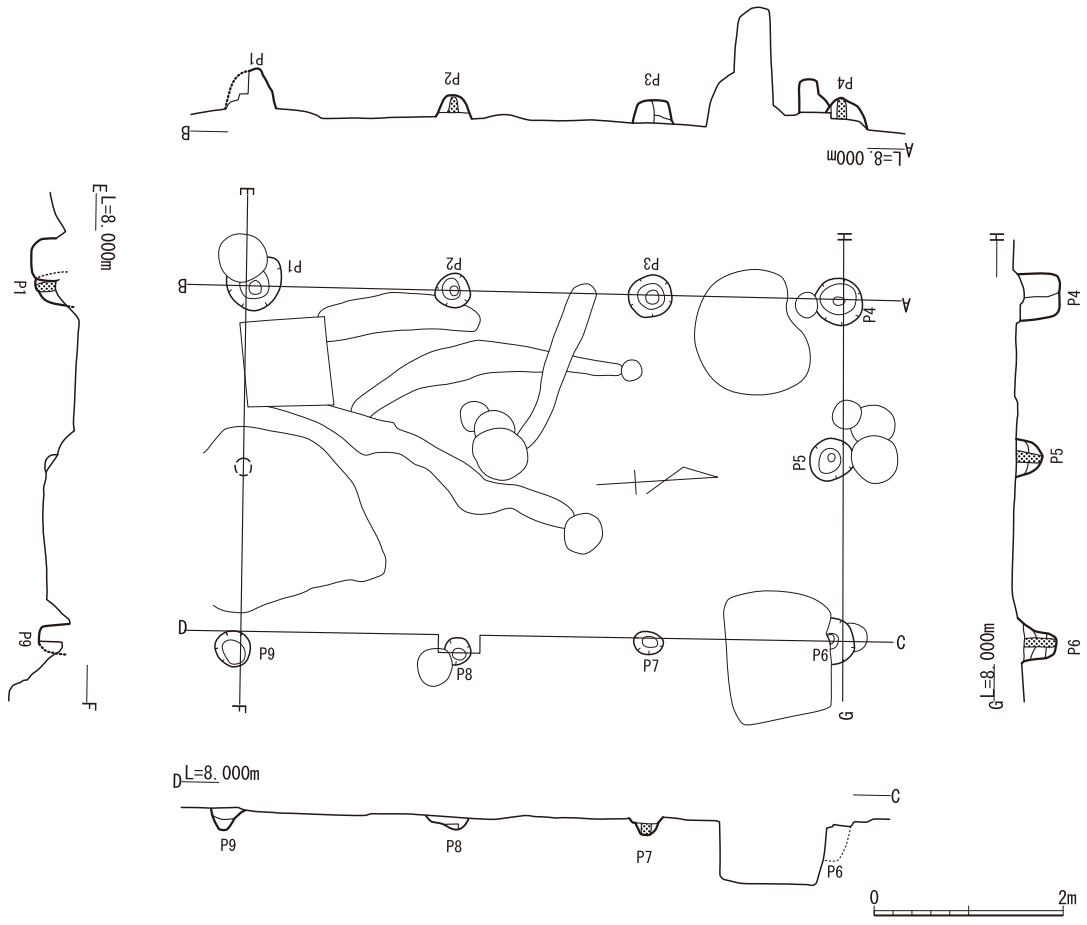
［遺構状況］　この遺構は 141-J・K-10・11 グリッドで検出した。桁行方向が東西に延びる建物で、梁行 2 間×桁行 2 間以上と想定した。柱穴の一つには埋土中に石を含み、根固めもしくは礎盤の可能性もある。

・SB-10023

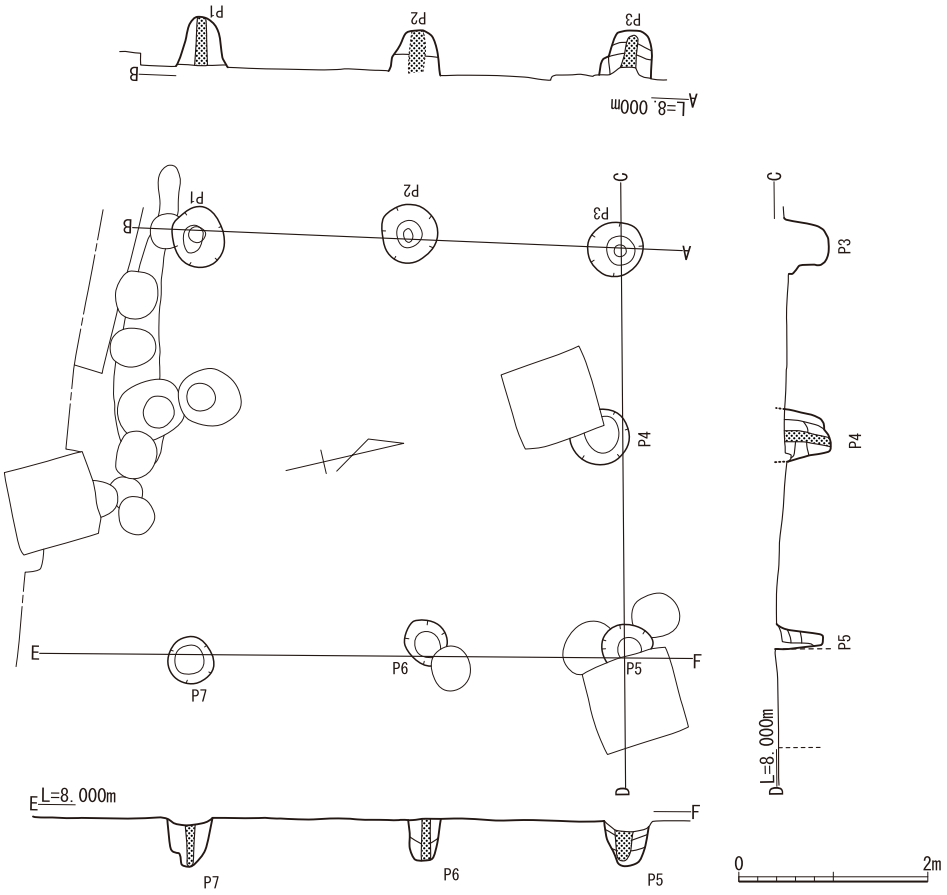
［遺構状況］　この遺構は 141-M・N-9・10 グリッドで検出した。この建物はかなり柱の取り方に苦労したもので南北もしくは東西方向での柱並びを検討した結果、やや不自然な部分もあるものの許容範囲としてこのような建物を想定した。梁行 2 間×桁行 3 間であるが柱間が若干異なる。梁行では P8-P7 間が 1.76m、P7-P6 間が 2.0m、P1-P2 間が 2.0m、P2-P3 間が 2.24m で西側がやや広がる。桁行では南側の柱間 P1-P10 間が 2.08m、P10-P9 間が 2.56m、P8-P9 間が 1.92m を測る。南側では、P3-P4 間が 2.16m、P4-P5



第 13 図　Ⅰ区　SB10031 実測図



第 14 図　Ⅰ区　SB10032 実測図



第 15 図　Ｉ区　SB10039 実測図

間が 2.4m、P5-P6 間が 2.16m を測る。ここでも北側の柱間がやや広い。確認した面からの深さは深くて 50cm 程度であり、さらに上層からの掘り込みであったと考える。桁行方向を主軸として東西である。

・SB-10031

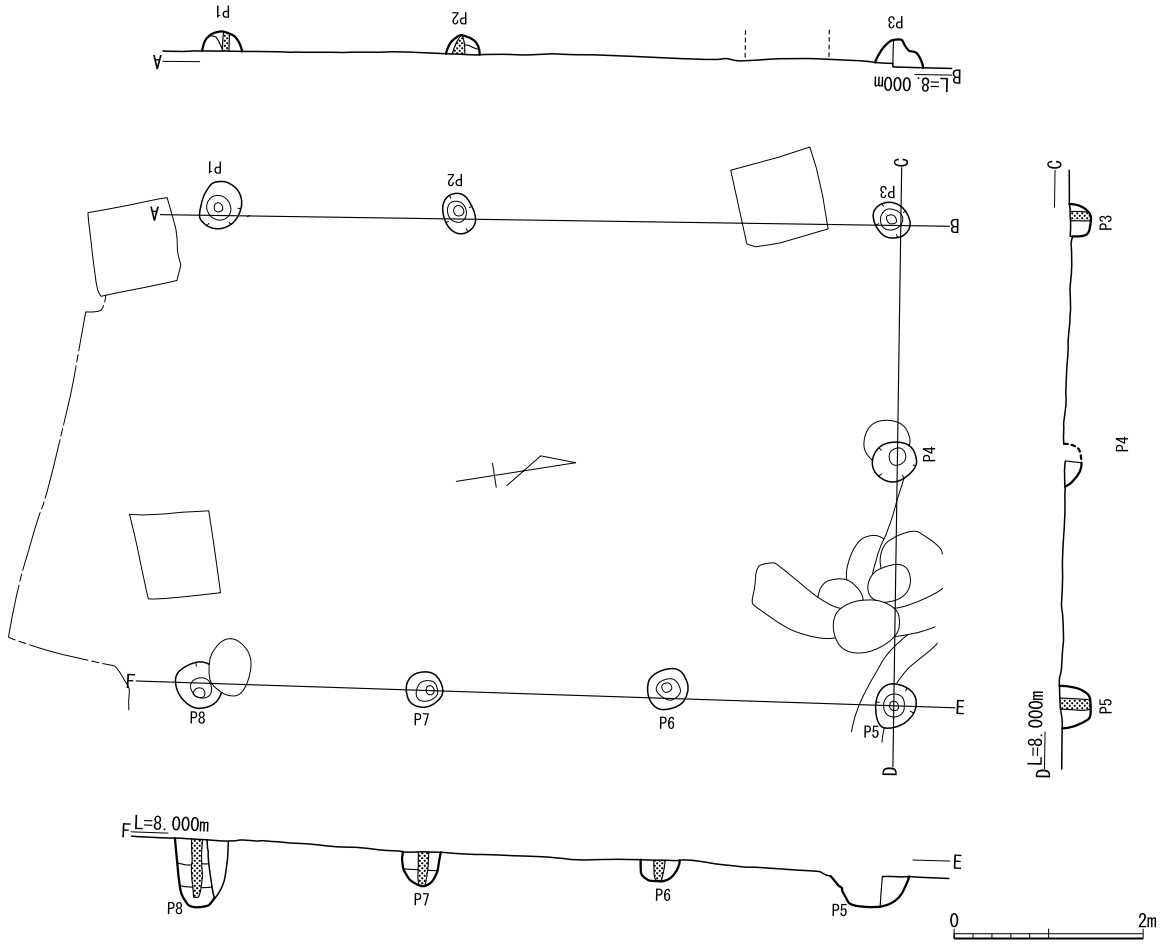
［遺構状況］　この遺構は 141-M-7・8 グリッドで検出した。この遺構の検出もピットの集中のある部分であるためどのピットと組み合わさるかで確認まで時間を要した。最終的に攪乱の状況なども考慮し、梁行 2 間、桁行 3 間以上と想定した。SB-10032 と重なる部分があり、時間的に前後関係があろう。

柱間は各辺でばらつきがあるが最大限妥当なところを採用した。各柱間は梁行きの P5-P4 間で 1.68m、P4-P3 間で 2.08m、桁行きは東側で P5-P6 間が 2.56m、P6-P7 間が 2.16m、P7-P8 間が 2.16m、西側で P3-P2 間が 2.48m、P2-P1 間が 1.84m をそれぞれ測る。確認面からの柱の深さは最大で 50cm ほどである。さらに上層からの掘り込みと考える。桁行方向を主軸としてほぼ南北である。

・SB-10032

［遺構状況］　この遺構は 141- M・N-7・8 グリッドで検出した。梁行 2 間×桁行 3 間の建物である。桁行方向はほぼ南北であるが、やや東方向にずれ、N-4° -E をとる。SB-10031 および SB-10033 と一部重なる部分がある。その前後関係はほとんどわからないが、SB-10033 の P-6 が SB-10032 の P-5 を切っていると判断できるものがあったので、SB-10032 → SB-10033 と一応想定する。

各柱間は梁行で P1-P9 間が 3.92m、P6-P5 間が 1.92m、P5-P4 間が 1.68m をそれぞれ測る。桁行き方向で、



第 16 図　Ⅰ区　SB10040 実測図

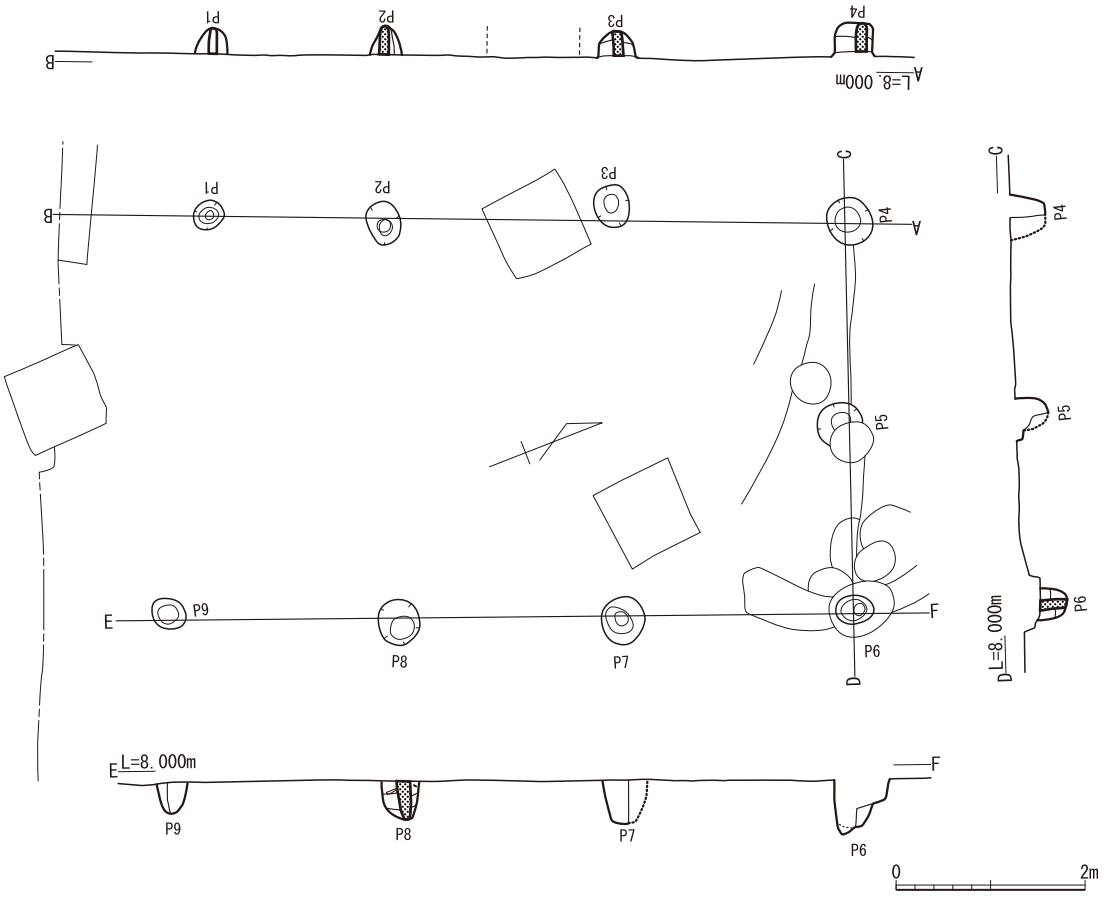
P9-P8 間が 2.32m、P8-P7 間が 2.0m、P7-P6 間が 2.0m、P1-P2 間が 2.0m、P2-P3 間が 2.0m、P3-P4 間が 2.0m をそれぞれ測る。各柱間のばらつきはあるが、柱としてはしっかりしたものもが多い。特に P1-P4 は柱穴もおおむね 50cm ほどで柱間、柱筋もしっかりしている。一方これらの柱の掘り込みは確認面からの深さが深いもので 40cm ほどしかなく、かなり上層からの掘り込まれたと考える。

・SB-10039

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R・S-10・11 グリッドで検出した。梁行 2 間×桁行 2 間以上の建物である。一部は調査区外になるため桁行方向の間数は不明である。桁行方向はやや東方向にずれ、N-15° -E をとる。各柱間は梁行で P5-P4 が 2.4m、P4-P3 が 2.4m を測る。桁行き方向で、P5-P6 が 2.0m、P6-P7 が 2.48m、P3-P2 が 2.24m、P1-P2 が 2.24m をそれぞれ測る。各柱間はかなり大きなばらつく部分もあるが、しっかりしたものも多く確実なものである。この遺構は柱間が他のもの比べて大きく、間数も多くなるのではないかと考える。柱穴の径は 50cm ほどで、柱痕跡もしっかりしている。埋土は白味混じりの硬く締まった土である。ただ、確認面から深さが 50cm ほどなので、上層からの掘り込みが考えられる。

・SB-10040

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R・S-10・11 グリッドで検出した。この建物は基本的に梁行 2 間×桁行 3 間以上と考えた。ただ桁行の西側柱列は対応する柱穴ないものがある。一部は調査区外になるため桁行方向は不明である。桁行方向はほぼ南北であるが、東方向にわずかにずれる。



第 17 図　Ｉ区　SB10041 実測図

各柱間は梁行で P5-P4 間が 2.64m、P4-P3 間が 2.48m を測る。桁行方向では、P5-P6 間が 2.4m、P6-P7 間が 2.4m、P3-P2 間が 2.4m、P1-P2 間が 2.48m、P2-P3 間が 4.56m をそれぞれ測る。各柱間のばらつきは少なく、しっかりしたものも多く確実なものである。柱間は他のものに比べて大きく、間数も多くなるのではないかと考える。柱穴の径は 40cm ほどで、柱痕跡もしっかりしたものが多い。ただ、確認面から深さが 60cm ほどなので、上層からの掘り込みが考えられる。

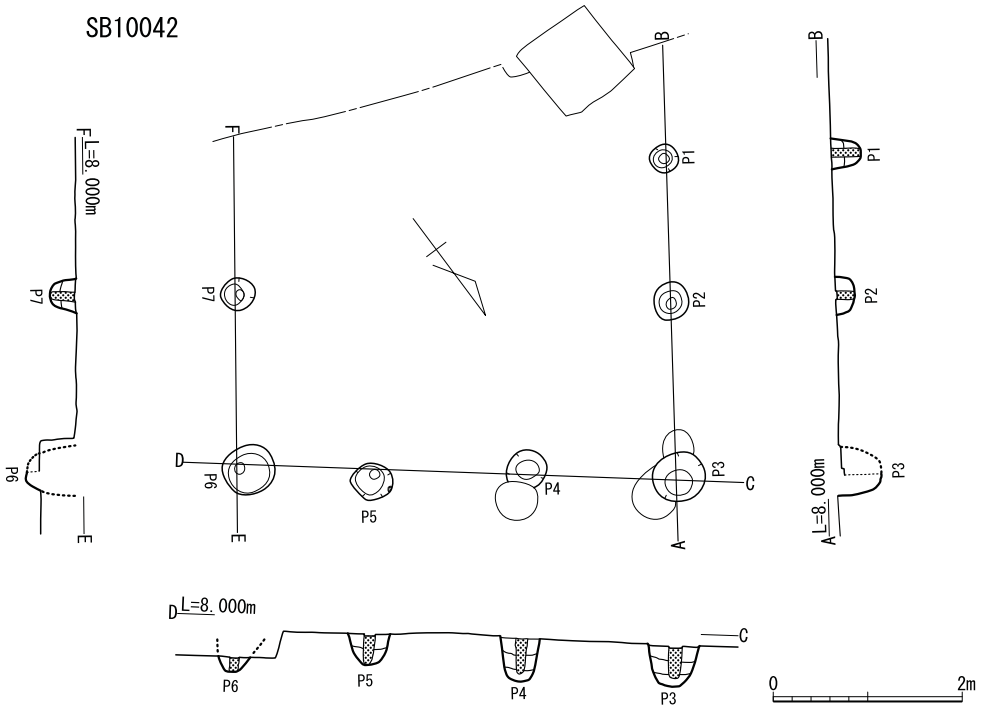
・SB-10041

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R-10・11 グリッドで検出した。SB-10040 とは角度を異にし、重なる。梁行 2 間×桁行 3 間以上の建物である。一部は調査区外になるため桁行方向は不明である。桁行方向やや南北方向より東方向にずれ、N-20° -E を測る。

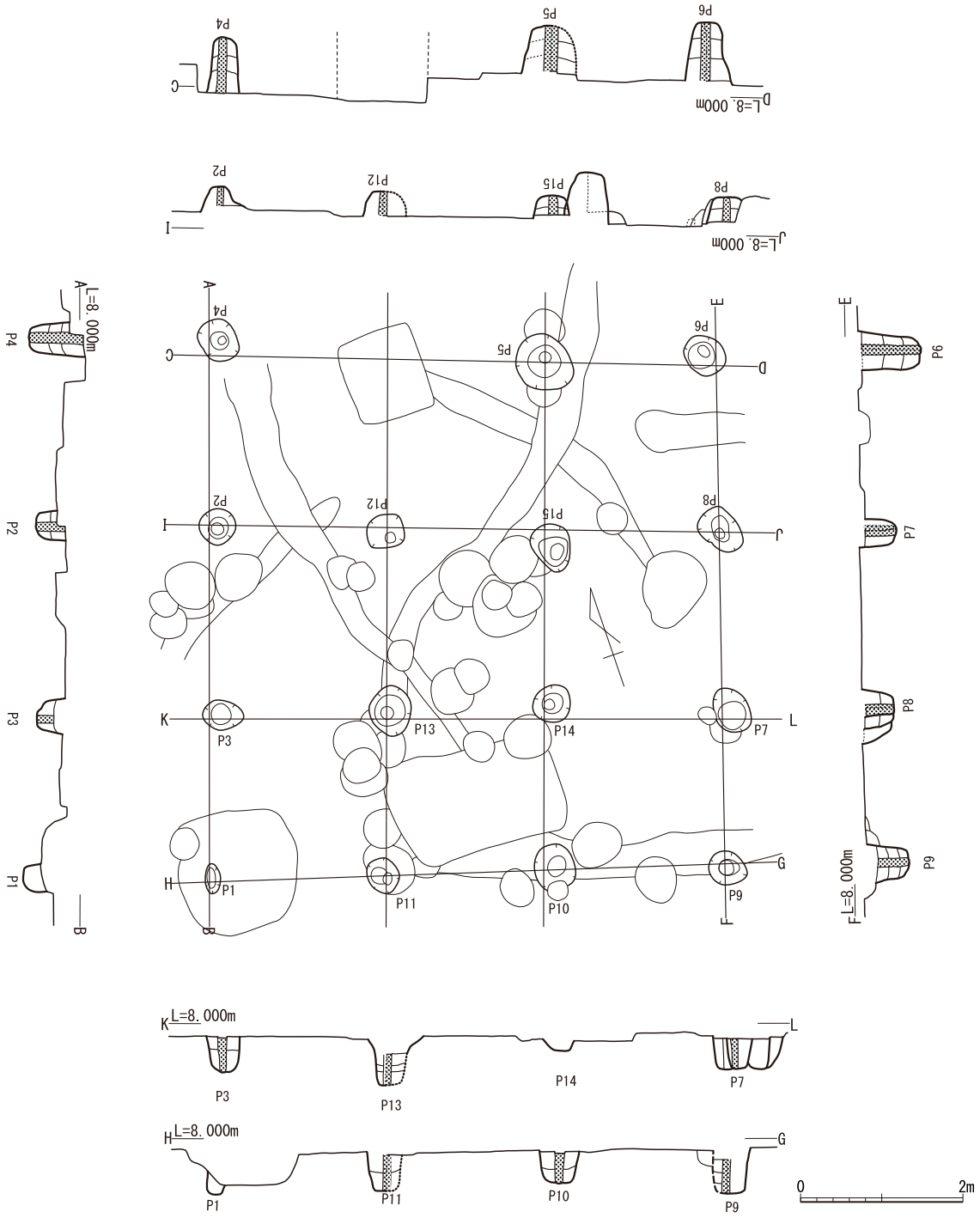
各柱間は梁行で P5-P6 間が 2.0m、P5-P4 間が 2.08m を測る。桁行き方向で、P6-P7 間が 2.24m、P8-P7 間が 2.24m、P8-P9 間が 2.48m、P3-P4 間が 2.4m、P3-P2 間が 2.4m、P2-P1 間が 2.24m をそれぞれ測る。各柱間はばらつきがある。ただ柱としてはしっかりした確実なものである。確認面での柱穴の径は約 50cm ほどであるが、確認面から深さは深くても 50cm ほどなので、上層からの掘り込みが考えられる。

・SB-10042

［遺構状況］　この遺構は 141-R・S-9~12 グリッドで検出した。この遺構は他のものに比べてやや異質な



第 18 図　Ⅰ区　SB10042・10043 実測図



第 19 図　Ｉ区　SB10050 実測図

検出状況である。調査区外に桁行方向で伸びているため、想定では梁行き３間×桁行３間以上として全体像は不明である。柱間は各間でばらつきが大きく、梁行方向の D-C 間では 1.36m+1.6m+1.6m+・・、桁行方向の E-F 間で 1.84m+・・・、A-B 間で 1.84m+1.6m+・・をそれぞれ測る。このように柱間のばらつきの大きさは想定の誤りである可能性もあるが、実際に他の柱穴ではうまく成り立たないのでこのような想定となった。したがって必ずしも掘立柱建物としなくてもよいのかもしれない。桁行方向の北から東への振れは N-35° -E である。柱穴の掘り方は径 40 前後 cm の円形である。柱痕跡はいくつかで確認でき径が 10~16cm 程度である。

・SB-10043

［遺構状況］　この遺構は 141-R・S-10・11 グリッドで検出した。この遺構は調査区外へ柱列が延びるのを考えてもかなり想定がおかしくはある。想定では梁行 1 間以上×桁行 2 間とせざるをえない。柱の関係も必ずしも一つにするには難しい。想定でこの建物規模をみると、梁行方向で 4m、桁行方向で 2m 以上となる。桁行方向の北から東への振れは N-36° -E である。

・SB-10044

［遺構状況］　この遺構は 141-S-11・12 グリッドで検出した。桁行方向を主軸方向としてほぼ東西にとると想定できるが、南側が調査区外となるため、梁行 2 間以上×桁行 3 間の建物としかいえない。桁行の P1-P2 間が 1.8m、P2-P3 間が 1.7m、P3-P4 間が 1.7m を測る。梁行では P4-P5 間は 1.3m を測る。

・SB-10045

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R-8・9 グリッドで検出した。梁行 2 間×桁行 3 間の側柱建物と考える。柱穴の一つは井戸の埋土の中にあったものと考えられるが、建物自体の確認が井戸の調査後であったため、柱穴の状況はつかめない。

・SB-10047

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R-5・6 グリッドで検出した。梁行 2 間×桁行 3 間の側柱建物である。SB-10048 と切り合い関係にある。ただし、前後関係は不明である。

・SB-10048

［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R-8・9 グリッドで検出した。梁行 2 間×桁行 3 間の側柱建物である。SB-10047 と切り合い関係にある。ただし、前後関係は不明である。

・SB-10050

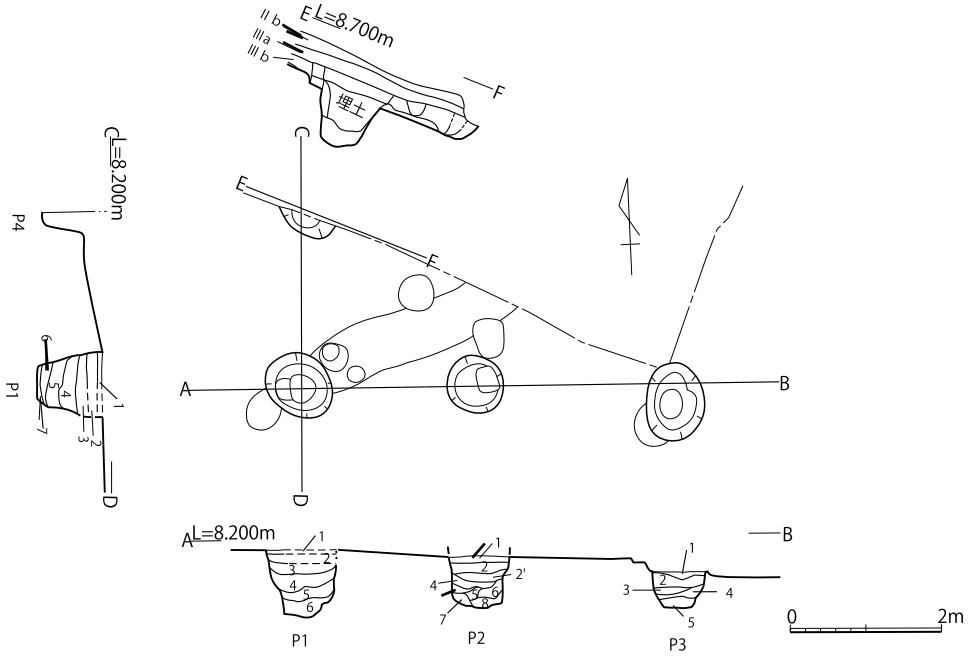
［遺構状況］　この遺構は 141-Q・R-7~8 グリッドで検出した。この遺構は梁行 3 間×桁行 3 間の総柱建物である。この 1 棟のみが他の建物に比べ大型の総柱の建物であるため、特殊な建物である可能性が指摘できる。ただ、調査中はこれの立て直すような形で微妙にずれて数棟の同規模の建物を想定していた。他に想定した建物はうまく適合しなかったためここでは外した。

　この建物は南北を軸方向に考えて、N-20° -E で東側への軸のずれがある。切り合いを想定していた建物も同様である。

　梁行方向では、C-D 間は 2m+2m+2m、I-J は 2.08m+2.0m+2.0m、K-L 間は 2.16m+2.0m+2.16m、H-G 間は 2.16m+2.16m+2.16m である。桁行き方向で A-B 間は 2.24m+2.4m+2m、P12-P11 間で 2.24m+2.0m、P5-P10 間で 2.24m+1.84m+2.0m、E-F 間で 2.16m+2.4m+1.76m をそれぞれ測る。柱穴の径は 50cm ほどで、深さは最も深いもので確認面から 80cm を測る。ピットの集中域であるので他にもこの場所に建物が建っていた可能性は高い。

・SB-10053

［遺構状況］　この遺構は、141-I-1・2 グリッドで検出したもので、当初は個々の柱穴を径の大きさから土坑と考え、それぞれに土坑としての遺構番号をつけていたが、全体的な位置関係を検討し、新たに掘



P1

1層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	強くしまる	完形の遺物を多量含む
2層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	強くしまる	地山ブロック　1〜2　2cm大）多く 含む。炭化物粒と 土器片を含む
3層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	しまりあり	地山粘土1〜2　1ｃｍ大）少量含む。炭化物粒を多く 含む
4層	黒褐色7/5YR3/2	シルト	強くしまる	ブロック1・2(3cm大）土器片を多く 含む。炭化物粒を多む
5層	黒色　7.5YR3/2	シルト	強くしまる	地山ブロック2・3(3cm大）少量含む。土器片を含む。
6層	暗褐色7.5YR3/3・3/1	黒色のシルト 混土。	ややしまる。	地山ブロック1〜3(3cm大)多く 含む。
7層	黒色　7.5YR2/1	シルト	しまりあり やや粘質。	地山ブロック3(3cm大)と 土器片を少量含む。

※　土質の観察では、6.7層は、ピット が埋土と いうより 柱を固める 根固め土の可能性が高い。

P2

1層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	強くしまる	地山ブロック(2　3cm大）わずかに含む。土器片少量含む
2層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	しまりあり	地山ブロック(1　5cm大)ブロック2(2cm大）土器片をいずれも 少量含む。
2'層	黒褐色7.5YR3/1	シルトと 地山と の混土。	やや砂質。	土器片少量含む。
3層	黒褐色7.5YR3/1	シルト	ややしまる	地山ブロック(2　2cm大)と 土器片を少量含む。
4層	黒褐色7/5YR3/1	シルト	しまり なし やや砂質。	地山ブロック3(2cm大)多く 含む。
5層	黒色　7.5YR2/1	シルト	しまり なく 特にふかふか。	地山ブロック1(2cm大）わずかに含む
6層	黒褐色7.5YR3/1	シルト	しまり なし	地山ブロック2〜3(5cm大)多く 含む
7層	黒色　7.5YR2/1	シルト	しまりあり　やや砂質。	地山ブロック1〜8(2cm大）少量含む。
8層	黒色　7.5YR2/1	シルト	ややしまる	地山ブロック(3　3cm大）わずかに含む。

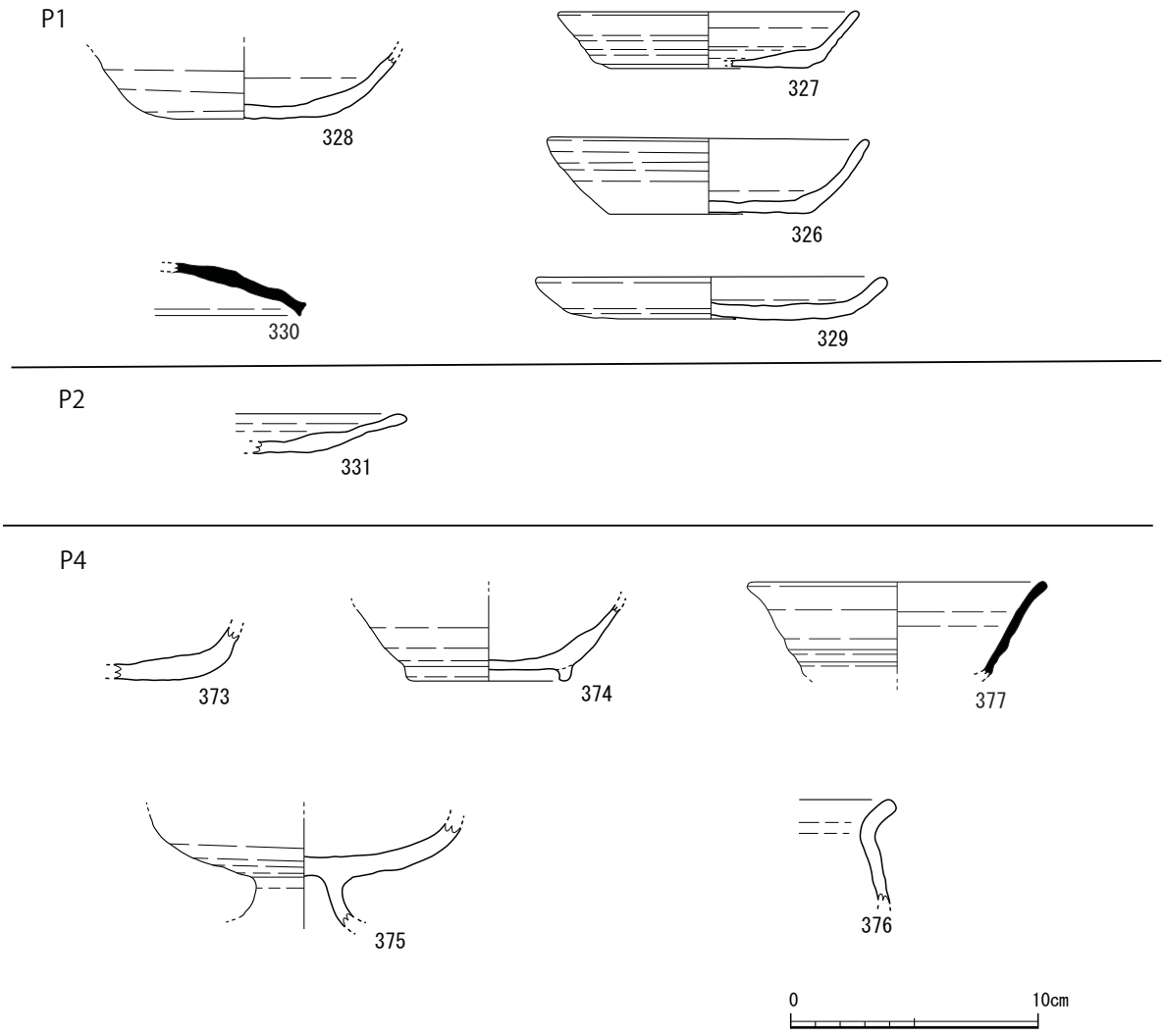
※　土質の観察では、7・8層は。ピット が埋まる 際の埋土と いうより。柱の根固めの可能性が高い。5層は、柱痕の可能性あり 。

P3

1層	黒褐色7.5YR3/1	シルト	ややしまる	地山ブロック(2cm大）少量含む。土器片少量含む
2層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	しまり なし　やや砂質。	地山ブロック1〜2　3cm大）多く 含む。
3層	暗褐色7.5YR3/1	シルト	しまなし	地山1が主と なる層。
4層	黒褐色7/5YR3/1	シルト	しまり なし　やや砂質。	地山ブロック2(5cm大)多く 含む。
5層	黒褐色　7.5YR2/1	シルト	ややしまる　やや粘質。	地山ブロック3(5cm大）多く 含む。
6層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	しまり なし	地山ブロック2〜3(5cm大)多く 含む
7層	黒褐色7.5YR3/1	シルト	しまりあり	
8層	黒褐色7.5YR3/2	シルト	ややしまる	地山ブロック1〜(3　2cm大）多く 含む 樹痕か？ ）

※　5・7層は、特に柱の根固めである可能性が高い。

第 20 図　Ｉ区　SB10053 実測図



第 21 図　Ⅰ区　SB10053 出土遺物実測図

立柱建物として番号をふり直した。当初の番号とこの遺構の柱番号を対照させると、SP-121 → P-1、SP-122 → P-2、SP-220 → P-4 である。P-3 は壁際で検出した。この遺構は調査区の端にあるため、この 4 穴のみを検出した。

柱穴の掘り方の径は 70cm~100cm を測る。柱痕跡は、土坑の認識で確認していたため、とらえ損ねた。柱間は南北方向で 2.5m、東西方向で 2.5m を測る。ほぼ正方位方向に沿うものと考えられる。規模については柱穴の大きさから大型の建物の可能性がある。

ほとんどの柱穴は竪穴建物を切った状態でⅢ層の上面近くから確認できていたことから 8 世紀代以降のものと考える。

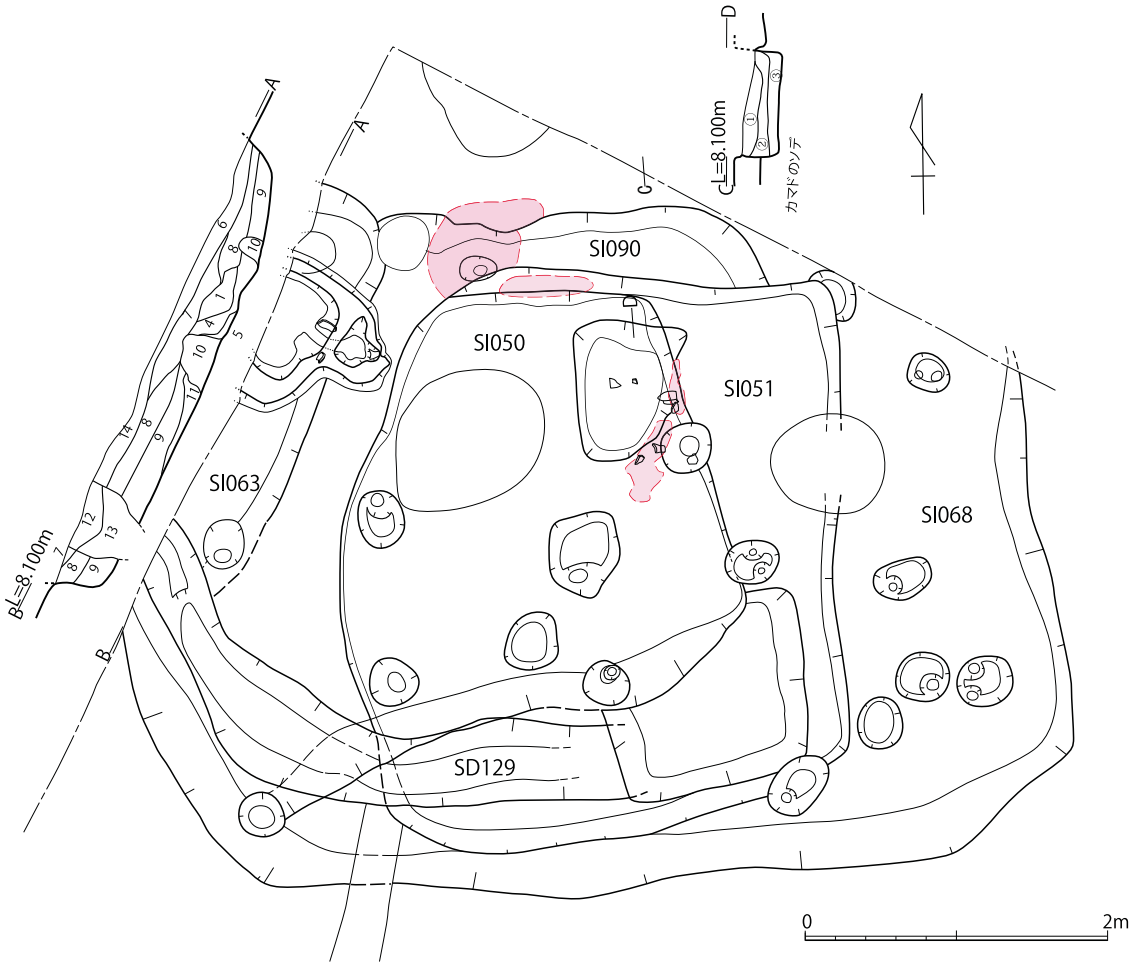
［出土遺物］　それぞれの柱穴から出土遺物はあるが、竪穴建物と切り合う関係にあるため出土遺物がこの遺構の築造時期に見合ったものとは限らない。目安のために柱穴ごとに出土遺物をあげておく。

P-1（SP-121）の出土遺物　326 は土師器の杯で、完形品。口径が 13.0cm、器高が 3.05cm、底径が 8.2cm を測る。内面に黒斑か。327 は土師器の杯で口縁の 1/2。復元口径が 12.1cm、器高が 2.35cm、復元底径が 8.2cm を測る。内外面が赤彩される。328 は土師器の杯で底部のみである。復元底径が 13.0cm を測る。329 は土師器の皿で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 14.2cm、器高が 1.7cm、復元底径が 9.4cm を測る。内外面に赤彩がなされる。330 は須恵器の蓋である。天井はやや高く、口唇部の屈曲が少し視られる。

P-2（SP-122）の出土遺物　331 は土師器の皿である。焼成は良好。内外面は赤彩される。
P-4（SP-220）の出土遺物　373 は土師器の杯で、底部の 1/6 が残る。374 は土師器の高台付椀で、底部の 1/4 残る。復元高台径が 6.3cm を測る。高台は底部屈曲の一番端に接合される。377 は須恵器の椀で、口縁の 1/5 が残る。薄手のもので、復元口径が 12.05cm を測る。375 土師器の高杯で、杯部の底部と脚の付け根部分である。杯部はやや丸い底を持つものである。376 は土師器の小型甕で、口径の 1/7 が残る。想定口径は小さい。内外面に煤が付着する。

・SB-10054

［遺構状況］　この遺構は 141-R・S-6・7・8 グリッドで検出した遺構である。4 間× 4 間の総柱の建物と想定している。ただ、ピットや他の遺構との切り合い関係が激しいため、確実のこの想定でよいか確信が持てなかったためここで図の掲載は控えた。想定した柱総数は 24 本で P-13 に当たる柱跡を確認できていない。
［出土遺物］　815 は土師器の甕で、この遺構の P-1 から出土した。復元はできなったが、口縁部から胴部上位まである。口縁内側から外器面にかけて煤が付着している。(第 164 図)



1層　暗褐7.5YR 黄橙10Yr8/5の焼土ブロック(3～5cm大)
4層　黒褐7.5YR3/2 しまる　2.5YR6/8 焼土粒をわずかに含む
5層　黒褐7.5YR3/1 ややしまる 褐色7.5YR4/6地山ブロック(2.5cm大)を多く含む
6層　黒褐7.5YR3/2 硬くしまる　2.5YR5/8焼土を含む
7層　黒褐7.5YR3/1 ややしまる　2.5YR5/8焼土粒(1cm大)を少量含む
8層 暗赤褐5YR5/8　硬くしまる　2.5YR5/8焼土粒・炭化物粒(1cm大)を多く含む

カマド部分
①層 黒褐7.5YR3/2　しまりある　焼土粒(赤色)をわずかに含む
②層 黒褐7.5YR3/2　ややしまりある　焼粘土粒わずかに含む
③層 黒褐.5YR3/1　しまりなくふかふか　明褐地山ブロック(2～3cm大)を多く含む

第 22 図　Ⅰ区　竪穴建物と溝状遺構実測図

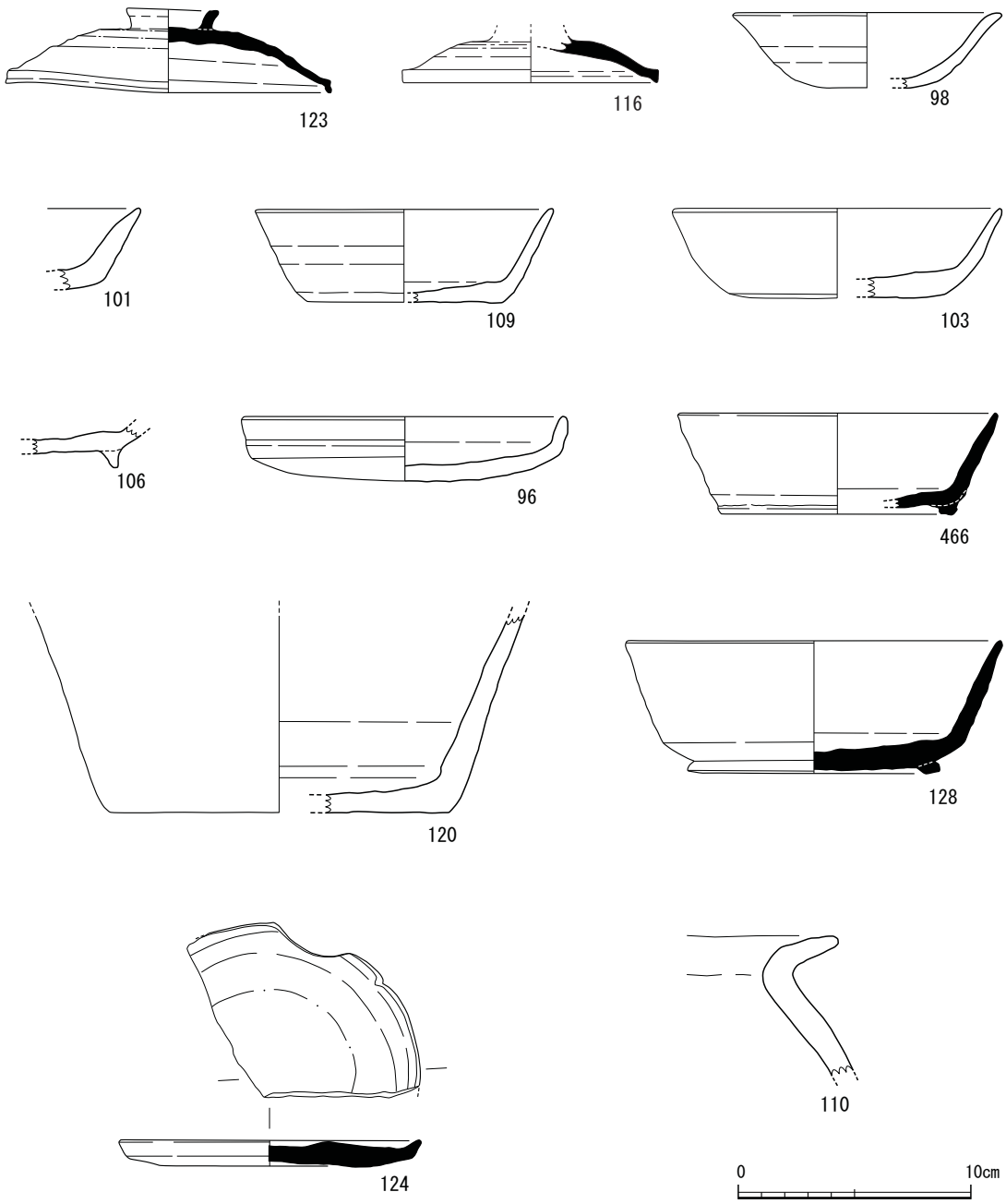
（3）　竪穴建物

・SI-050

［遺構状況］この遺構は、141-I-1・2 グリッドで確認した遺構で、複数の竪穴建物が切り合う中の一つである。確認した状況では SI-050 は SI-051 を切っている。他に SI-090 も切られているようであるが、想定が困難なほど複雑である。東側と南側部分の一部の掘り込みを確認しただけで、全体の形状及び規模については不明である。確認できた壁の掘り込みから、北から 30 度ほど西に傾いた状況にあると考える。

［出土遺物］

116 は須恵器の杯蓋のようであるが、器台の可能性もある。天井部はやや上がり、口縁部がわずかに屈曲する。復元口径が 10.5cm を測る。123 は須恵器の蓋で、やや高めの輪状つまみを持つ完形品である。口径が 14cm、器高が 3.6cm を測る。輪状つまみの径は 4.0cm である。天井はやや深く、口縁部には短いながら明瞭な屈曲を持つ。外面に焼むらがある。124 は本来須恵器の蓋である。蓋としてはつまみを持たず

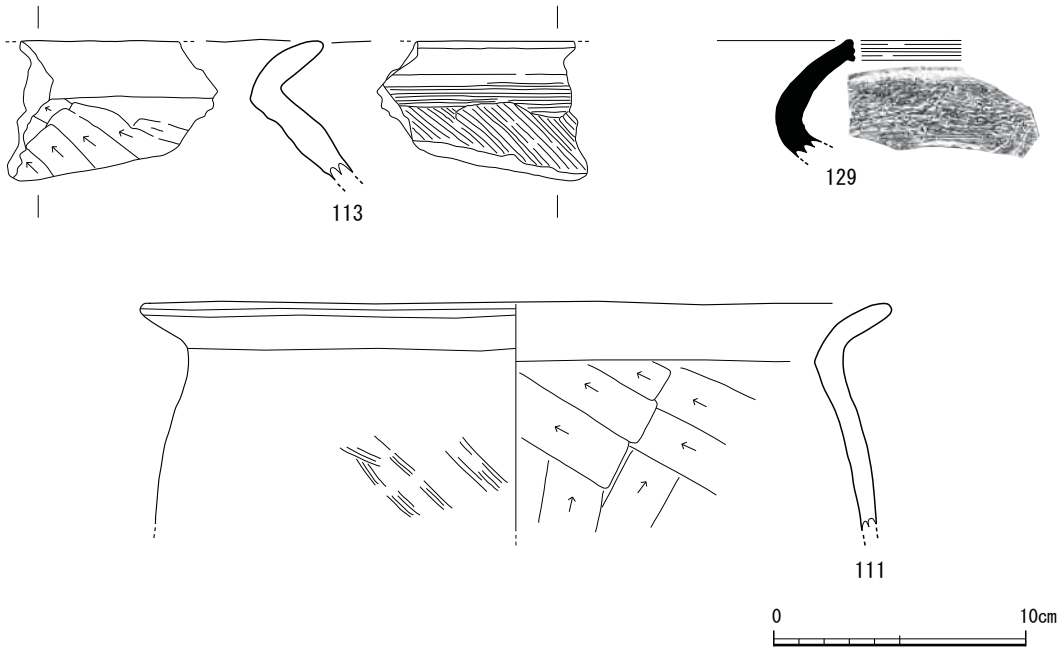


第 23 図　Ｉ区　SI050 出土遺物実測図

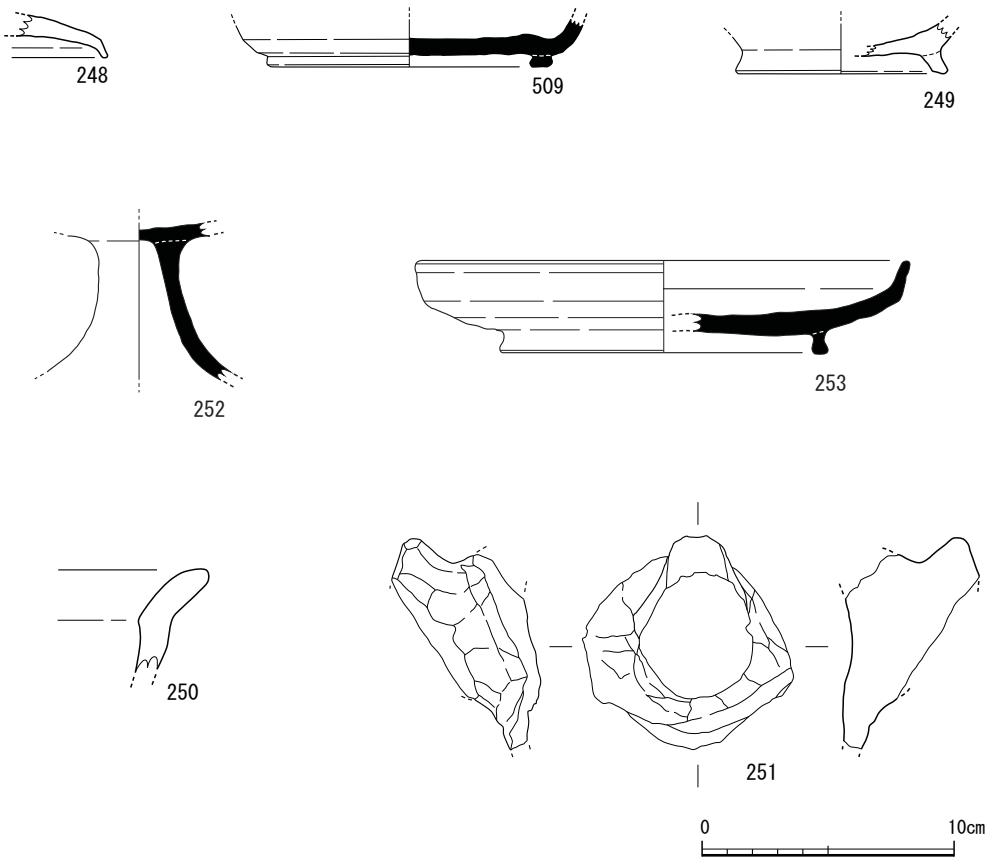
に天井はほとんど口縁からあがらず扁平なものである。口縁部だけ弱く屈曲する。内器面の中央部はよく摩耗して研磨したようになっていることから墨痕はほとんどみられないが､転用硯として使用されたと考える。復元口径が 13.0cm、器高が 1.1cm を測る。

128 は須恵器の高台付杯である。復元口径が 16.2cm、器高が 5.7cm、復元底径が 10.8cm を測る。高台はヘラ切り離しされたままの底部面の、杯部の屈曲より内側のところに低く貼り付けられている。466 は須恵器の高台付杯である。復元口径が 13.8cm、器高が 4.3cm、復元底径が 10.3cm を測る。底部から体部への屈曲は強く直線的に伸びる。高台はその屈曲部に低く接合され、成形が雑である。

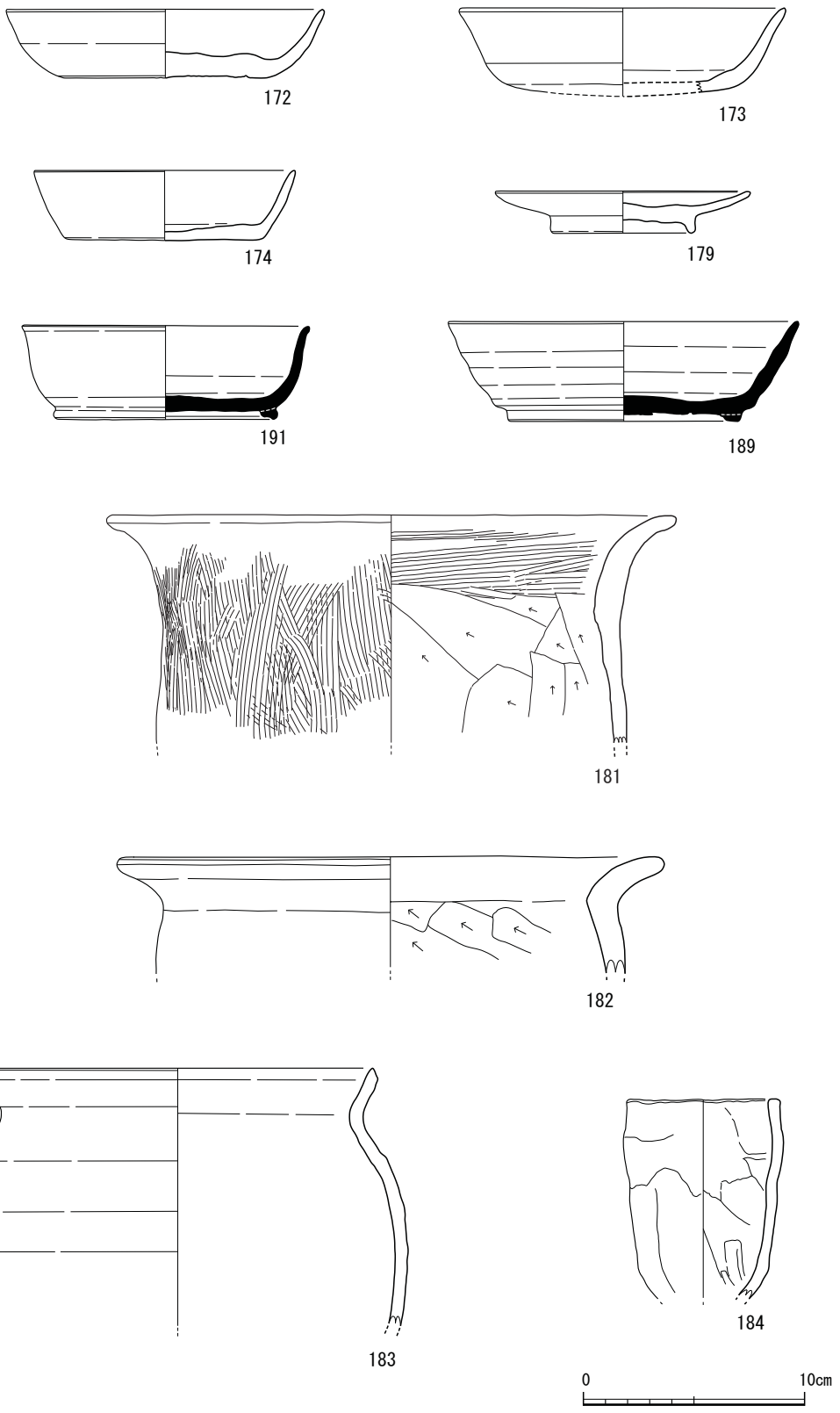
96 は土師器の杯である。全体の 3/4 が残る。口径が 14.0cm、器高が 2.7cm、底径が 13.2cm を測る。全面赤彩で外底面はヘラケズリで内器面はミガキ後ナデである。やや古手のもので須恵器の杯蓋を模倣したものであろう。98 は土師器の杯であり、全体の 1/5 が残る。口径が 11.5cm、器高が 3.2cm、底径が 6.2cm



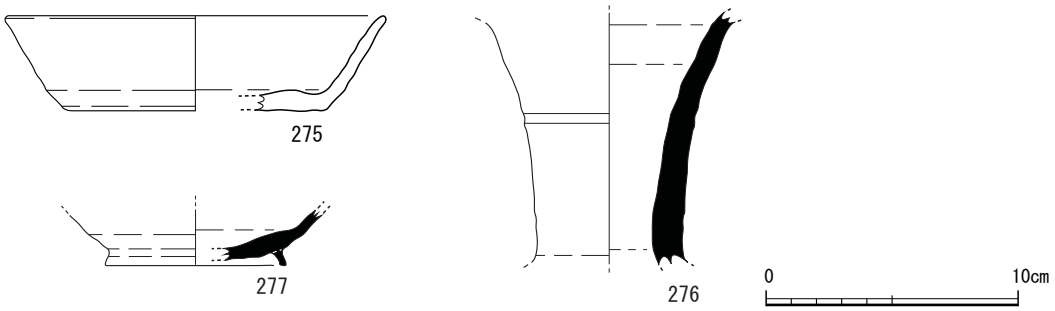
第 24 図　Ⅰ区　SI050 出土遺物実測図



第 25 図　Ⅰ区　SI063 出土遺物実測図



第 26 図 Ｉ区　SI051 出土遺物実測図



第 27 図　Ⅰ区　SI068 出土遺物実測図

を測り、やや口径に比して底径が半分ほどとかなり急速に開く印象がある。101 は土師器の杯であるが、口縁の 1/8 が残るのみで復元はできなかった。器高のみ 3.15cm を測る。やや古手のもので全面彩色される。103 は土師器の杯で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 14.2cm、器高が 3.85cm、復元底径が 9.2cm を測る。やや底部が厚く一つの特徴を示す。106 は土師器の高台付杯で残存部が少ないため、復元できなかった。貼り付け高台である。109 は土師器の杯で、103 に似るが底部は薄く、体部への立ち上がりが明瞭である。復元口径が 12.8cm、器高が 4.0cm、復元底径が 8.4cm を測る。

120 は土師器の鉢で、内部に赤彩の痕跡があり全面に赤彩がなされていたと考える。復元底径は 14.6cm を測る。

110 は土師器の甕の破片である。外器面及び内器面の頸部付近まで明赤褐 2.5YR5/8 の赤色顔料が塗布されてしる。胴部はかなり張り出す。111 は土師器の甕である。口縁部はくの字にやや強く屈曲する。胴部の張りはあまりなく頸部から底部へ緩やかに伸びる。113 も土師器の甕でかなり胴張りするものである。

129 は須恵器の甕の口縁部分である。頸部から強く外反し、外器面に格子目文のタタキの痕跡が残る。口唇部は二条の沈線が巡る。

・SI-051

［遺構状況］　141-I-1･2 グリッドで検出。この遺構も複数の竪穴建物が切り合う遺構群の一つである。SI-090 を切っている。北側にカマドの痕跡として粘土塊や焼土が見られる。また浅い掘り込みがある。別の土坑や溝状遺構の影響もあって明確な形状はつかめないが、南北にやや長い長方形を呈すると考えた。規模は南北方向を長軸として 5 m、東西方向がややひずみと明確な遺構の範囲が掴めないが、4.5 mほどととらえる。

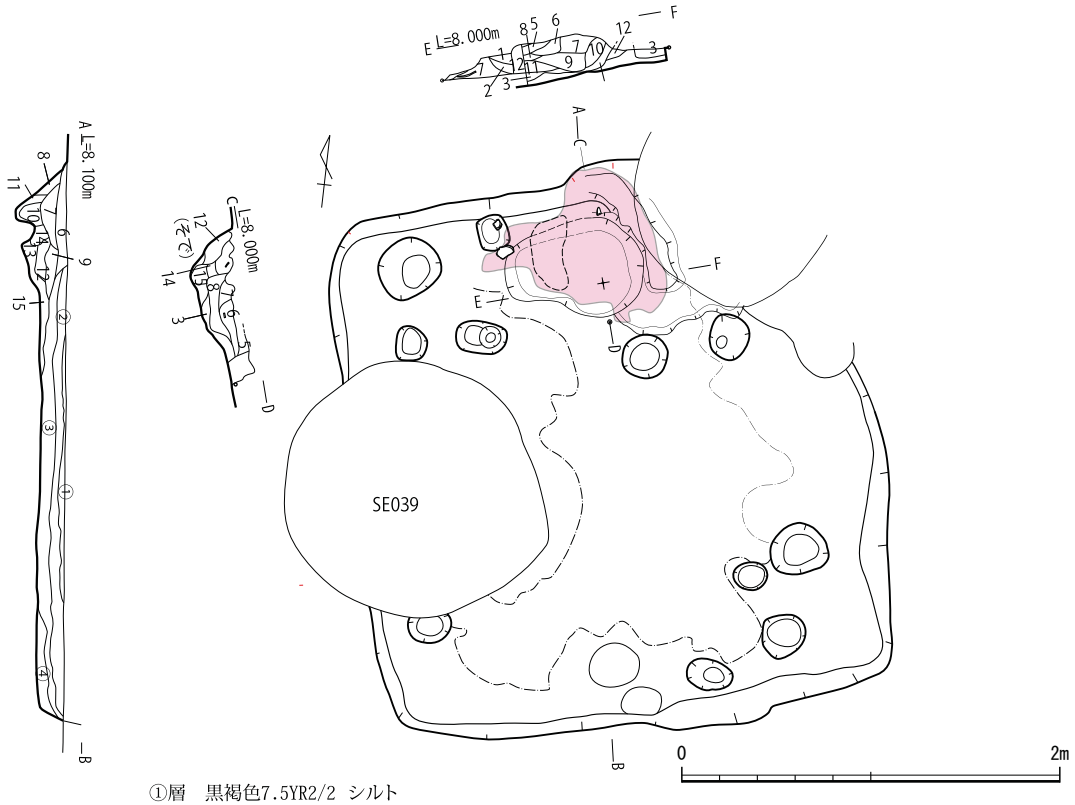
［出土遺物］　出土遺物は多々あるが、切り合い関係から十分遺構の状況は捉えられなかった。

白磁碗の口縁部が 1 点出土している。分類は不明である。

172・173・174 は土師器の杯である。172 は口縁の 3/5 が残る。復元口径が 14.4cm、器高が 3.1cm、底径が 9.2cm を測る。底面のヘラ調整は雑である。173 は口縁の 1/4 が残る。復元口径が 14.8cm、器高が 3.8cm、復元底径が 10.6cm を測る。174 は口縁の 1/5 残る。復元口径が 11.8cm、器高が 3.2cm、復元底径が 8.8cm を測る。一部口唇部が炭化物で黒くなっている。

179 は土師器の高台付皿もしくは托である。口縁の 3/5 が残る。復元口径が 11.6cm、器高が 1.9cm、底径が 6.5cm を測る。高台は貼り付けで、高台内に小さな植物葉の圧痕がある。

189・191 は須恵器の高台付杯である。189 は口縁の 2/5 が残る。復元口径が 15.8cm、器高が 4.5cm、底径が 10.4cm を測る。外底面にはうず巻状にヘラ切り離し痕が残り調整を行っていない。191 は口縁の



①層　黒褐色7.5YR2/2 シルト
②層　黒褐色7.5YR2/2 シルト　地山ブロックと黒色ブロックを少量含み、灰褐色ブロックを多く含む
③層　黒褐色7.5YR2/2 シルト　地山ブロックを多く含み、灰褐色粘土ブロックを含む
④層　黒褐色7.5YR2/1 シルト　ややしまりあり　土器片含む

2・3層　SI052住居土 層と同一
6層　黒色褐 7.5YR3/2 シルト わ ずかに焼土を含む
7層　黒褐色 7.5YR3/2 シルト しまりある
8層　黒褐色 7.5YR3/1 シルト 5ｃｍ大の焼土魂を多く含む。壁の地山が、熱変した可能性大
9層　黒褐色 7.5YR3/1 シルト しまり強い　焼土粒(2～3cm 大)を多く含む
10層　黒褐色7.5YR3/2 シルト しまりない　1cm～大の焼土粒をごくわずかに含む
11層　黒褐色7.5YR3/2 シルト しまり強い
12層　暗褐色7.5YR3/3 シルト しまり強い　1cm大焼土粒 とニガブロックを少量含む
13層　黒褐色7.5YR2/2 シルト しまりある　7.5YR2/1異 色ブロック大　少量含む
14層　暗褐色7.5YR3/3 シルト しまり非常に強い　4～5cm 大の焼土ブロックを多く含む
15層　明褐色7/5YR5/6 シルト 砂質土　しまりない　地山

第 28 図　　Ｉ区　SI052 実測図

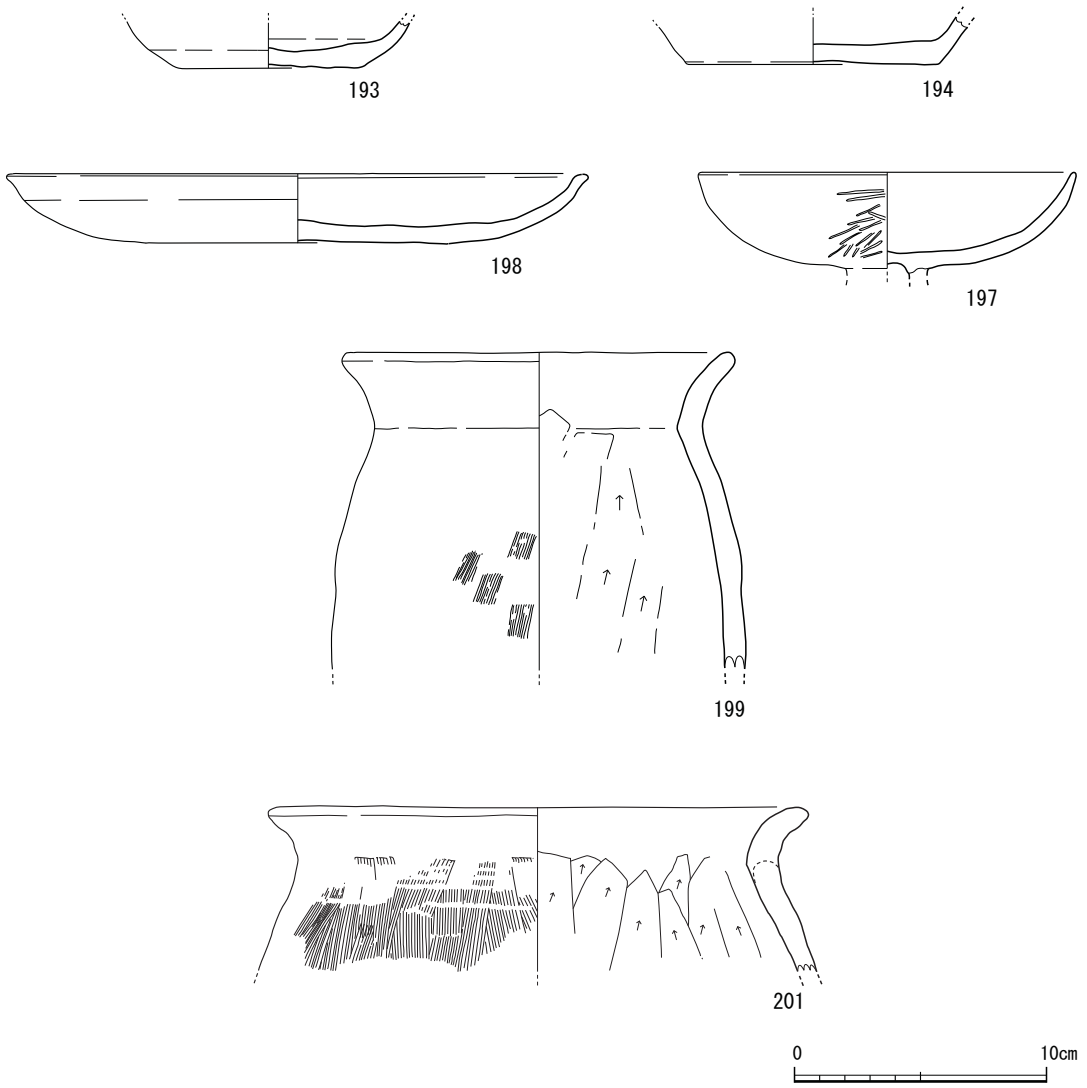
1/8 が残る。復元口径が 13.0cm、器高が 4.2cm、復元底径が 10.1cm を測る。内器面体部と底部の境目付近に自然釉が残っている。外底面には黒いガラス状の物質（最大径約 7mm）が付着する。

181・182 は土師器の甕である。181 は上層から出土し、口縁から胴部までの破片で口縁の 1/4 が残る。復元口径が 25.3cm を測る。外器面に煤が付着する。182 は下層からの出土で、口縁部が強く外反するものである。胴部はほとんど張り出さず緩やかに下部へ至る。復元口径は 24.8cm を測る。

183 は土師器の短頸壺で、口縁の 1/10 が残り、口縁から胴部の中位まで残る。復元口径が 17.3cm を測る。184 は製塩土器で口縁の 1/4 ほどが残る。作りは手捏によるもので、口縁部から胴部下位まで残る。内器面には布痕などは見られなかった。外器面は火を受けたためか粗くなっている。

・SI-052

［遺構状況］　この遺構は、141-J-1・2 ～ 141-J-3・4G ～ 141-K-1・2 ～ 141-K-3・4 グリッドで検出できた。SE-060 および SE-037（現代井戸）に一部切られるカマド付きの竪穴建物である。他に切り合う遺構がないので、ほぼ遺構の全体像がつかめる。南北長が 5.0 m、東西長が 4.5 mほどとやや南北に長い。確認面から



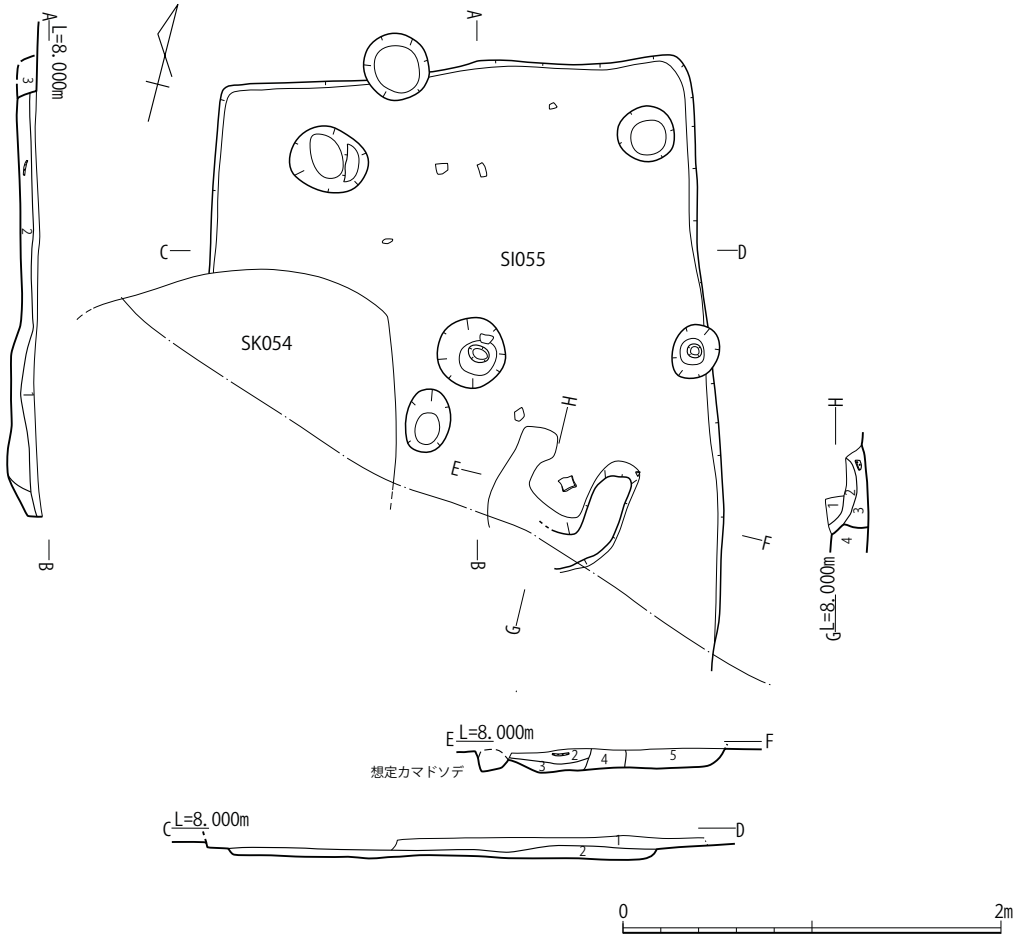
第 29 図　Ⅰ区　SI052 遺物出土実測図

床面までの深さは 20cm ほどを測る。柱穴は確認できたが、主柱穴となるものは確認できなかった。床面には硬化面が検出できた。カマドの中心部と南側辺の中心部を結んだ線をこの建物主軸とすると N-12° -W にずれている。

カマドは破壊されているため当時の形状は不明であるが、痕跡として北側に位置している。カマドの袖部の一部が SE-060 に切られながらも伸びた形状まで確認できた。火床部は焼土や粘土塊を除去したあとで確認できた。南北が 60cm ほど、東西が 1 mほどの長方形状に確認できた。西側は破壊されたときに削られた可能性がある。

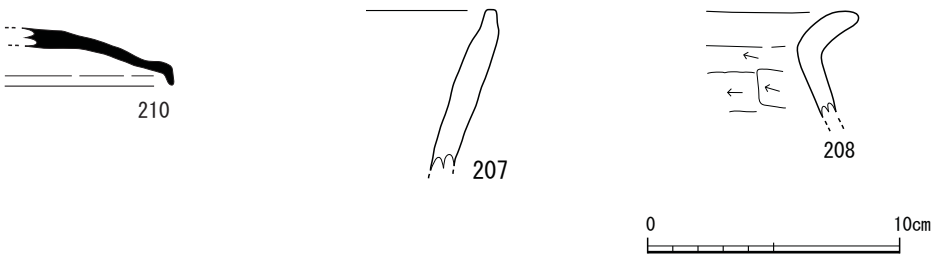
［出土遺物］　出土遺物は大きさの割に少なく、6 点のみを図化した。

193は土師器の杯で、底部付近のみの破片である。復元底径が7.6cmを測る。底部と体部の屈曲がきつくなく、緩やかに延びる。194 は土師器の杯で、体部下位から底部の破片である。復元底径は 10.0cm 内外面とも赤彩される。一部煤付着。197 は土師器の高杯である。杯部の内外器面にヘラミガキが施される。外面のみ赤彩される。198 は土師器の大皿である。復元口径が 23.0cm、器高が 2.75cm を測る。外底面は手持ちヘラ削り後ナデが施される。199 は土師器の甕である。口縁から胴部まで残る。復元口径が 15.5cm を測る。201 は土師器の甕である。復元口径は 20.7cm を測る。内外器面に煤が付着。

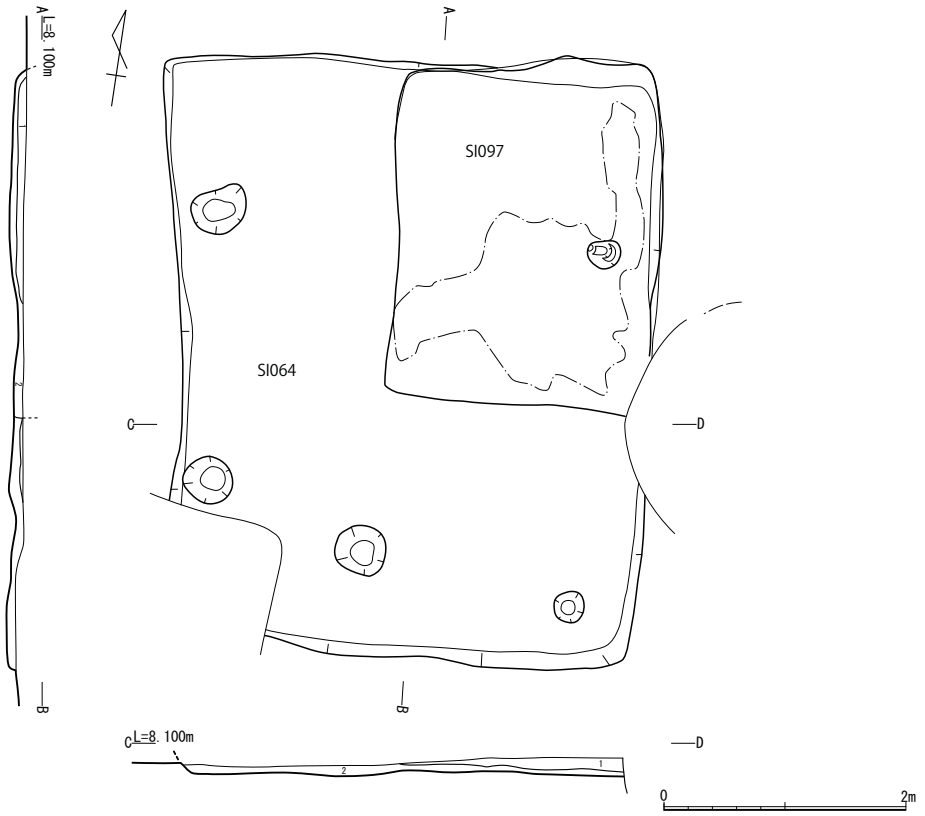


1層	黒褐	7.5ＹＲ3/2	シルト	地山ブロック(2㎝大）を少量含む
2層	黒褐	7.5ＹＲ3/2	シルト	地山ブロック(2～3㎝大）を多く含む 55SIにとっては地山だが別遺構の地山と考えられる
3層	浅黄橙	7.5ＹＲ8/4	しまる	粘質土　55SIのカマドか？
1層	黒褐	7.5ＹＲ3/2	シルト　しまる	焼土粒（5㎝大）を多く含む
2層	黒褐	7.5ＹＲ3/2	シルト　ややしまる	2.5ＹＲ5/8明赤褐色焼土ブロック（5㎝大）と土器を含む
3層	黒褐	7.5ＹＲ3/1	シルト　硬くしまる	地山ブロック（2㎝）と土器を含む
4層	黒褐	7.5ＹＲ3/1	シルト　しまりなし	7.5ＹＲ6/6橙色焼土ブロック（5㎝大）含むカマドのソデ部分
5層	黒褐	7.5ＹＲ3/1	シルト	地山ブロック（2～5㎝大）多く含むＳ-55最下層の埋土

第 30 図　Ｉ区　SI055 実測図

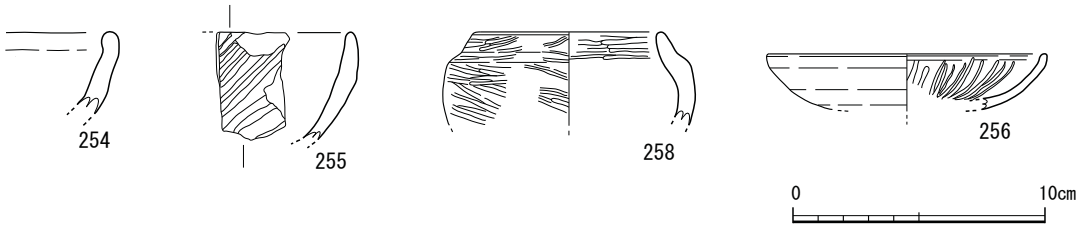


第 31 図　Ｉ区　SI055 出土遺物実測図



1層 黒褐 7.5Y R 3/1 シ ル ト　7.5 Y R 4/1 褐灰 色ニガブ ロックを 少量含む
土器小 片をわずかに 含む
2層 黒褐 7.5Y R 3/1 シ ル ト　7.5 Y R 5/6 明褐色地山ブロック（3～10 ㎝)を 多く 含む

第 32 図　Ⅰ区　SI064 実測図



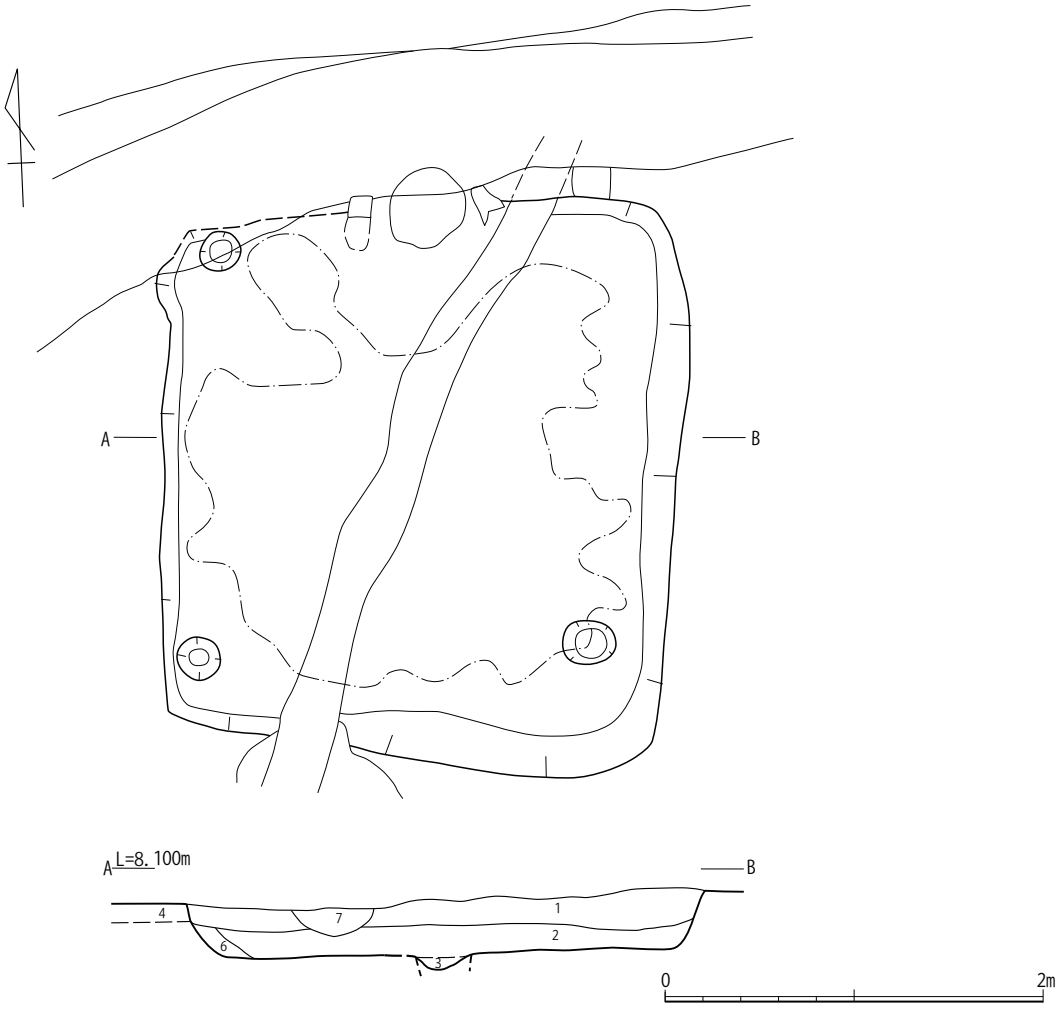
第 33 図　Ⅰ区　SI064 出土遺物実測図

他に平瓦が 1 点出土しているが、埋土上部の出土でこの遺構に伴うものか不明である。

・SI-055

［遺構状況］　140-J-20 ～ 141-J-1 グリッドで検出できた。調査区の壁際で確認された遺構で全体像までは不明である。長軸は北北東 - 南南西に傾く。確認できたのが痕跡に近い段階で掘り込みもわずかなってからであった。確認できた範囲では東西方向で 2.6 m、南北方向で 2.4 mまでを測る。この遺構のカマドは南側で確認しているが、方向的には建物の軸と異なるので、上層にあった建物のものかもしれない。確実にこの建物の柱は不明である。また硬化面なども掴めていない。

［出土遺物］　遺構の確認状況に関係するがこの遺構に伴う遺物は非常に少なく、図化できたのも以下の 3 点である。



1層 暗褐7.5YR3/3 シルト　5㎜～1c ｍの 明黄褐色ブロック混。黒色(粒炭混土)
　　多量に土器を含む。 0.5～1cmの 礫少量混
2層 黒褐7.5YR3/2 シルト　土師器礫を含む 1に比べると土器と細片(中片)が多い
3層 黒褐7.5YR2/2 シルト　明黄褐色点混
4層 暗褐7.5YR3/4 シルト　軽石　明黄褐ブロック含む
6層 2より明黄褐色の混が多く褐色10YR3/3シルト
7層 暗褐10YR3/4　黄褐色シルトブロック混

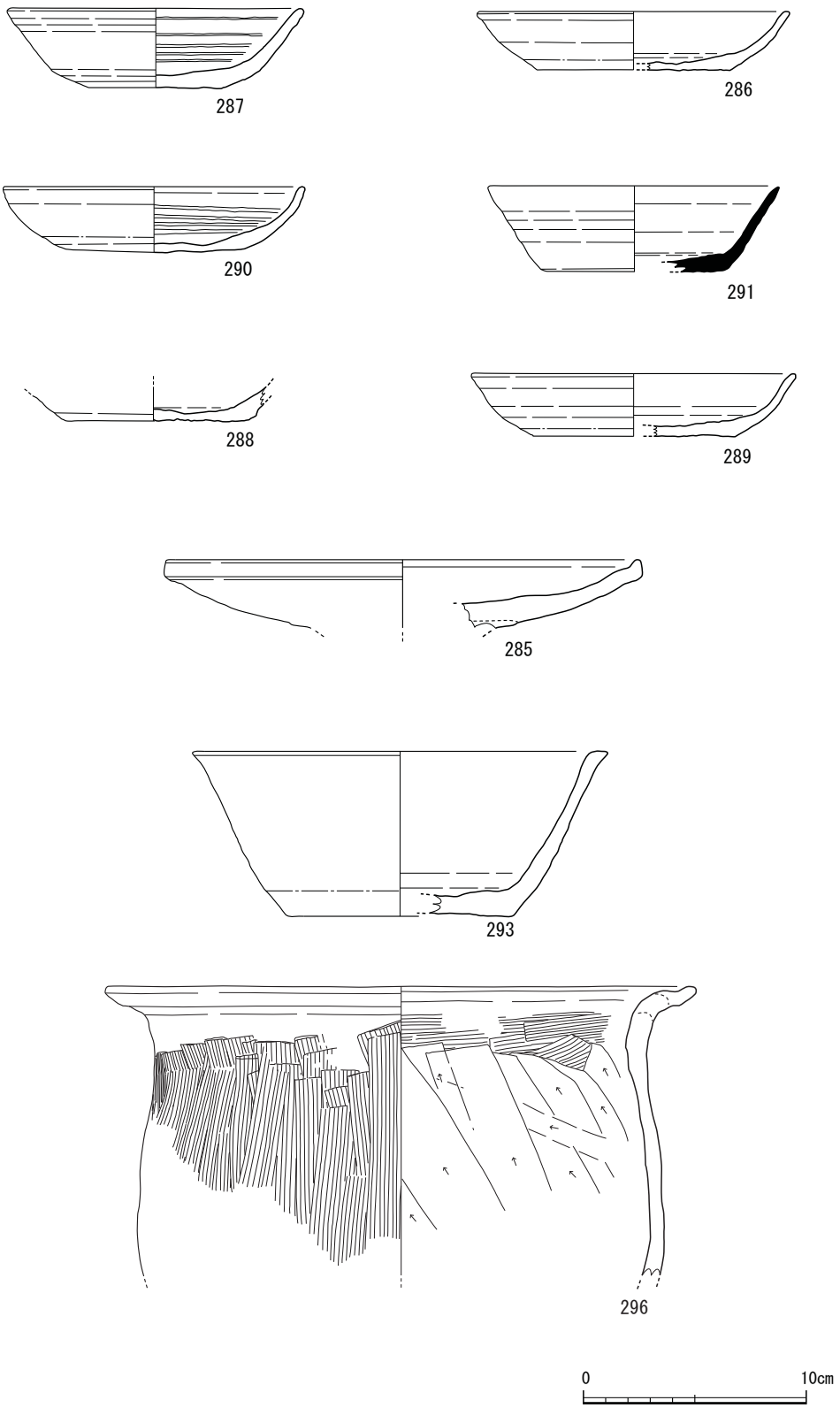
第 34 図　Ｉ区　SI086 実測図

207 は土師器の鉢の口縁部であろうか。直線的な体部と口唇部内部に明瞭な段を持つのが特徴である。調整はナデによる。208 は土師器の甕の口縁部である。かなり胴の張りだすもので口縁部自体は強くくの字に屈曲する。210 は須恵器の杯蓋である。天井部がやや高く口縁部は甘く屈折するものである。内器面がやや強めに摩耗しているので転用硯の可能性もある。

・SI-063

［遺構状況］　140-I-20 から 141-I-1 グリッドで検出。調査区の西側端付近で検出した。多くの竪穴建物が集中する部分の一角にあるもので、この遺構自体わずかに遺構の東壁付近から 1 m ほどが確認できたのみである。SD-129 に切られているため､南側辺は確認できなかった。確認面から深さ 30cm ほどで床面である。この遺構のカマドは東側辺のやや北よりに位置し、カマド本体として粘土によるカマド構造がわずかに確認できた。火床は本来の長さが不明ながら、幅が 50cm ほどと確認した。

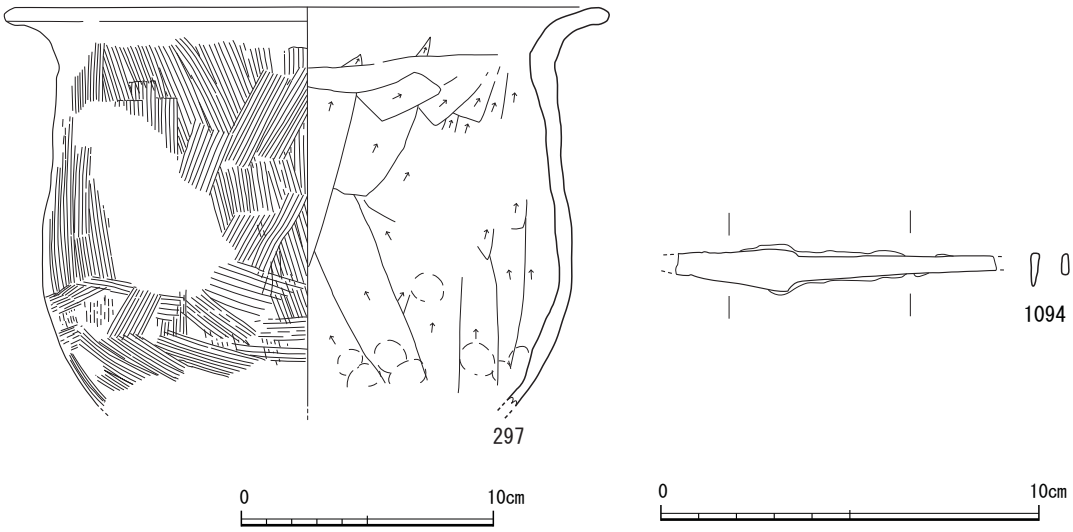
主軸は、カマド位置を軸とすると真東からやや南よりにずれ、角度的には E-20° -S である。



第 35 図　Ⅰ区　SI086 出土遺物実測図

［出土遺物］　248・249・250・251 は土師器である。

248 は杯蓋で上・中層の出土である。外器面に黒斑が、内器面に赤彩が施される。249 は高台付椀で下層の出土である。復元底径が 8.2cm を測る。内外面とも赤彩を施される。250 は鍋で上･中層の出土である。251 は甑で、上層の出土である。



第 36 図　Ｉ区　SI086 出土遺物実測図

252・253・509 は須恵器である。252 は高杯で下層の出土である。色調は赤焼けのためかにぶい赤褐色を呈する。253 は、高台付皿で中層の出土である。復元口径が 19.6cm、器高が 3.7cm、復元底径が 13.0cm を測る。底部はヘラ切り離し後ヘラケズリを施す。この土器も赤焼けのためか暗赤灰色を呈する。509 は高台付杯で、上層の出土である。復元底径が 11.0cm を測る。底部がヘラ切り離し後ナデを施す。内器面が研磨されているので、転用硯の可能性が強い。

この他灰釉陶器が 1 点出土している。

・SI-064

［遺構状況］　141-J-1 ～ K-1 グリッドで検出。平面形は一部切り合いにより不明確ではあるが、隅丸方形である。長軸で 4.6 m、短軸で 3.6 mを測る。確認できたのがかなり掘り下げた状態であったため、壁の深さはわずかに 10cm 程度を測る。カマド位置は SI-097 に切られた北側にあったのか不明である。

近代井戸や SI-097、SK-098、SE-161 に切られる。また、SI-055 の東側に近接する。建物は軸がやや北北西 - 南南東に振れており、正確な南北軸ではない。土層は２層に分離はできた。

［出土遺物］　遺構の検出状況によるが、出土遺物は少なく、図化したのは 4 点のみである。

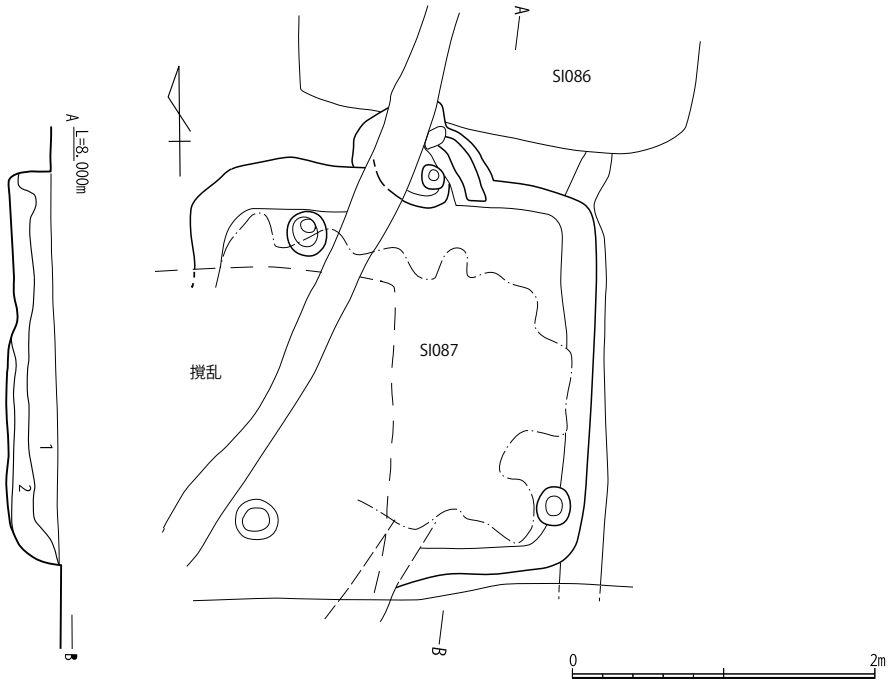
254 は土師器の杯で都城系土器の形態的特徴をもつものである。横方向にミガキと内・外面に赤彩が施される。255 は土師器の杯で在地系の土器の特徴を持ち器表面のミガキと暗文がある。256 は土師器の高杯と考えたが、やや不明瞭である。器表面にナデとミガキが施される。外面には赤彩、内面に暗紋が施される。258 は土師器の合子と考えられるものである。復元口径が 7.6cm を測る。器表面は丁寧なミガキ調整が施される。

・SI-068

［遺構状況］　141-I-1･2 ～ 141-J-1･2 グリッドで検出。竪穴建物群の集中域にある。SI-051 に切られる。正確な形状はつかめない。また、カマドなどの屋内施設も確認できなかった。ただ、床面の状況と硬化面が若干見られたので竪穴建物とした。

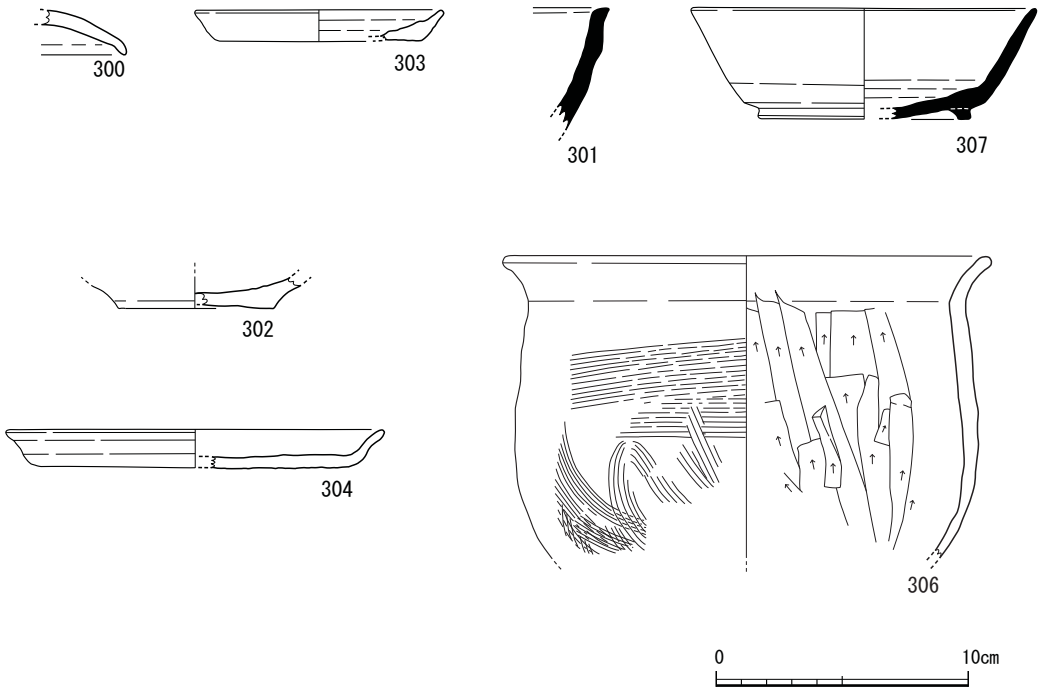
［出土遺物］　出土遺物はあったものの図化するものは少なかった。ここでは３点を抽出する。

275 は土師器の杯で、復元口径 15.1cm、器高が 3.8cm、復元底径が 10.6cm を測る。底部と体部の境が明瞭である。内外に赤彩が施される。276 は須恵器の長頸壺の頸部である。焼成は良好である。277 は、

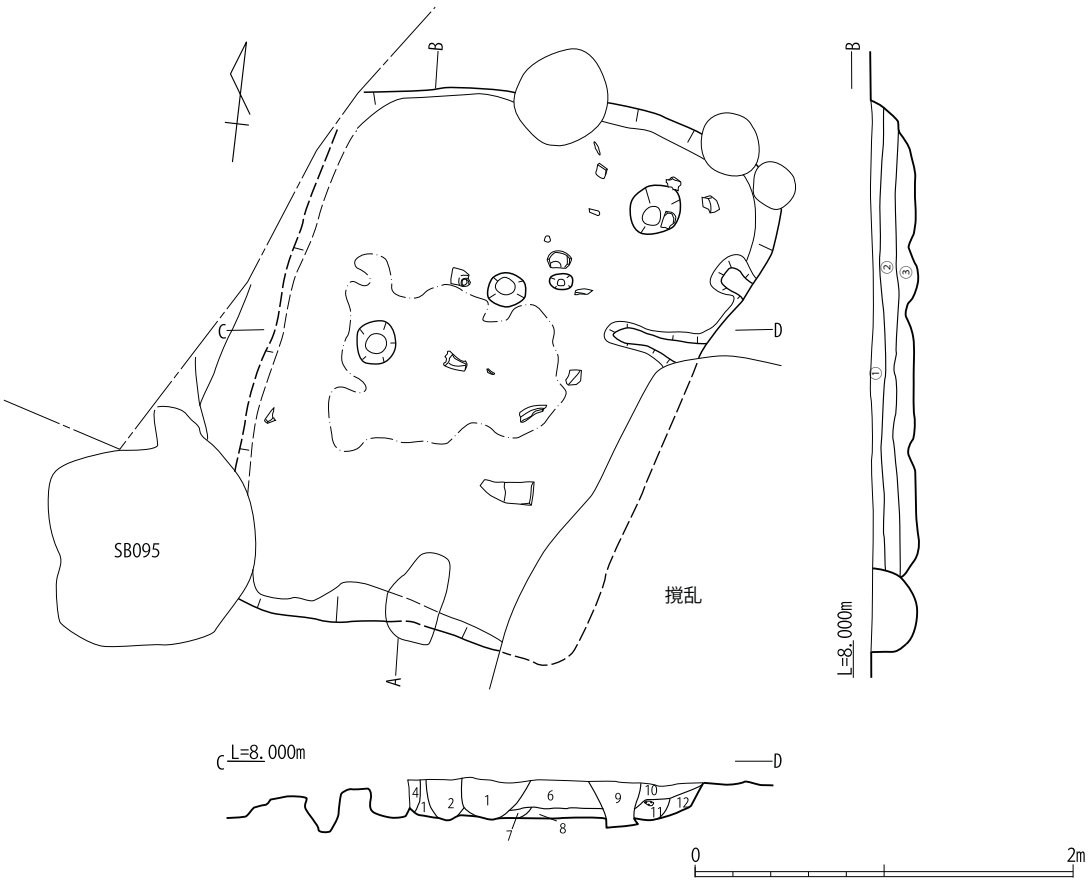


1層 暗褐10YR3/3　シルト　赤色混　黄褐ブロック混
2層 黒褐10YR3/2　シルト　転石混(ブロック)黄褐色5㎜～1ｃｍのブロック

第 37 図　Ⅰ区　SI087 実測図



第 38 図　Ⅰ区　SI087 出土遺物実測図



①層	褐	7.5YR4/3		しまり悪い	砂質黄褐色粒子含む
②層	暗褐	7.5YR4/2		しまり悪い	砂質黄褐色ブロック(5mm～2cm) ・赤色粒子含む
③層	にぶい黄褐	10YR4/2	シルト	しまりやや悪い	黄褐色ブロック(3mm～2cm) ・白色粒子を含む 3層上面に灰黄褐色ブロック(1～4cm･硬) を多く含む のでここを床面かと考えている
1層	暗褐	7.5YR3/4		しまりやや悪い	白色粒子(1～3mm) 赤色粒子 (1～2mm) を多く含む
2層	暗褐	7.5YR3/3		しまりやや悪い	黄褐色ブロック(1～3cm)含む
3層	暗褐	7.5YR3/3		しまる	白色粒子･黄褐色粒子を多く含む少量の炭を含む
5層	黒褐	7.5YR3/2		しまりやや良い	硬くブロック化したような土
6層	暗褐	10YR3/3		しまりやや悪い	全体的に黄褐色混じりあり土器(土師)片を含む
7層	暗褐	10YR3/3		しまりやや悪い	赤色粒子･白色粒子を少量含む
8層	暗褐	10YR3/3		しまりやや悪い	全体に黄褐色の混じり
9層	にぶい黄褐	10YR4/3		しまりやや悪い	灰褐色ブロック(5mm～2cm) 黄褐色粒子･赤色粒子を含む
10層	にぶい黄褐	10YR3/4		しまり悪い	
11層	灰黄褐	10YR4/2		しまり悪い	白色粒子･黄褐色粒子･炭を少量含む
12層	暗褐	10YR3/4		しまりやや悪い	黄褐色ブロック(3～5cm) を多く含む白色粒子･赤色粒子を多く含む

第 39 図　Ｉ区　SI088 実測図

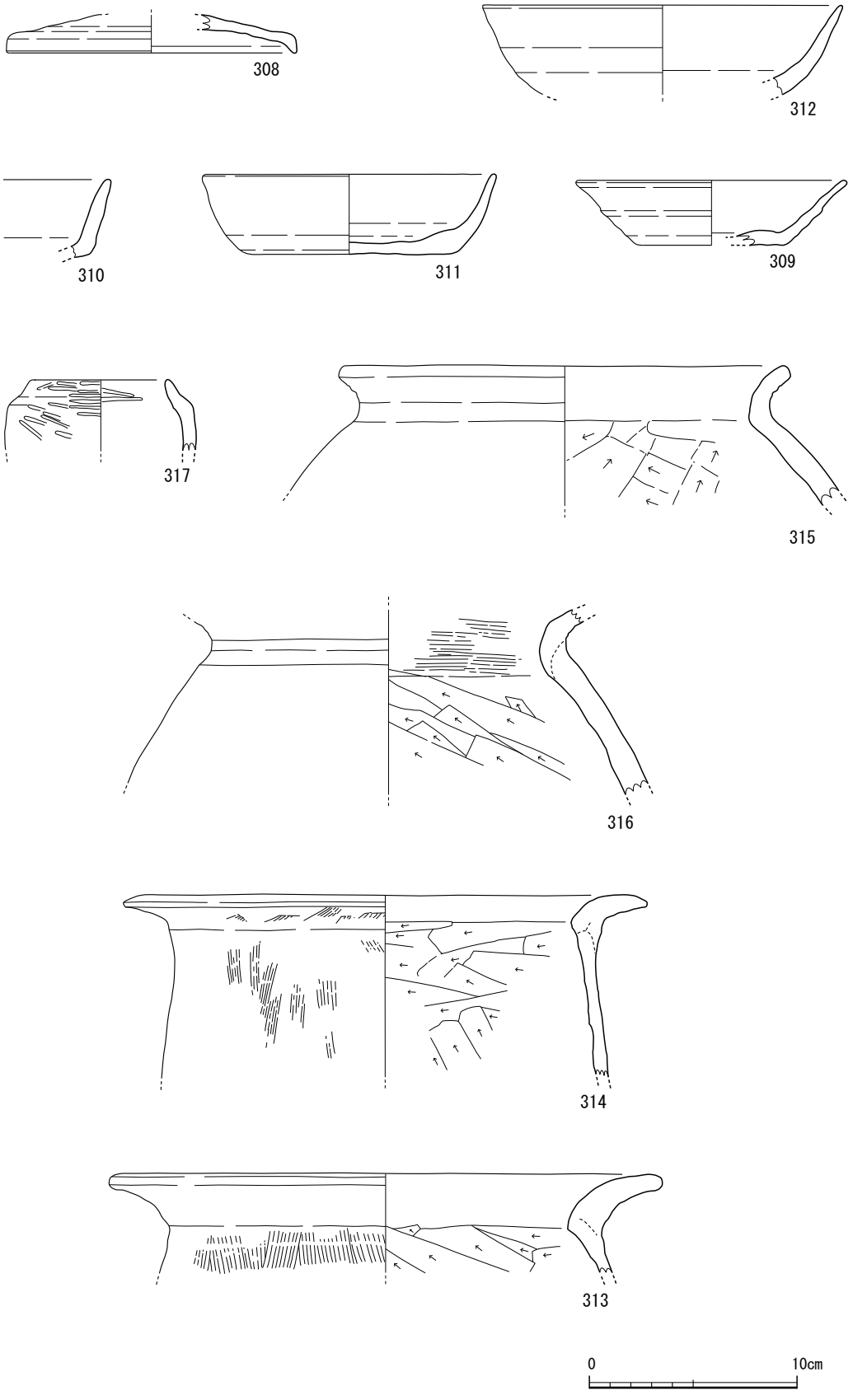
須恵器の高台付杯と考える。復元底径 7.2cm を測る。高台はかなり薄い。

・SI-086

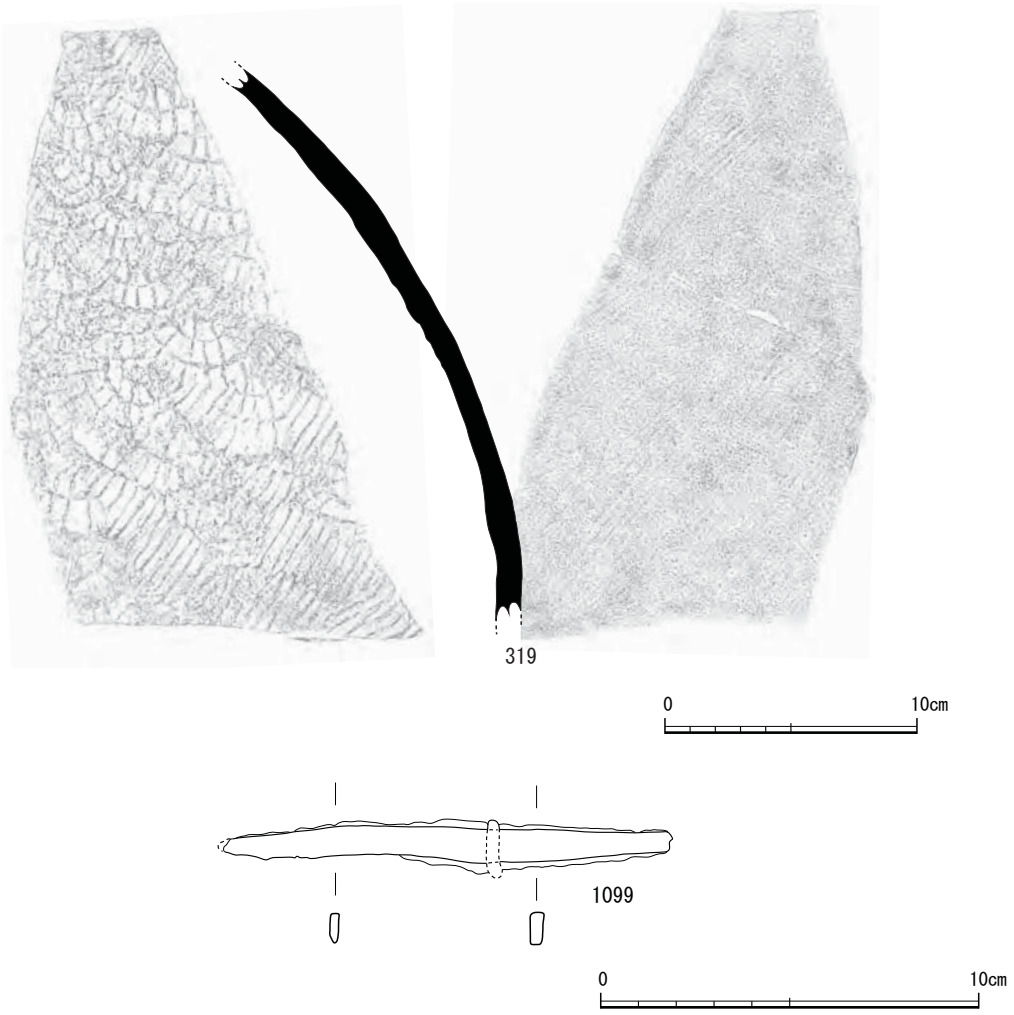
［遺構状況］　この遺構は、141-J-5･6 ～ 141-K-5･6 で検出したもので、カマド付きの方形の竪穴建物である。北側が溝状遺構により切られているため正確な平面形は不明であるが、残存部から隅丸方形であると考える。長軸方向は北側の破壊により正確な長さは不明であるが、3.0 m程度であろう。短軸では 2.3 mを測る。

カマドは建物のほぼ北側に位置するが、カマド中心に主軸として考えた場合、真北方向よりやや東側に振れる。カマド自体は溝状遺構やピットにより破壊され、焼土と粘土がかなり散布された状態であった。辛うじてカマドの両袖部分が残っていた。

［出土遺物］　286 は土師器の杯で、復元口径が 13.8cm、器高が 2.6cm、底径が 8.6cm を測る。外底部はヘラ切り離しのち回転ヘラケズリである。内外面に赤彩される。287 は土師器の杯で復元口径が 13.3cm、



第 40 図　Ⅰ区　SI088 出土遺物実測図



第 41 図　Ｉ区　SI088 出土遺物実測図

器高が 3.5cm、復元底径が 6.0cm を測る。内外面にヘラミガキによる暗文が施される。288 は土師器の杯か。内外面に赤彩の痕跡がある。289 は土師器の杯で、復元口径が 14.5cm、器高 2.8cm、底径が 9cm を測る。290 は土師器の杯で、復元口径が 13.4cm、器高が 2.95cm、底径が 7.88cm を測る。内外器面に回転による暗文が施される。291 は須恵器の杯で復元口径が 12.9cm、器高が 3.8cm、復元底径が 7.5cm を測る。293 は土師器の鉢である。復元口径が 18.6cm、器高が 7.4cm、復元底径は 10.1cm を測る。内外器面に赤採が施される。296 は土師器の甕で口縁部から胴部までの破片である。復元口径が 26.3cm を測る。口縁は小さく、胴部はあまり張り出さずに直線的に底部の方に至る。煤が付着。297 も土師器の甕で形態的に 296 に近い。やはり胴があまり張り出さないものである。復元口径は 23.0cm を測る。煤が付着。

1094 は鉄器で、刀子の中子と刃の部分である。残存長は 8.5cm を測る。このうち中子部分が 5cm ほどである。刃の部分は切っ先に向けて急速に小さくなる。

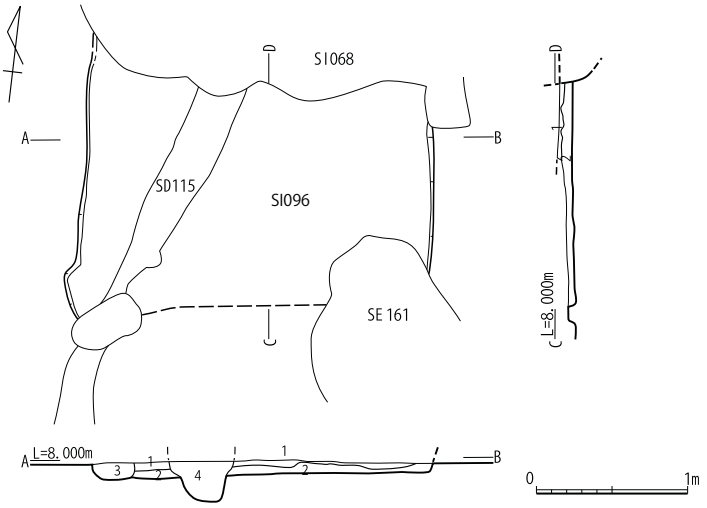
・SI-087

［遺構状況］　141-K-5･6 グリッドで検出。SI-086 に近接し、この遺構のカマド部分は北側に作られ、SI-086 の南側辺の一部にかかっている。また､南西側の 1/4 以上は近代以降の方形攪乱により破壊されている。この遺構の軸線はカマドを中心に据えてほぼ南北で、平面形は東西幅が 2.7 m、南北幅が 2.6 mを測る隅丸方形である。確認面からの床面までの深さは 10cm ほどを測る。

カマドは南北方向の溝状遺構で破壊されて焼土や粘土塊が残るのみで本来の形態は不明確である。
この遺構の主柱穴は不明確であるが、いくつかを図中に記載している。
［出土遺物］　300 は土師器の蓋で 1・2 層の出土である。内外器面とも赤彩される。302 は土師器の杯で 2 層の出土である。復元底径が 6.1cm を測る。底部は糸切り離しである。
301 は赤焼須恵器の鉢で 2 層の出土である。全体の形状は不明である。
303 は土師器の小皿で、全体の 1/3 が残る。復元口径が 9.85cm、器高が 1.22cm、復元底径が 7.9cm を測る。底部ヘラ切り離し後ナデ調整である。304 は土師器の皿である。全体の 1/2 で、復元口径が 14.5cm、器高が 1.5cm、底径が 12.15cm を測り、底部はヘラ切り離し後ナデ調整である。内外器面に赤彩が施される。
306 は土師器の甕で口縁から胴部まで 1/6 残る。復元口径が 18.8cm を測る。口縁はあまりそらず、胴の張りも少ない。307 は須恵器の高台付杯で全体の 1/2 残る。口径が 13.7cm、器高が 4.35cm、底径が 8.4cm を測る。高台の断面形状は低く方形である。
輸入陶磁器として白磁の大椀（Ⅰ -1 ウ類）が 1 点出土している。

・SI-088
［遺構状況］　この遺構は、141-I-2 グリッドで検出。カマドの痕跡もしっかり残っており遺構全体はすぐ確認できると考えたが、実際掘削を進めるとカマドの位置が辺の中心になく、調査区外に遺構が延びている可能性も考慮し遺構確認作業を進めたため、最終的に遺構全体をつかむまでに時間がかかった。結果的には長辺が 2.9m、短辺が 2.2 mの横に長い方形建物と想定した。カマドは東側壁に作られており、位置的には辺の中心ではなく南側にずれている。床面の中央部付近に硬化面が残る。柱穴は確認できなかった。土層は 3 層確認している。
［出土遺物］　308 は土師器の杯蓋である。全体の 1/6 が残る。復元口径が 14.0cm を測る。309 は土師器の杯で全体の 1/5 残り、復元口径が 6.9cm、器高が 3.6cm、復元底径が 6.8cm を測る。310 は土師器の杯で破片である。内外面に赤彩が施される。311 は土師器の杯で 1/4 残る。復元口径が 14.1cm、器高が 3.9cm、復元底径が 10.4cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデである。312 は土師器の杯の破片である。復元口径が 17.2cm で、やや大型のものである。313 は土師器の甕で口縁から頸部までで口縁の 1/3 残る。復元口径が 24.4cm を測る。314 は土師器の甕で、口縁から胴部まで残り、口縁の 1/6 が残る。復元口径が 22.0cm を測る。外器面には煤が付着。315 は土師器の甕である。胴部がかなり張り出すものである。外器面には赤彩が施される。316 は土師器の甕で、頸部から胴部までの 1/6 が残る。頸部から胴部は急速に広がる。外器面には赤彩が施される。317 は土師器の小壺である。内外面ともにヘラミガキが施される。口縁の 1/5 が残り、口径が 6.7cm を測り、内外器面にヘラミガキによる調整が施される。319 は須恵器の大甕片である。かなりの大型品と考える。内器面に変形車輪文の当て具が使用されている。外器面は細かい平行タタキである。
1099 は刀子で、刃部と中子の間に区が残る。刃部長は切っ先がやや欠けているものの 7.0cm を測る。区は 4mm ほどを測る。中子は欠損しており、残存長は 2.3cm を測る。刃部は平面形が窪むようになっているが使用の結果か、本来の形状かは不明である。
この他に移動式のカマドが出土しているが、この遺構に伴うものではないと考える。

・SI-090
［遺構状況］　141-I-1・2 グリッド検出。竪穴建物の集中域で検出した遺構で、SI-063、SI-050 などにより切られている。遺構のごく一部が見えている状況で明確な規模や形態は不明瞭である。この範囲から遺物は出



1層 暗褐7.5YR3/3 シルト　地山粒(1cm 大)を少量含む
2層 暗褐7.5YR3/3 シルト　7.5YR5/8明暗褐地山 」ブロック(5cm 大)を多く含む
3層 黒褐7.5YR3/2 シルト　7.5YR5/8明暗褐地 山ブロック(3cm 大)を少量含む
SI096上から掘り込まれたﾋﾟｯﾄ

第 42 図　Ｉ区　SI096 実測図

土しているが、遺物採取の段階ではまだ遺構の状況が掴めなかったため、この遺構に伴う遺物として記述しない。

・SI-096

［遺構状況］　140-J-19･20 グリッド及び 141-J-1･2 グリッドで検出した。非常にわかりにくく、竪穴建物の壁面と考えるものを検討し、最終的に竪穴建物として確認した。他の遺構で切られているため本来の形状はほとんどつかめない。辛うじて残った壁面の幅を測ると、4.5 mほどであった。軸は方位軸からややずれる。埋土は２層あるが、地山に近いものであった。床面に硬化面などは確認できていない。

・SI-097

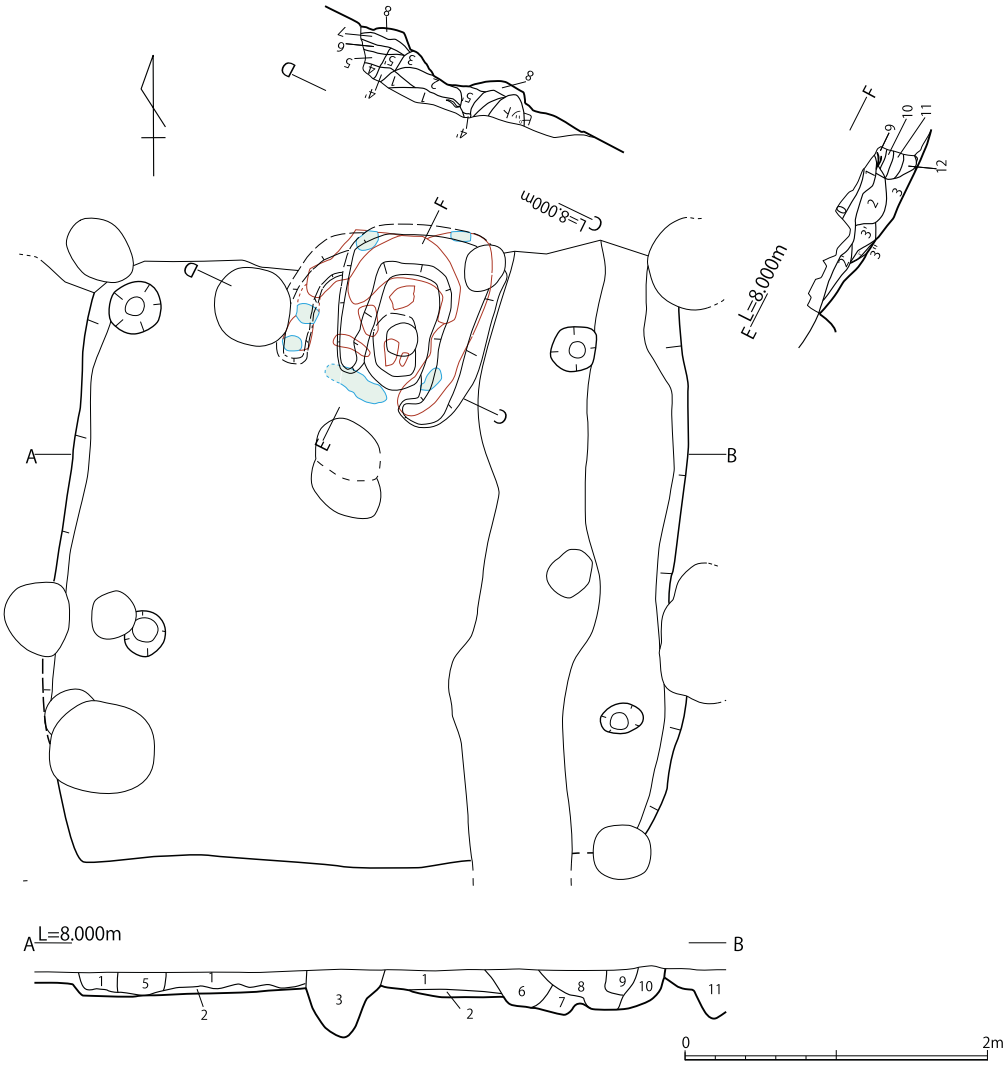
［遺構状況］　141-J-1･2 グリッドで検出。S-064 を切っている。当初 S-064 と同じ遺構としていたが、精査を進める中で別遺構が中にあることが確認できた。S-064 の壁面を一部共有する形で S-064 の北東部に位置する。規模は東西方向で 2.1 m、南北方向で 2.8 mを測り、長方形を呈する。床面には硬化面が広がる。この建物内でピットは確認したが、柱穴として伴うものを確定できなかった。

・SI-105

［遺構状況］　141-L-9･10 グリッドで検出。表土剥ぎ後包含層を掘削中にカマドの焼土を確認しており、遺構範囲の確認を続けたが、包含層と遺構埋土が変わらないこと、溝状遺構 SD-406 がこの遺構ラインに重なってきたことにより何度も想定線を引き直し最終的にこの形で落ち着いた。ただカマドの形状をみるといくつかの竪穴建物が切り合っていたことも考えられる。最終的に東西幅が 4.0 m、南北の残長が 4.2 mを測る。カマドの残りは他の竪穴建物に比べよかったが、状況的に二つのカマドが切り合っている印象はある。先に述べたが、東側を SD-406 に切られている。

・SI-195

［遺構状況］　141-M･N-8･9･10 グリッドで検出。カマドが北東位置に付く竪穴建物で、カマドの残りが比

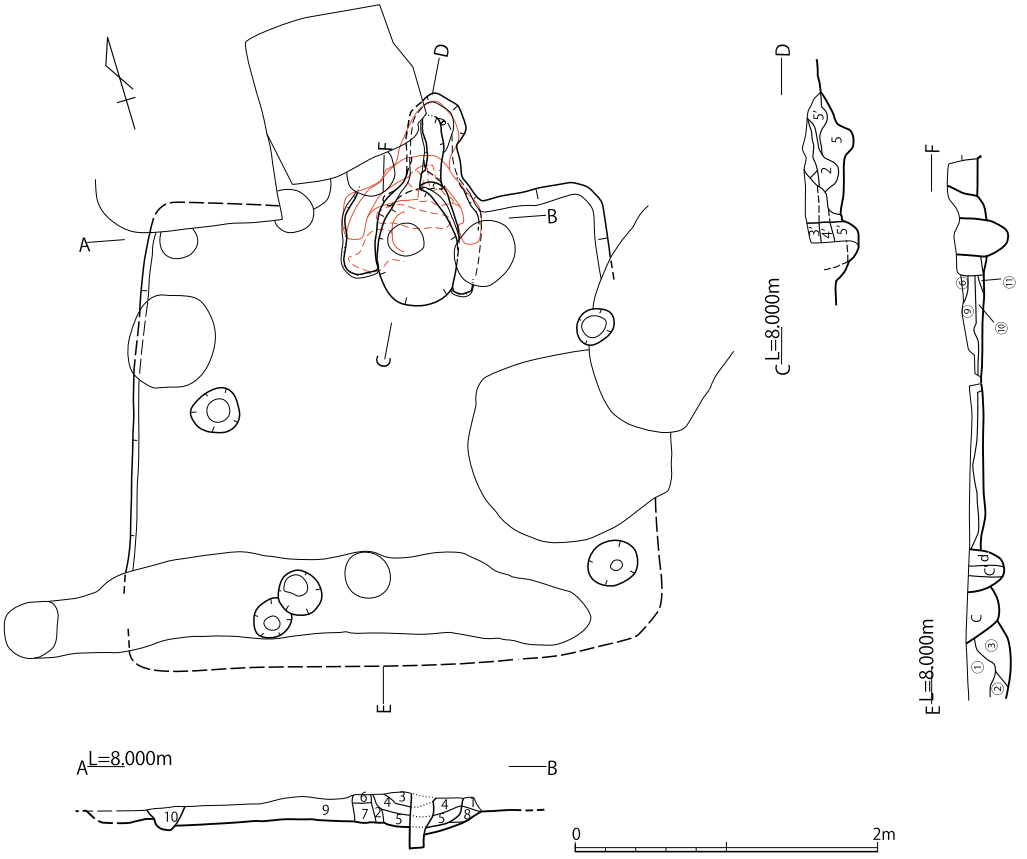


1層 暗褐　7.5YR3/3 しまりあり　粘質やや強い。褐色のブロック少し含む(0.5～1cm)炭・焼土・土師粒子を全体に多く含む
2層 暗褐　7.5YR3/4 しまりあり　粘質やや強い。黄褐色土混じる
3層 極暗褐 7.5YR2/3 しまりあり　粘質やや強い。炭少し含む
4層 褐　7.5YR4/6 しまりあり　粘質弱い
5層 暗褐　7.5YR3/3 しまりあり　粘質やや弱い。黄褐色ブロック(1.5～5cm)少量含む
6層 暗褐　7.5YR3/4 しまりあり　粘質やや弱い。褐色のブロック少し含む(0.5～1cm)黄褐色土混じる
7層 暗褐　7.5YR3/3 しまりあり　粘質やや弱い。黄褐色土。黄褐色ブロック(0.5～5cm)灰黄褐色ブロック(0.5～2cm)を全体に少量含む
8層 暗褐　7.5YR3/3 しまりあり　粘質やや強い褐色のブロック少し含む(0.5～1cm)
9層 暗褐　7.5YR3/4 しまりあり　粘質やや強い。明褐色のブロック含む(7cm)炭少し含む
10層暗褐　7.5YR3/4 しまりあり　粘質やや強い。黄褐色ブロック(0.5～2cm)混じる灰黄褐色ブロック(0.3～1cm)少量混じる
11層暗褐　7.5YR3/3 しまりあり　粘質やや強い。褐色のブロック少し含む(0.5cm)
12層暗褐　7.5YR3/4 しまりあり　粘質やや強い。褐色のブロック少し含む(1cm)

カマド部分

0層 褐　7.5YR4/4　シルト　粘土・焼土を顕著に含む
1層 明褐　7.5YR3/3　シルト　粘土・焼土を顕著に含む
2層 極暗褐 7.5YR2/3　シルト　炭混じる
3層 黒褐　5YR2/2　シルト　炭混じる
4層 明赤褐 5YR5/6　シルト　粘土ピンク粘土混じる
5層 明褐　7.5YR3/4　シルト　4のブロック混じる
6層 褐　シルト　白色粘土
4´ 橙　2.5YR6/6　粘土ピンクに近い暗褐色粘土混じる
5´ 暗褐　7.5YR3/3　シルト　白色粘土混じる
7層 褐　7.5YR4/3　シルト
8層 褐　7.5YR4/4
9層 0・1に類似　粘質、やや赤み帯びる焼土多い
10層4´に類似　ややブロック多い
11層5´に類似　ややブロック多い
12層黒褐　7.5YR3/2　シルト　ややブロック多い炭混じる

第 43 図　Ⅰ区 SI105 実測図

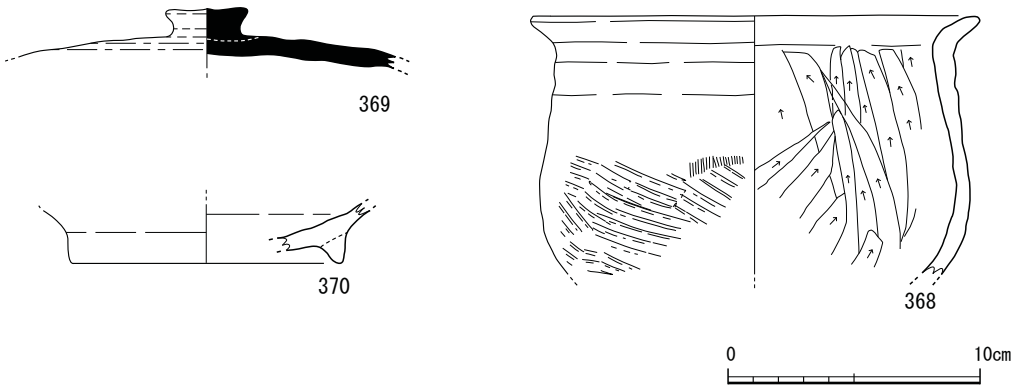


①層 暗褐10YR3/4　シルト　しまり あり　黄灰色ブロック(0.5～3cm)少し 含む
②層 黒褐10YR3/2　シルト　しまり あり　黄灰色ブロック(0.5～4cm)少し 含む
灰黄褐色ブロック 少量含む
③層 暗褐 10YR3/3　シルト　しまり あり　黄褐色土混じる
④層 黒褐 10YR3/2　シルト　しまり あり　灰黄褐色ブロック 多く 含む
⑤層 暗褐 10YR3/3　シルト　しまり あり　粘質やや多い　黄褐色土多く 含む
⑥層 黒褐 10YR3/2　シルト　しまり あり　焼土、炭を少量含む
⑦層 暗褐 10YR3/4　シルト　しまり あり　灰黄褐色を多く 含む　土師粒子少量含む
⑧層 暗褐 10YR3/3　シルト　しまり やや強い　黄褐色土混じる
⑨層 黒褐 10YR3/2　シルト　しまり あり　黄褐色土多く 混じる
⑩層 黒褐 10YR3/2　シルト　しまり あり　黄褐色土混じる
⑪層 暗褐 10YR3/3　シルト　しまり あり　黄褐色土　灰黄褐色ブロック混じる

カマド土層注記

1層　暗褐10YR3/3　しまり やや強い　粘性少し 強い　5mm大の焼土片を灰黄褐色土ブロックを下部に多く 含む　炭化物を多く 含む
0.2～0.3cm大の礫をわずかに含む
2層　暗褐 10YR3/3　しまりあり　粘性やや弱い　明赤褐色土5YR5/8 焼土片をかなり多量に含む　特に下部に多い　炭化物も 少し 含む
3層　黒褐 10YR3/2　しまりあり　粘性やや弱い 細い砂～中砂をわずかにブロック 状に含む
橙色粒子0.1～0.2大を少し 含む
4層　黒褐 10YR3/2　しまり 強い　粘性やや強い　0.3～0.5cm大炭化物と 橙色粒子
0.2～0.3cm大の小礫を下部に含む
5層　暗褐 10YR3/4　しまりあり　粘性やや弱い　全体的に下層の黄褐色粘質土をブロック状に多く 含む　炭化物と 橙色粒子を少し 含む
6層　暗褐 10YR3/3　しまり あり　粘性やや弱い 0.2～0.4cm大の礫を多く 含む
焼土片をわずかに含む
7層　黒褐 10YR3/2　しまり あり　粘性やや強い　黄褐色土をブロック 状に少し 含む
炭化物を少し 含む
8層　暗褐 10YR3/4　しまり あり　粘性やや強い　黄褐色土をブロック 状に多く 含む
炭化物を少し 含む
9層　黒褐 10YR3/2　しまり あり　粘性やや弱い　全体的に黄褐色土をブロック 状にまばらに含んでいる　炭化物を橙色粒子もまばらに少し 含む
粘性少し 強い　0.2～0.3mm大の礫を少し 含む。
10層　暗褐10YR3/3　しまり あり　炭化物を橙色粒子を少しふくむ。

第 44 図　Ｉ区　SI195 実測図



第 45 図　Ⅰ区　SI195 出土遺物実測図

較的良い。ただ、南側は他の遺構や攪乱により失われているため想定しかできなかった。残った部分をつなぎ合わせて図示したような実測図とした。復元ながら東西幅は 3 mほどと推定できる。南北は想定のため不明である。埋土はかなり掘り下げた段階での確認であったため 2 層分だけが押さえられた。

［出土遺物］　出土遺物は少なく 3 点のみを図化した。

369 は須恵器の杯蓋片である。天井部とつまみが残る。つまみは頂部が扁平化したものである。370 は高台付杯もしくは椀である。小破片のため正確な形態は不明である。高台の断面は三角を呈する。368 は土師器の甕で口縁から胴部中位下まで残る。復元口径は 17.6cm を測る。口縁は短く、胴部の張りは下位のほうに偏る。また、器高自体は口径に比して低いようである。

・SI-221

［遺構状況］　141-O-7 グリッドで検出。遺構としては早くから確認しており一応竪穴建物としていた。ただ確実にそうであるかは不明である。東側および南側壁は押さえることができたが、西側壁は精査を繰り返したが面的に押さえることはできなかった。そこで一応土層断面を頼りに想定ラインを設け掘削した。土層確認面から東西幅は 2.4 mほどである。確認面からの深さは 20cm ほどあり、 2 層に分かれる。埋土は他の竪穴建物に比べやや明るくみえる。

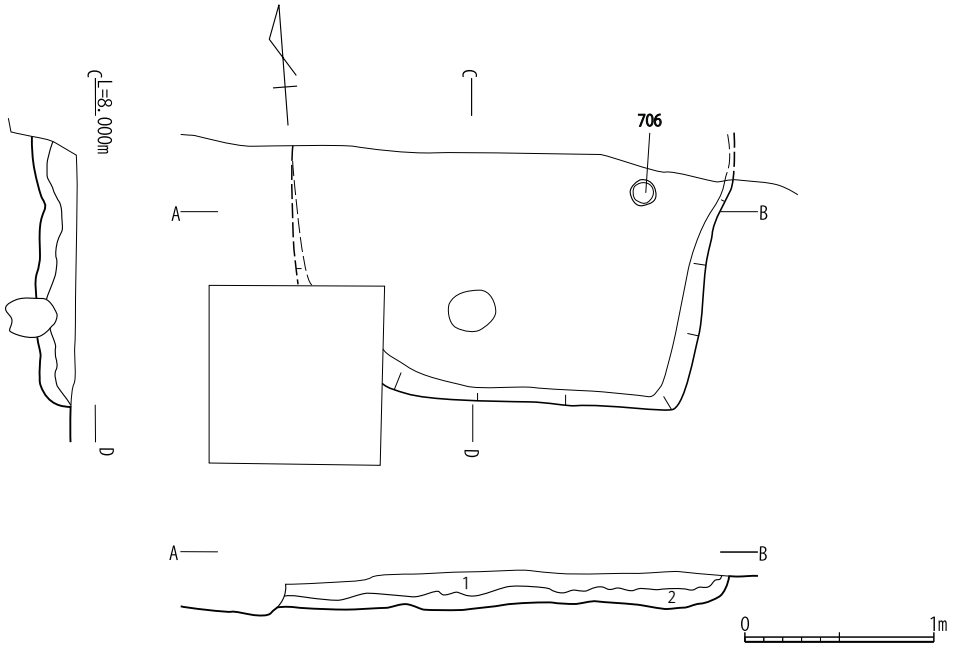
［出土遺物］　この遺構に唯一伴うものと考えた遺物は 706 である。この遺物は土師器の杯であるが、器表面の調整にミガキが施されていることと体部から口縁部にかけて湾曲する器形の特徴から 7 世紀代前半のものの可能性がある。この遺構の時期はその頃まで遡るかもしれない。この他に通常みられる遺物が埋土中及び床面付近には入らないのも時期の古さの証左と考える。

この遺構の上面付近には平瓦 2 点、カマドの上部片 1 点が出土している。

・SI-279

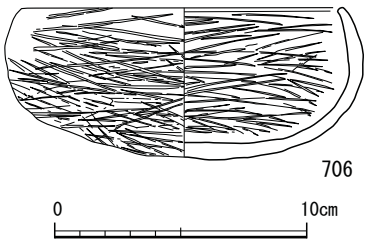
［遺構状況］　141-M･N-8 グリッドで検出した。この遺構は当初カマドの一部を確認し、それに見合う竪穴建物の肩部などを確認し、他の遺構の切り合いを確認していきながら徐々に想定できるようになった。その結果、図示したような図を想定できたが、確実なところでは東西方向の 3.4 mと想定で南北 4 mまでである。カマド位置はほぼ北位置になる。確認面からの深さは 10cm 程度である。

［出土遺物］　826 は土師器の杯で、口径の 1/2 が残る。復元口径が 18.5cm、器高が 3.9cm、復元底径が 9.4cm を測る。内外器面とも回転ヘラミガキによる暗文が施される。827 は土師器の高台付杯で大型品である。高台径は 10.2cm を測る。内外器面ともに回転ヘラミガキによる暗文が描かれる。また、内外器面と



1層 暗褐10YR3/3 シルト　極細砂～極細混じり　橙色粒子のブロック状のもの含む
2層 暗褐10YR3/4 シルト　極細砂～極細混じり　橙色粒子のブロック状のものを多く含む
3層 黒褐10YR2/3 シルト　極細砂～極細混じり　橙色粒子のブロック状のもの含む

第 46 図　Ｉ区　SI221 実測図



第 47 図　Ｉ区　SI221 出土遺物実測図

もに赤彩が施される。828 は土師器の高杯の脚部である。底径の 1/2 が残る。復元径が 8.5cm を測る。

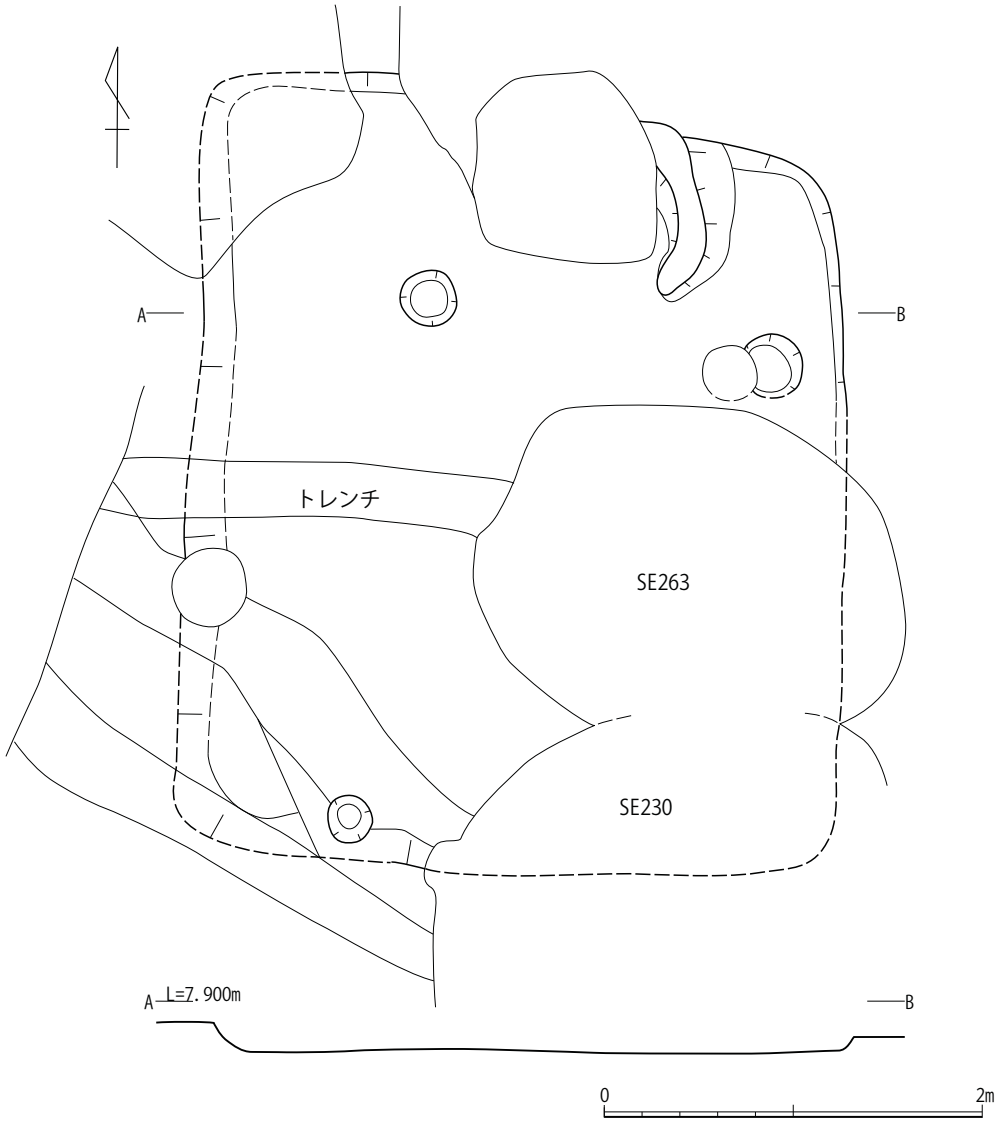
・SI-294

［遺構状況］　141-I･J-7･8 グリッドで検出した竪穴建物である。Ⅳ層をかなり掘り下げた段階で遺構を検出したため、床面近くのわずかに 10cm ほどの掘り込みを確認したのみである。遺構の一角のみの確認で、カマドなどの施設は確認できていないため、確実な竪穴建物としてよいか疑問は残る。ただ、床面や壁の立ち上がり状況から竪穴建物に含めた。残存状況が悪いため、形状・規模は不明である。

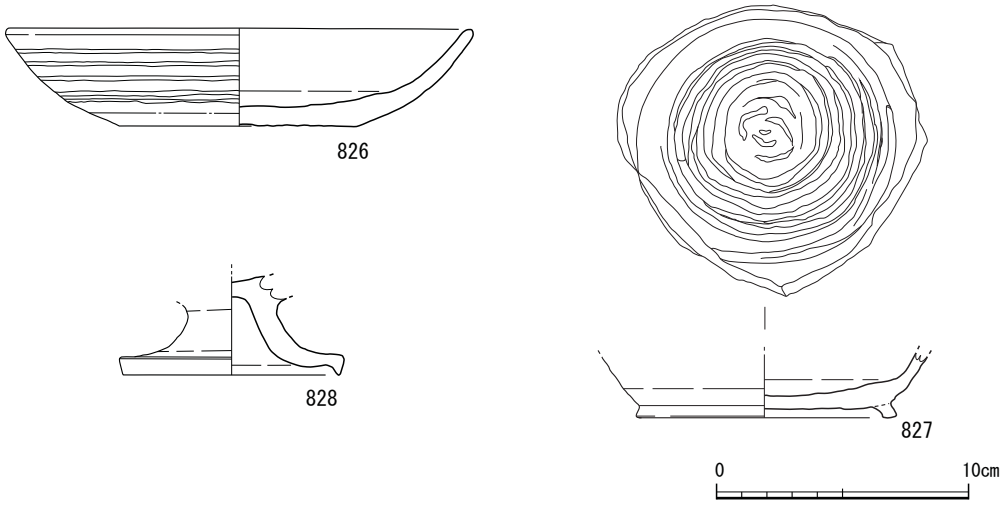
・SI-323

［遺構状況］　141-P-9･10 グリッドで検出した遺構で、他の遺構や攪乱によりカマドと西側肩部分のみしか検出できなかった。カマドは破壊されていたが、状況をつかむに十分な残り具合であったので、焚き口やカマドの作りのおおよそは確認できた。遺構としての竪穴建物の形態・規模については部分的であったため不明である。また、柱穴もつかめていない。

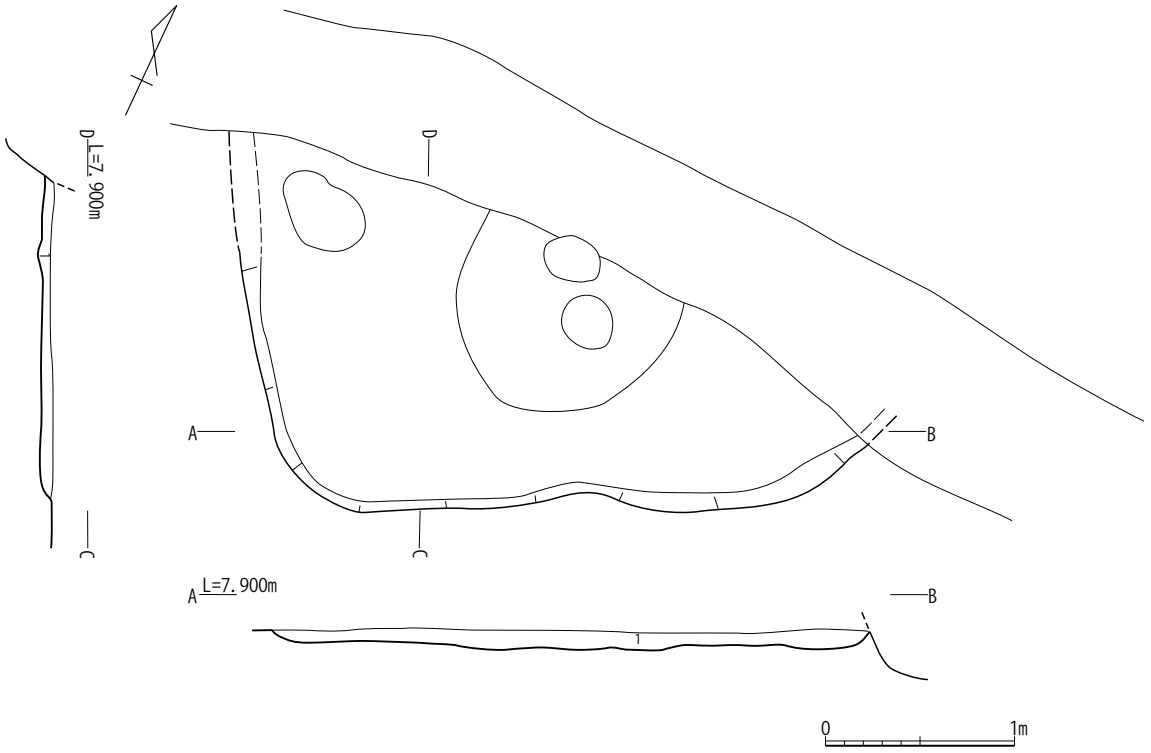
カマドはほぼ北側の壁面に接続し、そこから袖部が全面回るように配置されている。焚き口部は 20cm ほどで、奥の火床部まで 50cm ほどある。上部構造は削平されているので判らないが、火床部は径 50cm ほどの広がりを持つ。煙道部は確認できなかった。カマド付近に甕などの遺物はあったが図化できるほどではなかった。



第 48 図　Ⅰ区　SI279 実測図



第 49 図　Ⅰ区　SI279 出土遺物実測図



1層 暗褐色10YR3/3　シルト しまりなし 粘性を持つ

第 50 図　Ｉ区　SI294 実測図

・SI-357

［遺構状況］　141-O･P-10、141-O･P-11 グリッドで検出。カマドと両肩部付近を辛うじて検出した。他の部分は溝状遺構やピットにより破壊されていたため、全体の形状・規模はつかめていない。幅は残存部の状況では３mほどである。確認面からの深さは 25cm を測る。中心軸は北より東側にずれ、N-15°-E を測る

　カマドはこの遺構の北側辺の東側壁近くに作られている。

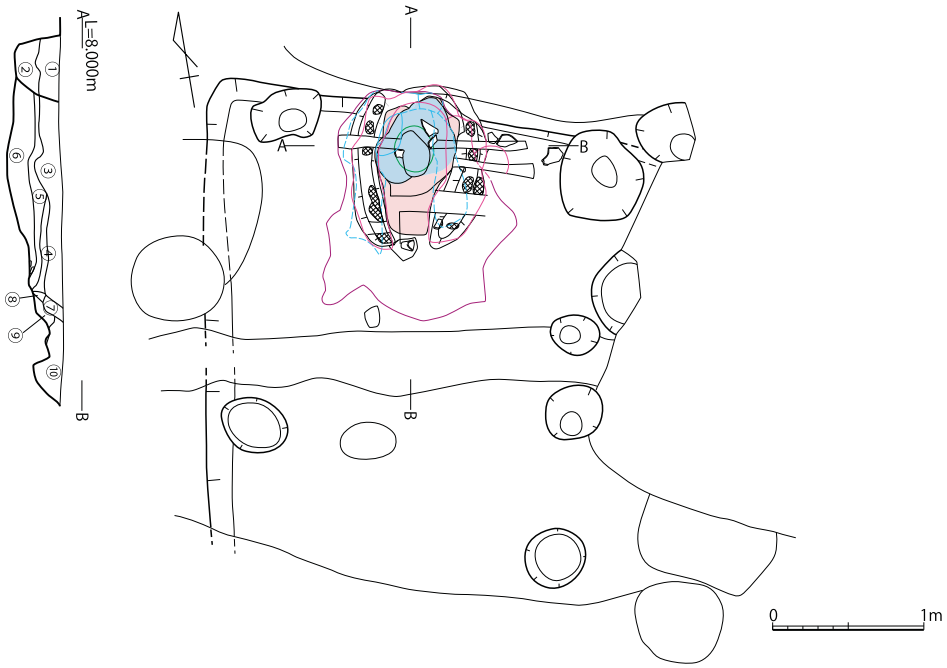
［出土遺物］　輸入陶磁器として越州窯系青磁椀（Ⅳ？）の口縁部 (元) が 1 点出土している。

・SI-502

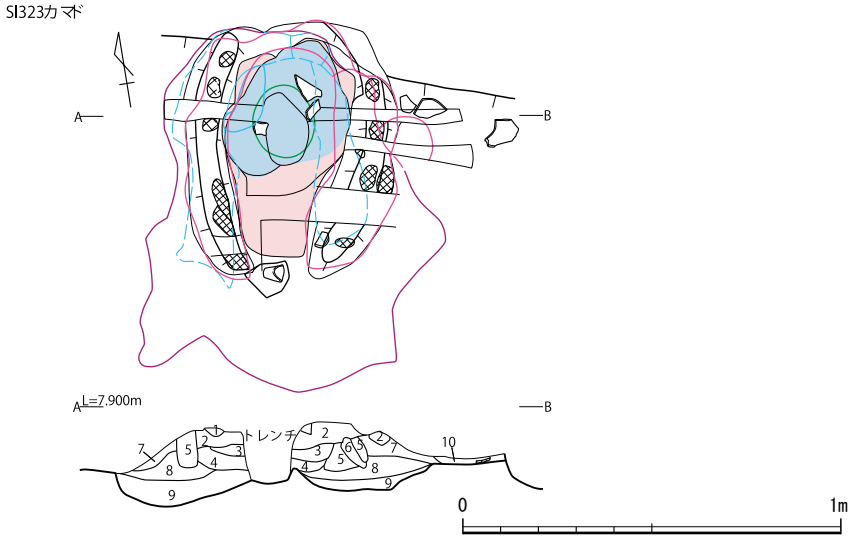
［遺構状況］　141-Q-34、141-Q･R-5 グリッドで検出。当初から遺構の存在を認識してはいたが、数度の精査を重ねても輪郭が明確にはならなかった。

・SI-503

［遺構状況］　141-Q･R-5･6 グリッドで検出。土層のせいか、遺構の輪郭線が非常にあいまいで何度も確認を重ねどうにか遺構をつかんだ。カマド付きの竪穴建物と考えるが、カマドの一部が後世に建物基礎で破壊され、辛うじて片袖部を確認した。平面形は横長となり、長軸が 3.5m、短軸が 3m を測る。カマドを中心軸にすえて方位をみると N-40°-W とずれがある。平面形をみるとカマドに向かって左側辺と右側辺の長さが異なり、２遺構の切り合いも想定できる。

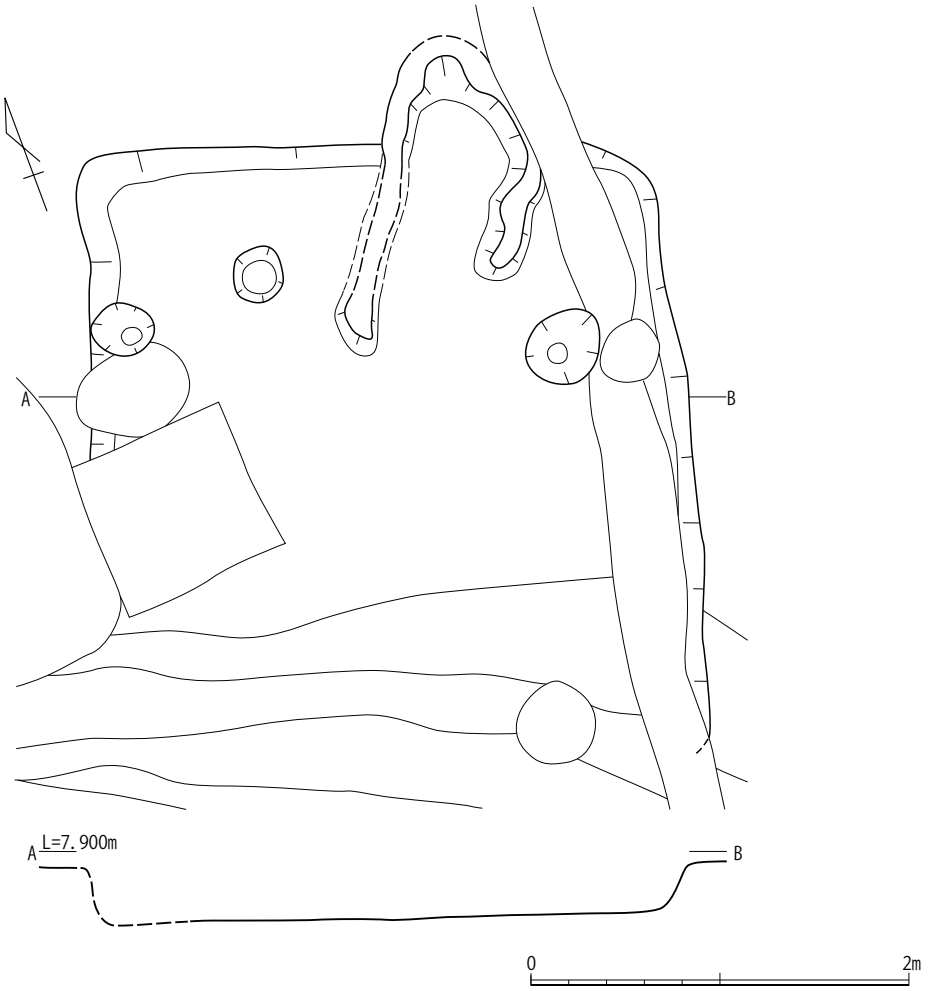


1層	暗褐	10YR3/3	しまり あり	粘質少し弱い　炭、灰白ブロック少し含む 0,5cm)
2層	暗褐	10YR3/4	しまり あり	褐色、灰白のブロック少し 含む 0,5～1,5cm)
3層	暗褐	7.5YR3/3	しまり あり	粘質少し弱い　炭、灰白のブロック少し含む 1cm)
4層	暗褐	10YR3/3	しまり あり	粘質少し弱い にぶい橙、にぶい橙ブロック多く 含む 2cm)
5層	暗褐	10YR3/4	しまり あり	粘質少し弱い　褐色土やや含む
6層	暗褐	10YR3/4	しまり あり	淡赤橙色土少し含む
7層	暗褐	7.5YR3/3	しまり あり	にぶい橙多く 含む
8曾	暗褐	10YR3/3	しまり あり	橙色やや含む　明褐色ブロック少し含む 0.2mm) 炭少し 含む
9層	暗褐	7.5YR3/4	しまり あり	粘質少し弱い　にぶい橙ブロック少し含む(0,1cm)　炭少し 含む
10層	暗褐	10YR3/3	しまり あり	粘質少し弱い　炭、明褐色ブロック少し含む 0,2cm)
11層	暗褐	10YR3/3	しまり あり	黄灰色土少し含む(0.5～1.5cm)　褐色土底の方に少し含む にぶい橙ブロック少し 含む 1cm)砂岩質の黄褐色ブロック少し含む 2cm) 褐色全体にやや含み炭少し含む

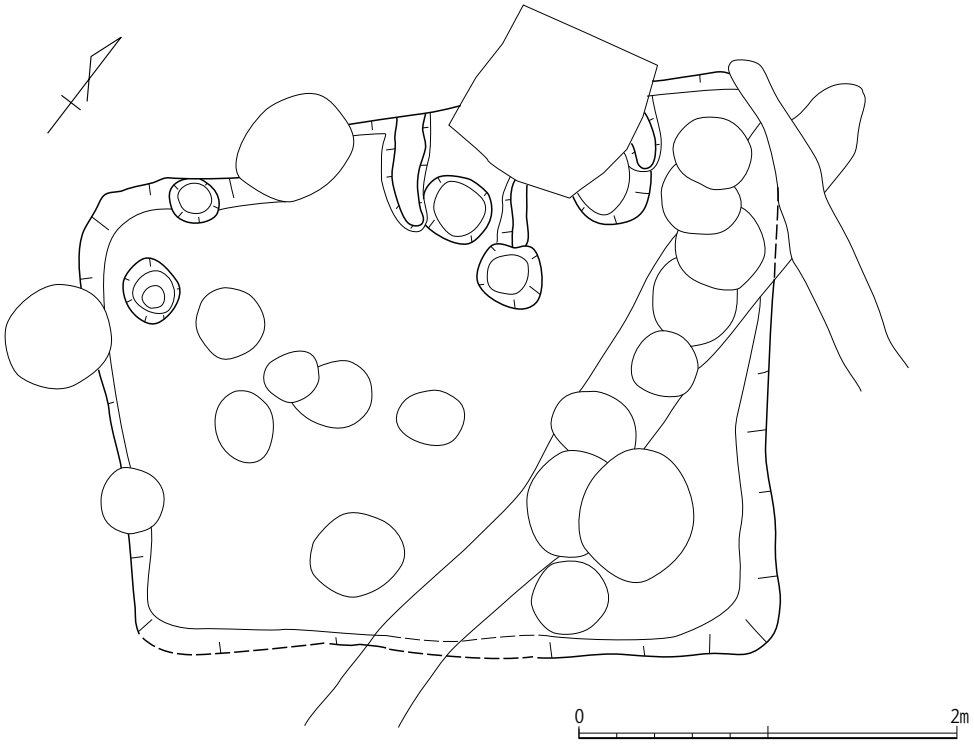


1層	橙	5YR7/6	細砂～中砂混じりシルト	極細砂含む　10cm位の礫を含む　大半が焼土でカマド が崩れたときに上がったものと思われる
2層	にぶい黄褐色	10YR7/4	細砂～中砂混じりシルト	細砂少し含んだ粘土　カマド の上部がペシャッと 崩れたと 思われる
3層	橙 暗褐	5Y7/8	細砂～中砂混じりシルト	細砂わずかに含んだ粘土　混じり のないきれいな橙の焼土でカマド の内側だったと思われる
4層	にぶい黄褐色	10YR3/3	極細砂～細砂混じりシルト	中砂わずかに含む　焼土や灰を含み、カマド 内の埋土と思われる　ブロックを含む
5層	にぶい黄褐色	10YR7/4	極細砂～細砂混じりシルト	カマド 本体の生きている部分で⑥は、本体に入り 込んだ根っこと 思われる
6層	暗褐	10YR4/3 10YR3/4	極細砂～細砂混じりシルト	中砂わずかに含む　粘土や焼土のブロックを含み ボロボロとしている　樹痕と思われる
7層	暗褐		極細砂～細砂混じりシルト	粘土や焼土含む　カマド が崩れ部分をかぶった土と思われる 橙色のブロック状を含む　粘質が強い
8層	黒褐	10YR3/3	極細砂～細砂混じりシルト	本体を支えるためにカマド の周り を囲んである土を思われる
9層	黒褐	10YR3/2	極細砂～細砂混じりシルト	橙色粒子のブロック状のもの を含む

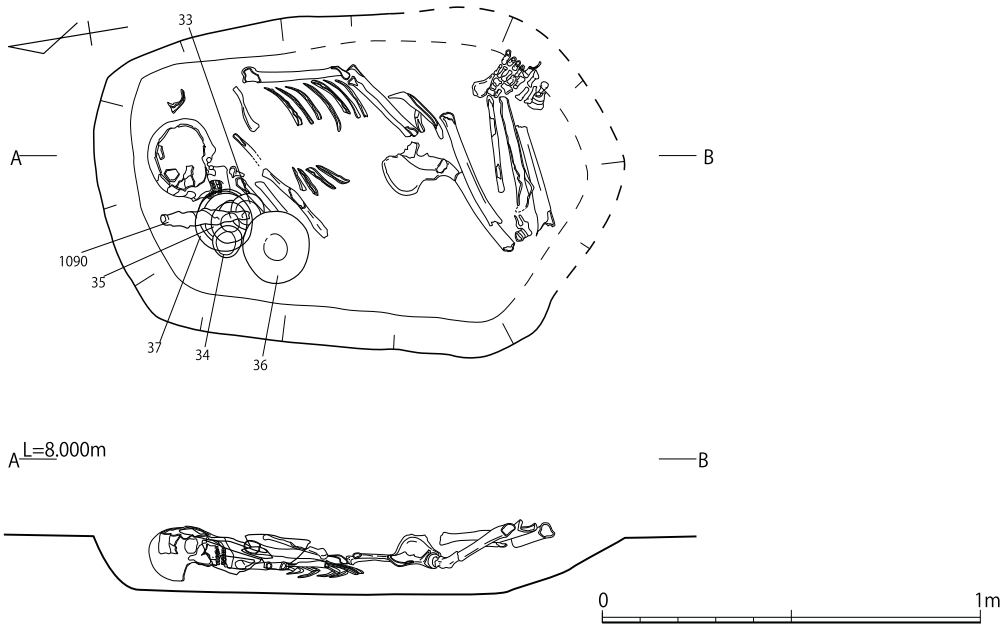
第 51 図　Ⅰ区 SI323・カマド実測図



第 52 図　Ｉ区　SI357 実測図



第 53 図　Ｉ区　SI503 実測図



第 54 図　Ⅰ区　ST040 実測図

（4） 墓壙

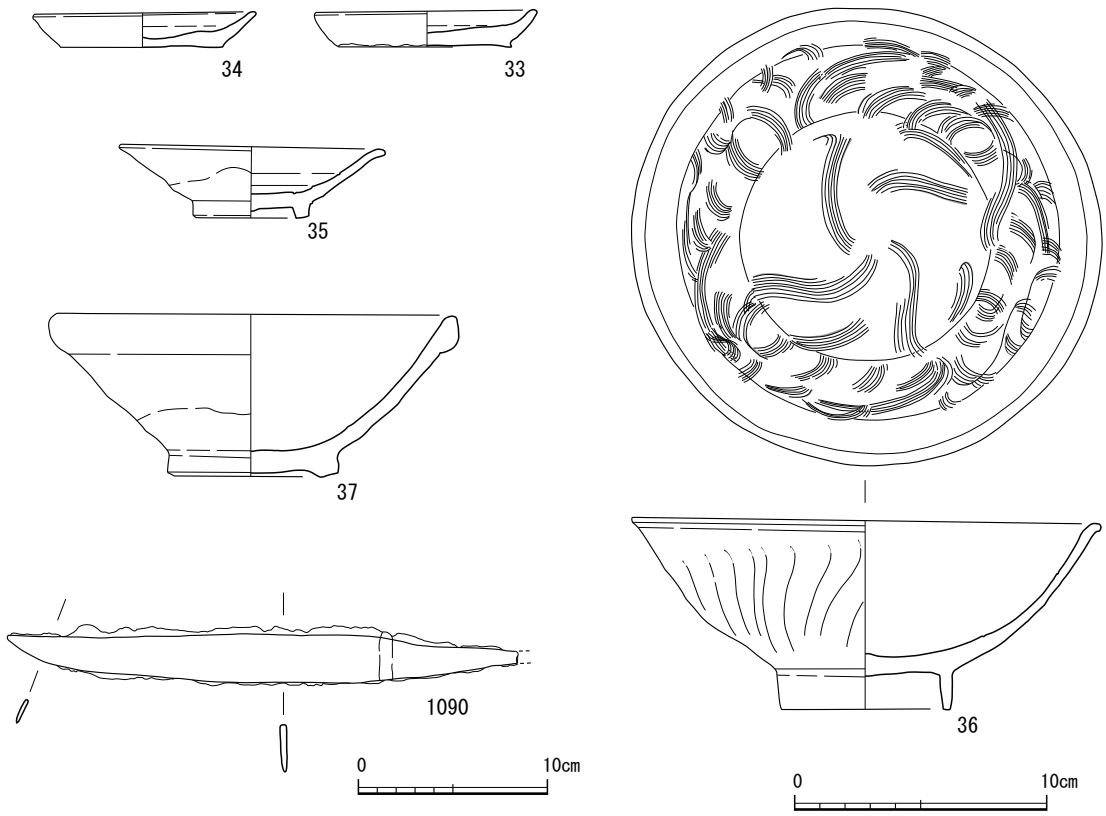
・ST-040

［遺構状況］　この墓壙は、141-O-12 グリッドで検出した。Ⅳ層を掘り下げ中に僅かの土の陥没を認め、その付近をやや慎重に掘削したところ、頭蓋骨の一部であることを確認したので墓の可能性があるため、掘り込みラインを精査した。しかし、非常に埋土と掘り込まれた土層自体がほぼ同一のものであるため、掘り込みを見分けるのに苦労した。どうにか北側は墓壙のものらしいラインをつかめたが、南側については人骨の及ぶ範囲で推定した。墓の範囲はつかんだが、遺体のみを直接埋めたとは考えられず、棺に納めて埋めたものとすれば、確認したラインは棺のラインであった可能性もある。

人骨は慎重に掘り進め、ほぼ全体をつかめるようになった。そこで人骨自体の鑑定を下関市立土井ヶ浜人類学ミュージアムの松下孝幸館長に依頼した。その結果、人骨は頭部を北に向け、顔は西を向き、身体は仰向けに置き足を折り曲げた状態であることがわかった。このような北頭の西向きの埋葬は中世の墓にみられるとのことで供献された遺物の年代に合致しているようである。さらに慎重に掘削を進めた。遺物から想定できるこの遺構の年代は 12 世紀末から 13 世紀前半までと想定する。

［出土遺物］　この遺構に伴う遺物としては、白磁碗２個体、白磁皿１個体、土師皿２枚、鉄刀（小刀）１振がある。遺物は遺体に献納されたと考えられ、遺体頭部から右肩にかけておかれていたようである。人骨自体には直接当たらない位置に置かれている。

陶磁器類では、37 は白磁碗の玉縁口縁のもので口縁部の厚みは厚い。大宰府分類に当てれば、白磁椀Ⅳ-1b 類である。外器面は体部の半ばまで釉をかける。底部は削りだし高台であるが、内部をあまり深く削り込んではいない。時期は C 期（Ⅶ～Ⅷ期、11 世紀後半～ 12 世紀前半）にあたる。36 は白磁椀で、太宰府分類のⅤ -4c 類である。口縁部は強く外反させて外側を細く指ナデを行い、端部は尖らせたようにしている。外器面には細線の１本線による縦櫛花弁文がタテに走り、内器面には沈線による圏線が上部と見込の面に巡る。内器面には６本ほどの櫛描文により雲文が描かれる。高台は削りだしで、口唇部は強く外反する。時期は C 期（Ⅶ～Ⅷ期、11 世紀後半～ 12 世紀前半）である。35 は白磁皿で大宰府分類のⅢ -1 類にあたる。



第 55 図　Ｉ区　ST040 出土遺物実測図 (1090 のみ S ＝ 1/4)

底部は削りにより高台を作り出し、外器面は体部の途中まで釉をかける。内器面は全体的に釉がかかるが、見込み部分では蛇の目状に掻き取りがある。時期的には D 期（XIV 期、12 世紀中頃）の標準磁器である。

33・34 は土師器の糸切りの小皿である。33 は口径が 8.7cm、器高が 1.5cm、底径が 6.9cm を測る。鈍い黄橙色を呈する。34 は口径が 8.7cm、器高が 1.4cm、底径が 6.5cm を測る。この土器の底部は糸切り離し後板状圧痕が残る。色調は 33 と同じくにぶい黄橙色を呈する。

1090 は、鉄器で小刀になる。刃渡りが 19.9cm を測る。中子が欠損しているものの 7.3cm ほどを測る。刃はほぼ直であるが、切っ先付近でやや反り、細くなりとがる。全体の長さは 27.2cm を測る。

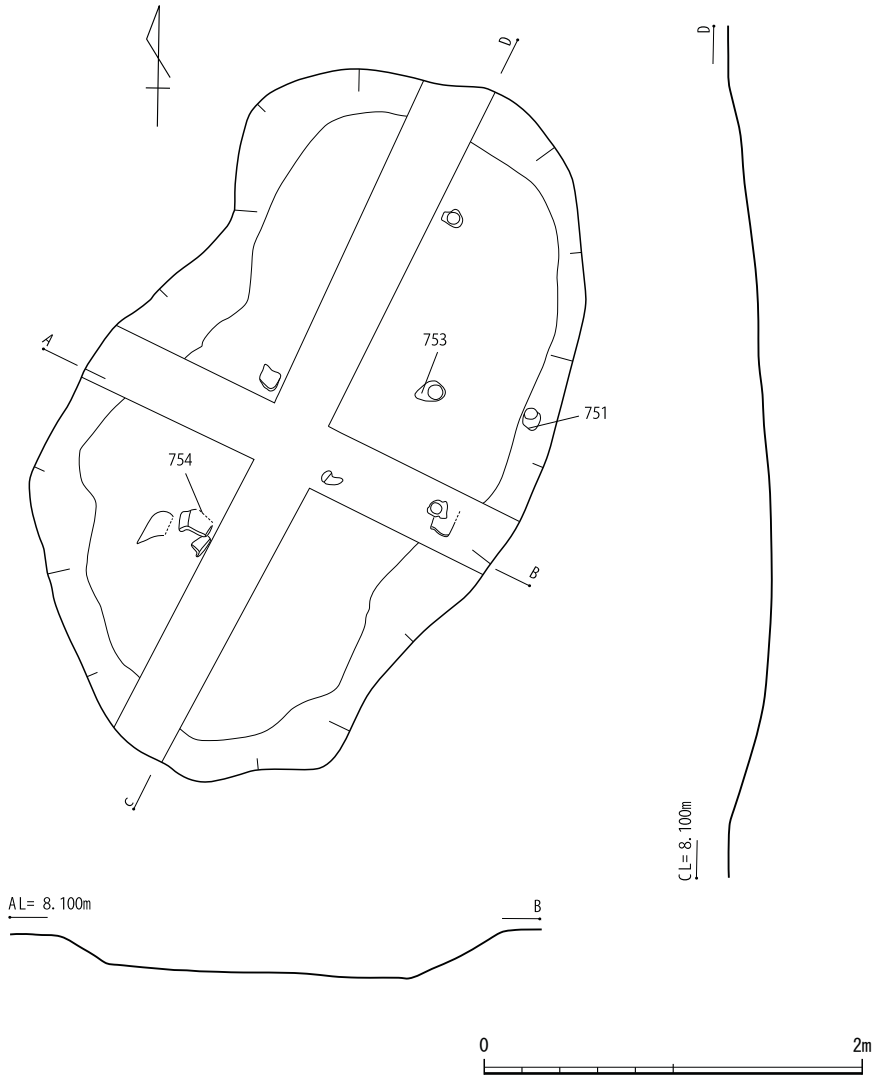
（5）　土坑

ここで土坑ととらえたものには大小様々、形態も多種のものを含んでいる。個々についてはそれぞれの遺構内容でふれるが、墓壙やピット群の複合したもの、井戸の未完掘状況のもの、単なる地形の落ち込みにも見えるものなどもあり、調査時に判断に迷ったものもある。不明遺構としたものも含む。

分布もどこかに集中することもなかった。ただ、同じ土坑としてもいくつかの土坑は墓壙と考えられるものもあった。個々については以下に詳述する。

・SK-030

［遺構状況］　141-Q･R-8･9 グリッドで検出した遺構である。Ⅲ層の掘り下げ中に確認した土坑で、炭化物を多量に埋土中に含む。平面形は長楕円形を呈し、長軸長で 3.96 m、短軸長で 2 ～ 2.3m を測る。掘り込みは緩やかに深くなり、確認面からの深さが 20cm ほどを測る。長軸方向は N-25° -E で、東側へ傾く。埋土は黒褐色のみの 1 層である。



第 56 図　Ⅰ区　SK030 実測図

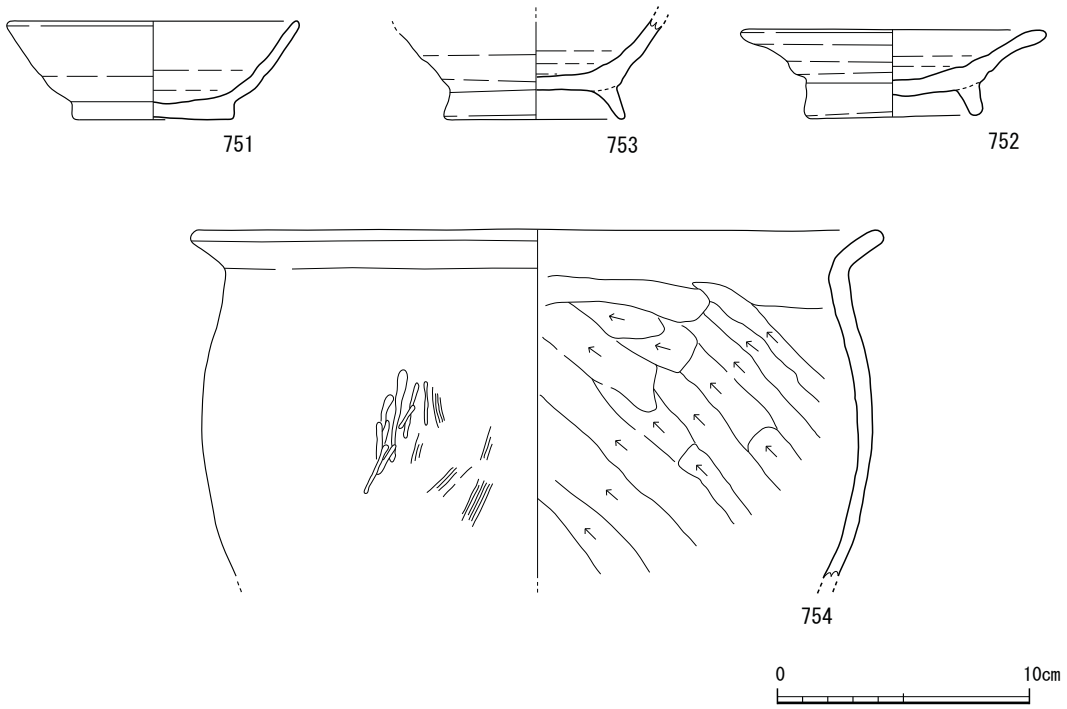
［出土遺物］　751 は土師器の杯である。やや底部が厚く体部は斜めに直線的に延びる。底部はヘラ切り離し後ナデ調整される。753 は土師器の高台付椀である。高台は 1.0cm ほどで斜めに高く伸び、径が 6.9cm を測る。体部は斜めに直線的に延びる。752 は土師器の高台付皿である。口縁部が大きく開く。復元口径が 11.5cm、器高が 3.45cm で、高台径が 6.75cm を測る。内外面ともに赤彩であった。754 は、土師器の甕で復元口径が 27.5cm を測る。外器面に煤が付着する。

・SK-067

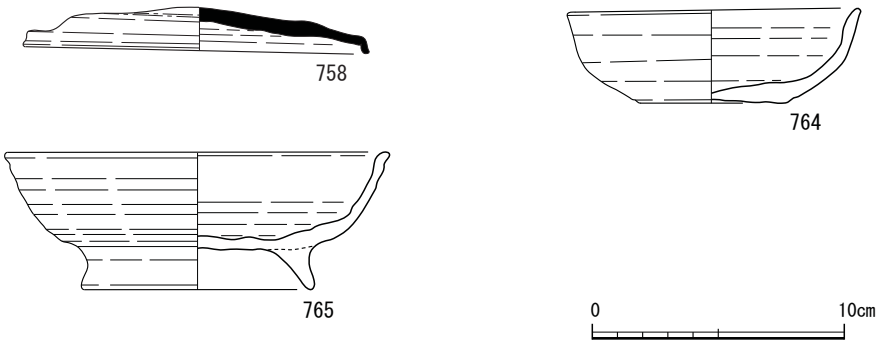
[遺構状況]　141- G-4・5 グリッドで検出した遺構である。検出時には SK-077 と同じ遺構ととらえ不整形な土坑と想定していたが、その後掘削、精査により別の遺構の切り合いと確認した。SK-067 が先行し、SK-077 が後に深く掘削している。この遺構の正確な平面形、規模は不明である。残された状況から平面形は不整形な掘削の土坑であり、深さも 20cm 程であった。

[出土遺物]　出土遺物の量は少なく、ここでは以下の 3 点を取り上げる。

758 は須恵器の杯蓋である。1 層の出土で、復元口縁が 13.7cm、器高が 1.2cm を測る。764 は土師器の杯で下層から出土した。口径が 11.6cm、器高が 3.7cm、底径が 6.0cm を測る。口縁は内湾するように見える。



第 57 図　Ｉ区 SK030 出土遺物実測図



第 58 図　Ｉ区　SK067 出土遺物実測図

765 は土師器の高台付杯である。下層の出土で、口径が 15.3cm で、器高が 5.4cm、底径が 9.0cm を測る。高台はやや高く、杯部の貼り付け部分から急激に広がり、端部は丸く収める。

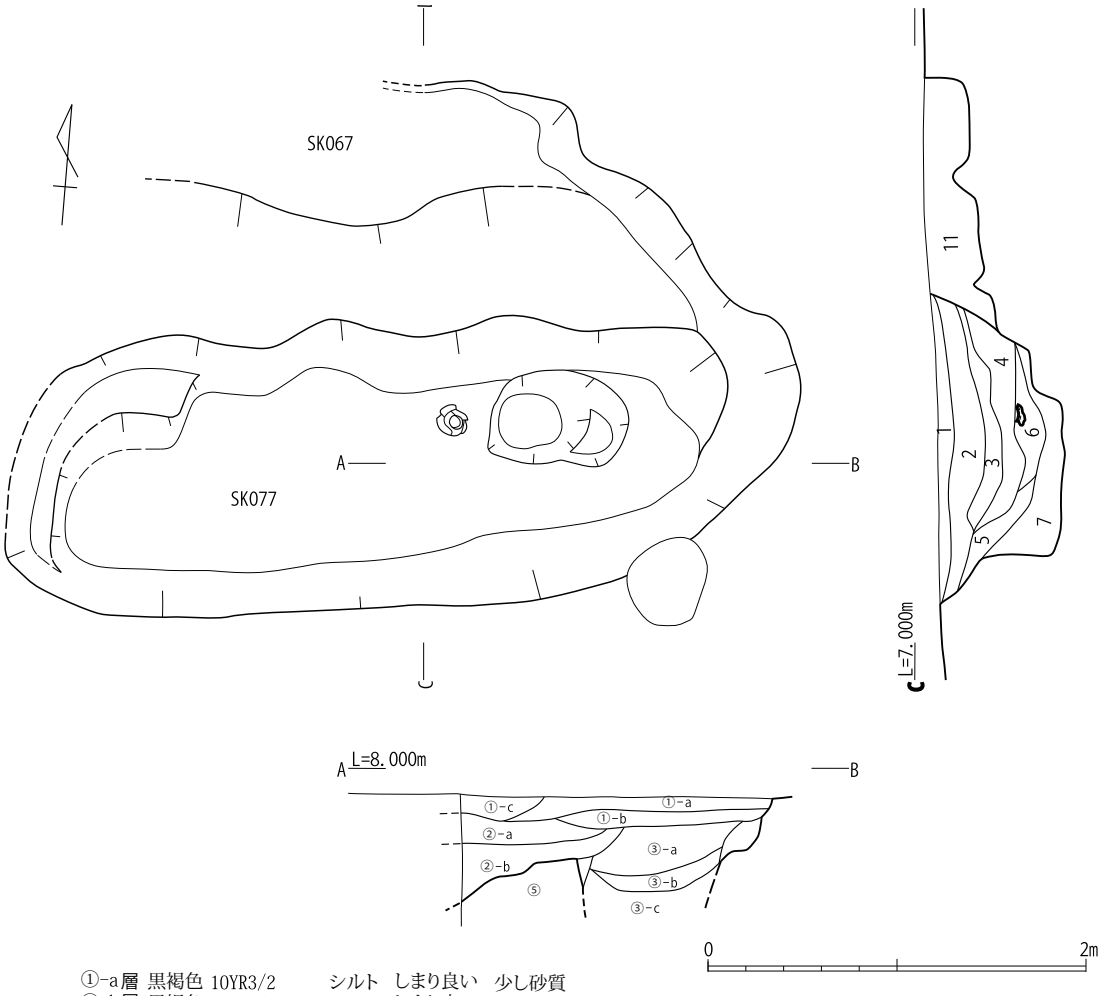
・SK-072

［遺構状況］　141-G-5･6 グリッドで検出した遺構であるが、その後の精査により複数のピットの集合体である可能性が高いと判断した。一部は北側の調査区外に出ており数量的なものはつかめない。

土層は一応観察できた部分では４層に分層した。１層は褐色土で締まり強い。２層は黒褐色土でシルト。３層は黒褐色土でシルト。炭化物粒を含む。４層は黒褐色土層。シルト。10cm 大の地山ブロックを含む。

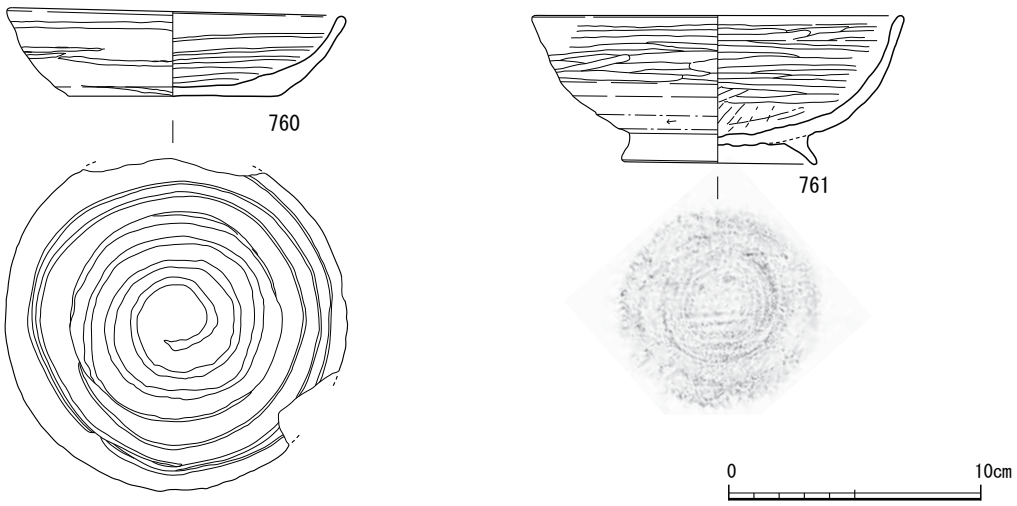
・SK-076

［遺構状況］　141-H-7 グリッドで検出した遺構である。北側は SD-041 によって掘削され、南側も他の小規模の溝状遺構によって掘削されている。そのため全体像は不明であるが、長楕円形のものと想定できる。最

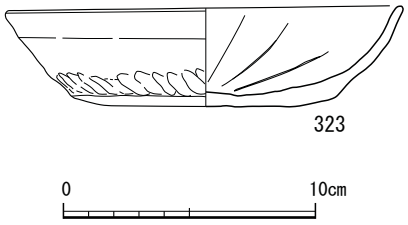


①-a層 黒褐色 10YR3/2　　シルト　しまり良い　少し砂質
①-b層 黒褐色 10YR3/2　　シルト　しまり良い　少し砂質
①-c層 黒褐色 10YR3/2　　シルト　しまり良い　やや砂質
②-a層 黒褐色 7.5Y R4/2　シルト　しまり良い　砂質
②-b層 灰褐色 7.5Y R4/2　シルト　しまり良い　少し粘質砂岩質シルトブロック極少量(1㎜～3㎜)
③-a層 褐色　 7.5Y R4/3　シルト　しまり良い　粘質明褐色の斑点少し
③-b層 褐色　 7.5Y R4/5　シルト　しまり良い　粘質強い明褐色の斑点多い
③-c層 褐色　 7.5Y R4/3　シルト　しまり良い　粘質非常に強い砂岩質シルトブロック多い(2㎜～5㎜)
④層　暗褐色 10Y R3/3　シルト　しまり良い　少し粘質
⑤層　暗褐色 10Y R3/4　シルト　しまり良い　粘質砂岩質シルトブロックやや多い

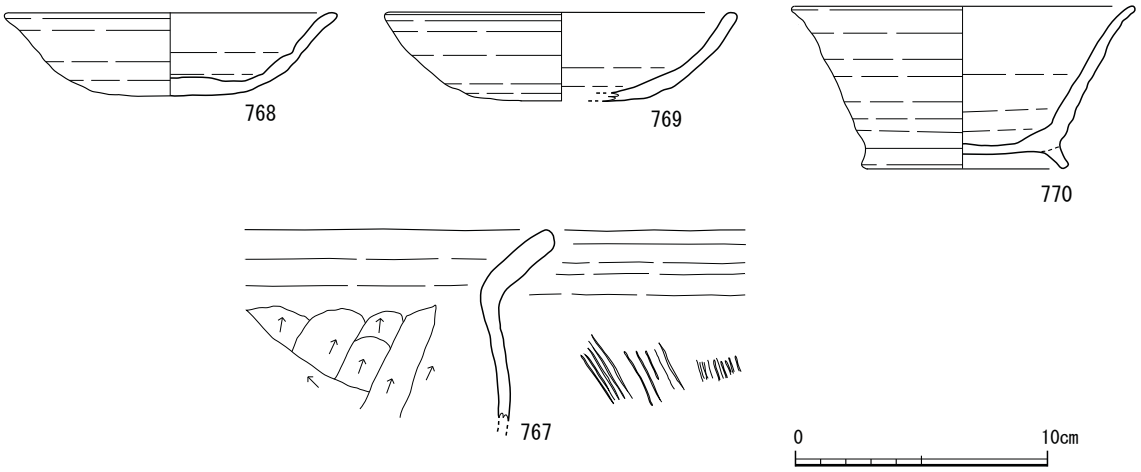
第 59 図　Ⅰ区　SK077 実測図



第 60 図　Ⅰ区　SK077 出土遺物実測図



第 61 図　Ｉ区　SK098 出土遺物実測図



第 62 図　Ｉ区　SK103 出土遺物実測図

大幅が 1.2m、確認面よりの深さが 9cm を測る。

埋土は１層が黒褐色(7.5YR3/2)を呈するシルト層で、しまりはなく、地山ブロック①(3cm 大)を少量含む。土器片も含む。２層は、暗褐色（7.5YR3/2）を呈するシルトで、ややしまりがあり、地山ブロック①(5cm 大)を多く含む。

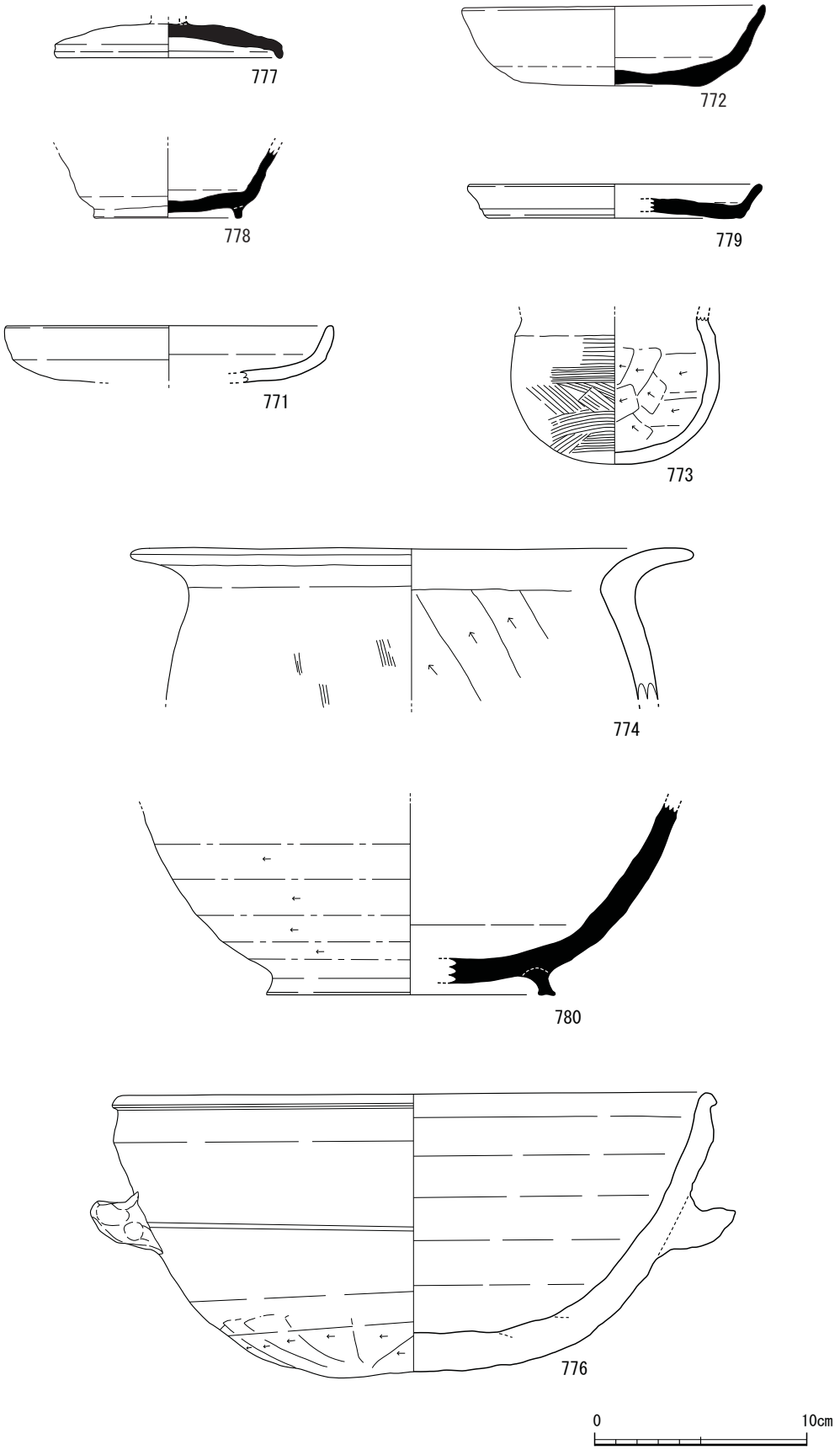
・SK-077

［遺構状況］　この遺構は、141-G-4・5 グリッドで検出した長楕円形を呈するものである。SK-067 を切っている。この遺構の規模は長さが 2.4 m、幅が 1.6 m、確認面からの深さが 80cm を測る。土層観察からさらにいくつかの遺構が切りあっている可能性はあるが、最終的に長楕円形の形態と捉えた。この遺構を掘削中に埋土中から人の歯（奥歯）１点と頭蓋骨の一部と思われる破片が出土したが、分析に出し損ねたため正確な情報は得られていない。人骨の一部の出土から墓である可能性もある。ただ、破片のみで他の骨やその痕跡は確認できなかったので、ここでは土坑とした。出土遺物からみて、この遺構の時期は平安時代の末期であろう。

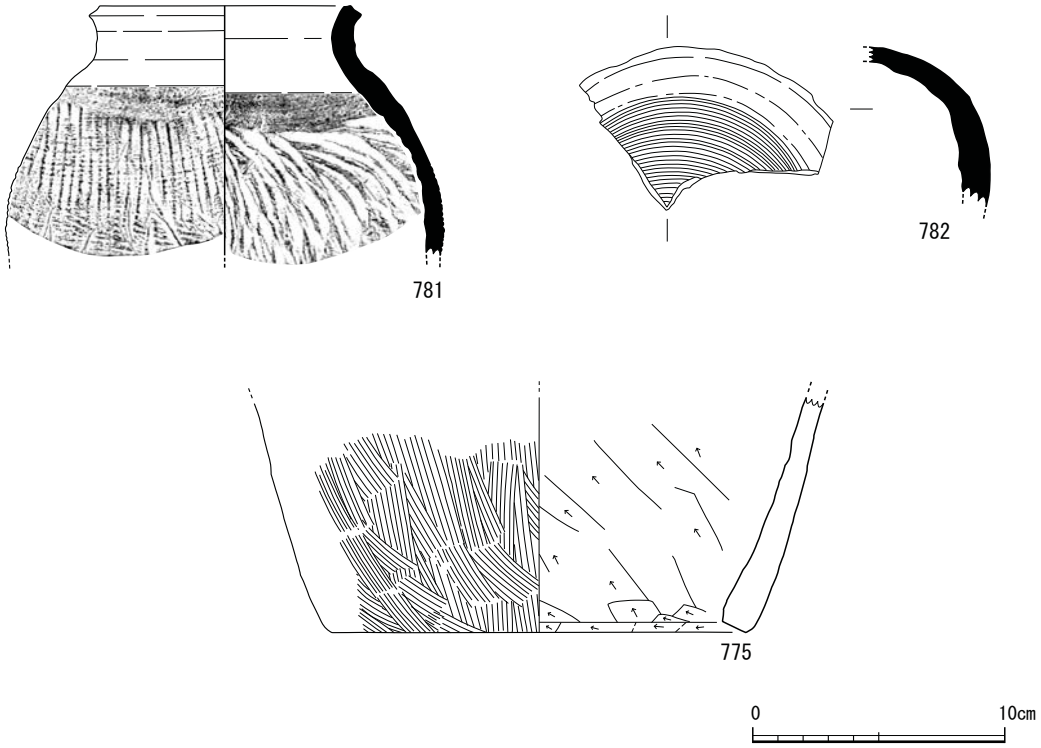
［出土遺物］　出土遺物は量的にはあったが、図化に耐える遺物は少なく、時期的な特徴を示すものとして次の２点を図化した。

760 土師器は杯で５層からの出土である。口径が 13.4cm、器高が 3.4cm、底径が 8.4cm を測り、内外面とも赤彩され、ともに回転による暗紋を施す。

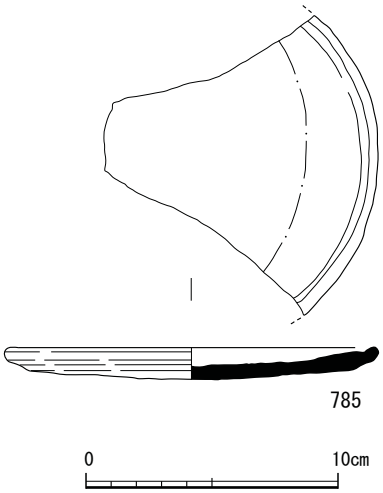
761 は黒色土器の高台付椀で、中層出土である。復元口径が 14.5cm、器高が 5.9cm、高台径が 7.5cm を測る。器表面は内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。外底面の高台内に製作時の板状圧痕が見られる。



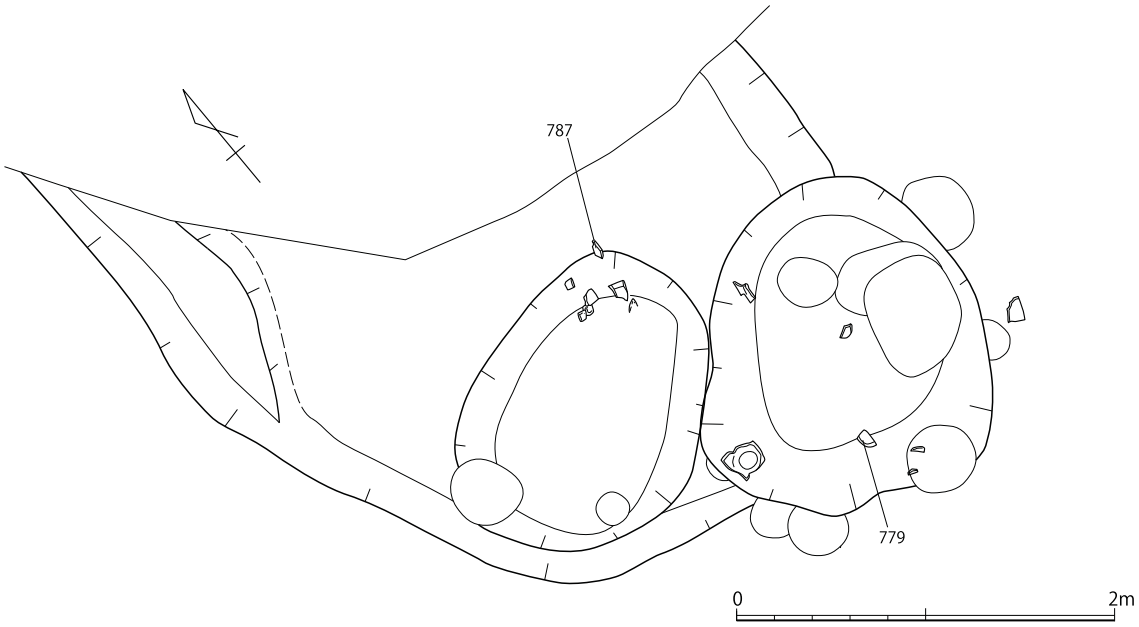
第 63 図　Ⅰ区　SK104 出土遺物実測図



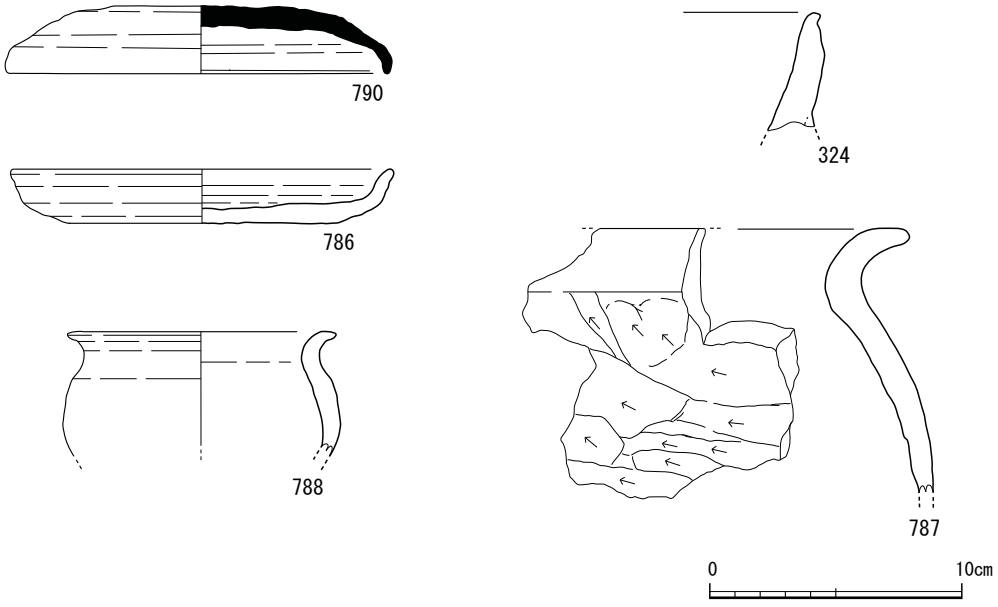
第 64 図　Ｉ区　SK104 出土遺物実測図



第 65 図　Ｉ区　SK107 出土遺物実測図



第 66 図　Ⅰ区　SK109 実測図



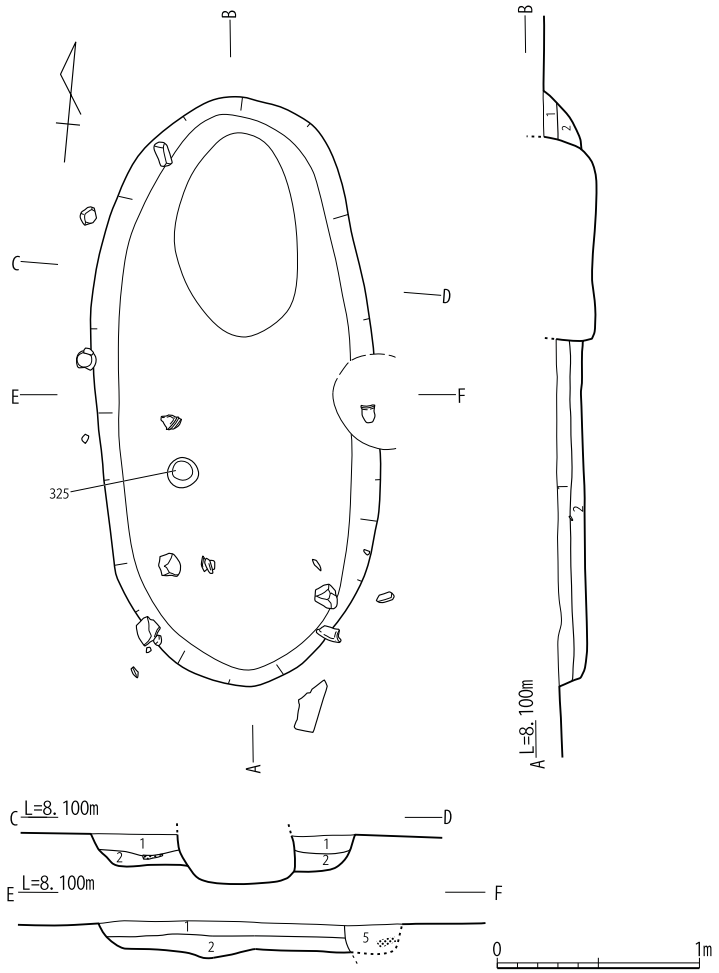
第 67 図　Ⅰ区　SK109 出土遺物実測図

成形は押し出し技法によるものか、内器面の見込みに成形時のコテあての跡が縦の沈線状に残る。

・SK-103

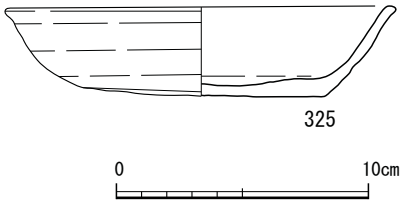
［遺構状況］　141-K-9･10 グリッドで検出である。周囲に正確不明の土坑が集中する場所で、溝状遺構も切り合っているため当初は形状を十分つかめなかった。最終的に確認できた形状はやや南北に長い円形で、径は 65cm、確認面からの深さは 37cm を測る。

埋土は３層に分かれる。１層は暗褐色層で、締まりのあるシルト層である。炭化物や土器片が混じる。２層も暗褐色シルト層である。土器片は多く混じる。３層は暗褐色シルト層で、地山層が少々混じる。

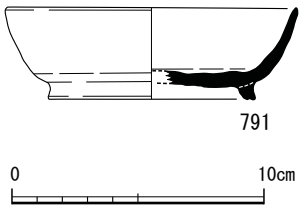


1層 黒褐7.5YR3/1 シルト 地山ブロック（ 1cm大)と土器､炭化物粒を多く含む　堀なし
2層 黒褐7.5YR3/1 シルト 地山ブロック（ 5cm大)を多く含む　炭化物粒を含む

第 68 図　Ｉ区　SK116 実測図



第 69 図　Ｉ区 SK116 出土遺物実測図



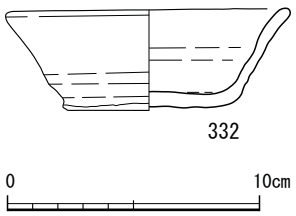
第 70 図　Ｉ区 SK123 出土遺物実測図

［出土遺物］　出土遺物も他の遺構との切り合い関係があるため、混入遺物も含まれていると考える。以下特徴的な遺物について述べる。

767 は､土師器の甕。768 は､土師器の杯で､1/2 の残存である。復元口径が 13.1cm、器高が 3.3cm、復元底径が 4.6cm を測る。外器面調整は回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ調整、内器面は回転ナデ調整。内外器面に赤彩が施される。769 は､土師器の杯で、残存口径が 1/2 あり、復元口径は 14.1cm、器高が 3.0cm、復元底径が 7.1cm を測る。内外器面に赤彩が施される。770 は、土師器の高台付椀で、復元口径が 13.6cm、器高が 6.0cm、底径が 7.7cm を測る。内外器面に赤彩が施される。他にカマドの上部片が２点出土している。

・SK-104

［遺構状況］　141-J-11･12 グリッドで検出した。この遺構も当初一つの大きな土坑と考えたが、その後の



第 71 図　Ⅰ区　SK124 出土遺物実測図

精査により複数の土坑やピットの集合体であることが確認できた。ただ、当初の遺構名も残すため、遺構を限定することにする。SK-109 を切っており、SP-1068 には切られている。

［出土遺物］　出土遺物は、取り上げ時にこの遺構名で取り上げているものについてここで記述した。そのため、のちに分割された遺構のものも含まれている可能性のあることを申し添えておく。

輸入陶磁器としては、白磁碗（Ⅱ b 類）の体部 1 点がある。

771 は、土師器の盤で、復元口径が 15.5cm を測る。器表面調整は、表面がヨコナデから手持ちヘラケズリ後ナデ、内器面がヨコナデからヘラミガキである。焼成は良好で、内外器面とも赤彩が施される。772 は、須恵器の杯で、口径が 14.3cm、器高 3.8cm、底径が 8.6cm を測る。773 は、土師器の小型甕（小甕 a）で頸部から底部までの破片である。外面が打ち欠かれ、外器面だけに赤彩が施される。774 は、土師器の甕である。復元口径は 26.6cm を測る。775 は、土師器の甑で胴部～底部の 1/5 が残る。復元底径は 16.4cm を測る。穴は底部全面に開けられたもので横方向に削り取られている。776 は、土師器の把手付鍋である。口縁部の 3/4 が欠損している。復元口径が 27.4cm、器高が 13.3cm を測る。底部はボール状であるので明確な底径は不明である。底部は回転させながらケズリを行う。把手は両側面の中位に 2 つ付けられている。

777 は、須恵器の蓋（蓋 c3）で、復元口径は 10.6cm を測る。778 は、須恵器の高台付杯で、底径は 7.0cm を測る。外体部～底部に自然釉がかかる。貼り付け高台である。779 は、須恵器の皿（中皿 a）で口縁部～底部まで残る。復元口径 13.8cm、器高 1.6cm、復元底径 12.2cm を測る。外底面に輪積痕が残る。780 は、須恵器の長頸壺（壺 a もしくは壺 e）で、体部～底部高台まで残る。復元底径が 13.6cm を測る。外器面調整は回転ヘラケズリ、底部は回転ナデ調整。内器面は回転ナデ、ナデ調整。781 は、須恵器の短頸壺（壺 a）で、復元口径 10.8cm を測る。外器面の畳表状の組織を巻き付けたタタキ板が残る。782 は須恵器の提瓶の破片である。張り出し部分の方で器表面に回転によるカキ目が残る。法量などは不明である。

その他、平瓦が 2 点出土している。

・SK-107

［遺構状況］　141-K-11･12 グリッドで検出した。確認面では浅い土坑ではあるが、 2 層に分層できる。別の土坑を切る。また、複数のピットが廃絶後に掘り込まれている。

［出土遺物］　785 は、本来は須恵器の蓋であるが、硯に転用されており、蓋内部がかなり磨研されている。復元口径 15.1cm、器高 1.25cm、復元底径 13.0cm を測る。その他、土師器の甕が 2 点出土している。

・SK-108

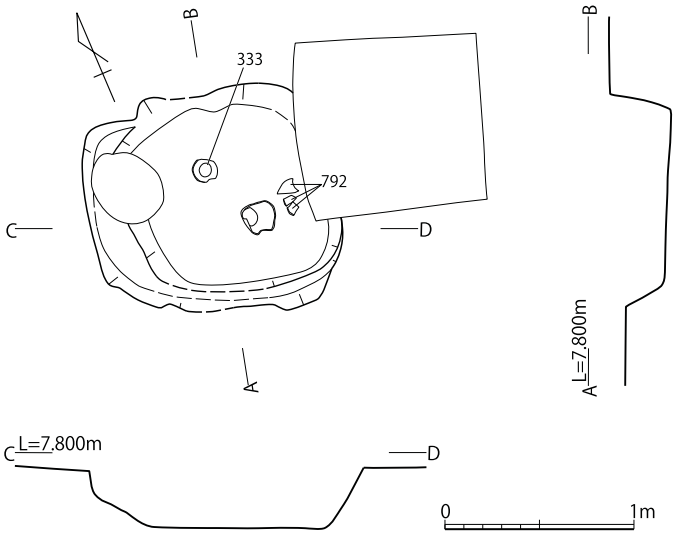
［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出。遺構自体は K-11 グリッドまで広がる可能性はあるが撹乱により失われている。確認した範囲では長径 1.8m を測る楕円形の形状が予想される。

［出土遺物］　遺物は出土したが図化まではしていない。カマドの上部片が 1 点出土した。

・SK-109

［遺構状況］　141-J-10･11 グリッドで検出。先に述べた SK-104 などの複数土坑やピットが切り合ったもので、当初一遺構としてとらえていた。詳細に検討を加え、 3 つの遺構の複合体ととらえ直した。大きい遺構は調査区外になっているため全体像は不明である。長軸で 3 mまでは確認できる。横幅が 3.2 mを測る。

この遺構の全体はほぼ南北方向に延びる。中の小土坑は東側が長軸 1.7 m、短軸 1.6 mを測る不整形なも



第 72 図　Ｉ区　SK133 実測図

のである。その西側のものは長軸 1.6 m、短軸 1.2 mを測る。いずれの土坑も性格は不明である。

［出土遺物］　この遺構は３つの遺構の切り合いになるが、取り上げに際し、遺物の出土地点まで特定していないため、複数土坑のどれに対応するかできていないため、遺物への注記をもとにこの遺構番号とされたものを取り上げた。

786 は土師器の皿である。復元口径が 15.2cm、器高が 2.1cm、復元底径が 17.5cm を測る。底部にはヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。キメが粗い。

787 は土師器の甕である。外器面に赤彩が施される。胴部は強く張りだすものと考えられる。

・SK-116

［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出した。長軸方向で 3.1 m、短軸方向で 1.5 mを測る長楕円形の遺構である。遺構はⅢ層からⅣ層へと掘削を進めている途中で確認した遺構で埋土と地山との差はほとんどみられない。ただ、遺構の埋土は炭化物と焼土を多く含む層である。埋土はその含有物の差から大きく２層に分けられる。色調はほぼ同じでやや炭化物の含まれ方が異なる。埋土内には大きな遺物は少なく、小破片のもののみが残る。形態と出土遺物の少なさ、炭化物の含有などを考慮し、墓であると調査時には考えていた。ただ、火葬骨などの出土や供献土器のようなものも見られないため、土坑に含めた。

この遺構の時期は遺物から判断して 12 世紀代と考える。

［出土遺物］　復元まで可能な出土遺物は少なく、図化できたのは次の一点である。

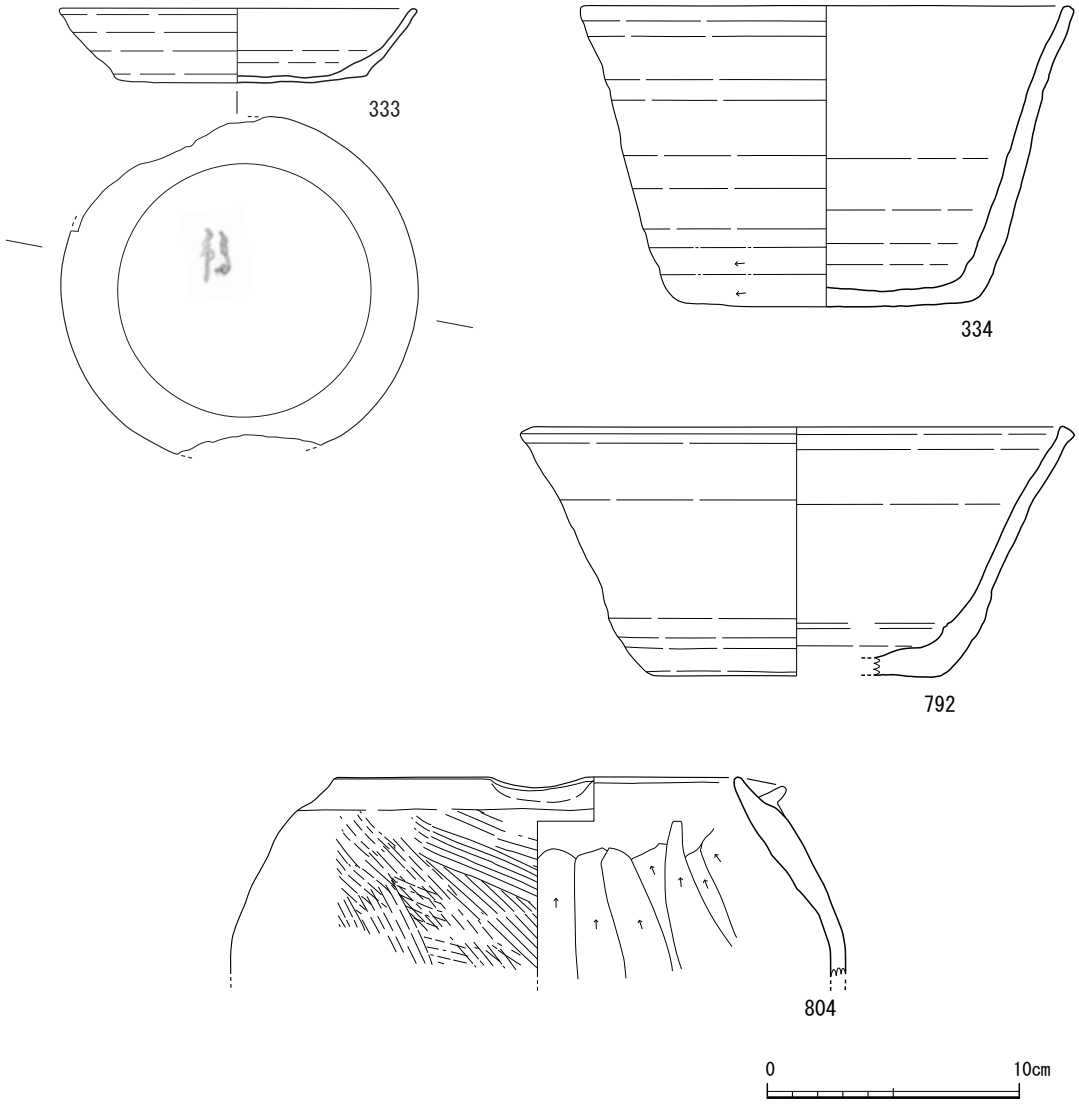
325 は土師器の杯で完形である。口径が 15.5cm、器高が 3.5cm、底径が 9.5cm を測る。外底部には糸切り離し後板状圧痕が残る。他に防長産と思われる緑釉陶器の皿の体部も出土している。

・SK-119

［遺構状況］　141-N-9 グリッドで検出。SK-703、SK-130 により切られ、東側の一部の辺のみが残る。土坑の一部にすぎないため、全体形状や規模などは不明である。

・SK-123

［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出。K-11 グリッドまで広がるものと考えるが、確認できていない。検



第 73 図　Ⅰ区　SK133 出土遺物実測図

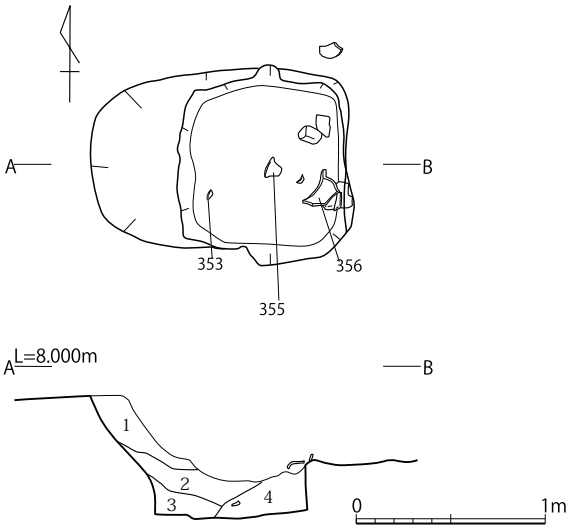
出状況では全体の西側半分ほどが検出できている。その範囲ではやや不整形な楕円形を呈している。南北方向の径は 1.2 mを測る。確認面から深さは 20cm ほどである。

［出土遺物］　791 は赤焼き須恵器の高台付杯で、口縁の 1/3 が残る。復元口径が 11.7cm、器高が 3.7cm、復元底径が 8.2cm を測る。高台は底部のヘラ切り離し後ナデ調整の後に貼り付けられる。高台の設置部に弱い沈線が巡る。杯部は屈曲が明瞭ではない。色調は外器面がにぶい赤褐 5YR4/3 で内器面が明赤褐 2.5YR5/6 を呈する。

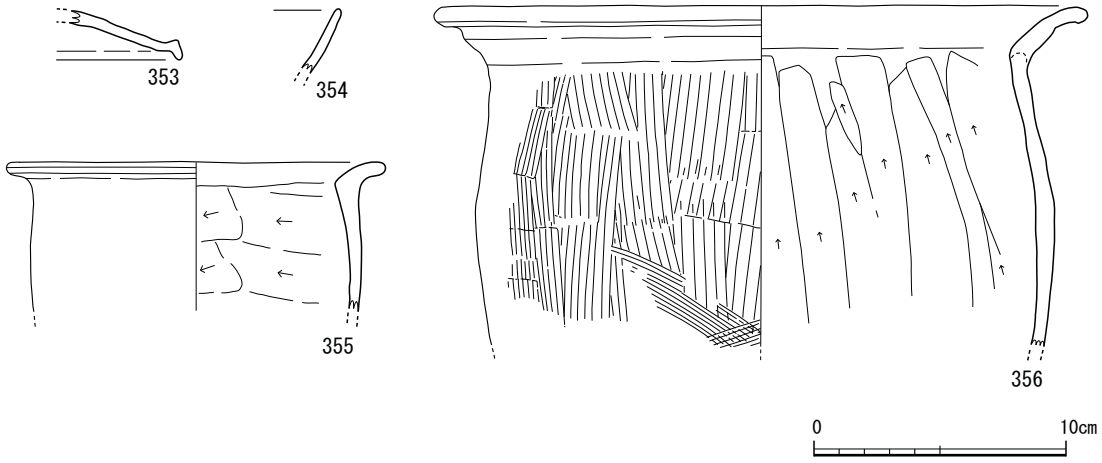
・SK-124

［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出。トレンチにより一部不明があるが、残された範囲でみれば東西方向にやや伸びた楕円形を呈する。規模は長径が 1.5 m、短径が 0.8 m、確認面からの深さ 20cm を測る。当初はもっと大きな土坑としていたが、精査の結果、いくつかのピットや土坑の集合体であることが確認できた。土坑としては 125SK をこの土坑が切り、さらに確認した 305SP や他の複数のピットによって切られている。

［出土遺物］　この遺構も精査によって複数遺構の集合体であることが分かったため、当初の遺物の収集に際



第 74 図　SK174 実測図



第 75 図　Ｉ区 SK174 出土遺物実測図

し、明確にこの遺構の遺物だけに絞り切れていない可能性もある。

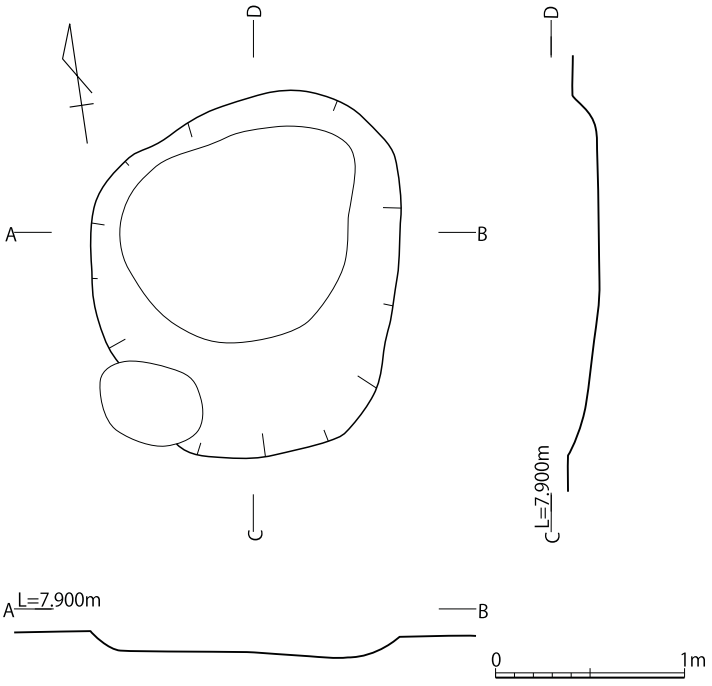
332 は土師器の杯で、完形である。口径が 11.3cm、器高が 3.9cm、底径が 6.65cm を測る。体部は底部からの立ち上がり角度が急でやや外反気味に延びる。底部に黒斑がみられる。

・SK-125

［遺構状況］　141-K-9･10 グリッドで検出。この遺構は当初 SK-124 と一体のものであったが、精査により別遺構であることが分かり、前後関係も分かった。結果、SK124 に切られる遺構であることも分かった。規模などは撹乱で破壊された部分もあり不明である。

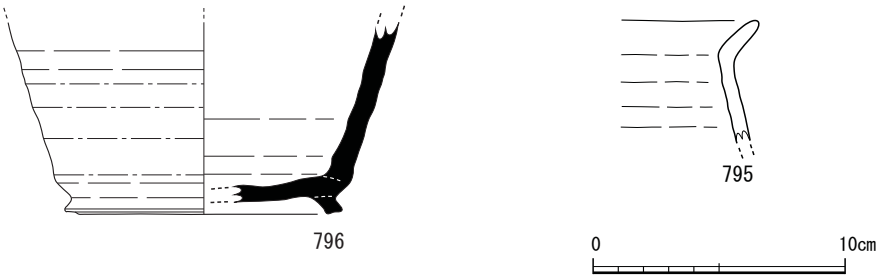
・SK-130

［遺構状況］　141-N-8･9 グリッドで検出。SK-703 と切り合い関係で切られているものと判断した。この土坑はさらにピットにも切られている。



1層 褐灰10YR7/1 シルト しまりある　灰、炭、胎土多く含む
2層 暗褐10YR3/3 シルト しまりある　灰、黄褐色ブロック少量含む
3層 暗褐10YR3/3 シルト しまりある　黄褐色ブロック、炭を含む
4層 褐色10YR4/4 シルト しまりある　褐色ブロック
5層 黒褐10YR3/2 シルト しまりある　黄褐色ブロック多く含む
6層 暗褐10YR3/3 シルト しまりある　黄褐色土混じる　炭、土師粒子少量

第 76 図　Ⅰ区　SK187 実測図



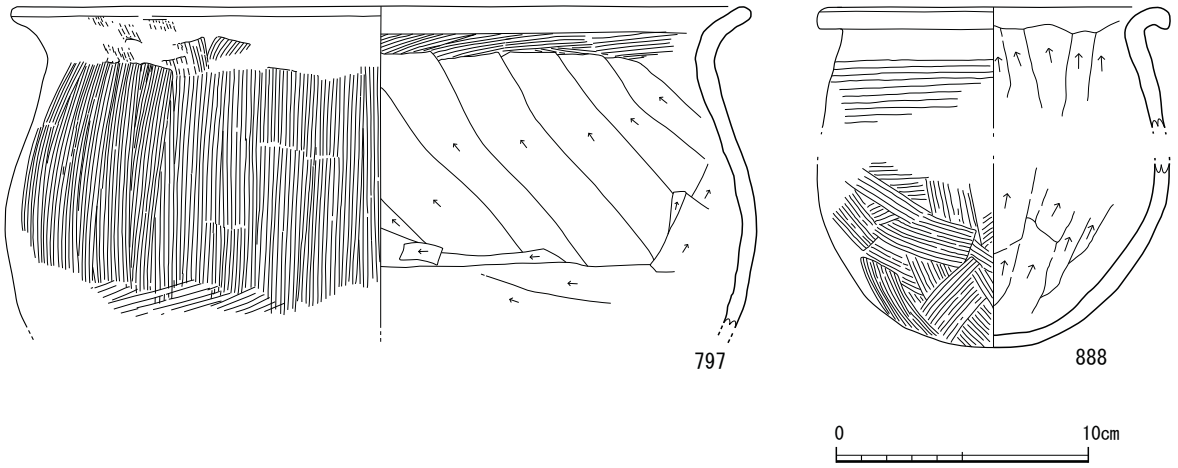
第 77 図　Ⅰ区　SK187 出土遺物実測図

・SK-133

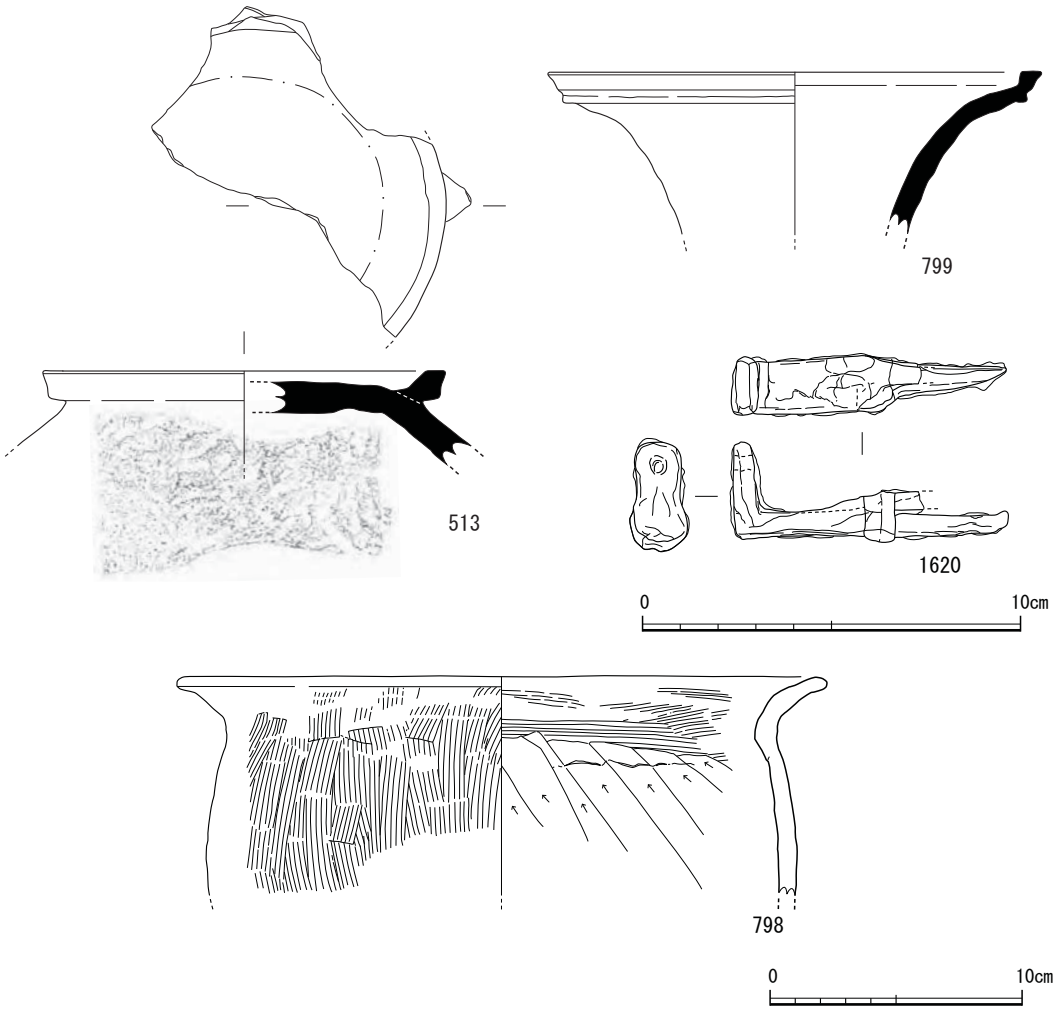
［遺構状況］　141-M-9 グリッド検出。複数遺構の切り合いの可能性もあるが、一応一つの遺構としてとらえた。一角を建物の基礎で破壊されていることと段があるように見えることから、平面形はやや変則的な方形の遺構である。南北軸では 1.1 m、東西軸では 1.3 mほどを測る。確認面からの深さは 35cm ほどを測る。内部にはやや完形に近い遺物が出土した。

［出土遺物］　輸入陶磁器としては白磁皿（Ⅴ - Ⅶ類）の口縁部が 1 点出土している。

333 は土師器の杯で、外底面に墨書が記されている。草書体によるもので判別が難しいが、「福」であろう。口径が 14.2cm、器高は 2.9cm、底径が 10.1cm を測る。器形は皿に近いものである。334 は土師器の鉢である。全体の 2/3 が残る。復元口径が 19.6cm、器高が 11.9cm、復元底径が 12.2cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデを丁寧に加える。全体的に橙色を呈する。792 は土師器の鉢で全体の 1/3 が残る。復元口径が 22cm、器高が 9.9cm、復元底径が 12cm を測る。内外面に赤彩が施される。外面に一部煤が付着

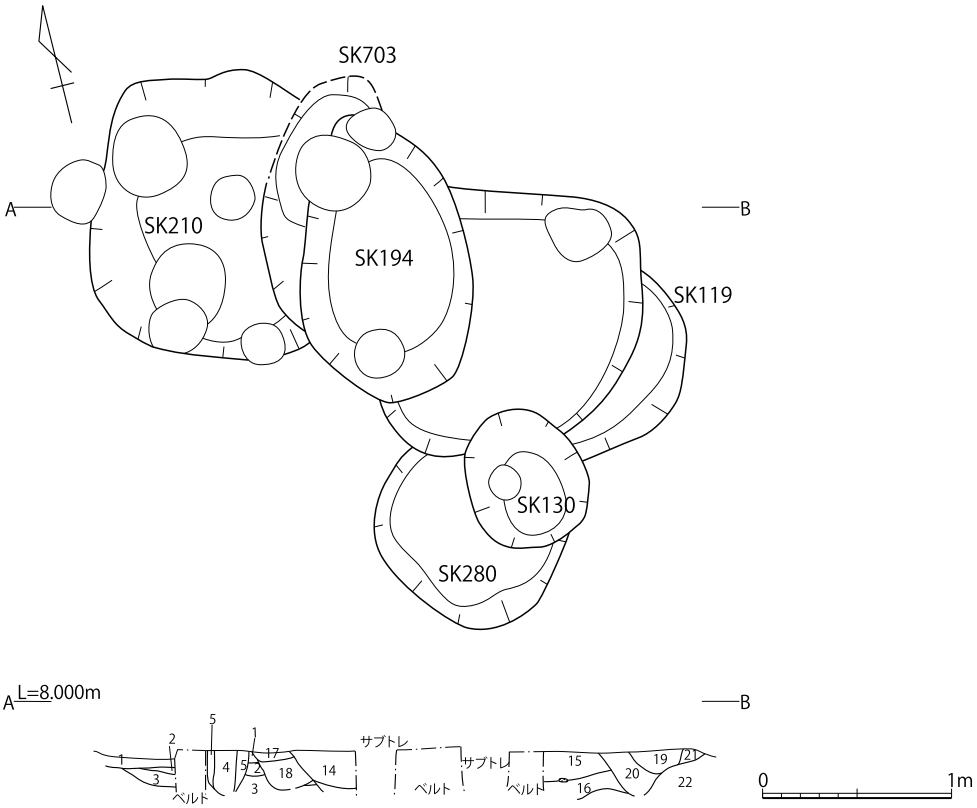


第 78 図　Ｉ区　SK196 出土遺物実測図



第 79 図　Ｉ区　SK207 出土遺物実測図 (1620 のみ S=1/2)

している。804 土師器の注口土器としたが、やや特殊な器形である口縁から胴部までのもので、1/4 が残る。復元口径が 15.8cm を測る。外器面には赤彩が施される。煤も付着か。



119SK 15層　黒褐色7.5YR3/1 シルト　黒色粒　赤色粒含む　ゴチゴチあり
　　16層　黒褐色7.5YR2/2 シルト　黄褐色　砂質ブロック　黒色粒含む
130SK 27層　黒褐色7.5YR3/2 シルト　黄色ブロック2/3を含む
194SK 14層　黒褐色7.5YR3/2 シルト　黄褐色砂質粒2/3を含む
210SK　1層　灰褐色7.5YR4/2 シルト　やや砂質土　黄色ブロックほとんど含まない
　　2層　灰褐色7.5YR4/2 シルト　黄色ブロック(1～2cm)多く含む
　　3層　暗褐色7.5YR3/3 シルト　やや砂質土
703SK 17層　灰褐色7.5YR4/2 シルト　砂質強い
　　18層　灰褐色7.5YR4/2 シルト　砂質強く細かい黄褐色砂質土を含む

第 80 図　Ⅰ区　SK210 ～ SK703 実測図

・SK-174

［遺構状況］　141-I-3･4 グリッドで検出。溝状遺構の SD-043 に切られているので、本来の切り込み面での形態は不明である。底近くの状況で確認すると本来は方形の遺構であったと考えられる。西側にみられる変形は溝状遺構による影響と考えられる。南北軸で 1.0 m、東西軸で 0.9 mを測る。確認面からの深さは 60cm を測る。

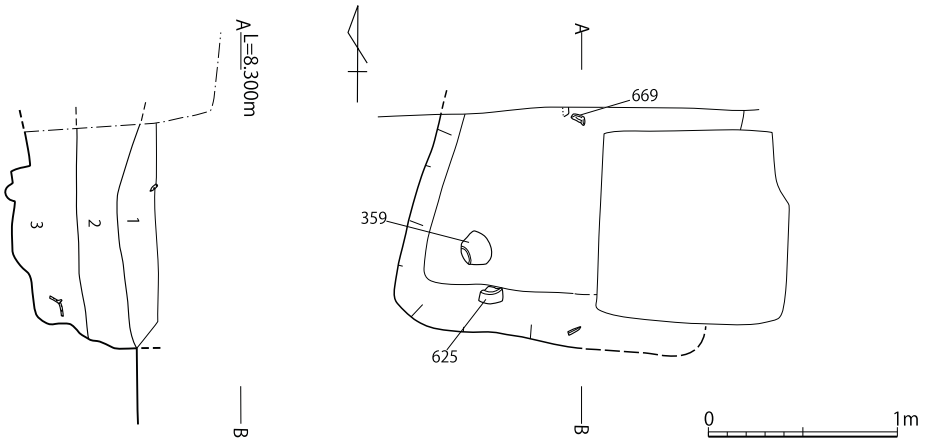
［出土遺物］　353 は土師器の蓋である。天井部が高く、口縁端部は浅いものの強い屈曲を示す。354 は土師器の杯の口縁部である。355 は土師器の小型甕である。復元口径が 15cm を測る。胴部は口縁径よりも狭く直線的に底部へと向かう。内器面は横方向のヘラケズリが行われる。

この他に平瓦片 1 点が出土している。

・SK-183

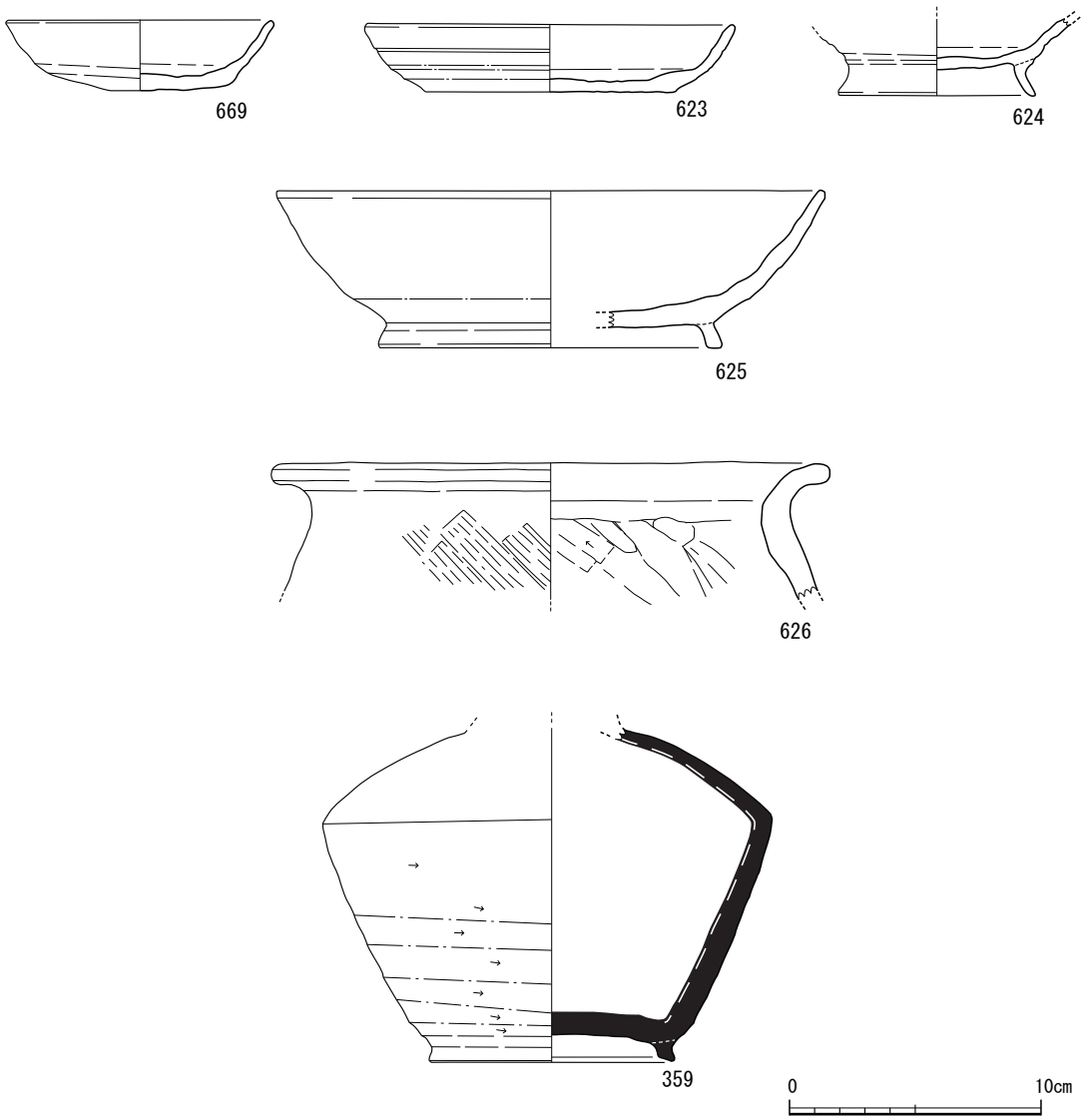
［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出。SK-108 に近接している。ほぼ円形を呈し、径が約 50cm、確認面からの深さは 10cm を測る。

　埋土は 1 層のみで、黒褐色（10YR3/2）を呈し締まりがない。

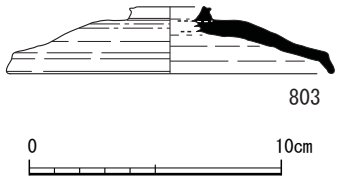


1層 暗褐7.5YR3/3 暗褐色ブロックを(0.5～2cm)多く含む　砂岩質、少し含む
⑥より黄褐色土ブロックが多い

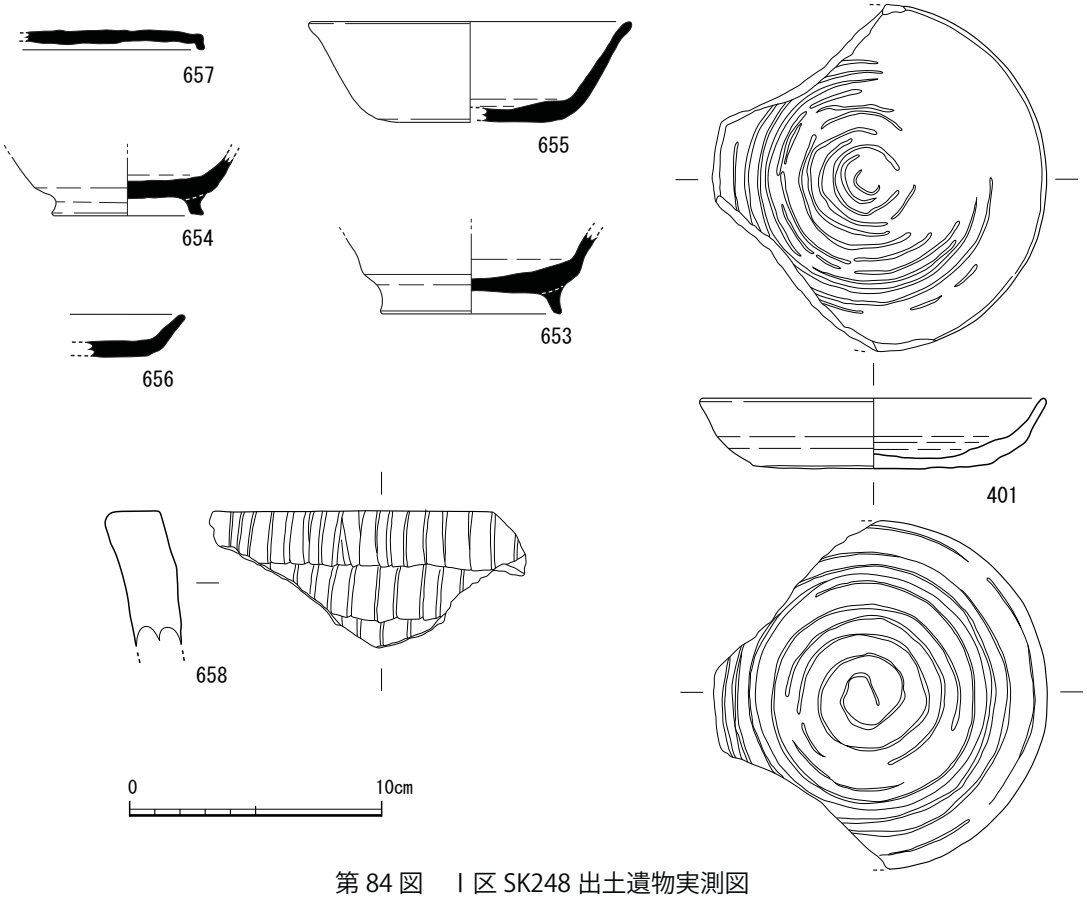
第 81 図　Ｉ区　SK211 実測図



第 82 図　Ｉ区　SK211 出土遺物実測図



第 83 図　Ⅰ区　SK215 出土遺物実測図



第 84 図　Ⅰ区 SK248 出土遺物実測図

・SK-184

［遺構状況］　141-J-11・12 グリッドで検出。遺物は出土しているが、図化できるものがなかった。

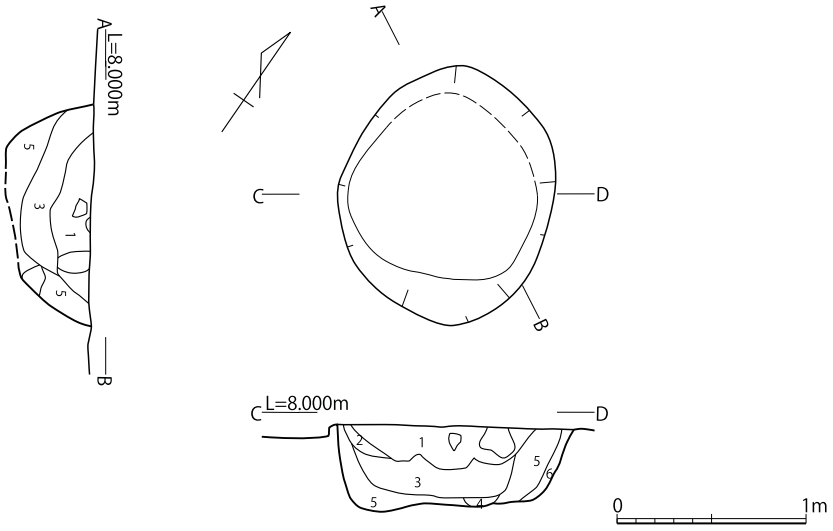
・SK-187

［遺構状況］　141-M-10・11 グリッドで検出。東西軸で 1.6 m、南北軸で 1.9 mを測る不正形な土坑である。確認面からの深さは 10cm ほどと浅く、本来の深さは不明である。

［出土遺物］　795 は土師器の小型甕である。外器面は横方向のカキメ調整がなされる。796 は須恵器の高台付壺の体部下位から底部の破片である。復元底径は 11cm を測る。外器面は底部から横方向の回転ヘラケズリが施される。底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整がなされ、そこに高台が貼り付けられる。高台の接地部分は強い指つまみによる成形がなされる。

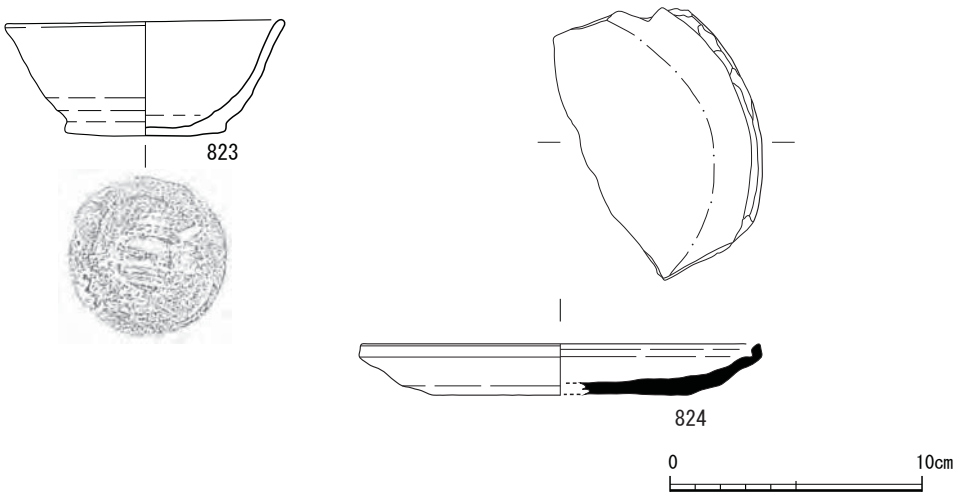
・SK-190

［遺構状況］　141-M-10 グリッドで検出。当初はかなり大きな土坑という認識で遺構範囲・名称を設定した



1層 褐灰色10YR7/1 シルト しまりある　灰、炭、粘土を多く含む
2層 暗褐色10YR3/3 シルト しまりある　灰、黄褐色ブロックを少量含む
3層 暗褐色10YR3/3 シルト しまりある しまりやや強い　黄褐色ブロック、炭を含む
4層 褐色　10YR4/4 シルト　褐色ブロック
5層 黒褐色10YR3/2 シルト しまりある　黄褐色ブロック、炭、土師粒子やや多く含む
6層 暗褐色10YR3/3 シルト　黄褐色土混じる　炭、土師粒子を少量

第 85 図　Ｉ区　SK272 実測図



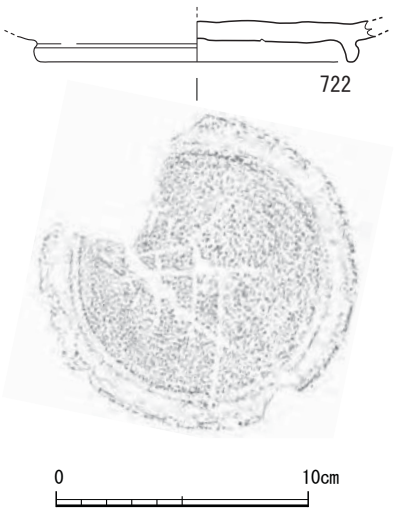
第 86 図　Ｉ区　SK272 出土遺物実測図

が、精査した結果複数の土坑とピットの集合であることが判った。その時点でこの遺構名は切り合いの中で最初に掘り込まれた土坑の名称とした。

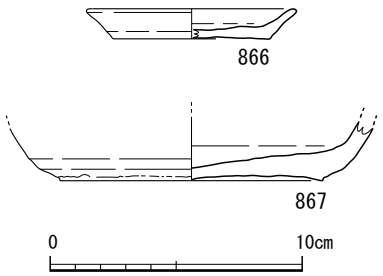
・SK-196

［遺構状況］　141-M･N-9 グリッドで検出。SK-206、SD-192 を切っているが、ピットに切られる。南北方向に長い不整形気味の楕円形の遺構である。長径が 1.4 m、短径が 1.1 mを測る。確認面からの深さは 20cm を測る。

［出土遺物］　797 は土師器の大型甕で、口縁から胴部中位までの破片である。復元口径は 28.8cm を測る。



第 87 図　Ⅰ区　SK342 出土遺物実測図



第 88 図　Ⅰ区　SK897 出土遺物実測図

胴部の最大径が口径よりも張り出すが、胴部の形状から器高はさほど高くないようである。888 は土師器の小型甕で、完全に接合しなかったが同一個体として考える。復元口径は 14.0cm を測る。器高は不明であるが 14cm 前後であろう。胴部上位には横方向のカキメが施され、中位以下は多方向のハケメ調整が施される。内器面は縦方向のケズリによる整形がなされる。

・SK-199

［遺構状況］　141-M･N-10 グリッドで検出。いくつかのピットに切られているものの形状は確認できる。やや長い楕円形を呈し、長径で 1.0 m、短径で 60.0 mを測る。確認面からの深さ 20cm を測る。

・SK-204

［遺構状況］　141-N-9 グリッドで検出。ピット群に切られている。不整形な円形を呈している。最長径で 1.5cm を測る。確認面から底面までの深さは 20cm を測る。

　出土遺物は多少あるものの図化はできなかった。

・SK-206

［遺構状況］　141-M-9 グリッドで検出。ピットや他の土坑の集中する範囲にあり、明確な遺構の分離が難しいところではあるが、確認した状況では不整形で南北にやや伸びた遺構である。長さ・幅ともに他の遺構により切られているため法量は不明である。

・SK-207

［遺構状況］　141-M･N-9･10 グリッドで検出。

［出土遺物］　513 は須恵器の高台付壺の底部を利用した転用硯である。高台径の 1/3 ほどしかないため正確な形状は不明であるが､破損した壺の底部を裏返して利用したものであろう。使用した面はよく磨研され、墨痕も若干残る。799 は、須恵器の甕の口縁部である。復元口径が 19.6cm を測り、口縁端部がくの字口縁を呈するもので､荒尾窯産のものと考える。798 は土師器の甕で口縁部から胴部にかけて口縁の 1/7 が残る。復元口径は 25cm を測る。口縁部の外反は少なく、胴部もほとんど張り出さずに底部へと向かう。外器面に煤が付着する。

　金属器として、1620 の鉄製品がある。この遺物は錠前の牡金具で、バネ軸が２本で縦に２段に並ぶものである。基部付近のみが残存し、施錠部は欠損している。バネは欠損しているが、横に並ぶものである。弦通し孔は錆でふさがっているが、痕跡から径 0.4cm ほどある。弦受け部の長さは 4.1cm、区の長さが 0.4cm を測る。バネ部は下段のもので 3.1cm ほど残存し、バネ自体は残っていない。重さは 21.1g を測る。形態上合田分類のＢ群２類になる。

・SK-210・703・194・119・130・280

［遺構状況］　141-N-8･9 グリッドで検出。当初は大きな土坑と考えていた遺構であったが、詳細に検討したところ、図に示すように土坑群の切り合いにピット群が加わった状態のものと判った。いずれの遺構も掘削深度は浅くその性格は不明である。

［出土遺物］　出土遺物はあったが、図化できるものがなかった。埋土中に丸瓦が 1 点あった。

・SK-211

［遺構状況］　141-M-9･10 グリッドで検出。土層確認ベルトにより一部しか検出できず、また建物基礎によって一角を破壊されてもいた。確認できた範囲で遺構の状況をみると、方形のものと考えられ角がわかる。幅は約２m、長さは確認できている範囲で 1.5m である。深さは確認面から 1 mほどで、土坑の中ではかなり意図的に掘削されたものと判断される。

　埋土は３層確認している。

［出土遺物］

　359 は須恵器の高台付長頸壺で、３層の下部付近、遺構の底付近で出土した。頸部より上は欠損、もしくは意図的に打ち砕かれている。頸部以下は欠けていない。このようにした場合、蔵骨器となっているものがあるが、内部に人骨らしきものはなかった。肩部の径は 15cm、高台径は 9.5cm を測る。肩部より下位の外器面は横方向の回転ヘラケズリにより器面調整がなされる。肩部に自然釉がかかる。

　623 は土師器の杯で２層の出土である。口径が 14.4cm、器高が 2.7cm、底径が 10.0cm を測る。かなり器表面が磨耗して不分明であるが、器表面全体に赤彩が施されていた痕跡がある。また、回転による暗文がみられる。やや煤けていることから、灯明に使用したものか。624 は土師器の高台付杯で３層出土である。体部以上はなく、底部付近に限られる。高台径は 7.8cm を測る。高台は貼り付けで、高台の高さが 1.5cm を測り、やや高めである。赤彩されている。内底面に煤が付着しているので燈明に使用したものか。625 は土師器の高台付大杯である。復元口径は 21.4cm、器高が 6.25cm、高台径が 13.5cm を測る。高台断面はやや角張る。626 は土師器の甕で４層から出土した。復元口径は 21.7cm 測る。669 は土師器の杯である。口径が 10.5cm、器高が 2.8cm、底径が 7.1cm を測る。器口縁端部に煤が付着しているところから灯明皿として使用か。

　627 は軒平瓦である。このほかに丸瓦 1 点が出土している。

・SK-215

［遺構状況］　141-N-10 グリッドで検出。当初大型の土坑という認識であったが、精査の結果２土坑の切り合いと判断した。埋土は非常に似通っており、確実な違いは底部までの掘り下げたのちに確認した。埋土は

［出土遺物］　803 は須恵器の蓋である。輪状つまみを持つもので天井部が高く、口縁部はやや開いた状態で弱く屈曲する。全体の 1/4 が残る。復元口径が 12.9cm、器高が 2.65cm を測る。

・SK-248

［遺構状況］　141-O-9･10 グリッドで検出。

［出土遺物］　653 は須恵器の高台付椀で体部から高台部分まで残る。復元底径は 7.2cm を測る。654 は須恵器の高台付杯でやや丸みを帯びた底部に貼り付け高台を付ける。高台の端部は指で丁寧に作る。高台径は 6.0cm を測る。655 は須恵器の杯で、復元口径が 12.8cm、器高が 4.0cm、復元底径が 7.3cm を測る。656 は須恵器の皿である。657 は須恵器の蓋で天井部は扁平で口縁端部が直角に屈曲する。401 は土師器の杯

で内外器面にヘラによる回転暗文が施される。口径は 13.8cm、器高が 2.8cm、底径が 9.6 を測り、やや扁平な皿に近い形態である。

658 は石鍋の口縁片である。外器面に工具による加工痕が残る。形態上の特徴から把手のないものか、瘤状把手のつくものであろう。出土土器類と時期的に整合する。

・SK-272

［遺構状況］　141-O-9・10 グリッドで検出。やや不正形ながら円形の土坑である。長軸で 1.4 m、短軸で 1.1 mを測る。深さは確認面から 50cm ほどである。埋土状況からみると徐々に堆積していったものと考える。

［出土遺物］　823 は土師器の椀である。遺構の上層からの出土である。口径が 11.1cm、器高が 4.6cm、底径が 6.4cm を測る。底部はヘラ切り離しの後板状圧痕が残る。824 は須恵器の蓋であるが、転用硯として利用され、内器面の中央部付近が強く磨研されている。出土層位は下層である。口径が 16.0cm、器高が 2.0cm を測る。本来の蓋としては天井部が平坦で、口縁部は短く強く屈曲する。この他に丸瓦が 2 点出土している。

・SK-342

［遺構状況］　141-O-11・12 グリッドで検出。

［出土遺物］　722 は土師器の高台付盤と考える。 1 層と 4 層で出土したものが接合したが、底部の高台付き部分のみの出土である。復元高台径が 12.5cm を測る。底部高台内に「新」という文字が行書で大きく刻書されている。この他に丸瓦が 1 点出土している。

・SK-897

［遺構状況］　141-G-3・4 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器として白磁碗が 4 点出土している。Ⅴ -1 類もしくはⅧ -2 類が 1 点、Ⅵ -b 類が 1 点、Ⅳ類の口縁が 1 点、Ⅳ～Ⅷ類の体部が 1 点出土している。

866 は土師器の小皿で、復元口径が 8.2cm、器高が 1.2cm、復元底径が 6.2cm を測る。外底面は糸切り離し後板目状圧痕が残る。煤が付着しているところから灯明皿に転用したのであろうか。867 は土師器の杯で底部片である。復元底径が 10.5cm を測る。外底面には糸切り離し後板目状圧痕が残る。

(6)　井戸

井戸遺構は、10 基確認した。形態的には素掘りのものがほとんどである。ただ、SE-066 の 1 基のみ底部にクスノキを刳り貫き、4 分割して井戸枠としてはめ込んだものがあった。

時期的には古代と中世初頭に大きく分かれる。出土遺物による判別の他、底面までの掘り込みの深さの違いがある。この調査区で確認されたものでは、中世のものが古代のものに比べ深い。また、規模においてもより大形である。

報告では近代のものも加えている。

・SE-038

［遺構状況］　141-K-5・6G に位置する近代井戸で、井戸枠が無い。確認面での直径 1.5m を測る。底面までの掘削は行っていない。

［出土遺物］　埋土中に近代以降の遺物を多量に含む。

・SE-039

［遺構状況］　141-S-5 グリッド。近代井戸で、上部構造は不明であるが、確認面以下に凝灰岩の切石による井戸枠が有る。内部の掘り下げは行っていないので深さ等は不明である。上部のみで確認した遺物には古代の遺物も含まれるが、特にその裏込めに使用された石材に混じってレンガ片があった。このレンガは月星化成以前の段階のものであろう。

・SE-045

［遺構状況］　141-I-3・4 グリッドで検出。素掘りの井戸で、ほぼ直に掘り下げているようである。確認面での上端の径は 1m ほど、確認面からの深さが 3.5m を測る。基底部近くになると、径が 40cm ほどとなりかなり狭くなる。堆積は廃棄後に徐々に埋没していったもののようである。

［出土遺物］　68 は、土師器の甕の頸部である。69 は須恵器の蓋で全体の 1/5 が残る。天井部は扁平で口縁部に僅かな屈曲が見られる。復元口径が 14.2cm を測る。70 は須恵器の長頸壷の頸部である。上部に二重口縁の一部が見える。707 は土師器の杯で、口径が 13.0cm、器高が 3.6cm、底径が 9.8cm を測る。708 は須恵器の皿で全体の 1/4 残る。復元口径が 14.0cm、器高が 2.0cm、復元底径が 10.8cm を測る。709 は、須恵器の高杯で脚部を中心に杯部底部から脚部上部が残る。

・SE053

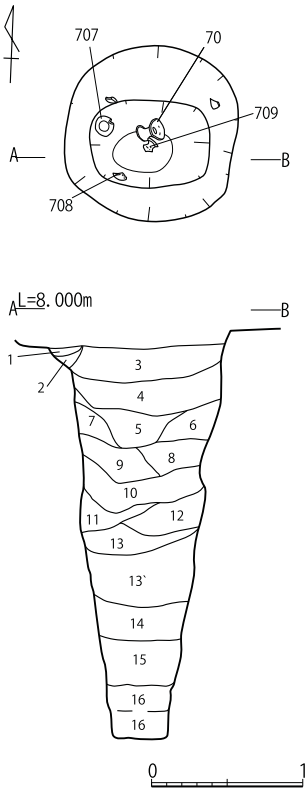
［遺構状況］　141-L-1・2 グリッドで検出。半分は工場基礎撤去の際に削られる。確認面での長径が 1.8m、深さは 2.0m まで確認した。調査途中に崩壊したが、地山が砂質であるため再度掘り返すのが危険であったので確認できたところで留めた。

［出土遺物］　この遺構からの出土遺物は少ない。図化したのは 1 点のみである。

206 は内黒土器の高杯椀である。底部付近のみの破片である。図化しなかったが、平瓦が 1 点出土している。

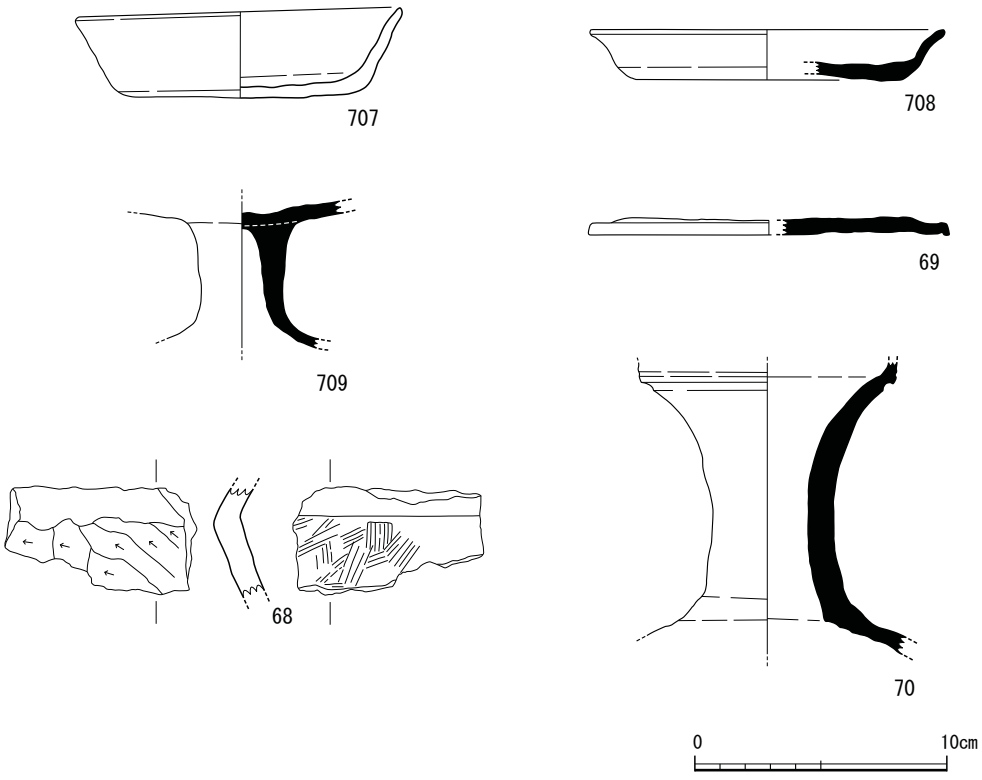
・SE-060

［遺構状況］　141-J-1・2 グリッド検出。撹乱にかかる部分で検出したため上部の状況が不明確である。確実な面でいえば、直径は 3.0m を測る。そこからさらに 1.5m ほど掘り下げた部分で井戸の径は 1m ほどと小さくなり段状になっている。その一角には一段の小さな階段状の掘り込みが設けられている。小さくなっ

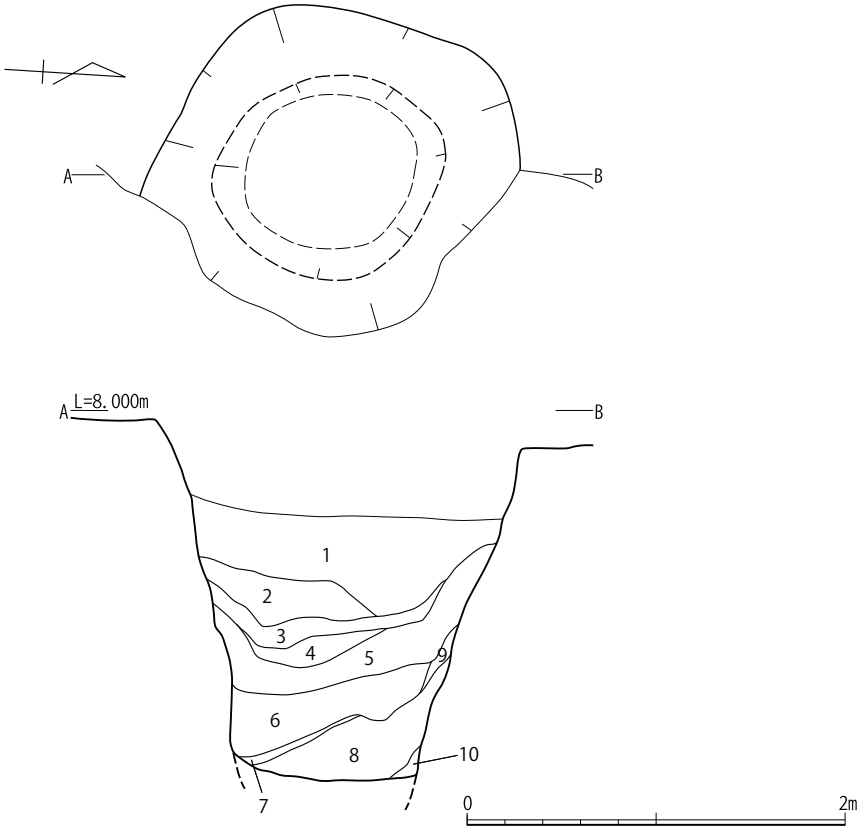


1層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	黄白色地山ブロック細粒
2層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	3よりやや暗い
3層	黒褐	10YR3/1	シルト	黄白色地山ブロック(2～3cm)多く混じる赤褐色点混
4層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	黄白色地山ブロック一部混じる赤褐色白色ブロックも一部混じる3より少ない
5層	黒褐	7.5YR3/2	シルト	3より茶色味を帯びる黄白色地山ブロック赤褐色ブロックごく一部しか混じらない
6層	黒褐	7.5YR2/1	シルト	赤褐色ブロック(2～3cm)を多く含む
7層				6と同様自然に埋まったに近い土
8層	黒褐	7.5YR2/1	シルト	黄白色地山ブロックごくわず
9層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	か含む赤褐色細粒混じる
10層	黒褐	7.5YR2/2	シルト	自然に埋まったに近い土
11層	黒褐	7.5YR2/2	シルト	黄白色地山ブロック混
12層	黒褐	10YR2/2	シルト	ブロックなし
13層	黒褐	10YR2/2	シルト	黄褐色ブロック混じる
13'層	黒褐	10YR3/1		淡黄褐色シルト
14層	にぶい黄	2.5Y6/4		赤褐色シルト混じる
15層				黄褐色点混砂質土
16層				砂質土

第89図　Ⅰ区　SE045実測図(1/50)

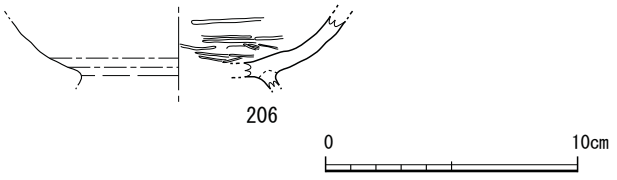


第90図　Ⅰ区　SE045出土遺物実測図



1層	黒	7.5ＹＲ2/1	シルト	しまり強い	褐色･灰白･ 灰黄（ 3: 2：1)の砂質ブロック（1cm～5cm)が多量に入り混じるベースの土が少ない
2層	黒	10ＹＲ2/1	シルト	しまり弱い	褐色･灰白（ 3：1)の 砂 質ブロック（1cm～3cm)が入り混じるベー スの土が少ない
3層	灰白	7.5ＹＲ7/1	砂	しまり悪い	褐色ブロック（ 1cm～4cm)を含む砂とブロックの比率 4:1
4層	灰白	7.5ＹＲ7/1	砂	しまり悪い	褐色ブロック（ 1cm～3cm)を多量に含む砂とブロックの比率 1：3
5層	黒褐	10YR2/2	シルト	しまり悪い	褐色ブロック （1cm～3cm)を非常に多く含む
6層	黒褐	10ＹＲ2/3	シルト	しまり弱い	砂が少量混じっている褐色･灰白（ 5：1)ブロックを多く含む
7層	黒	10ＹＲ2/1	砂	粒子粗い	5：1
	黒褐	10ＹＲ2/3	シルト		
8層	褐	10ＹＲ4/4	シルト	しまり悪い	砂質強い褐色･灰白ブロッダ 砂質)、黒い砂と混在
9層	オリーブ褐	2.5ＹＲ4/5	砂	しまりなし	粒子やや粗い
10層	黒	10ＹＲ2/1	砂	しまりなし	粒子粗い

第 91 図　Ｉ区　SE053 実測図

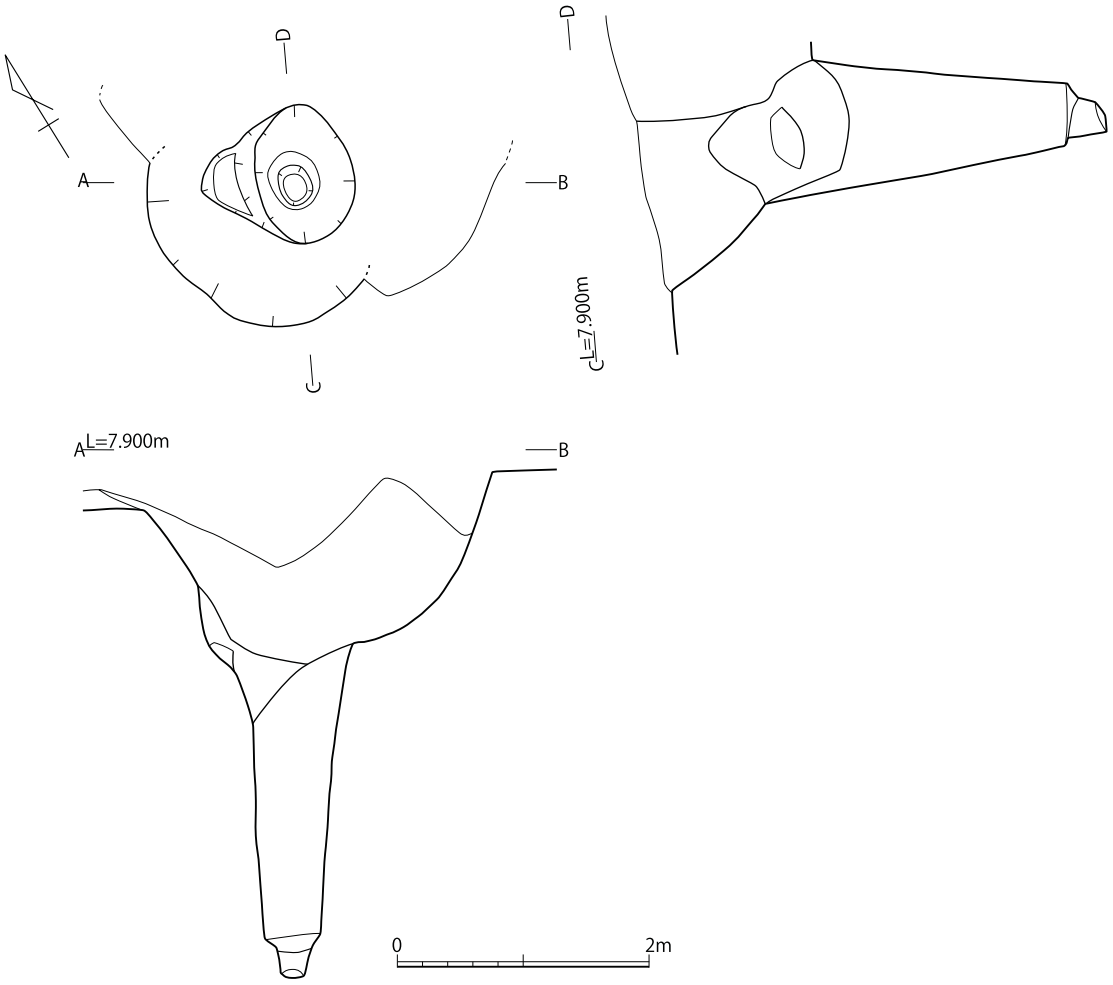


第 92 図　Ｉ区　SE053 出土遺物実測図

た井戸坑はほぼ垂直に最下部まで掘り込まれ、底はさらに径を縮めて 20cm ほど掘られる。最上部確認面からの深さは 4m 強である。段掘りされたこのような井戸には段部分まで井戸枠が設けられていた可能性があるが、調査時には木片などは確認できなかった。この井戸は遺物から古代のものと考える。

［出土遺物］　出土遺物数はさほど多くはなく、ここでは５点ほど図化した。

243 は土師器の杯である。底部は手持ちヘラケズリが施される。口縁は弱く内傾する。内・外器面に赤



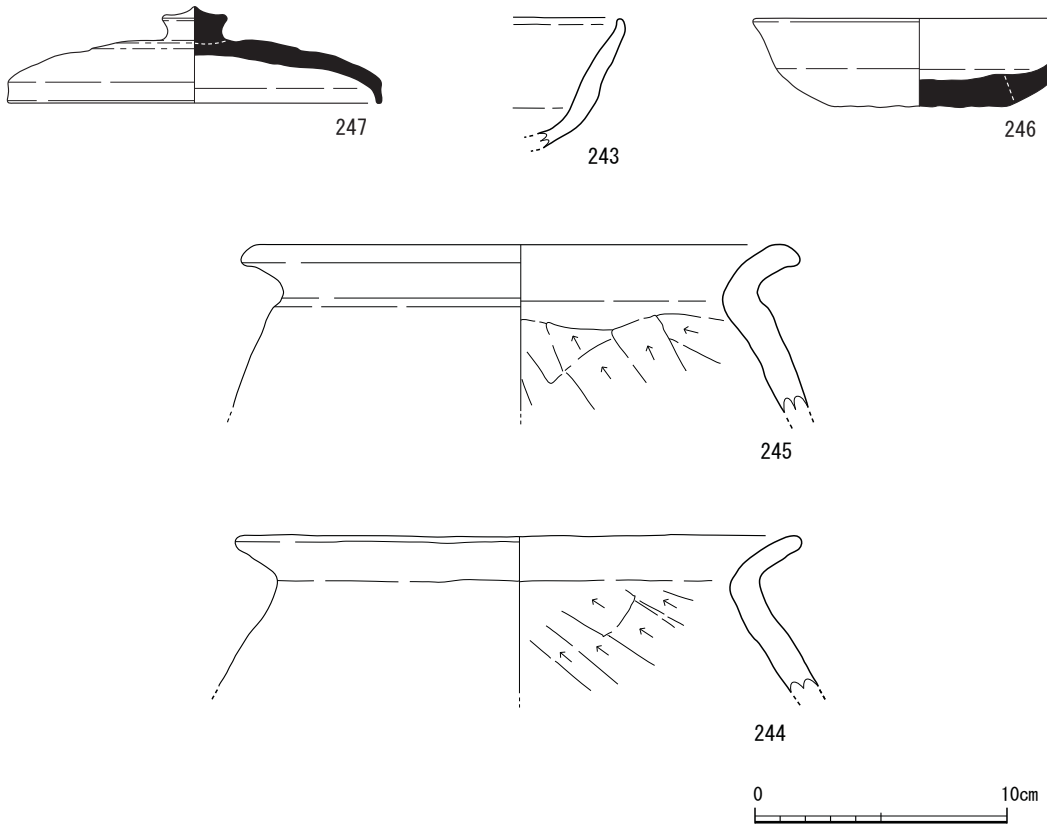
第 93 図　Ⅰ区　SE060 実測図

色顔料が塗布される。244 は土師器の甕で、全体の 1/6 が残る。復元口径が 22.4cm を測る。外器面及び内器面頸部付近まで赤色顔料が塗布される。245 は土師器の甕で復元口径が 22.3cm を測る。246 は須恵器の杯で、全体の 1/6 が残る。復元口径が 13.3cm、器高が 3.6cm、復元底径が 7.2cm を測る。247 は須恵器の蓋で、復元口径が 14.9cm、器高が 3.8cm を測る。擬宝珠のツマミを持ち、口縁端部が直角に立つものである。内器面が摩研しており、転用硯として使用されたと考える。

・SE-134

［遺構状況］　141-H・I-3 グリッドで検出。SD-046 の溝状遺構を精査中に検出した遺構で、当初は土坑と判断していた。一角は SD-046 で切られているため正確な平面形は不明であるが、残った範囲でみるとやや長方形に近い。長軸方向が約 1.5m、短軸方向が 1m ほどである。確認面からの深さ 1.2m ほどで掘り込みが段を形成して狭くなり、平面形が 1.0m × 0.8m ほどの楕円形になり、ほぼ直線的に縦掘りされる。残念ながら最下層が不安定な砂質土であることと、狭さのために人力での掘削が不可能になったため最下部の確認はできていない。確認できた最下層での掘り方の径は約 40cm である。埋土状況から直に近い縦掘りは早く埋められ、段状になった部分から上は自然堆積のようである。遺物の多くはこの遺構がかなり埋まった段階のものが多かった。

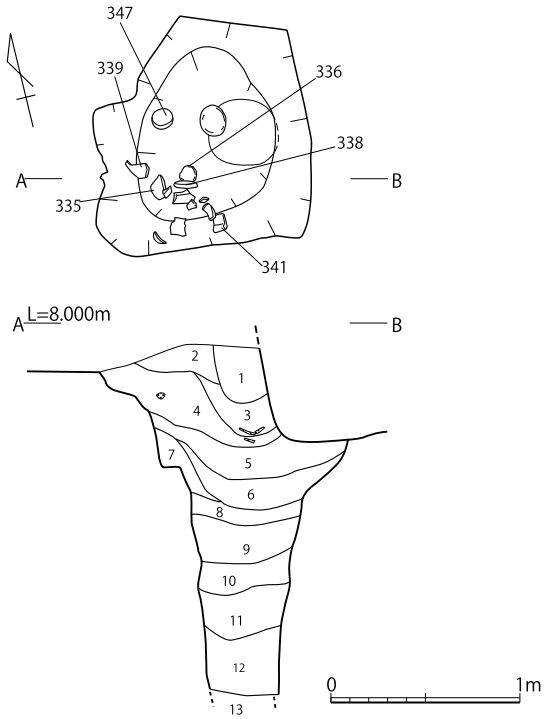
［出土遺物］　遺物の出土量はかなり多かったが、ここでは 13 点図化した。



第 94 図　Ｉ区　SE060 出土遺物実測図

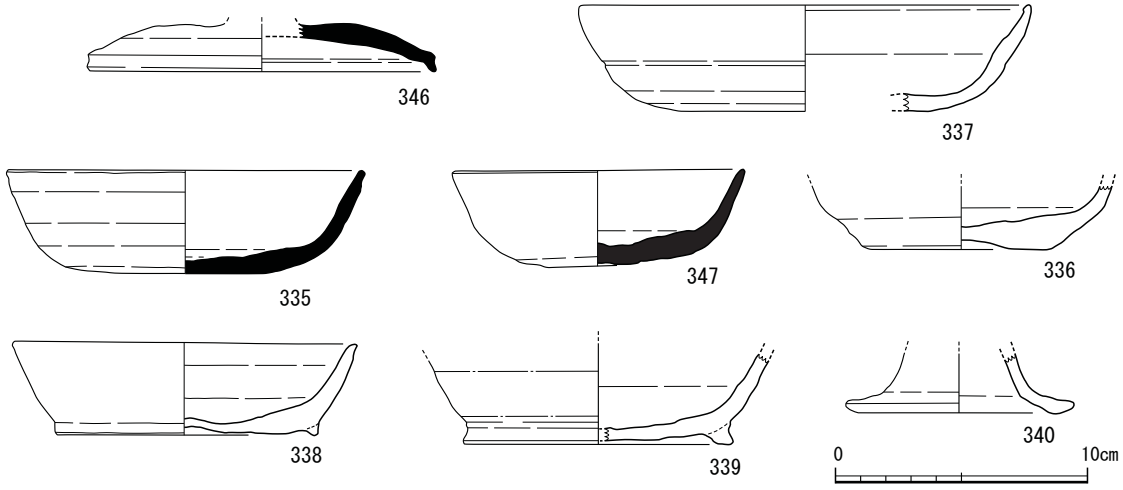
335 は赤焼の須恵器杯（中杯 a）である。完形品で口径が 14.2cm、器高が 4.1cm、底径が 9.4cm を測り、やや大きめの器形である。336 は、土師器 杯（杯 a）で体部下位から底部が残る。底部から急に広がり折れて立ち上がるものである最下層から出土。底径は 6.9cm を測る。337 は土師器の杯（杯 a）で口縁から底部まで残るもので口縁の 1/5 残る。口縁端部でわずかに内傾し、内器面口縁端部を細かく内側に丸めてその下位に弱い沈線を生じさせる土器で、形状から都城系土器に見られる形態をまねている。復元口径が 18.0cm、器高が 4.2cm を測る。やや径は大きい。338 は土師器の高台付杯（中椀 c ×杯 c）のほぼ完形品で、最下層から出土している。口径が 13.6cm、器高が 3.7cm、高台径が 10.4cm を測る。高台は貼付けで非常に高さが低く、断面三角に近くやや異例な印象を受ける。339 は土師器の高台付杯で底部の 1/5 が残る。外底面はケズリがなされた後に高台を貼り付けている。高台は低く端部が外側に開く。復元高台径は 10.6cm でやや大型品である。340 は土師器の高杯脚（高杯 a）である。復元底径は 9.0cm である。内・外器面は赤彩される。345 は赤焼須恵器の高杯（高杯 a）の脚部のみで、脚径の 1/2 が残る。底径が 10.8cm を測る。脚端部は弱い屈曲を持つ。346 は須恵器の蓋（蓋 c2）でツマミが欠損する。復元口径は 13.8cm を測る。天井の高さは低く､口縁端部は明瞭な屈曲を持つが短い。347 は須恵器の杯で口縁 ~ 底部まで残る。口径が 11.4cm、器高が 3.9cm を測る。底部は不明瞭で丸くなる。器表面に自然釉及び付着物がある。
343 は土師器の甕（甕 a）で、口縁部から胴部上位まで残る。342 は土師器の甕で口縁部から胴部中位まで残る。復元口径が 22.0cm、復元胴径が 28cm ほどを測る。外器面には赤色顔料が塗布される。また炭化物の付着もある。

344 は土師器の甑の把手片である。手づくねの把手であるがほとんど剥落している。器壁はヘラケズリにより薄くなっている。

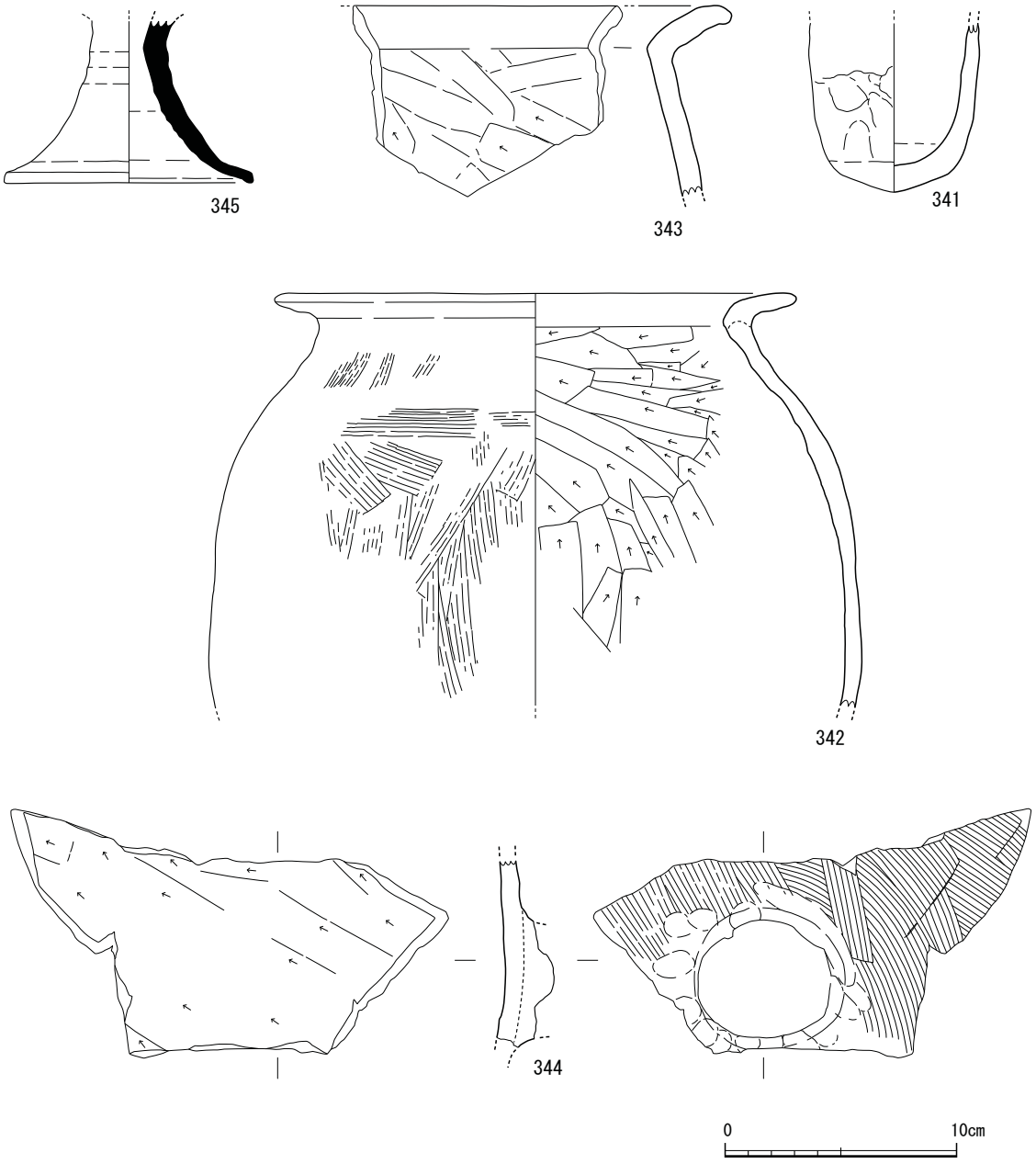


1層	暗褐 7.5ＹＲ3/3	シルト	しまり弱い	地山ブロック②と焼土粒をわずかに含む
2層	暗褐 7.5ＹＲ3/3	シルト	ややしまる	7.5ＹＲ4/1褐灰色ニガブロックを少量含み焼土粒、炭化物粒をわずかに含む
3層	黒褐 7.5ＹＲ3/2	シルト	しまりあり	土器片をやや多く含む 地山ブロック(1～2㎝大)と焼土ブロック(1～2㎝大)少量含む
4層	黒褐 7.5ＹＲ3/2	シルト	しまりあり	やや粘質焼土ブロック(2～5㎝大)と炭化物ブロック(1～3㎝大)と土器片をいずれも非常に多く含む
5層	黒褐 7.5ＹＲ3/2	シルト	ややしまる	やや粘質地山ブロック①②(1㎝大)をごくわずかに含む炭化物粒をやや含み、土器片を多く含む
6層	黒褐 7.5ＹＲ3/1	シルト	ややしまる	やや粘質地山ブロック①②(2㎝大)わずかに含む。
7層	黒褐 7.5ＹＲ3/2	シルト	しまりあり	地山ブロック①②(3㎝大)少量含む
8層	黒褐 7.5ＹＲ3/1	シルト	しまりあり	やや粘質地山ブロック②(3㎝大)少量含む
9層	黒褐 7.5ＹＲ3/1		しまりあり	粘性あり地山ブロック①②③(5㎝大)多く含む
10層	黒褐 7.5ＹＲ3/2	シルト	しまりあり	やや粘質
11層	黒褐 7.5ＹＲ3/1		しまり弱い	土器片をやや多く含む
12層	黒褐 7.5ＹＲ3/1		しまりなし	地山ブロック①(5㎝大)と土器片をやや多く含む
13層	黒褐 10ＹＲ3/2		ややしまりあり	やや砂質地山ブロック①②(2㎝大)含む土器片多く、取り上げ№13を含む

第95図　Ⅰ区　SE134実測図(1/40)



第96図　Ⅰ区　SE134出土遺物実測図



第 97 図　Ｉ区　SE134 出土遺物実測図

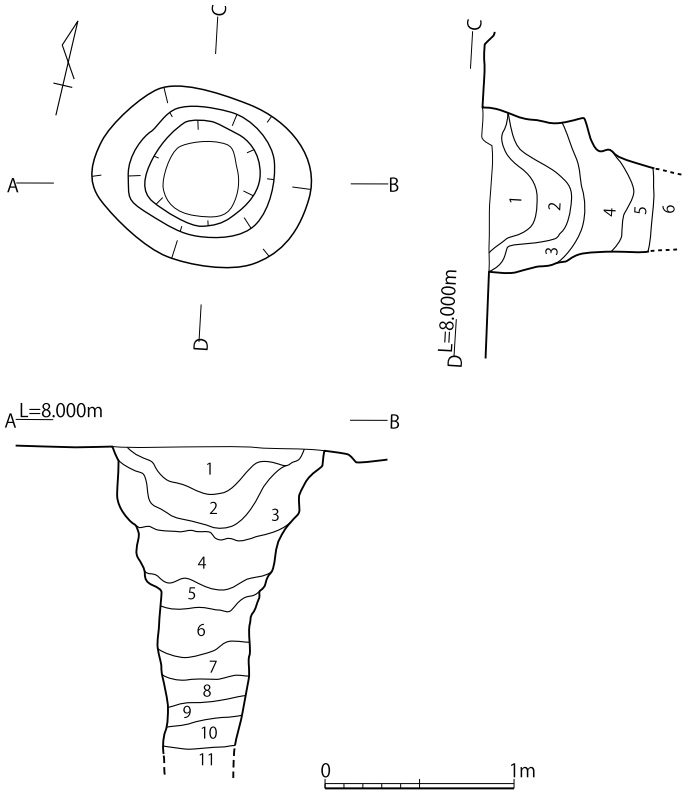
341 は製塩土器で 4 層から出土。砲弾状の壺で、手づくねによって成形される。残存部での復元胴径は 7.4cm を測る。外器面は粗い調整であるが、内器面は丁寧にヘラ状の工具で成形された後表面を丁寧にナデが施され、布痕などはみられない。図化していないが、134 も同じく製塩土器で成形・調整は同様である。

・SE-161

［遺構状況］　141-J-1 グリッドで検出。SI-064 の精査中に確認した遺構で、切り合い関係にある。明確な前後関係はとらえてはいないが、調査中の確認では SI-064 をこの遺構が切っていると判断している。

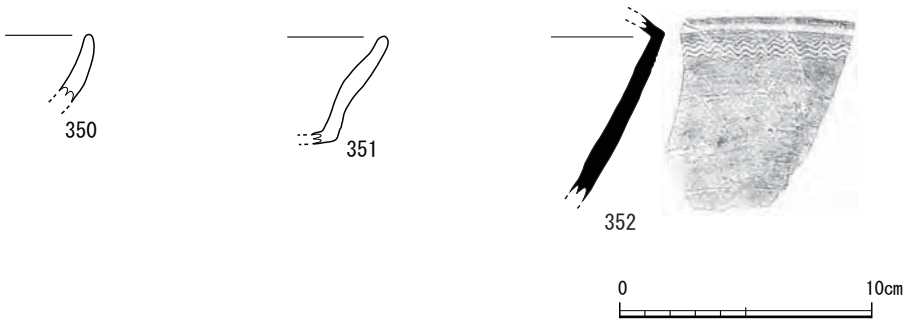
平面形は確認面で長径が 2.24m、短径が 1.76m を測る楕円形を呈する。確認面から深さ 90cm ほどで段が形成され、その下位は狭まり直線的に掘り込まれる。掘り下げていったところ、深さが確認面から 3.6m になったところで幅 70cm と狭くもあり掘削が困難になったためこの深さで断念した。

［出土遺物］　遺物の出土数は少なく小片がほとんどであったため、3 点だけを図化した。

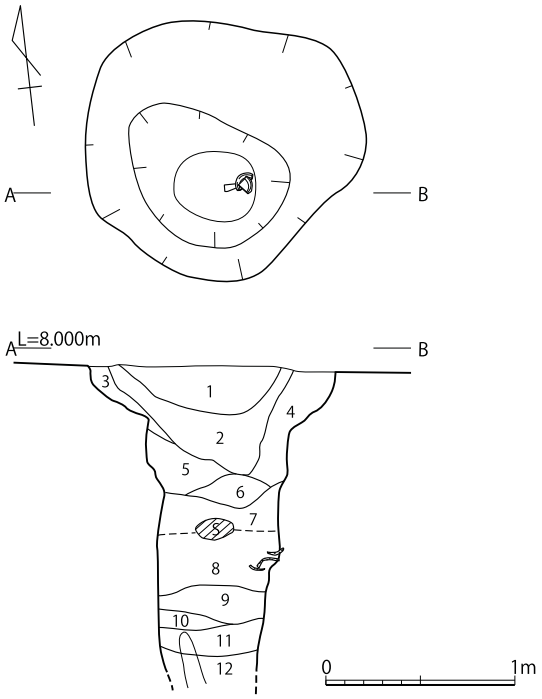


1層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	しまりあり	地山ブロック②(2cm大)ごくわずかに含む7.5YR4/1褐灰色ニガブロック少量含む
2層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	ややしまりあり	7.5YR4/1褐灰色ニガブロック少量含む
3層	黒褐	7.5YR3/1	シルト	しまりあり	やや粘質地山ブロック①(5cm大)少量含む
4層	黒	7.5YR2/1	シルト	しまりあり	やや粘質　地山ブロック①②(5cm大)多く含む
5層	黒	7.5YR2/1	シルト	ややしまりあり	やや粘質地山ブロック①②(3cm大)含む
6層	黒	7.5YR2/1	シルト	しまりあり	やや粘質
7層	黒褐	7.5YR2/2	シルト	ややしまりあり	地山ブロック①②(5cm大)多く含む
8層	黒	10YR2/2	シルト	しまり弱い	地山ブロック①(3cm大)少量含む
9層	にぶい黄褐	10YR4/3			やや砂質地山①を主体とする層
10層	黒褐	10YR3/1	シルト	しまり弱い	やや粘質地山ブロック③(1cm大)含む
11層	黒褐	10YR2/2		しまり弱い	黒褐色土と10YR4/6褐色の混土やや粘質
12層	黒褐	10YR2/2		しまりなし	

第98図　Ⅰ区　SE161実測図(1/50)



第99図　Ⅰ区　SE161出土遺物実測図



1層	暗褐7.5YR3/3	シルト	しまりあり	地山ブロック②(1cm大)少量含む
2層	黒褐7.5YR3/2	シルト	しまりあり	炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含む
3層	暗褐7.5YR3/3	シルト	しまり強い	地山ブロック①(5～10cm大)多く含む 地山の可能性あり
4層	暗褐7.5YR3/3	シルト	ややしまりあり	地山ブロック①をマーブル状に含む
5層	黒褐7.5YR3/2	シルト	ややしまりあり	地山ブロック①(5～10cm大)少量含む
6層	黒褐7.5YR3/2	シルト	しまりなし	土器片取り上げ№1含む
7層	黒褐7.5YR3/1	シルト	しまりなし	やや粘性あり土器片取り上げ№2と石 取り上げ№3含む
8層	黒褐10YR3/2	シルト	しまりなし	やや粘質地山ブロック①(1～2cm大) 少量含む取り上げ№6～8含む
9層	黒褐10YR3/2	シルト	わずかにしまる	地山ブロック①(10cm大)少量含む
10層	黒褐10YR3/1	シルト	しまりなし	
11層	暗褐10YR3/3	シルト	しまりなし	地山ブロック①(10cm大)少量含む
12層	黒褐10YR3/2	シルト	しまりなし	地山ブロック①(3cm大)多く含む

第 100 図　Ⅰ区　SE213 実測図 (1/40)

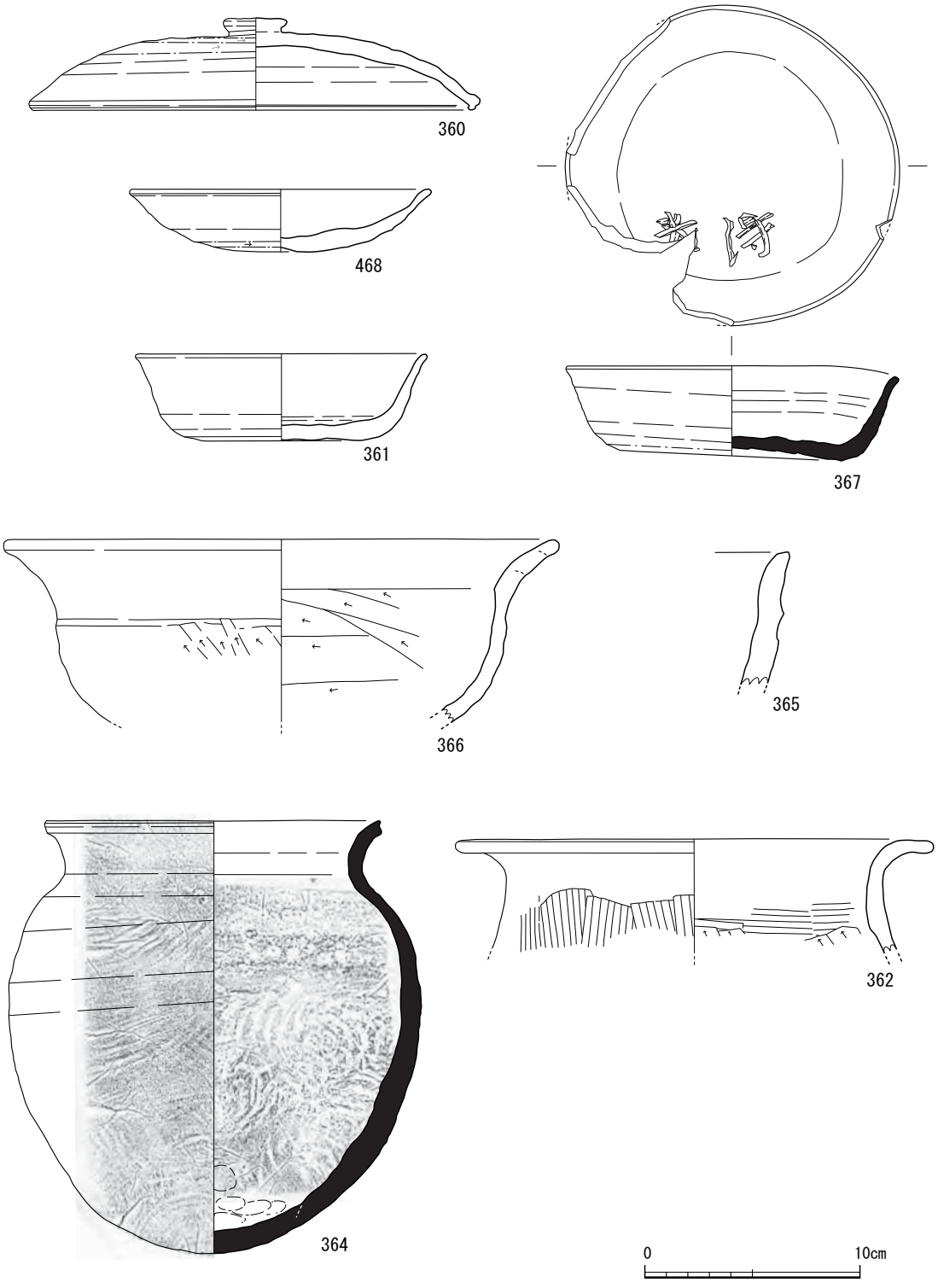
350 は土師器の杯の口縁部のみの破片で、内外器面にミガキ調整を施されるものである。351 は土師器の杯で口縁部が弱く内傾する。内外器面ともに赤彩の痕跡がある。352 は須恵器の長頸壺片であろう。肩部付近で横方向の沈線が 1 条とその下に三本の櫛描波状文が巡る。その下位はヘラケズリ調整が施される。

・SE-213

［遺構状況］　141-H-3・4 グリッドで検出した井戸跡である。SD-048 と切り合い関係にある。確認状況ではこの遺構が SD-048 を切っている。

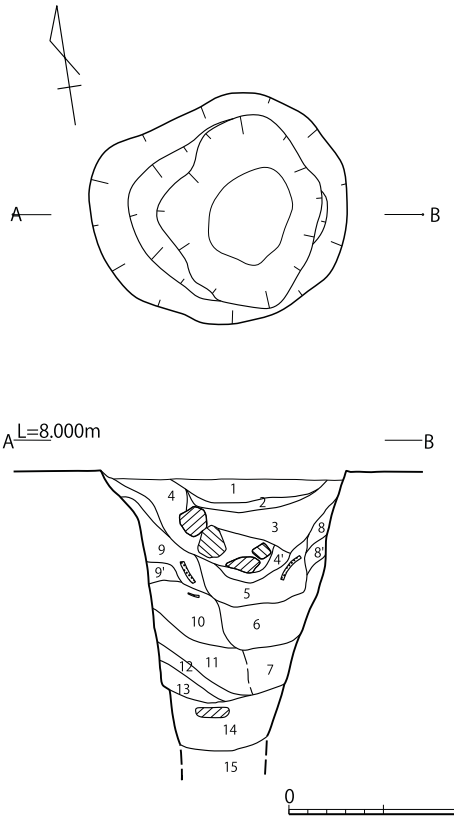
　確認面での平面形は不正形をしているが本来は円形と考える。現況では 2.8m ほどの径を測る。確認面から 50cm ほどで段を持ち、その下から 1.2m~1.6m ほどの幅になり直線的に掘り込まれている。確認面から 3.4m ほど掘削した時点で掘り下げが困難であったため中止した。最下層までは到達していない。

［出土遺物］　360 は土師器の杯蓋で、口縁の 1/3 が欠損している。天井部が丸く持ち上がり、口縁部の屈曲はごく短く曲がる。天井部のつまみは扁平となっている。口径が 20.4cm、器高が 4.3cm を測る。361 は土師器の杯である。口縁 ~ 底部まであり口縁の 1/3 残る。復元口径が 13.2cm、器高が 4.1cm、復元底径が



第 101 図　Ⅰ区　SE213 出土遺物実測図

9.0cm を測る。底部と体部の立ち上がり部分が不明瞭である。362 は土師器の甕の口縁部から胴部であり、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 20.0cm を測る。外器面に煤が付着する。364 は須恵器の小型甕で口縁の 1/3 が欠損するもののほぼ完形である。口径が 15.5cm、器高が 20.1cm を測る。口唇部の調整が少しつまみ上げるようになっている。365 は、土師質土器の鉢と考える。口縁部外面に弱い凹線が巡る。全体的な器形は不明である。366 は土師器の鍋である。口縁から胴部までの 1/4 が残る。復元口径が 15.4cm を測



1層	灰黄褐	10YR4/2シルト	少し砂質
2層	灰黄褐	10YR4/2シルト	少し粘質
3層	にぶい黄褐	10YR4/3シルト	少し粘質
4層	にぶい黄褐	10YR4/3シルト	やや粘質　褐色の斑点少量含む
4'	にぶい黄褐	10YR4/3シルト	やや粘質　褐色の斑点少量含む
4''	にぶい黄褐	10YR4/3シルト	やや粘質　少し砂質
5層	黒褐	10YR3/1シルト	やや粘質
6層	黒褐	10YR3/2シルト	やや粘質
7層	黒褐	10YR3/3シルト	粘質強い
8層	黒褐	10YR4/2シルト	褐色ブロック(1cm)含む
8'	黒褐	10YR4/2シルト	
9層	黒褐	10YR3/1シルト	
9'	黒褐	10YR3/1シルト	少し砂質
10層	黒褐	10YR3/2シルト	褐色の斑点(1～6mm)含む
11層	暗オリーブ褐	10YR2/2	若干粘質が強い
12層	黒褐	7.5YR3/1シルト	少し粘質
13層	黒褐	7.5YR3/1シルト	やや粘質
14層	黒褐	7.5YR2/2シルト	非常に粘質強い 粘土に近いが粒子が細かい
15層	暗オリーブ褐	2.5Y3/3	暗褐色シルトを少し含む

第 102 図　Ｉ区　SE214 実測図 (1/40)

る。外器面に煤が付着する。367 は須恵器の杯で、口縁の 2/3、底部 8/9 が残る。内器面に刻字 2 字がある。一字めは「貴」のように見えるが、不明確である。もう一字は「得」と考える。文字の意味については不明である。口径が 15.2cm、器高が 4.4cm、底径が 10.3cm を測る。外底面は回転ヘラケズリによる調整がなされる。468 は、土師器の杯で、口縁の 1/5 が残る。復元口径が 13.8cm、器高が 2.9cm を測る。底部は明瞭でなく、丸くなっている。ただ回転ヘラケズリによる調整は施される。内・外面の一部に煤が付着する。

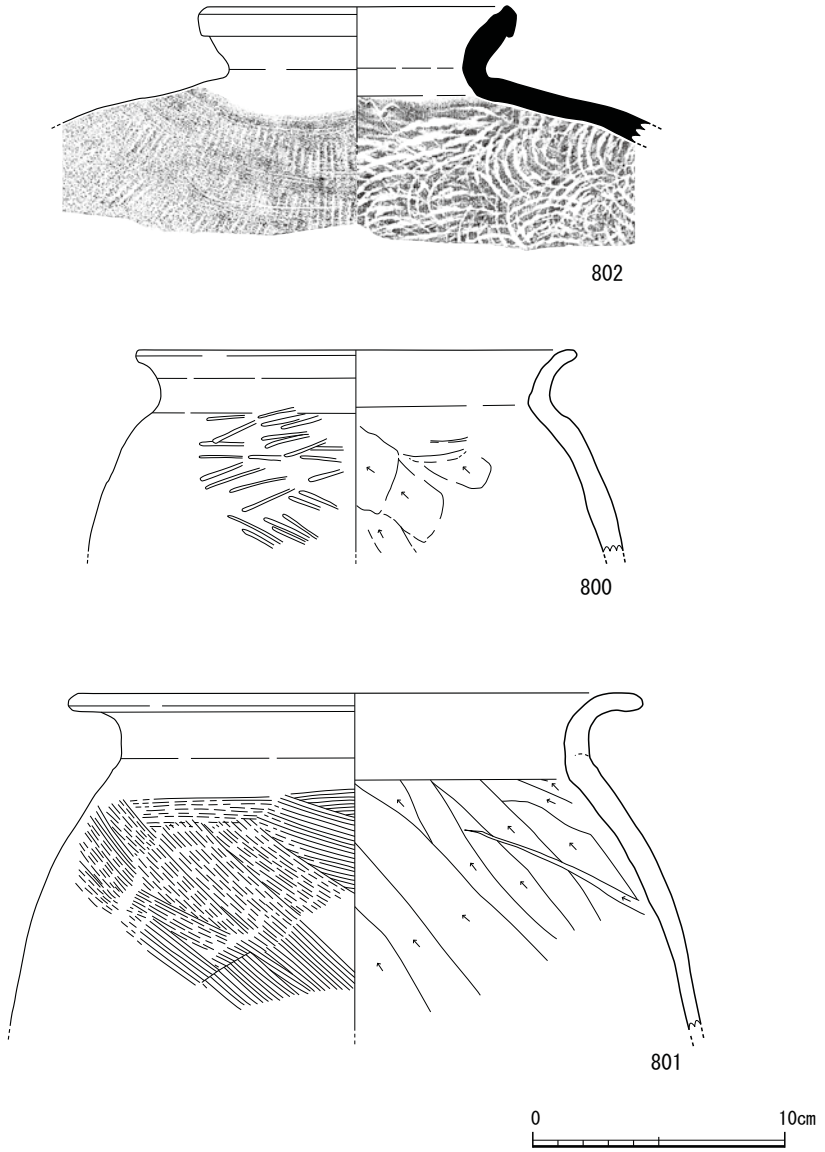
・SE-214

［遺構状況］　141-M-7・8 グリッド検出。平面形は長径が 1.4m、短径が 1.2m を測る不正形な楕円形を呈する確認面から 20cm のところに段がある。そこから徐々に狭くなっていく。掘削を進めていったが、1.6m ほど掘削した時点で地山層が砂質土となり徐々に崩壊し始めたため、安全を考えそこで掘削を中止した。そのため最下層まで到達していない。埋土をみると下層は一気に埋めた印象があるが、段のある上の層は自然堆積によるものであろう。その中には数点の 10~20cm ほど礫が含まれていた。

［出土遺物］　800 は土師器の甕（小甕 a）である。復元口径が 17.45cm を測る。801 は土師器の甕である。口縁部から胴部までの全体の 2/5 が残る。復元口径は 22.0cm を測る。802 は須恵器の甕（甕 a）である。全体の 1/6 残る。復元口径が 12.0cm を測る。

・SE-217

［遺構状況］　141-N-10・11 グリッドで検出。確認面での平面形は径が 1.4m ほどの円形を呈する。しかし、掘削を進めると急激に細くなり、確認面から 1m ほどで径 12cm になり水脈にまで到達していなため未完成



第 103 図　Ⅰ区　SE214 出土遺物実測図

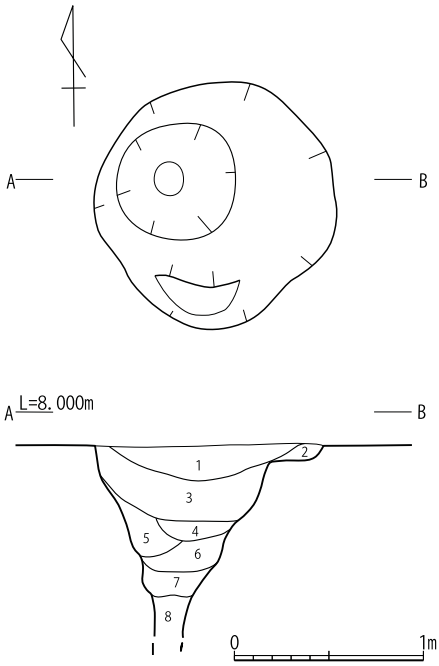
の井戸として判断した。ここでは井戸を意識していると考えて井戸に含めた。

・SE-219

［遺構状況］　141-H-4 グリッド検出。溝状遺構 SD-043 によって切られているため本来の形状は不明である。現状から平面形を考えると上面では円形であったと考える。土層断面を観察すると別遺構に溝以外の別遺構で切られている可能性はある。それが現在溝下の形状に見える長方形の土坑である可能性がある。確認面から 90cm のところで狭い段がみられ、そこから径 80cm の素掘りで直線的に掘り込まれている可能性が高い。この遺構も下部になるにつれ狭くなっていくことと地山の脆弱さのため、確認面から 1.1m の深さで掘削を断念した。

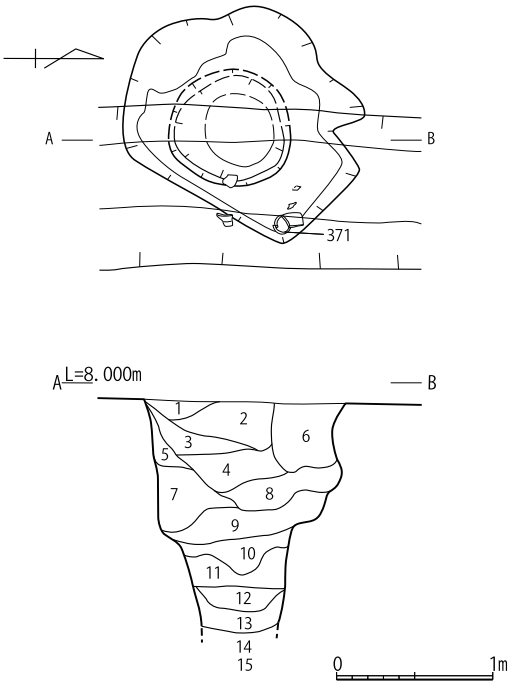
［出土遺物］　出土遺物は小片が多く図化できるものは少ない。371 は土師器の高台付杯の底部で、底径が 8.0cm を測る。372 は土師器の甕で小片のため復元はできなかった。外面の一部に煤の痕跡がある。

　このほか図化はしていないが 469 の軒丸瓦がある。



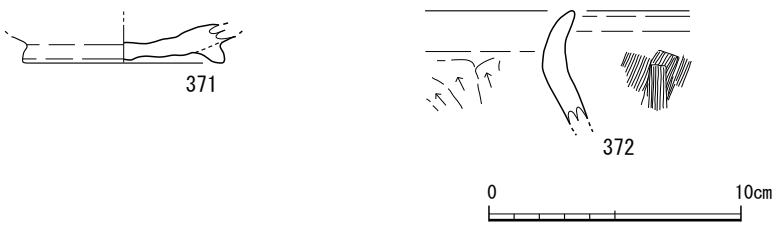
1層 黒褐10YR3/2 シルト 土師片混じっている　明赤褐色斑点多く含む
2層 黒褐10YR3/2 シルト 黄褐色土混じっている
　　明赤褐色斑点多く含む　炭少し含む
3層 黒褐10YR3/2 シルト 炭、黄褐色土、土器片混じっ　ている
4層 黒褐10YR3/2 シルト 黄褐色土多く混じっ ている
5層 黒褐10YR3/2 シルト 黄褐色土非常に多く混じっ ている
6層 暗褐10YR3/3 シルト 少し粘質　黄褐色土、黄褐色混じっ　ている
7層 暗褐10YR3/3 シルト 少し粘質　黄褐色土、黄褐色混じっ　ている

第 104 図　Ｉ区　SE217 実測図 (1/40)

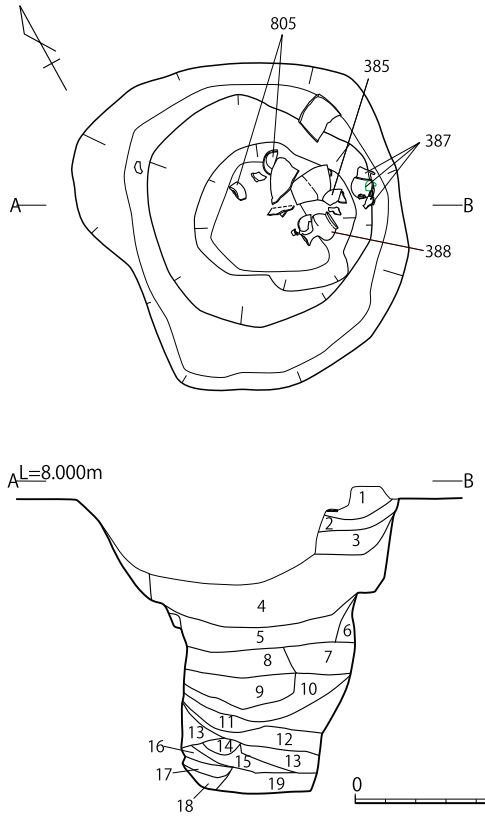


1層　暗褐 7.5YR3/3　シルト しまり弱い
2層　黒褐 7.2YR3/2　シルト しまりあり
3層　黒褐 7.5YR3/1　シルト ややしまりあり
　　7.5YR3/2　シルト ややしまりあり
4層　黒褐 7.5YR3/1　シルト しまり弱い
5層　黒褐 7.5YR3/2　シルト しまり弱い　地山ブロック①（ 5cm大）少量含む
6層　黒褐 7.5YR3/2　シルト ややしまりあり　地山ブロック①（10cm大）非常に多く含む
7層　黒褐 7.5YR3/2　シルト ややしまりあり　地山ブロック①（ 10cm大）やや多く含む
8層　黒褐 7.5YR3/1　シルト ややしまりあり　地山ブロック①②（ 1cm大）わずかに含む
9層　黒褐 7.5YR3/1　シルト しまり弱い　やや粘性あり
10層 黒褐 7.5YR2/2　シルト しまりなし　やや粘性あり
11層 黒褐 7.5YR2/2　シルト しまりなし　やや粘質
12層 黒　 7.5YR2/1　しまりなし
13層 黒褐 7.5YR3/2　地山ブロック①（1cm大）非常に多く含む
14層 黒　 7.5YR2/1　シルト しまり弱い　やや粘質地山ブロック①(1cm大)少量含む
15層 黒褐 10YR2/2　しまりなし　地山ブロック①（10cm大）やや多く含む

第 105 図　Ｉ区　SE219 実測図 (1/50)



第 106 図　Ｉ区　SE219 出土遺物実測図



1層	にぶい黄褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	黄灰色ブロックを(砂岩0.5～1.5cm)少し含む
2層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	黄褐色ブロックを(0.5～1.5cm)少し含む
3層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	褐色土斑点少し含む 炭少し含む 長頸壺あり
4層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	黄褐色土　炭少し含む
5層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	黄褐色土　炭少し含む 土器片含む
6層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	黄褐色土､炭含む
7層	暗褐	10YR3/4	シルト	しまりあり	黄褐色ブロック含む
8層	暗褐	10YR3/4	シルト	しまりあり	黄褐色ブロック少し含む
9層	暗褐	10YR3/4	シルト	しまりあり	黄褐色土少し含む
10層	暗褐	10YR3/2	シルト	しまり弱い	粘質弱い　細砂～中砂混じりシルト　褐色土少し含む
11層	褐	7.5YR4/3	シルト	しまり弱い	粘質弱い　中砂混じりシルト 黄褐色のブロック大量に含む
12層	極暗褐	7.5YR2/3	シルト	しまり弱い	粘質弱い　鉄分を含み出す　淡化物　橙色粒子少し含む
13層	明褐	7.5YR5/6	シルト	しまりなし	粘質なし　中砂混じりシルト 粗砂も少し含む　鉄分を多く含む
14層	黒褐	7.5YR2/1	シルト	しまりなし	粘質なし　中砂～粗砂
15層	オリーブ褐	7.5YR2/2	シルト	しまりなし	粘質なし　中砂混じりシルト 細砂少し含む　鉄分を多く含む
16層	黒褐	7.5YR2/1	シルト	しまりなし	粘質なし　細砂～中砂 粗砂わずかに含む
17層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりなし	粘質なし　細砂～中砂混じりシルト　鉄分を多く含む
18層	黒褐	10YR2/1	シルト	しまりなし	粘質なし　細砂～中砂 粗砂わずかに含む
19層	極暗褐	7.5YR2/3	シルト	しまりなし	粘質なし　細砂～中砂混じりシルト　鉄分を多く含む

第 107 図　Ⅰ区　SE222 実測図 (1/50)

・SE-222

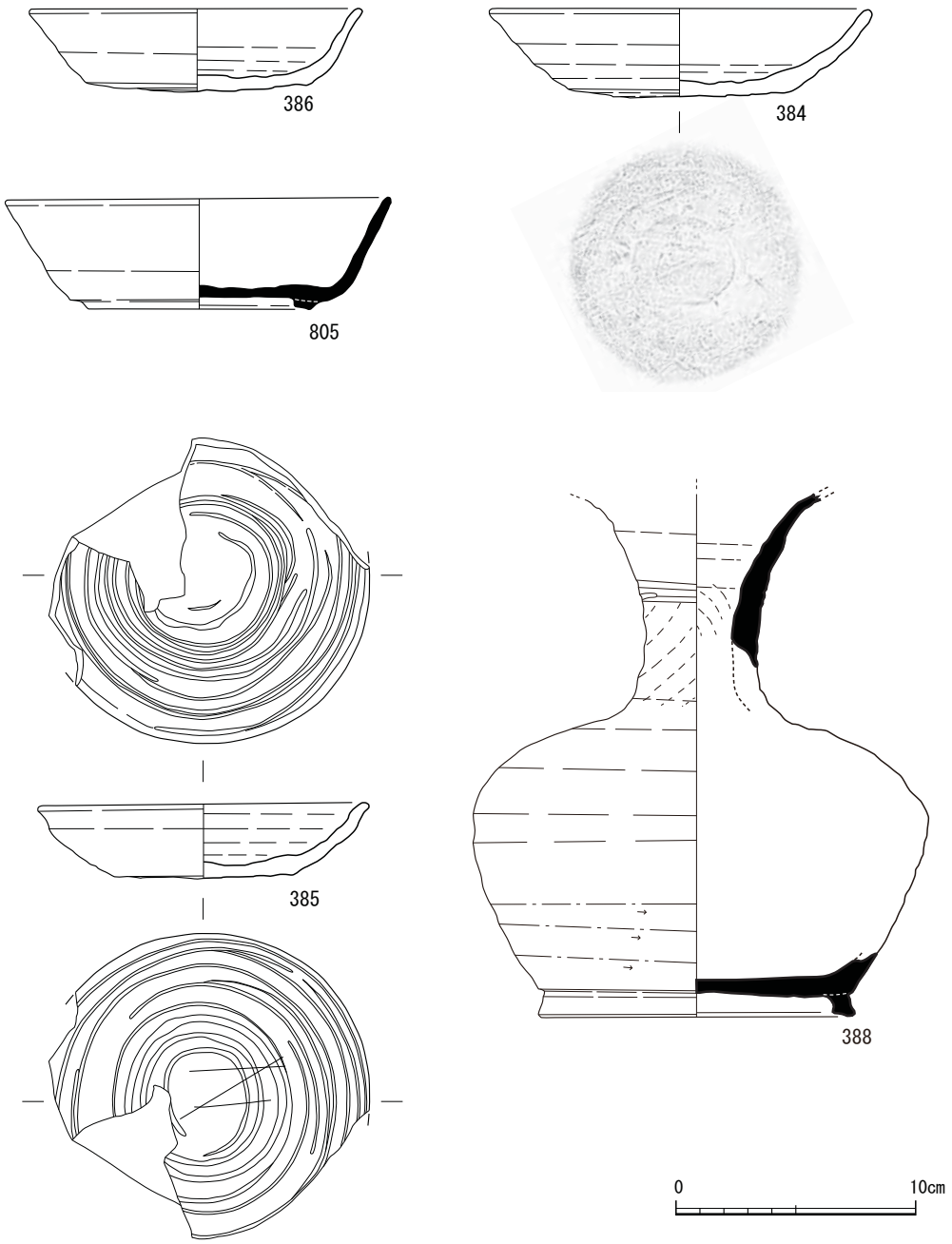
［遺構状況］　141-O・P-8 グリッド検出。SE-229 と切り合い関係にあり、調査中に SE-229 によって切られていることを確認した。

平面形は隅丸の長方形気味の形状で、確認面での長径は 2.1m を測る。確認面から 70cm ほどのところに段があり、段掘り築成と考える。段の下位から掘り方は狭くなり、確認面から 2.1m の深さで底に至る。標高は 2.92m である。底部径は 80cm ほどである。現在湧水はみられない。

［出土遺物］　出土遺物は割と多かったが、6 点のみを図示する。384 は、土師器の杯で、口縁部 1/2 から底部まで残る。口径が 16.0cm、器高が 3.7cm、底径が 9.2cm を測る。外底部は回転ヘラ切り離しの後ナデと板状圧痕が残る。内底面にはナデが施される。385 は、土師器の杯で、口縁部 1/3 から底部まで残る。復元口径が 13.3cm、器高が 3.2cm、底径が 7.4cm を測る。外器面は回転ナデの後回転ヘラミガキ、内器面は回転ナデの後回転ヘラミガキが施される。外底面にヘラ記号が施される。煤も付着している。386 は土師器の杯で、口縁部 2/3 から底部まで残る。復元口径が 13.6cm、器高が 3.5cm、底径が 9.3cm を測る。内外面に赤色顔料が施される。387 は、土師器の甕で、口縁部から胴部まで残る。復元口径が 23.8cm を測る。外器面から口縁部の上部まで赤彩されている。煤も付着している。388 は須恵器の長頸壺である。高台貼り付けで、自然釉も被る。頸部内器面にしぼり痕が見られる。805 は須恵器の高台付杯（杯 c）である。口縁部から底部まで残る。口径が 16.1cm、器高が 4.7cm、底径が 9.2cm を測る。

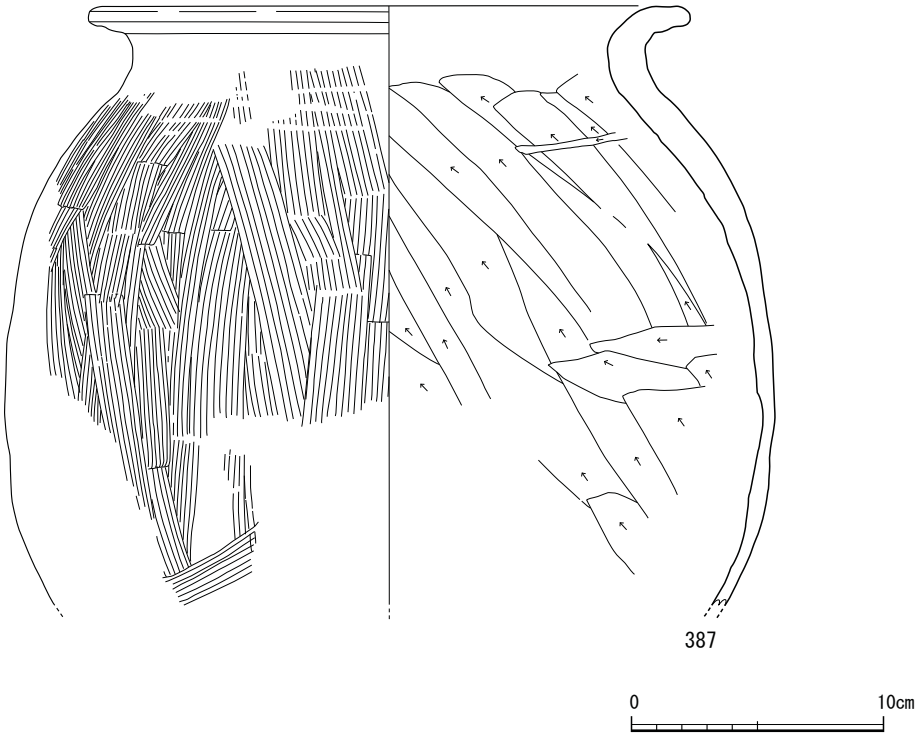
・SE-229

［遺構状況］　141-O-8・9 グリッドで検出。SE-222 と SE-263 と切り合い関係にあり、この遺構は両遺構を切っているようである。



第 108 図　Ｉ区 SE222 出土遺物実測図

当初遺構の確認線が二重に見えたため、遺構の掘り直しと判断し２遺構の切り合い関係とし、S-229 と S-230 という２つの遺構名を振ったが、調査を進める中で最終的に掘り方のラインと井戸本体のラインを二つの遺構としたことが判明した。そこで遺構名は SE-229 とし、S-230 の出土遺物も SE-229 の中に含めた。確認ラインの顕著さから、SE-229 は木製井戸枠と推定される井戸枠が取り外されずそのまま腐食した結果、本体内部と掘り方の埋土が堆積とがそのまま腐食した結果、掘り方と井戸枠内が明確に確認できた例となろう。掘り方の直径が 2m 前後、井戸枠径が 1m ほどを測る。断面観察によれば掘り方の一部が井戸枠の腐食に際し井戸上部で内側に圧力がかかりやや井戸内に落ちかかった様子がみられた。埋土の順序は、S-230 が SE-229 の掘り方部分であり、そこの埋土は S-229 の埋土より古いものと考えられる。出土遺物を検証することで遺構の成立年代の推定が可能であろう。



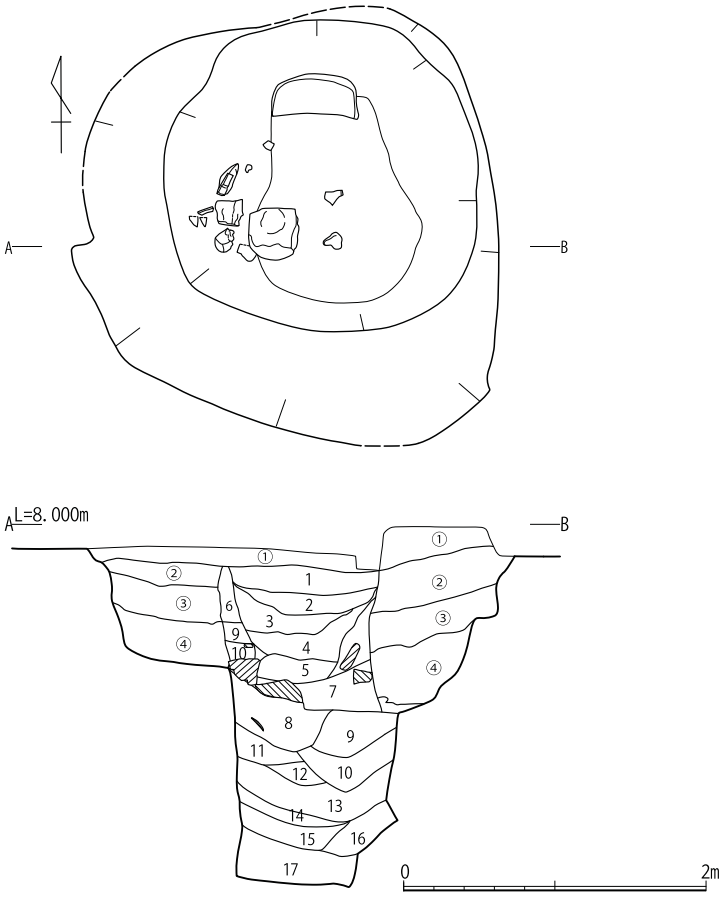
第 109 図　Ⅰ区　SE222 出土遺物実測図

［出土遺物］　当初遺構を二つの遺構の切り合いとしていたので遺物も別々に記録し取り上げた。しかし、出土遺物は、S-230 出土遺物は SE-229 の構築以前の遺物であり、S-229 埋土出土遺物は SE-229 廃絶時以降の遺物と考えられる。そこで、井戸枠内と掘り方内部の遺構として分けて述べることとし、まず井戸枠内の遺物について取り上げる。

378 は土師器の杯（杯 a）で口径の 1/3 残る。復元口径が 13.2cm、器高が 3.15、復元底径が 11.0cm を測る。内面に赤彩がわずかに残る。379 は土師器の小杯（小杯 a）で、口径の 1/3 が残る。復元口径が 9.4cm、器高が 3.15cm、復元底径が 5.6cm を測る。内外面に回転による暗文が施される。380 は土師器の甕（小甕 a）で全体の 1/5 が残る。復元口径が 16.8cm を測る。外面の胴部が磨耗し、断面に煤が付着している。
381・382 は須恵器の蓋であるが、大小の違いがある。381 は大形（蓋 c2）で、口縁の 1/3 が残る。復元口径が 15.2cm、器高が 4.05cm を測る。382 は小型（小蓋 c3）で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 8.6cm、器高が 2.1cm を測る。

383 須恵器の杯（中杯 a）で、口径 1/4 残る。復元口径が 12.8cm、器高が 4.1cm、復元底径が 8.0cm を測る。底部に高台の剥離痕残る。390 は須恵器の鉢で 12 層の出土である。底径が 11.4cm を測る。色調は灰色である。

470 は、土師器の杯（杯 a）で底径の 1/4 残る。復元口径が 14.2cm、器高が 3.4cm、底径が 8.2cm である。内外器面に回転ヘラケズリによる暗文が施される。472 は土師器の甕（中甕 a）で、口縁部の 1/4 が残る。復元口径が 20.0cm を測る。473 は、土師器の高台付椀で、口縁部 1/2、底部 1/3 残る。復元口径が 16.0cm、器高が 8.0cm、復元底径が 8.6cm を測る。内外器面には赤色顔料が塗布され、回転による暗文が施される。478 は土師器の杯（杯 a）で全体の 1/3 が残る。復元口径が 14.0cm、器高が 3.0cm、復元底径が 9.7cm を測る。内・外器面全体に煤が付着。481 は、須恵器の大甕（大甕 a）で口縁部のみの破片である。二重口縁で頸部から緩やかに外反し、端部近くでほぼ垂直に立ち上がる。外器面上部に櫛描きによる波状文がめぐる。610 は土師器の甑の把手である。手びねりによるものであるが、一部板状の工具も使用さ

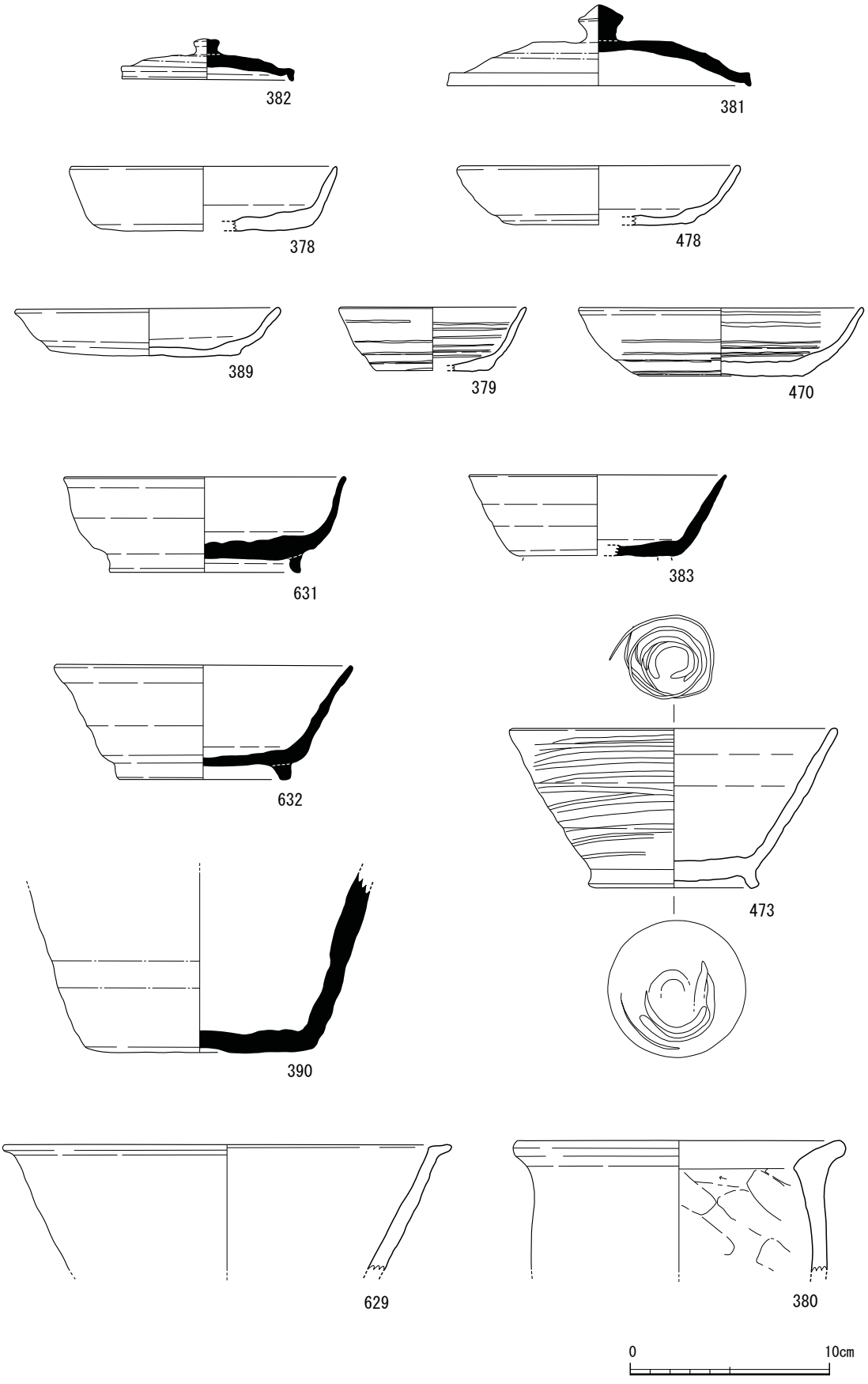


①層 黒褐　　10YR3/2　シルト　しまりあり　明赤褐色斑点少し含む
②層 にぶい黄褐 10YR4/3　シルト　しまりあり　オリーブ黄色、褐色ブロック(1cm) 多く含む
③層 灰褐　　10YR4/2　シルト　しまりあり　オリーブ黄色、褐色ブロック(0.3～1cm) 多く含む
④層 黒褐　　10YR3/2　シルト　しまり良い　少し粘質　褐色ブロック(0.5～1.2cm)少し含む　灰少し含む
1層 にぶい黄褐 10YR4/3　シルト　しまり良い　褐色ブロック(0.3～0.5cm)少し含む　炭少し含む
2層 灰褐　　10YR4/2　シルト　しまりあり　少し粘質
3層 灰褐　　10YR4/2　シルト　しまりあり
4層 灰褐　　10YR4/2　シルト　しまり良い　粘質強い
5層 黒褐　　2.5YR4/2 シルト　しまり弱い　やや粘質
6層 黒褐　　10YR3/4　シルト　しまりあり　オリーブ黄色ブロック(0.3～1,0cm)
7層 黒褐　　2.5YR4/2 シルト　しまり弱い
8層 灰褐　　10YR4/2　シルト　しまりあり
9層 黒褐　　10YR4/4　シルト　しまりあり
10層 黒褐　　10YR3/2　シルト　しまりあり
11層 黒褐　　7.5YR3/2 シルト　しまりあり
12層 黒褐　　7.5YR2/2 シルト　しまり弱い
13層 黒褐　　10YR2/3　シルト　しまり弱い
14層 黒褐　　10YR3/2　シルト　⑬より堀りある
15層 黒褐　　10YR3/3　シルト　しまり弱い
16層 黒褐　　10YR2/2　シルト　しまりあり
17層 黒褐　　10YR3/2　シルト　しまりあり

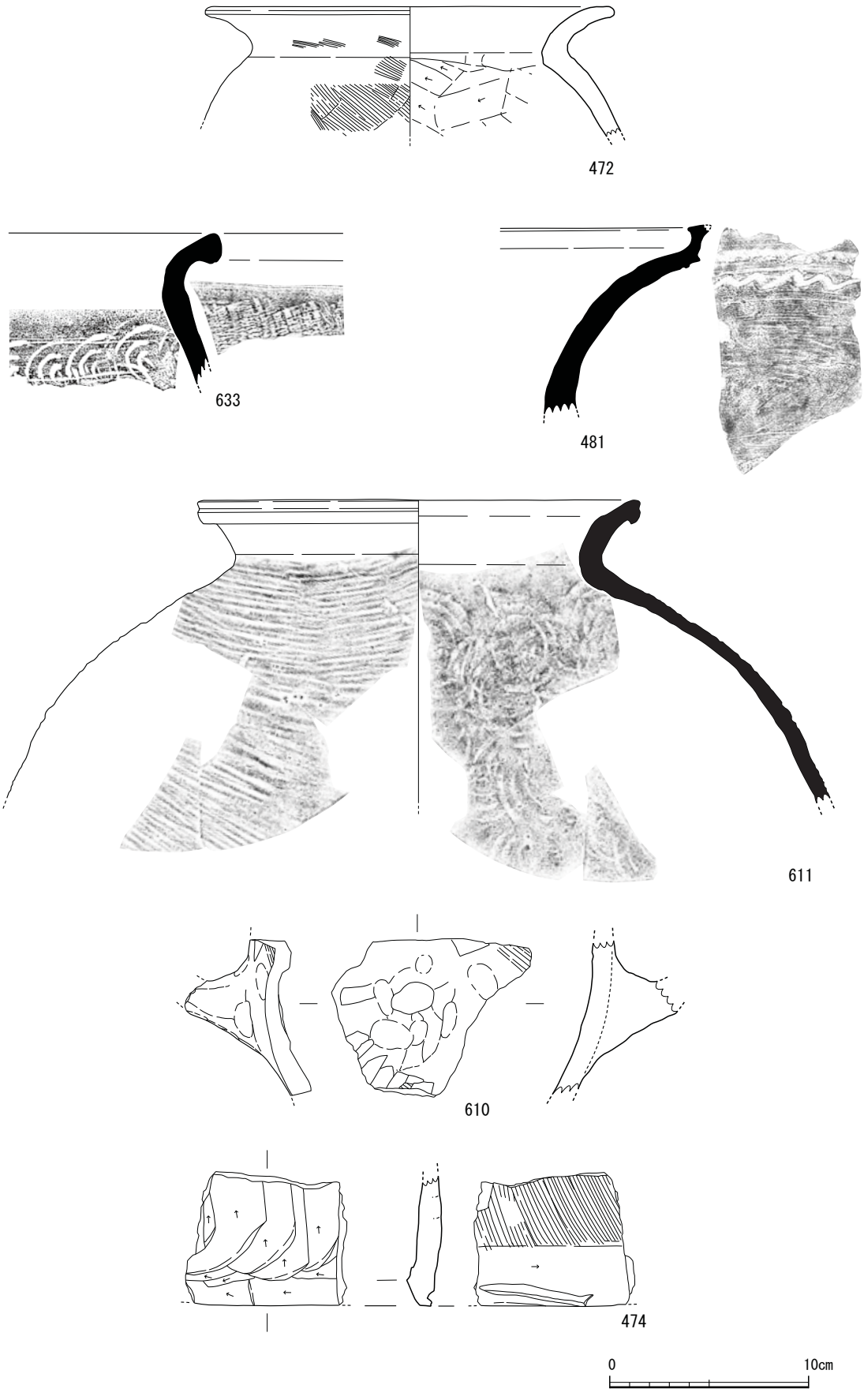
第 110 図　Ｉ区　SE229 実測図

れる。611 は須恵器の大甕片で口縁部から胴部にかけて 1/4 が残る。復元口径が 21.6cm を測る。629 は土師器の鉢で口縁の 1/6 が残る。口縁端部がくの字状に強く外反し、体部は直線的にすぼまる。復元口径は 22.4cm を測る。内外器面の一部に赤彩が残る。631 は須恵器の高台付杯（杯 c）でⅡ・Ⅲ期のものである。底径の 1/2 が残る。復元口径が 14.0cm、器高が 4.8cm、復元底径が 9.5cm を測る。632 は須恵器の高台付椀（杯 c）でⅣ・Ⅴ期のものである。口径の 1/3 が残る。復元口径が 14.7cm、器口が 5.7cm、復元底径が 8.4cm を測る。633 は須恵器の甕（甕 a）である。

474 は土師質の移動式カマドの底部である。1.2 層で出土した。底部面はヘラで調整し、内器面下部はタ



第 111 図　Ⅰ区　SE229 出土遺物実測図



第 112 図　Ｉ区　SE229 出土遺物実測図

テ方向にヘラケズリ、外器面はハケ調整が施される。

次に掘り方の遺物について述べる。

389 は土師器の杯（杯 a）でⅣ期のもので完形である。口径が 13.2cm、器高が 3.0cm、底径が 9.4cm である。内・外面とも赤彩（明赤褐 2.5YR5/8）が施される。390 は、須恵器の鉢で時期的にⅣ・Ⅴ期に当たる。底径の 1/2 が残り、径は 11.4cm を測る。

瓦片は軒丸瓦 2 点、丸瓦 7 点、平瓦 2 点が出土している。

他にカマドの上部片 1 点が出土した。

・SE-263

［遺構状況］　141-O-8・9 グリッドで検出。SE-229 に切られる。平面形は長径が 2.3m、短径が 1.8m ほどの不正形ながら楕円形を呈する。壁面が多少崩壊しているが、確認面から 90cm ほどのところに段がある。そこからやや狭くなっていくが、確認面から 1.7m で底に到達した。最下部では径が 30cm ほどなっており、現在は湧水のある層ではない。このことから井戸の未製品の可能性もある。

［出土遺物］　この遺構からは多くの遺物出土があり、その中から以下の遺物を図化した。

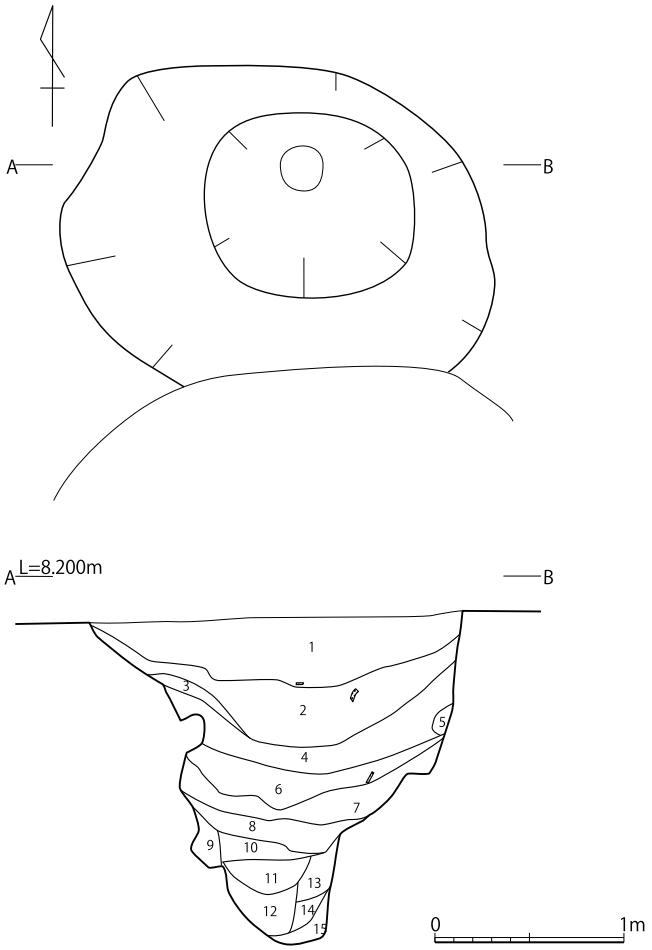
405 は土師器の杯で完形である。口径が 10.2 が cm、器高が 3.9cm、底径が 8.0cm を測り、器高の高い小型の杯である。底部はヘラ切り離し後ナデ調整、体部下位には回転ヘラケズリが施される。406 は土師器の甕で復元口径が 19.0cm を測る小型の甕である。内器面は横方向のヘラケズリの傾向がある。407 は土師器の土器で手づくね的な作りで内器面は丁寧に仕上げていることから製塩土器である可能性がある。復元口径が 8.0cm を測る。408 は須恵器の杯蓋である。口径が 12.05cm、器高が 2.4cm を測る小型のもので、口縁部が焼成によるひずみを起こしている。口縁端部に返しはほとんどなく細くなって収まっている。つまみは扁平である。409 は須恵器の高台付杯で底部のみである。高台が特徴的で短くちょっと屈曲する。410 は須恵器の大甕の頸部以上である。口縁端部がやや厚くなり、口唇外面に弱い 1 条の沈潜がみえる。487 は土師器の鉢で、頸部の屈曲はなく、内傾するものである。外器面には赤彩の痕跡が残る。488 は、土師器の甕で口縁の屈曲は少なくほとんどなくなる。胴部がやや張り出す。818 は土師器の鍋である。口縁から底部上位までの残存で内器面にはヘラ状工具によるナデが施される。819 は須恵器の高台付杯で復元口径が 13.9cm、器高が 4.5cm、底径が 9.8cm を測り、杯部がやや平たい。底部は回転ヘラケズリの後に高台を貼り付けている。高台は端部が明瞭に作り出している。820 は須恵器の杯蓋でつまみの付くものである。転用硯として利用されていたため、図化している。硯としてよく利用され磨研されている。

877 は埋土中からの出土で大型の砥石と考える。広い面は台石もしくは石皿的な使用方法がなされたが、一番よく使われているのは側面である。特に使用痕が明瞭なのは側面の 2 面で、図化したものである。側面には 1~2cm 弱の傷が入っているが、特に何を意図するか不明である。1063 は、土師器の甑で破片である。同心円当具が中に残り後ナデ調整される。この他に灰釉陶器の椀や平瓦片が 1 点ある。

・SE-277

［遺構状況］　141-Q-11 グリッドで検出。包含層Ⅳ層掘削中に確認した。確認面は長径 1.4m、短径が 1.2m を測る。深さは確認面から 1m82cm ほどまで掘り下げたが、下位部分が砂質層になっていたため徐々に壁面が崩れ、広がる状況があった。最下面はやや硬く締まる砂層へ掘り込まれている。危険性があったためその深さまでで掘削を中止した。

［出土遺物］　出土遺物は少なく、図化したのは 2 点のみである。453 は土師器の杯で内外器面ともヘラ磨



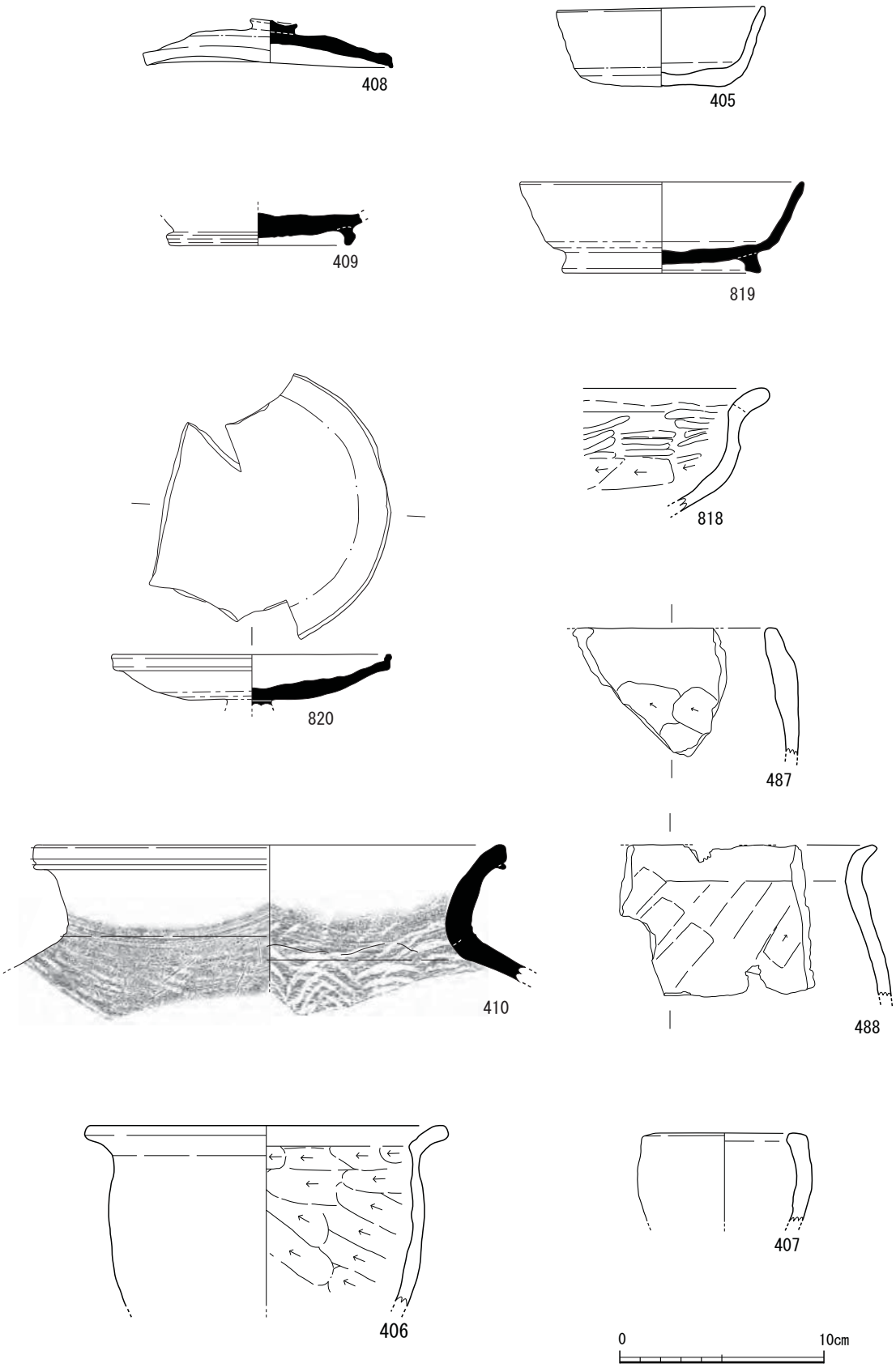
1層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	土器片、炭、赤粒子、灰褐黄色土ブロック混じる　上部粘土混じる
2層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	土器片、炭、赤粒子、灰褐黄色土ブロック混じる
3層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	黄褐色土混じっている
4層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	炭、黄褐色土少し混じっている　シルトブロック灰黄褐色多め,黄褐色少量
5層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	黄褐色粘土混じる　（ブロックを中心としたもの）
6黄	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりある	黄褐色土、土器片混じる　灰、黄褐色ブロック（10cm)少量 灰黄褐色ブロック（1～5cm)多く混じる
7層	暗褐	10YR2/3	シルト	しまりある	黄褐色土混じる　灰黄褐色ブロック多めに混じる　灰少量混じる
8層	暗褐	10YR2/3	シルト	しまりある	灰黄褐色土混じる　（全体にブロック1～5cm)
9層	暗褐	10YR2/3	シルト	しまりある	灰黄褐色土ブロック混じる（12cm)
10層	暗褐	10YR2/3	シルト	しまりある	黄褐色土ブロック混じる（9cm)
11層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまり弱い	鉄分を多く含む　中砂まじりシルト細砂少し含む
12層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまり弱い	中砂混じりシルト　細砂少し含む
13層	暗褐	7,5YR3/3	シルト	しまりある	オリーブ褐色のブロックの塊含む　細砂～中砂　極細砂少し
14層	黒褐	7,5YR3/3	シルト	しまりある	中砂混じりシルト　細砂少し含む　褐色のブロック状含む
15層	極暗褐	7,5YR3/3	シルト	しまりある	細砂～中砂混じりシルト　褐色のブロック状含む　上の層より暗い

第 113 図　Ｉ区　SE263 実測図

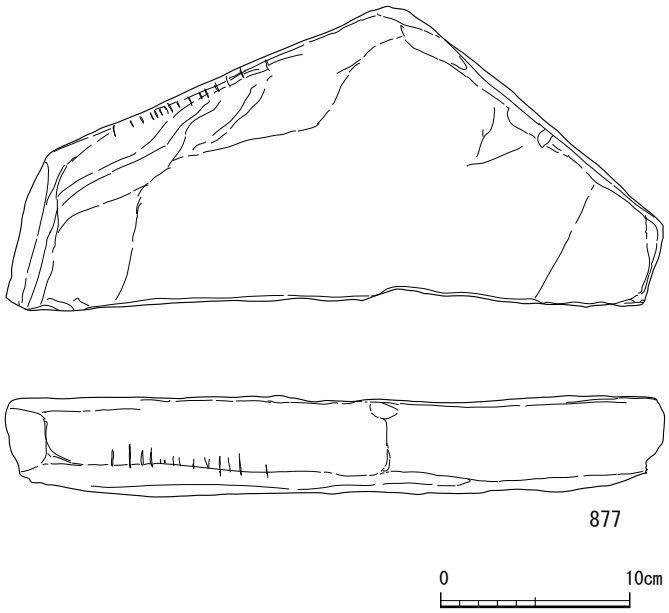
き調整が施される。454 は土師器の杯で底部付近のみの破片である。表面に煤が付着している。

・SE-288

［遺構状況］　141-O・P-9・10 グリッドで検出。かなり遺構が錯綜している中で確認したため本来の井戸の上面の確定は困難であった。この付近にはピットや溝状遺構、竪穴建物も入り組んで存在していたため、切り合い関係も十分つかめていない。断面図で確認した状況では確認面とした面から深さ 80cm ほどで段が形成されていたようである。そこから素堀で直に掘り込まれている。確認面から 1.7m 付近まで掘削したが、径 40cm ほどとなり上位の基礎の崩落も心配されたので掘削を中止した。最下部まで到達していない。遺



第 114 図　Ⅰ　区　SE263 出土遺物実測図



第 115 図　Ｉ区　SE263 出土遺物実測図

構の掘削途中で段を確認したがその上位でも階段状の部分を確認しており、これが井戸の構築と関係する可能性も考えた。

［出土遺物］　829 は土師器の小型甕である。復元口径が 16.0cm を測る。830 は須恵器の長頸壺の頸部以上である。口縁部が二重口縁になる。復元口径が 16.1cm を測る。内面の頸部に釉がかかっている。831 は須恵器の甕で、口径が 25.6cm を測り、口縁の内・外面に灰釉がかかる。832 は土師器の杯で、口径が 13.55cm、器高が 4.1cm、底径が 9.9cm を測る。833 は土師器の杯で、復元口径が 14.3cm、器高が 3cm、復元底径が 8.2cm を測る。回転による暗文ヘラミガキが内外器面に施される。834 は須恵器の高台付杯である。杯部の屈曲の内側に高台を貼り付ける。底部はヘラ切り離しのままである。底部径が 8.6cm を測る。

・SE-300

［遺構状況］　141-O・P-9・10 グリッドで検出。深い攪乱部分を精査中に検出した遺構で、本来の掘り込み面から 1m 以上下である。平面形は確認面での径が 50cm ほどの円形である。深さは確認面から 90cm を測る。底は砂質であるため明確ではないが、その付近で終わっている。出土遺物はほとんどなかった。

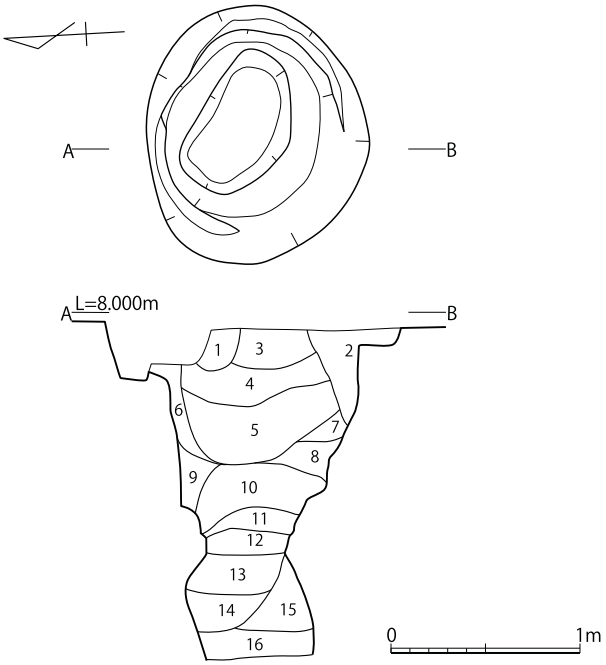
・SE-807

［遺構状況］　141-L-7 グリッドで検出。以前あった建物の基礎もしくはその撤去に際し大きなカクランが形成されている、その下を精査したところで確認した遺構である。確認できたのはカクラン坑の底付近で検出したものである。確認面での径は 48cm ほどで、ほぼ直に掘り込まれており、確認面からの深さ 86cm ほどで底に至るが、その付近は砂質土であるため、明確に底と確認できた訳ではない。標高は 6.44m である。埋土の黒色層の切れ目付近で地山層へ変化したと考えた。現在湧水ないが、掘削時には十分水が得られたのであろう。その砂質土に湧水があったものと考える。出土遺物はごく小さな古代の土器が出土しているものの、ほとんどなく、時期の決め手になるのは深さと井戸の形態であろう。

・SE-953

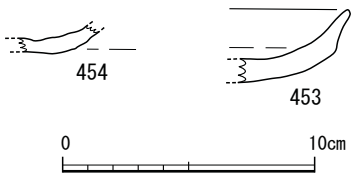
［遺構状況］　141-Q-9 グリッドで検出。包含層Ⅲ層の下層で確認。径は 90cm を測る。確認面からの深さ 80cm で段が形成される。

その下位では径 50cm の円形の掘り込みとなり深さ 1.5m までは掘削できたが、それ以上の掘削は困難であったため中止した。



1層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまっている	土師粒子含む
2層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまっている	黄褐色少し混じっている
3層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまっている	土器片混じっている　灰黄褐色ブロック含む
4層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまっている	土器片混じっている
5層	黒褐 10YR3/2 シルト	しまっている	灰,炭混じっている
6層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまっている	黄褐色少し混じっている
7層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまっている	黄褐色少し混じっている
8層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまりとても悪い	粘土多く混じっている。灰黄褐色ブロック(9cm) 灰(0,5～3cm)含む
9層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまっている	黄褐色ブロック少量混じる
10層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまりとても悪い	土器片、少し混じっている　黄褐色土少し混じる
11層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまっている	灰黄褐色ブロック、灰、少量混じる
12層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまり悪い	灰黄褐色ブロック、黄褐色ブロック少量混じる
13層	黒褐 10YR2/3 シルト	しまり悪い	灰黄褐色ブロック多く混じる
14層	暗褐 10YR3/3 シルト	しまり良い	炭、少量　黄褐色土、灰黄褐色ブロック混じる
15層	黒褐 10YR3/2 シルト	しまりとても悪い	灰黄褐色ブロックを多く含む
16層	黒褐 10YR3/3 シルト	しまり良い	灰黄褐色ブロック、鉄分も含む

第 116 図　Ⅰ区 SE277 実測図 (1/40)



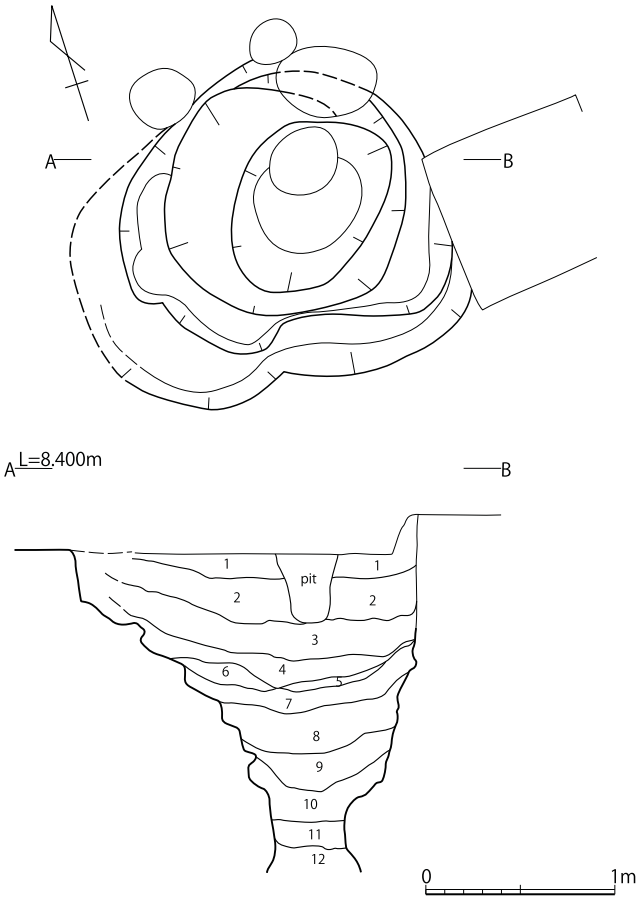
第 117 図　Ⅰ区 SE277 出土遺物実測図

・SE-049

［遺構状況］　141-L-3・4 グリッド検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器には、白磁碗で口縁が外反 (Ⅴ２×Ⅵ×Ⅶ類) のものが 1 点、壺もしくは水注のⅢ類の体部が 1 点がある。いずれも中世前期のものである。

92 は土師器の杯で、全体の 1/4 が残る。復元口径 13.2cm、器高が 3.0cm、復元底径が 8.2cm を測る。外底面には糸切り離し後に板目状圧痕が見られる。内器面は強いナデが施される。93 は土師器の杯である。全体の 1/4 が残り、口径が 15.3cm、器高が 3.5cm、底径が 9.8cm を測る。外底面は糸切り離し後ナデ調整、内底面に工具によって調整が施される。94 は土師器の皿 b で、底部径の 1/5 が残る。底部に糸切り離し痕がある。95 は石鍋の破片であるが、何らかの目的で再加工されて別の役割の用途に使用されていたようである。622 は円盤状土製品で直径が 3.85cm を測る。本来は須恵器の甕片で格子目タタキが残る。713 は土師器の小皿で全体の 1/3 残る。復元口径が 8.8cm、器高が 1.65cm、復元底径が 6.6cm である。外底面には糸切り離しのち板状圧痕が残る。714



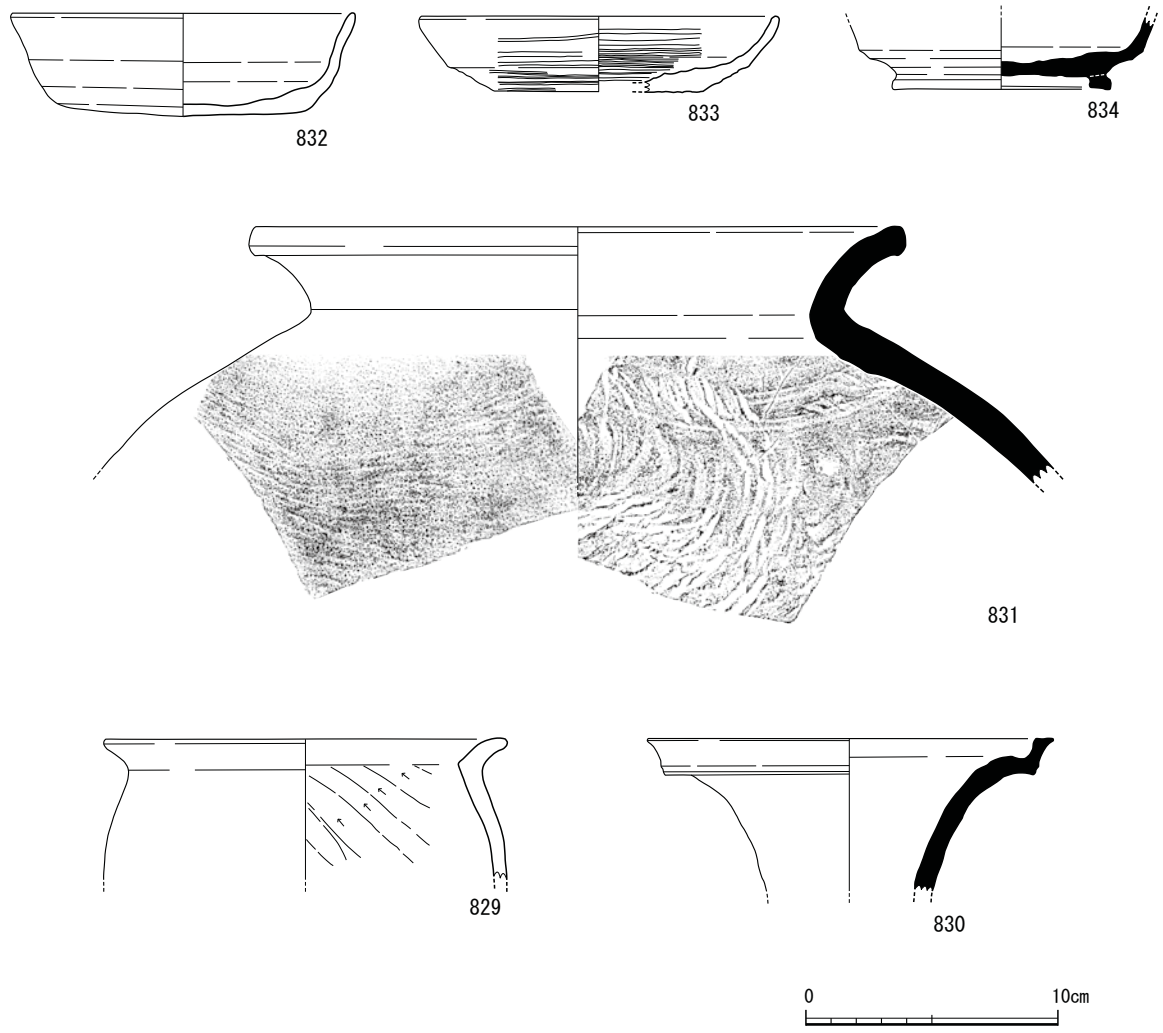
1層 暗褐 10YR3/3シルト　しまりあり　明赤褐色斑点状に少し含む
2層 暗褐 10YR3/3シルト　しまりあり　褐色斑点多く含む　少し含む
3層 黒褐 10YR4/3シルト　しまりあり　褐色ブロック砂岩?(1～3cm)少し含む　炭少し含む
4層 黒褐 10YR4/2シルト　しまりあり　灰多く含む　暗赤褐色斑点マンガン?　多く含む　少し粘質
5層 黒褐 10YR4/2シルト　しまりあり　明褐色の土少し含む
6層 黒褐 10YR4/2シルト　しまりあり　少し粘質
7層 黒褐 10YR3/2シルト　しまり良い　やや粘質　暗赤褐色斑点マンガン?多く含む
8層 黒褐 10YR3/2シルト　しまりあり　少し粘質　暗赤褐色斑点マンガン少し含む　褐色ブロック1～2cm)少し含む
9層 黒褐 10YR3/2シルト　しまり弱い　少し粘質
10層暗褐 10YR5/2シルト　しまり弱い　やや粘質　褐色、黄褐色ブロック(砂岩質0,2～3cm)多く含む
やや粘質　褐色、黄褐色ブロック(砂岩質0,2～2cm)
11層暗褐 2.5Y5/2 シルト　しまり弱い　非常に多く含む
12層黒褐 10YR2/3シルト　しまりあり　粘質強い

第 118 図　Ｉ区　SE288 実測図

は土師器の三足釜などの脚部である。715 は土師器の高台付鉢と考えられる。高台の底径が 6.6cm を測る。内外器面にミガキが施され、底部付近に高台が貼り付けられる。
瓦も出土し、丸瓦が 1 点、平瓦が 4 点である。

SE-066

［遺構状況］　141-I-5・6 グリッド検出。当初遺構を確認した時点では径が 3m を越えそうな大きさであるので中世の地下式坑の崩落したものかとも考えた。十字に遺構を分割し、その分割線に沿ってトレンチを入れ、遺構規模の再確認を行った。結果的にはほぼそのまま下へ掘り込まれている様子が見て取れたので井戸跡と判断し掘削を本格的に始めた。確認した直径が大きいことから深さもかなりあると想定し十字の土層観



第 119 図　Ⅰ区　SE288 出土遺物実測図

察用ベルトを残し、4 分割した区画を徐々に掘り下げることにした。掘り下げる土中からはかなりの遺物が出土し、埋没時期はほぼ中世の初期と判断できた。

確認面から 2m ほど掘削したところで鉄分が集積し硬い膜状の層を形成していた。かなり硬質なため鉄製品鍋かと思い精査したところ、単なる鉄分の集積と確認したので掘り下げを進めた。一部に残していた土層断面ベルトを掘り下げた中に頭蓋骨の一部が含まれているのを確認した。

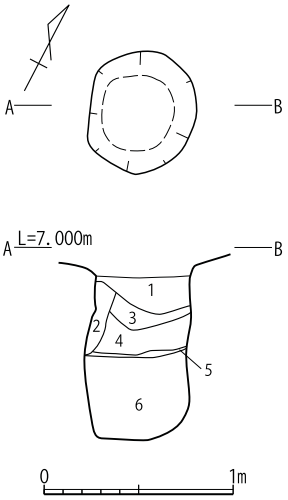
最下層では、獣骨が牛骨、犬骨、馬骨などが刳り貫きクスノキ材を 4 分割した井戸枠内で多量に出土した。当初はウシ骨の 1 個体分がと考えていたが、詳細に掘削し、京都大学院生の丸山真史氏に鑑定をしてもらったところウシ・ウマ・イヌなど複数種類の骨があることがわかった。個体数までは確認できていない。

［出土遺物］　輸入陶磁器には白磁碗が 13 点（II 類 (2)、IV 類 (1)、IV~VIII 類 (3)、V2 × VI × VII 類〔外反〕(1)、V 類 (5)、〔C 期 ~〕(1)）が出土。白磁皿が 8 点（II-1a 類 (1)、II-1a × III 類 (2)、II × III 類 (1)、III-1 類 (1)、V~VII 類 (1)、VI-1a 類 (1)、VI-2b 類 (1)）出土。龍泉窯系青磁の破片（椀 III 類 (1)）が出土。青白磁は 1 点で、小椀もしくは皿で内面に陽刻文がある。

国産陶器には、緑釉陶器（洛北型）椀もしくは皿が 1 点出土した。底部は円盤高台である。

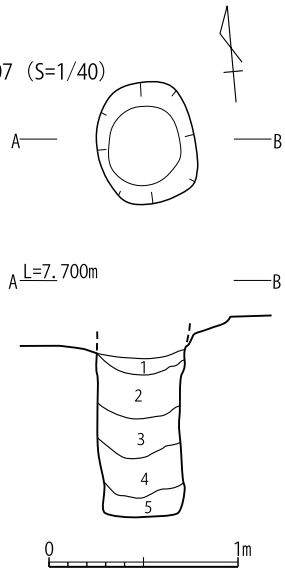
260 は土師器の杯で、全体の口径の 1/4 が残る。復元口径が 15.5cm、器高が 4.9cm、底径が 7.7cm を測る。外底部には糸切り離し痕が残され、内器面から打ち欠いている。外底部の外面から杯部にかけて黒斑がある。

SE300（S=1/40）



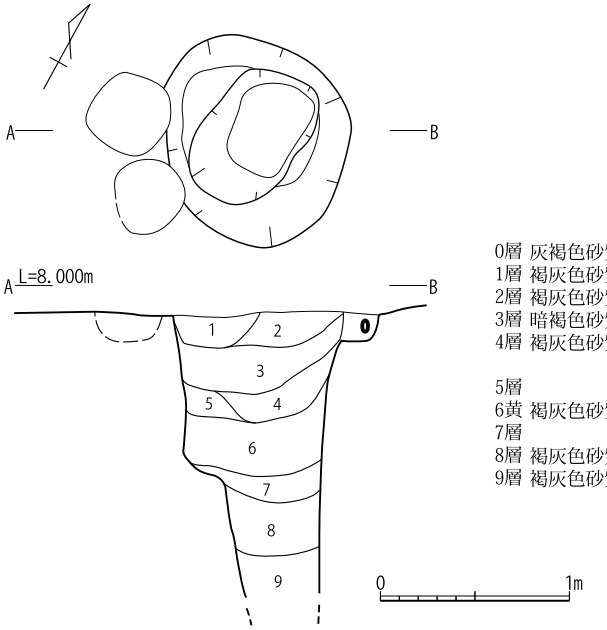
1層 黒褐　10YR3/2　シルト　極細砂～細砂混じり
橙色のブロック状のものを含む
粘質やや強い
2層 ①と同じやや暗め　シルト　細砂～中砂混じり
3層 黒褐　2.5YR3/2　シルト　細砂～中砂混じり　中砂わ ずかに
含む　鉄分やや含む
粘質とても強い
4層 ③と同じやや暗め　シルト　細砂～中砂混じり　極細砂少し
含む　鉄分多めに含む
5層 オリー ブ黒色　粘質とても強い
シルト　中砂混じり　鉄分を多く含む　粘質弱い
6層 暗灰色 5Y3/1　シルト　中砂

SE807（S=1/40）



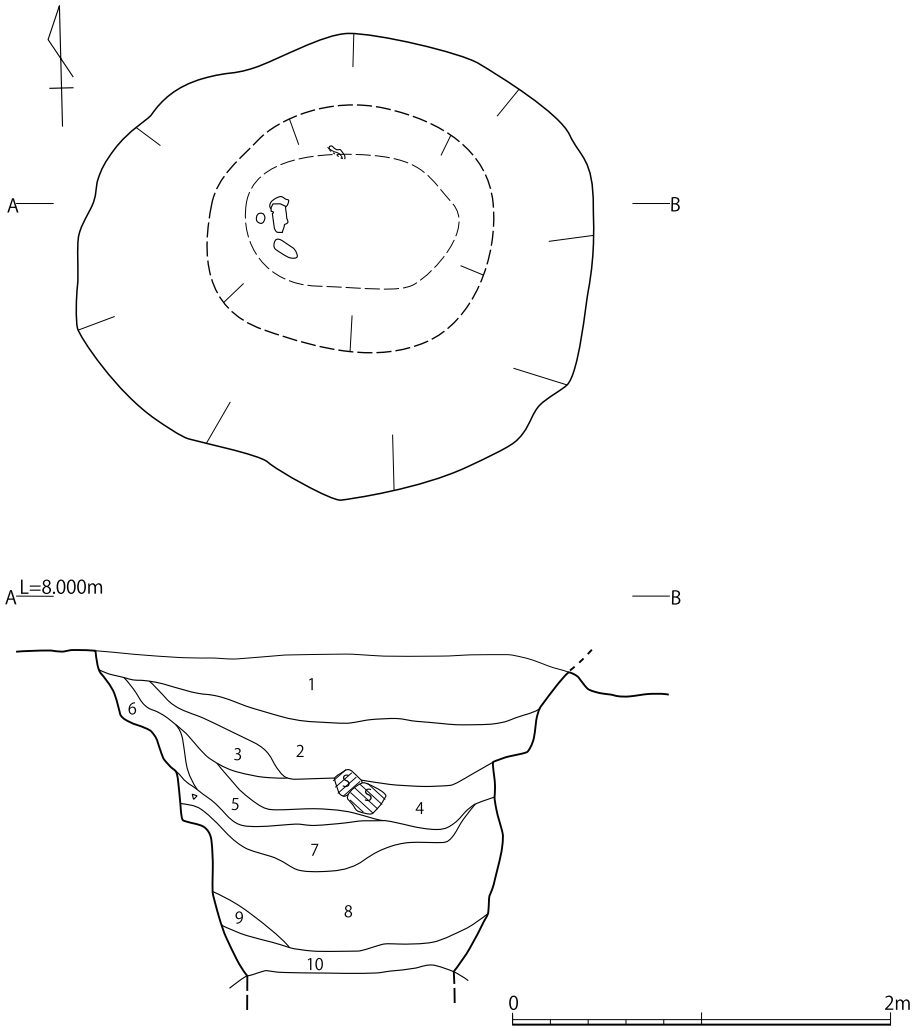
1層 黒褐7.5YR3/1　シルト　砂質凝灰岩ブロック混
2層 黒褐7.5YR3/1　シルト　橙色ブロック混しまりが　1よりある
3層 黒褐10YR3/1　シルト　赤灰色粒混
4層 黒褐10ＹＲ2/1 シルト　砂質凝灰岩ブロック混
5層 黒褐7.5YR2/1　シルト　砂質凝灰岩ブロック混

SE953（S=1/40）



0層 灰褐色砂質土7.5YR3/1　茶色ブロック混じり　ゴチゴチやや白い
1層 褐灰色砂質土7.5YR4/1　黄褐色(凝灰岩崩れブロック混)
2層 褐灰色砂質土7.5YR5/1　黄褐色(凝灰岩崩れブロック混)
3層 暗褐色砂質土7.5YR3/3　黄褐色ブロック　灰石崩れブロック混
4層 褐灰色砂質土7.5YR4/1　灰石.砂粒を含む　黒褐色土に混じる
6より褐色砂質土が混じる
5層　4の土に黄褐色砂質ブロック多く含む
6黄 褐灰色砂質土7.5YR4/1
7層　6より黄褐色砂質ブロックを多く含む
8層 褐灰色砂質土10YR4/1
9層 褐灰色砂質土10YR4/1　褐灰色　細砂

第 120 図　Ｉ区　SE300・807・953 実測図

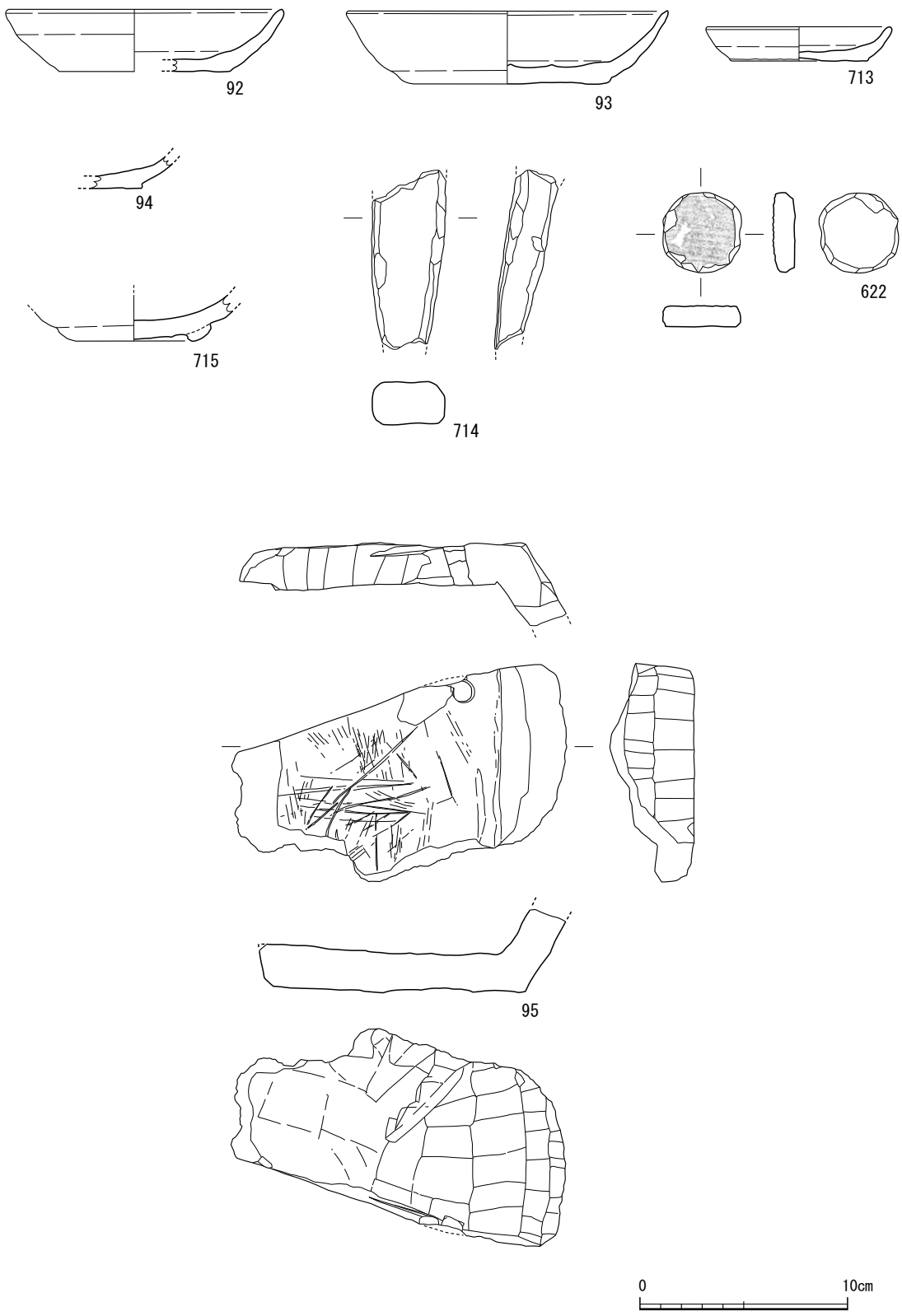


1層	黄褐	10YR4/3シルト	しまりあり	少し砂質
2層	褐	10YR4/4シルト	しまりあり	少し砂質
3層	暗褐	10YR3/3シルト	しまり良い	少し砂質鉄分をやや多く含む硬質
4層	灰黄褐	10YR4/2シルト	しまり良い	やや粘質
5層	黒褐	10YR3/1シルト	しまり良い	少し粘質炭を非常に多く含む
6層	黒褐	2.5Y3/1 シルト	しまり良い	少し粘質褐色砂(地山)が混ざる
7層	黒褐	10YR3/2シルト	しまりあり	少し粘質黄灰砂が少し混じる
8層	灰黄褐	10YR4/2シルト	しまり強い	粘質
9層	灰黄	2.5Y6/2		砂質シルトブロック(硬質)少し含む
10層	黒	2.5Y2/1		砂質粒子細かい

第 121 図　Ⅰ区　SE049 実測図

263 は土師器の杯で、全体の 1/6 が残る。口径が 14.5cm、器高が 2.9cm、底径が 9.2cm を測る。外底部に糸切り離し後に板状圧痕が残る。さらに底部の中心には内器面から穿孔されている。266 は土師器の杯で、「豊前系」杯 a である。低部のみの破片で、底径が 6.4cm を測る。外底面は糸切り離し痕が残る。267 は土師器の椀、口径の 1/5 が残り、復元口径が 16.0cm を測る。内外器面ともにヘラミガキが施される。268 は瓦器の杯である。口径の 1/6 が残る。復元口径が 15.4cm、器高が 3.5cm、復元底径が 9.0cm を測る。外底径部は糸切り離し後ナデが施される。269 は須恵器の瓶の頸部である。

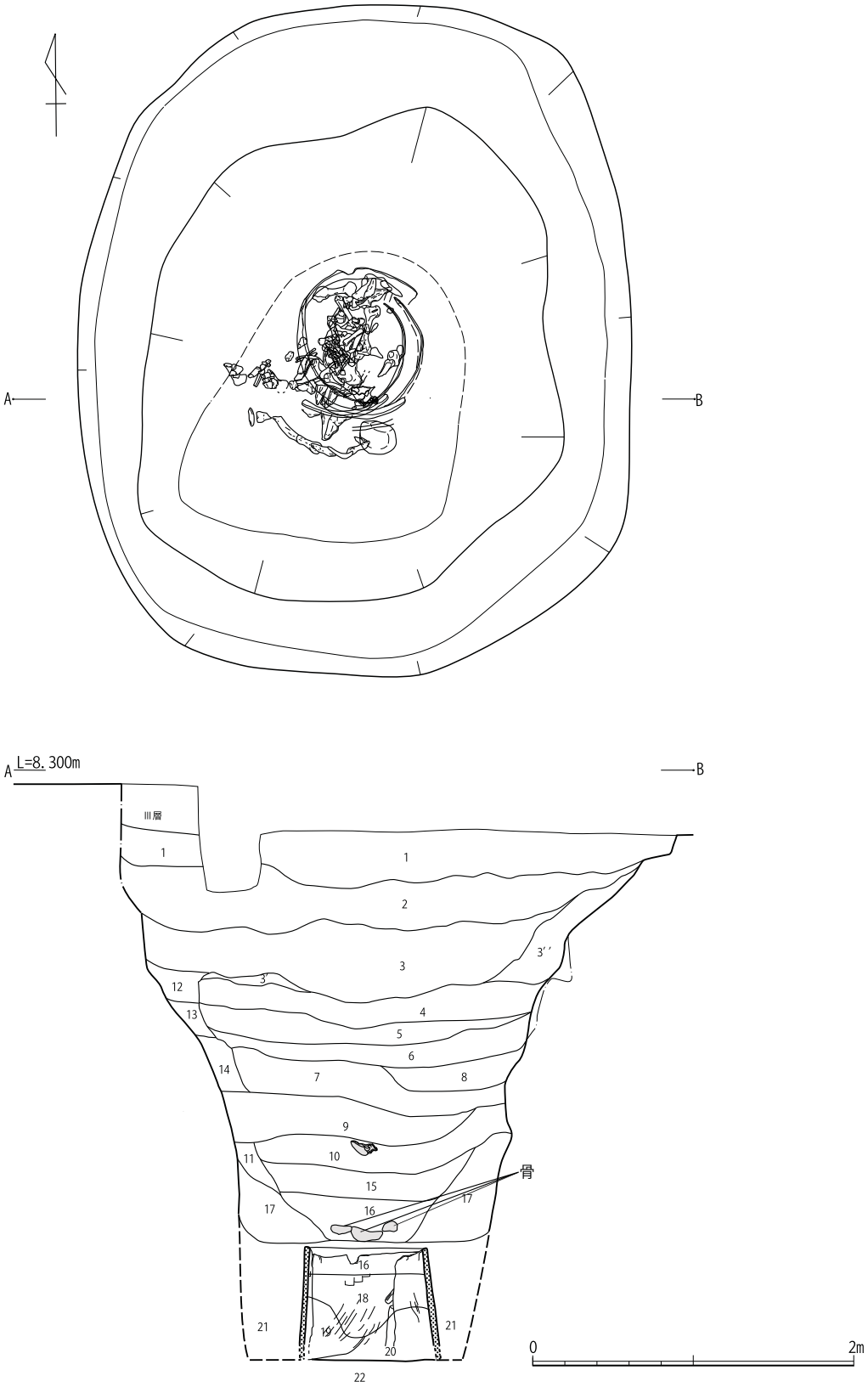
270・271 は滑石製の石鍋片である。271 は口縁部付近で縦に掘り出された把手が残る。外部調整の鉋痕は明瞭に残る。270 は底部の破片である。外器面には細かい鉋痕が残る。内器面にも成形時の鉋痕が残る。272 は軒丸瓦片である。破片が細かく文様は不明瞭であるが、複弁の一部がみえる。内面に瓦当成形時の



第 122 図　Ｉ区　SE049 出土遺物実測図

指抑え痕が残る。外面の凸部はナデ調整が施される。瓦はこの他に丸瓦 15 点、平瓦 48 点出土している。

273 は流紋岩製の紡錘車である。最大径が 5.4cm、厚みが 1.8cm、重さが 47.8g、穿孔径が 0.7cm を測る。274 は石鍋の破片を再加工した石製品であるが、用途は不明である。



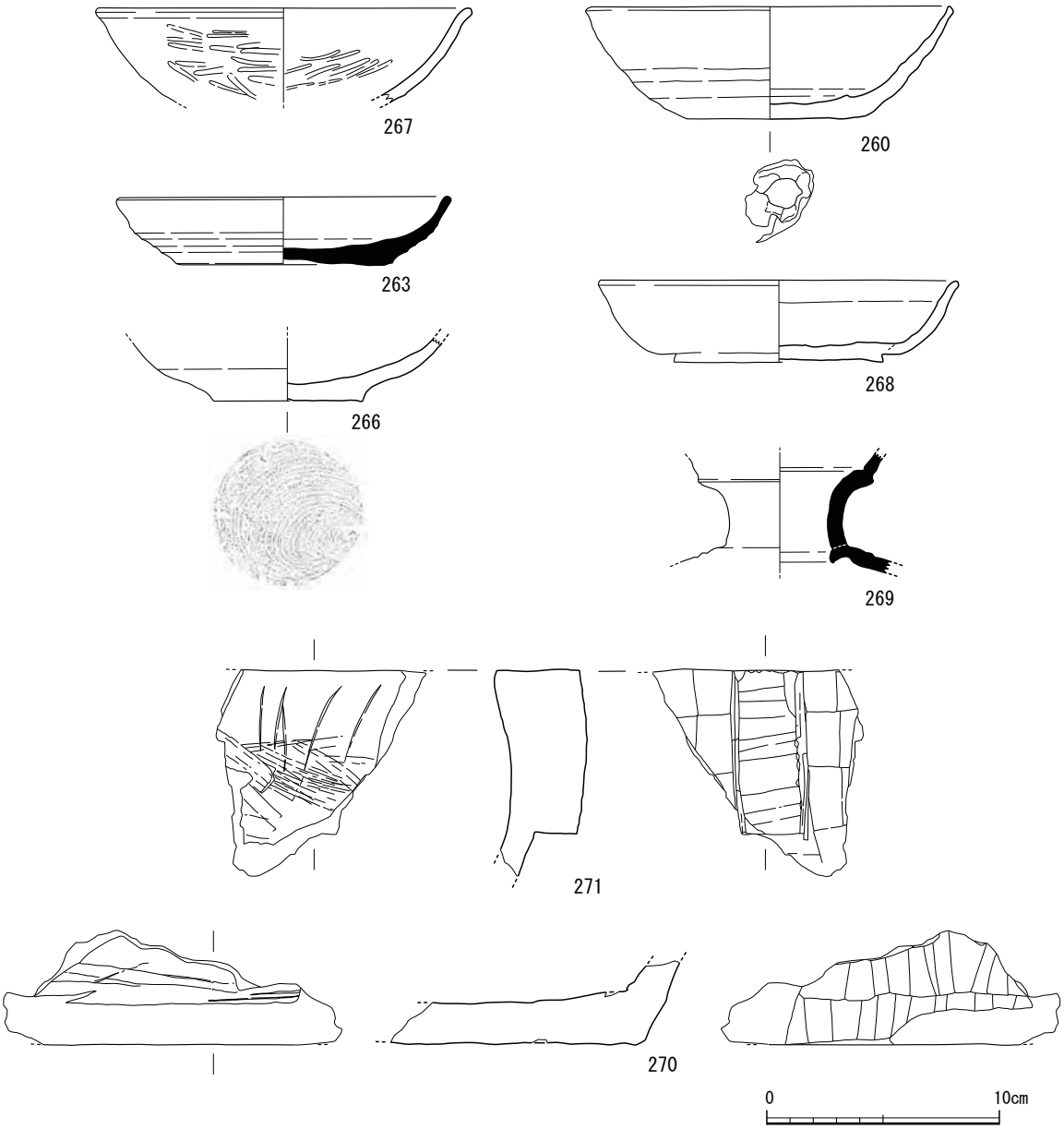
第 123 図　Ⅰ区　SE066 実測図

1197 は碁石と思われるもので、黒色を呈し、径が 1.8cm、厚みが 0.8cm、重量 3.2g を測る。

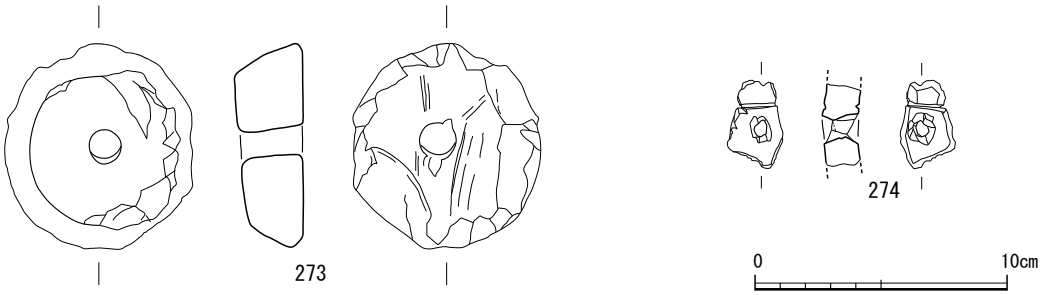
木製品としては、最下部に配置されたクスノキの刳り貫き材を利用した井戸枠がある。クスノキの刳り貫き材をそのまま使用するのではなく、4 分割して底面の状況に合わせて組み合わせながら据え付けていた。

SE066土層注記

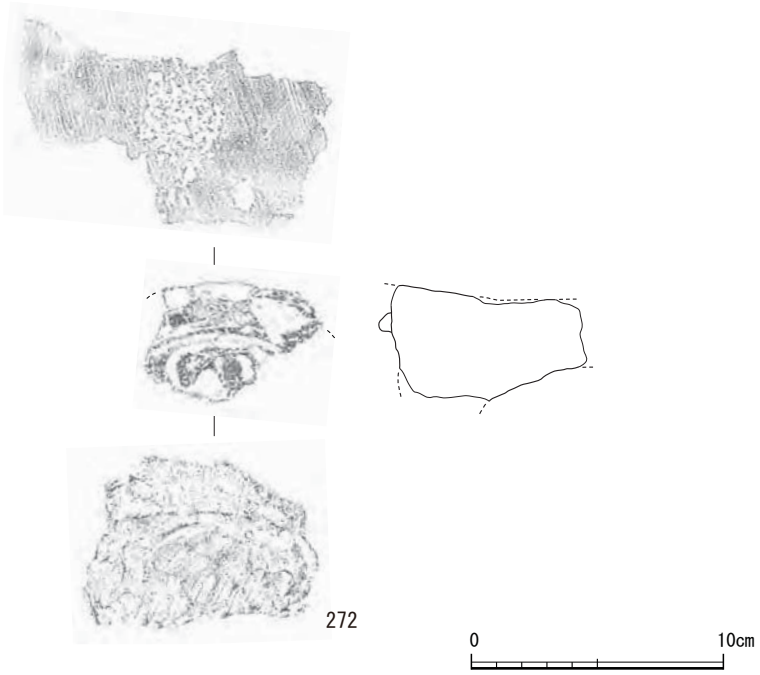
1 層	灰褐	7.5YR4/2 シルト	2～3cm礫
2 層	明褐	10YR3/3 シルト	赤色混　礫混
3 層	灰黄褐	10YR4/2 シルト	白色点混　鉄分含む
3' 層	褐	10YR4/1 シルト	ブロックなし
4 層	黒褐	10YR3/1 シルト	黄白色ブロック混赤褐色ブロック混　鉄分含む
5 層	黒褐	10YR3/1 シルト	鉄分
6 層	黒褐	10YR3/1 シルト	5よりブロック多し
7 層	黒褐	10YR3/1 シルト しまり良い	10YR3/3暗褐色シルト（少し粘質）混在　鉄分少量 黄白色ブロック（1～2cm)多く含む
8 層	黒褐	10YR2/1 シルト しまり良い	少し粘質　黄白色シルト（ブロック大）含む
9 層	黒褐	10YR2/2 シルト しまり良い	やや粘質　鉄分斑点に橙、黄白色ブロック（0.5～2cm）
10層	黒褐	10YR2/2 シルト ややしまる	やや粘質　黄白色ブロック（3～6cm)多いi
11層	黒褐	10YR2/1 シルト しまり非常に良い	粘質　鉄分少量
12層	灰黄褐	10YR4/2 シルト しまり悪い	黄白色ブロック（1cm）　褐色ブロック(1～3cm)少量
13層	灰黄褐	10YR4/2 シルト しまり良い	
14層	黒褐	10YR2/3 シルト しまり良い	粘質　鉄分含む　7,5YR4/4褐色シルトがまばらに混じる
15層	黒褐	10YR3/1 シルト ややしまる	粘性あり　2,5YR4/2 暗褐黄色砂質地山ブロック（10cm大）少量含む
16層	黒褐	10YR2/1 シルト ややしまる	粘性あり　2,5YR4/2 暗灰黄色砂質地山ブロック（5cm大）わずかに含む
17層	黒褐	10YR3/2 シルト しまり弱い	やや粘性あり　2.5YR4/2 暗黄色砂質地山ブロック（5～10cm大）多く含む 獣骨を粒子（1大）わずかに含む



第 124 図　Ｉ区　SE066 出土遺物実測図



第 125 図　Ⅰ区　SE066 出土遺物実測図



第 126 図　Ⅰ区　SE066 瓦出土遺物実測図

それを固定するために杭を打ち込み押さえていた。

　他に図化していないが、移動式のカマドの上部片が 2 点出土している。

・SE-120

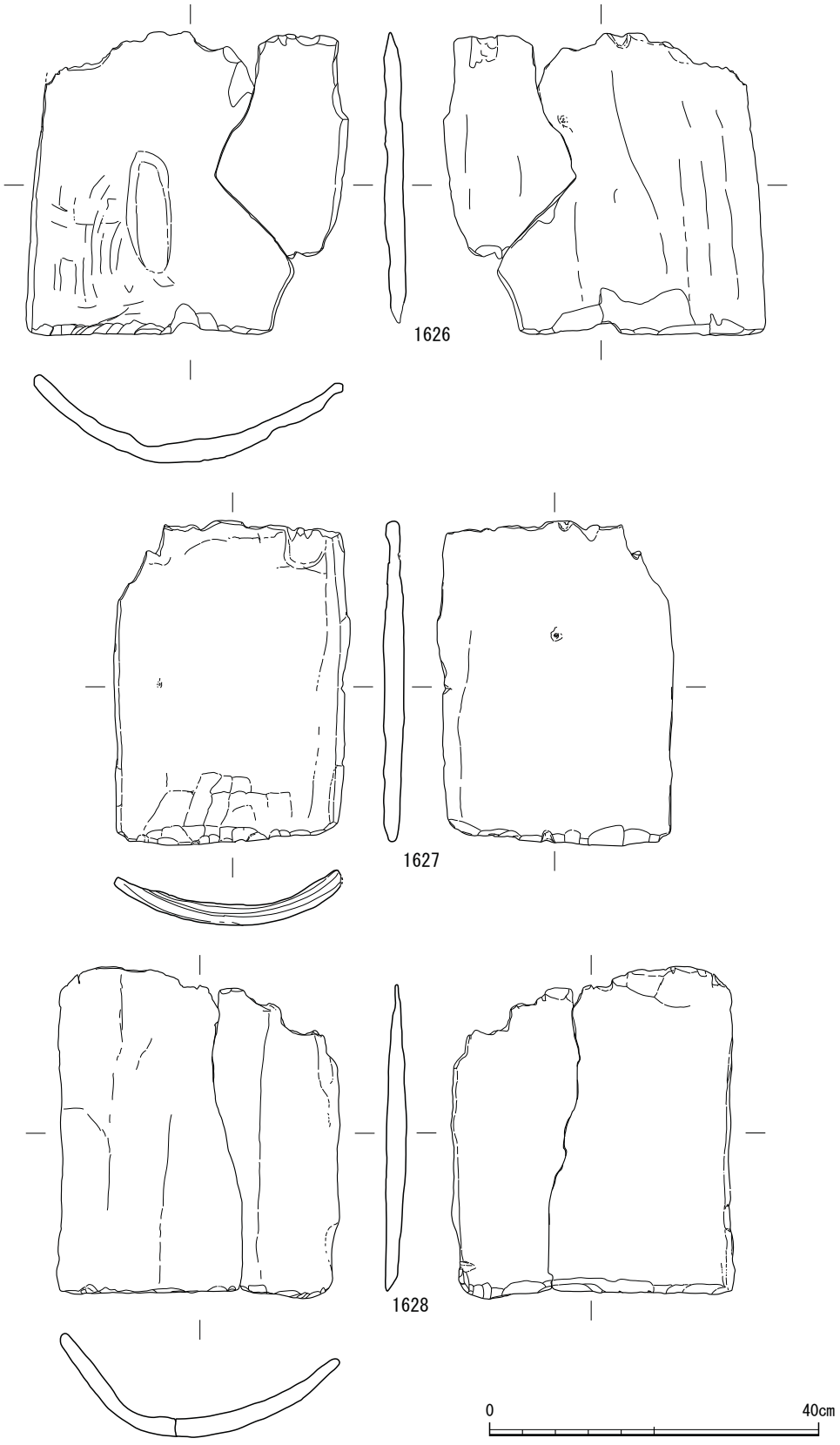
［遺構状況］　141-O-3・4 グリッド検出。一部攪乱で破壊されている。段を持つ井戸で、平面形は確認面での長径が 2.0m、短径が 1.9m を測り、ほぼ円形で大型のものである。確認面から 30cm ほど下で段がある。その下位では径が 90cm ほどで下へ延びていく。確認面から 2.1m ほど掘り下げたところで地山層が砂質のため脆弱となり、掘削を断念した。上位には礫が出土した。

［出土遺物］　511 は、平瓦で凸面に葉脈文が型押しされる。この他に丸瓦 4 点、平瓦 3 点が出土している。

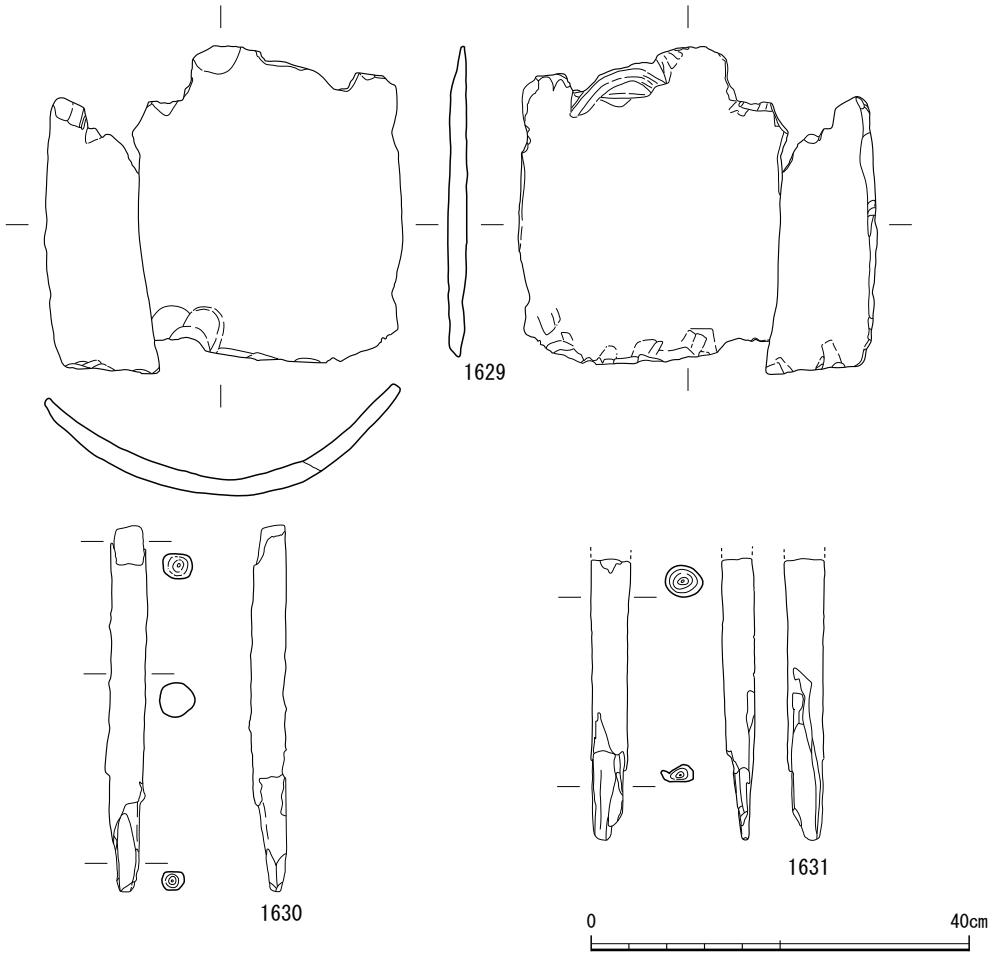
　他にはカマドの上部片が 1 点出土。土器は細片が多く図化しなかった。

・SE-177

［遺構状況］　141-L-5 グリッドで検出した井戸跡である。平面形は径が 1.1m~1.2m を測り、ほぼ円形である。確認面での径はすぐに 90cm 以下になっていき、確認面からの深さ 1.8m のところで石が出土した。さらに下方への掘り下げるため石の除去を検討したが、石の重量と深く狭い井戸の中で足がかり場所もとれず安全



第 127 図　Ｉ区　SE066 井戸枠材実測図



第 128 図　Ⅰ区　SE066 井戸枠材実測図

面を考慮しそれ以上の掘削は困難と判断し断念した。その石のそばに糸切り底の土師器の杯が出土した。

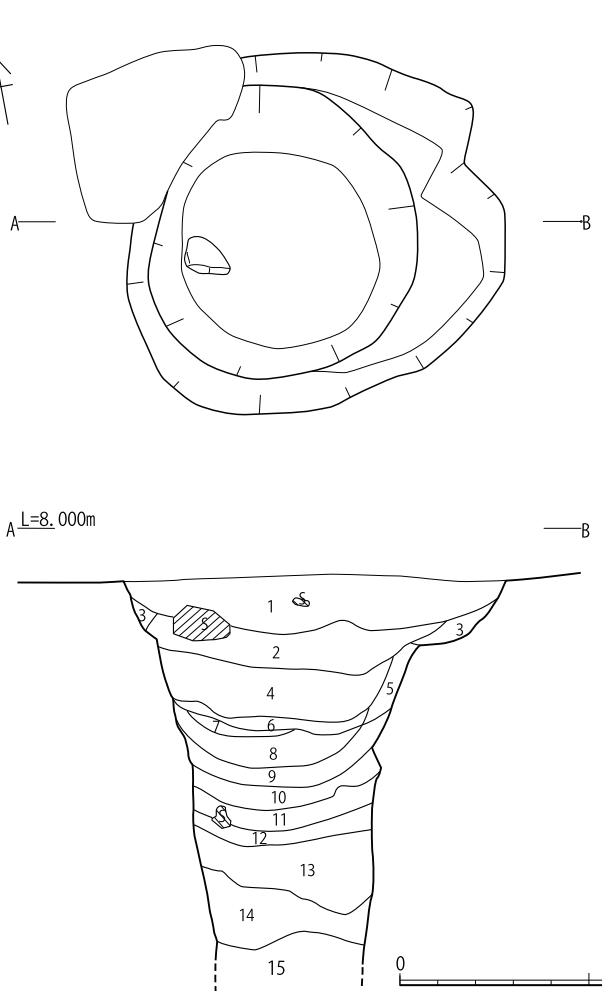
［出土遺物］　輸入陶磁器には白磁碗（Ⅵａ類）の底部が 1 点、白磁皿（Ⅵａ類）の底部 1 点があり、このうち白磁碗（Ⅵａ類）の底部 1220 を図化している。復元底径は 5.4cm を測る。ケズリ出し高台である。内器面には沈線による圏線がはいる。色調は灰白色を呈する。

他に瓦片があり、丸瓦 3 点、平瓦 1 点が出土。

・SE-247

［遺構状況］　141-P-11・12 グリッドで検出。出土遺物から中世初頭と考える。最終的な確認面上部の長径 2.8m、短径 2.3m を測り、確認面からの深さ 2.40m を測る。底部の標高は約 5.60m ほどである。ただし、この井戸の縁部は崩壊していると考えられ、各径は本来の掘り込みの広さより広がっている可能性がある。深さについては、下部で湧水が始まり崩壊が進んだため本来の最下面が不明確になり、最終面と推定したところでの数値である。

埋土の状況は一定の深さまでは井戸の埋没過程で落ち込んだ層に堆積していった層があるようである。この井戸は最初の確認時での規模の大きさと埋没時の崩壊等による平面形の変化のため、当初地下式坑と考えた。その想定で確認できた輪郭の中心を十字に基準線を設定し、外廓線から外側へ向かってトレンチを設定し掘削し、坑の入り口を確認しようとした。しかし、入り口をどこにも確認できなかったため、井戸跡の想定も考え、輪郭内部を 4 分割し、任意に 2 カ所を対角に掘削を進めた。

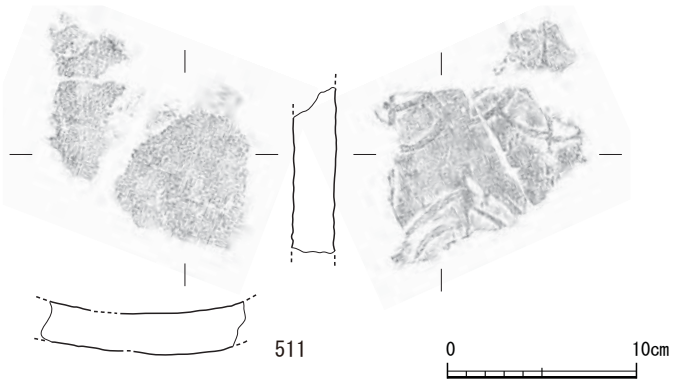


1層	黒褐	10YR3/2	シルト しまりある	灰白色ブロック（ 1cmほど)少し含む
2層	灰黄褐	10YR4/2	シルト しまりある	少し粘質　灰白色ブロック　少し硬質多く含む
〃	灰黄褐	10YR4/2	シルト しまり弱い	少し砂質　明黄褐色の土(砂質　地山)混じる
3層	オリーブ黒色	5Y3/2	シルト しまり弱い	粘質の土が部分的に混じる
〃	灰黄	10YR4/2	シルト しまり弱い	黄灰色ブロック少し含む
〃	黒褐	10YR2/3	シルト しまり弱い	暗褐色ブロック(少し粘質)
				黄灰色､褐色ブロック(斑点)入り混じる
4層	黄褐色	10YR5/6	シルト しまり弱い	やや砂質
〃	黄灰色	10YR4/1	シルト しまりほとんど　ない	灰色､黄灰色ブロック（　1～6cm)が全体に混じっ ている
〃	暗褐	10YR3/3	シルト しまりある	少し粘質
5層	褐色	10YR4/6	シルト しまり弱い	やや砂質
6層	黒褐	10YR2/3	シルト しまり弱い	少し粘質　　少し砂も含ん でいる
7層	黒褐	10YR3/1	シルト しまり弱い	土も含んでいて完全な砂の層ではない
				10YR3/2黒褐色シルト
8層	黒褐	10YR3/1	シルト しまり弱い	少し粘質　灰白色の砂岩質ブロック（1～3mm)多く含む
9層	黒褐	12とほぼ同じ	シルト しまり弱い	砂の割合が多い
10層	黒褐	10YR2/1	シルト しまりない	砂の粒子が粗い　この層から水が沸きだし ている

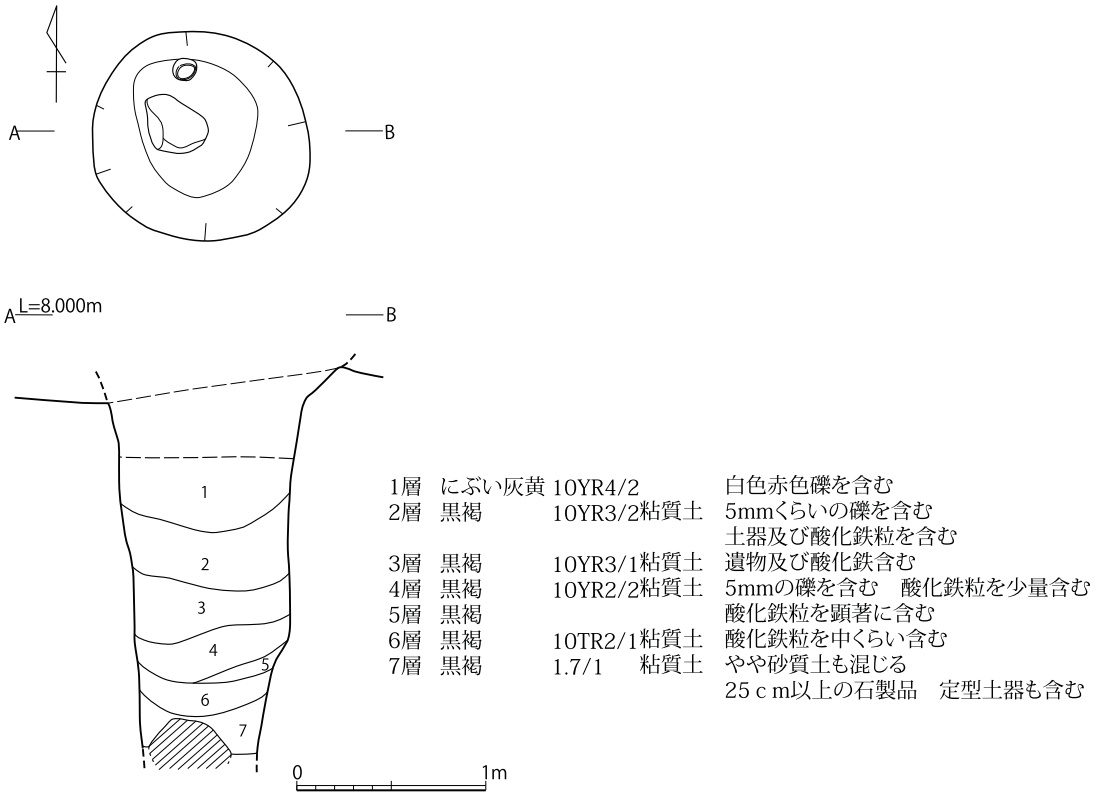
第 129 図　Ｉ区　SE120 実測図

周囲に伸ばしたトレンチを精査したところ怪しい土の乱れはあったもののいずれもピット乃至溝状遺構の一部に過ぎないことが分かった。さらに内部の２カ所の掘削を進めると天井が崩落した跡は確認できず、またタテ坑へと繋がるような横方向への掘削は見えてこなかった。このようなことから井戸跡という方針に切り換え、その後の掘削を行った。断面観察はそれを裏付けるもので、崩壊の状況も確認できた。

最底面は砂質土になっており現在も緩やかではあるが湧水がある。そのため、さらに基底部の崩壊が進んだ。



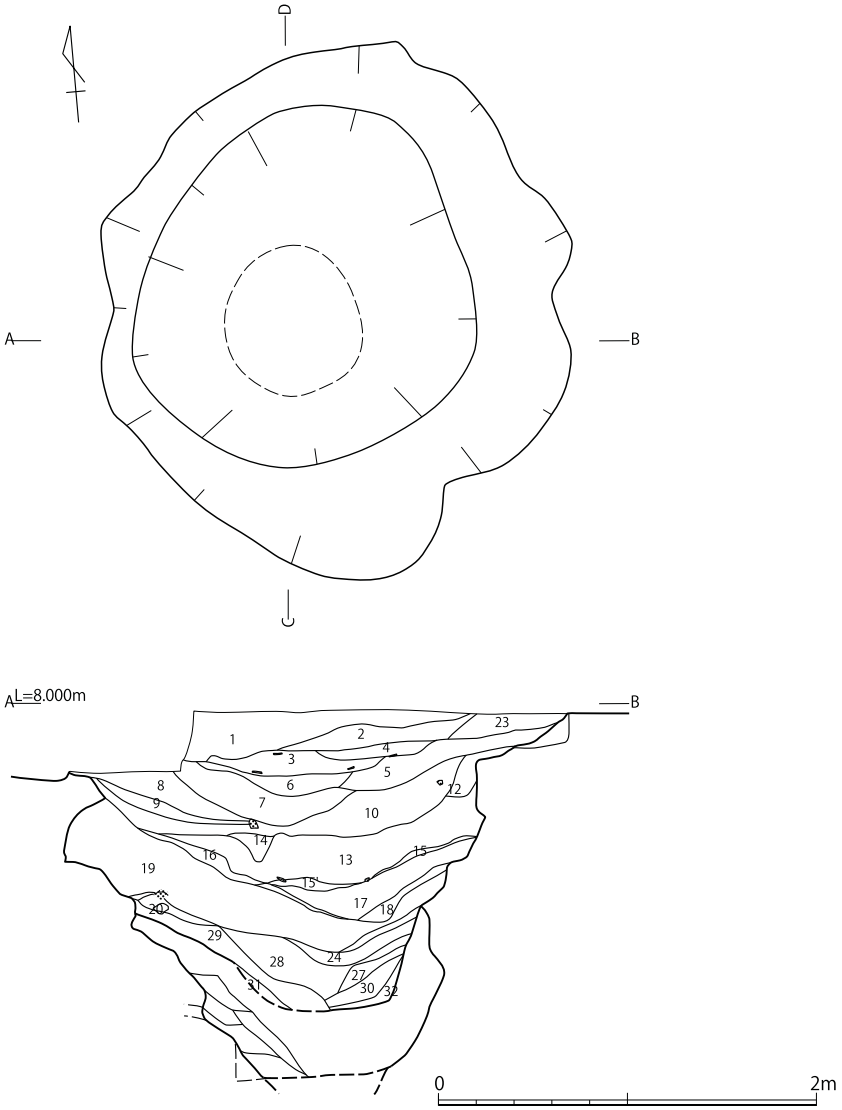
第 130 図　Ⅰ区　SE120 瓦出土遺物実測図



第 131 図　Ⅰ区　SE177 実測図

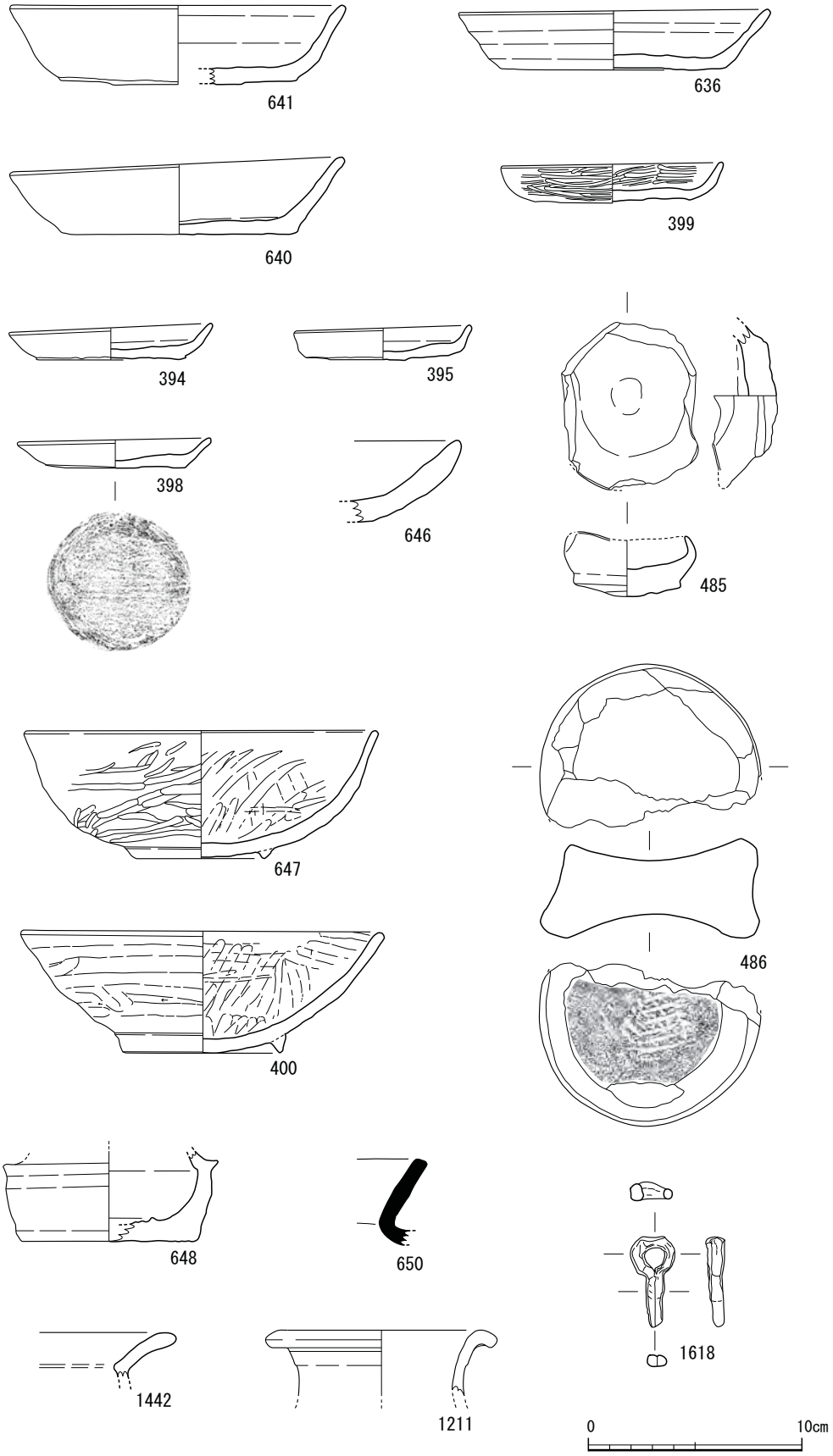
［出土遺物］　輸入陶磁器には越州窯系青磁、白磁、中国陶器などがある。以下それぞれの種別ごとに器種点数をあげる。越州窯系青磁椀は 9 点（I-2 ア×イ類 (1)、I-2 ウ ' 類× I-5 類 (3)、II 類 (4)、I-5 類 [1]）、椀もしくは皿が 3 点（I 類 (3)）、大椀が 3 点（I-2 ア類 ?）、小椀が 1 点（I-2 ア類〔有文 ?〕）がある。龍泉窯系青磁は椀が 1 点（I 類 ?(1)）である。

1236 は越州窯系の青磁椀（Ⅰ -2 ｱ× (ｲ) 類）の底部である。復元底径が 8.0cm を測る。施釉後、高台畳付の釉を削り取る。内器面には細い目跡が輪状に並ぶ。釉は黄灰色を呈する。高台は輪状高台である。1401 は越州窯系青磁椀 (Ⅰ -5 類）で、口縁部から底部までである。体部外面下位には施釉しない。1402 は越州窯系青磁の小椀（Ⅰ -2 類）の底部である。浅黄色の釉で胎土は亜麻色を呈する。高台は輪状高台である。白磁の椀は 22 点（I-1 類 (1)、IV-1a 類 [1](3)、IV 類 (4)、IV~VIII 類 (3)、V-1 × VI-1 × VIII-2 類〔直口〕(1)、

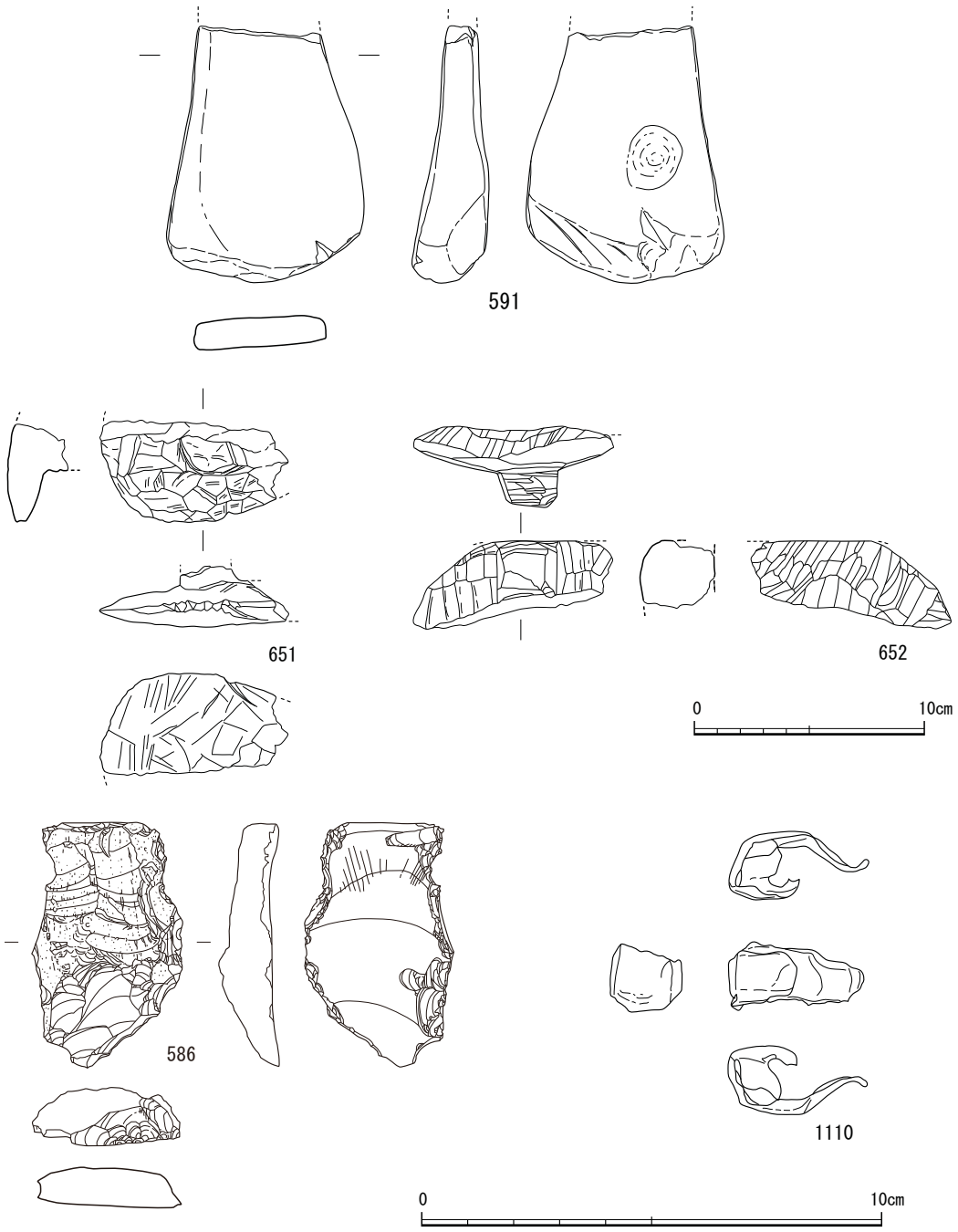


1層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	炭、灰を少し含む
2層	灰黄褐	10YR4/2	シルト	しまりあり	灰、炭を多く含む。明褐色ブロック含む
3層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	灰、炭を多く含む。
4層	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりあり	炭、を少し含む
5層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	炭、を少し含む　黄褐色ブロック岩質（1cm)少し含む
6層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりあり	明褐色、斑点状を含む
7層	黒褐	10YR3/1	シルト	しまり弱い	灰、炭を多く含む。
8層	灰黄褐	10YR4/2	シルト	しまりあり	少し粘質。 黄灰色、明褐色ブロック(0、3～1cm）少し含む
9層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	灰、炭少し含む。 黄灰色、明褐色ブロック(0、5cm）少し含む
10層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	黄灰色、明褐色斑点少し含む
11層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりあり	明褐色の土が少し混ざる　少し粘質
12層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまり良い	明褐色の土が（地山下層）多く含む　炭、少し含む
13層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりあり	少し粘質。 炭、少し含む
14層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまりあり	炭、少し含む　※13の方が粘質強い
15層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	7、5YR5/6明褐色シルト（地山の土）を多く含む
16層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	灰、炭を非常に多く含む
17層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりあり	少し粘質
18層	明褐	7.5YR5/6	シルト		地山の土　流れ込み
19層	黒褐	10YR2/2	シルト	しまり良い	やや粘質
20層	黒褐	10YR2/1	シルト	しまり弱い	灰、炭を多く含む。
21層	黒褐	10YR2/1	シルト	しまりあり	少し粘質　灰を少し含む
22層	黒褐	10YR2/1	シルト	しまり弱い	炭を多く含む　灰、少し含む　少し砂混じり
23層	黒褐	10YR1/2	シルト	しまりあり	炭少量　灰黄褐ブロック少量含む
24層	明褐	7,5YR1/6	シルト	しまりあり	地山の土　流れ込み　粘質弱い
25層	黒褐	10YR2/1	シルト	しまり弱い	粘質の土多量　粘質
26層	にぶい黄褐色	10YR6/4	シルト	しまりあり	粘土質土層
27層	にぶい黄褐色	10YR3/3	シルト	しまりあり	鉄分を少量含む　粘質
28層	にぶい黄褐色	10YR3/2	シルト	しまりあり	灰少量　粘質
29層	黒	10YR2/1	シルト	しまり弱い	灰を多く含む　粘質やや弱い
30層	にぶい黄褐色	10YR3/2	シルト	しまり弱い	灰少量　粘質
31層	黒	10YR2/1	シルト	しまり弱い	灰を多く含む　にぶい黄褐色土（地山）混じる　粘質弱い
32層	にぶい黄褐色	10YR3/2	シルト	しまりあり	灰黄褐色ブロック（1cm)を少量含む

第 132 図　Ｉ区　SE247 実測図



第 133 図　Ⅰ区　SE247 出土遺物実測図

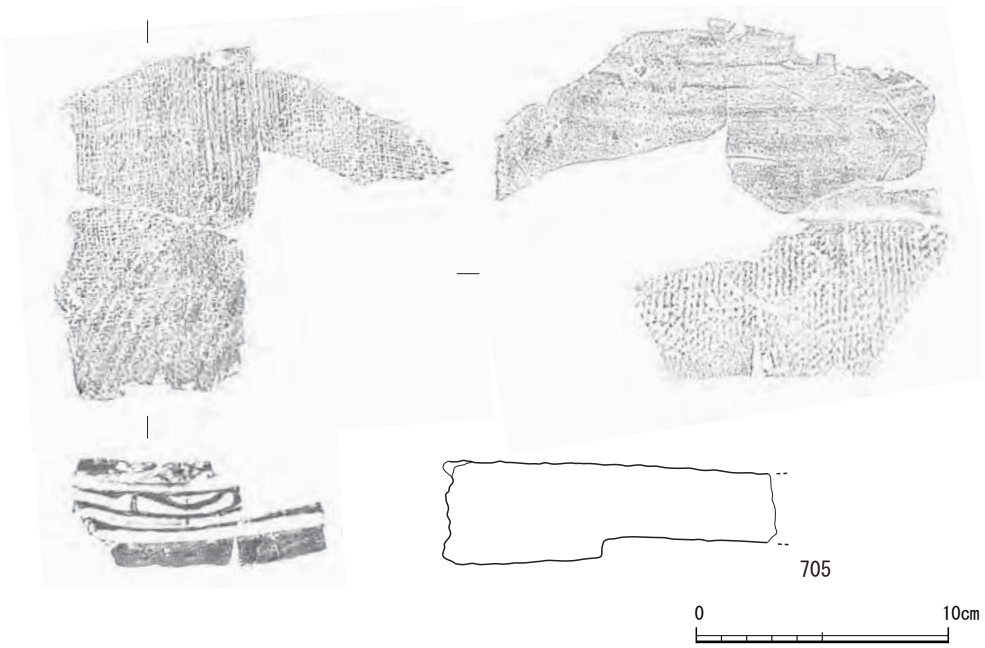


第 134 図　Ｉ区　SE247 出土遺物実測図

V-4a 類 (1)、V-4b 類 [1](1)、V-4 類 (1)、V-4 × VIII-1・3 類 (1)、V 類〔内クシ〕(1)、V~VII 類〔内クシ〕(1)、VIII 類 (1)、XI × VI~VIII 類 (1) 出土した。皿は 6 点（II × III 類 (2)、III-1 類 (1)1、V~VII 類 (1)、VI-1a 類 (2)）出土した。壺類は 3 点（耳壺 III 類②、壺×水注 (1)）出土。

1222 は白磁の椀（Ⅳ -1a 類）の底部である。復元底径が 8.0cm を測る。ケズリ出し高台で、見込に沈線の圏線が入る。胎土は灰白色を呈する。1223 も白磁の椀（Ⅷ -1 類）の底部で、復元底径が 6.6cm を測る。底部はケズリ出し高台で、見込には釉を輪状に掻き取る。胎土は灰白色を呈する。

1239 は白磁の椀（Ⅳ -1b 類）の口縁部から底部まである。復元口径が 16.0cm、器高が 6.8cm、復元底径が 6.4cm を測る。底部はケズリ出し高台で、見込に沈線がある。胎土は灰白色を呈し、口縁部は、玉縁状に肥厚する。器表面に貫入が多くはいる。1438 は白磁の椀（Ⅳ類）口縁部である。復元口径が 16.0cm



第 135 図　Ⅰ区 SE247 瓦出土遺物実測図

を測る。1439 は白磁の椀（Ⅳ類）の口縁部である。胎土も釉も灰白色を呈する。1440 は白磁の椀（Ⅳ類）の口縁部である。1441 は白磁の椀（Ⅳ類）の口縁部である。1451 は白磁の椀（Ⅳ -1a 類）の体部から底部まである。底部はケズリ出し高台で見込に沈線の圏線が入る。体部外面下半から底部には施釉されない。

1452 は白磁の椀（Ⅴ -4b 類）の口縁部から体部まである。復元口径が 16.0cm を測る。胎土と釉は灰白色を呈する。器表面に貫入が入る。1453 は白磁の椀（Ⅷ類）の底部である。底部はケズリ出し高台である。見込の釉を輪状に掻き取る。高台はⅥ・Ⅶ類と類似する。

白磁皿としては、5 点（Ⅲ底 (1), Ⅱ×Ⅲ口 (1), Ⅴ - Ⅶ体 (1), Ⅵ 1a 口 (2)）出土している。

1450 はⅢ -1 類の底部で、復元底径が 4.8cm を測る。ケズリ出し高台で、見込には釉を輪状に掻き取る。釉が銀灰色を呈する。

白磁壺には 3 点（四耳Ⅲ口 (2), 壺×水注頸部 (1)）出土した。1211 は四耳壺（Ⅲ類）で口縁部である。復元口径が 10.8cm を測る。釉・胎土とも灰白色を呈する。

青白磁としては、椀が 5 点（〔内クシ〕 (2)、破片 (3))、小壺の体部片が 1 点、合子の蓋 1 点などが出土した。白磁もしくは青白磁の椀もしくは皿の破片が 1 点（白磁椀 I-1 ×青白磁椀・皿 (1)）出土している。

中国陶器としては盤（Ⅰ -1 類）が 2 個体ある。1442 は口縁部で復元口径が 31.0cm を測る。胎土が灰黄褐色、釉色が薄黄緑色を呈する。1443 も口縁部である。胎土は灰白色、釉は銀鼠色を呈する。

国産陶器としては、緑釉陶器の椀もしくは皿片が 1 点出土している。防長産と考えられる。灰釉の椀が 1 点出土している。11 世紀前 ~ 中のものである。

土器類には須恵器・土師器には耳皿（古代・10 世紀か）、杯 a、合子形？土器 (1)、特大杯、滑車形？器台などがある。古代のものの数量も一定量あるが、一方で瓦器椀 C ②と瓦器の小皿 a が出土している。

井戸の上面と考えるⅢ層下部からの出土遺物として 394・395・398・399・400・640・641 がある。394 は、土師器の小皿（小皿 a（糸））で完形である。口径が 9.4cm、器高が 1.7cm、底径が 7.0cm を測る。外底面は糸切り離し後板状圧痕が残る。395 も土師器の小皿（小皿 a（糸））でほぼ完形である。口径が 8.2cm、器高が 1.6cm、底径が 7.2cm を測る。底部は糸切り離しのち板状圧痕が残る。398 も土師器の小皿（小皿

a（糸））でほぼ完形品である。口径が 9.0cm、器高が 1.3cm、底径が 6.6cm を測る。底部は糸切り離し後板状圧痕がある。399 は瓦器の小皿（小皿 a（糸））でほぼ完形である。口径が 10.3cm、器高が 1.9cm、底径が 7.2cm を測る。内外器面は回転ナデ後ヨコ方向のミガキが施される。外底面は糸切り離し後ヨコ方向のミガキである。400 も瓦器椀で口縁部 2/5 である。口径が 16.8cm、器高が 5.7cm、底径が 7.2cm を測る。内外面にヘラミガキが施される。また、外器面の色合いの違いから重ね焼きが推定できる。640 は土師器の杯（杯 a（糸））でⅩⅤ期の遺物である。全体の 3/4 残り、口径が 15.4cm、器高が 3.6cm、底径が 11.0cm を測る。外底面は糸切り離し後板状圧痕が残る。641 は土師器の杯（杯 a（ヘラ））で、ⅩⅣ期の土器である。全体の 1/2 が残る。復元口径が 15.6cm、器高が 3.7cm、復元底径が 11.0cm を測る。外底面はヘラ切り離し後板状圧痕が残る。

埋土中からの出土遺物としては 485・486・636・646・647・648・650 がある。485 は土師器の耳皿で 1 層からの出土である。あるが、やや形態的に特殊である。口縁部は回転台成形後両側面から押し込むようにして耳皿様の形態にしている。底部は厚くしかも高台が剥げ落ちたような形状を示す。器高は 2.8cm、底径が 5.0cm を測る。調整はナデによる。色調もやや暗い。486 は土器ではなく、滑車状土製品としたが、器台と考えられなくもない。片面にハケメ状の調整痕が残る。全体としてオリーブ黒を呈する。上下面は良く磨かれている。636 土師器の杯（杯 a（糸））でⅩⅥ期の土器である。全体の 4/5 が残り、口径が 14.5cm、器高が 2.8cm、底径が 10.6cm を測る。外底部は糸切り離し後板状圧痕が残る。646 は、土師器の杯であろうか口縁部のみである。回転ナデによる調整が施される。647 は瓦器椀で口縁から底部まで残る。復元口縁が 16.4cm、器高が 6.0cm、底径が 6.0cm を測る。内外面は灰白色を呈する。648 は、土師器の合子の身である。全体の 4/5 が残る。口唇部は欠くものの返しは残る。底径は 8.2cm を測り、残された器高は 4.2cm である。外底部には糸切り離し痕が残る。650 は須恵器の甕（甕 a）である。

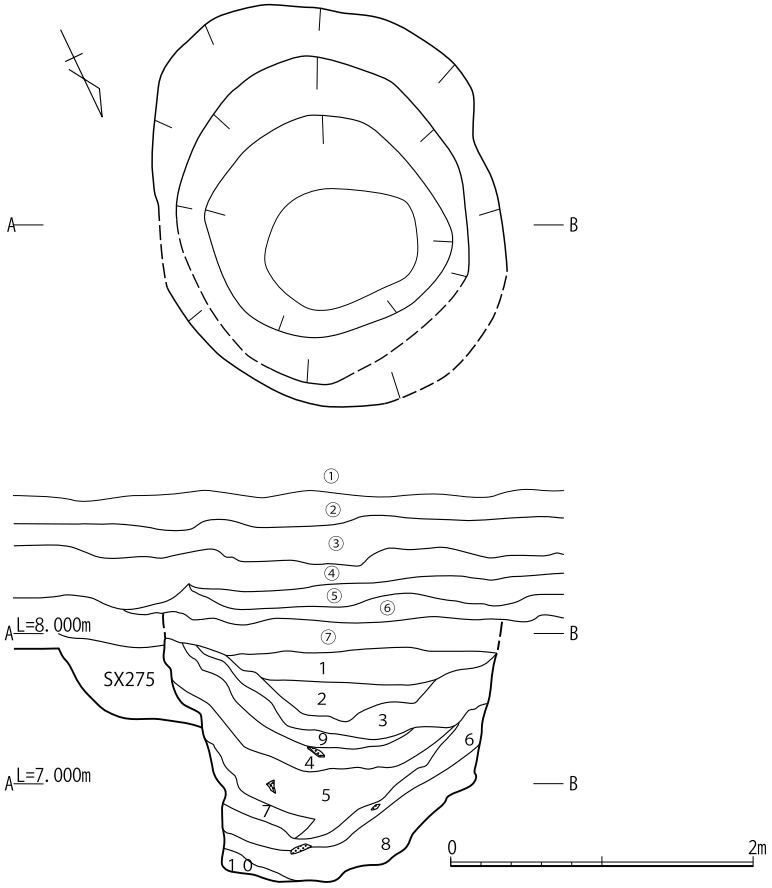
1005 は土師器の杯で口縁の 1/2 が残る。口径 15.0cm、器高 3.2cm、底径 12.0cm を測る。底部は糸切り後板状圧痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。1006 は土師器の小皿でほぼ完形である。口径が 9.4cm、器高が 1.2cm、底径が 7.0cm を測る。底部は糸切り離し後に板状圧痕が残る。1007 は土師器の小皿ほぼ完形である。口径 8.1cm、器高 1.6cm、底径 6.4cm を測る。底部は糸切り後板状圧痕が残る。1008 は、土師器の小皿で 1/2 を測る。口径が 9.0cm、器高が 1.2cm、底径が 8.4cm を測る。底部は糸切り後板状圧痕を残す。1009 は、土師器の小皿でほぼ完形である。口径が 8.5cm、器高が 1.3cm、底径が 6.4cm を測る。底部には糸切り後板状圧痕が残る。1010 も土師器の小皿でほぼ完形である。口径が 8.6cm、器高が 1.7cm、底径が 6.2cm を測り、底部には糸切り後板状圧痕が残る。1011 も土師器の小皿でほぼ完形である。口径が 8.4cm、器高が 1.1cm、底径が 7.0cm を測る。底部は糸切り後板状圧痕を残す。1015 は土師器の小皿で、完形である。口径が 8.4cm、器高が 1.5cm、底径が 6.8cm を測り、糸切り後板状圧痕を残す。1076 は土師器の小皿で完形である。口径が 8.8cm、器高が 2.0cm、底径が 6.6cm を測る。糸切り後板状圧痕を残す。1077 は土師器の小皿で完形である。口径が 8.6cm、器高が 1.2cm、底径が 6.6cm を測り、糸切り後板状圧痕を残す。

瓦片も多く出土し、丸瓦が 15 点、平瓦が 15 点、軒平瓦が 1 点（(No.705)+MN-9・10+SP-740）・木葉文瓦などがある。

705 は軒平瓦片で、この井戸跡からの破片と包含層及び SP-740 からの出土したものの接合したものである。瓦当面の文様はごく一部であるため詳細は不明であるが、唐草文の簡略化したものと考える。凹面には糸切り痕が残り、その上に布痕がみられる。また凸面の瓦当部分には縄目タタキの跡が残り、他の凸面は丁寧にナデ消されている。桶巻技法による成形である。

金属製品には鉄製品と青銅製品がある。

1110 は青銅製品である。小さな箱状のもので、何かの道具などに装着されていたものと考えられ、無理



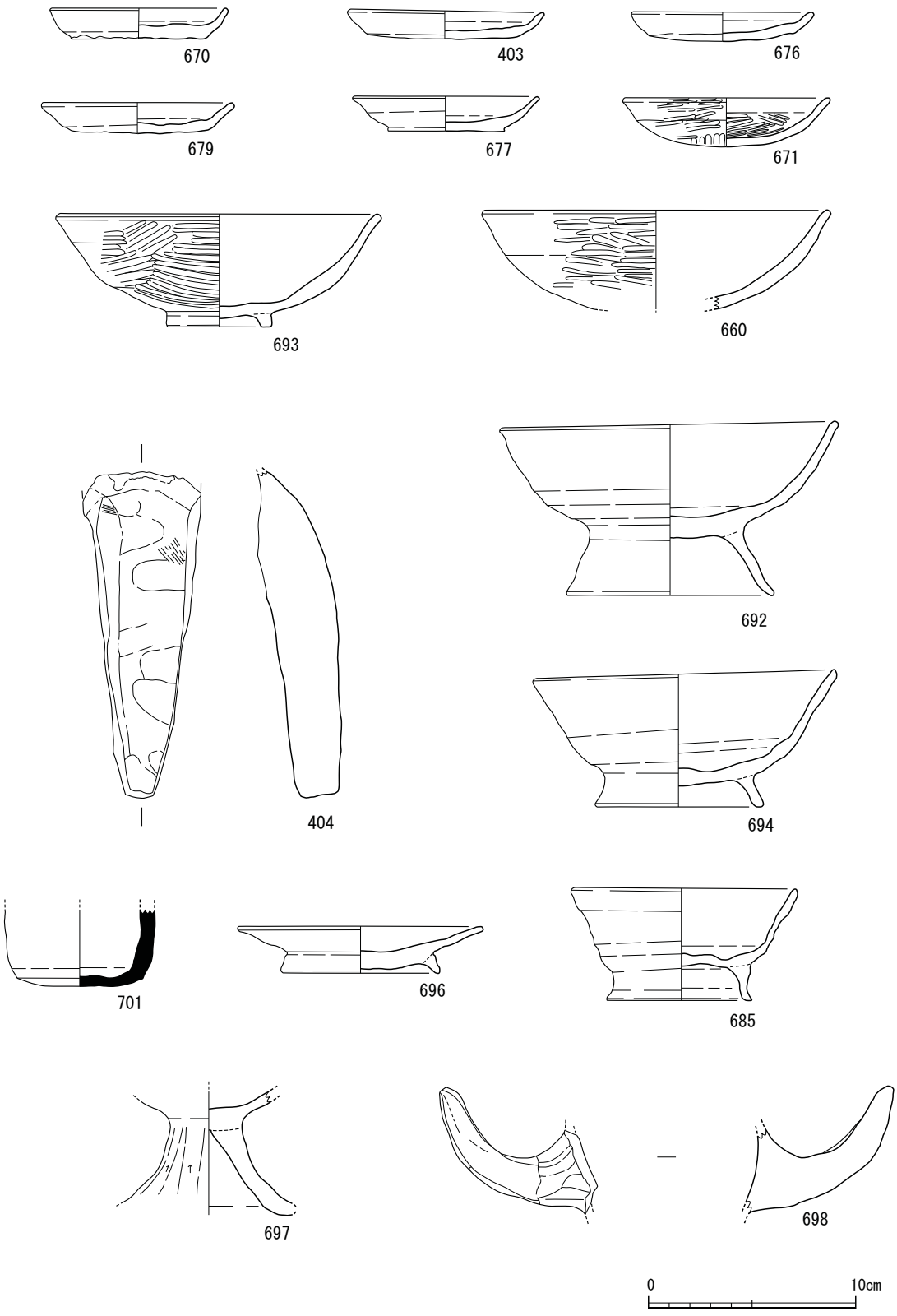
①層	褐色	10YR4/4	シルト	しまりある
②層	にぶい黄褐	10YR5/4	シルト	しまりある
③層	黄褐	10YR5/3	シルト	しまり弱い
④層	黄褐	10YR5/3	シルト	しまり弱い
⑤層	暗灰黄	10YR5/2	シルト	しまりある
⑥層	灰黄褐	10YR4/2	シルト	しまり少し弱い
⑦層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまり弱い
1層	暗褐	10YR3/4	シルト	しまりある　黄褐色、黄灰ブロック（　0,5～1㎝）多く含む
2層	暗褐	10YR3/3	シルト	しまりある　黄灰色ブロック（ 0,5ｃｍ）少し含む
3層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりある　少し粘着　黄灰色ブロック（ 0,5～1㎝）含む 炭少し含む
4層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりある　明黄褐色、黄灰色ブロック（　0,5～１ｃｍ）　炭含む しまり弱い　（ほどんど灰の層）
5層	黒褐	10YR2/3	シルト	しまり弱い　やや粘質　灰非常に多く含む 炭含む　（ほとんど灰の層）
6層	黒褐	7.5YR3/2	シルト	しまりある　明黄褐色土（地山）　斑点状に少し混じる
7層	暗褐	7,5YR3/3	シルト	しまりある　明褐色ブロック（ 0,5～1㎝）多く含む
8層	黒褐	10YR3/1	シルト	しまり弱い　灰非常に多く含む　炭含む（ほどんど灰の層）
9層	黒褐	10YR3/2	シルト	しまりある　灰、炭多く含む　黄灰ブロック砂岩質（　1～3㎝）含む
10層	黄褐	2.5YR5/3	シルト	しまりある　硬質なブロック状の土が多く含ん　でいる

第 136 図　Ⅰ区　SE249 実測図（1/50）

やり引きはがしたような形状を呈している。端部に取り付けたもののようである。工具の部品か調度品の飾りかもしれない。1618 は鉄製品で壺金具である。長さが 4.5cm、環状部分の径が 2cm を測る。大きさと錠前などが出土していることから箱などの容器の金具である可能性がある。

この他の遺物として、カマドの上部片 7 点と下部片 1 点が出土した。

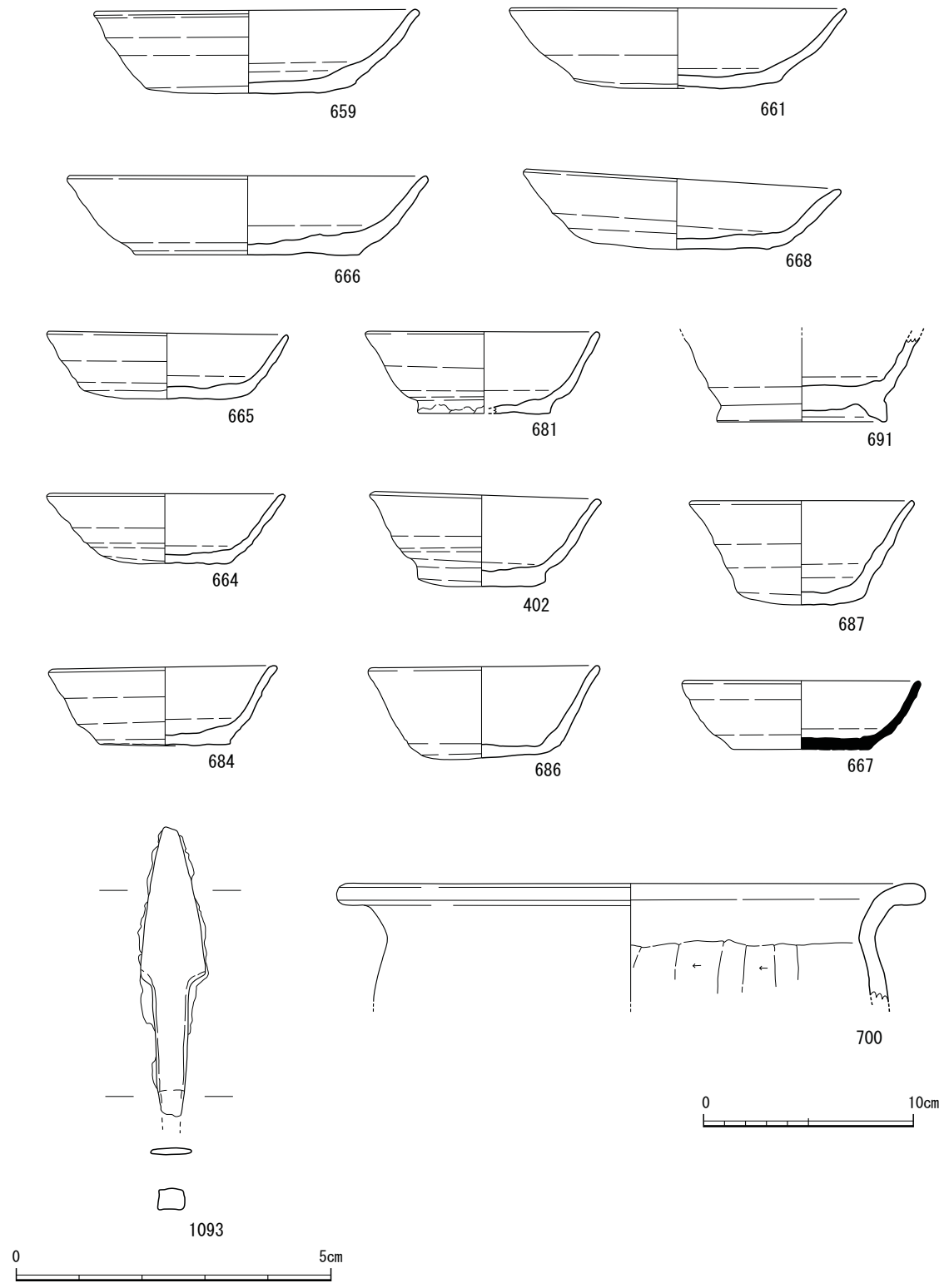
石製品としては、586 は縄文時代晩期のものでスクレイパーである。縄文土器も出土しているので本来



第 137 図　Ｉ区　SE249 出土遺物実測図

包含層があり、この遺構混入したものであろう。

591・598・600・601・602・603 は砥石で時期が特定しがたいが、主に古代・中世であろうか。ここでは、591 を図化した。長さが 10.9cm、幅が 8.5cm、厚みが 3.1cm、重さが 353g を測る。602 は長さ



第 138 図　Ⅰ区　SE249 出土遺物実測図 (1093 のみ S=1/2)

が 15.2cm、幅が 5.3cm、厚みが 1.5cm、重さが 128g を測り、全体的に磨研される。877 は長さが 35cm、幅が 15cm、厚みが 4.9cm、重さが 4226g を測る。側面を主に使用している。

651 は滑石製石鍋の再加工品である。652 も滑石製石鍋の再加工品である。何らの蓋のようなものを想定しているが、実際に何に使用したか不明である。よく似たものは他に数点ある。

以上の遺物を総括すると、主たる遺物は、12 世紀末 ~13 世紀初頭に集中が見られる。

・SE-249

［遺構状況］　この遺構は 141-R-8・9 グリッドで検出。当初調査区の壁際に半分ほど出土したため、貴重な遺構として協議し、調査区を南側に拡張し全体を確認した。

確認面では長径が 2.8m、短径が 2.0m を測る楕円形を呈し、確認面最上位から約 2m の深さがある。確認した最下位も長径 1.0m、短径 0.8m の楕円形である。この遺構は S-275 を切っている。

調査区の壁際で検出したためこの遺構の掘り込まれた層を確認できた。ほぼⅢ層の中位付近からで、標高 8m ほどである。そこから 1.7m ほど掘り込まれ底部に至る。堆積状況は何段階かの埋める作業があった可能性がある。途中炭化物や灰を含む黒色層があり、その層には獣骨が混じっていた。

出土遺物からこの遺構の時期は中世初頭と判断した

［出土遺物］　輸入陶磁器には越州窯系椀が 3 点（椀 I-2b 類口縁 (1)、I-2b × III-1b 類の直口縁 (1)、I-1 口縁 (1)）出土している。

土師器には椀・杯・小皿・高台付椀などがある。

670 は小皿でほぼ完形である。口径が 8.6cm、器高が 1.5cm、底径が 6.3cm を測る。外底部は糸切り離し後、板目状圧痕が残る。403 も小皿で完形である。口径が 9.5cm、器高が 1.45cm、底径が 7.5cm を測る。外底部はヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。676 も小皿の完形である。口径が 8.8cm、器高が 1.4cm、底径が 7.05cm、外底部はヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。677 も小皿の完形である。口径が 9.0cm、器高が 1.7cm、底径が 5.6cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデが施される。679 も小皿の完形である。口径が 9.3cm、器高が 1.5cm、底径が 6.6cm を測る。底部はヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。

693 は高台付椀で、ほぼ完形である。口径が 15.7cm、器高が 5.5cm、底径が 5.0cm を測る。内外器面はミガキ調整が施される。660 は黒色土器の椀で口径の 1/6 が残る。復元口径が 16.9cm を測る。内外器面にヘラミガキによる調整が施される。692 は高台付椀で口径の 2/3 が残る。復元口径が 16.4cm、器高が 8.4cm、底径が 10.0cm を測る。高台が高い土器である。694 も高台付椀で口径の 2/3 残る。口径が 14.7cm、器高が 6.6cm、底径が 8.1cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデておりその上に高台を貼り付ける。685 も高台付椀があるが小型のもので口径の 2/3 が残る。口径が 11.0cm、器高が 5.45cm、底径が 6.95cm を測る。高台はかなり直に延びる。

404 は三脚付きの鉢もしくは鍋の脚部と考える。付け根付近が貼り付け部分から剥離している。かなり丈夫な作りである。表面は丁寧にナデ調整されている。

696 は土師器の托もしくは脚付き皿である。口径の 1/4 が残る。復元口径が 11.8cm、器高が 2.3cm、底径が 7.4cm を測る。皿部は大きく開き浅い作りであるため、托とした方がよいかもしれない。外底部はヘラ切り後ナデ調整され、高台は貼り付けである。

697 は土師器の高杯であるが、小型のもので杯部下部から脚部までの破片である。杯部の形態は不明確であるが、全体的に磨耗しており、脚部は縦方向にヘラケズリがなされる。698 は土師器の把手付き鉢もしくは杯の把手部分のみである。内器面は黒色を呈しミガキが施される。

659・661・666・668 は土師器の大型の杯である。659 は口径の 5/6 で残る。復元口径が 15.5cm、器高が 4.0cm、底径が 10.0cm を測る。外底部はヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。内器面にはナデが強く施される。661 は口径の 1/5 が残る。復元口径が 16.1cm、器高が 3.8cm、底径が 9.8cm を測る。外底部にはヘラ切り離し痕が残る。666 は口径の 1/3 が残る。口径が 17.2cm、器高が 3.8cm、底径が 10.7cm を測る。外底部にヘラ切り離しが残る。668 は口径の 1/5 が残る。口径が 15.1cm、器高が 3.8cm、底径が 9.1cm

を測る。

664・665・684 は土師器の杯である。

664 は口径の 1/3 残る。口径が 11.4cm、器高が 3.3cm、底径が 6.05cm を測る。外底部はヘラ切り離しのままである。665 は口径の 1/2 が残る。口径が 11.5cm、器高が 3.2cm、底径が 7.95cm を測る。外底部はヘラ切り離しのままである。665 は口径の 1/2 が残る。口径が 11.5cm、器高が 3.2cm、底径が 7.95cm を測る。外底部はヘラ切り離しのままである。684 はほぼ完形で、口径が 10.9cm、器高が 3.8cm、底径が 6.2cm を測る。底部に板状圧痕が残る。

681・402・686・687 は椀とする。

681 は口径の 2/3 が残る。口径が 11.2cm、器高が 3.9cm、底径が 6.3cm を測る。外底部はヘラ切り離し後板状圧痕が残る。402 は完形で、口径が 11.1cm、器高が 4.5cm、底径が 6.1cm を測る。外底面はヘラ切り離し後ナデが施される。内・外面に黒斑が残る。686 ほぼ完形で、口径が 11.1cm、器高が 4.4cm、底径が　cm を測る。外底部はヘラ切り離し後ナデが施される。外部底面に赤彩痕跡が残る。外底面の調整が雑である。

687 は口径の 1/4 が残る。口径が 10.8cm、器高が 4.95cm、底径が 6.0cm を測る。外底部はヘラ切り離し後に板状圧痕が残る。

691 は赤焼けの高台付壺の底部であろうか。通常の杯よりも底部の厚みが大きく、体部壁厚も大きい。底径は 8.1cm を測る。内・外器面とも赤彩されている。底部厚みが大きく杯ではないようである。内底面に煤が付着していた。高台は貼り付けであるが、高台の断面をみると畳付部分がとがったようになり内側に稜をもちめぐる。

700 は土師器の甕の口縁部付近である。口縁の 1/4 が残る。復元口径が　　28.0cm を測る。断面は弱いくの字を呈し、口唇端部は丸まる。

667 は須恵器の杯である。口径の 1/3 が残る。口径が 11.4cm、器高が 3.3cm、底径が 6.5cm を測る。外底部はヘラ切り離しである。

701 は須恵器の小型水注と考えられる。底径が 1/2 残る。復元口径が 6.0cm 測る。

1093 は鉄器で、鉄鏃と考えられる。1 層からの出土で、残存長が 9.2cm、鏃幅が 2.1cm、厚みが 0.6cm を測る。重量は 21.8g である。

他に丸瓦 3 点、平瓦 3 点、特殊瓦 1 点が出土。

(7)　溝状遺構

溝状遺構としたものは、大まかな傾向として調査区の主に西側に南北方向のものが、南側でやや北北西から南南西方向へ延びている。一つ一つの溝状遺構は非常に似通った構造をしているものが多く、断面観察によっても幅 30~40cm、深さ 50cm 前後のものが何層にも切り合いながら、大きな見かけ上大きな溝になったりしている。中には調査区北側にみられる SD-041 とその関連遺構のように平坦な底を持ち、底面に段を有するものもある。ここでは溝状遺構として形態上一定の長さと幅、深さを持ち、顕著な遺物の出土した遺構について述べていく。ただ、個々の遺構を十分に吟味し分離できなかったことをあらかじめ断っておく。

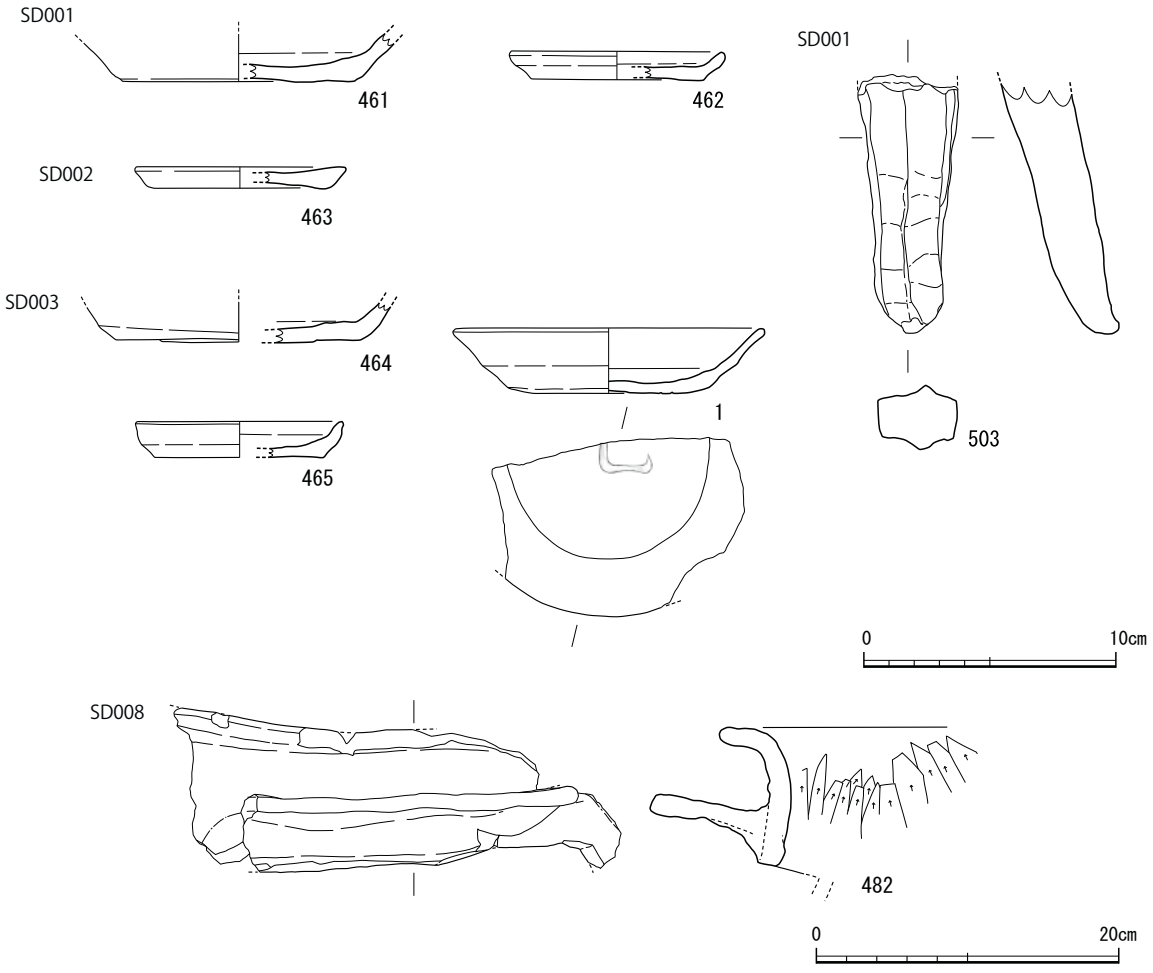
・近世以降の溝状遺構

ここではまず、調査時にはⅢ層からの中世より古い時期の層からの調査としたため、それ以前の層は一括して処理したが、一部Ⅲ層上面にまで到達していた遺構についてのべる。

・SD-001

［遺構状況］　Ⅱ層からの掘り込みで、江戸後半と考える。南北に走る溝で、141-G・H-3 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器の青白磁が 1 点出土した。



第 139 図　Ｉ区　溝状遺構出土遺物実測図（482 のみ S=1/5）

・SD-002

［遺構状況］　Ⅱ層からの掘り込みで、江戸後半と考える。南北に走る溝で、141-G・H-3 グリッドで検出。

・SD-003

［遺構状況］　Ⅱ層からの掘り込みで、江戸後半と考える。南北に走る溝で、141-G・H-3 グリッドで検出。

［出土遺物］　白磁碗（Ⅴ -4 ×Ⅷ -1,3 類 (1), Ⅳ類口縁 (2)）が出土。

・SD-007

［遺構状況］　Ⅱ層からの掘り込みで、江戸後半と考える。141-G・H・I・J-3・4・7 グリッドで検出。

［出土遺物］　白磁碗（底Ⅶ類 (1)）が混入。

・SD-009

［遺構状況］　Ⅱ層からの掘り込みで、141-M・N-3~10 グリッドで検出。江戸後半。

［出土遺物］　越州窯青磁（椀大Ⅰ -2 類、大椀Ⅰ -2a(ア ?) 類）が各 1 点、白磁碗（Ⅳ - Ⅷ類体部 (3)）が出土。
他に丸瓦 2 点、平瓦 4 点出土。またカマドの下部片 1 点出土。

・SD-010

［遺構状況］　この遺構は 141-P-6~12、Q・R・S-5・6 グリッドで検出。Ⅱ層から掘り込まれている。埋土は 2 層に分かれる。この遺構と S-011 とは間 30cm 前後を挟んで平行して走っている。確認面では幅 30cm、深さ 40　cm しかなかったがⅡ層上面からの掘り込みなら深さは 1m を超える。それが同じ間隔で平行して、調査区外から伸びて、S-6 グリッド付近から北上し、P-6 グリッドの東端近くで東側に屈曲し、R-12 グリッド付近まで至り調査区外へと延びる。長さにして 45m ほどである。このような狭小で深い溝状遺構の状況は何を示すのか明らかではない。この付近に畑地もしくは宅地の区画のようなことがあったのではなかろうか。時期的には近世後半以降であろうか。

［出土遺物］　出土遺物はいずれも包含層に含まれていたものである。

時期的なものを判断した材料のひとつが 1213 である。この遺物は陶器で、いわゆる京焼風陶器と呼ばれるもので肥前系のものである。椀の底部付近で高台径 3.2cm を測る。削り出し高台で、浅黄橙を呈する胎土と釉は赤白橡などで内底面に荒磯文の簡略した図が描かれる。

以下の遺物は混入していたものである。輸入陶磁器の白磁椀（片口 (1)、Ⅴ -4 ×Ⅷ -1~3 類 (1)、Ⅳ類口縁 (1), Ⅴ -1 ×Ⅷ -2 類口縁 (1)）などが出土している。瓦は丸瓦 1 点、平瓦 1 点、軒丸瓦 1 点（748）が出土した。

・SD-011

［遺構状況］　この遺構もⅡ層から掘削される。内容的には SD-010 に同じ。江戸後半のものである。

［出土遺物］　SD-010 と同じく遺物は包含層中からの混入物である。ただ、近代瓦（平 1）が含まれていた。

輸入陶磁器の白磁碗（Ⅱ -1 類底部 (1), Ⅳ - Ⅷ類体部 (1), Ⅳ ~ Ⅴ類底部 (1)）、白磁皿（Ⅴ - Ⅷ類 (1)）、青白磁（椀口縁 (1), 椀片 (3), 椀内クシ文 (1)）などが出土している、国内産の陶磁器として瀬戸の卸皿も出土している。また、924 のひょうそくは完形で掘削の最下層で出土した。

平瓦 4 点、カマドの下部 1 点も出土している。

・SD-008

［遺構状況］141-K・L-1・2 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器として龍泉窯の（椀Ｉ①類~4 類 (大半Ｉ -1) の体部 (9)(1))、白磁碗（Ｖ -4 ×Ⅷ -1・3 類口縁 (1)、Ｖ ~ Ⅶ類内クシ文 (1)、Ｖ -1 ×Ⅷ -1 類口縁 (1)）などが出土。

その他にカマド把手 ?(1) などがある。

・SD-034

［遺構状況］　141-T-13・14 グリッドで検出。長さ 5m ほどを確認した。幅は確認面で 3.5m を測る。深さは確認面から 30cm ほどである。出土遺物から近代以降の遺物と考える。

［出土遺物］　この遺構には輸入陶磁器が出土した。白磁碗ではⅣ - Ⅷ類の体部 1 点、口縁（Ｖ ~ Ⅶ？類）が 1 点、青磁越州窯椀（Ｉ -1 類）の口縁 1 点が出土している。瓦では丸瓦２点、平瓦２点出土。

・SD-041

［遺構状況］　大溝状遺構である。141-H-3・4 グリッドから G-7・8 グリッドまで伸びて、調査区外へと続く。H-3・4 グリッドでは底が丸くなっているがこの西側で SD-897 と直交する。ある時期には SD-897 と垂直に交わりながら大きな溝を形成していた。この２本の溝が囲む範囲は調査区の北側に大きな屋敷跡があるのではないかと想定した。ただし、その部分は今回の調査区外となるため、その方向にどのような遺構があるのか不明である。今後の熊本市の調査にゆだねるしかない。

この遺構はⅢ層の掘削途中で確認でき、確認面での幅は 3~3.3m、確認できた長さは 20m を測る。底部には部分的に意図的な掘削深度がかえられたため段を持つように見える箇所がある。深さはこの遺構の確認できた面から深い処で 1.5m、浅い処で 1.3m を測る。

埋土の状況は、部分的には一気に埋められたような箇所もあるが、徐々に堆積していったような層序もあり、何度かの掘り返しがあった可能性もある。

この遺構の形成時期は埋土の遺物から鎌倉時代初期であろう。

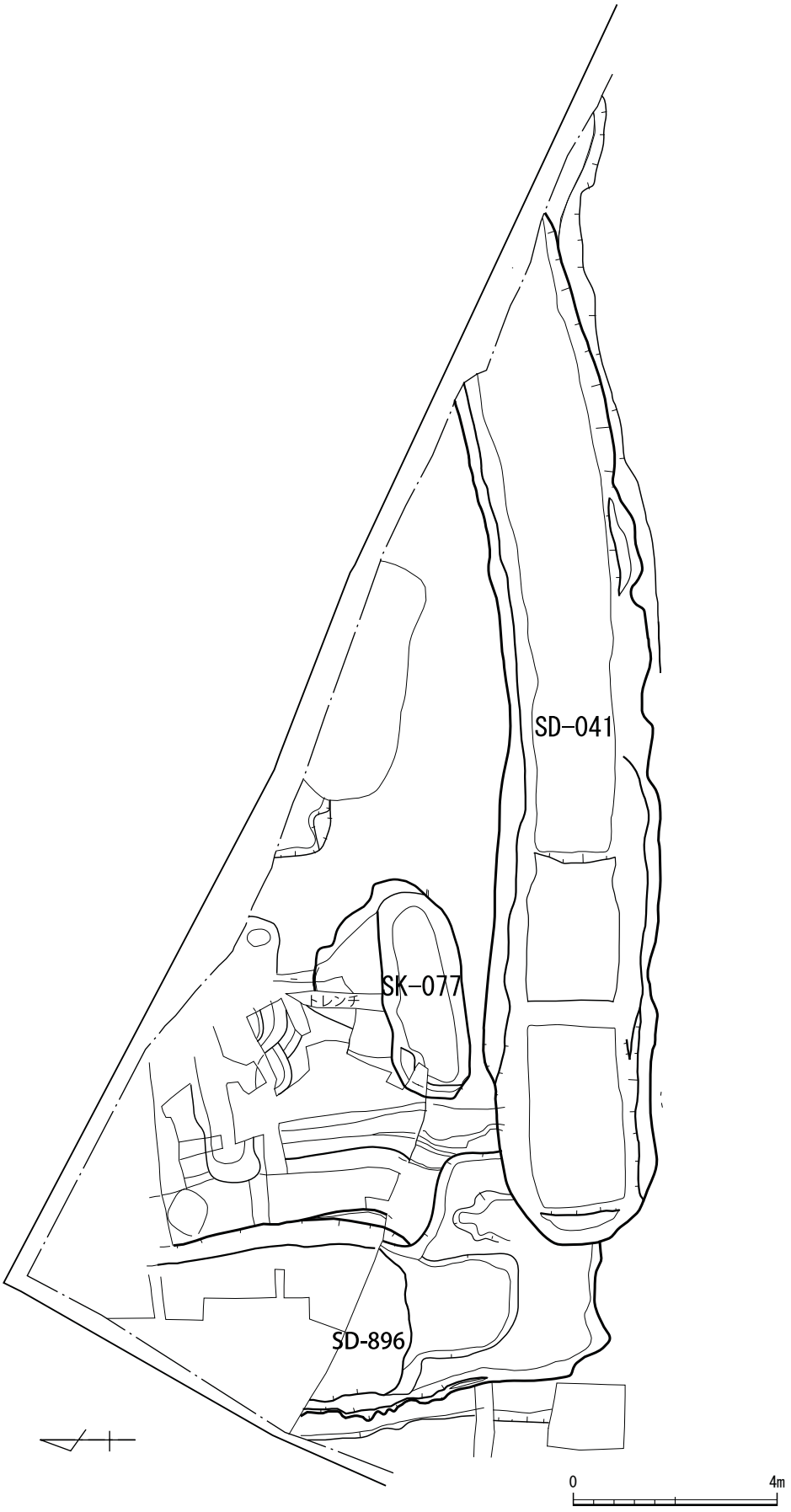
［出土遺物］　この遺構からの出土遺物は大型の溝状遺構であるため非常に多い。輸入陶磁器を始め、在地・外来の遺物が多く出土した。以下に主な遺物について述べる。

輸入陶磁器には、白磁・青磁などがある。白磁椀では大宰府分類と点数で示せば、（Ｖ類底 (1)、Ｖ×Ⅵ類底 (1)、Ⅳ -1a 類底 (1)、Ｉ×（ＸＩ）類・蛇の目×輪不明、Ⅳ類口 (3)、Ⅵ類底 (1)、Ⅱ -1a 類口 (1)、Ⅱ類体 (2)、外反 (Ｖ -2 類、Ⅵ類Ⅶ類)(1)、小椀Ⅱ類 (1)）などがある。白磁皿ではⅥ -1b 類の底部 1 点がある。青白磁では皿底部 1 点がある。

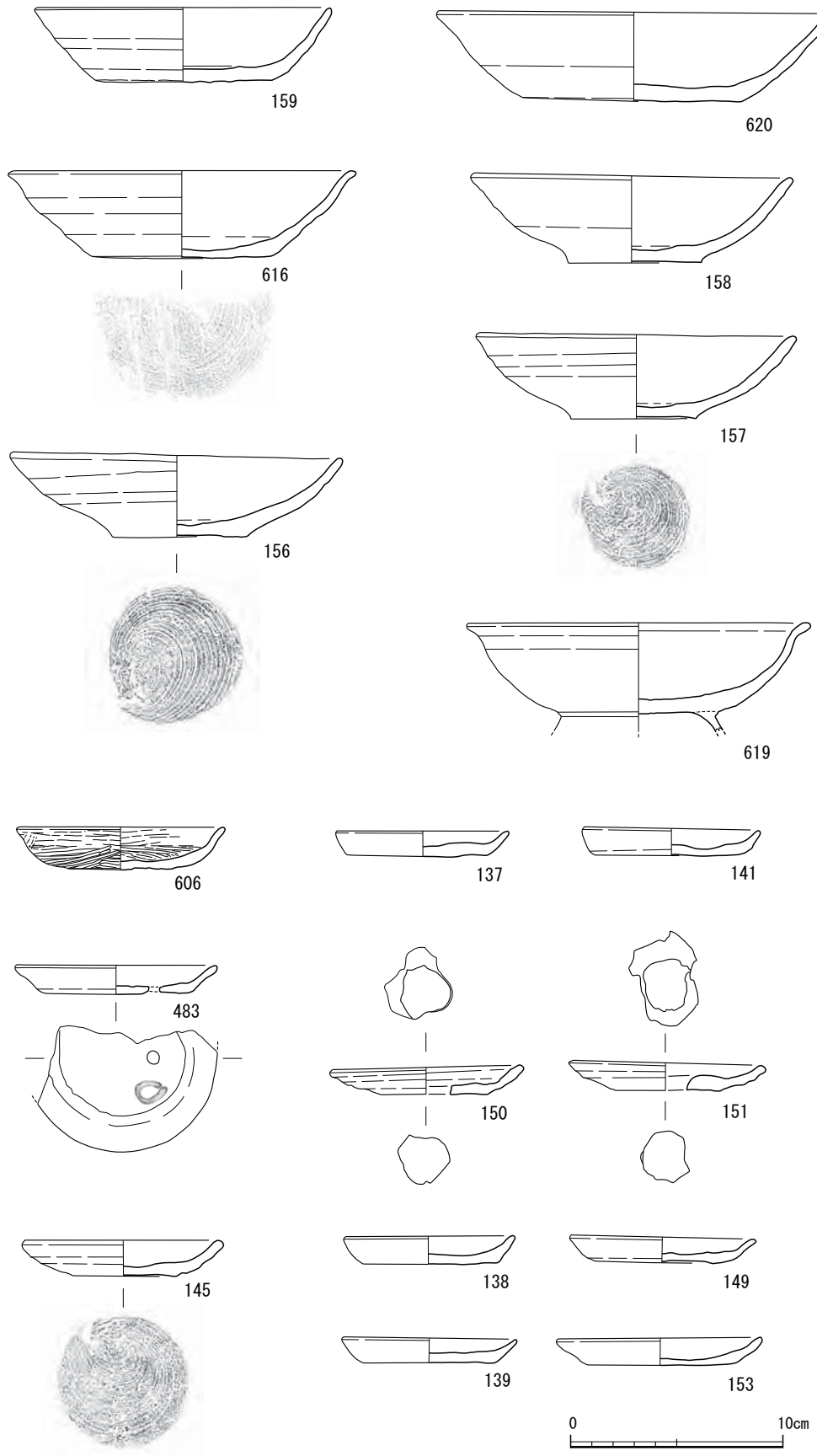
白磁等のうちからいくらか取り上げる。

1454 は白磁椀底部片で、Ｖ類である。復元底径が 6.8cm を測る。見込に沈線が胎どは灰白色である。1555 は白磁椀の口縁部で、Ⅱ -1a 類である。胎土は灰白色である。口唇部外器面に小さな玉縁を作る。1556 は白磁椀の口縁部で、Ｉ -1a 類である。胎土は灰白色で口唇部小さな玉縁を設ける。1557 は白磁椀で口縁部の破片である。胎土は灰白色である。1558 は白磁椀の口縁部でⅣ類である。胎土は灰白色を呈する。1559 は、白磁椀の口縁部でⅣ類である。胎土は灰白色を呈する。1613 は白磁椀の底部で、Ⅳ -1b 類である。外底面には掻き取りが見られ、見込には沈線がめぐる。胎土は灰白色である。口径が小さいので中形椀になろう。1614 は白磁小椀の、底部である。Ⅱ類で底部に釉の掻き取りがなされる。胎土は灰白色である。貫入も入る。

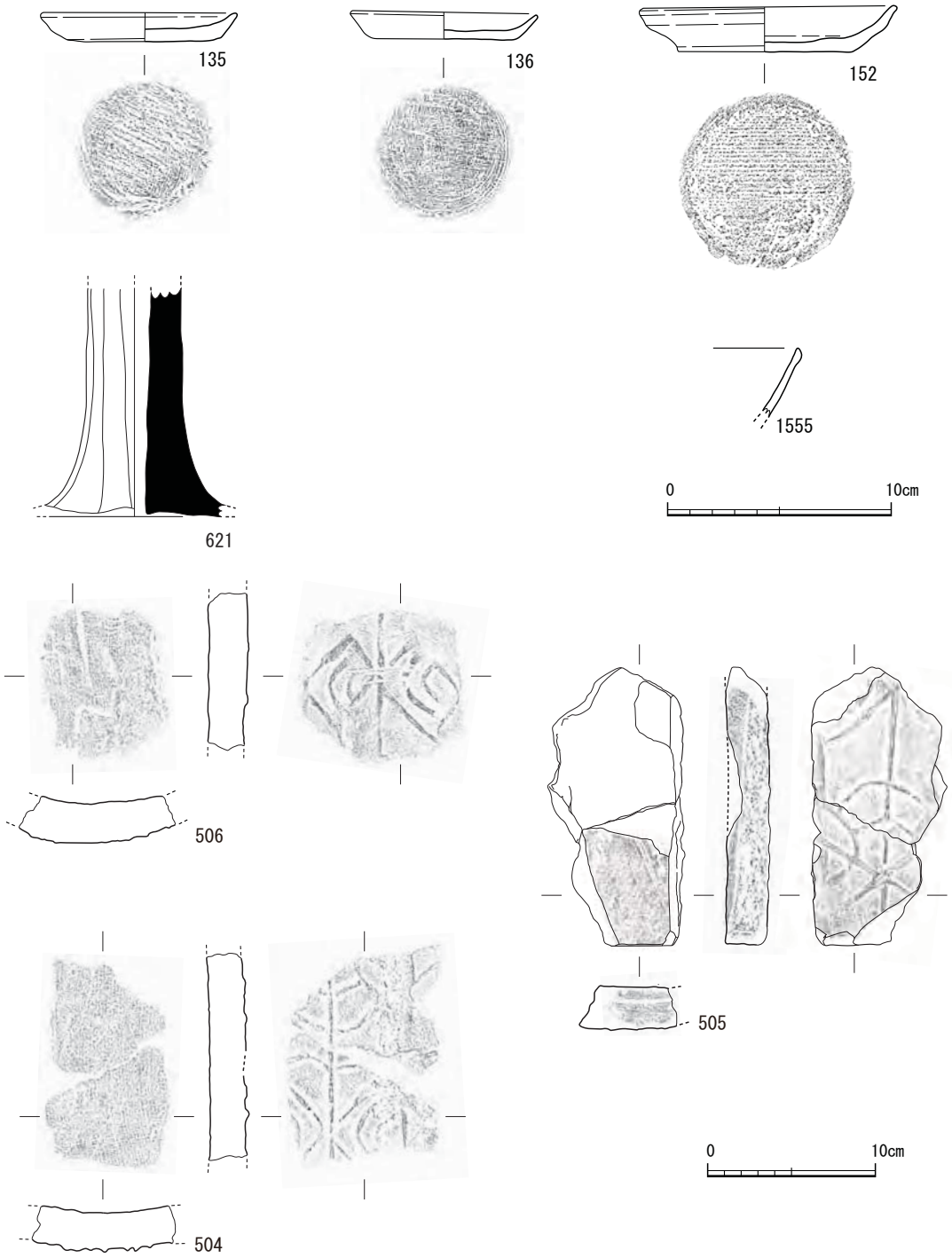
越州窯系青磁では、椀（Ｉ -1 類口縁片 (1), Ｉ類体部片 (1)、Ｉ -1a 類高台 (1)、Ⅱ類高台片 (1)、Ｉ -2b 類体部 (外ヘラ)(1)、Ｉ×Ⅲ類体 (1)、Ⅱ -1b ×Ⅱ -2a 類底部 (1)、Ｉ類直口 (1)、Ｉ -5 類底部 (1)、Ⅱ類体部（1)、Ｉ -2 類外反 (Ｉ２ウ ?)、Ｉ類体 (Ｉ -1? 類)(1)）などがある。越州系窯青磁のうちから以下にいくらか取り



第 140 図　Ⅰ区　SD041 実測図



第 141 図　Ｉ区　SD041 出土遺物実測図



第 142 図　Ⅰ区　SD041 出土遺物実測図

上げる。

1405 は越州窯椀Ⅱ -1b もしくはⅡ -2a 類の底部片である。復元底径が 7.2cm を測る。胎土中に黒色の斑点がある。円盤状高台の外周近くに段上の沈線がめぐる。1406 は越州窯椀Ⅰ -1 類の底部片で復元底径が 6.0cm を測る。施釉後、高台畳付釉を削り取る。蛇の目高台である。1407 は椀の底部片でⅠ -5 類である。内外器面底部に胎土目が残る。体部外面下位以下に施釉しない。

国産陶器では緑釉陶器が出土している。洛西産の体部片で 2 点である。

土師器の中では在地のものに混じり豊前タイプの杯 a・小皿 a、筑前もしくは豊前タイプの丸底杯 c、器

台などが出土している。

豊前タイプの杯 a には口径が 15.2cm~15.7cm、器高が 4cm 前後、底径が 6cm 前後を測り口径に比して底径の小ささが目立つ。口縁はやや内湾するようにみえ、口唇部を丸く収める。色調もやや薄い黄灰白色を呈するものが多い。底部は回転糸切りで、終端のはずし方に特徴があり、縛りきった後にナデ等の調整をしないため、糸切り跡が明確に残る。胎土は良く精製され、在地の土器とはかなりかけ離れている。このタイプの小皿 a も特徴があり、胎土・色調は同様で、底径も口径に比して小さい。糸切りの方法も同様である。この遺構では、この小皿の中に底部に穿孔されたものがあり、特に 150・151 は、出土位置こそ違うものの土層観察から一度に廃棄されたと考えられる。一括性がある。儀式用のものであろうか。

また、483 には底部外面に丸を描いたような墨書が見られ、呪術的な雰囲気がある。

在地の杯 a 底部には、9 世紀タイプの杯が混じり、淡灰色を呈し、口径が 13cm くらいのものや黄褐色を呈し、口径 13cm くらいのものがある。これは豊前系か。

瓦器椀には押圧技法が見られ、肥後型のものであるが、筑前×豊前？にも見られるタイプでもある。

土器類について以下に取り上げたものを述べる。

土師器の小皿には 135~139・141 などがあり、底部の糸きり後に板状圧痕を残すものである。色調も共通する。出土層位は上層から下層までとそう大きな高低差がある。135 は、4 層出土で、口径 8.2cm、器高が 1.3cm、底径が 6.6cm を測る。136 は中層 ~ 下層で出土し、口径が 8.4cm、器高が 1.3cm、底径が 6.4cm を測る。内面に煤が付着しており灯明皿として使用か。137 は上層出土で、口径が 8.1cm、器高が 1.2cm、底径が 6.6cm を測る。外面に煤付着。138 は上層出土で、口径が 7.9cm、器高が 1.3cm、底径が 6.5cm を測る。139 は上層出土。口径が 8.0cm、器高が 1.2cm、底径が 6.2cm を測る。141 は口径が 8.2cm、器高が 1.4cm、底径が 7.0cm を測る。

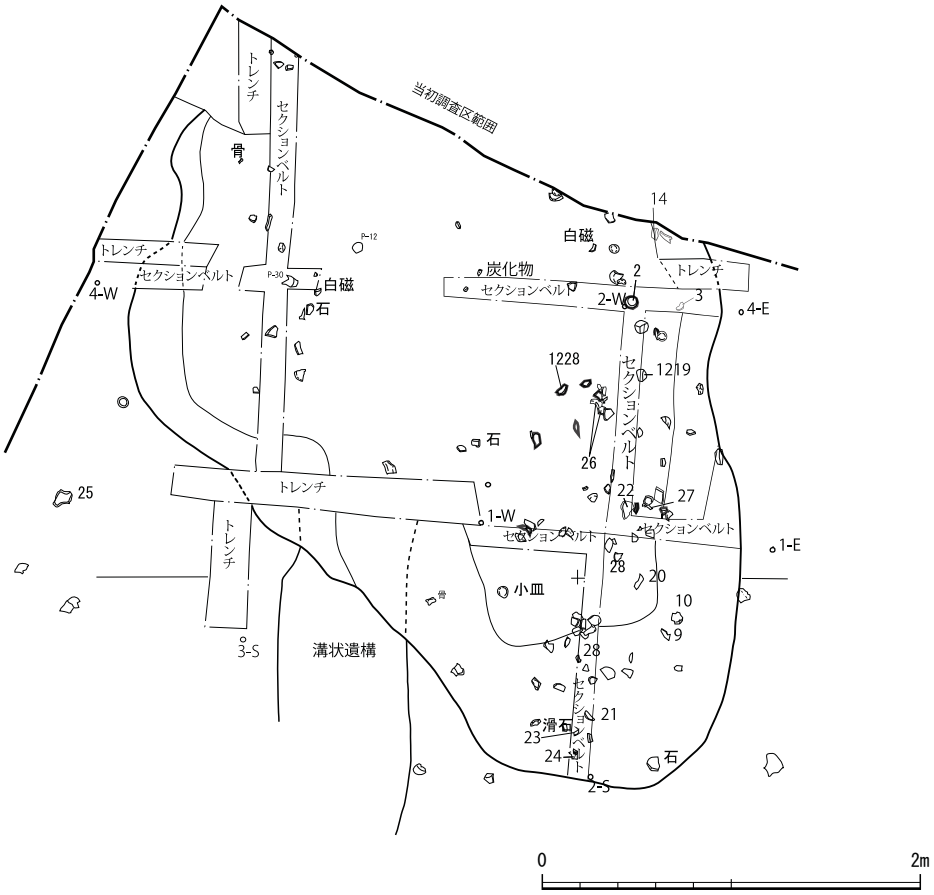
145 は豊前系土師器の小皿で上層の出土である。口径が 9.3cm、器高が 1.7cm、底径が 5.0cm を測る。底部は糸切り離しで、色調は灰白 10YR8/2 を呈する。器形の特徴と糸切り、さらに色調が在地の土師器の杯・皿と明確な違いを示す。149 は土師器の小皿で、6 層の出土。口径が 8.6cm、器高が 1.3cm、底径が 6.1cm を測る。底部は糸切り離し後ナデである。

150 は豊前系土師器の小皿で、口径が 8.9cm、器高が 1.4cm、底径が 5.2cm を測る。底部は糸切り離しで　あるが、内側から穿孔されている。151 も豊前系土師器の小皿で、3 層中から出土。口径が 8.8、器高が 1.45cm、底径が 5.1cm を測る。これも底部が穿孔されている。

152・153 は土師器の小皿である。152 は上層の出土で、口径 11.5cm、器高が 2.1cm、底径が 7.8cm を測る。153 は 4 層下層出土で、口径が 9.6cm、器高が 1.3cm、底径が 7.0cm を測る。ともに底部はヘラ切り離し後板状圧痕が残る。

156・157・158 は豊前系土師器の杯である。底部は糸切り離しである 156 は口径が 15.8cm、器高が 4cm、底径が 6.2cm を測る。157 は上層中層出土で、口径が 15.4cm、器高が 4.1cm、底径が 5.9cm を測る。158 は中層出土で、口径が 15.3cm、器高が 4.2cm、底径が 6.3cm を測る。いずれも色調は浅黄橙を呈する。

159 は土師器の杯で、3~5 層の出土。復元口径が 14.0cm、器高が 3.5cm、底径が 8.4cm を測り、底部は糸切り離し後ナデである。483 は土師器の小皿で下層出土。復元口径が 9.6cm、器高が 1.4cm、復元底径が 6.8cm を測る。底部は糸切り離し後ナデである。底部に墨書がある。また穿孔もある。606 は土師器の小皿で上層の出土。復元口径が 9.6cm、器高が 2.0cm、復元底径が 5.0cm を測る。器面調整はヘラミガキによる。色調も黒色であるため、黒色土器の範疇に含まれる。616 は土師器の杯で下層の出土。復元口径が 16.0cm、器高が 4.1cm、復元底径が 8.5cm を測る。底部は回転ヘラケズリ後板状圧痕が残る。内外面に煤が付着。



第 143 図　Ⅰ区　SX004 実測図

619 は土師器の高台付椀である。かなり風化しているが、外面は研磨の可能性もある。620 は土師器の杯で上層出土。口径が 18.7cm、器高が 4.3cm、底径が 10.4cm を測り、底部は糸切り離し後ナデ調整である。内外面に煤が付着。これは廃棄後に焼けたものか。

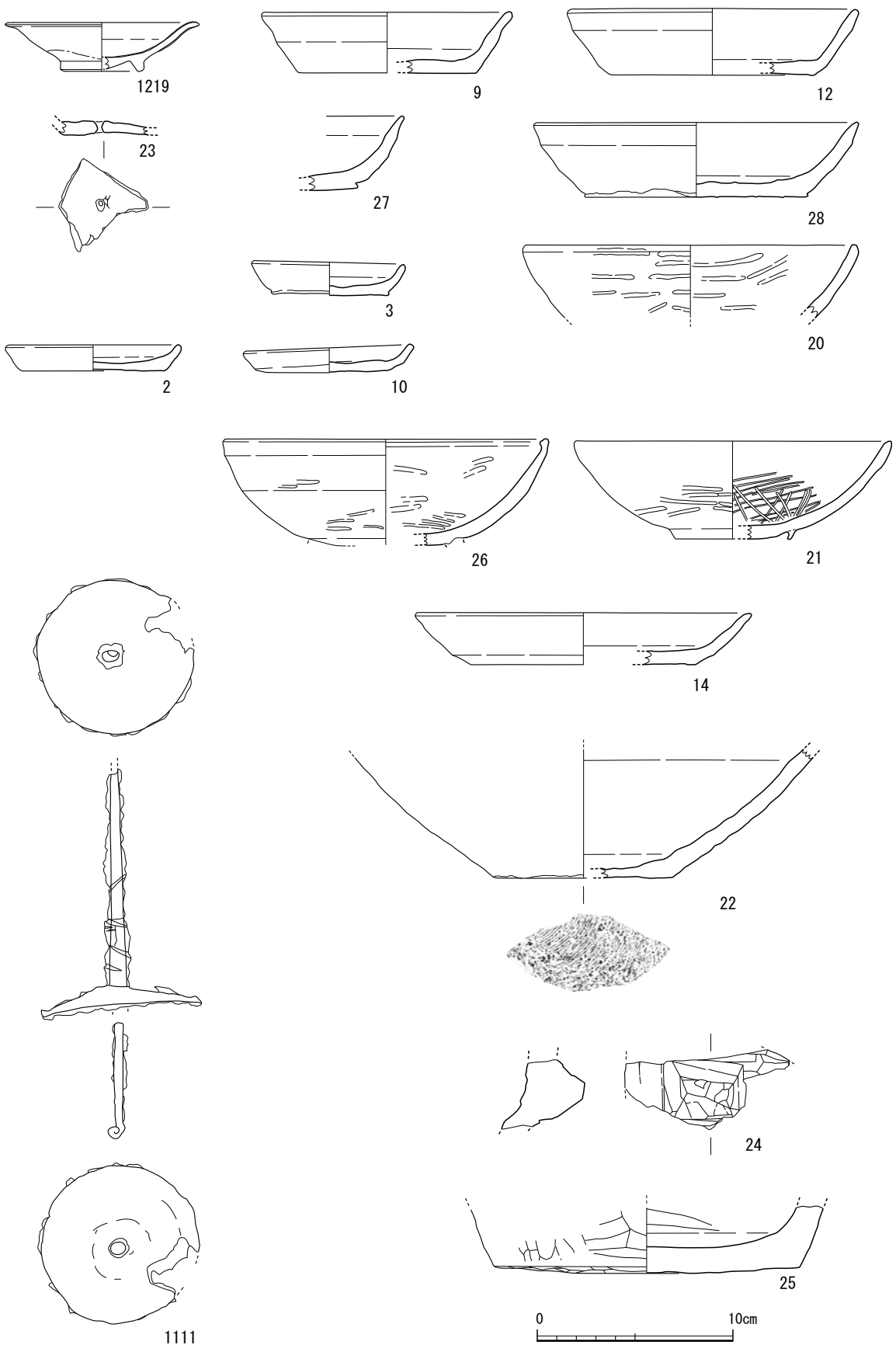
621 は、須恵質の器台で、上層で出土。外器面は上から下へヘラでケズリ落とすようにして角を取っている。器表面は灰白を呈するが、断面及び内器面は橙色を呈する。中心部に円形の穿孔が入る。表面が白いことと関係するのかかなり滑らかである。

瓦は丸瓦 31 点、平瓦 73 点が出土している。この他に特殊な瓦として葉脈文を型押しした瓦類がある。505・506・504 の 3 点である。いずれも平瓦の凸面に文様がある。文様はそれぞれ微妙に異なり別個体であろう。

他に図化していないが、カマドの上部片が 5 点、下部片が 5 点出土している。また碁石と考えられる 1194 も上層から出土している。

・SX-004

［遺構状況］　G・H-3 グリッドで検出したもので、広範囲に広がる黒色炭化層が浅い落ち込みに落ち込んでいるなかに遺物が散乱する遺構である。SD-041 の埋土の上層もしくは SD-896 の上層の遺構と考える。ただ、それらの遺構そのものの埋土なのかその後の堆積状況のなかで別遺構として形成されたものか不明確である。ここでは別遺構という判断のもとで遺構番号を新たに不明遺構としてふっている。同様の層の形成は SD-041 の埋土上層でも見られた。



第 144 図　Ｉ区　SX004 出土遺物実測図 (1111 のみ S=1/2)

遺構の時代は遺物から鎌倉時代初期と判断される。

［出土遺物］　遺物の分布状況は、漫然と散乱したような状況で特に完形品が多い訳でもなく、破片が多い。出土遺物には陶磁器・土器類がほとんどであるが、鉄器も含まれる。

陶磁器には白磁碗（Ⅴ-4b 類口 (1)、Ⅳ類口 (2)、Ⅴ 4 ×Ⅷ 1.3 類口 (1)、Ⅴ ~ Ⅶ類体内ヘラ文 (1)、Ⅱ -3 × 4 類底 (1)、Ⅱ 3 × 4 類高台内クシ文 (1)、Ⅳ ~ Ⅷ類体 (1)(2))、白磁皿（Ⅲ -2 類 (1), Ⅱ×Ⅲ類口 (1)(1)(1))、瓦器（椀 C（12C 後半型）1、口 (1)、皿、鍋）などがある。

1219 は白磁の皿で、Ⅲ -2 型になる。口縁から底部付近まで残り、復元口径が 9.6cm、復元底径が 4.0cm、器高が 2.6cm を測る。高台はケズリ出しによる。1228 は白磁の椀でⅡ -3 型かⅡ -4 型である。底部のみで、復元底径が 5.4cm を測る。見込に沈線による圏線が入り、体部外器面下半以下および底部には施釉されない。1448 は白磁の椀で、Ⅳ型である。口縁部のみで小型の玉縁が回る。外器面下半以下に施釉がなく、釉表面に気泡がある。1449 は白磁の椀（Ⅱ -3 もしくはⅡ -4 型）で、体部から底部まで残る。復元底径が 5.4cm を測る。見込に沈線の圏線がはいる体部外器面下半以下、底部には施釉がない。1588 は白磁の皿（Ⅱ -1a 型）で口縁部のみである。

土器としては以下のものがある。

2 は土師器の小皿で完形品である。口径が 8.6cm、器高が 1.35cm、底径が 7.3cm を測る。外底部は糸切り離し後板状圧痕が残る。3 も同じく土師器の小皿で完形品である。口径が 7.7cm、器高が 1.8cm、底径が 5.9cm を測る。調整は回転台使用で糸切り離し後ナデが施される。色調は 2・3 とも似通う。9 は土師器の杯で口縁の 1/5 が残る。復元口径が 12.8cm、器高が 3.1cm、復元底径が 9.2cm を測り、底部は糸切り離しである。橙色を呈する。10 は土師器の小皿で口縁の 1/3 が残る。口径が 8.4cm、器高が 1.5cm、底径が 6.8cm を測る。底部は糸切り離し後ナデ調整が施される。12 は土師器の杯で口縁の 1/5 が残る。復元口径が 14.9cm、器高が 3.4cm、復元底径が 10.4cm を測る。底部は糸切り離しによる。14 は土師器の盤で 1/4 が残る。口径が 17.0cm、器高が 2.6cm、底径が 11.5cm を測る。底部は糸切り離しによる。

20・21 は瓦器椀である。20 は復元口径が 17.0cm を測る。内外器面ともヘラ磨きが施される。内外面に色の変化がみとめられ、重ね焼き痕跡であろう。21 は 1/3 残り、口径が 16.3cm、器高が 5.0cm、復元底径が 5.9cm を測る。これも重ね焼き痕跡が残る。22 は瓦器の鉢で 1/4 が残る。器高が 6.6cm、底径が 9.2cm を測る。底部は糸切り離しによる。口縁部に重ね焼き痕跡がある。23 は土師器の尽き杯であろう。底部のみで糸切り離しによる。底部に穿孔がある。

24 は石鍋の把手付近の破片で、再加工品である。用途は不明である。25 も石鍋の破片で胴部 ~ 底部の 1/4 が残る。復元底径が 15.6cm である。内外器面にチョウナ状の工具によるケズリ調整が施される。

26 は瓦器椀で 1/4 残る。復元口径が 16.5cm 測る。器表面はヘラミガキで調整される。27 は土師器の杯で 1/5 残る。器高が 3.8cm を測る底部は糸切り離しによる。28 も土師器の杯で 1/4 残る。復元口径が 16.6cm、器高が 3.8cm、底径が 11.4cm を測る。外底部は糸切り離しのちナデである。

1111 は鉄製品で、紡錘車と考える。中位に径 4.1cm を測る錘部の板状のものがあり辺を下位に向けた状態にある。上部には軸がつながっており最大軸径が 0.7　　cm を測る。錘部の下位は欠損しているが、同時に出土した鉄芯状のものが下位につながると考える。先端部は径 2mm ほどで丸められている。重量は 9.4g を測る。

この他カマドの下部を 1 点確認した。

・SD-043

［遺構状況］　H-4 グリッドから L-4 グリッドまで南北に長く延びる溝状遺構であることを最終的に確認し遺

構名を付した。J･K-3･4 グリッドの間の土層確認ベルトで確認すると、この遺構は SD-235 と SD-233 を切っており、SD-234、SD-236 により切られている。

確認できる範囲では層的には大きく２層に分かれ、一部別層が入る。２層とも締まりの強いシルト層で上層が暗褐色で下層が黒褐色を呈する。上層の遺物は少ない。さらに別層が部分的かどうか不明であるが、締まりのある暗褐色土である。

［出土遺物］　出土遺物は、輸入陶磁、灰釉陶器、瓦などがある。以下に出土遺物の主なものを並べる。

輸入陶磁器では越州窯青磁の椀ではⅠの体部 (1)、Ⅰ -2 ウの高台 (1)、Ⅰ -1 の口縁 (2)、Ⅱの体部 (2) が出土。このうち、1408 は越州窯青磁椀（大宰府分類Ⅰ -2 ウ類）で、高台のある底部である。復元底径が 8.0cm を測る。施釉後、高台畳付釉を削り取り、器表面に目跡がある。高台部外側を斜めに削り取る。

47 は土師器の高台付杯で、最下層の出土。杯部は底の丸い椀に近い形態で、高台は細くて外に張りだす。復元口径が 16.1cm、器高が 5.9cm、底径が 9.8cm を測る。57 は土師器の小皿で、口径が 9.8cm、器高が 1.8cm、底径が 7.2cm を測る。底部外面はヘラ切離し後板状圧痕が残る。58 も土師器の小皿で、口径が 9.4cm、器高が 2.0cm、底径が 7.0cm を測り、57 に似る。底部はヘラ切離し後板状圧痕が残る。63 は本来須恵器の高台付壺の底部であるが、底部の高台内部を転用硯として利用している。高台の径は 12.0cm を測る。内面は使用のためよく擦れている。

52 は土師器の杯で SD-043・233 の出土。体部から底部の破片で、底部径が 6.25cm を測る。底部はヘラ切離し後板状圧痕が残る。59 は土師器の甕で SD-043・233 の出土。復元口径は 28.6cm を測る。口径に比して器高が低くかなり大型のものである。外器面には煤が付着している。

64 は須恵器の甕の破片を利用してメンコ状に加工したものである。径は 6.4cm を測る。厚みは 1cm ほどである。

1106 は鉄器の二又鏃である。この遺構の上層の西壁沿いから出土した。長さが 14.5cm、最大幅が 3.5cm、最大厚みが 0.5cm、重量が 25.5g を測る。

灰釉陶器では、壺もしくは広口瓶の頸部 ?1 点が出土。

瓦は丸瓦７点、平瓦 12 点、軒平瓦１点（No.65）が出土。

・SD-046

［遺構状況］　141-H~O-3 グリッドで検出した遺構で、場所によっては複数の溝状遺構が重複している場合もある。調査の当初から確認していた溝状遺構で途中撹乱のため、つながりが明確でない部分もあるが、ほぼ同一の埋土状況から同じ遺構と判断している。確認した長さは 35m ほどである。幅は重複の度合いにもよるが 1m 前後である。深さは確認面から約 40cm ほどである。

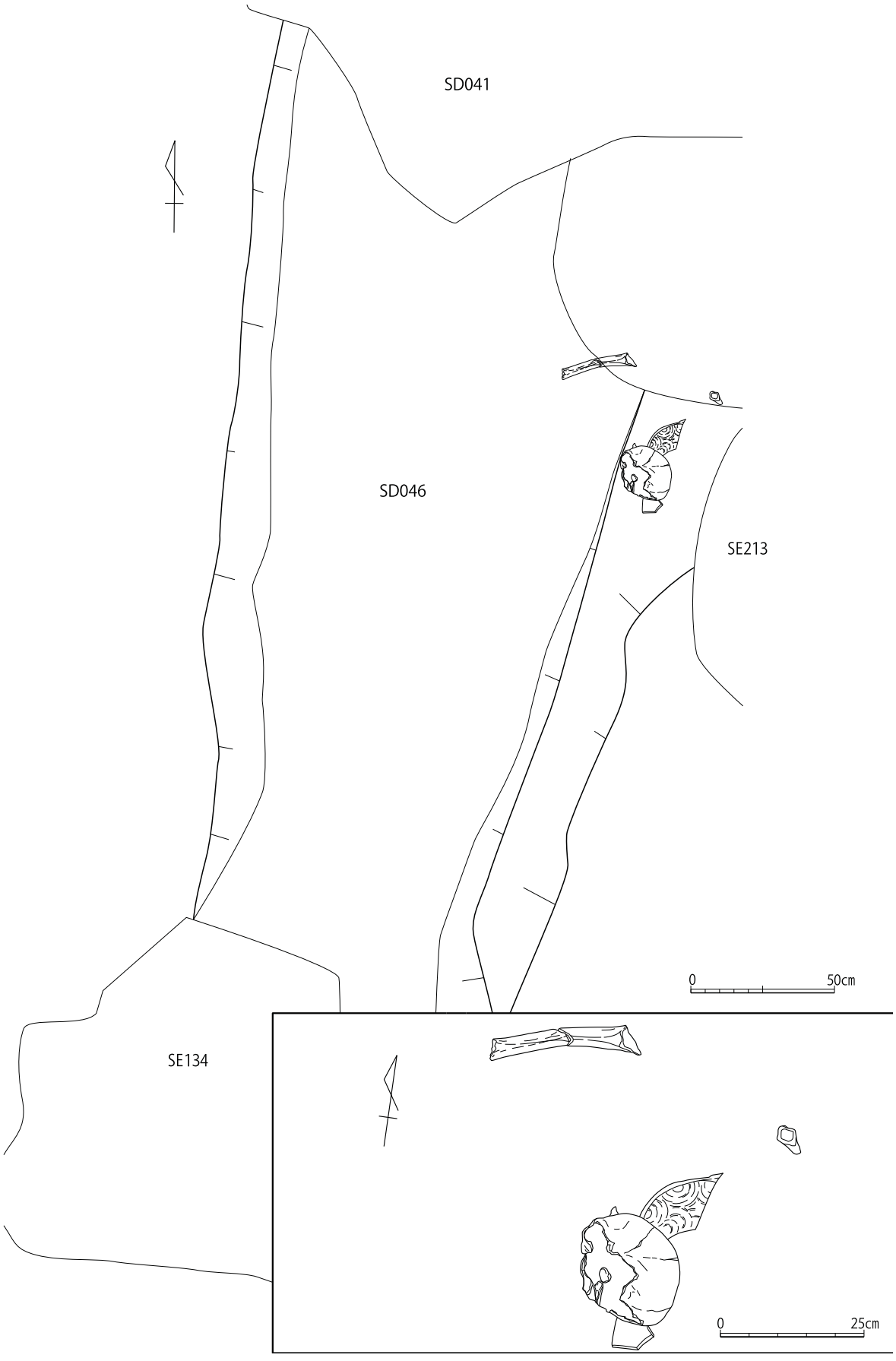
この遺構の 141-H-3 グリッド付近で人骨が出土している。詳細は自然科学分析の松下氏の報告に譲るが、２体分の頭蓋骨と１体分の大腿骨である。破片のみであり、当時の遺体への扱いの一端を示すものである。

［出土遺物］　出土遺物には青磁・白磁などの輸入陶磁器がある。種類と数量を示せば、以下のようになる。

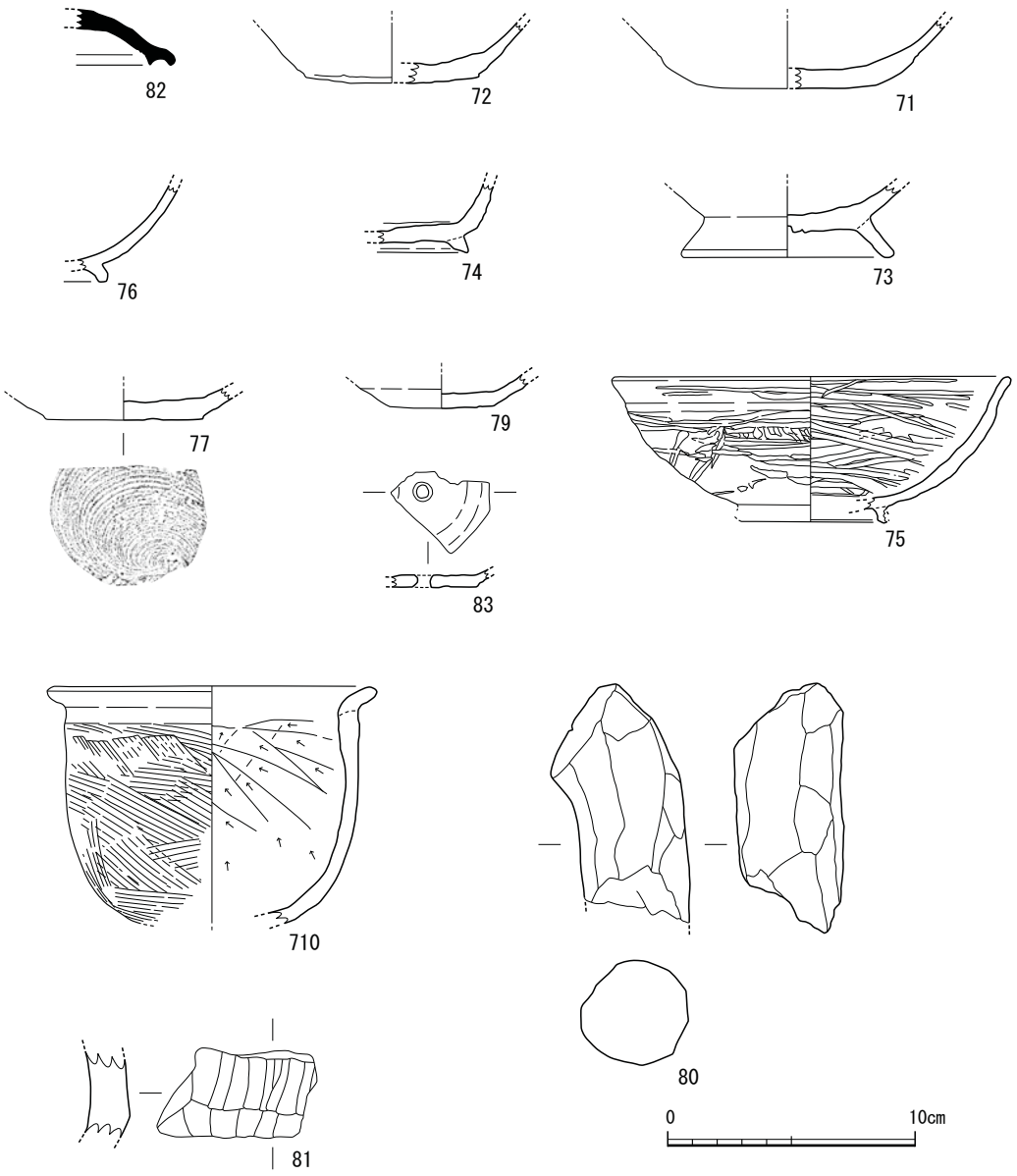
越州窯系椀は、Ⅱ類の体部が１点、Ⅰ類の直口縁が１点、Ⅱ類の口縁肥厚 (Ⅱ 25) が２点、Ⅱ類の体部片が２点、Ⅱ類の体部片が１点出土している。

白磁碗は、Ⅳ -1a 類（底部１点）、Ⅴ×Ⅵ類（底部１点）、Ⅴ -2b? 類（底部１点（外ヘラ文））がある。白磁耳皿が１点出土している。

71 は土師器の杯であろう。復元底径が 7.4cm を測る。72 は土師器の杯で底部片である。復元底径は 7.0cm を測る。73 は土師器の高台付椀の底部のみで復元底径が 8.6cm を測る。高台は 1.5cm ほどと長く、強く張り出している。74 は土師器の高台付杯で下層出土である。高台は低く、接地面は細くなっている。内外器



第 145 図　Ⅰ区　SD046 実測図



第 146 図　Ｉ区　SD046 出土遺物実測図

が施される。貼付け高台は短い。

77 は土師器の杯で底部付近の破片で糸切り底である。復元底径が 6.4cm を測る。豊前系のものであると考える。79 は土師器の小皿の底部片である。底径が 4.2cm を測る。底部は糸切離しによる。80 は土師器の鍋などの脚部である。

82 は須恵器の杯蓋で下層の出土である。弱い返しがつくことから 7 世紀前半のものであろう。この遺構に伴うものではなく、混入品である。

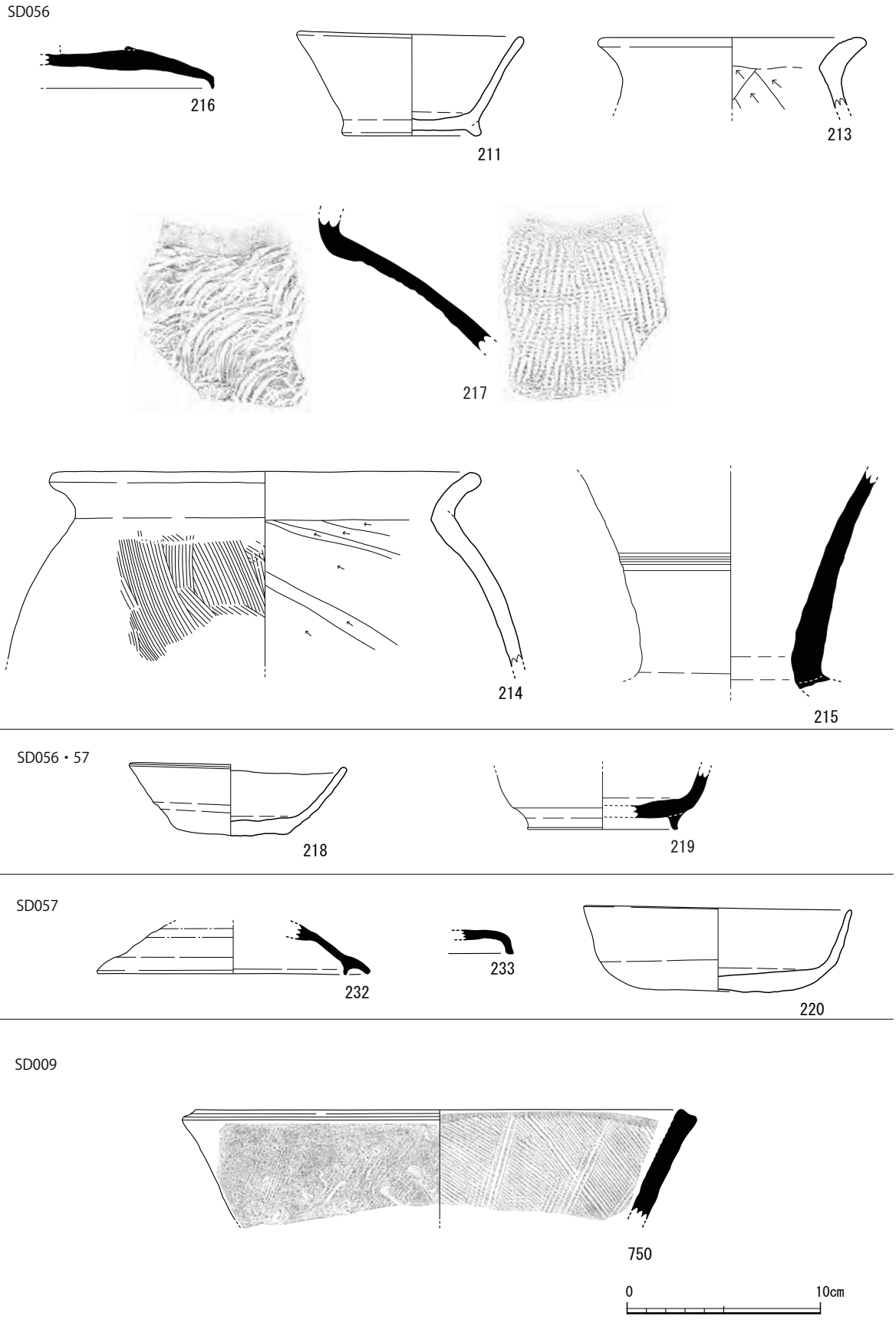
83 は土師器の小皿で、底部は糸切り離しである。使用時か廃棄後か不明であるが、底部に上下両面から穿孔がある。

710 は土師器の小型甕で復元口径が 12.7cm、推定器高が 10cm ほどである。口縁部は狭く、屈曲は大きい。

81 は石鍋片である。外器面には加工痕が残る。

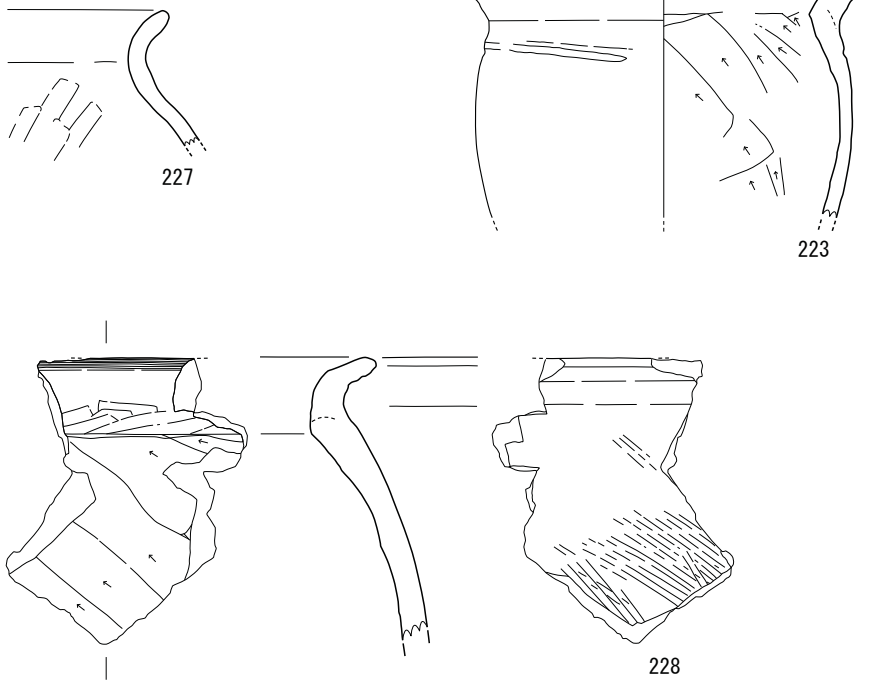
瓦は、丸瓦 2 点、平瓦 18 点、軒平瓦 1 点（84）が出土している。

またカマドの上部が 1 点出土している。

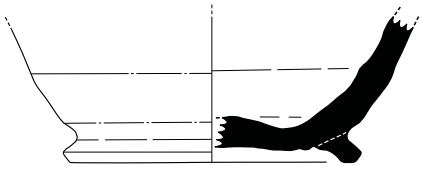


第 147 図　Ⅰ区　溝状遺構出土遺物実測図

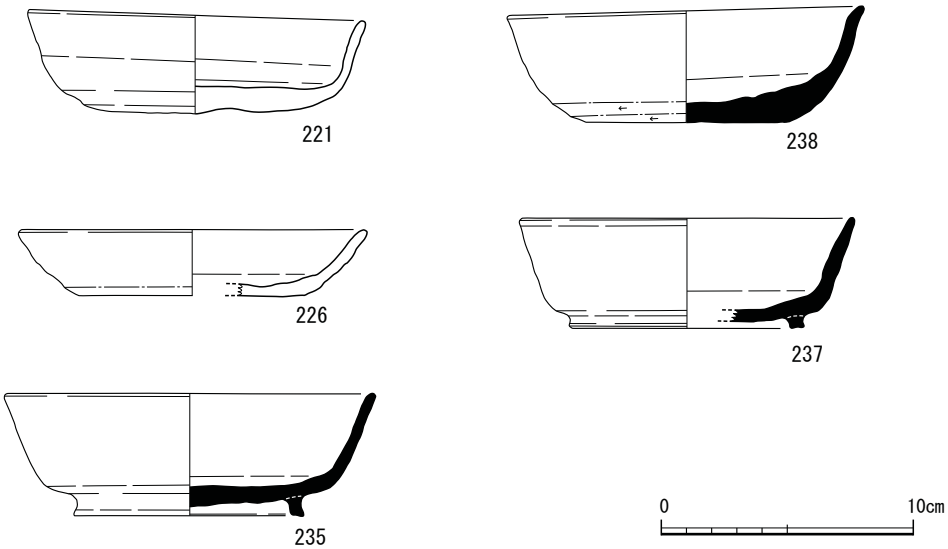
SD057



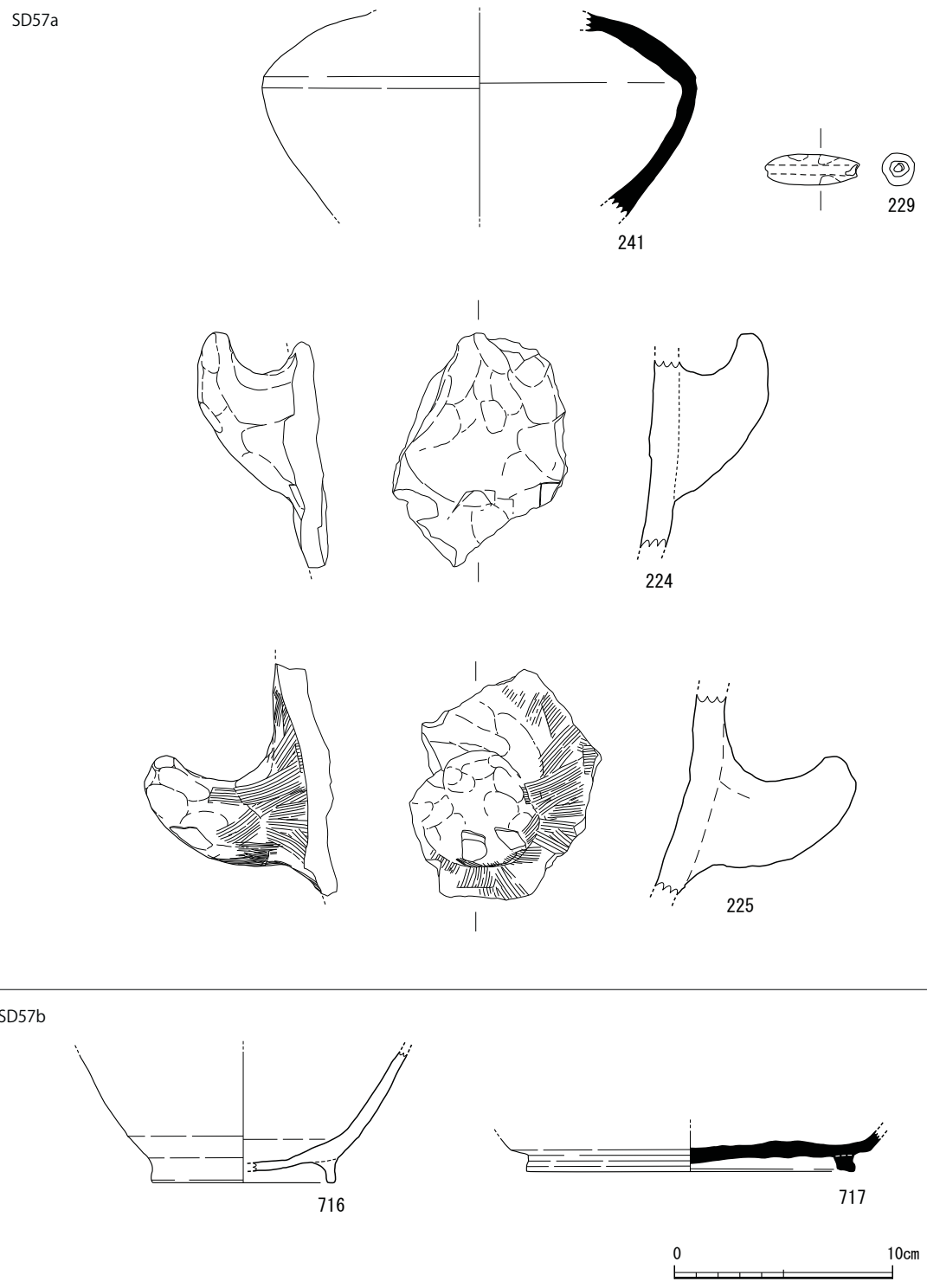
SD056・057



SD057a

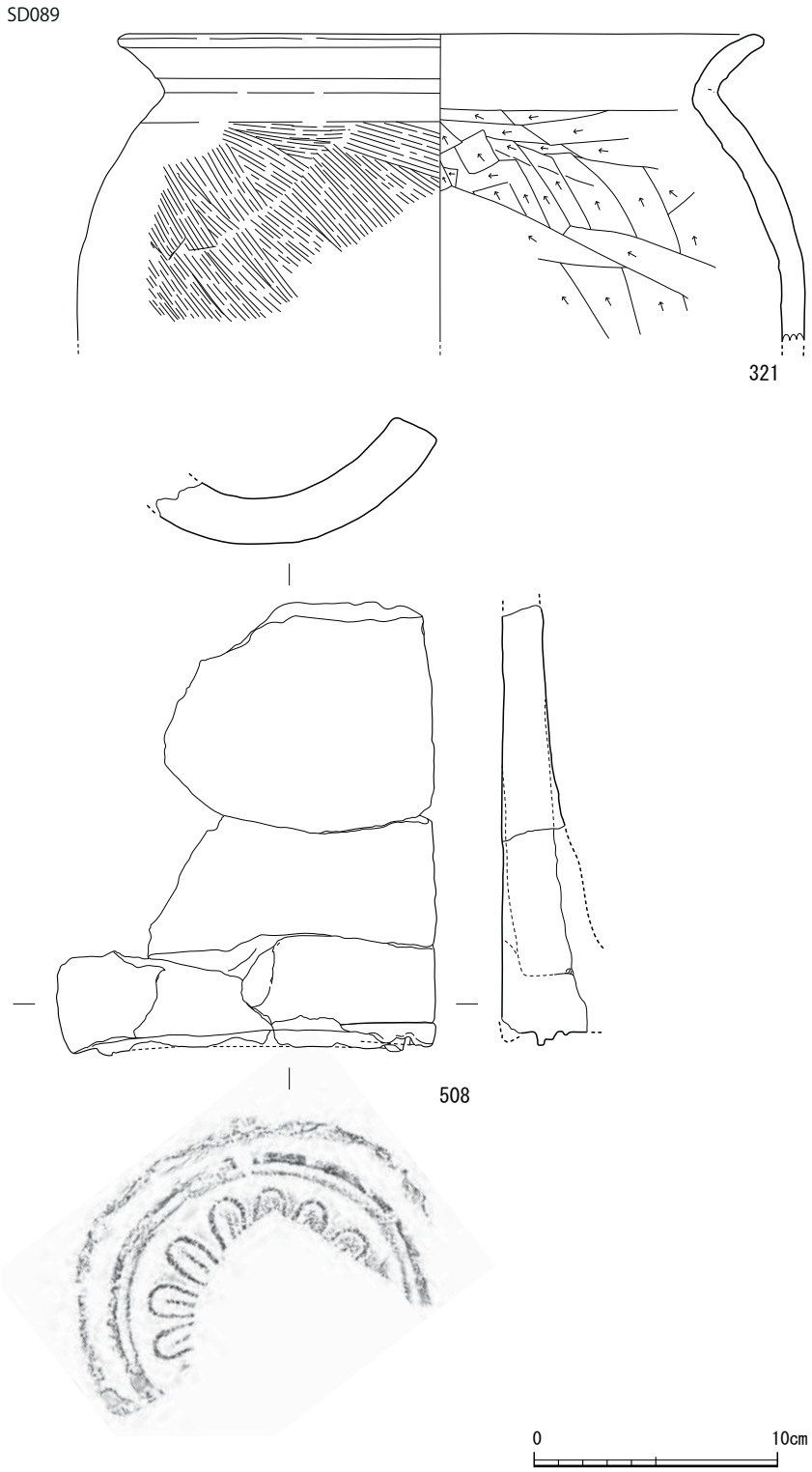


第 148 図　Ｉ区　溝状遺構出土遺物実測図



第 149 図　Ⅰ区　溝状遺構出土遺物実測図

面に赤彩が施される。75 は黒色土器の椀で、内外器面に丁寧なヘラミガキによる調整が施される。成形に際して押し出し技法が使用されているようで、外器面に押し出す前の杯状態時の底面であった痕跡が認められる。貼付け高台はごく短く径はせまく 6cm 程度であろう。76 も黒色土器の椀で、内外器面にヘラミガキ。



第 150 図　Ｉ区　溝状遺構出土遺物測図

・SD-048

［遺構状況］　141-H-3・4~K-3 グリッドで検出した遺構で、約 20m ほどを確認している。L-3 グリッドにも繋がるものが出土している。撹乱によりさらに南側での連続状況は不明である。

［出土遺物］　陶磁器では、越州窯系青磁の椀（大椀？Ⅱ類体部 (1)）が出土している。

87 は土師器の小皿で、口径が 9.3cm、器高が 1.45cm、底径が 6.8cm を測る。底部は糸切離しである。88

は、豊前系の杯の底部で復元底径が 6.5cm を測る。底部は糸切離しである。89 も豊前系の杯で底径が 6.0cm を測る。

90 は土師器の杯は内外器面に赤彩が施される。91 は土師器の糸切り小皿で復元口径が 8.5cm、器高が 1.55cm、復元底径が 6.8cm を測る。

他に丸瓦 1 点、平瓦 1 点が出土した。

・SD-056

［遺構状況］　141-K-5、J-5~8 グリッドで検出。J-5 グリッドで SD-057 と重なり、K-5 グリッドへ伸びる。SD-056 が SD-057 の上に乗るものと想定している。この遺構は数条の溝状遺構が重なるものと考えられ、J-8 グリッドで SD-694 と SD-127 の 2 条に分離している。

［出土遺物］　輸入陶磁器として白磁椀（Ⅳ ~ Ⅷ類）が 1 点出土。

219 は、須恵器の高台付坏の底部片である。復元底径が 7.7cm を測る。242 は須恵器の高台付壺の底部付近である。復元底径が 11.3cm を測る。215 は、須恵器の壺である。216 は、須恵器の蓋片で、天井部外器面に自然釉が見られる。重ね焼痕も器表面に残る。

1327 は、土師器の杯で、外底面がヘラ切り離し後ナデ。内器面がナデ。内外器面とも赤彩が施される。底部に墨書「三」が書かれる。

211 は土師器の高台付椀である。口径が 11.7cm、器高が 5.5cm、底径が 7.3cm を測る。213 は土師器の甕で 4 層掘り下げ中に出土。復元口径が 13.9cm を測る。内器面の口縁 ~ 胴部の一部に使用の際に火を受けている。214 は、土師器の甕（P-6）。口縁 ~ 胴部 1/6（他に 1/10 片あり）。復元口径は 21.2cm を測る。赤彩土器で外器面が明赤褐 2.5YR5/8、内器面がにぶい黄橙 10YR7/3, 灰黄褐 10YR5/2 を呈する。外器面に赤彩（明赤褐 2.5YR5/8）が施される。煮炊具としても利用されたのか、煤が付着している。

・SD-057

［遺構状況］　141-H・I-6~9、J・K-5・6 グリッドで検出。J-6 グリッドから I-7 グリッドの間に撹乱を含むため確実につながる遺構かは不明であるが、想定できる溝状遺構の方向と、深さ・状態が近似するため同じ遺構と考えた。この遺構は J-5 グリッドで SD-056 と一部重なっている。その前後関係は明確にはできなかったが、SD-056 が上になるものと想定している。調査中そのつながりが明確でなかったため、057a・057b などとしていた場合もあった。

［出土遺物］　輸入陶磁器として越窯椀の高台（Ⅰ -2 ウ類）が 1 点出土。

218 は土師器の杯で、056･057 の遺物として出土。口径が 11.3cm、器高が 4.3cm、底径が 5.8cm を測る。底部はヘラ切離し後ナデである。219 は須恵器の高台付杯で、056･057 の出土。底部片で復元底径が 7.7cm を測る。ヘラ切離し後高台貼付け。242 は須恵器の高台付壺で、056・057 の出土。底部付近の破片で復元底径が 11.3cm を測る。貼付け高台は短く接地面で大きく張り出す。

220 は土師器の杯で SD-057 の出土。口径が 13.9cm、器高が 4.5cm、底径が 10.0cm を測る。底部はヘラ切離し。223 は土師器の甕で、口縁部から胴部片である。復元口径が 15.4cm を測る。内外器面とも煤が付着。227 も土師器の甕である。228 も土師器の甕である。内外器面に赤彩が施され、内器面口縁部に煤が付着する。

508 は軒丸瓦である。瓦当はかなり欠損しているが、見える範囲では二重圏線の中に簡略化された単弁花文が 7 弁見える。中心部は残念ながら欠けている。瓦部分はナデ調整され製作時タタキなどは不明である。

232 は須恵器の杯蓋で返しのつくもので、7 世紀前半のもので混入であろうか。復元口径が 14.0cm を測

る。233 は須恵器の壺蓋で、復元はできなかった。内外面に灰が被る。

221 は土師器の杯で SD-057a 出土。口径が 13.5cm、器高が 4.2cm、底径が 9.5cm を測る。224 は土師器の甑の把手部分で、SD-057a 出土である。225 も土師器の甑の把手で、SD-057a 出土。221 とは別個体のもので、調整方法がより丁寧である。

226 は土師器の杯で、SD-057a 出土。復元口縁が 13.9cm、器高が 2.6cm、復元底径が 8.9cm を測る。内外器面に赤彩が施される。235 は須恵器の高台付杯で SD-057a の出土。復元口径が 14.4cm、器高が 4.9cm、復元底径が 9.1cm を測る。貼付け高台は底部の内側で接合する。237 は須恵器の高台付杯で、SD-057a の出土。復元口縁が 13.2cm、器高が 4.4cm、復元底径が 9.0cm を測る。高台の断面は台形様で中央部がややへこむ。238 は須恵器の杯である。SD-057a の出土で、底部が厚く外器面は横方向の回転ヘラケズリを行う。口唇部は短く外反する。穴隙が内外器面にみられ、かなり胎土中に砂粒を含む。241 は須恵器の長頸壷の肩部で、SD-057a の出土。外器面に灰釉状に被る。229 は土錘で長さ 4.3cm ほどで、最大厚みが 1.4cm を測る。

716 は土師器の高台付椀で、SD-057b1 層の出土。底部の破片で、口径 6.0cm、底径 8.2cm を測る。内底面に赤色顔料が付着している。717 は須恵器の盤で底部付近のみである。内面を転用硯として利用。SD-057b の出土。復元底径が 15.0cm を測る。転用硯としては朱墨を利用したようで赤色顔料が付着している。

他に平瓦が 6 点、丸瓦が 1 点出土している。

・SD-059

［遺構状況］　141-J-8・9 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器として越州窯系の椀（Ⅰ -1 類）の口縁部 1 点が出土。

・SD-069

［遺構状況］　141-I-1・2~141-J-1・2 グリッドで検出。竪穴建物の集中域に当たり、SI-068、SD-212 に切られている。溝として確認した範囲はかなり狭く、竪穴建物群との切り合いもあるが、十分確認できなかった。確認できた長さは 2m ほどである。

・SD-075

［遺構状況］　141-H-6・7 グリッドで検出。153SP 及び 84SD を切る。

層は 2 層に分層。1 層は黒褐色で粘土粒含む、締まり強い。土器片多く含む。2 層は、暗褐色土 ~ 黒褐色でやや締まる。地山のブロック土をやや多く含む。場所によっては 3 層あるところもある。3 層は黒褐色土である。

［出土遺物］　緑釉陶器としては東海産もしくは京都産の体部片が 1 点出土。厚手のものである。また、平瓦が 1 点出土している。

・SD-106

［遺構状況］　141-M・N-5・6 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器として白磁碗（V-2b 類）の口縁部が 1 点出土。

・SD-110

［遺構状況］　141-K-5･6、I･J-5･6 グリッドで検出。遺構の切り合い関係は、S-110 → S-056 → S057 である。

［出土遺物］　この遺構は一部で SD-111 と重なる部分がある。この付近から土師質の土馬が 1 点出土している。かなり破壊されて首と肩部付近の残欠である。首には上部にタテガミ状の部分を作り出している。前足も痕跡だけ残っている。
他に平瓦が 1 点出土。

・SD-112
［遺構状況］　141-M~Q-3・4 グリッドで検出。
［出土遺物］　丸瓦が 1 点出土。

・SD-127
［遺構状況］　141-J-8~10・K-10 グリッドで検出。J-8 グリッドで重複した溝状遺構の SD-056 が、SD-694 と SD-127 の 2 条の別溝状遺構に分かれるとした。切り合い関係が非常にわかりにくかったが、SD-056 の最も上にあったのが SD-694 で、それに先行するのが SD-127 とした。この溝状遺構自体も一時期でなく数回の掘り替えがあるようである。

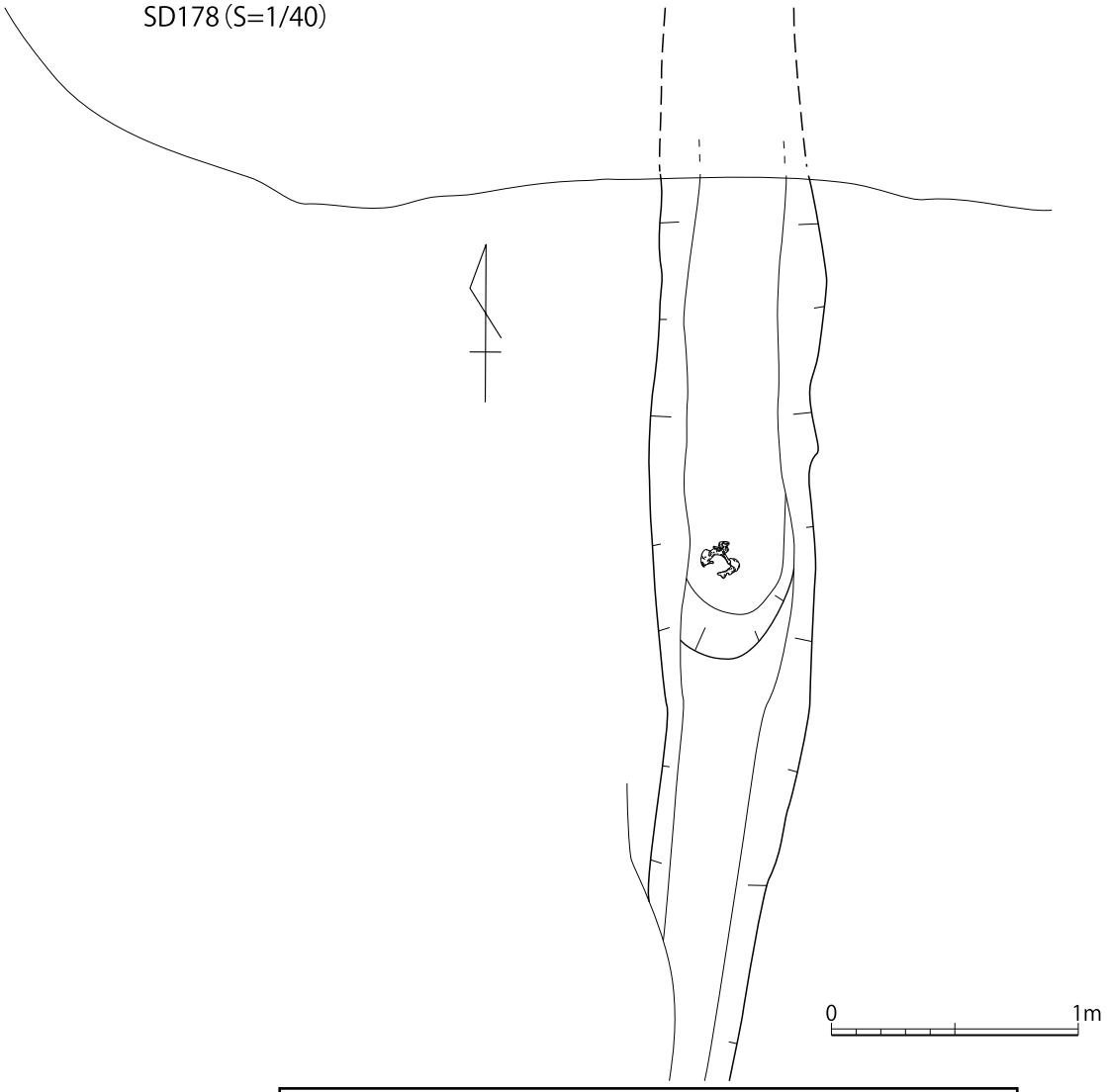
・SD-153
［遺構状況］　141-H・I-5~8 グリッドで検出。
［出土遺物］　軒平瓦 512 と軒丸瓦 349 が出土。512 は軒平瓦の瓦当面下半分の接合が悪くて外れたものである。型押し自体もあまり丁寧には行っておらず文様が外れている。文様は簡略化した唐草文である。

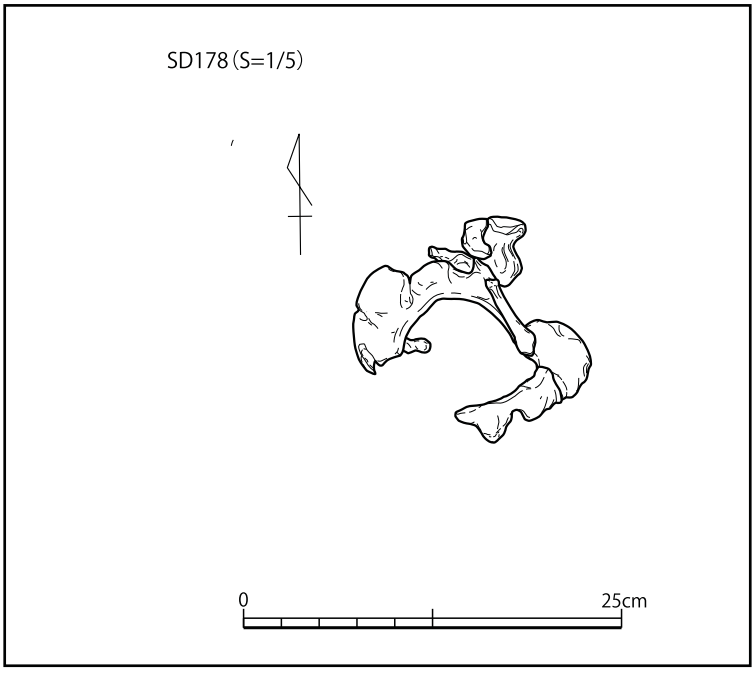
・SD-175
［遺構状況］　141-L-3・4 グリッドで検出。
［出土遺物］　同安窯系の皿（Ⅰ類）の口縁が 1 点出土。瓦は丸瓦が 1 点、平瓦が 7 点出土。カマドの下部が 1 点出土。

・SD-176
［遺構状況］　141-L-3・4 グリッドで検出。
［出土遺物］　平瓦が 4 点出土。

・SD-178
［遺構状況］　141-H・I-4 グリッドで検出。南北に延びる溝である。この一角に人骨が出土した。
［出土遺物］　出土した人骨は頭蓋であったが、残りが悪く性別・年齢などデータは得られなかった。詳細は第Ⅳ章の自然科学的分析を参照のこと。

・SD-185
［遺構状況］　141-O-3・4 グリッドで検出。
［出土遺物］　輸入陶磁器として越州窯椀（Ⅰ -5 類）底部が 1 点、龍泉窯系青磁の小椀（Ⅱ b）の口縁部が 1 点出土。他に平瓦が 2 点出土。





第 151 図　Ｉ区　SD178 実測図

・SD-234

［遺構状況］　141-K・L-3・4 グリッドで検出。

［出土遺物］　越州窯椀（Ⅰ？類）が 1 点出土。カマドの上部が 1 点出土

・SD-252

［遺構状況］

［出土遺物］　808 は土師器の甕で、口縁部から胴部の中位までの破片である。復元口径が 18,5cm を測る。口縁部は短く、胴部はあまり胴張りせず、長く伸びる。

・SD-265

［遺構状況］

［出土遺物］　821 は土師器の杯で 1 層の出土。口径が 10.5cm、器高が 4.3cm、底径が 6.25cm を測る。底部はヘラ切離し後板目状圧痕が残る。822 は土師器の高台付椀で 1 層出土。復元口径が 11.3cm、器高が 5.1cm、底径が 6.1cm を測る。体部は底部から直に広がる。

1104 は平歯の鉄鏃と考えたが、ノミ状の歯を持つもので鏃ではなく工具の可能性もある。刃部幅が 3.5cm を測る。歯先から区の長さが 4.3cm を測る。

・SD-266

［遺構状況］　141-O・P-7・8 グリッドで検出。

［出土遺物］　平瓦が 1 点出土。

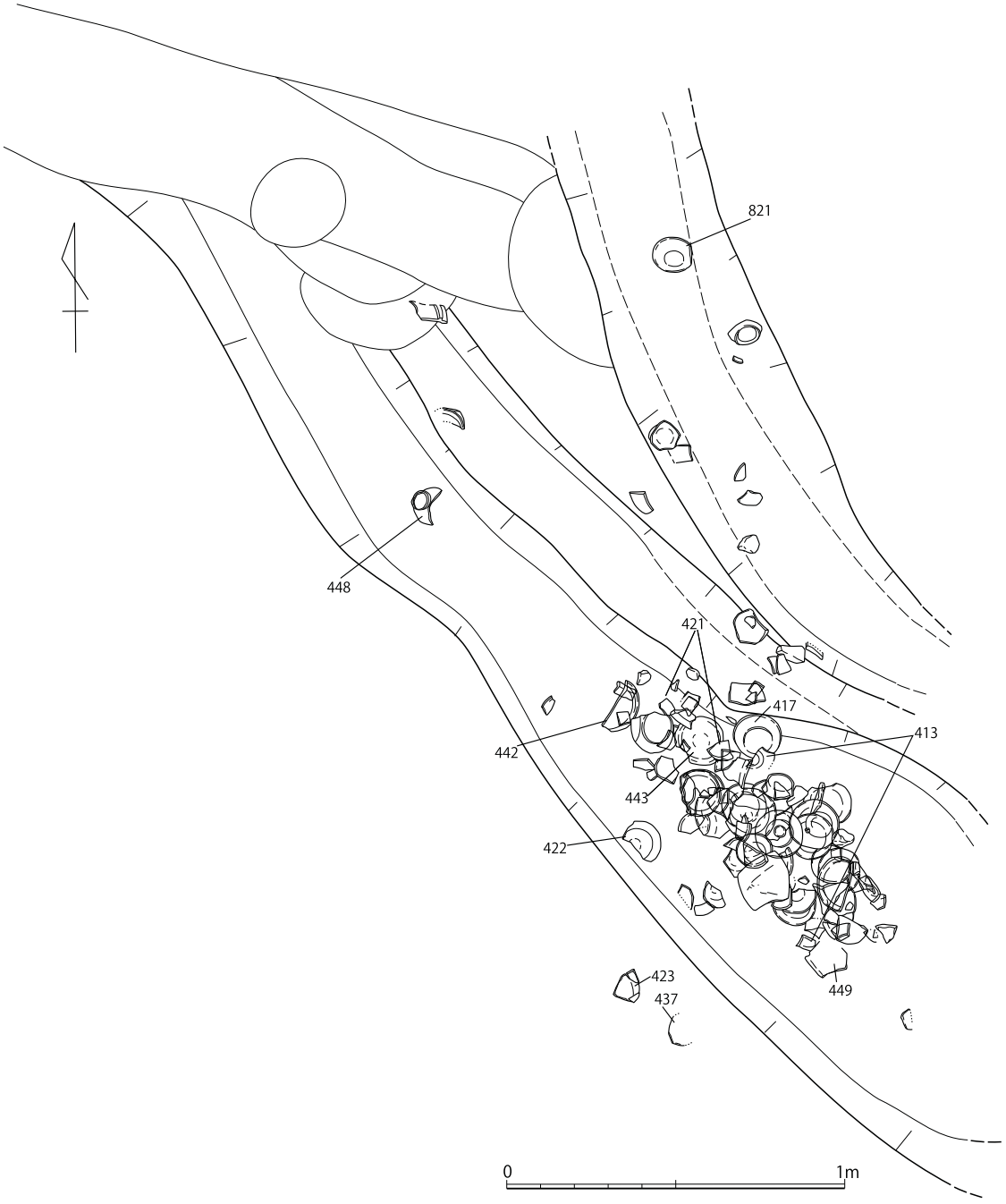
・SD-270

［遺構状況］　141-S-6 グリッド付近で検出。この遺構は溝状遺構が密集する中の一つとして確認した。方向的には軸が N-40° -W へずれて走っている。確認できた範囲は 5m ほどしかなく 7~80cm ほどの幅で長さ 5m ほどである。その一角に多量の杯類が集中していた。この一部は SD-418 にもあった。そのため、出土遺物で述べる遺物が必ずしもこの遺構に伴うと断定はできないが、そう離れた時期のものではないと判断し、この遺構の廃絶後の埋土に入っていたものとして以下に記述する。

［出土遺物］　ここで特に取り上げるものは大量の墨書土器である。そのほとんどに「三」という文字が書かれていた。集中して廃棄された状況や共通の文字の使用、さらに同時期の遺物である点を考えると、何かの祭祀的な行為による一括廃棄の可能性がある。ただ、他の遺物もあるので同一場所で使用されていたものがゴミとしての廃棄された可能性もある。記述する遺物は図化したものの他写真図版に取り上げたものも一部含む。

412 は土師器の杯蓋で、1 層の出土である。口縁の弱い折り返しがある。ツマミは擬宝珠というより扁平なボタン状を呈する。天井部の高さは低い。内外器面に回転による暗文が施される。口径が 18.4cm、器高が 2.9cm を測る。

413~426・429~437・440・441・514 は土師器の杯である。大部分が内外器面に赤彩が施され、外底面に「三」の墨書があるものもある。形態的にいくつかに分類できそうである。口径が 13cm 前後、器高が 3.0cm 前後に集中するものがほとんどで、413~419・421~425・440 がそれにあたる。435~437 もこれに含まれよう。このうち 424 には底部中央部に穿孔がある。これも意図的廃棄を思わせる。墨書はほとんど「三」であるが、433 は「山＋今」（岑か）のような文字が外底面に書かれ、2 文字なのか 1 文字、もしくは合字



第 152 図　Ｉ区　SD270 実測図

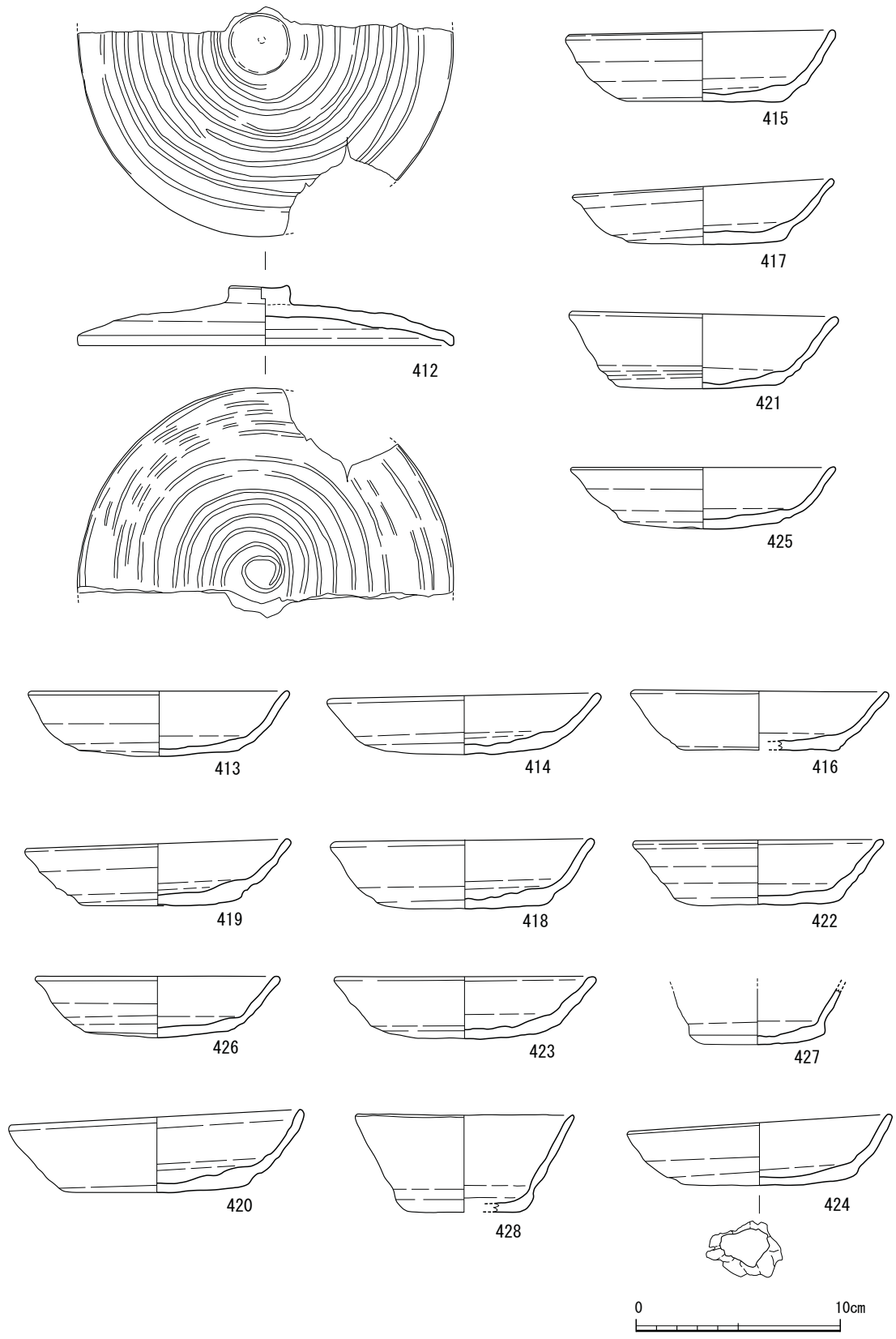
なのかわからに状態である。専門家の判断もわかれ明確な回答は得ていない。

その他に 420 は口径が 14.5cm、器高が 4.1cm、底径が 9.2cm を測り、やや大型である。426・430・431 は口径が 12cm ほどで小型品である。

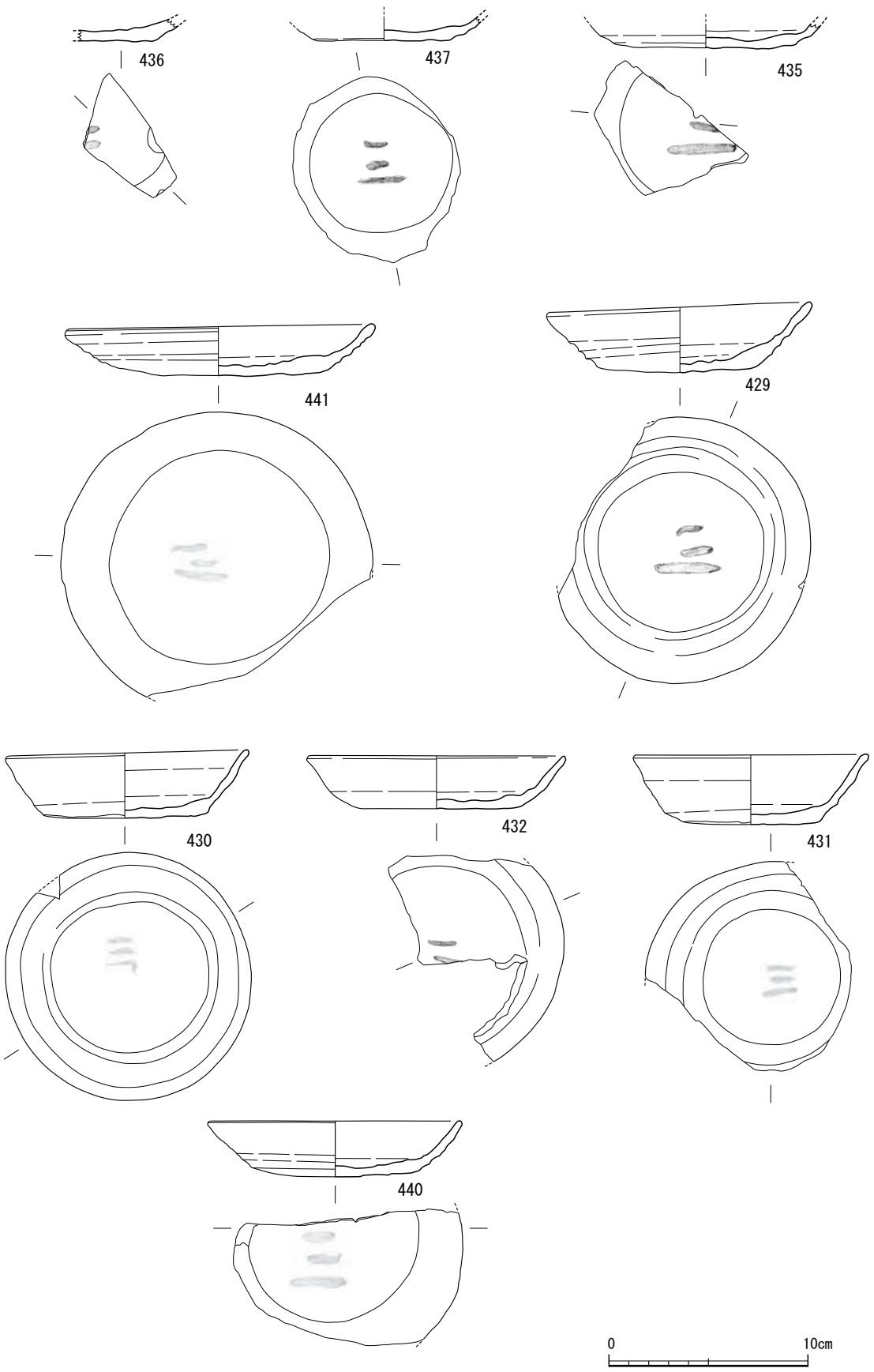
441 は土師器杯で、口径が 15.6cm、器高が 2.6cm、底径が 10.9cm を測り、後述の皿としたものと口径 / 底径比、口径 / 器高比が近い。内外器面とも赤彩され、「三」の墨書が外底部にある。

514 は土師器杯で復元口径が 14.6cm、器高が 3.5、底径が 9.8cm を測り、やや大型品にはいる。外底面に「三」の墨書が書かれる。

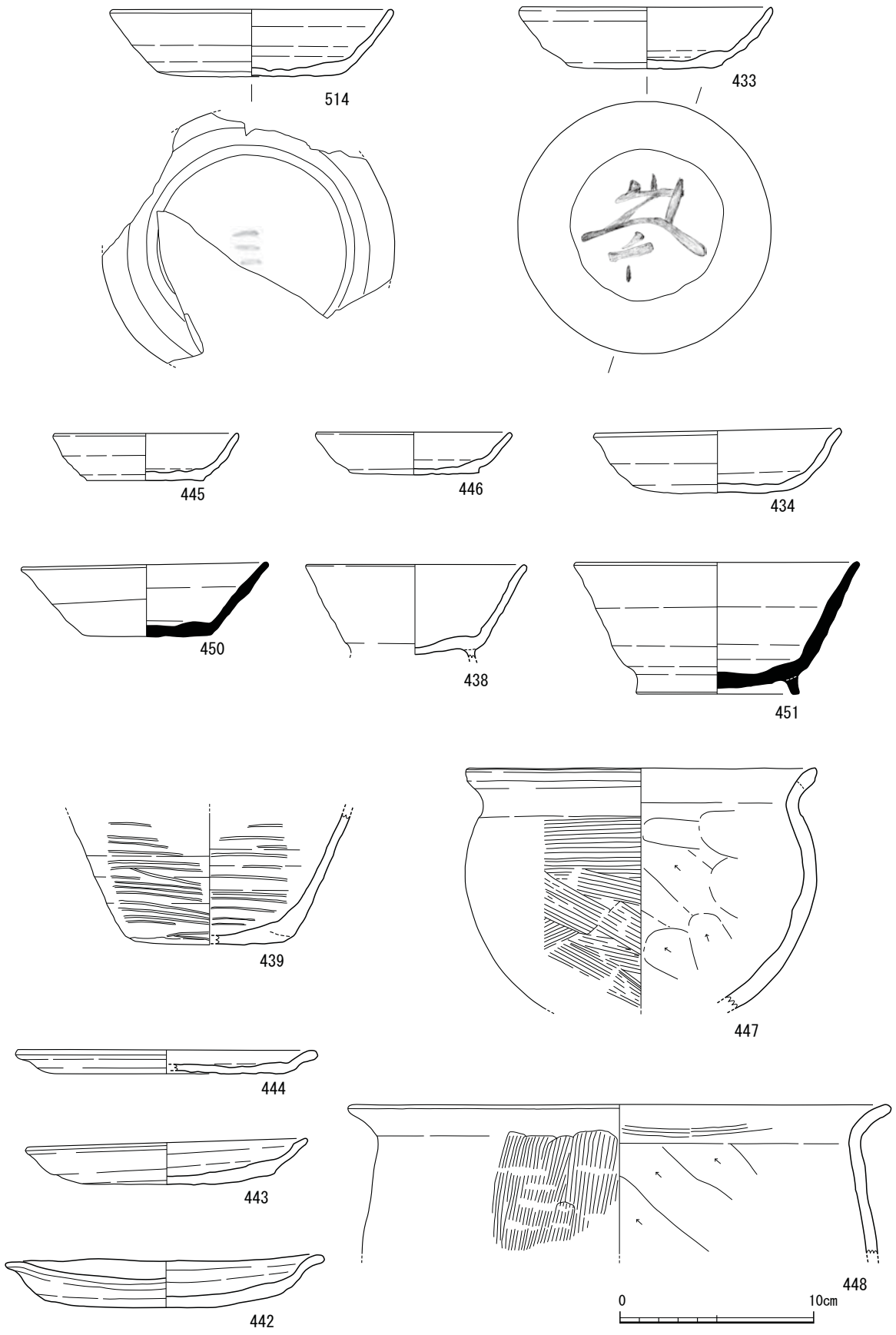
427・428 は土師器の椀である。427 は体部下位から底部までの破片である。底部はヘラ切り離し後ナデ



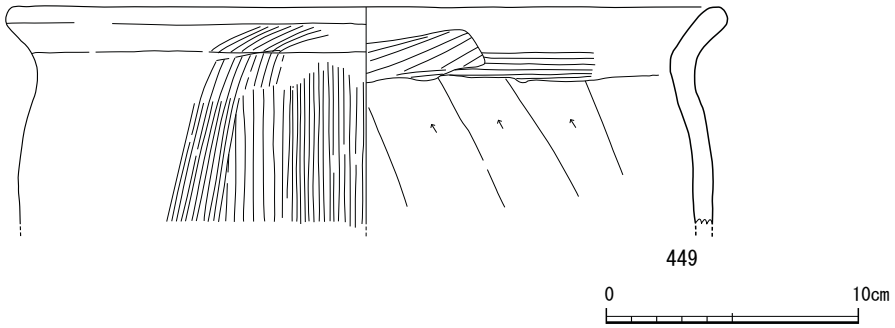
第 153 図　Ⅰ区　SD270 出土遺物実測図



第 154 図　Ｉ区　SD270 出土実測図



第 155 図　Ⅰ区　SD270 実測図



第 156 図　Ｉ区　SD270 出土遺物実測図

が施される。428 は復元径が 10.8cm、器高が 4.8cm、底径が 6.2cm を測る。内外器面は赤彩が施され、外底面に墨書文字「三」が書かれる。

442~444 は土師器の皿とした。442 と 443 は杯としてもよいが､口径 / 底径比が 1.3､口径 / 器高比が 6.1 ほどのものである。443 は内外器面に赤彩が施される。444 は口径 / 底径比が 1.2、口径 / 器高比が 13.1 とかなり平たい印象を受ける土器である。内外器面は赤彩される。

445・446 は土師器の小皿とした。445 は反転復元であるが、いずれも口径が 10cm 内外、器高が 2.3cm ほど、底径が 6.0cm と 6.7cm をはかるもので、口径 / 底径比が 1.5~1.6、口径 / 器高比が 4~4.6 である。ばらつきがあるので他の通常の杯よりも小型なのでここにまとめた。

447･448･449 は土師器の甕である。447 は復元口径 18.1cm を測り、口縁から胴部下位まで確認できる。形態的には小型のものである。448 は復元口径が 28.0cm を測るもので、口径も大きく高さも高い大型のものである。449 も口径が 28.2cm を測り、448 と類似した器形を持つものである。

438 は土師器の高台付椀で、貼り付け高台部分がはげ落ちている。口径は 11.5cm を測る。内器面口縁部と外器面に煤が付着することから灯明としての再利用も考えられる。

439 は土師器椀としたが､全体的な器形では器高がかなり高いもので小型鉢とした方がよいかもしれない。内外器面に赤彩されその後に回転による暗文が内外ともに施されることもそれを示唆する。

450 は須恵器の杯で、口径が 12.8cm、器高が 3.85cm、底径が 6.6cm を測る。底径が小さく、高さに比して口径が広いため、底部から口縁に向けて体部が急激に口縁が開くように見える。

451 は須恵器の高台付椀である。口径が 14.75cm、器高が 6.8cm、底径が 8.4cm を測るものである。高台は短いがはっきりしている。口径に比して器高が高いのでより深い器に見える。

・SD-308

［遺構状況］　141-L-4 グリッドで検出。

［出土遺物］　丸瓦 1 点、平瓦 4 点、特殊瓦 1 点出土。

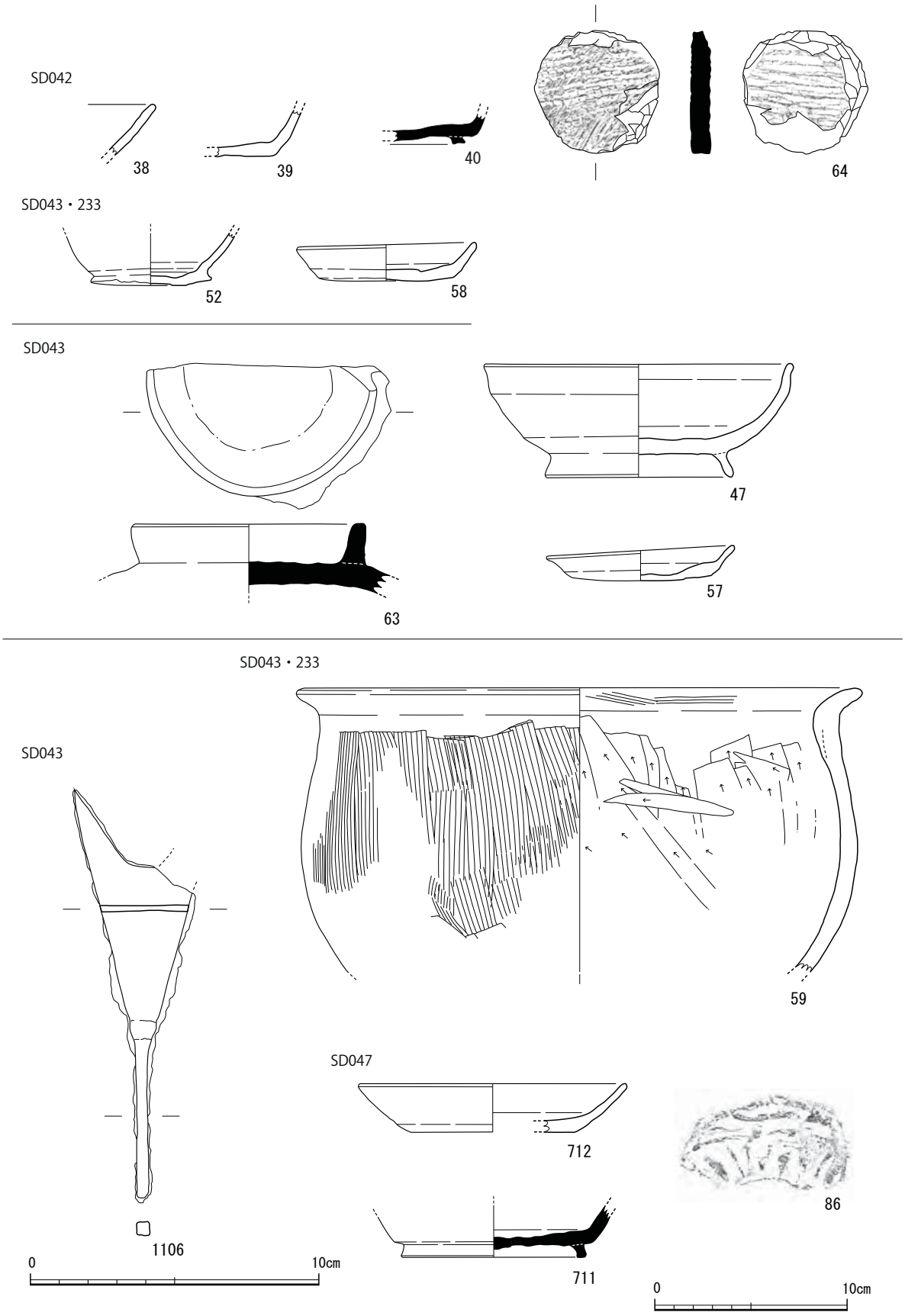
・SD-317

［遺構状況］　141-P-3・4 グリッドで検出。

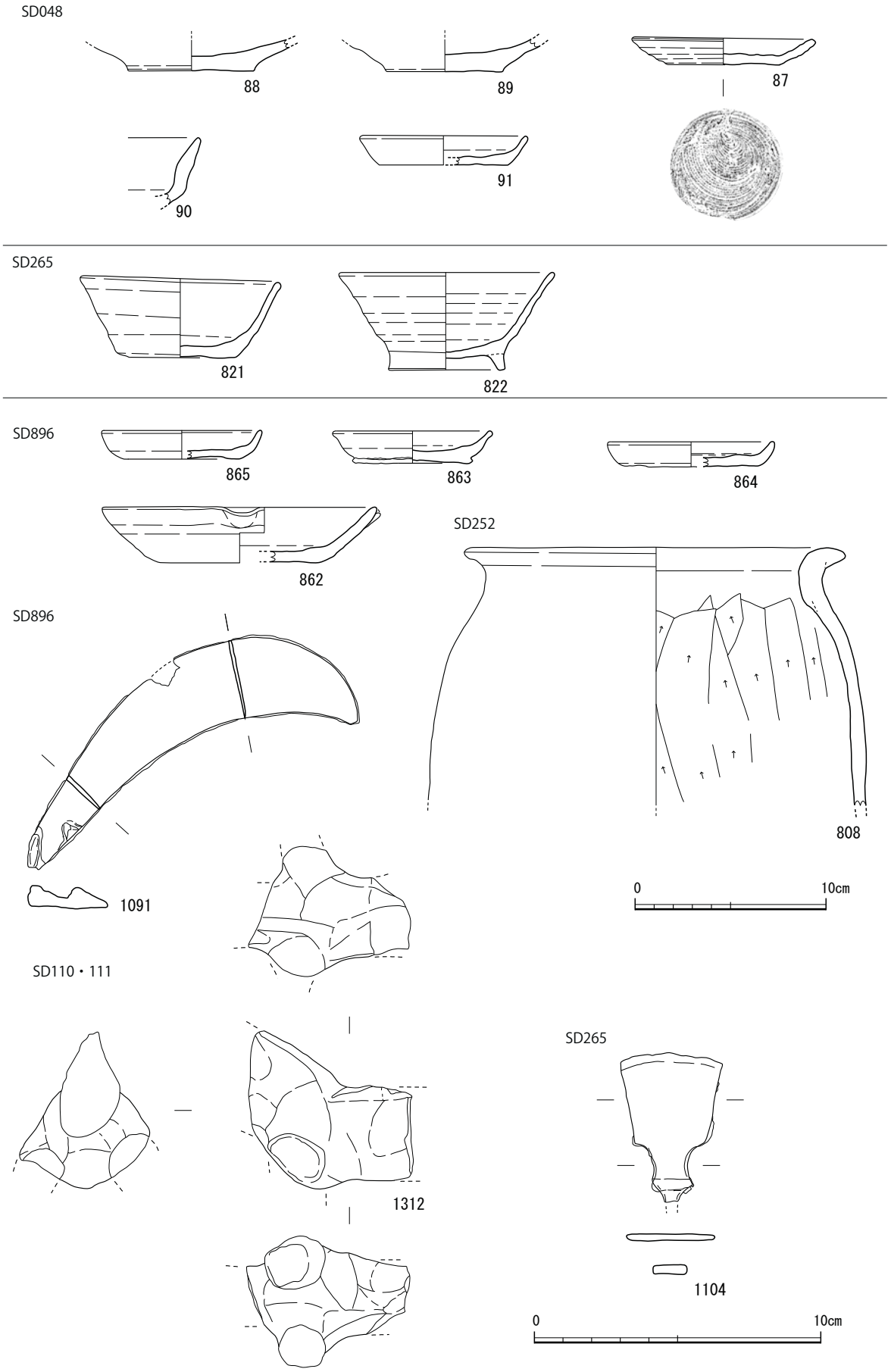
［出土遺物］　緑釉の皿、軒丸瓦（836）、カマドの上部 1 点などが出土。

・SD-356

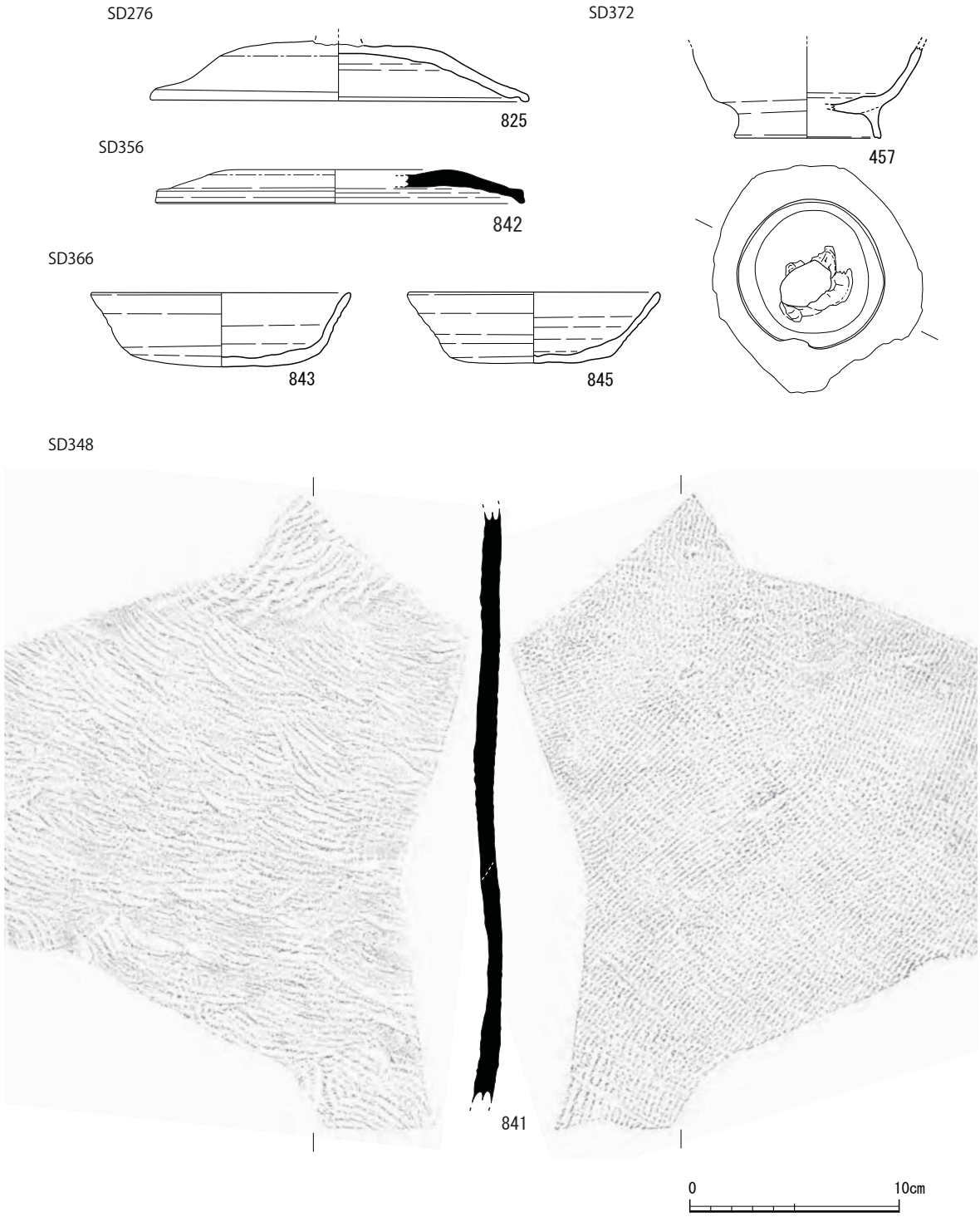
［遺構状況］　141-O・P-7・8 グリッドで検出。



第 157 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図 (1106 の S=1/2)

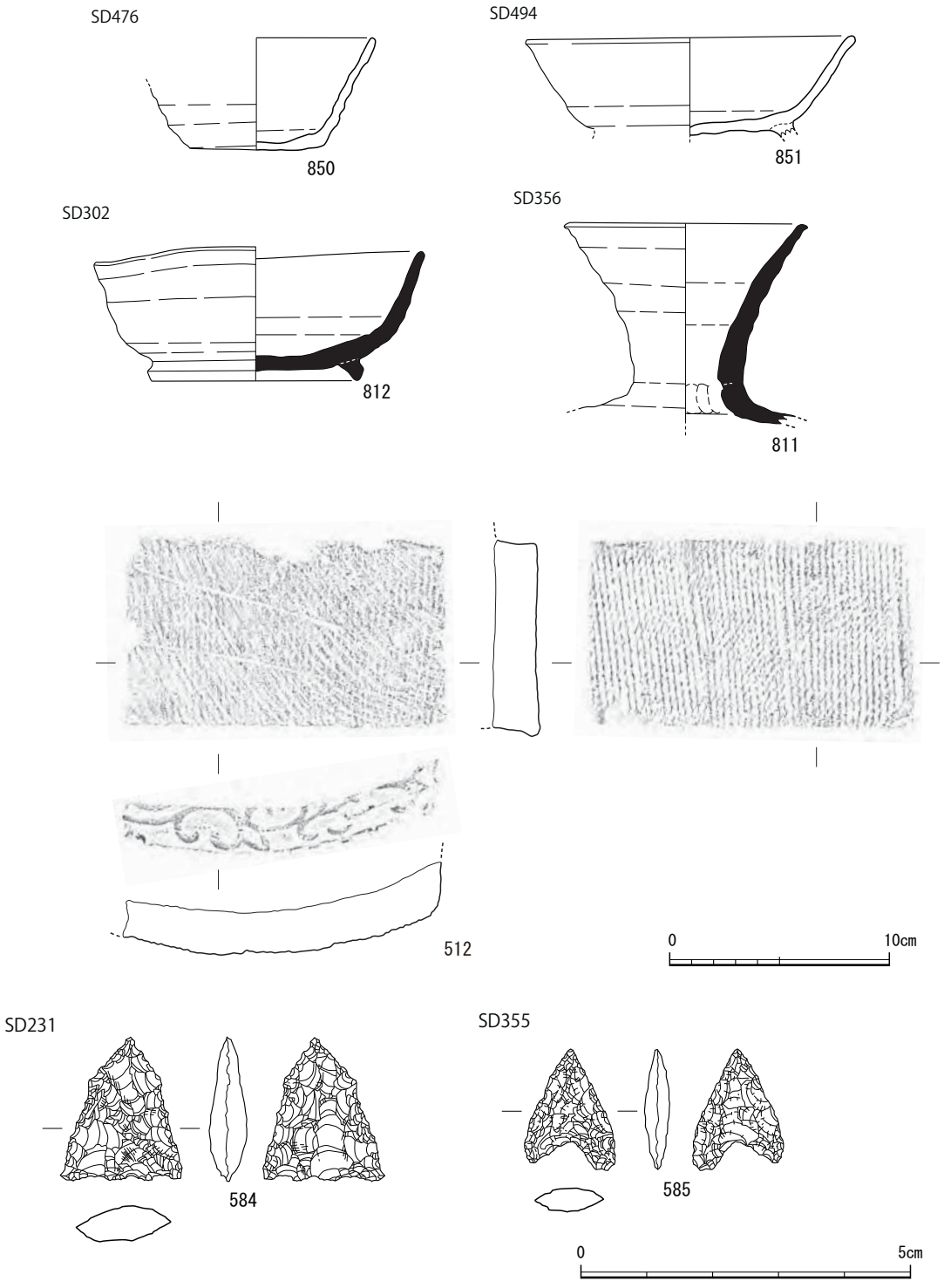


第 158 図　Ｉ区　溝状出土遺物実測図 1104・1312(1/2)・他（1/3)



第 159 図　Ⅰ区　溝状出土遺物実測図

[出土遺物]　811 は須恵器の長頸壺の口縁から頸部の破片である。復元口径は 10.5cm を測る。頸部は強く締まり、そのため口縁部はラッパ状に開き、端部は薄くなり弱く外反する。長頸壺としたが、平瓶の口縁の可能性もある。842 は須恵器の杯蓋で 1・2 層の出土である。復元口径が 16.8cm、器高が 1.6cm を測る。内器面が擦れており、転用硯として利用された可能性がある。



第 160 図　Ｉ区　溝状出土遺物実測図

・SD362

［遺構状況］　141-Q・R-5・6 グリッドで検出。

［出土遺物］　白磁椀（Ⅴ -2a 類口 (1)）が出土。

・SD-540

［遺構状況］　141-Q・R-5・6 グリッドで検出。近世溝との重なりあり。

・SD-610

［遺構状況］　141-S・T-13・14 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器は、白磁碗（Ⅳ類口縁 (1)、Ⅳ ~ Ⅷ類体部 (2)、Ⅴ 1? 類 (1)）、青白磁（椀？体部 (1)）、中国青花（椀片体龍Ⅳ ~?(1)）、高麗青磁椀（体部龍Ⅳ ~?(1)）などがある。

瓦も出土し、丸瓦 1 点、平瓦 6 点である。

・SD-611

［遺構状況］　141-S・T-13・14 グリッドで検出。

［出土遺物］　輸入陶磁器では白磁椀（Ⅳ×ＸⅠ -1? 類 (1)、Ⅳ ~ Ⅷ類体部 (8)、Ⅴ 4 ×Ⅷ 1・3 類口縁 (3)、Ⅳ類口縁 (1)、Ⅴ -4 類口縁 (1)、Ⅱ類体部 (1)、Ⅴ -1 ×Ⅷ -2 類口縁 (1)、Ⅴ -2 ×Ⅵ×Ⅶ類口縁 (1)、不明 (椀 ?) (1)、XI-4 × 5? 類（Ⅴ -2 ×Ⅵ×Ⅶ？類）口縁 (1)、Ⅴ×Ⅶ類底部 (1)）、白磁皿（Ⅴ×Ⅵ -1b 類底部 (1)、Ⅵ -1a 類口縁 (1)、Ⅲ -1 類 (1)）、同安窯（皿Ⅰ？類）などがある。

青磁器では、龍泉窯系の椀（Ⅱ a 類体 (1)、Ⅰ×Ⅱ類体部 (1)）などがある。

青白磁では椀もしく皿の口縁部が 1 点ある。

中国陶器では、C 群の耳壺（Ⅲ類）もしくは盤（Ⅰ類 ?) と考えられる破片が 1 点出土している。

緑釉陶器としては防長産の椀もしくは皿の高台〈新〉が 1 点出土している。

瓦器椀は 1 点、他に瓦器もしくは白色土器かと思われる椀形態の口縁部破片が 1 点出土している。

この他丸瓦 2 点、平瓦 8 点出土している。

・SD-612

［遺構状況］　141-S・T-13・14 グリッドで検出。

［出土遺物］　越州窯青磁では、椀（Ⅱ類）の直口縁が 1 点出土。白磁椀ではⅣ ~ Ⅷ類 1 点、Ⅱ類底部が 2 点、Ⅳ類口縁が 1、Ⅳ ~ Ⅷ類の体部が 1 点である。Ⅳ類の白磁椀口縁が 2 点出土している。

他に平瓦が 1 点出土している。

・SD-896

［遺構状況］　141-F・G-3・4 グリッドで検出。S-041 に直交する。

［出土遺物］　輸入陶磁器が 4 点出土。白磁碗（Ⅳ - Ⅷ類体 (2), Ⅵ×Ⅶ類口 (1)）、青白磁（小壺 (1)）などがある。

862 は土師器の杯で口縁の一部に片口状に成形されている。復元口径が 14.4cm、器高が 2.9cm、復元底径が 8.1cm を測る。底部は糸切離し後板状圧痕が残る。口縁部に指痕がある。863 は土師器の小皿で、底部はヘラ切り離し後板状圧痕が残る。復元口径が 8.4cm、器高が 1.7cm、復元底径が 6.2cm を測る。864 は土師器の小皿である。復元口径が 8.7cm、器高が 1.4cm、復元底径が 7.2cm を測る。底部は糸切離し後板目状圧痕が残る。865 は土師器の小皿である。復元口径が 8.4cm、器高が 1.5cm、底径が 6.1cm を測る。底部は糸切離し後板目状圧痕が残る。

1091 は鉄製カマである。刃部長はカーブを描きながら 19cm ほどである。最大刃部幅は 4.2cm を測る。基部に二か所折り返したような部分があり、ここに柄を取り付けたものと考えられる。

他に丸瓦 2 点、平瓦 2 点が出土している。

(8) ピット群

この遺跡では柱跡と考えられる非常の多くのピット群を検出し、そのいくらかは掘立柱建物跡としてすでに述べている。しかし、まだ大半は十分確認できず、ピット群の扱いのままとなった。ここでは各ピットの出土遺物から主なものをピットごとにまとめて記述していくことにする。

847 は須恵器の高台付杯で、SP-427 からの出土である。復元口径が 15.4cm、器高が 6.0cm、復元底径が 9.9cm を測る。

886 は須恵器の高台付椀で SP-311 からの出土である。口径 10.9cm、器高 5.3cm、底部径 7.4cm を測る。
904 は土師器の杯で、SP-435 の出土である。底部はヘラ切り離し後ナデである。外底面に「三」を沈線ようの線で刻む。

809 は土師器の高台付椀で、SP-442 の出土である。復元口径が 18.6cm、復元底径が 10.2cm、器高が 9.6cm を測る。内外器面は赤彩が施される。848 も須恵器の甕である。口径が 21.6cm を測る。
489 は須恵器の大甕で SP-444 の出土である。復元口径が 24.5cm を測る。

852 は土師器の杯で、SP-521 の出土である。口径が 11.2cm、器高が 4.6cm、底径が 6.3cm を測る。

816 は土師器の杯で、SP-562 の出土である。口径が 14.2cm を測る。内器面および外器面上部はヘラミガキが施される。外底面はヘラケズリによる成形がなされる。やや古手のものである。

853 は土師器の高台付椀で、SP-562 の出土である。底径が 7.5cm を測る。

855 は土師器の杯で、SP-591 の出土である。口径が 11.4cm、器高が 4.1cm、底径が 7.1cm を測る。底部はヘラ切り離し後板目状圧痕が残る。

490 は土師器の甕で、SP-622 の出土である。復元口径は 21.8cm を測る。外器面は赤彩される。

856 は土師器の杯で、S-651 の出土である。口径が 11.9cm、器高が 3.5cm、底径が 7.5cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデ調整である。

492 は須恵器の杯で、SP-654 の出土である。口径が 12.0cm、器高が 3.5cm、底径が 8.9cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデ調整である。

857 は土師器の杯で、SP-658 の上層出土である。口径が 12.0cm、器高が 2.8cm、底径が 8.5cm を測る。底部はヘラ切り離しである。内外器面は赤彩が施される。

491 は土師器の甕で、SP-682 の出土である。復元口径が 33.2cm を測り、大型のものである。口縁の屈曲は弱く、胴部はほぼ直に底部に至るようである。内外器面に煤が付着する。

859 は須恵器の長頸壺の体部から底部の破片である。SP-742 の出土で、復元底径が 9.8cm を測る。内底面に磨研痕が認められるので転用硯の可能性もある。

493 は須恵器の椀で、SP-788 の出土である。高台は低く、体部は高台からほぼ直に口縁へ伸びる。復元口径が 14.1cm、器高が 6.3cm、底径が 7.9cm を測る。

494 は須恵器の高台付杯で、SP-788 の出土である。復元底径が 8.0cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデである。

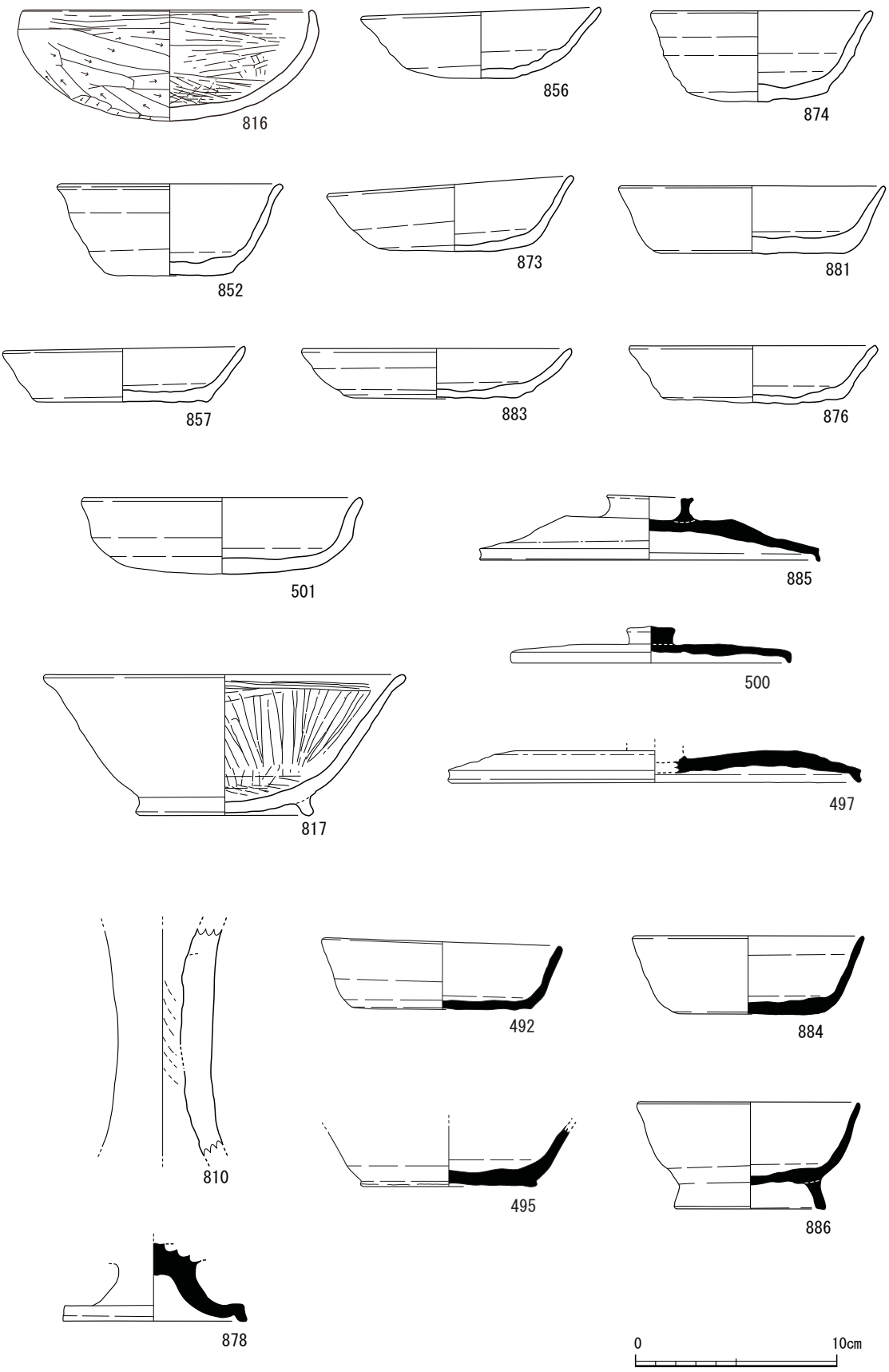
495 は須恵器の杯で、SP-806 からの出土である。復元底径は 8.6cm を測る。赤焼けのものである。

501 は土師器の杯で、SP-820 からの出土である。口径が 14.0cm、器高が 3.4cm を測る。
500 は須恵器の杯蓋で、SP-828 の出土で、復元口径が 13.8cm、器高が 1.8cm を測る。ツマミは擬宝珠である。

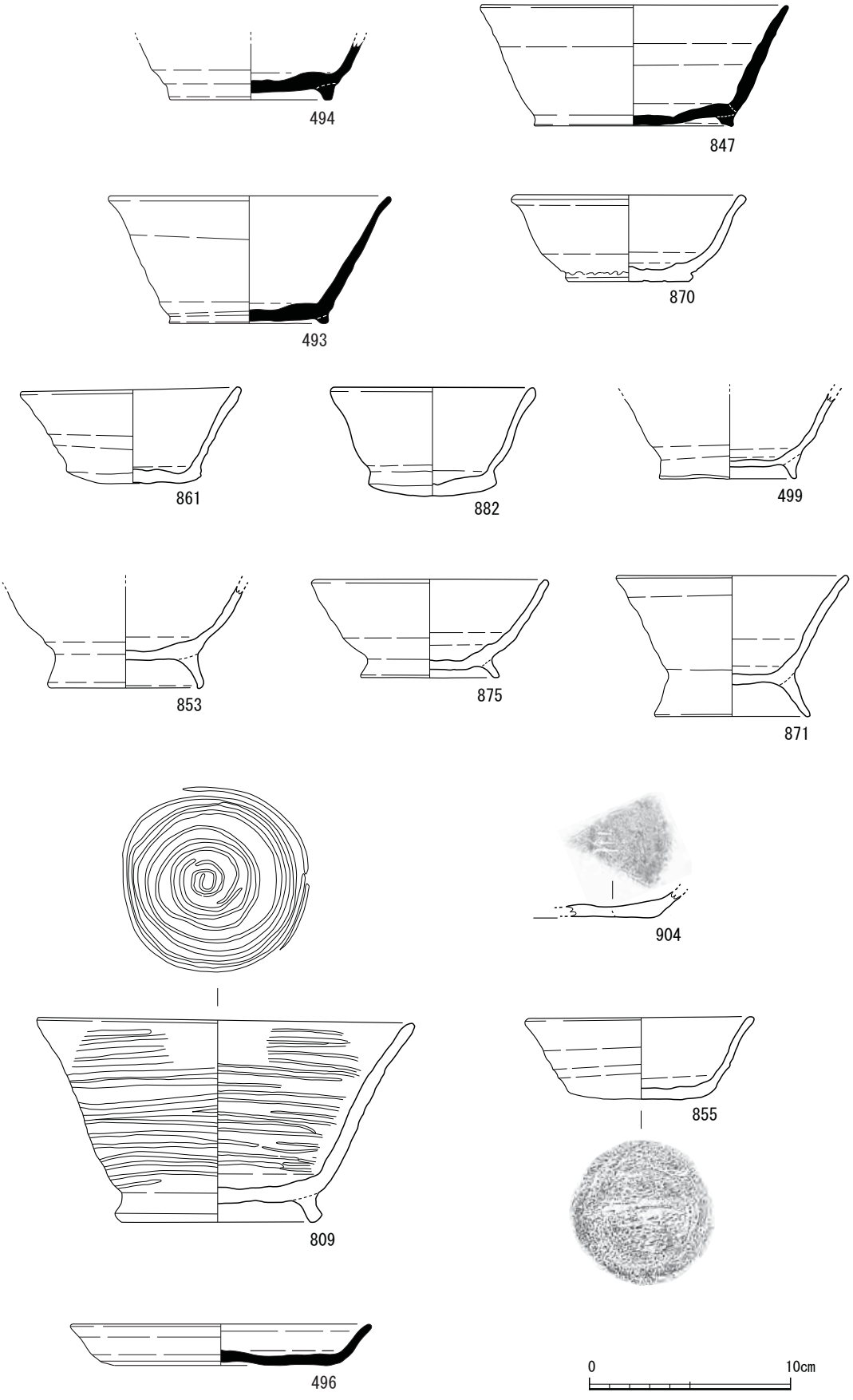
496 は須恵器の皿で、SP-837 からの出土である。復元口径が 15.0cm、器高が 2.1cm、復元底径が 12.2cm を測る。内底面は磨研されていることから転用硯と見られる。

497 は須恵器の蓋で、SP-847 の出土である。口径が 20.4cm を測る。

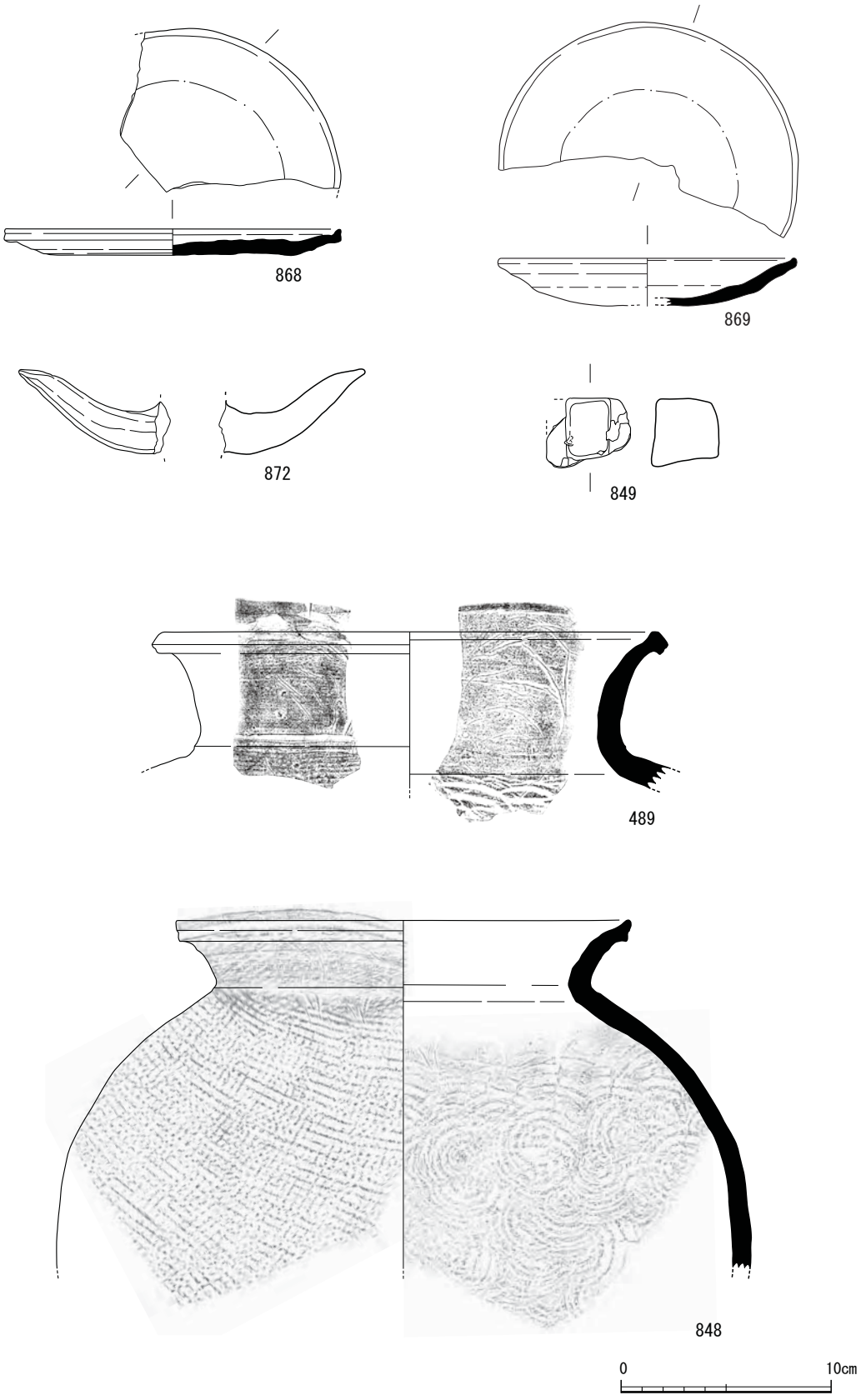
498 は土師質カマドの焚口付近の破片である。SP-848 の出土である。外器面は縦方向のハケを中心に内



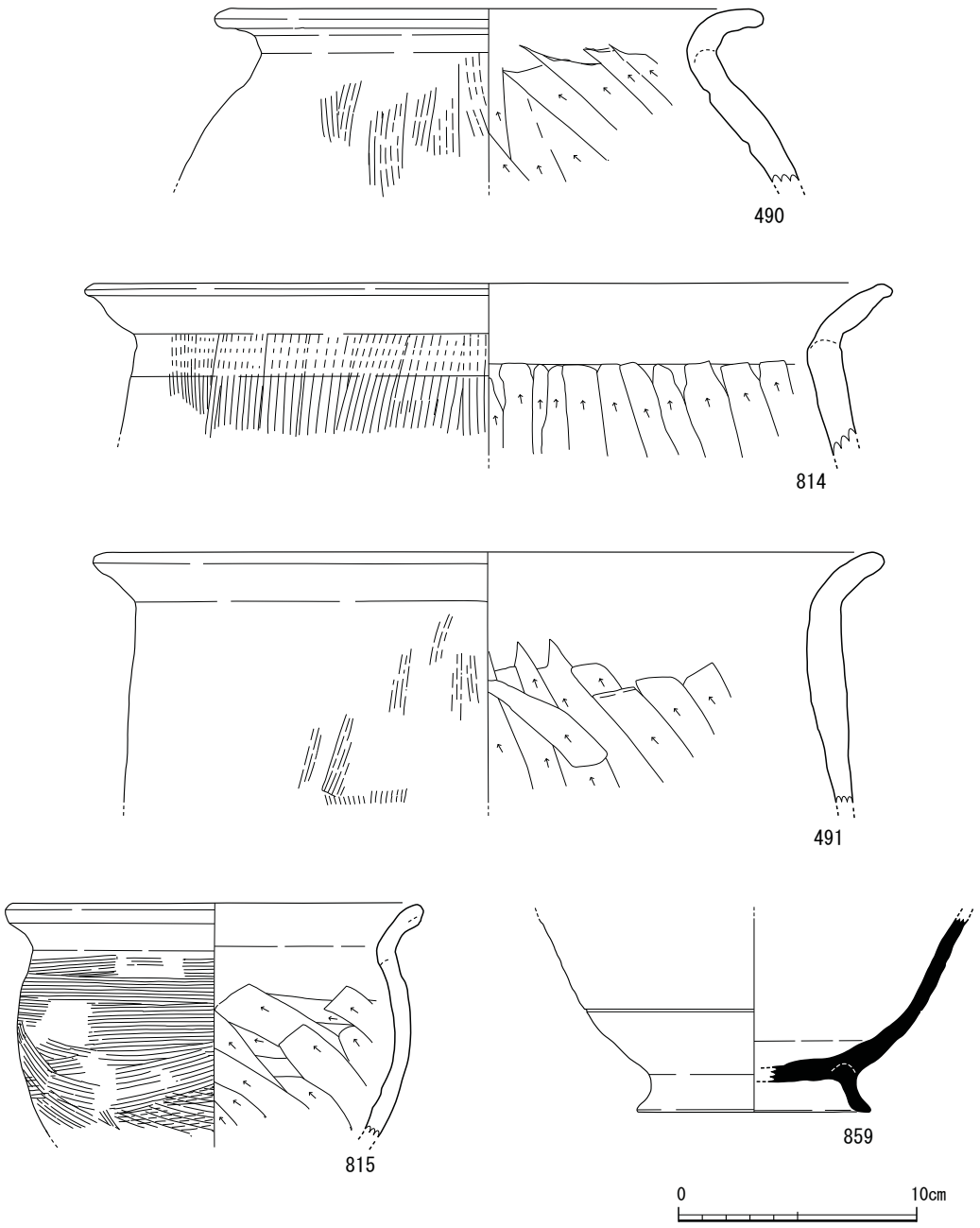
第 161 図　Ⅰ区ピット内出土遺物実測図



第 162 図　Ｉ区　ピット内出土遺物実測図



第 163 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図



第 164 図　ピット内出土遺物実測図

器面は縦方向のヘラケズリが施される。鍔は 10cm ほど突き出ている。

861 は土師器の杯で、SP-871 の出土である。底部から口縁へ伸びる体部は直線的で椀の形状である。口径が 11.0cm、器高が 4.8cm、底径が 6.7cm を測る。

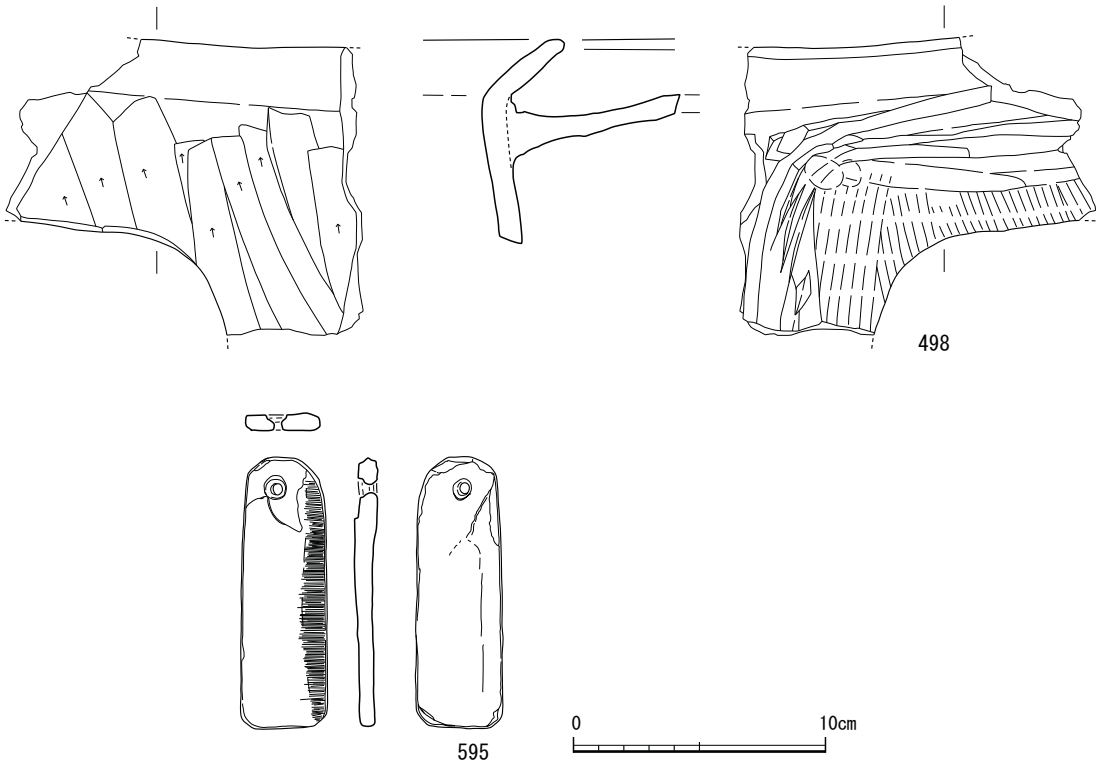
868 は須恵器の蓋で転用硯として使用される。SP-916 の出土である。口径が 15.9cm、器高が 1.3cm を測る。内器面は磨研されていることから転用硯と見られる。

869 は須恵器同じく蓋で、やはり転用硯として使用される。SP-931 の出土で、復元口径が 14.2cm を測る。

810 は土師器の高杯で、SP-955 の出土で、内外器面とも赤彩が施される。

870 は土師器の杯で、SP-968 の出土である。口径が 11.6cm、器高が 4.3cm、底径が 6.0cm を測る。

871 は土師器の高台付椀で、SP-969 の出土である。口径が 11.6cm、器高が 7.0cm、復元底径が 7.8cm



第 165 図　Ⅰ区　ピット内出土遺物実測図

を測る。872 は土師器の鍋の把手である。SP-976 からの出土である。

873 は土師器の杯で、SP-979 の出土で、口径が 12.3cm、器高が 3.7cm、底径が 7.8cm を測る。底部はヘ　ラ切り離し後板目状圧痕が残る。

874 は土師器の杯で、SP-991 の出土で復元口径が 11.0cm、器高が 4.5cm、底径が 6.9cm を測る。

875 は土師器の高台付椀で、SP-991 の出土である。復元口径が 11.8cm、器高が 4.9cm、底径が 6.8cm を測る。

876 は土師器の杯で、SP-999 の出土。底径が 9.0cm を測る。内外器面に赤彩が施される。

878 は須恵器の高杯で、SP-1011 の出土。底径が 9.1cm を測る。

814 は土師器の甕で、SP-1019 の出土。復元口径が 33.2cm を測る。外器面に煤が付着する。

881 は土師器の杯で、SP-1051 の出土。復元口径が 13.0cm、器高が 3.4cm、復元底径が 9.0cm を測る。

882 は土師器の椀で、SP-1060 の最上層から出土。復元口径が 10cm、器高が 5.4cm、復元底径が 6.3cm を測る。

883 は土師器の杯で、SP-1070 の出土。口径が 13.3cm、器高が　2.5cm、底径が 8.8cm を測る。内外器面に赤色顔料が塗布される。

884 は須恵器の杯で、SP-1073 の出土。復元口径が 11.3cm、器高が 3.9cm、復元底径が 7.5cm を測る。

885 は須恵器の蓋で、SP-1089 の出土。口径が 16.9cm、器高が 3.2cm を測る。

817 は内黒土器の椀で、SP-10004 の出土。復元口径が 17.8cm、器高が 7.0cm、復元底径が 8.4cm を測る。内外器面にヘラミガキが施される。

499 は土師器の高台付椀で、SP-10009 の出土。底径が 6.85cm を測る。

815 は土師器の甕で、SP-10054 の出土。内器面口縁部から外器面にかけて煤が付着する。

849 は石鍋の把手で、SP-456 の出土である。

（9）不明遺構

・SX-044

［遺構状況］　141-I-10 グリッドで検出した。1m 四方の範囲に遺物が集中して出土した場所を遺構としたものである。何らかの掘り込みがあったと思われるが、調査で確認することはできなかった。Ⅲ層中に掘り込みがあったと想定される。半径 50cm ほどの範囲に集中していた。

［出土遺物］　13 点ほどの遺物が集中していた。そのうちの 7 点を図化した。

66 は土師器の椀で、口径が 11.2cm、器高が 4.6cm、底径が 5.3cm を測る。67 は内黒土器の椀で、復元口径が 17.3cm を測る。器表面はヘラミガキがほどこされるが、外器面の下位は回転ヘラケズリが施される。607 は土師器の椀で、復元口径が 11.6cm、器高が 4.75cm、復元底径が 5.9cm を測る。608 は土師器の杯と考えられる。口径が 11.3cm、器高が 4.0cm、底径が 6.7cm を測る。609 は土師器の甕で復元口径が 24.8cm を測る。大型のものであるが、口径に比して高さが低く丸い印象を受ける。703 は土師器の高台付椀である。復元底径が 6.1cm を測り、底部から直で体部が立ち上がる。

502 は滑石製の権と考えられるが、本来石鍋であったものの再利用である。長さが 11.9cm、最大横幅が 7.2cm を測る長方形で、厚みが 1.9cm を測る。上部に長さ 1.9cm、幅 1.5cm、穿孔された突起がある。この部分の穴に紐などを通し吊るしたのであろうか。重さは 274.5g であり、当時の重さの単位に一致しないことから棹秤のおもりであろう。また、石鍋の再利用というから平安時代末から鎌倉時代のものと考える。

・SX-058

［遺構状況］　141-K-10 グリッドで検出した。この遺構も SX-044 と同様の遺構で 1m ほどの範囲に遺物が集中して出土した場所である。掘り込みは確認できなかった。半径 50cm ほどの範囲に集中していた。

［出土遺物］　大部分の遺物は古代の時期のものに限られ、20 点ほど出土した。その中から 1 点抽出した。

763 は土師器の甕で復元口径が 26.9cm を測る。外器面に煤が付着する。

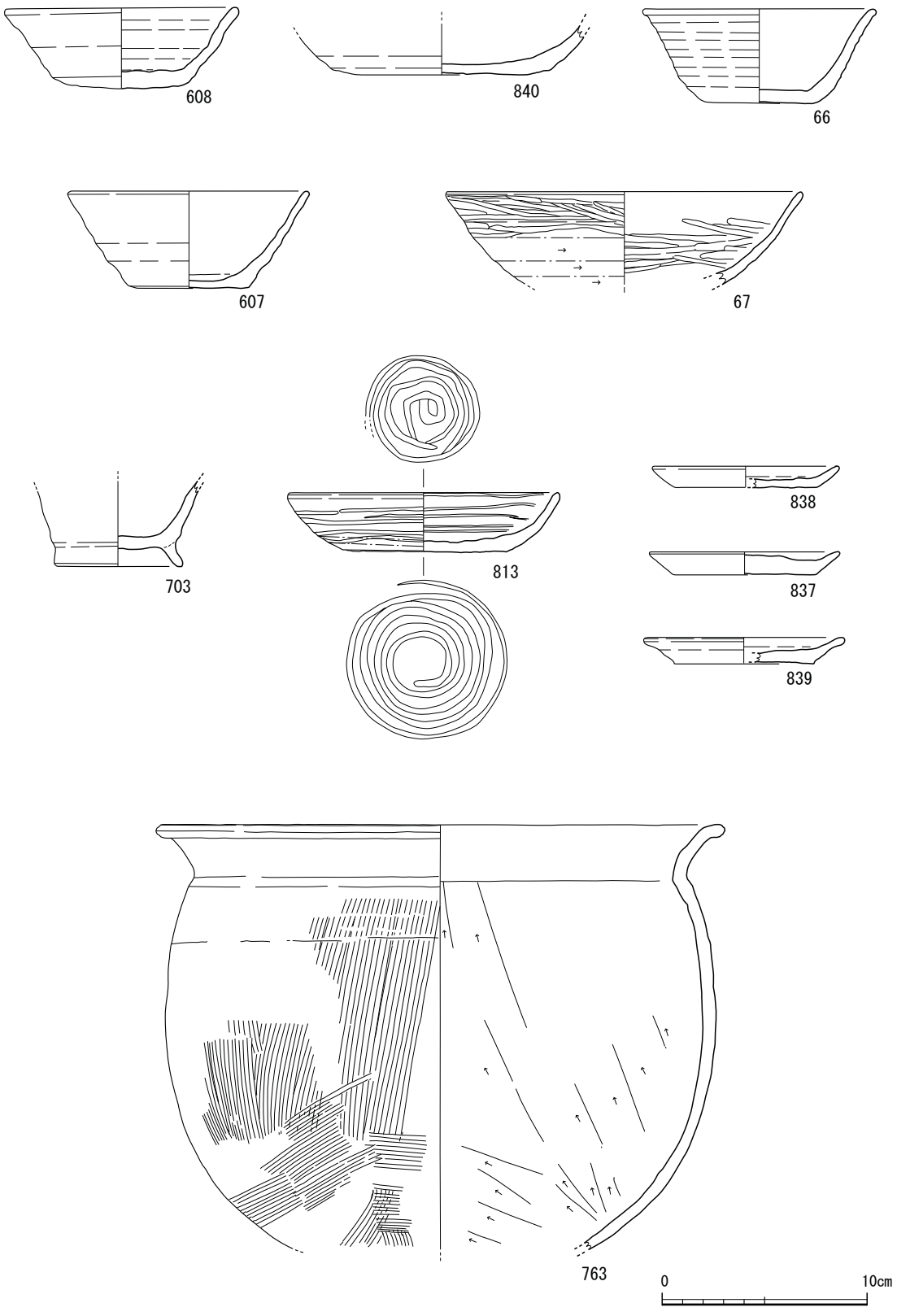
・SX-275

［出土遺物］　837 は土師器の小皿で、復元口径が 9.2cm、器高が 1.2cm、復元底径が 7.0cm を測る。内外器面に黒斑が残る。838 も土師器の小皿で、復元口径が 9.1cm、器高が 1.05cm、復元底径が 6.9cm を測る。839 は土師器も小皿で、復元口径が 9.8cm、器高が 1.3cm、復元底径が 6.9cm を測る。底部は糸切り後板状圧痕が残る。

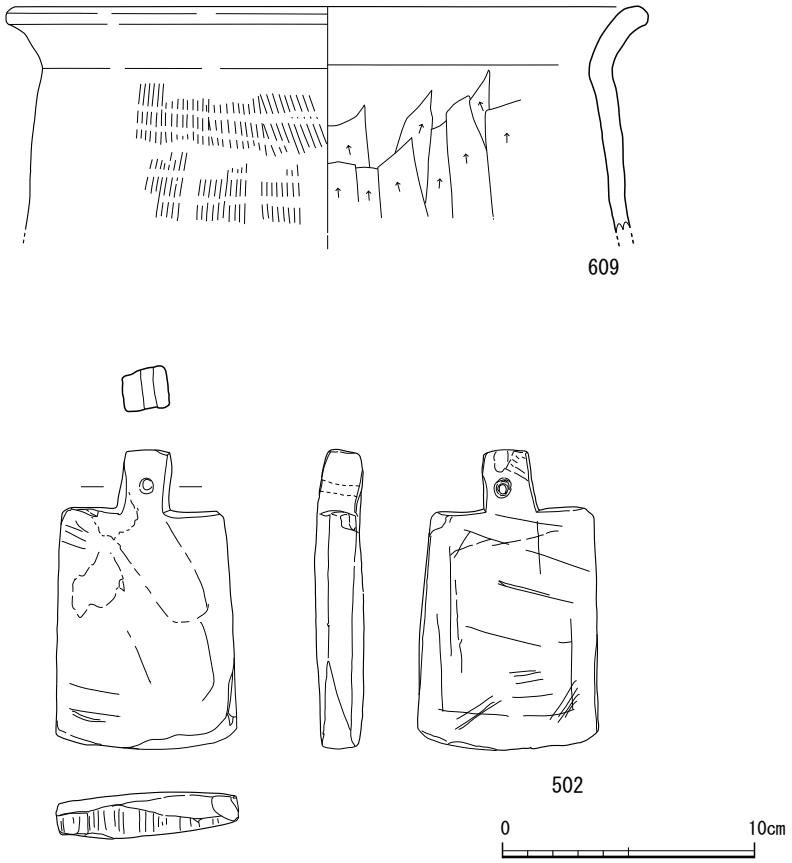
840 は土師器の杯で、復元底径が 8.9cm を測る。底部はヘラ切り離し後板状圧痕が残る。

・SX-1025

［出土遺物］　813 は土師器の杯で、復元口径が 13.1cm、器高が 2.9cm、底径が 8.0cm を測る。内外器面には内外器面とも赤彩が施されたのち、回転による暗文が施される。



第 166 図　Ⅰ区　SX 出土遺物実測図



第 167 図　SX 出土遺物実測図

(9) 調査Ｉ区遺構外出土遺物

・古代～中世の遺物

この時期の包含層中の遺物は非常に多くすべてを網羅することは冗長になるので遺物の類別と数量とに絞り込んで述べることにする。

まず輸入陶磁器であるが、遺構からの出土も多かったが、包含層中にはさらに出土した。すべてを回収したとは言い難いが、その中から主なものをここに取り上げる。山本氏による鑑定を経て確認できた分類と数量については総括でふれる。

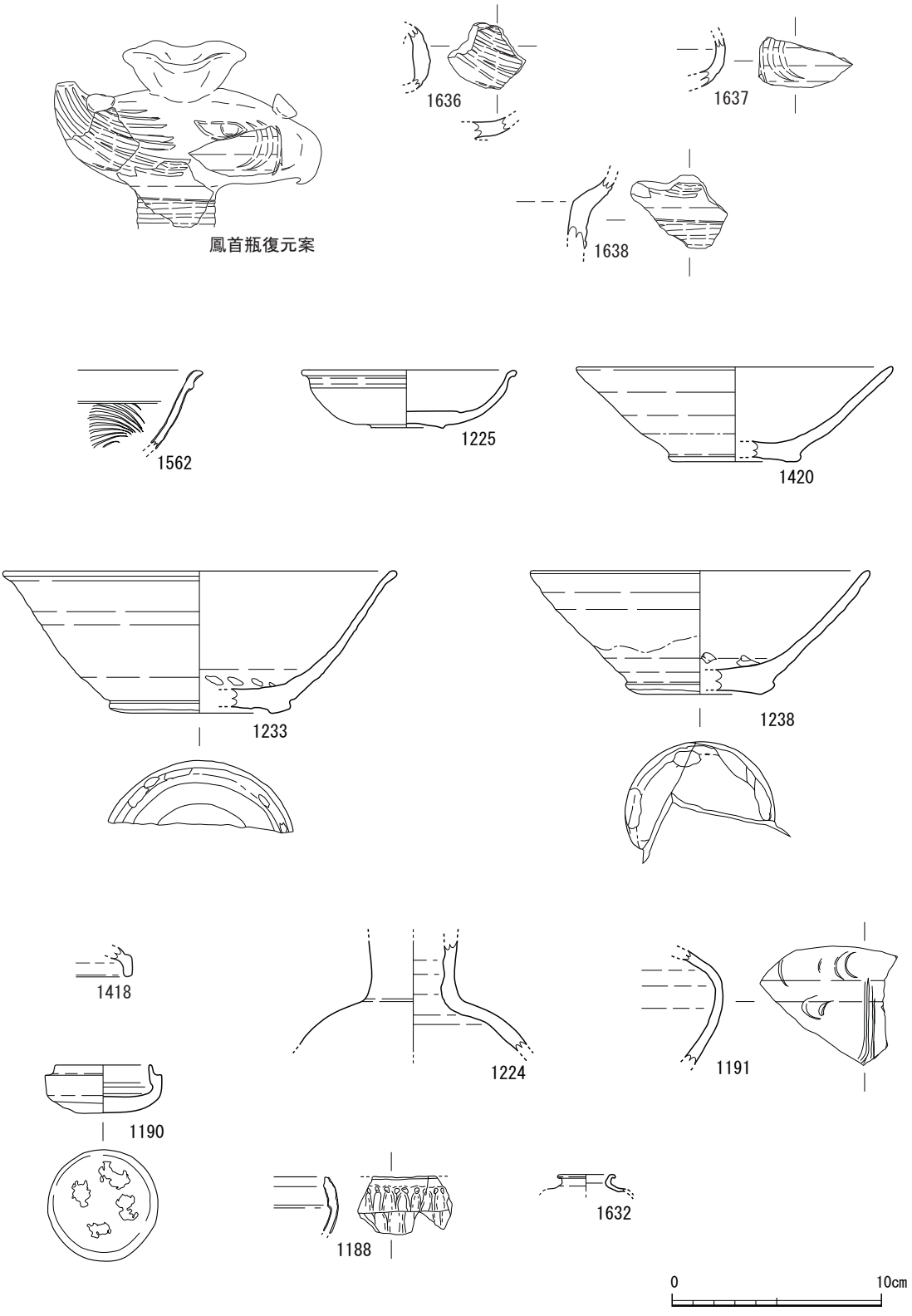
1562 は白磁の椀で、口縁部は二重口縁様になっており、口唇部は強く反る。内器面には口縁近くに沈線が圏線上にめぐる。その下位に櫛目文が入る。分類のⅤ -4b 類にあたる。141-K・L-10・11 グリッドの出土である、外体部はへら削りを施す。

1225 は白磁の皿で､口縁部から底部までの破片である。見込みに沈線がめぐる。分類ではⅤ -2a 類である。復元口径が 10.2cm、復元底径が 3.5cm、器高が 2.8cm を測る。口唇部付近で強く反らせる。底部は釉剥ぎされている。

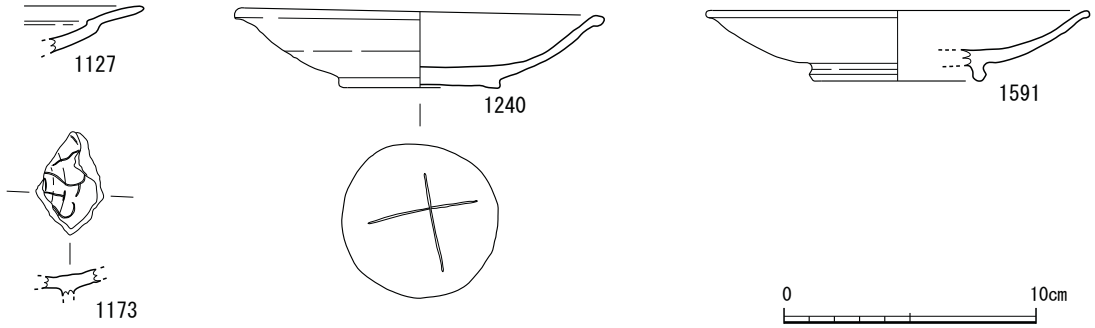
1211 は白磁の四耳壺（Ⅲ類）の口縁部である。復元口径は 10.8m を測る。

1233・1238 は越州窯系青磁の椀である。

1233 は大宰府分類のⅠ -2 ｳ類である。141-M-1・2 グリッドから出土。体部から底部の破片である。復元口径が 19.8cm、器高が 9.7cm、底径が 6.8cm を測る。施釉後高台畳付釉を削り取る。内外器面の底部付近には目跡が残る。1238 は大宰府分類(Ⅰ -5 類)をM･N グリッドの出土。口縁から底部までの破片である。



第 168 図　調査Ⅰ区内輸入陶磁器出土遺物実測図



第 169 図　調査Ｉ区内国産陶器出土遺物実測図

復元口径が 16.3cm、器高が 7.2cm、底径が 5.9cm を測る。底部は回転ヘラケズリにより成形され、平底になる。目跡が内外器面の底部近くに残る。体部外面の下位には施釉がない。

1224・1191 は越州窯系青磁水注である。1224 は大宰府分類のⅡ類、1191 はⅢ類にあたる。1224 は M・N-11・12 グリッドの出土で、頸部から体部までの破片である。1191 は L-3・4 グリッド出土で、体部のみの破片である。肩部付近にへらによる文様があるが何を意味するか不明である。

1418 は越州窯系青磁合子の蓋で、合わせ部が角張る形態の大宰府分類Ｉ類である。141-I・J-4・5 グリッドの出土で、合わせ部付近は釉を剥ぎ取り、目跡が残る。

1190 は越州窯系青磁合子で、大宰府分類のＩ類にあたる完形の身である。141-P・Q-3・4 グリッドからの出土である。受け部を釉剥ぎし、合わせ目もは蓋との間に目跡が残る。外底面には 4 箇所の胎土目が残る。口径が 4.6cm、器高が 5.35cm、底径（底部の屈曲までの径）が 2.3cm を測る。

1636・1637・1638 は同一固体と考えられる青白磁鳳首瓶の水注部分の破片である。1638 はその頸部付近、他の 2 片は鳳首部の一部である。山本氏の復元では鳳首部の各部に当てられる。復元案は、富山佐藤美術館所蔵の鳳首水注に基づき作成されている。ヘラ刻により文様を作り出している。出土地は 1636 が 141-G・H － 5・6 グリッド、1637 が 141-I・J-3・4 グリッド、1638 が 141-K・L-5・6 グリッドと広範囲にわたりかなり早期に破片として分散したものであろう。この種の遺物は山本氏によれば発掘調査で確認されたものとしては全国 2 例目とされる。

1188 は青白磁の合子の身であろう。141-I・J-3・4 グリッドの出土で型押し成形により作られる。口唇部は釉剥ぎされる。

1632 は中国陶器の茶入れ口縁部で、141-K・L-3・4 グリッドから出土する。器壁が非常に薄く、復元口径が 2.8cm を測る。口縁から頸部までは 0.5mm ほどで急激に体部が広がる。13c~14c 前半の生産である。

1127・1173・1240・1591 は緑釉陶器である。1127 は段皿で、東海産もしくは洛西産とされる。口縁部から体部の上位まで残る胎土は灰白色を呈する。1173 は椀もしくは皿の底部で外底面には高台がある。削りだし高台であろう。洛西産と考えられる。内器面には細描線で花文様を描く。141-I・J-5・6 からの出土である。1240 は皿でほぼ完形に復元できたものである。洛北産と考えられ、口縁が緩やかに外反し、底部は輪状台で平坦に作られる。141-R-9 グリッドの出土である。口径が 14.6cm、底径が 6.4cm、器高が 3.0cm を測る。胎土は灰白色を呈する。外底面には「×」のようなヘラ記号がある。1591 は皿で東海産（窯は K14 × (90)）とされる。141-Q・R-11・12 グリッドから出土する。口縁から底部高台までの破片である。釉の残りがよく、部分的に銀化したような部分もある。復元口径が 15.2cm、復元底径が 7.1cm、器高が 2.6cm を測る。高台は削りだしによる。胎土は灰白色を呈する。

516 は土師器の杯で、141-S・T-5・6 グリッドの包含層Ⅲ層の出土である。口径が 12.95cm、器高が 3.25cm、

底径が 8.2cm を測る。517 は土師器の杯で、口径が 10.2cm、器高が 3.2cm、底径が 6.9cm を測る。底部はヘラ切り離し後ナデである。

518 は土師器の椀で 141-Q･R-7･8 グリッドの出土である。口径が 11.4cm、器高 4.95cm、底径が 5.95cm を測る。

519 は土師器の高台付椀で 141-K・L-7・8 グリッド 4 層の出土である。口径が 12.1cm、器高が 5.3cm、底径が 6.2cm を測る。底部はヘラ切り離し後板目状圧痕である。520 は土師器の高台付椀で、141-R-8・9 グリッド 4 層の出土である。底径は 6.5cm を測る。体部は粘土巻上げによる形状が残る。521 は土師器の高台付椀で、141-Q・R-7・8 グリッド 3 層の出土である。口径が 12.75cm を測る。高台部分が打ち欠かれている。

522・523 は内黒土器の椀である。522 は R-8・9 グリッドのⅣ層からの出土である。復元口径が 12.4cm、器高が 5.3cm、復元底径が 7.0cm を測る。内外器面にヘラミガキが施される。523 は Q・R-7・8 グリッドのⅢ層から出土し、復元口径が 12.8cm、器高が 4.3cm、復元底径が 6.4cm を測る。内外器面にはヘラミガキが施される。524・525 は O・P・Q・R- のⅢ層から出土し、復元底径が 8.0cm を測る。内外器面はヘラミガキ調整が施される。525 は Q・R・S-8・9・10 グリッドのⅢ層から出土しているが、復元底径が 7.4cm を測る。526 は土師器の小皿である。口径が 10.2cm、器高が 1.9cm、底径が 6.4cm を測る。口縁部に煤が付着する。527 は土師器の高台付小皿で、Q・R-7・8 グリッドのⅣ層で出土する。復元口径が 11.6cm を測る。528 は土師器の高台付皿（托）で、O・P-9・10 グリッドの出土である。復元口径が 12.5cm、器高が 2.4cm、底径が 7.4cm を測る。

529 は土師器の高台付鉢である。復元口径が 21.0cm、器高が 5.0cm、復元底径が 12.4cm を測る。内外器面に赤彩が施される。530 は土師器の高台付皿 (大皿) で、Q・R-9・10 グリッドの出土。底径が 10.3cm を測る。高台が長く伸びる。体部は意図的に打ち欠かれている。高台内部を除き、内外器面ともに赤彩されている。531 は土師器の高台付盤で、I･J-1･2 グリッドのⅢ層で出土。復元口径が 25.8cm、器高が 4.35cm、復元底径が 18.6cm を測る。内外器面とも赤彩が施される。内器面口唇部はわずかに返り丸みを帯びる。そのため弱い沈線様の窪みがめぐる。高台は底部の屈曲部よりやや内側に貼り付けられる。532 は土師器の高台付椀の底部で、O･P-9･10 グリッドの出土。復元底径が 11.6cm を測る。内外器面とも赤彩が施される。底部はやや下へ押し出されるようになる。

534 は土師器の杯で、I･J-1･2 グリッドで出土。復元口径が 13.2cm、器高が 3.6cm、底径が 9.4cm を測る。外底面にヘラ記号「X」が刻まれる。535 は土師器の杯で Q･R-11 グリッドで出土。内底面にヘラ書きで「大] と刻まれる。536 は土師器の杯で、Q・R-11・12 グリッド出土である。外底面に刻書がある。

537 は土師器の杯で、S･T-5･6 グリッドで出土し、復元底径が 7.3cm を測る。内外器面には赤彩が施される。外底面には墨書で「大」と書かれる。538 は土師器の杯で、S・T-5・6 グリッドの出土である。復元底径は 9.5cm を測る。内外器面には赤彩が施される。外底面には墨書が書かれる。

545 は須恵器の小型甕で、I･J-1･2 のⅢ b 層の出土である。復元口径は 14.2cm を測る。赤焼け須恵器で、口縁は広く、頸部はわずかにしまり、胴部もさほど広がらない。

548 は土師器の杯で、Q･R-11･12 グリッドの出土。復元底径は 4.6cm を測る。底部は糸切り離しである。551 は土師器の小型壺で、M･N-5･6 グリッドのⅢ層で出土。底部は静止糸切りによる。560 は土師器の鉢で、O・P-9・10 グリッドのⅢ層出土である。

576 は須恵器の円面硯である。K・L-9・10 グリッドⅣ層中から出土。硯部の復元口径は 14.5cm を測る。陸部と海部があり、海部の幅は 2cm ほどである。陸部はかなり使われたようではっきりした磨研が見られる。脚部には方形の透かし部が見られ、想定では 4 ヵ所あったと考えられる。

745 は須恵器の円面硯で、141-G・H-7・8 グリッドⅢ層の出土である。獣脚のつくものと考えるが、脚部自体は失われており、硯部のみの破片である。内部は良く使用されていて、硯面の裏側には灰が凝着しており、焼成時の窯内部での配置方法によるものであろうか。

562 は須恵質の二面風字硯である。O･P-3･4 グリッドのⅣ層から出土。内堤の下端部で研磨痕が見られる。二面の硯面には左側に墨が、右には朱墨が見られる。

563 は須恵器の壺蓋であろうか。Q・R-11 グリッド出土で、復元口径が 7.2cm を測るツマミが付くがどのような形態か不明である。口径の小ささから身の方も口が狭いか。

564 は須恵器の香炉の蓋部と考えられる。I・J-1・2 グリッドのⅢ層中出土である。頂部のツマミはやや高く天井部の途中に低い突帯が巡り､そこから下方へ強く屈曲する。口縁部は欠損しているため不明である。形態的な特徴から香炉としたが、破片が小さいため、これ自体に孔は確認できていない。

567 は須恵器の稜椀で､O･P-5･6 グリッドのⅢ層からの出土である。体部下位から高台部にかけてである。復元底径は 9.8cm を測る。体部の下方に弱い突帯が巡り、稜を作り出す。572 は須恵器の壺の底部片で、I･J-5・6 グリッドの出土である。復元底径が 9.0cm を測る。外底面に刻書で「栄」の字が書かれる。

595 は、扁平な面にかなり使用されているところから砥石であるかと思われる。141-M・N-13 グリッドの SP-850 からの出土である。長さが 10.7cm、幅が 3.4cm、厚みが 0.9cm、重さが 51.2kg を測る。721 は内黒土器の椀で、I・J・-5・6 グリッドの出土である。底径が 6.4 を測る。内器面はヘラミガキによる調整がほどこされる。723 は土師器の高台付皿で M・N-11・12 グリッドⅢ層で出土。復元口径が 12.3cm、器高が 3.4cm、底径が 6.8cm を測る。内外器面は赤彩される。724 は土師器の高台付皿（托）で、G・H-7・8 グリッドで出土。復元底径 11.2cm を測る。外底面に刻書があるが、文字としては不明である。727 は土師器の高台付椀で、141-M・N-9・10 グリッドⅣ層の出土である。口径が 16.1cm を測る。

728 は土師器の鉢で、141-O・P-9・10 グリッドⅣ層の出土である。口径が 13.9cm、器高が 7.0cm、底径が 8.9cm を測る。内外器面に赤彩が施される。731 は土師器の小杯である。141-M・N-11・12 グリッドⅢ層の出土である。内外器面は赤彩され、外器面は丁寧なヘラミガキが施されている。口縁の形状は不明である。

733 は土師器の小型壺で、141-M・N-9・10 グリッドⅣ層の出土である。底径は 4.3cm を測る。胴部の張りは弱く、頸部付近まで残り、頸部より上部は打ち欠いているようである。

735 は須恵器の高台付小型壺である。口縁部が欠損している。141-Q・R-7・8 グリッドⅢ層の出土で、底径が 6.8cm を測る。体部の中位から下位はヘラケズリされる。肩部の上位に沈線がめぐる。

736 は須恵器の横瓮の口縁部と考える。141-K・L-11・12 グリッドⅣ層の出土で、復元口径が 11.9cm を測る。複合口縁を呈し、やや器壁が厚い。

737 は土師器の高杯で、141-M・N-11・12 グリッドの出土。

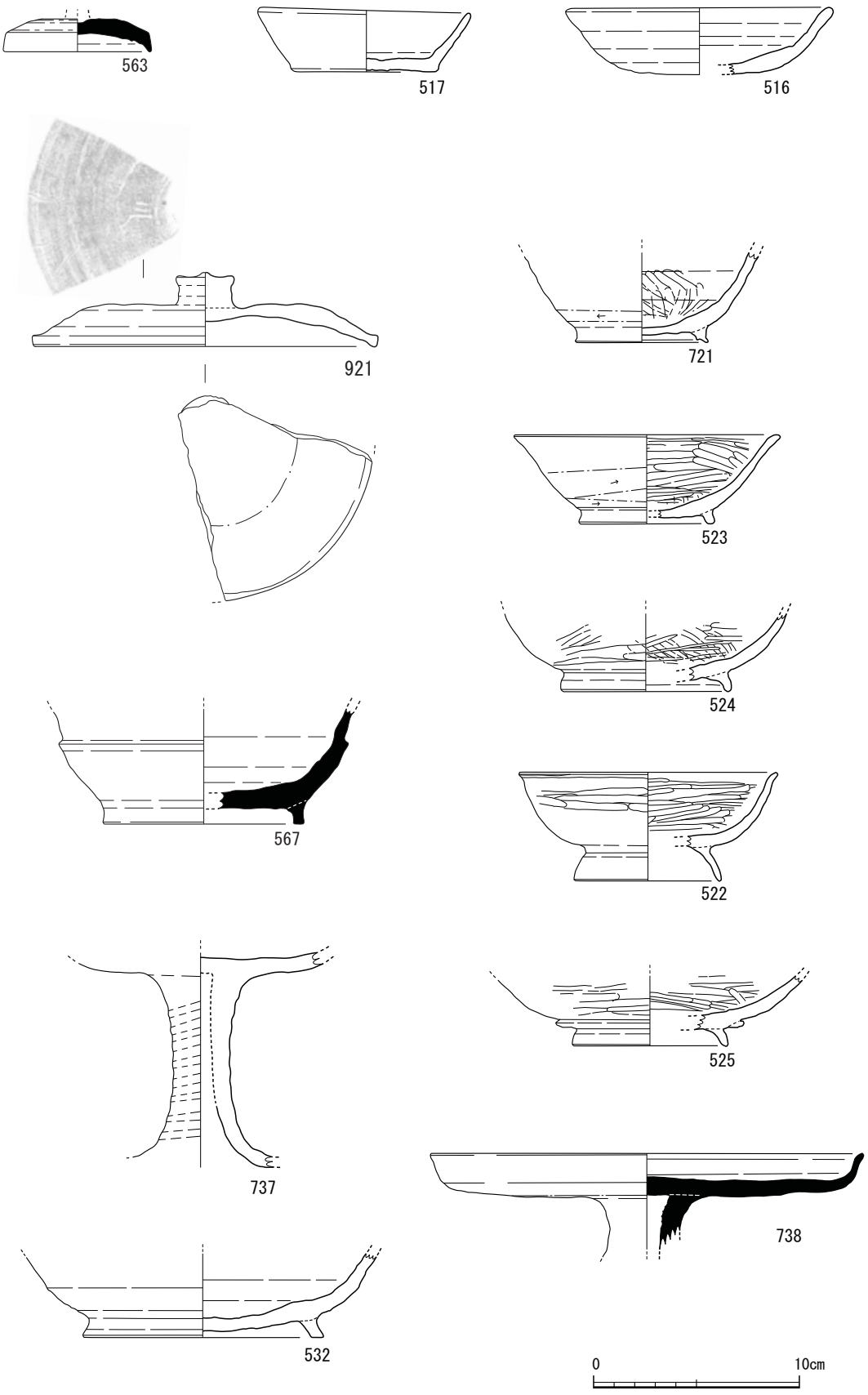
738 は須恵器の高杯の杯部と脚の上部片で、141-Q・R-11・12 グリッドⅢ層の出土。復元口径が　cm を測る。杯部は磨研されているところいから転用硯の可能性がある。

739 は須恵器の高台付鉢としたが、甕の可能性もある。復元底径は 9.0cm を測る。高台は低く、がっちりしている。外器面は縦方向のハケ調整がなされる。

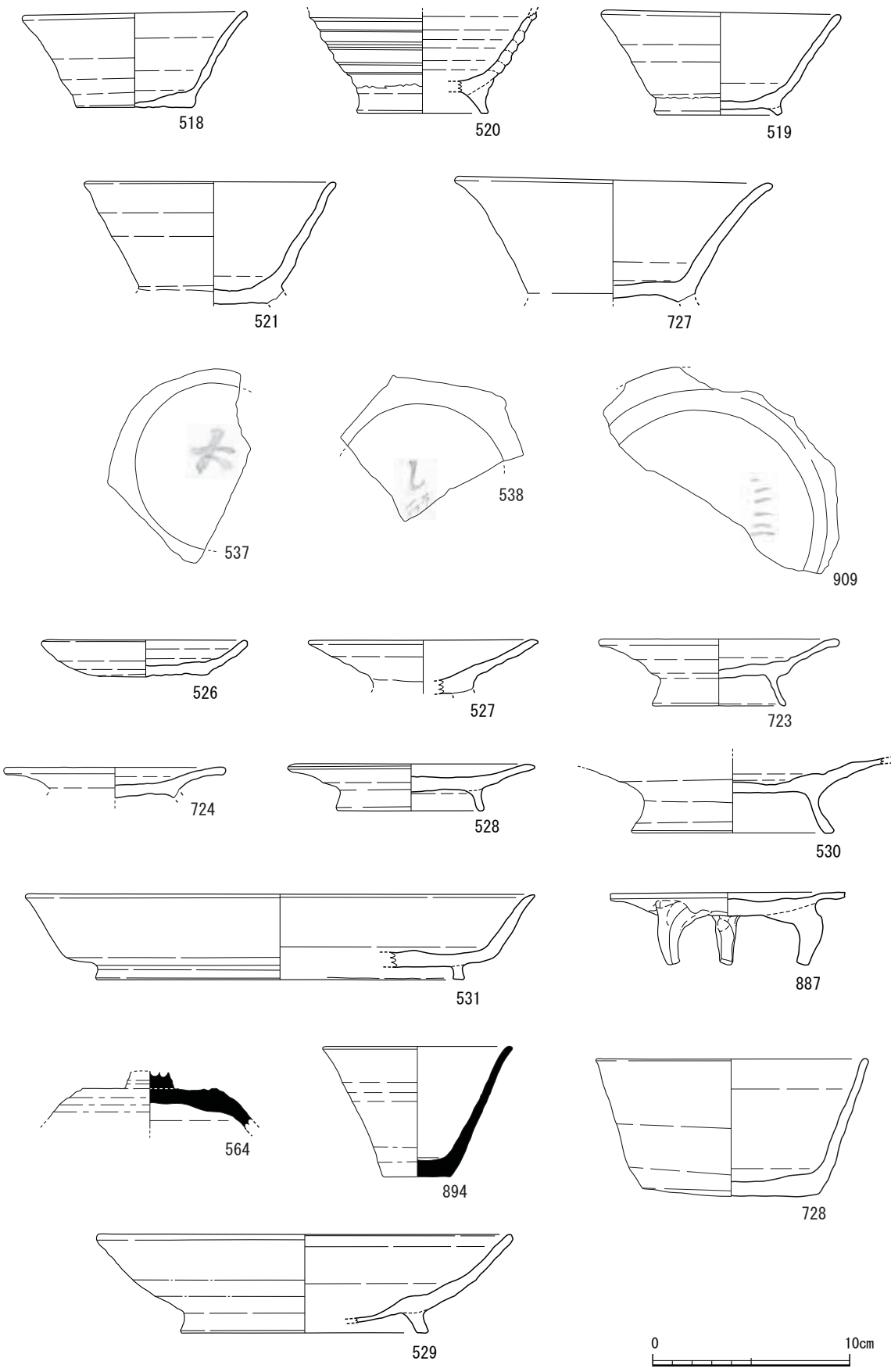
740 は須恵器の甕で、141-M・N-9・10 グリッドⅣ層で、復元口径が 20.6cm を測る。口縁部の屈曲は緩やかで、胴部下位に最大径があるようである。外器面の格子タタキの間隔広く 1cm 四方ほどある。内器面は当て具痕はみえずハケ調整が施される。樺番丈の中世陶の系統になるものか。

741 は須恵器の瓶は、141-K・L-9・10 グリッドⅣ層の出土である。底部は静止糸切り離しがなされる。

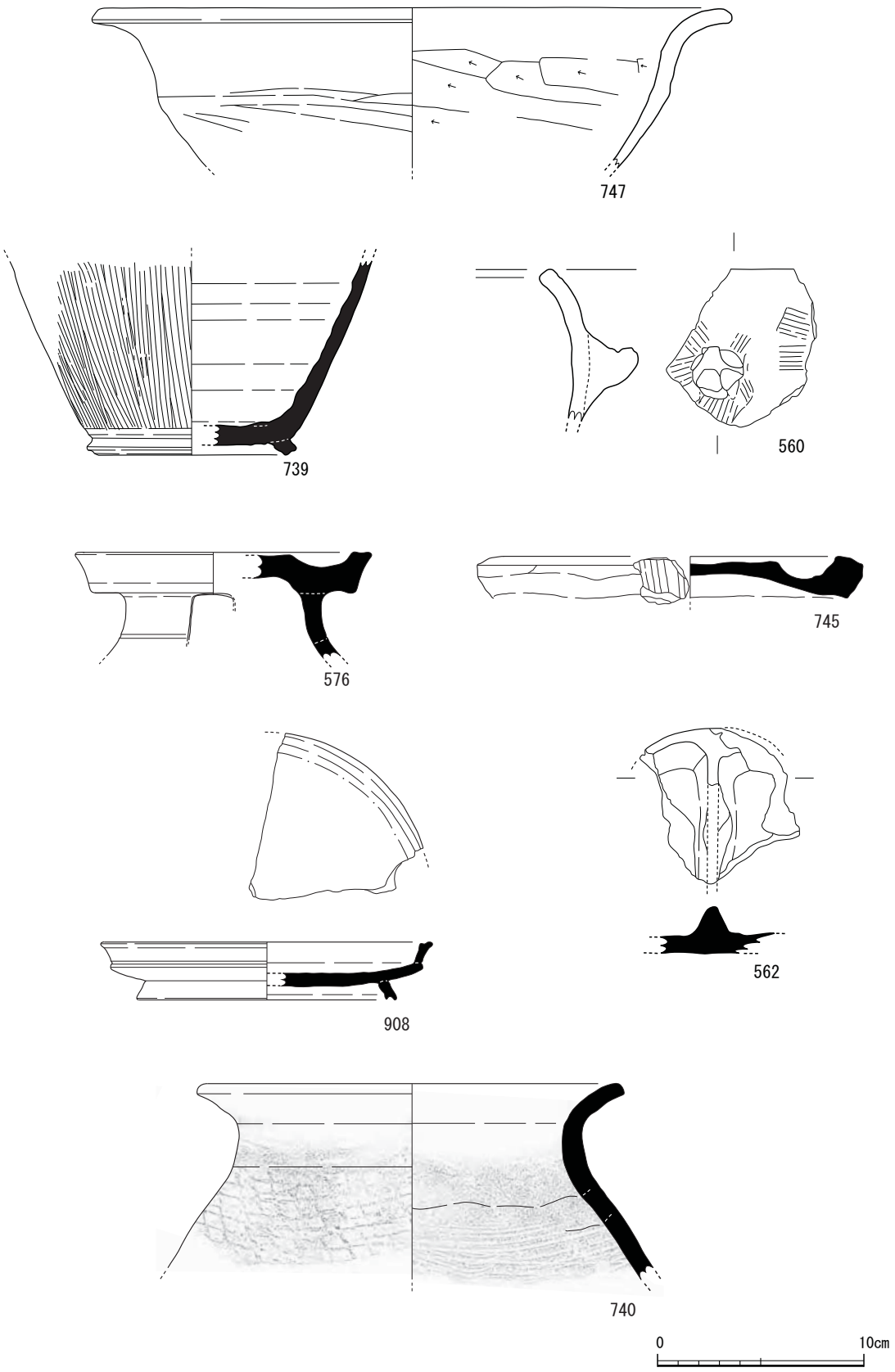
747 は土師器の鍋で、141-M・N-9・10 グリッドⅣ層の出土である。口径が 29.9cm を測る。



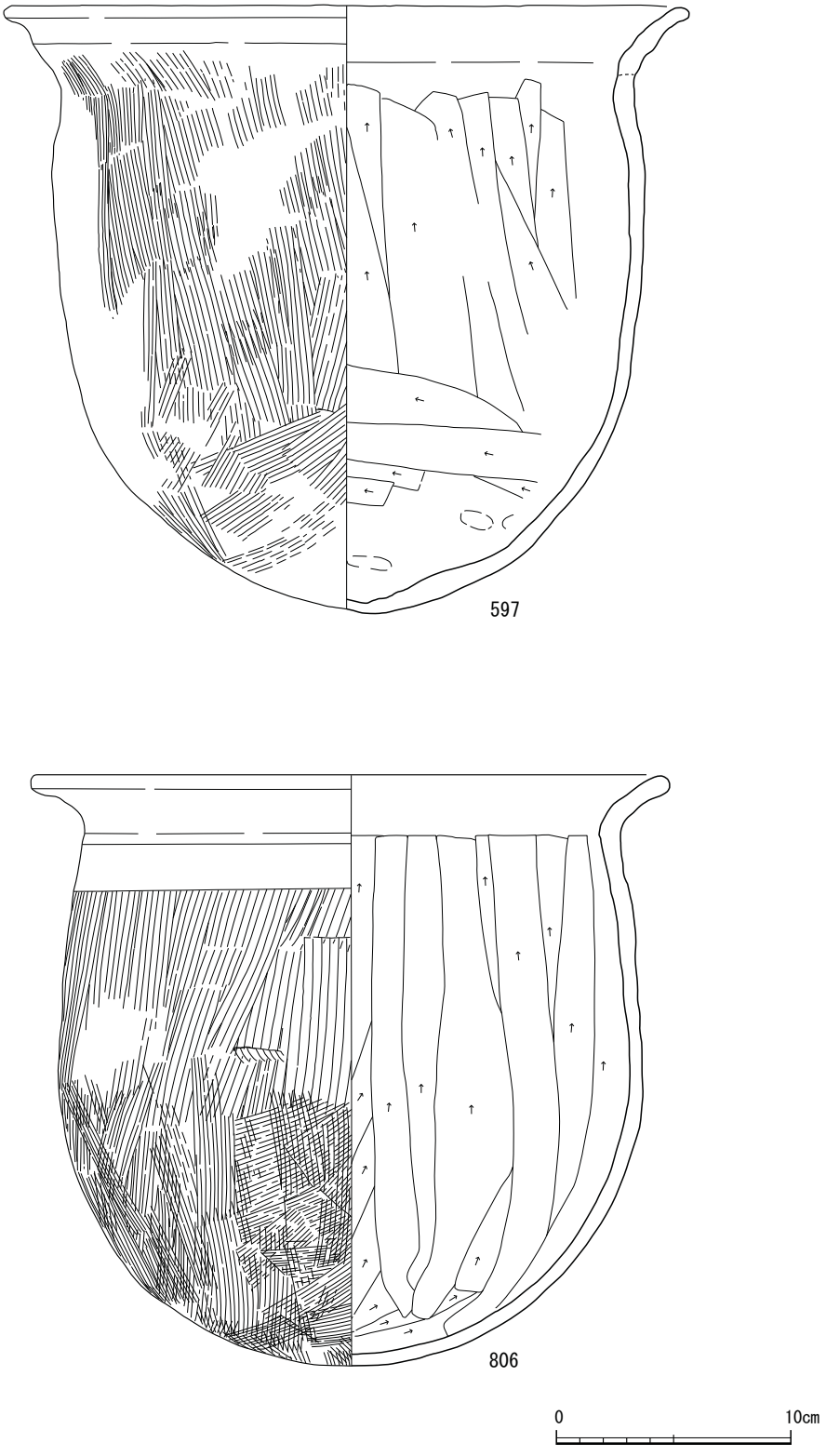
第 170 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図



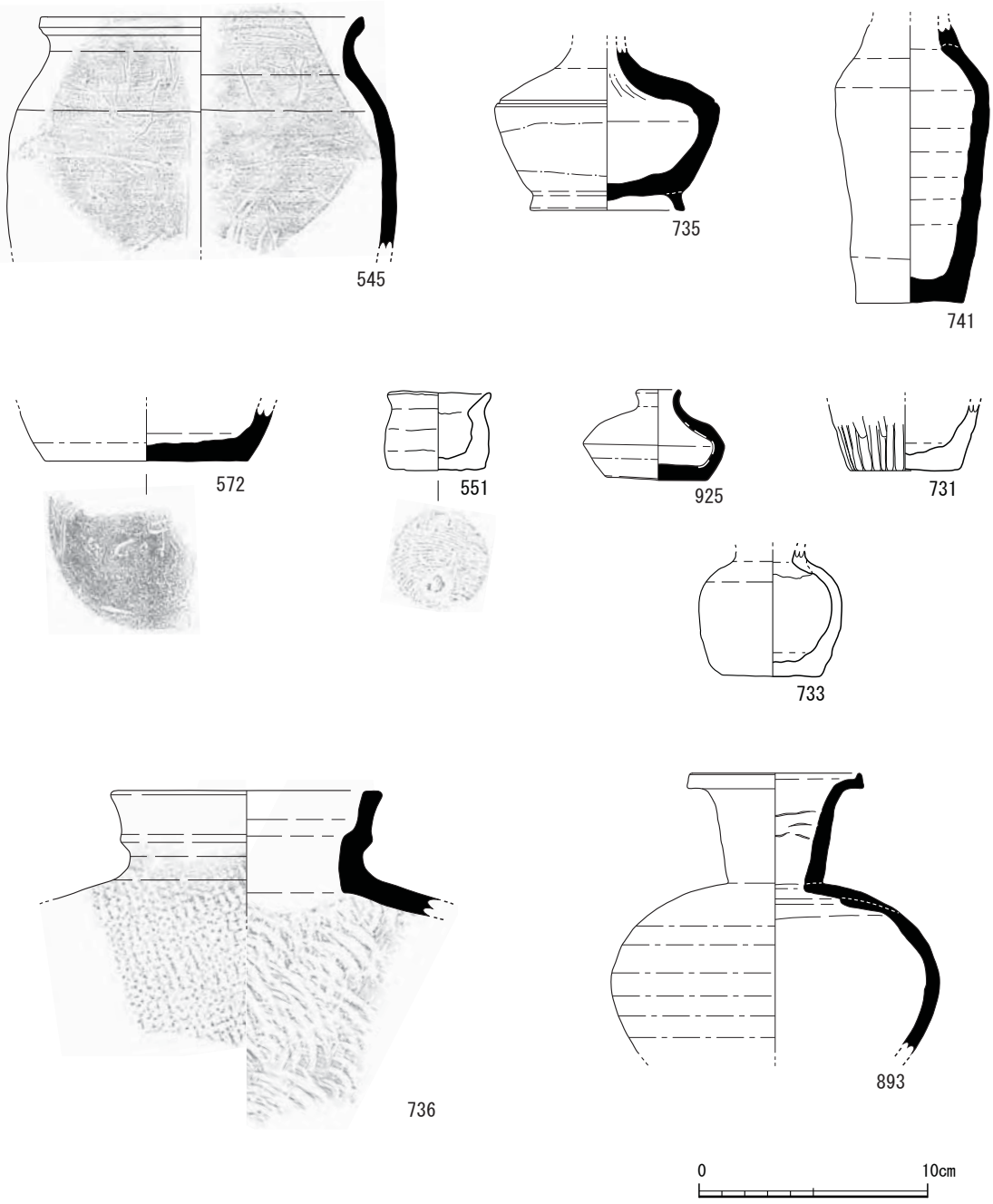
第 171 図　調査Ｉ区内出土遺物実測図



第 172 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図



第 173 図　調査Ｉ区内出土遺物実測図



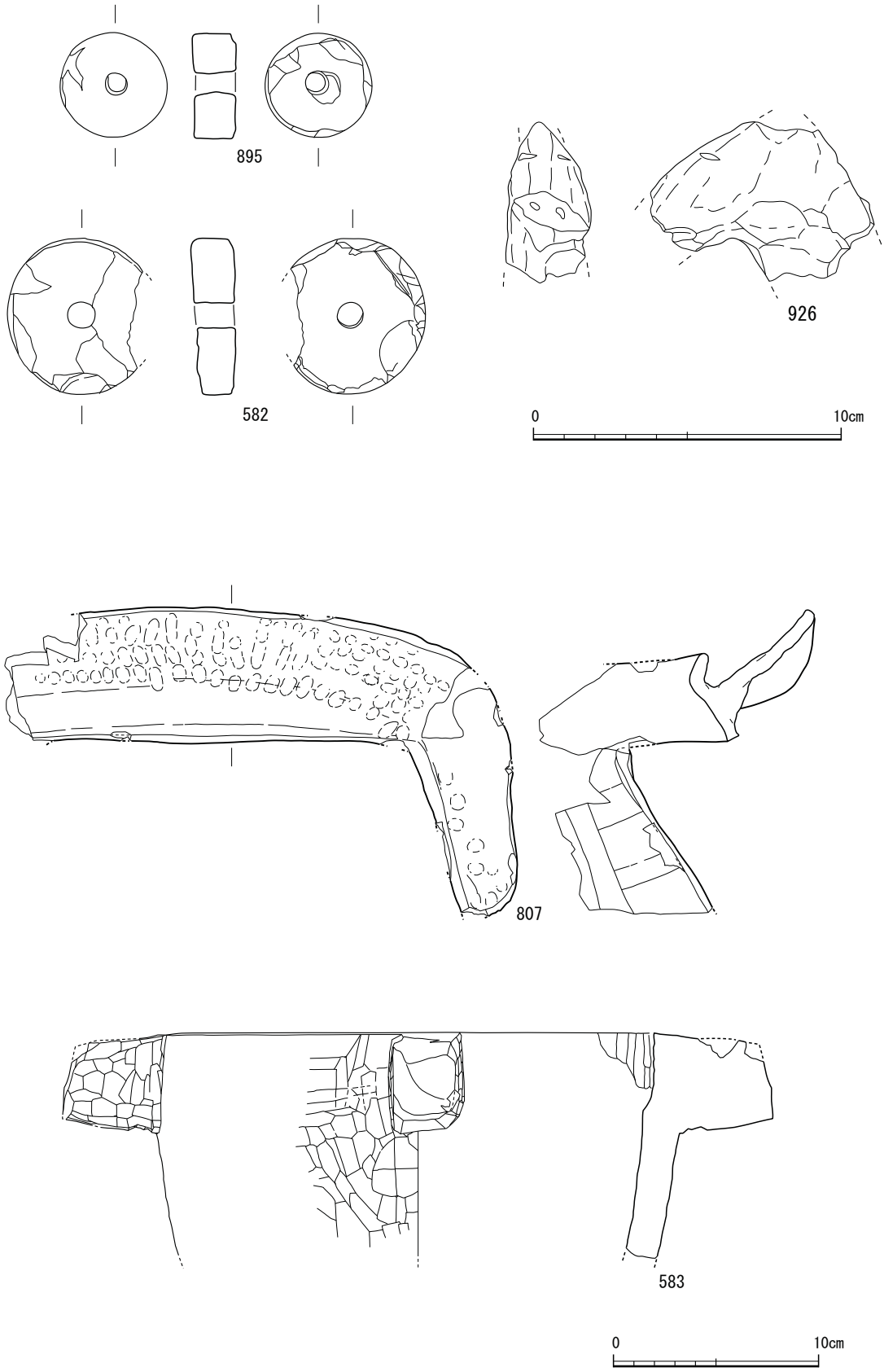
第 174 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図

597 は土師器の甕で、141-I・J-1・2 グリッドで出土。口径が 28.2cm、器高が 25.9cm を測る。ほぼ全体が復元できた。胴部径は口径に比して狭く、底部がやや尖る印象を受ける。

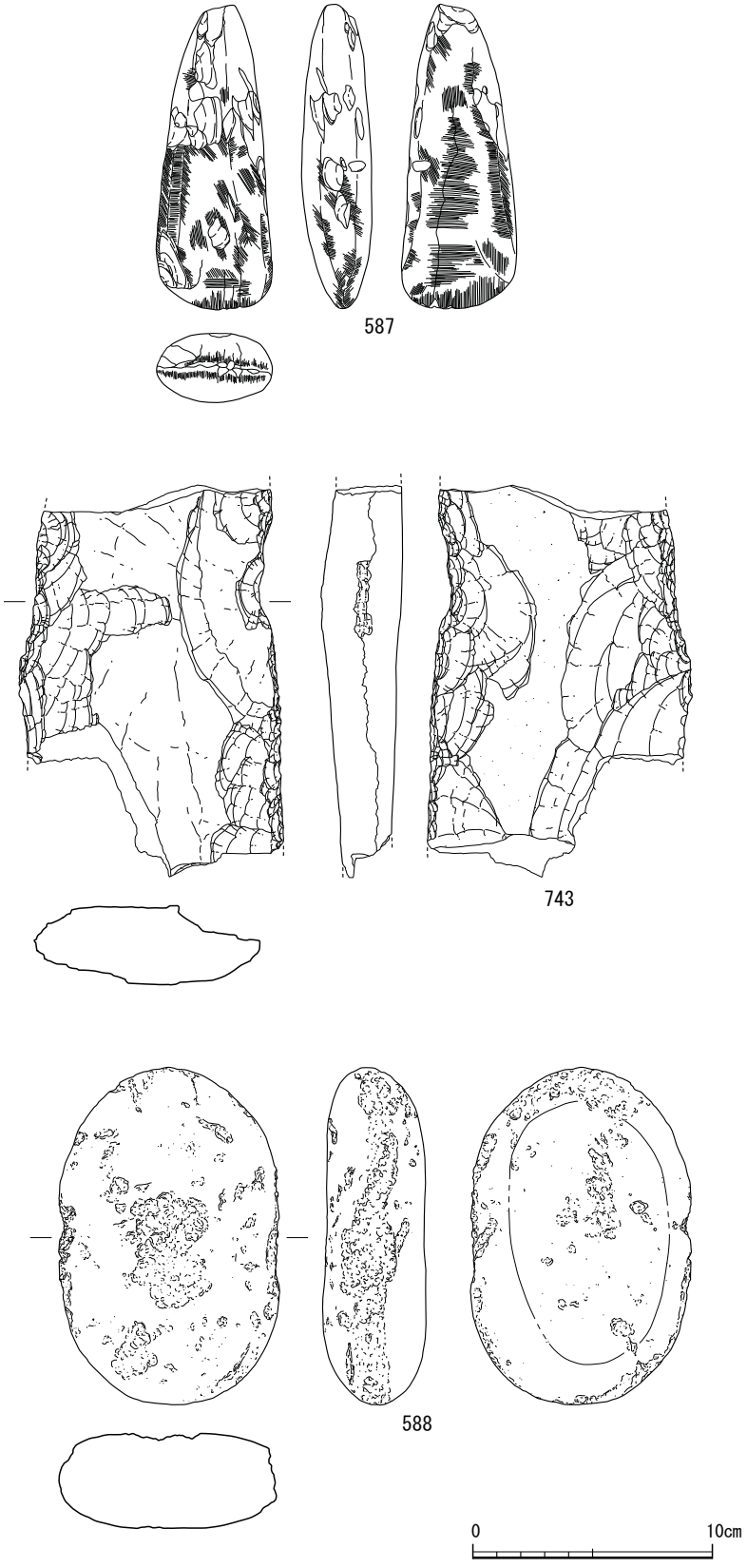
806 は土師器の甕で、141-G・H-7・8 グリッドⅣ層出土である。口径が 26.3cm、器高が 25.2cm を測る。ほぼ全体が復元できたもので、外器面上位はタテハケ、下位はタテハケを主に不定方向のハケが施される。内器面は主として縦方向のヘラケズリである。外器面には煤が付着する。

807 は土師質の移動式カマド片で、外壁の一部と鍔部分が残る。141-M・N-11・12 グリッドからの出土である。器表面には成形時の指頭圧痕がかなり残る。内外器面とも使用による煤が付着している。

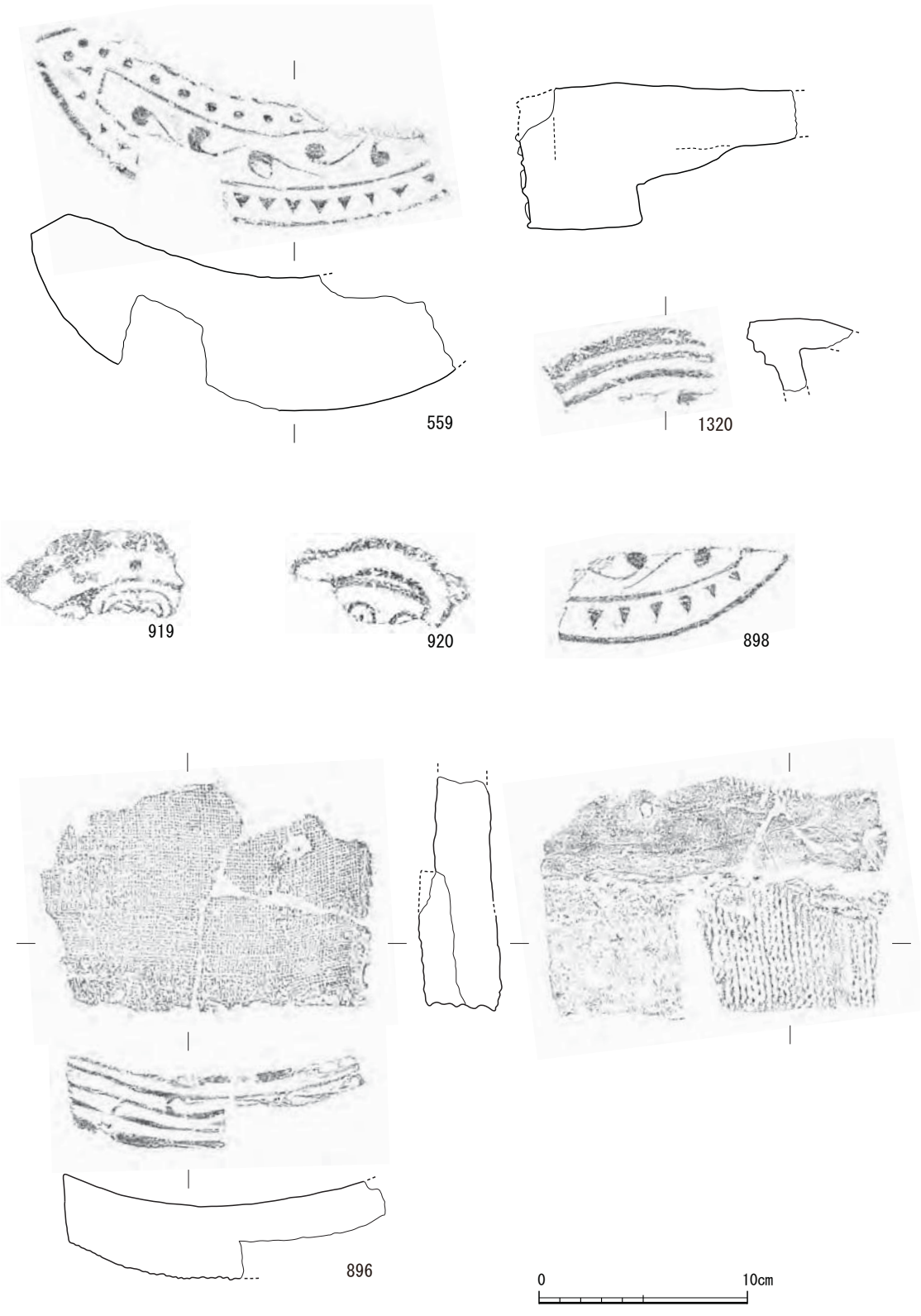
887 は土師器の三足盤で O-4 グリッドの溝状遺構の上層で出土した。浅い皿の外底面に三本の脚を接合させたものである。実際には 2 箇所のみ残り、一箇所は欠損していた。脚は途中で外側に湾曲し設置面は



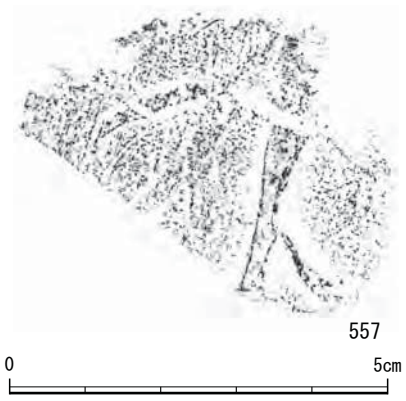
第 175 図　調査Ｉ区内出土遺物実測図 (926 のみ S=1/2)

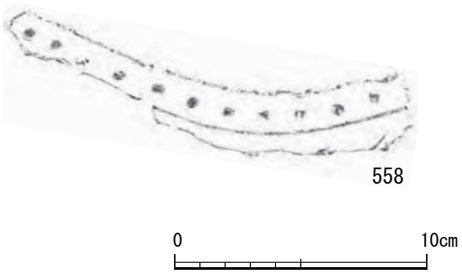


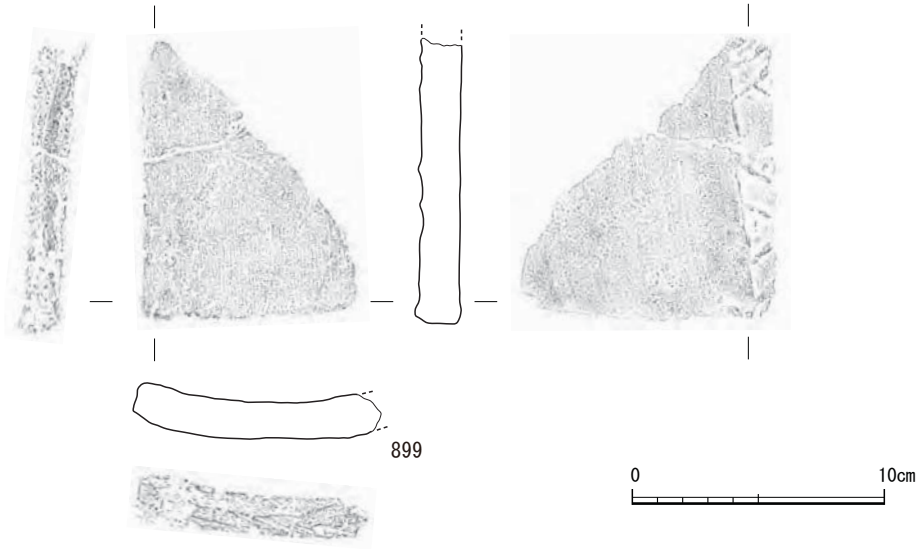
第 176 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図

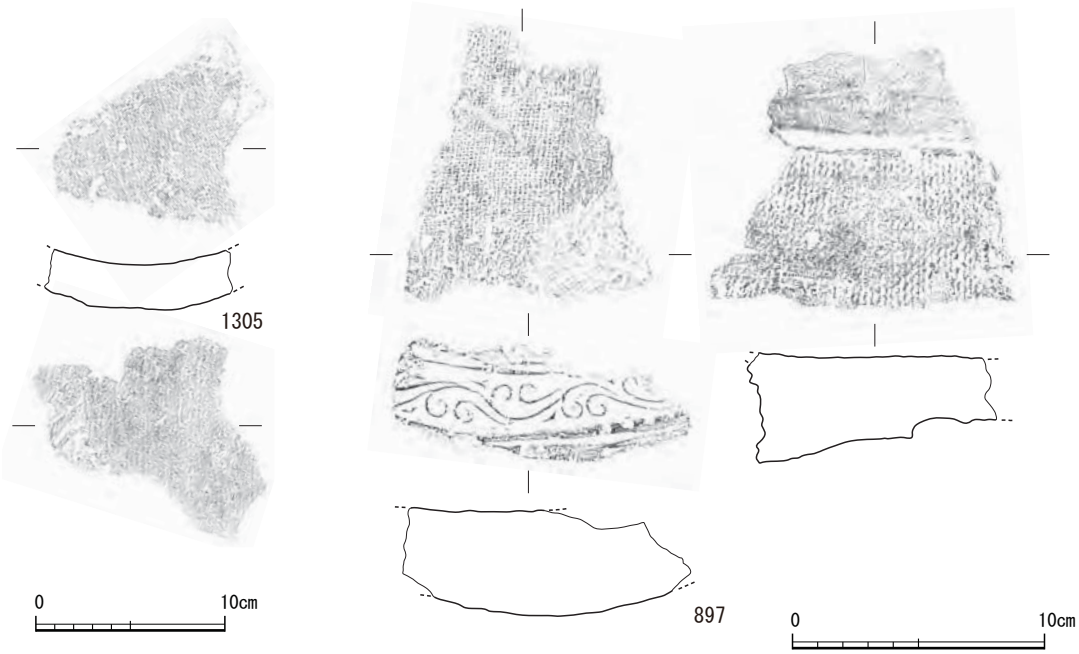


第 177 図　調査Ｉ区内出土遺物実測図

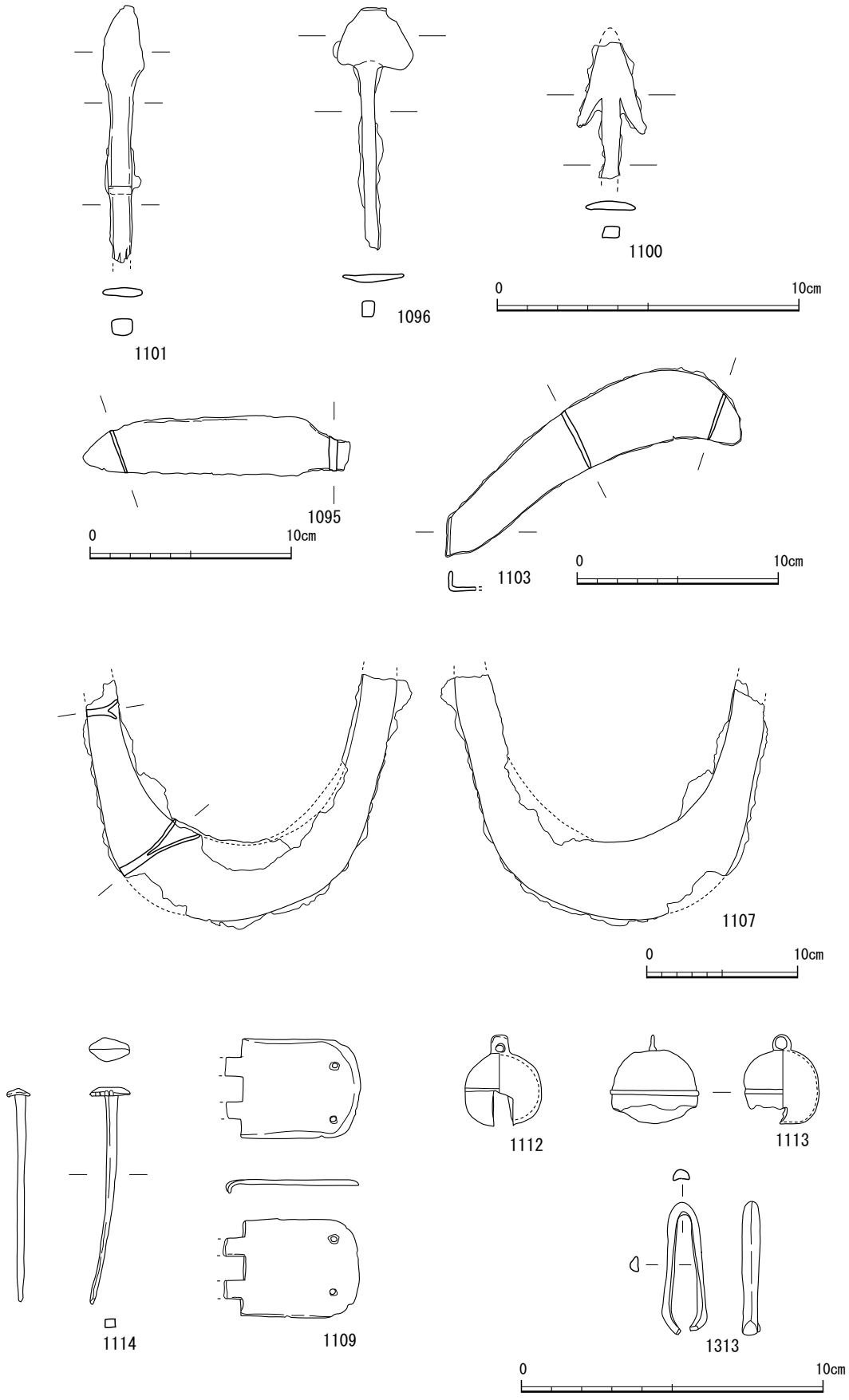




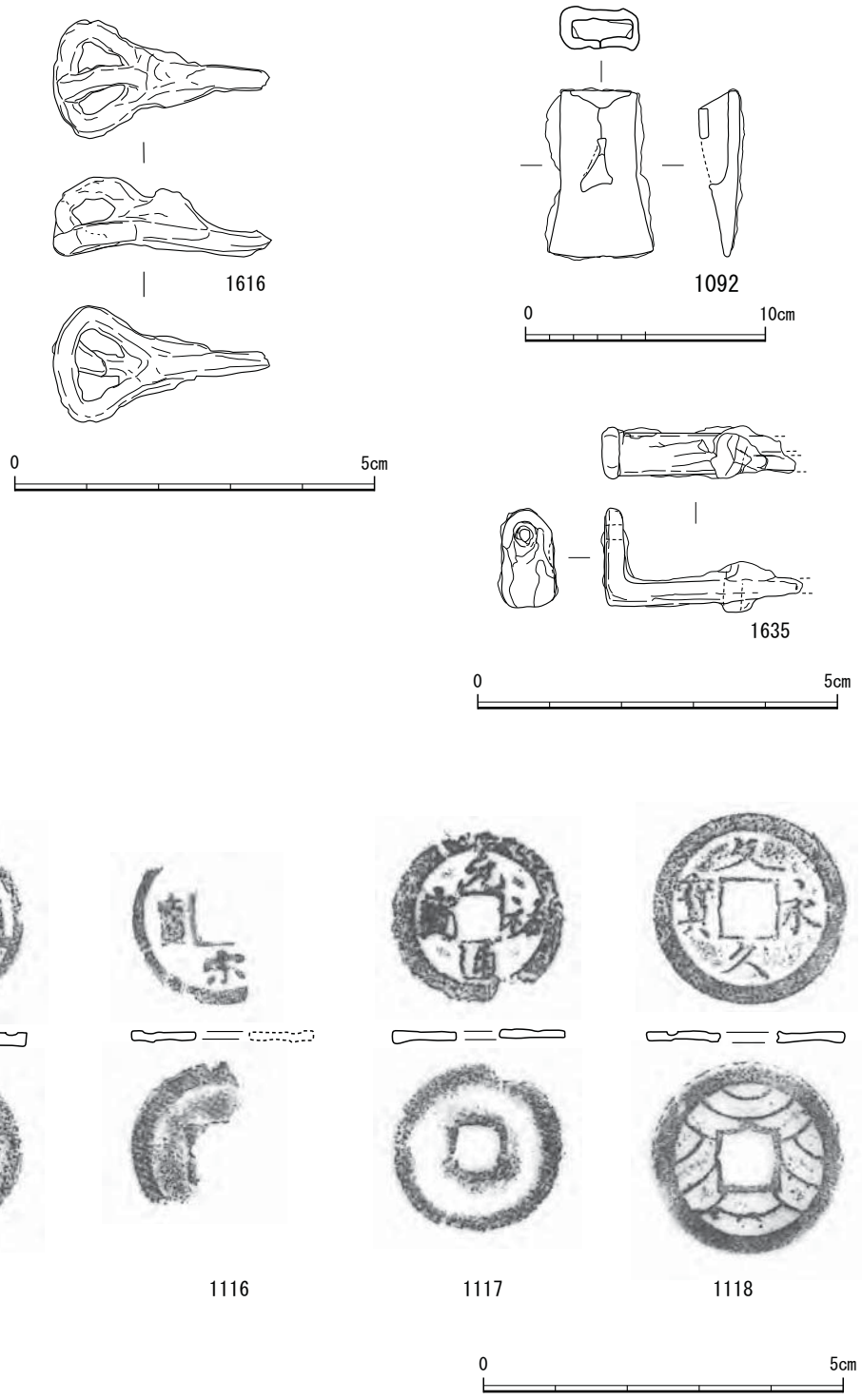




第 178 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図



第 179 図　調査Ｉ区内出土遺物実測図



第 180 図　調査Ⅰ区内出土遺物実測図

小さくなる。口径は 11.9cm、器高は 3.7cm を測る。

892 は土師器の小型椀で、141-O･P‐9･10 グリッドの出土である。復元口径が 8.75cm、器高が 4.2cm、底径が 5.75cm を測る。内外器面に暗文が施される。

893 は須恵器の長頸壺である。口縁から胴部下位まで残るもので、復元口径が 7.8cm を測る。口縁は端部で短く強く屈曲し、大きく反る。胴部は強く胴張りし中位から下位にかけて回転ヘラケズリが施される。894 は須恵器の小鉢で復元口径が 9.6cm、器高が 6.6cm、底径が 3.3cm を測る。体部は底部から口縁に向

けて大きくほぼ直線的に開く。

908 は須恵器の高台付皿で、141-K・L-1・2 グリッドⅢｂ層からの出土である。内器面はよく磨研されており、転用硯として利用されたようである。復元口縁 16.1cm、器高が 2.8cm、復元底径が 12.6cm を測る。内器面の口縁部から外器面にかけて灰が被っている。

909 は土師器の皿で、141-K・L-9・10 グリッドⅣ層の出土である。復元底径は 12.0cm を測る。外器面底部に墨書があるが、文字として、縦方向に「三・三」なのか、単に記号なのか不明である。

910 は土師器の椀で、141-K-11・12 グリッドの出土で、復元底径が 5.0cm を測る。

911 は土師器の杯で、141-M・N-3・4 グリッドからの出土である。口径が 17.0cm、器高が 5.2cm、底径が 11.4cm を測る。912 は土師器の杯で、141-M・N-3・4 グリッドかの出土である。復元口径が 17.6cm、器高が 5.7cm、底径が 12.0cm を測る。内外器に回転による暗文が施される。

913 は土師器の高台付杯で、141-M・N-3・4 グリッドからの出土である。口径が 15.4cm、器高が 4.5cm、底径が 10.4cm を測る。915 は内黒土器の椀で、141-M・N-1・2 グリッドの出土である。口径が 15.6cm、器高が 6.7cm、底径が 8.8cm を測る。内外器面にヘラミガキが施される。921 は土師器の蓋で、141-Q・R-7・8 グリッドの出土である。復元口径が 16.8cm、器高が 3.6cm を測る。内外器面とも赤彩が施される。転用硯として再利用されたようで墨痕が残る。天井部外器面に線刻で「三」と書かれる。

925 は須恵器の小型壺もしくは水滴であろう。141-I・J-7・8 グリッドⅢ層の出土で、口唇部の一部がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。復元口径 1.8cm、器高が 4.0cm、底径が 6.2cm を測る。焼きの特徴から荒尾産であろうか。胴部の張りに比較し、口縁の小ささが目立つ。

926 は土師質の土馬で、141-I・J-3・4 グリッドからの出土である。頭部と首の一部の残る破片でかなり破損している。鼻から口、耳は欠損し、本来の形状は不明である。また、首も何度か打ち欠いたような跡が残る。目は刺突に近い描き方で小さく細い。頭部が 6cm、首が 1.5cm ほど残る。

927 は土師器の鍋足であろう。141-Q・R-9・10 グリッドの出土である。これは手づくねによって成形され、指によって調整が施されている。

次に石製品をいくつか取り上げる。

582 はＩ・J-5・6 グリッド出土の紡錘車と考えられるものである。厚みが 1.45cm、最大径が 5.05cm、重量が 31.7g、穿孔径が 0.8cm を測る。石材は凝灰岩を利用している。895 は 141-K・L-7・8 グリッドの出土した凝灰岩製の紡錘車である。厚みが 1.4cm、最大径が 3.4cm、重量が 19.1g、穿孔径が 0.6cm を測る。583 は滑石製石鍋の口縁部付近である。141-Q・R-7・8 グリッドの出土で、復元口径が 26.0cm を測り、口縁部分に最低２箇所の縦長の把手がつく。把手に廃棄後の加工痕らしきものがみられ、何かに利用として諦めたもののようである。外器面には加工痕がよく残る。形態的な特徴から平安末から鎌倉初期に見られるものと考えられる。

585 は打製石鏃で、141-O・P-7・8 グリッドの出土である。長さが 1.85cm、最大幅が 1.4cm、厚みが 0.35cm、重量が 0.7g、先端角度が 69°、抉り長が 0.4cm、抉り幅が 0.9cm を測る完形品である。石材は安山岩製である。587 は磨製石斧で、141-J・K-7・8 グリッドの出土である。長さが 12.7cm、最大幅が 4.7cm、最大厚みが 2.9cm、重量が 240.8g を測る。蛇紋岩製で丁寧な研摩がなされているが、刃部はかなり使用されたのかつぶれている。刃部は片刃である。

743 は打製石斧で、141-M・N-3・4 グリッドの出土である。頭頂部と刃部が欠損しているため、全体の形状は不明であるが、残存長が 16.35cm、最大幅が 11.05cm、厚みが 3.4cm を測り、重さも 736g あることから、かなり大型品であることが想定できる。いわゆる「石鍬」とお言うべきものであろう。石材は安山岩である。588 は凹石で、平坦面の中央部と側面、頭頂部と下部も敲打痕がある。安山岩製である。

次に出土瓦は遺構に伴っていたが、大部分は包含層からの出土があった。総量的には丸瓦が 682 点、60.693kg、平瓦が 1406 個、104.259kg あった。出土場所に特定部分に集中することはなかった。また、破片自体は大型のものは少なく、全体の 4 分の 1 以下のものが大部分であった。平瓦では凸面には縄目叩きが数量の大部分をしめ、次いでナデによる仕上げが施されるものがある。凹面は糸きり離し痕と布目になるものが多い。丸瓦も凸面は縄目敲きで、凹面には布目が見られるものとナデ消されているものが多かった。

ここでは、軒瓦についてのみ記す。軒瓦自体の出土数は少なくしかも小片が多く、文様の明確なものはさらに少ない。

まず、軒平瓦について述べる。

559・898・558 の軒平は同範もしくは同型式の瓦である。熊本市教育委員会編の『二本木遺跡群Ⅱ - 二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書 -』（2007 年）（以下「市教委 13 次調査報告」という）の瓦分類によれば、軒平瓦 7 類になる。時期の比定は不明となっている。唐草文が簡略化され珠文化し、外区の明瞭な珠文・鋸歯文に比べバランスがあわないことから復古的なものとし、時期的には下るとの予想がなされている。

897 の軒平は、市教委 13 次調査報告にいう軒平瓦 5 類に似るが、より簡略化され、顎部は貼り付けによるもので、しかも文様も端の方はずれていることから別のものである可能性がある。

896 の軒平は唐草文が明瞭で市教委分類の軒平瓦 2 類に当たる。この瓦は池辺寺跡軒平瓦Ⅵ類と同范で 9 世紀前半に位置づけられる。二本木遺跡群では最多出土瓦であるという。

次に、軒丸瓦について述べる。

919 は軒丸瓦 2 類にあたり、920 は単弁の蓮華文の簡略化されたものと考えられ、軒丸瓦 6A 類にあたるようである。1320 は外区のみであるため、不明確であるが二重圏であることから軒丸瓦 6 類の範疇に当たるとしておく。

557・899・1305 は葉脈文様の入る瓦で、いずれも軒平瓦である。文様の入れ方・位置は様々であるが、凸面に入れられることから使用方法は表にみえる位置に配置されたものと考える。

金属製品には鉄製品と銅製品がある。数量的には鉄製品の方が多いが、銅製品も独特な製品がある。まず、鉄製品からみていく。

1101・1096・1100 は鉄鏃である。1101 は柳刃状のものと考えるがやや片刃気味である。1096 は三角形鏃の中に入る。1100 は腸抉形のものである。頂部が欠損している。

1103 は鉄鎌で、1095 は包丁か。

1107 は鋤先である。141-J-8・9 グリッドⅢ層からの出土である。長さが 16.3cm、幅が 5.2cm、最大厚みが 0.6cm を測る。重量が 285.2g を測る。形状は全体的に残る。

1616 は銙具に似た形をしていることから帯金具と考えたが、果たしてそれでよいかは不明である。

1092 は鉄斧で、141-K・L-7・8 グリッドⅢｂ層中からの出土である。長さが 7.1cm、最大幅が 4.3cm、厚みが 1.2cm、重量が 109.8g を測る。

1635 は錠前（牡金具）で 141-Q・R － 7・8 グリッドⅢ層の出土である。基部付近のみが残存し、施錠部は欠損している。バネ軸が 2 本で横に 2 列に並ぶ。バネは欠損しているが、縦に並ぶものである。弦通し孔は錆でふさがっているが、痕跡から径 0.5cm ほどある。弦受け部の長さは 4.1cm、区の長さが 0.6cm を測る。バネ部は 1.3cm ほど残存し、バネ自体は残っていない。重さは 24.3g を測る。形態上合田分類の B 群 1 類になる。

次に銅製品をみてみる。

1114 は釘と考えるものである。141-O･P-9･10 グリッドの出土である。長さは 7.2cm あり、やや曲がっている。釘の頭は横長につぶしている。釘本体は 0.4cm × 0.3cm を測る。重さは 4.0cm を測る。

1109 は銙具の一部である。内側のものか外側のものかは不明である。

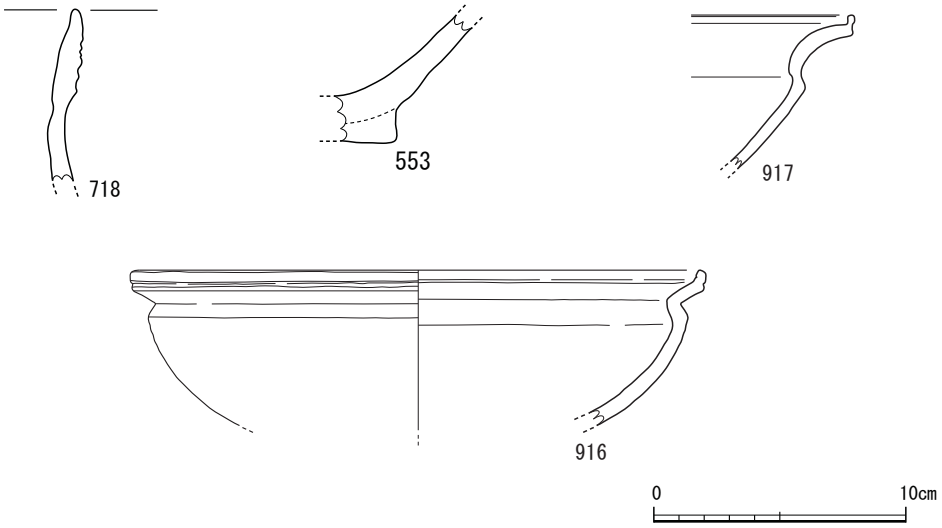
1112・1113 は銅鈴で、形態がやや異なるが、いずれも鋳造によるもので型の合せが鋳あがり後の調整が十分でなかったため痕跡が残る。中央部に横方向の突帯がめぐる。1112 は銅の腐食した状況であるが、1113 は表面の錆を取り除くと本来の地金が見えてきた。両者の器壁の厚みを比べるとやや 1113 の方が薄く作りも丁寧な印象を受ける。

1313 は帯金具かとしたが、別の道具類の飾り金具であろうか。青銅製である。

1115・1116・1117・1118 は銭である。115~1117 は渡来銭もしくは模鋳銭と考えられる。1118 は幕末に鋳造された和銭である。

1115 は「開元通寶」（初鋳 : 唐・621 年）で、141-I・J-1・2 グリッドからの出土である。精査中に見つかったものである。1116 は「皇宋通寶」（初鋳 : 北宋･1037 年）で、141-K･L-5･6 グリッドの出土である。

1117 は「元祐通寶」（初鋳 : 北宋･1086 年）で表層から採集したものである。1118 は江戸時代末の「文久永寶」（初鋳 :1862 年）で 141-M・N-7・8 グリッドの出土で、近世の溝状遺構か掘り込みに含まれていたと考える。ただ、出土遺構を明確にとらえていない。



第 181 図　調査Ⅰ区内縄文土器遺物実測図

・縄文時代の遺物

縄文時代晩期の遺物は時期的には逆になるが、遺構が確認できず、出土層位が重なる点を考慮し、従的な扱いにした。本来の縄文時代の層は薄くではあるが、調査区西側で確認している。暗褐色層で焼土粒・炭化物をわずかに含む層である。遺構の可能性を考慮し追求したが不明確なままであった。その付近でやや大きめ破片が出土している。以下遺物についていくらかふれる。

718 は深鉢土器で 141-M・N-1・2 グリッドで出土した。外器面には貝殻条痕が施される。916 は浅鉢型土器で M・N-1・2 グリッドのⅢ層出土である。内・外器面はミガキ調整が施され、口縁部に沈線が二条施される。内外器面とも黒色を呈する。917 は浅鉢型土器で 141-M・N-1・2 グリッドⅢｂ層出土である。内外器面ともミガキが施される。口縁に沈線が施される。553 は深鉢型土器で 141-Q・R-3・4 グリッドのⅣ層中で出土した。外器面は条痕後にナデで調整される。内器面もナデ調整である。556 は深鉢型土器で 141-O・P-5・6 グリッド出土である。内外器面はミガキ調整が施され、焼成も良好である。口縁部に沈線が残る。719 は縄文時代晩期の深鉢型土器で M・N-1・2 グリッドから出土している。内外器面ともミガキ調整が施される。口縁部に沈線が巡る。889 も同じく縄文時代晩期の浅鉢型土器で、141-M・N-7・8 グリッド出土である。内外器面ともミガキ調整が施される。焼成は良好である。口縁部に沈線が入る。890 は縄文時代晩期浅鉢で、O・P-7・8 グリッドから出土したものである。器表面は丁寧なミガキで調整され焼成も良好である。口唇部に沈線を有する。918 も同じく縄文時代晩期の浅鉢で、141-J-8・9 グリッド出土である。器表面は丁寧なミガキで調整され焼成も良好である。口縁部に沈線が入る。

第 3 節　調査 II 区の遺構と遺物

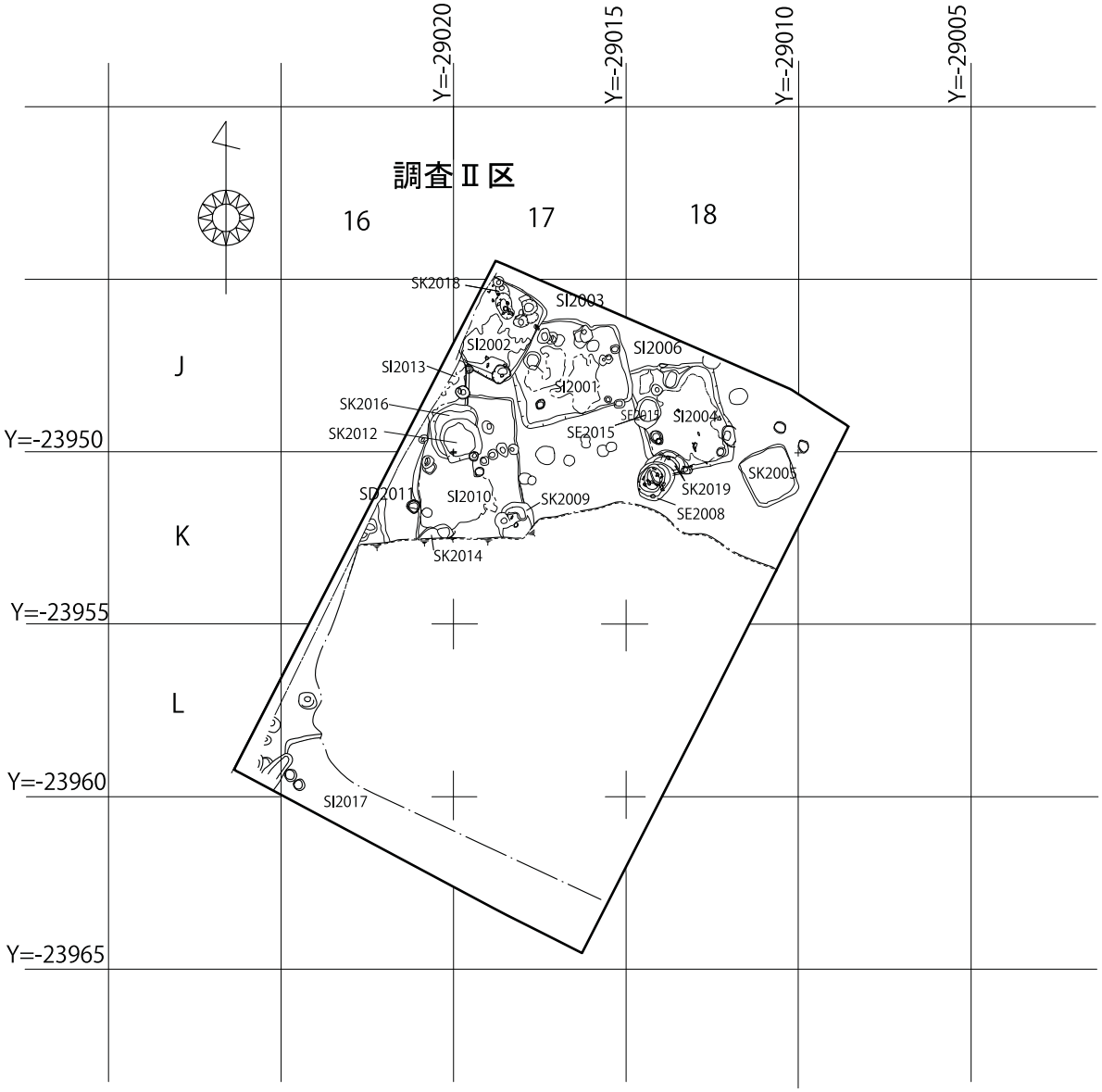
(1)　調査 2 区の概要

この調査２区は､すでに述べたように駐輪場予定地に当たるところである。調査 1 区のほぼ西側に当たる。

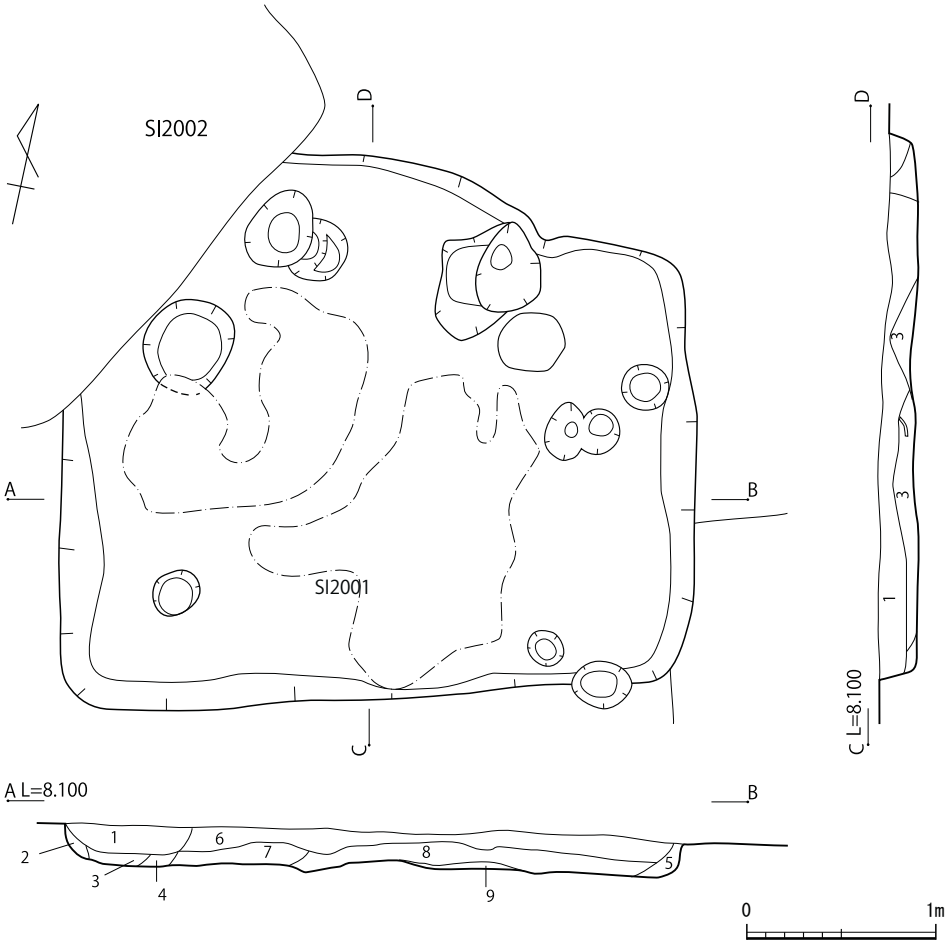
調査区内の 2/3 ほどが､月星化成の建物撤去時､もしくはそれ以前の建物の基礎があったために破壊され､調査可能な範囲の大部分は北側の一角に限られた（第 182 図)。南側の僅かな部分にも遺構を検出したが､竪穴建物の一部もしくは溝状の遺構であった。

遺構としては竪穴建物、土坑、溝状遺構、井戸がある。いずれも切り合うものがほとんどで、単体で出土しているものはない。しかも埋土の状況が非常に似通っているため、遺構の形状や切り合い関係を見分けるのに時間がかかった。

遺構名については先に述べたように調査時、S-1 から一連番号としていたところを調査 I 区と同じ遺構名としないために S-1 を S-2001 というように 2000 番を足して遺構番号とするように報告書作成段階で変えることとした。このことは 1 次整理では確認していなかったため、旧番号になっているが、今後は読み替えていくこととする。



第 182 図　調査 II 区遺構配置図



1層	黒褐7.5YR3/2	シルト	しまる	粘性なしカマド粘土粒子を多量に含む土器含む
2層	黒褐10YR2/3	シルト		硬質灰色の粘土ブロック含むカマドの粘土・焼土粒子含む
3層	黒褐7.5YR3/2	シルト		わずかに粘性あり焼土粒子とカマド粘土含む
4層	黒褐7.5YR2/2	シルト		わずかに粘性あり焼土粒子・カマド粘土粒子含む
5層	黒褐10YR2/3	砂質土	しまりなし	混じりなし
6層	黒褐7.5YR2/2	土	硬質でしまる	シルトに近い焼土・粘土粒子(カマド)
				炭(5mm～2cmの大きめのもの)を含む
7層	黒褐7.5YR2/2	シルト	ややしまる	
8層	黒褐10YR2/3	シルト		灰色の粘土ブロックを含む焼土粒子(1mm)わずかに含む
9層	黒褐10YR2/2	砂質土	しまりなし	粘土ブロックをわずかに含む

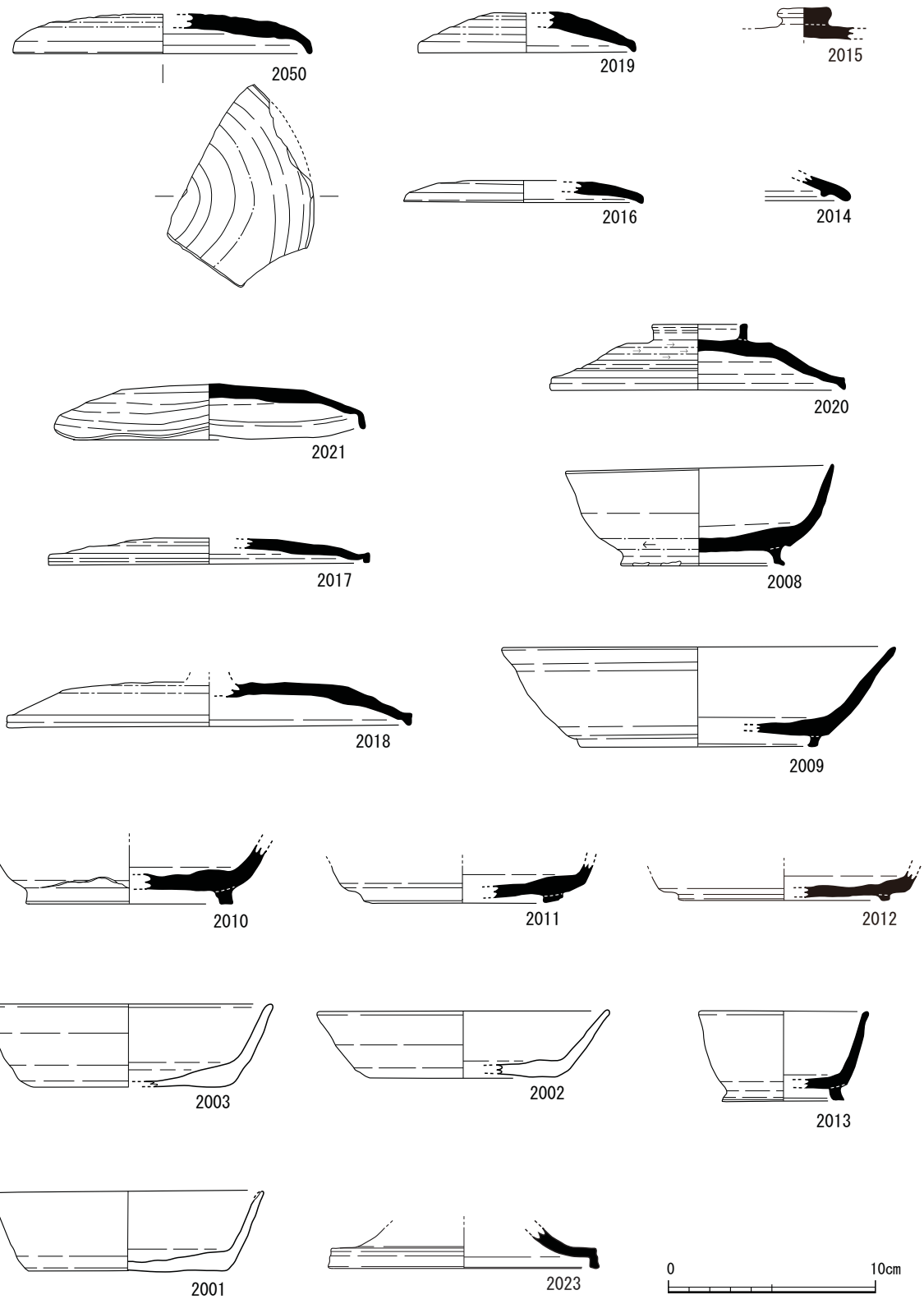
第 183 図　II 区 SI2001 実測図

(2) 竪穴建物

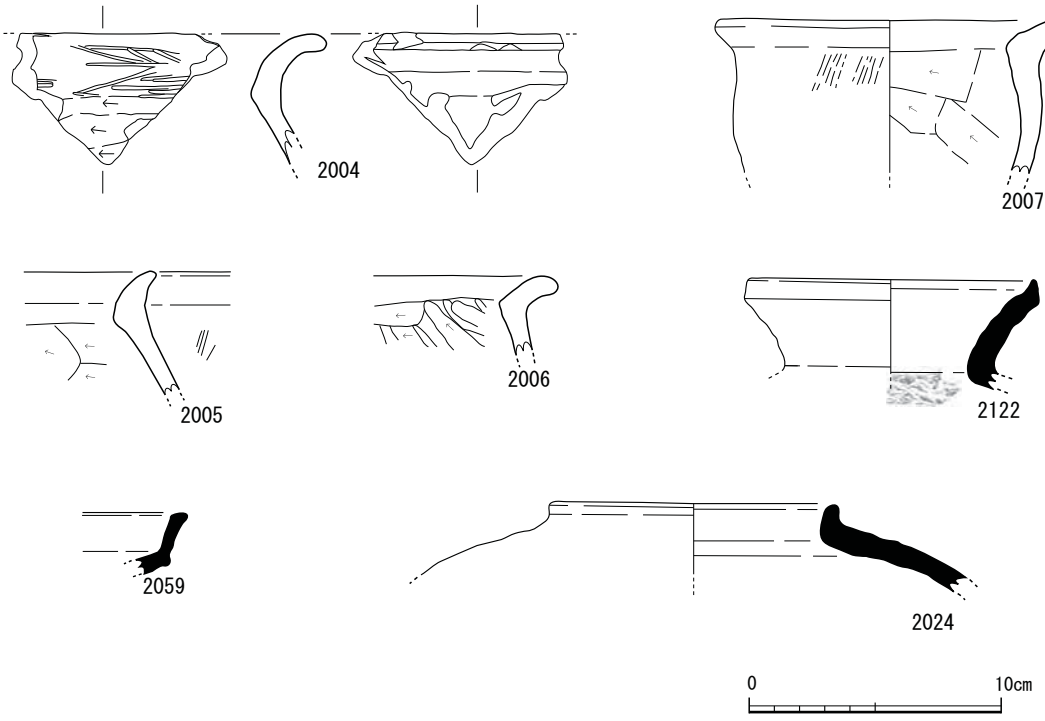
調査Ⅱ区で検出した竪穴建物には、2001・2002・2003・2004・2006・2010・2013・2017 の 8 棟がある。全てが切り合い関係にあり、限られた調査区内で形状を掴むのは容易ではなく、完全に大きさや形態を掴めないものが多かった。大部分は主に屋内に作りつけのカマドを有するものであった。以下に各遺構について個別に述べる。

・SI-2001

[遺構状況]　140-J-17・18 グリッドで検出した。S-2002 によって切られ、S-2004 を切っている。この遺構は調査時に 2 棟の可能性を予想し、詳細に遺構の検討を行った。切り合い関係の有無は土層断面・平面の精査、床面の状況を確認していった。結果的には土層で違いはなく、平面での埋土の違いも分からず、床面では硬化面が切れ目なく続くということを最終的に確認し、2 つの遺構の切り合いではなく一棟の建物と



第 184 図　II 区 SI2001 出土遺物実測図



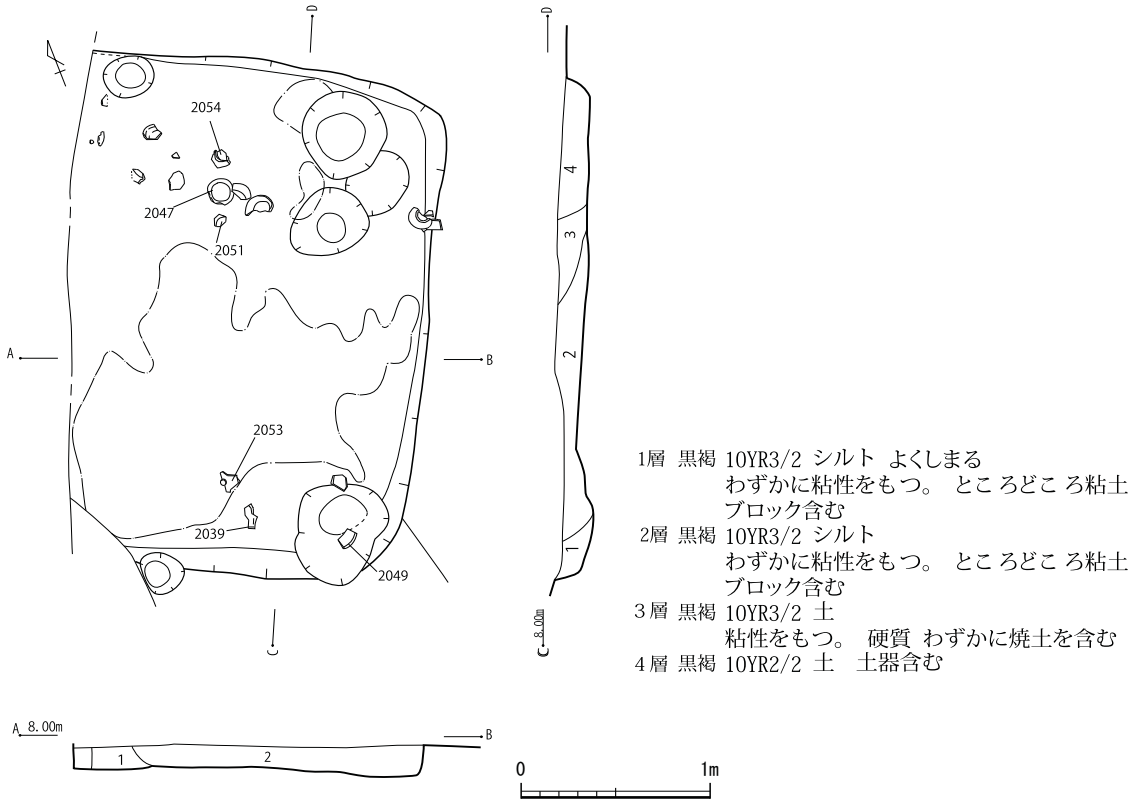
第 185 図　II 区　SI2001 出土遺物実測図

考えた。このような建物の形状の不整形さの表れは上部構造が不明のため確証はないが、当初の建物が生活状況の変化などから建物を拡張した結果ととらえた。それは床面の連続状況が傍証となろうか。

確認時の竪穴規模は東西が 5m ほど、南北が 4m ほどを測る。確認面からの床の掘り方までの深さが 20cm ほどを測る。床面は貼り床がなされている。カマドは破壊され、しかも痕跡を残してもいなかったので、どこにあったのか不明である。埋土に粘土粒や焼土など含まれているのであったのは確かである。出土遺物は確実にこの遺構に伴うものは確認できなかったが、廃絶後の埋設物の一つと考え、上限は 7 世紀後半から下限で 8 世紀の後半というところであろうか。

[出土遺物]　この遺構からは土師器・須恵器の杯・杯蓋、鉢、壺、甕など様々な機種が出土し、主な遺物と特徴的な遺物を選び図化した。

2001 は土師器の杯で、口縁の 1/4 が残る。復元口縁が 13.0cm、器高が 3.8cm、復元底径が 9.4cm を測る。内器面に煤が付着。2002 は土師器の杯で、復元口径が 14.0cm、器高が 3.2cm、復元底径が 8.8cm を測る。2003 は土師器の杯で底径の 1/2 が残存する。復元口径が 14.0cm、器高が 4.0cm、復元底径が 10.3cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2004 は土師器の甕で、口径 1/6 が残る。外器面が赤彩される。2005 は土師器の甕で口径の 1/8 が残る。2006 は土師器の甕、1/8 が残る。2007 は土師器の小型甕である。胴部径は口縁より狭い。2008 は須恵器の高台付杯で完形である。口径は 13.0cm、器高が 4.8cm。底径が 8.0cm を測る。底部付近は回転ヘラケズリがなされ、それに高台が貼り付けられる。高台端部は細かくつまみあげられる。2009 は須恵器の大型の高台付杯で、復元口径が 19.0cm、器高が 4.8cm、復元底径が 11.3cm を測る。2010 は須恵器の高台付杯で底部付近の破片である。復元底径が 10.0cm を測る。高台の貼り付け時の粘土残跡が高台貼り付け部に残る。2011 は須恵器の高台付杯で、復元底径が 9.6cm を測る。高台の断面形状は低い。2012 は須恵器の高台付杯である。復元底径が 10.2cm を測る。非常に高さの低い高台が貼り付けられている。2013 は、須恵器の小杯である。復元口径は 8.0cm、器高は 4.3cm、復元底径は 6.0cm を測る。2014 は、須恵器の杯蓋である。ごく小片で浅い返しをもつもので、この遺構より古い時期のもので 7 世紀

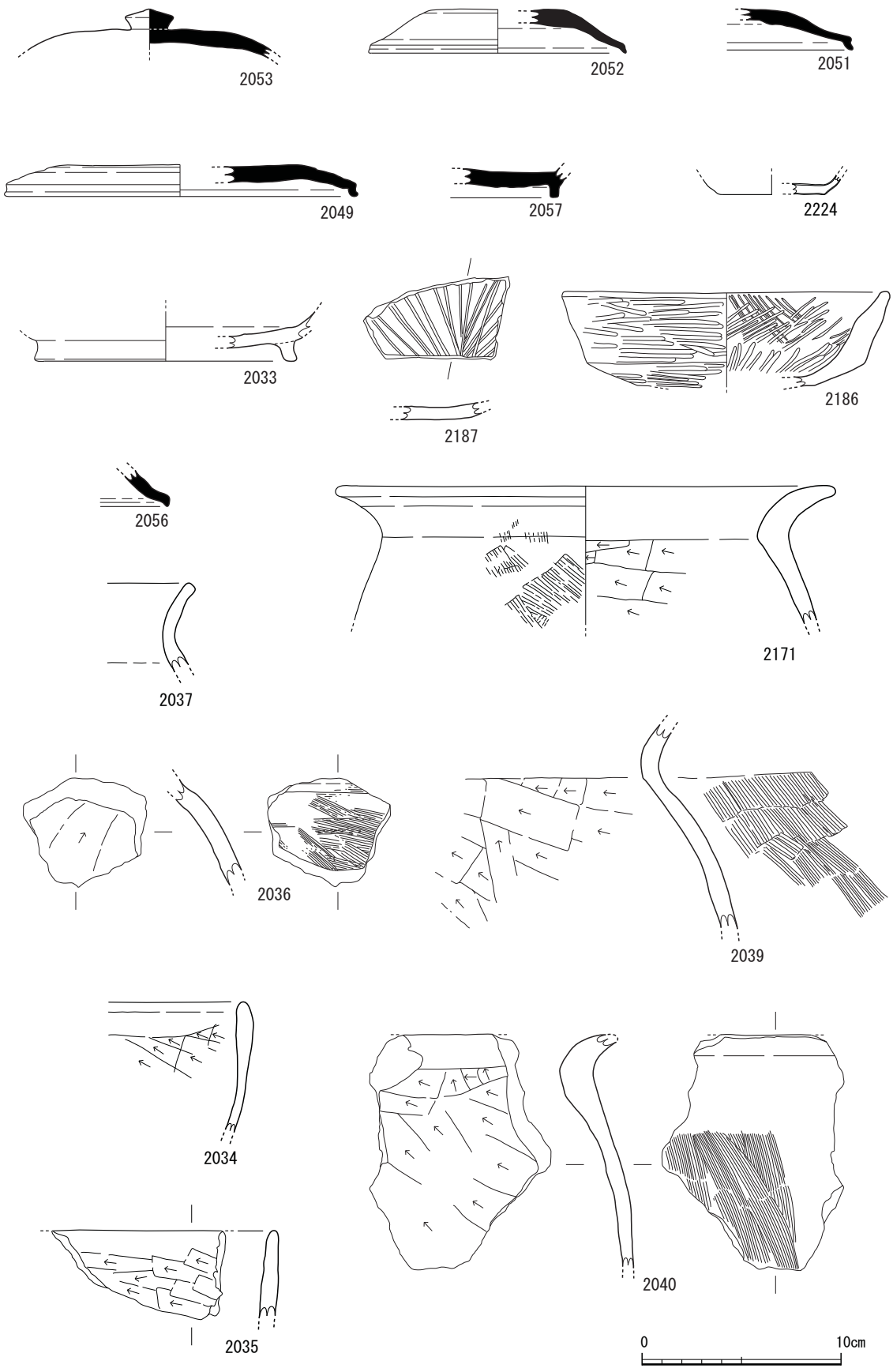


第 186 図　II 区 SI2002 実測図

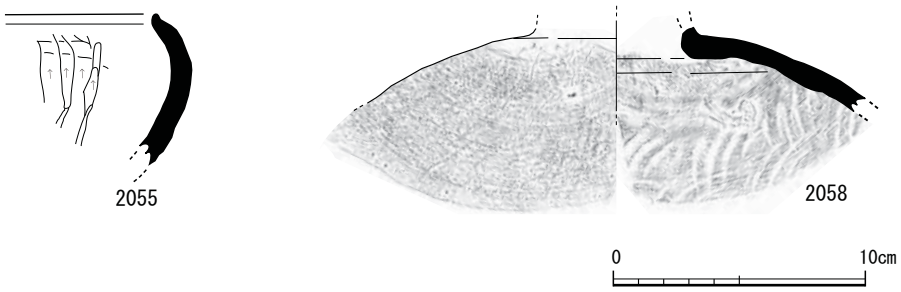
後半のものである。混入であるがこの時期の遺物が含まれることを示唆するためにあえて図化した。2015 は、須恵器の杯蓋のツマミ部のみの破片である。かなり扁平化したものである。2016 は須恵器の杯蓋で、復元口径は 11.4cm を測る。天井自体が扁平化しており、口縁の屈曲もかなり少ないものである。2017 は須恵器の杯蓋で、2016 よりやや天井部が高いものの扁平化したものである。復元口径が 15.4cm を測り、2016 よりも大型のものである。口縁部もまだ前代の口縁の特徴を持ちしっかりと角張る。2018 は須恵器の杯蓋で、2017 よりさらに大きな口径を持ち、ツマミは失われている。復元口径が 19.3cm を測る。天井の高さも高く、時代的にやや遡る。2019 は須恵器の杯蓋で、復元口径が 10.4cm を測りより小型のもので、天井部がやや高いのに口縁部の形態はほとんど屈曲の呈をなしていない。外器面の口縁部に重ね焼きの痕跡がある。2020 は須恵器の杯蓋で輪状ツマミを持ち , 完形である。口径は 14.1cm、器高は 3.2cm である。内器面に使用による研磨痕があることから転用硯であろう。2021 は須恵器の杯蓋でツマミのない天井のやや低いものである。口縁部がやや歪みがある。復元口径が 15.0cm、復元器高が 2.6cm を測る。2023 は須恵器の高杯の脚部である。復元底径は 12.8cm を測る。脚の端部は強く屈曲する。2050 は須恵器の杯蓋で復元口径が 14.6cm を測る。内器面に磨研が認められ、転用硯の可能性がある。2059 は須恵器の甕の口縁である。小片のため全体は不明である。2122 は須恵器の横瓮の口縁部である。口径の 1/3 が残る。復元口径が 11.4cm を測る。2024 は須恵器の短頸壺の口縁部である口径の 1/5 が残る。復元口縁が 11.5cm を測る。全体的に磨耗している。

・SI-2002

［遺構状況］　140-J-17 グリッドで検出。一部は調査区外になるため、C-D 間の観察できる範囲の長さは 4m を測る。カマドは確認できなかった。床面には南側に硬化面を確認した。確認面からの深さは 20cm を測る。



第 187 図　II 区 SI2002 出土遺物実測図



第 188 図　Ⅱ区 SI2002 出土遺物実測図

軸は真北から西へ N-26° -W へふれる。

この建物の主柱穴は精査したものの確認できなかった。

この遺構の時期は遺物の大まかな概観から 8 世紀前半と考える。

［出土遺物］　遺物の出土は多くはあったが、この遺構に確実に伴うものは明確ではない。平面図の実測図に遺物の出土状況を図化しているが、これは主に床面直上にあったものを、この遺構に近い時期のものとして掲載したものである。この遺構から出土したものを以下に個々に述べていく。

2033 は土師器の盤で底径の 1/6 が残る。復元底径は 13.2cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2034 は土師器の鉢の口縁部である。2036 は土師器の甕の破片である。外器面に赤彩される土器の加工品である。2037 は土師器の甕である。2040 は土師器の甕である。口縁は短く、胴部の張りは少ない。2049 は須恵器の杯蓋である。口縁の 1/4 が残り、復元口径が 17.8cm を測る。2052 は須恵器の杯蓋で天井が高いものである。口縁部の返しは僅かである。復元口径が 12.8cm、器高が 2.2cm を測る。2053 は須恵器の杯蓋でツマミ部と天井部のみである。器表面は灰かぶりで不明である。2171 は土師器の甕で口縁が長く強く外反する。口径の 1/3 が残り、復元口径が 25.0cm を測る。2187 は土師器の杯の破片である。外器面はヘラケズリ調整で、内器面はミガキ後放射状に暗文を施す。

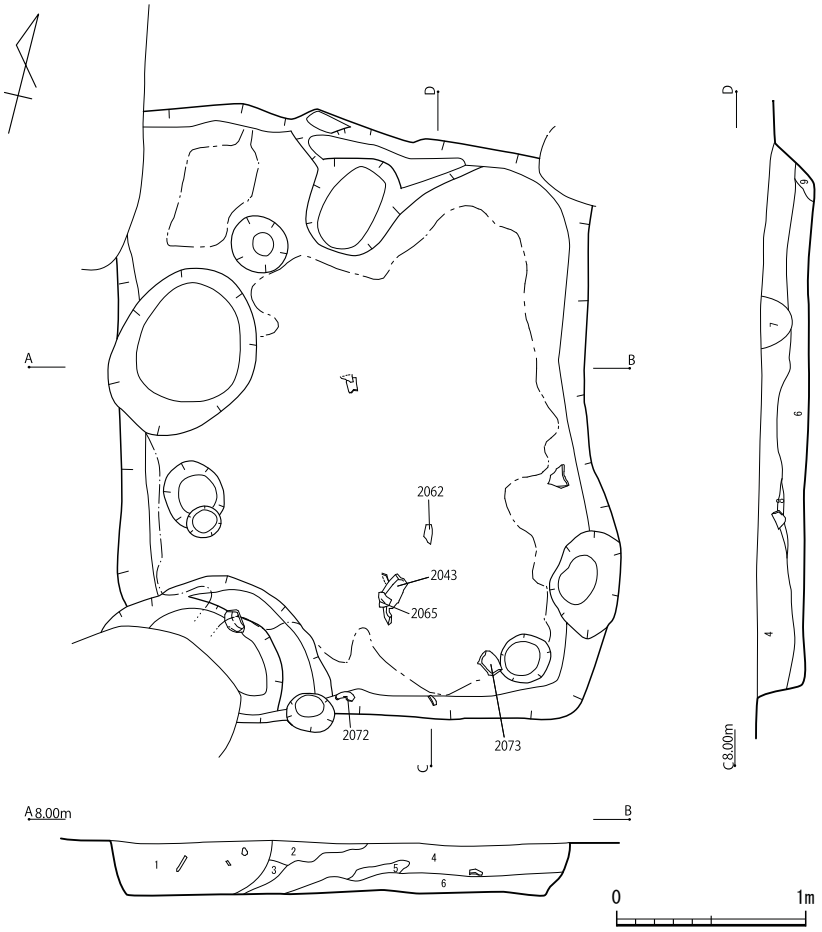
2224 は白磁の皿で大宰府分類のⅤ類の底部片で、時期でいえば C 期（11 世紀後半 ~12 世紀前半）に想定されているものである。外器面は釉を一旦かけた後、掻き取ろうとして薄くなっている。復元底径は 5.4cm を測る。この遺物は出土状況がはっきりしないが、遺構の埋土上部からの出土と考える。

2058 は須恵器の短頸壷の頸部から胴部までの破片である。口縁部は頸部から剥離している。2056 は須恵器の高杯の脚部である。2057 は須恵器の高台付杯である。底部に粘土巻上げ痕がある。2039 は土師器の甕である。頸部から胴部上位である。外器面全体と内器面の口縁部まで赤色顔料が塗布される。2051 は須恵器の杯蓋で口縁部は短いながらしっかりと屈曲する。外器面には自然釉がかかる。2186 は土師器の杯である。内外器面にミガキにより細かい暗文が施される。復元口径が 16.3cm、器高が 5.0cm 復元底径が 14.0cm を測る。2035 は土師器の鉢の破片である。2055 は須恵器の鉢の破片である。口縁から胴部までの破片である。外器面に自然釉がかかる。

・SI-2004

［遺構状況］　140-J･K-18 グリッドで検出。S-2001 から切られ、多くのピットとも切り合い関係にある。また、土坑の SK-2019 にも切られている。

平面形は南北方向で 5m、東西方向で 3.5m を測り、長方形を呈する。南北軸は北からやや西側にずれて N-17　° -E である。北側に配置されているカマドの残存状況は悪く、カマドの体部の粘土塊・粒子、焼土



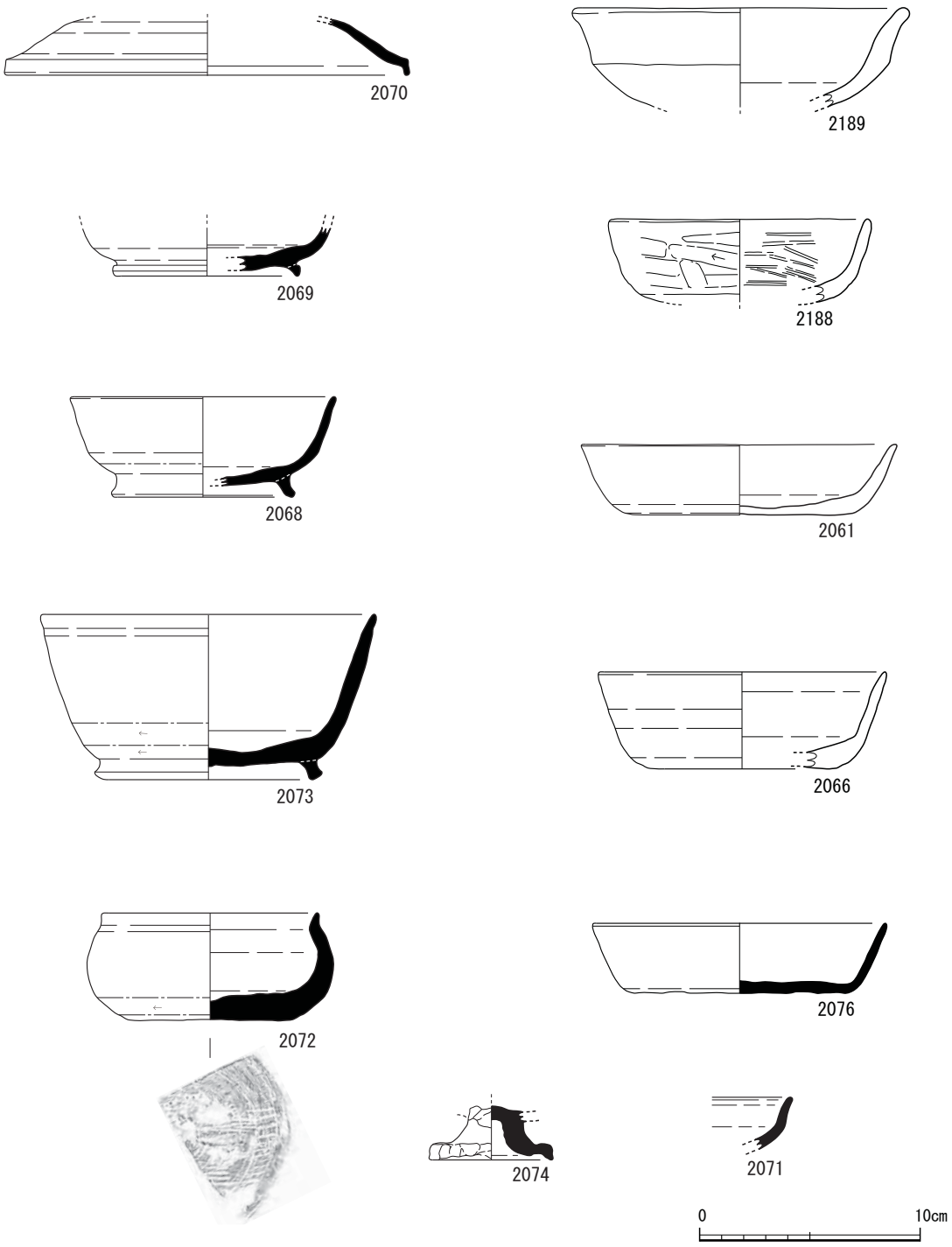
1層	橙	7.5YR6/6	明赤褐色の焼土を含む
2層	暗褐～黒褐	10YR3/3～2/3	しまりなし　上部に炭・焼土ありカマド粘土がわ　ずかに含まれる
3層	暗褐～黒褐	10YR3/3～2/3	カマド粘土が散っ ている（2より多く含む）　2より硬質でしまる 1cm弱の灰の粒子を含む
4層	暗褐	10YR3/4	しまりなし　ブロックが固まる
5層	暗褐	10YR3/4	きめが細かい上部がやや黒く焼けている
6層	暗褐	10YR3/4	
7層	暗褐	10YR3/3	
8層	暗褐	10YR3/3	黒褐色の粘土ブロックが混じる硬質焼土粒子を含むカマド　粘土 (比較的固ま ったもの)が含まれる
9層	暗褐	10YR3/3	ブロック状(土っぽい)地山と混じる　　(カマドの掘り方の埋土)硬質

第 189 図　II 区 SI2004 実測図

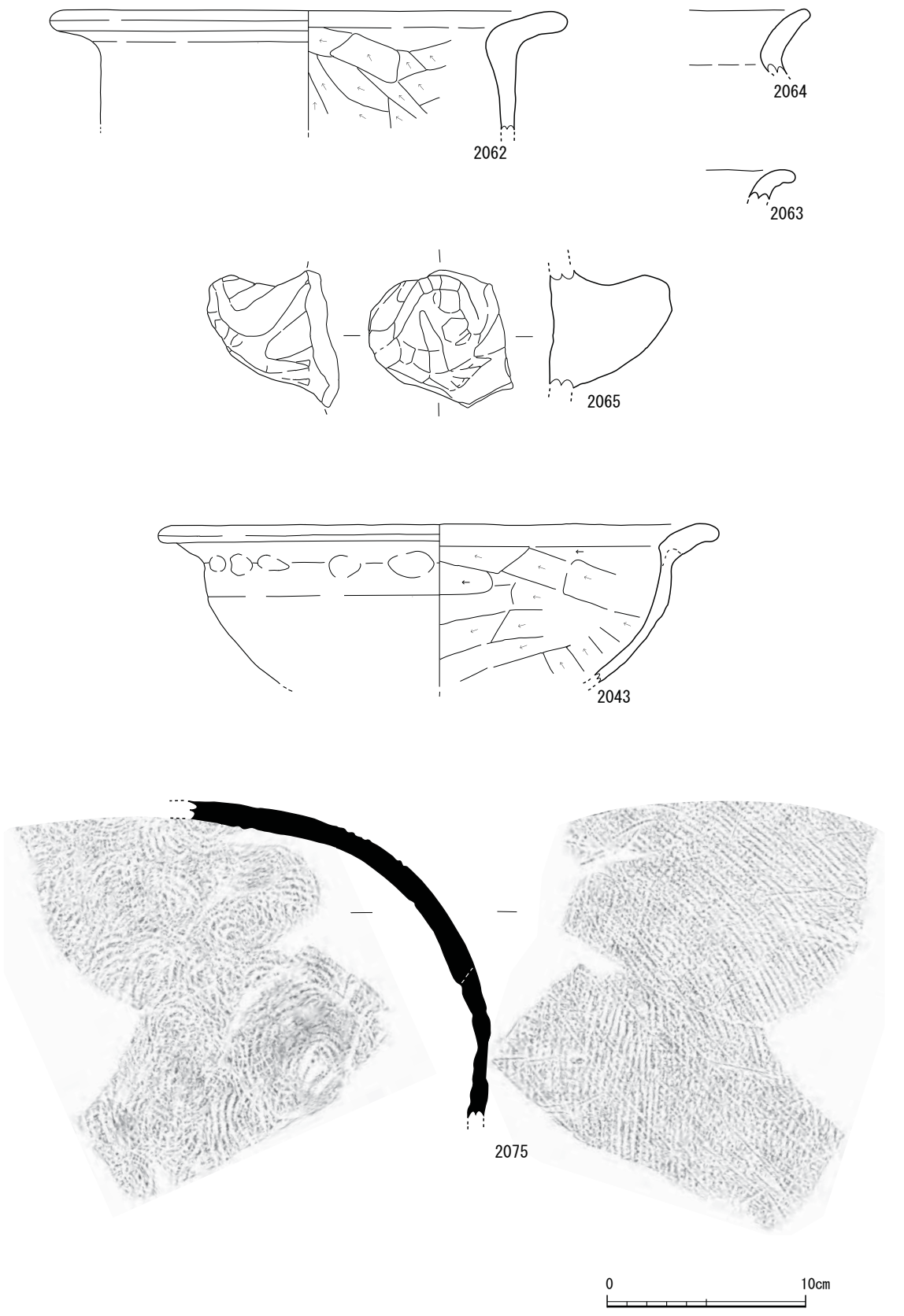
の集中部分でその存在が想定できるものの構造自体は不明確である。ただ、火床部分が浅く掘りこまれ、焼土や炭化物が残っていることでカマド位置が特定できた。掘り込みは南北 50cm、東西 40cm、確認面からの深さ 10cm を測る。この上部にカマドの一部である粘土塊等が集中して見られた。

硬化面はこの建物内のかなり広範囲に渡って形成していた。主柱穴確認のため精査したが、確実にこの建物に伴う柱穴は確認できなかった。埋土の状況は自然堆積ととらえた。

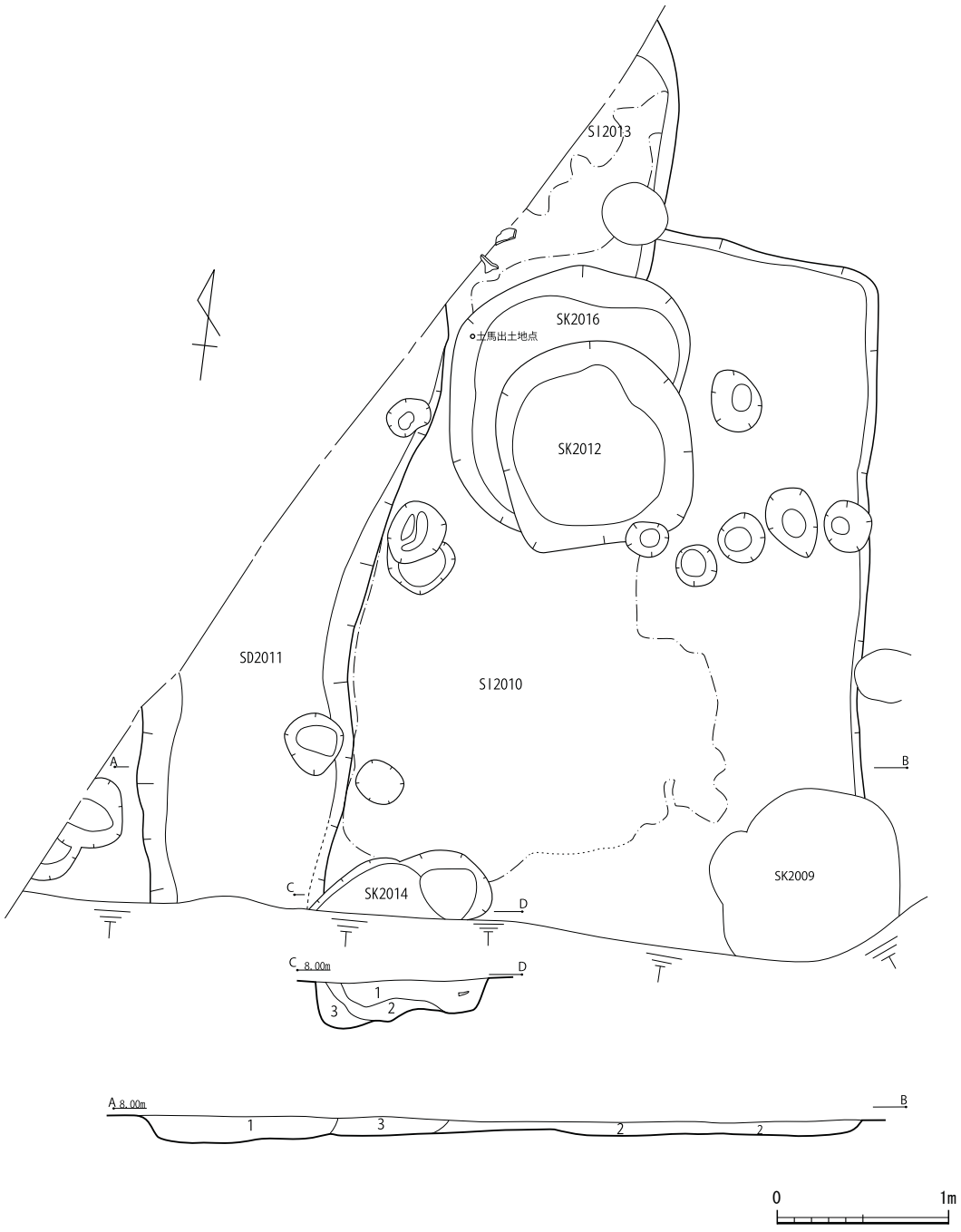
［出土遺物］　2043 は土師器の鍋である。口縁の 2/5 が残る。復元口径が 28.0cm を測る。外器面に煤が付着する。口縁部に貼り付け痕ある。2062 は土師器の甕で、口径の 1/6 が残る。復元口径が 25.0cm を測る。2064 は土師器の甕である。外器面には赤彩が施される。外器面は丁寧に磨きあげる。2065 は土師器の甑の把手である手びねりで造られる。2066 は土師器の杯で 1/4 残る。復元口径が 13.0cm、器高が 4.4cm、復元底径が 8.2cm を測る。回転台による成形で底部はヘラ切り離し。2068 は須恵器の高台付杯で口径の 1/8 が残る。復元口径が 12.2cm、器高が 4.55cm、復元底径が 8.4cm を測る。底部は回転ヘラケズリである。



第 190 図　II 区 SI2004 出土遺物実測図



第 191 図　II 区 SI2004 出土遺物実測図



1層 黒褐 7.5YR3/2　シルト わずかにしまる　きめが細かい褐色の地山ブロック 2㎜大を含む
2層 黒褐 10YR2/2　シルト　黒褐ブロック混じる褐色シルトが混じるきめが細かい
3層 黒褐 7.5YR3/2　シルト しまりなし　1層に比べて褐色の割合が多い

第 192 図　II 区 SI2010 実測図

高台内の底部に爪型痕ある。2069 は須恵器の高台付杯で、復元底径が 8.4cm を測る。2070 は須恵器の杯蓋である。復元口径が 18.4cm を測る。2071 は須恵器の皿である。赤焼けのものである。2072 は恵器の鉢で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 9.8cm、器高が 4.8cm、復元底径が 7.4cm、櫛状工具痕が有る。外器面胴部に煤の痕跡がある。2073 は須恵器の高台付杯で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 15.2cm、器高が 7.5cm、復元底径が 10.4cm を測る。内器面底部が研磨されているため、転用硯の可能性がある。

2075 は須恵器の横瓮である。破片の一部に粘土蓋を貼り付けた部分が残る。実測図での遺物の配置の上下は一応器表面のすれがないことなど理由として図のようにしている。

2188 は土師器の杯で、口縁の 1/6 が残る。復元口径が 11.7cm、器高が 3.8cm、復元底径が 9.0cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2189 は土師器の杯で、口縁の 1/6 残る。復元口径が 15.3cm を測る。内外器面に赤彩される。2061 は土師器の杯で口径の 1/6 が残る。復元口径 14.2cm、器高が 3.2cm、復元底径が 10.2cm を測る。内外器面に薄い赤彩痕ある。2074 は須恵器の脚付杯で底径の 3/4 が残る。底径が 5.6cm を測る。脚部の一部と脚部から杯部の部分が欠損している。意図的に打ち欠いて剥離させている。2063 は土師器の甕で、内外器面に赤彩が施される。2076 は赤焼けの須恵器の杯で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 13.2cm、器高が 3.2cm、復元底径が 10.2cm を測る。

・SI-2010

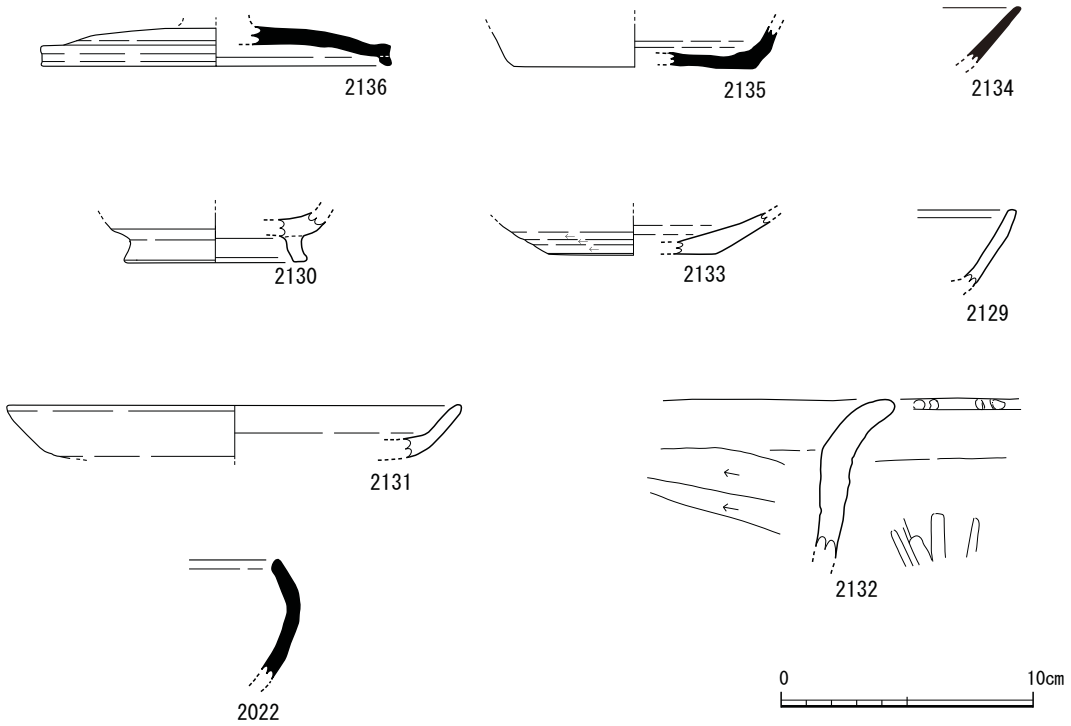
［遺構状況］　140-J・K-16・17 グリッドで検出。大型の竪穴建物の一部と考える。半分以上が SK-2016、SK-2012、SI-2013、SD-2011、SK-2014 などに切られている。このため遺構の正確な規模・形状は不明である。北東側の角と辺はつかめる。西側の状況が不明確となったのは、SD-2011 の溝状遺構が南北に走ることによって SI-2010 の西側の部分が不明である。この溝状遺構の西側とこの遺構の西側と重なっている可能性が高い。そのように考えると、少なくともこの東西方向の境を限りとすると 4m ほどを測る。南北は少なくとも 4.0m 以上はある。

硬化面は遺構の中心付近に確認された。多くのピットが確認されるが、この遺構に伴う柱穴とすることができるか不明である。

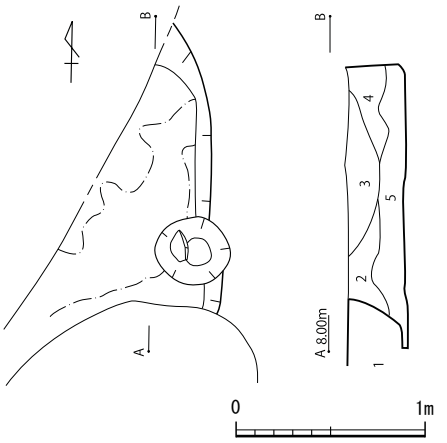
残存の状況から考えると、この遺構がこの調査区で一番大きいものである。

［出土遺物］　この遺構に伴う遺物として確実なものは少なく、9 点を図化した。

2022 は鉄鉢型の須恵器の鉢である。口径の 1/4 が残る。口径部がややしっかりと丁寧に調整されている。2129 は土師器の杯である。直線的に体部が伸びる。2130 は土師器の高台付杯の底部破片である。復元

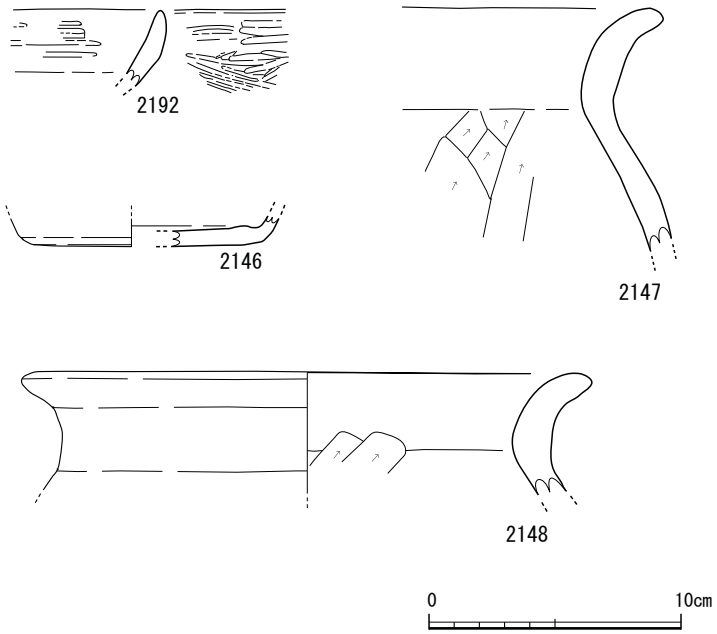


第 193 図　II 区　SI 2010 出土遺物実測図



1層 黒褐 7.5YR3/2　シルト　　よくしまる
黄土色の固いシルトブロック2～3cm 大を多く含む。
やや粘性あり。下部は、黒っぽい
2層 暗褐 7.5YR3/3　シルト　　わずかにしまる
3層 黒褐 7.5YR3/2　シルト　　しまりあり
わずかに粘性があり暗褐色粘土ブロックが混じる
カマド粘土のようなブロックあり（5mm 大）
4層 暗褐 7.5YR3/3　シルト　　しまりあまりなし
土器含む5mm～1cm　大の焼土を全体に含む
5層 黒褐 10YR2/3　シルト　　ややしまる
粘性をもつ粘土・焼土が混じる褐色と黒色が
まだらになっている

第 194 図　Ⅱ区 SI2013 実測図



第 195 図　Ⅱ区　SI2013 出土遺物実測図

底径は 7.2cm を測る。内外器面に赤彩が施される。高台は貼り付けである。2132 は土師器の鍋で口縁の 1/8 残る。煤が付着。内器面は横方向にヘラケズリが施される。外器面は縦方向にハケとミガキが施された。口唇部に刻みらしきものが少しある。2134 は須恵器の杯でかなり直線的に延びる。2135 は須恵器の杯で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 9.5cm を測る。体部が底部から垂直に近い状態で立ち上がる。

2136 は須恵器の杯蓋で、口縁の 1/6 残る。復元口径が 13.8cm を測る。ツマミは失われている。天井は少し低く、口唇部はしっかり角張る。2131 は土師器の高杯で復元口縁が 18.0cm と広く、器高が 2.0cm、復元底径が 14.0cm を測り、皿に近い形態である。2133 は土師器の杯であるが、底部付近はヘラケズリが施され、器面調整としてヘラ状工具によるミガキが施される。

・SI-2013

［遺構状況］　140-L-16・17 グリッドで検出。この遺構は SI-2010 を切るが SK-2016 には切られている。また、SI-2002 を切ってもいる。かなり部分的な遺構のため、規模や形状は不明である。床面に硬化面があることから、一応竪穴建物として記述するが別遺構である可能性もある。掘り方の深さは 32　cm を測る。

［出土遺物］　非常に部分的な遺構であるため、この遺構に伴う遺物を確実にとらえることはできないが、4 点を図化した。明確な時期の特定ができるものではない。

この 2146 は土師器の杯で底径の 1/2 が残る。復元底径が 9.0cm を測る。内外器面に赤彩される。2147 は土師器の甕である。口縁部がかなり立つような形状で、胴部は口径よりも大きいと推定される。2148 も土師器の甕で、復元口径が 22.6cm を測る。2147 よりも口縁部が低い。胴部はやや大きくなる。内・外器面に煤が付着する。2192 は土師器の杯で器表面にミガキ調整がされる。

・SI-2017

［遺構状況］　140-L-16 グリッドで検出。調査区の南側で僅かな範囲の残存地で確認した遺構である。ほとんど形状はつかめないが、竪穴建物と考える。規模などもつかめない。確認面からの深さは 20cm を測る。

時期的なものは切り合う溝状遺構との関係で考える必要があるが、その遺構も一部であるため、あまりわからない。

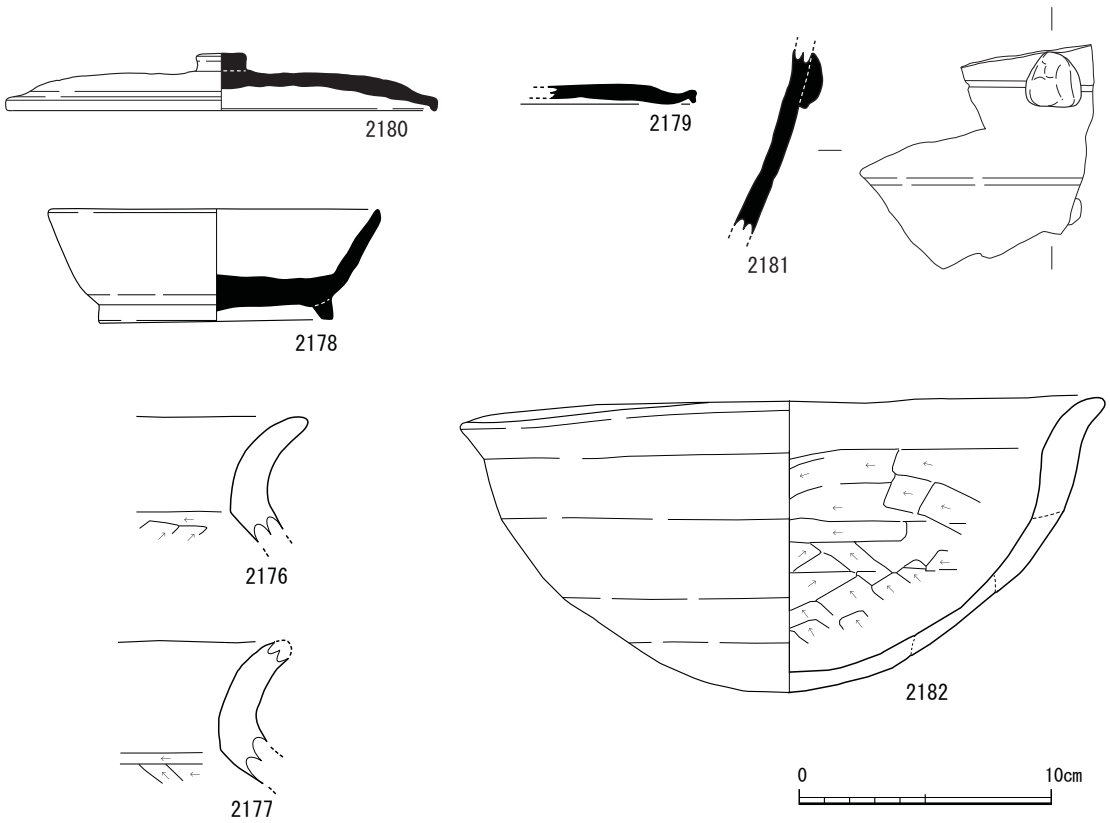
［出土遺物］　遺構の残りが少なく、この遺構の伴うものとしては非常にわずかであったが、その中から 7 点を図化した。

2176 は土師器の甕で口径の 1/8 残る。胴部がかなり貼りだす。2177 も土師器の甕で、口径の 1/8 残る。同じくかなり胴部が張る。

2178 は須恵器の高台付杯でほぼ完形である。口径が 13.1cm、器高が 4.5cm、底径が 9.3cm を測る。底やや小振りで底部厚が 1cm ほどと厚く、体部との境は明瞭で、体部から口縁までは短い。かなり頑丈な印象を受ける。高台の断面はやや細い。

2179 は須恵器の杯蓋である。天井はほぼ扁平に近いが、口唇部はしっかりと角張る。2180 は須恵器の杯蓋で口縁の 1/6 残る。口径が 17.0cm、器高が 2.3cm を測る。ボタン状つまみが貼り付けられる。2181 は須恵器の甑で外器面に煤が付着する。かなり痕跡に近い把手が貼り付けられる。また、その付近に浅い沈線がめぐる。

2182 は土師器の鍋である。口縁の 1/2 が残る。復元口径が 25.5cm、器高は 11.5cm を測る。胴部はヘラケズリにより厚みを薄くして熱効率を良くしている。外器面に煤が付着する。口縁部は焼き歪みによりひずんでいる。



第 196 図　II 区　SI2017 出土遺物実測図

(3) 土坑

SK-2005・2009・2012・2014・2016・2018・2019 の 7 基を検出した。それぞれ形態はさまざまで一様の規則性はない。以下に各遺構について詳述する。

・SK-2005

［遺構状況］　140-J・K-18 グリッドで検出。長軸方向で 1.56m、短軸方向で 1.4m を測る隅丸の方形の遺構である。底部状況から二つの掘りこみの二つ切り合うものであるようにも思える。埋土状況も他の遺構とことなり、成立時期は他の遺構に比べ新しく、しまりも弱い。

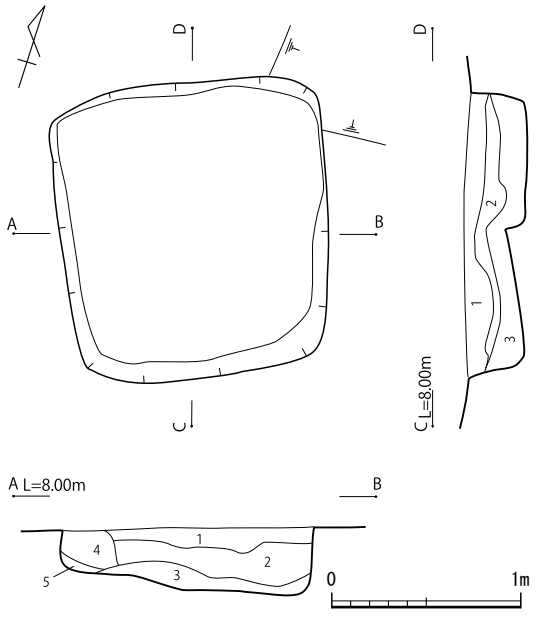
［出土遺物］2077 は土師器の甕で口径の 1/8 が残る。復元口径が 19.2cm を測る。2078 は土師器の甕で復元口径が 24.8cm を測る。2079 は土師器の杯で、口縁の 1/3 が残る。復元口径 15.6cm、器高が 3.6cm、復元底径が 9.0cm を測る。

・SK-2009

［遺構状況］140-K-17 グリッドで検出した土坑で SI-2010 を切っている。南側が撹乱により失われているため、本来の形状は不明である。残った部分だけで推定すると北側に段を持つやや方形気味の楕円形と考える。横幅が 1m を測る。

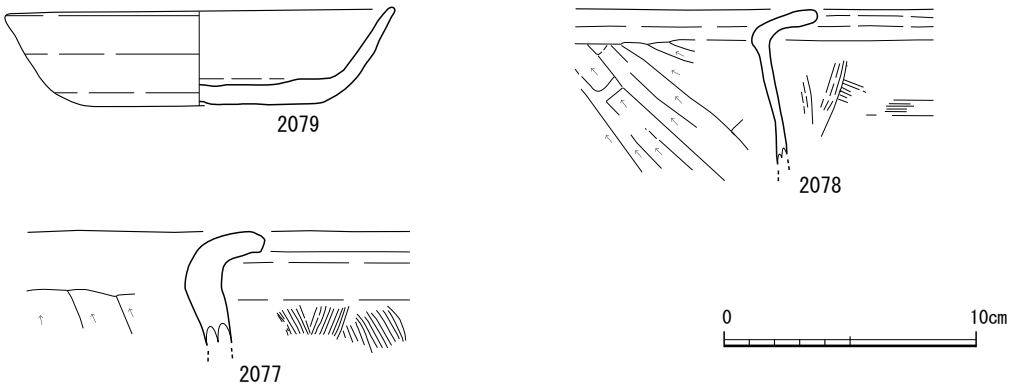
[出土遺物]　出土遺物は少なく、図化したのは 5 点である。

2124 は土師器の杯である。2125 は土師器の杯で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 13.8cm、器高が 2.9cm、復元底径が 9.4cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2126 は土師器の甕で、頸部から胴部上位が残る。頸部から胴部が急激に張り出すもので、外器面は赤彩が施される。2128 は須恵器の高台付杯の底部で、外器面の高台付近にかけてヘラケズリが施される。底径が 8.0cm を測る。2127 は小型の磨石もしくは碁石かと考えたもので長さが 2.6cm、幅が 2.8cm、厚みが 0.7cm、重さが 8.6g を測る。

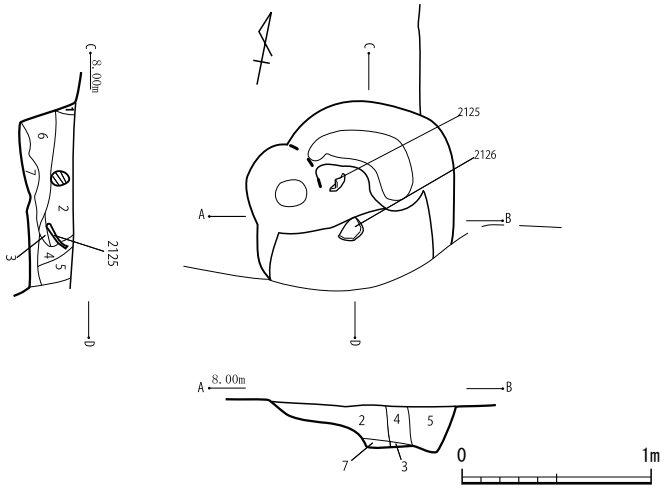


1層 黒褐10YR2/3 砂質土　　土器含む粘土ブロック
2層 黒褐10YR2/3 砂質土しまる　(　黒褐 10YR3/2)を一部に含む
3層 黒褐7.5YR2/2 砂質土しまりなし　わずかに粘性あり
4層 黒　10YR2/3 粘質土しまる　　焼土粒子を含む
5層　　7.5YR2/1

第 197 図　II 区 SK2005 実測図



第 198 図　II 区 SK2005 出土遺物実測図



1層　暗褐10YR3/2　粘質土　硬質
2層　黒褐10YR3/2　シルト　地山ブロック（５㎜大）含む　焼土粒を多く含む
　　わずかに粘性あり　しまり小　土器含む
3層　黒褐10YR3/2 粘質土
4層　黒褐10YR3/2 砂質土　しまりなし　地山の土が混じる
5層　黒褐10YR2/2 シルト　しまりなし　きめが細かい　混入物なし
6層　黒褐7.5YR3/2シルト　わずかに粘性あり　2層よりしまる　土器含む
7層　暗褐10YR3/3 シルト　よくしまる

第 199 図　II 区　SK2009 実測図

・SK-2012

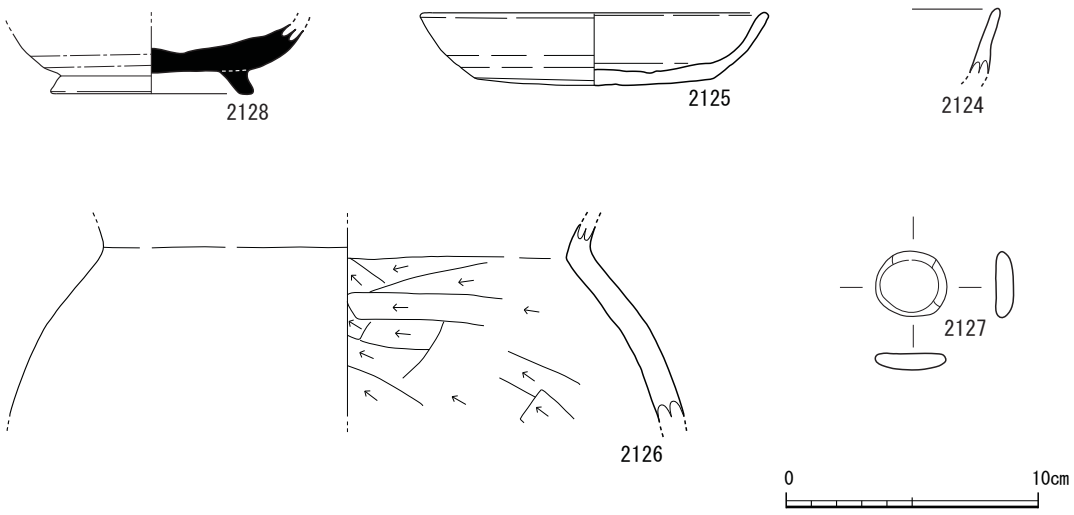
［遺構状況］　140-J・K-16・17 グリッドで検出。この遺構は S-2016 と切り合い関係にある。土層の観察から S-2016 を切っている。この遺構の規模は、長軸で 12m、短軸で 11m を測り楕円形を呈する。埋土の状況からすると掘削後時をおかずに埋め戻されている。

［出土遺物］出土遺物は少なく、ここでは 4 点のみを図化している。

2142 は土師器の甕で口縁の 1/6 が残る。復元口縁が 15.8cm を測る。口縁はやや立ち気味である。胴部はあまり張り出さずに底部へ向かう。2143 は須恵器の杯である。2144 は須恵器の杯蓋のツマミ部である。を呈する。 2145 は須恵器の杯蓋の輪状つまみ部である。つまみの上部に灰がかかっている。

・SK-2016

［遺構状況］　140-J・K-16・17 グリッドで検出。この遺構は S-2012 と切り合い関係にあり、土層を観察す



第 200 図　II 区 SK2009 出土遺物実測図

ると S-2012 に切られている。切り合いはかなり重なりが多く、本来の形状は不明である。ただ、S-2012 に先行する遺構として同様の性格を帯びた遺構と考えると S-2012 と同規模と考えて差し支えないと考える。この遺構も先に記した S-2012 と同様に掘ったあとすぐ埋め戻しをしたものと考える。埋土の上層に土馬が出土した。

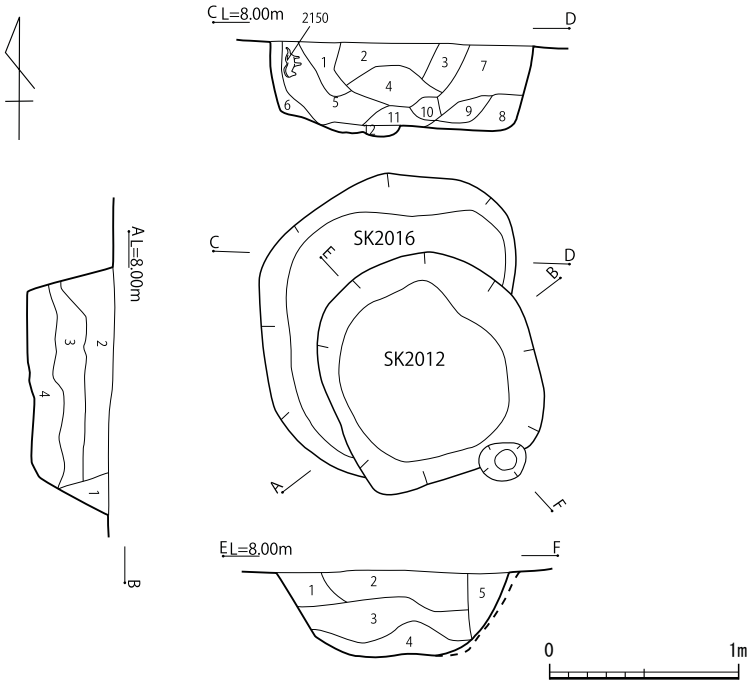
［出土遺物］　2165 は土師器の杯で、復元口径が 10.8cm を測る。2167 は土師器の皿で内外器面はヘラミガキがなされ、内外器面とも赤彩が施される。2168 は土師器の高台付盤で、底部の 1/2 が残る。底径が 13.8cm を測る。2169 は土師器の甕で、最下層の出土である。2170 も土師器の甕である。胴部外器面に煤が付着する。

2172 は須恵器の杯で底径が 3.2cm を測る。底部にヘラ記号らしきものがある。2173 は須恵器の高台付杯で、底径の 1/3 が残る。復元底径が 9.1cm を測る。外器面に自然釉の痕跡あるが、剥落のため不明瞭である。2174 は須恵器の高台付杯で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 15.0cm、器高が 4.5cm、復元底径が 10.3cm を測る。2175 は須恵器の高台付杯で底径の 1/3 が残る。復元底径が 9.3cm を測る。高台の先端が断面三角を呈し、いわゆる宇城産のものである。4 層の出土である。

2150 は須恵質の土馬である。特に陶馬と呼ばれることがある。形状は日本原産馬の特徴を示し頭が大きく、足が短い。全長は 11cmほどで、ほぼ完形であるが、わずかに左耳の先端が欠損する。目は粘土を貼り付け、へら状工具で調整している。鼻らしきくぼみのしたに口が横方向にヘラで半開きのように作り出し笑っているかの印象を受ける作りになっている。頭頂部から背中に向けてつまみあげた表現でタテガミを作り出している。鞍はなく裸馬の状態である。その後ろに尻尾が短くやや上方にそらせながら 3cm ほどの長さで表現している。短い脚は 1.4cm ほどある。足は下部を扁平にし、自立する。この土馬は SK-2016 の埋土の上位に頭を下に向けて出土した。埋土が一気に埋め戻した状況であることからたまたま入り込んだというより意図的に埋めたようである。ただ、一般に出土する土馬の状態とは明らかに異なる点が気になる。

・SK-2014

［遺構状況］140-K-16・17 グリッドで検出。SI-2010 を精査中に検出したもので、SI-2010 を切っている。撹乱で南側は失われているため、本来の形状は不明である。



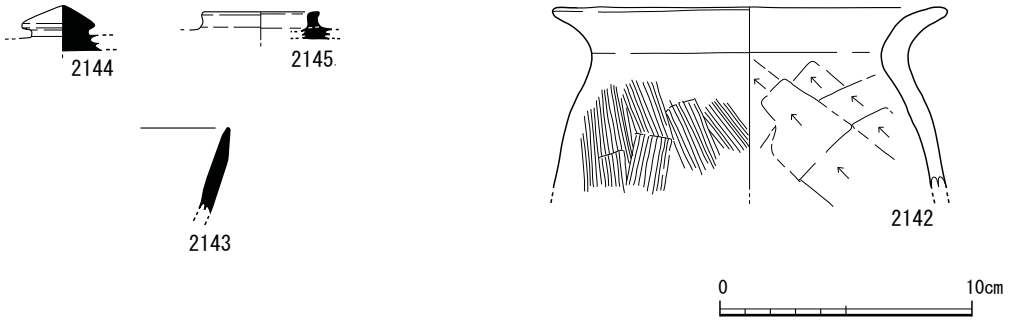
SK2012

1層	黒褐	7.5YR3/2 粘質土	地山ブロック（ 1cm)を含む暗褐色ブロックを含む硬質
2層	黒褐	10YR2/3　シルト	土器含む粘性がなく暗褐色を全体に含む黄橙色のシルトの固まりが入っている
3層	黒褐	10YR2/2　シルト しまりなし	粘性あり粘土粒子 カマド の粘土のような)を多量に含む
4層	黒褐	10YR2/3　シルト しまりなし	粘性ありカマド の粘土のようなかたまりを含む地山ブロック 2～3㎜大を多量に含む
5層	黒褐	10YR2/2　シルト	わずかに粘性ありシルト の硬質のブロック　（5cm大)含む

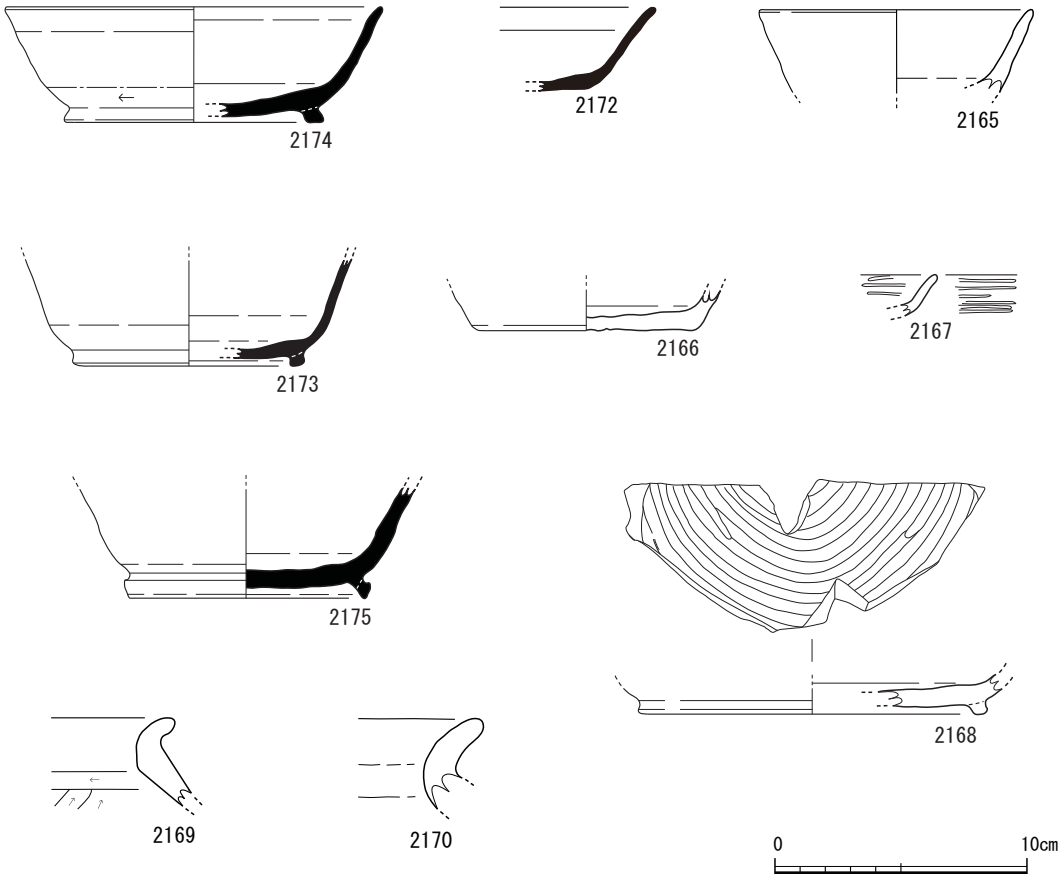
SK2016

1層	暗褐	10YR3/3 シルト しまりあり	シルト 質の非常に硬質なブロック(地山ブロック ） 2㎜大を含む黒褐ブロック含む
2層	黒褐	10YR3/2 シルト よくしまる	地山ブロック 3cm大含む炭粒子・焼土粒子をわ ずか に含むにぶい黄褐色のシルト 粒子が多く 含まれる
3層	暗褐	10YR3/3 シルト しまる	きめが細かいカマド 粘土のような粒子とブロック含む地 山ブロック含む
4層	黒褐	10YR3/2 シルト よくしまる	炭粒子を含む地山ブロックを多量に含む黒褐・暗褐ブロックを 含む
5層	暗褐	10YR3/3 シルト しまりなし	弱粘性地山ブロック 5cm大・2cm大を含む
6層	黒褐	10YR3/2 シルト しまる	粘性中2cm大の地山ブロック含む
7層	黒褐	10YR2/3 シルト ややしまる	粘性弱他の層に比べ混じり が少ない
8層	黒褐	10YR2/3 シルト しまりなし	弱粘性地山ブロック含む褐色シルト が混ざりあって る
9層	暗褐	10YR3/3 シルト しまりなし	土器含む地山ブロック褐色シルト混じる
10層	暗褐	10YR3/3 シルト 9層よりしまる	
11層	黒褐	7.5YR3/2 シルト よくしまる	粘土ブロック含む 粘土に近い）
12層	黒褐	10YR2/2　よくしまる	粘土に近い

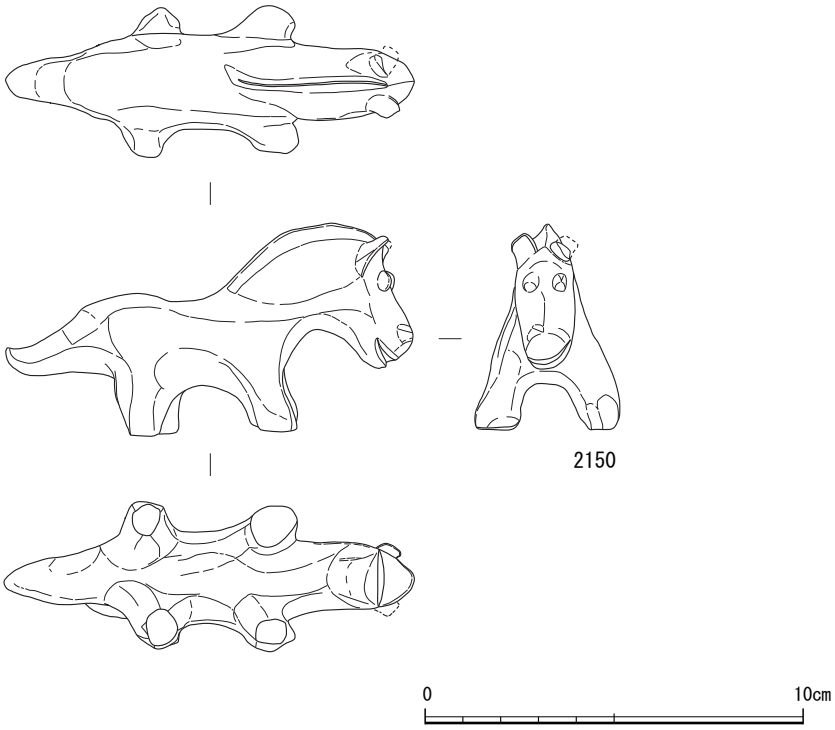
第 201 図　II 区 SK2012・SK2016 実測図



第 202 図　II 区 SK2012 出土遺物実測図



第 203 図　II 区　SK2016 出土遺物実測図



第 204 図　II 区　SK2016 土馬遺物実測図

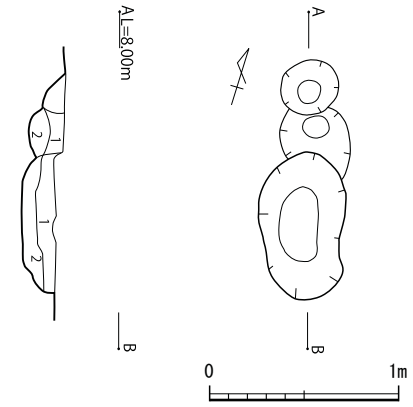
・SK-2018

［遺構状況］140-J-17 グリッドで検出。当初は SI-2002 の遺物集中域もしくはカマドという認識で調査を進めていたが、掘り下げと精査をするうちに別の遺構であることが判明した。ピット状のものが連結したような形状で、この遺構も切り合いの可能性が高い。埋土は焼土粒や炭化物が多く混じる。

［出土遺物］　先に帰したように多くの遺物が出土している。そのうち 15 点を図化した。

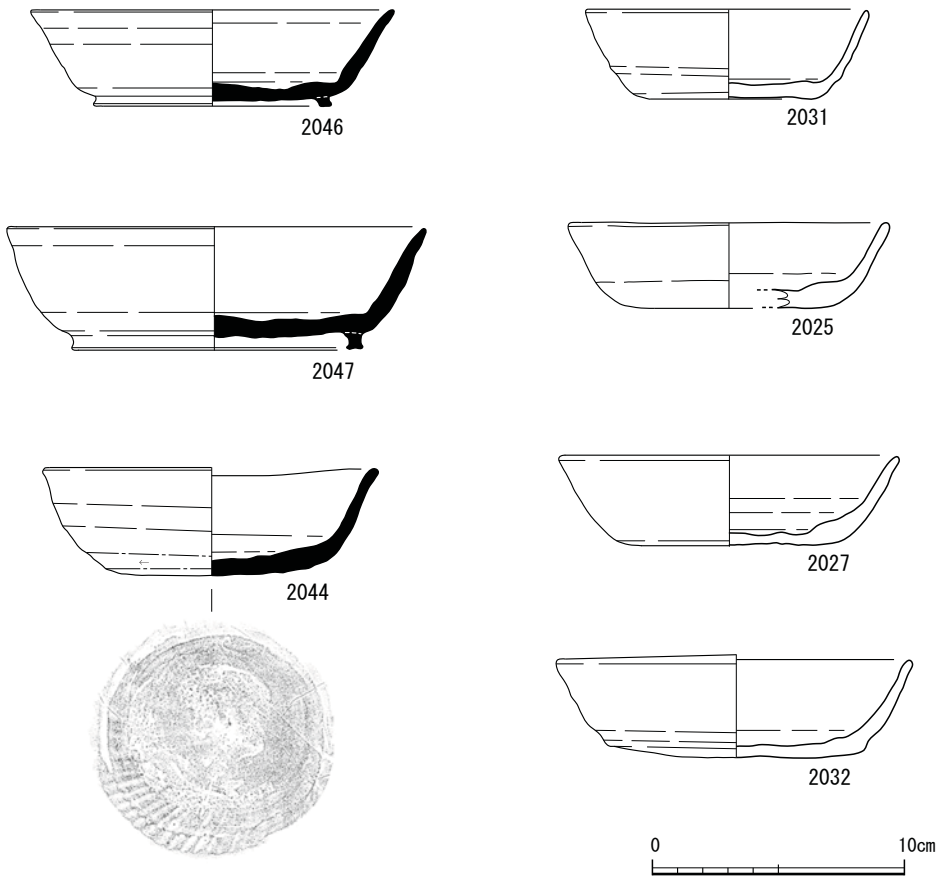
2025 は土師器の杯で、口径の 1/3 が残る。復元口径が 12.7cm、器高が 3.4cm を測る。2026 は土師器の杯で底径の 1/4 が残る。復元底径が 10.0cm を測る。内外器面に赤彩が施される。内器面に煤らしきものが付着する。2027 は土師器の杯で、口径の 1/2 が残る。復元口径が 13.4cm、器高が 3.6cm、復元底径が 9.0cm を測る。2028 は土師器の杯で完形である。口径が 13.4cm、器高が 4.0cm、底径が 10.1cm を測る。内外器面に赤彩が施される。かなり立ち上がりが急で、器壁も厚く重量感がある。須恵器の杯に似ており、土師器としては異質である。2029 は土師器の杯で口縁の 2/3 が残る。口径が 13.8cm、器高が 3.7cm、底径が 8.9cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2031 は土師器の杯で、口縁の 3/4 が残る。口径が 11.2cm、器高が 3.6cm、底径が 7.5m を測る。内器面の一部に焼きむらがある。2032 は土師器の杯で完形である。口径が 14.1cm、器高が 4.1cm、底径が 10.1cm を測る。外器面底部に黒斑がある。2038 は土師器の甕である。2041 は土師器の甕で、内外器面の口縁部および外器面に赤彩が施され、胴張りする。2042 は土師器の甕であるが、底部付近のみではあるが砲弾型を呈し、通常の甕とは異質である。内外器面に煤が付着することから煮炊具ではあろう。

2044 は須恵器の杯で口縁の 3/4 が残る。口径が 13.5cm、器高が 4.6cm、底径が 8.9cm を測る。底部に整形時に回転させながら飛び鉋様の技法を使用したのか、工具痕が残る。2045 は須恵器の杯で、口縁の 1/3 が残る。復元口径が 14.4cm、器高が 3.2cm、復元底径が 10.3cm を測る。2046 は須恵器の高台付杯で口縁の 2/3 が残る。復元口径が 14.4cm、器高が 3.9cm、復元底径が 9.5cm を測る。2047 は須恵器の高

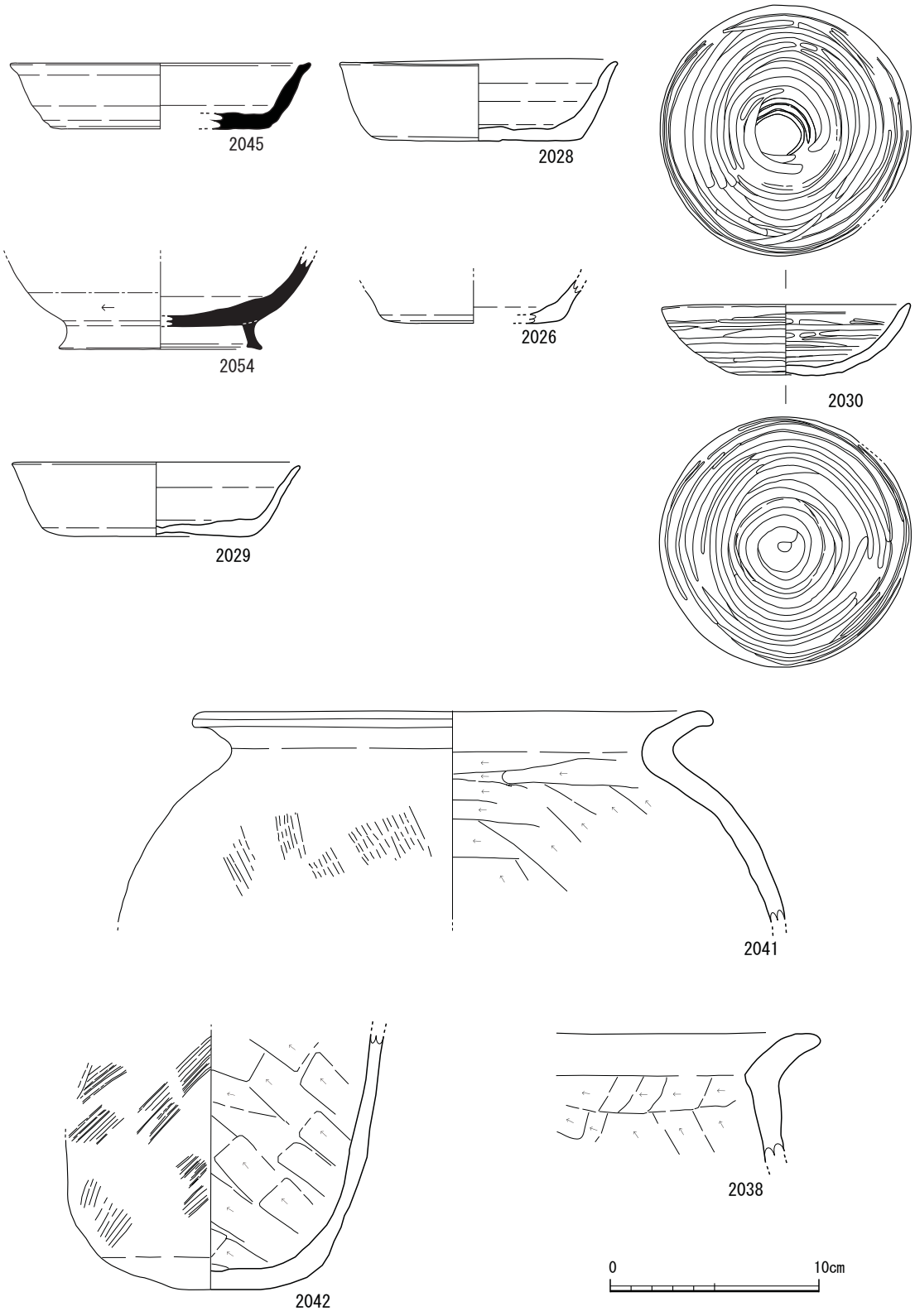


1層 黒褐10YR2/2 シルト　灰色ブロックを多く 含む
粘性中焼土・炭粒子を多く 含む
2層 黒褐10YR3/2 シルト　褐色混じり やや硬質硬質に
近いわずかに炭粒子を含む
地山ブロック1cm大を含む

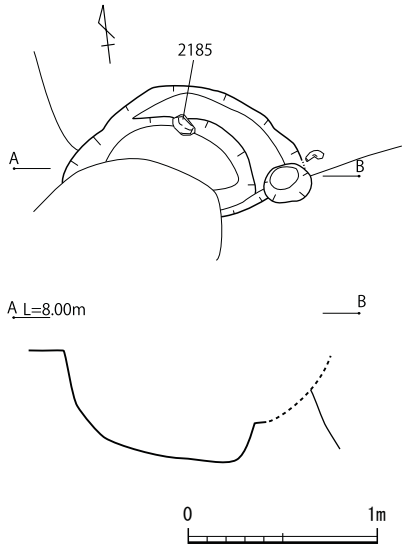
第 205 図 II 区 SK2018 実測図



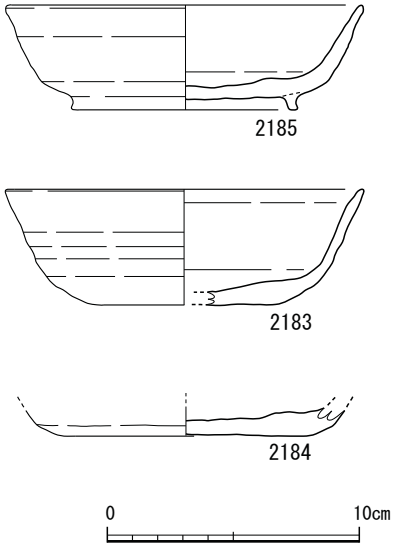
第 206 図　II 区 SK2018 出土遺物実測図



第 207 図　II 区　SK2018 出土遺物実測図



第 208 図　Ⅱ区 SK2019 実測図



第 209 図　Ⅱ区　SK2019 出土遺物実測図

台付杯で完形である。口径が 16.6cm、器高が 4.9cm、底径が 11.6cm を測る。内器面に付着物がある。

2054 は須恵器の高台付壺の底部であろう。底径の 1/3 が残る。復元底径が 9.8cm を測る。高台上位にはヘラケズリが施される。

・SK-2019

[遺構状況]　140-K-18 グリッドで検出。SI-2004 を精査中に確認した遺構で SI-2004 を切っているが、この遺構自体も SE-2008 に切られている。そのため本来の形状は不明である。残った範囲では段状の形態を示す。幅は 1m ほどで、深さは 60cm ほどを測る。

[出土遺物]　小規模な遺構なため出土遺物は少なく、そのうちの 3 点を図化した。

2183 は土師器の杯で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 16.2cm、器高が 4.6cm、復元底径が 9.5cm を測る。2184 は土師器の杯で、底径の 1/4 が残る。復元底径が 10.2cm を測る。内外器面に赤彩が残る。

2185 は土師器の高台付杯で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 14.2cm、器高が 4.1cm、復元底径が 9.15cm を測る。内器面に赤彩が残る。

(4) 井戸

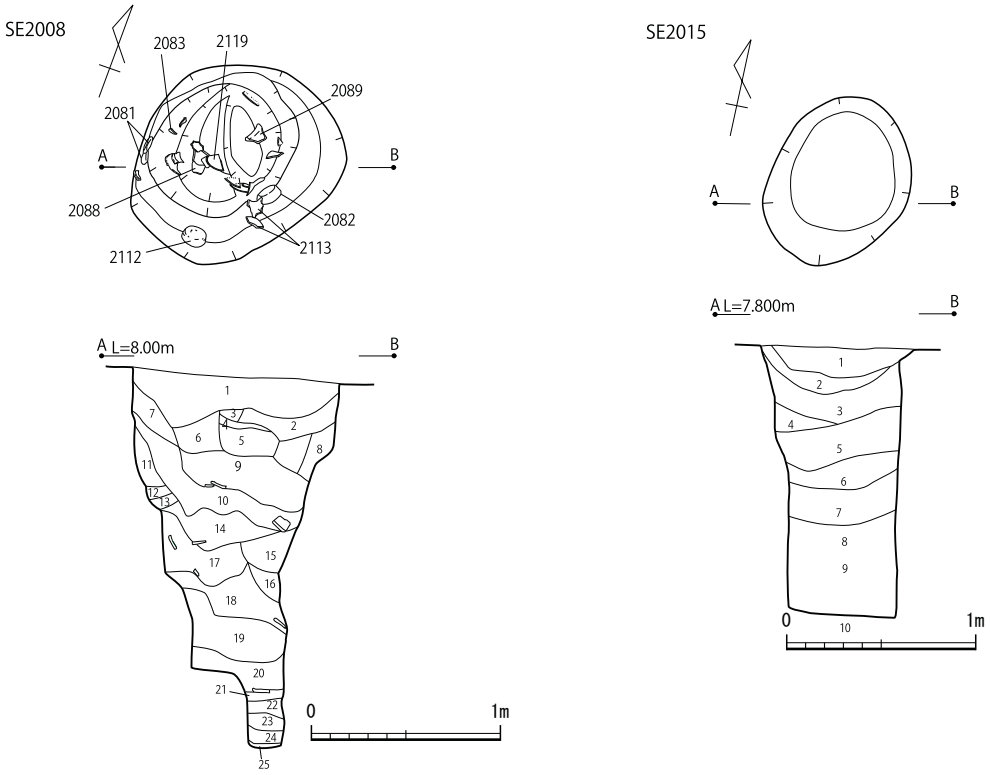
SE-2008・2015 の 2 基を検出した。最初確認した SE-2008 は最初から明確であったが、SE-2015 は土坑として認識していた。掘削を進めるうちに井戸と確認した。

・SE-2008

[遺構状況]　140-K-18 グリッドで検出。S-2004 を切っている SK-2019 を切っている。平面形は長軸が 1.2m、短軸が 0.9m を測る楕円形を呈する。確認面からの深さは 2.2m を測る。出土遺物は上面からの出土が多く、竪穴建物等他の遺構との関係を検討する必要がある。

最下層部分になると径が小さくなり、段掘りされている。現在湧水はなかった。

埋土の状況をみると中位付近までは埋め込まれたようである。最上層付近は落ち込みにさらに堆積したも



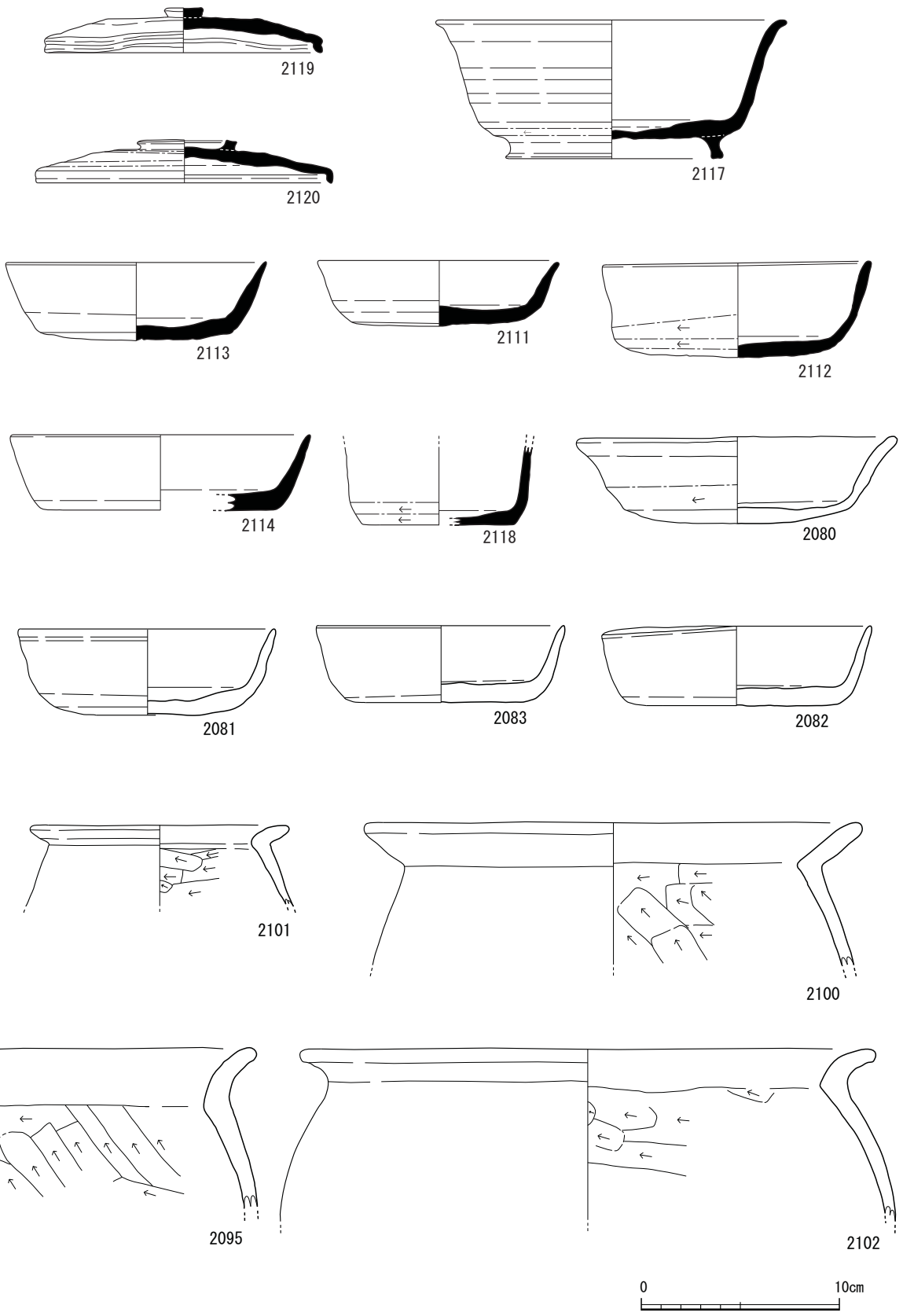
SE2008

1	暗褐	10YR3/3	シルト　よくしまる	粘土ブロック含む土器含む焼土粒子・炭粒子含む
2	黒褐	7.5YR3/2		砂混じり焼土・地山ブロック　(1㎜大)含む
3	黒褐	10YR3/2	シルト	粘性強土器含む炭がついたように黒くなっ ている
4	暗褐	10YR3/3	砂質	粘性強軟質焼土を含む"
5	黒褐	10YR3/2	シルト	粘性強土器含む地山ブロック ・粘土ブロックを含む
6	黒褐	10YR2/2	シルト	焼土粒子を含む褐色シルトが混じる
7	黒褐	7.5YR3/2	土	粘性㊍土器含む焼土粒子・炭粒子・粘土ブロックを多く含 む
8	黒褐	7.5YR3/2	シルト　しまり小	粘性㊍粘土ブロックを多く含む焼土粒子・炭粒子含む
9	黒褐	10YR2/3	シルト　しまり小	粘性強土器・地山ブロックを多く 含む　(1～2㎝大)
10	黒褐	10YR2/2	シルト　しまる	粘性強硬質
11	黒褐	10YR3/2	シルト　よくしまる	混じりがほとんど ない炭粒子を含む
12	黒褐	10YR3/2	シルト　よくしまる	粘性強土器含む粘土ブロック含む地山ブロック　(1㎜大)含む
13	黒褐	10YR2/2	シルト　よくしまる	硬質
14	黒	10YR2/2	シルト	砂っぽい軟質粘性なし
15	黒褐	10YR2/2	シルト　ややしまる	軟質土器含む粘土ブロック含む
16	黒褐	10YR2/2	シルト　しまりなし	粘性中軟質粘土ブロック含む焼土・灰・炭のかたまりが ある
17	黒褐	10YR2/2	シルト　しまりなし	混じり気がない粘性強
18	黒褐	10YR2/3	シルト　しまりなし	褐色の地山ブロック 1㎝大を含む
19	黒褐	10YR2/3	シルト　ややしまる	
20	黒褐	10YR3/1	シルト　ややしまる	強粘質灰色ブロック含む
21	焼土・カーボンが帯状に堆積			砂に近い
22	黒褐	10YR2/2	土	褐色の砂ブロック 0.5～1㎝大を含む
23	黒褐	10YR2/2	シルト　しまりなし	
24	黒褐	10YR3/1	シルト	
25	黒	5Y2/1	砂	

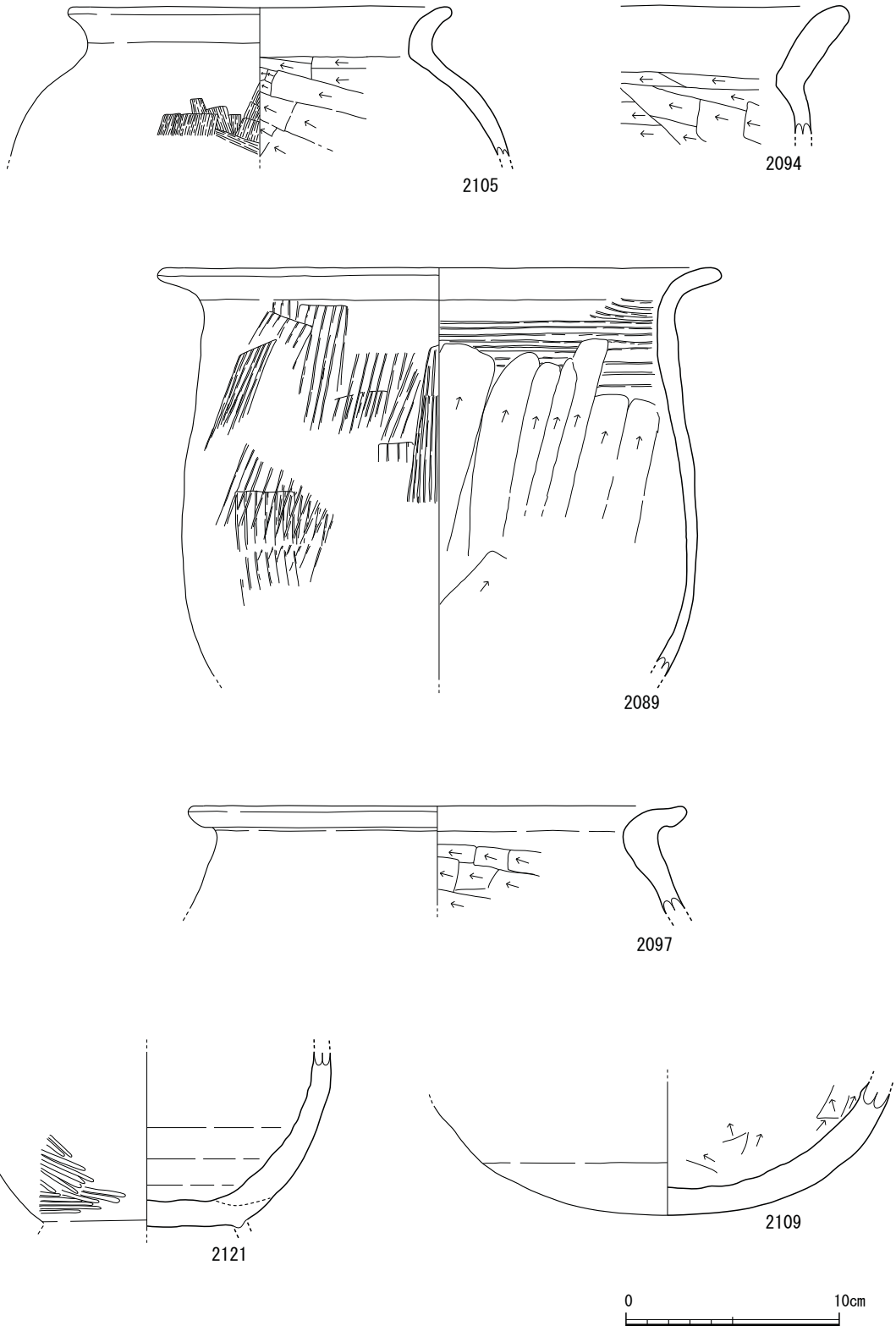
SE2015

1	黒褐	10YR2/3	シルト　しまりなし	土器片多く含む粘土ブロック含む焼土粒子を含む（　04SE第12層）
2	黒褐	7.5YR3/1	砂質　しまりなし	粘性をもつ
3	黒褐	10YR2/3	シルト　ややしまる	やや粘性をもつ炭粒子(1㎝)焼土粒子含む
4	黒褐	10YR2/3	シルト　しまりなし	弱粘性炭粒子(微小)含む
5	黒	10YR2/1	シルト　しまり小	粘性中・土器含む粘土ブロック含む
6	黒褐	10YR2/2	シルト　よくしまる	弱粘性褐色シルト混じり
7	黒褐	7.5YR3/1	シルト　よくしまる	粘性中褐色シルト混じり
8	褐	7.5YR4/4	砂質　しまりなし	5YR3/2　黒褐色シルト混じり(厚さ 10㎝)程
9	黒褐	10YR2/2	砂質　ややしまる	土器含む砂が帯状に混じる（厚さ15㎝程）
10	黒	5Y2/1	砂質	

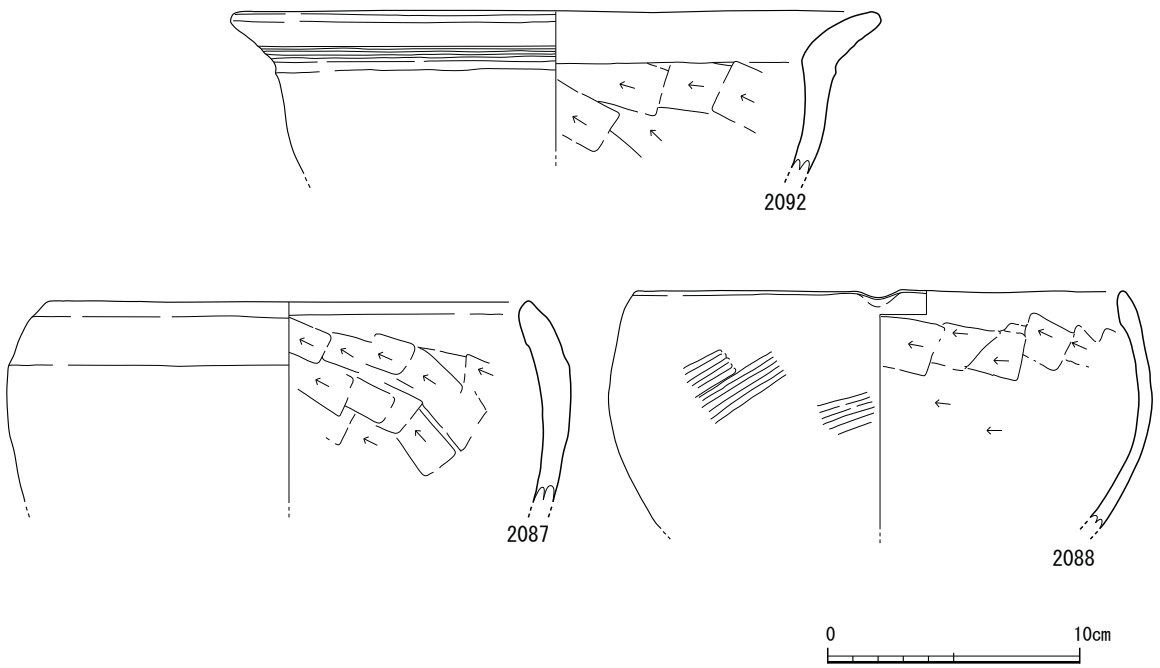
第 210 図　II 区 SE2008・SE2015 実測図



第 211 図　Ⅱ区　SE2008 出土遺物実測図



第 212 図　II 区　SE2008 出土遺物実測図



第 213 図　II 区 SE2008 出土遺物実測図

の用である。遺物はこの層の下部からさらにその下に至る。

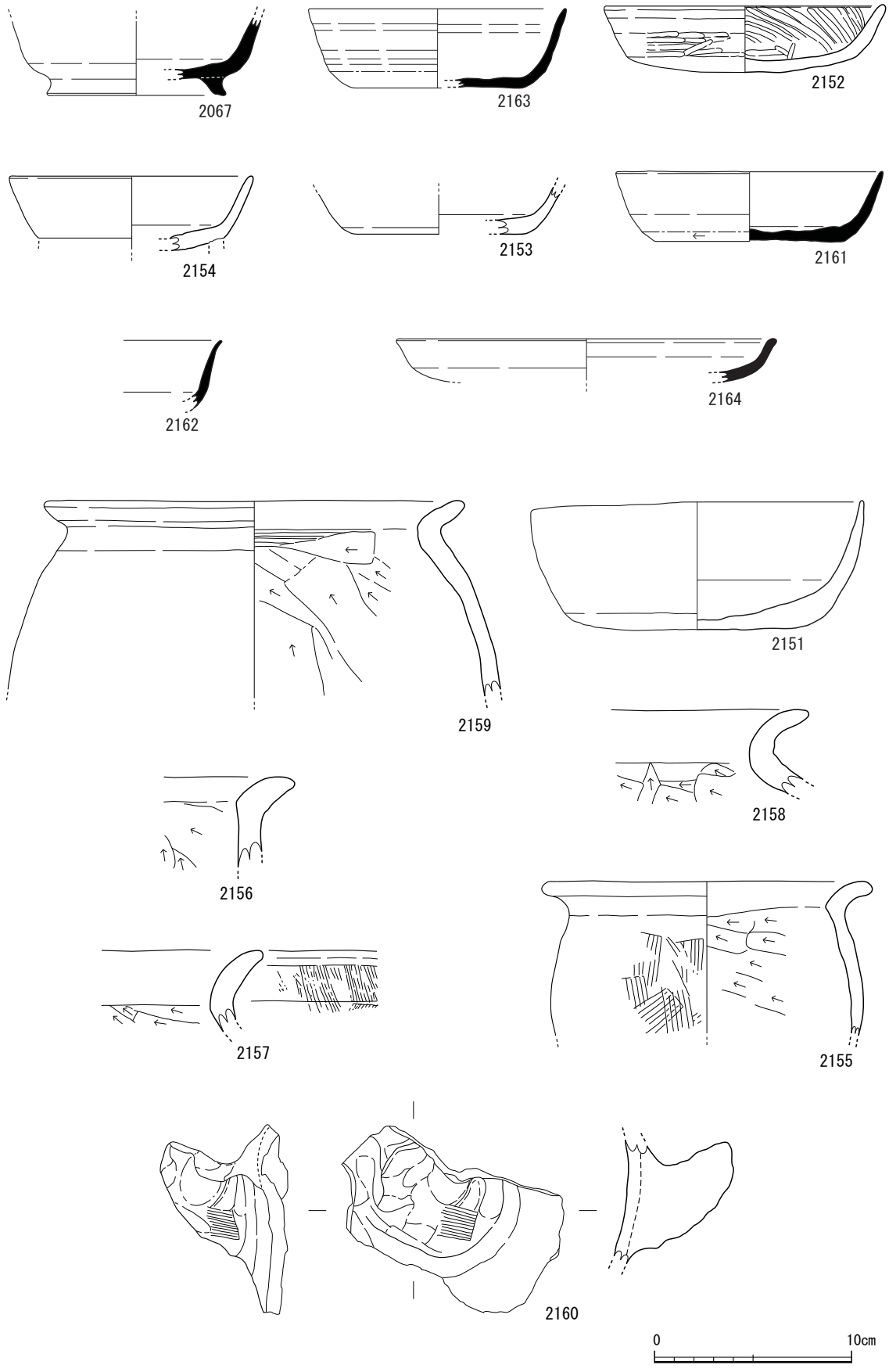
［出土遺物］　遺構状況にあったように上層からの遺物は後世の混入の可能性があるが、図化するにあたって、遺物の残存状況に応じて採用した関係から、必ずしもこの遺構の時期や特徴を示す遺物であるとはいえない。出土遺物量は多く、残りもよいので 24 点を図化した。

2080 は土師器の杯で口縁の 3/5 残る。口径が 16.2cm、器高が 4.4cm、底径が 11.3cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2081 は土師器の杯で、口縁の 1/2 残る。復元口径が 12.9cm、器高が 4.4cm、底径が 9.2cm を測る。2083 は土師器の杯で、口縁の 1/2 が残る。復元口径が 12.4cm、器高が 3.9cm、底径が 8.7cm を測る。

2087 は土師器の鉢で、口縁の 1/6 残る。復元口径が 19.2cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2088 は土師器の片口鉢で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 19.6cm を測る。外器面・内器面及び口縁部に赤彩が残る。

2089 は土師器の甕で、口縁の 1/4 が残る。復元口径が 26.6cm を測る。内器面に煤が付着する。2092 は土師器の鍋で、口縁の 1/5 が残る。復元口径が 25.9cm を測る。外器面に煤が付着する。2094 は土師器の甕である。2095 は土師器の甕である。2097 は土師器の甕で口径の 1/6 残る。復元口径が 23.4cm を測る。2100 は土師器の甕で、復元口径が 25.2cm を測る。2101 は土師器の小型甕で、SE-2008 とピット群出土の土器と接合した。口径の 1/3 残る。復元口径が 13.0cm を測る。2102 は土師器の甕で、口径の 1/4 残る。復元口径が 29.2cm を測る。2105 は土師器の甕で、復元口径が 18.0cm を測る。内外器面に赤彩が施される。外器面の胴部に黒斑がある。2109 は土師器の鍋もしくは甕で底部の 2/3 残る。

2111 は須恵器の杯で、口縁の 2/3 残る。口径が 12.3cm、器高が 3.3cm、底径が 9.5cm を測る。2112 は須恵器の杯でほぼ完形である。口径が 13.6cm、器高が 4.7cm、底径が 7.6cm を測る。2113 は須恵器の皿で、口縁の 2/3 残る。口径が 13.2cm、器高が 4cm、底径が 9.8cm を測る。2114 は須恵器の杯で、口径の 1/4 残る。復元口径が 15.2cm、器高が 3.8cm、復元底径が 11.5cm を測る。2117 は須恵器の高台付杯



第 214 図　II 区　SE2015 出土遺物実測図

で、底径の 1/2 が残る。復元口径が 17.7cm、器高が 7.0cm、底径が 11.0cm を測る。赤焼けの須恵器である。2118 は須恵器の小杯で、底径の 1/4 が残る。内器面にタール状のものが付着する。2120 は須恵器の輪状つまみを持つ杯蓋で、口縁の 3/4 が残る。口径が 14.9cm、器高が 2.1cm を測る。内器面には重ね焼き痕が残る。2121 は須恵器の脚付壷である。脚の貼り付け部分は剥離している。

・SE-2015

［遺構状況］　140-J-18 グリッドで検出。S-2004 を切っている。平面形は長軸が 1.0m、短軸が 0.9m を測り楕円形を呈する。確認面からの深さは 2m を測る。埋土は廃絶後埋め込んだもののようである。掘り下げていくと径が狭くなるため、最下層まで掘り下げることが困難になってきたが、辛うじてそこに到達した。ただ、埋土の注記は見えないため大まかに捉えるしかなかった。

出土遺物は上面からの出土が多く、竪穴建物との関係も検討する必要がある。

［出土遺物］　出土遺物は S-2008 に比べ少なく、図化できる遺物も少なかった。図化したのは 15 点である。

2067 は須恵器の高台付杯で、底径の 1/4 が残る。復元底径が 9.0cm を測る。

2151 は土師器の鉢で完形である。口径が 17.0cm、器高が 6.5cm、底径が 11.8cm 内外器面に赤彩を施す。2152 は土師器の杯で、口縁の 3/4 が残る。口径が 14.4cm、器高が 3.4cm、底径が 11.6cm を測る。外器面に赤彩が施される。廃棄後に火を受けたためか煤が付着する。2153 は土師器の杯で、復元底径が 9.0cm を測る。内外器面に赤彩が施される。2154 は土師器の高台付杯である。復元底径が 9.4cm を測る。

2155 は土師器の甕である。2156 は土師器の甕である。2157 は土師器の甕である。2158 は土師器の甕である。2159 は土師器の甕で口縁の 1/6 が残り、口径が 21.4cm を測る。2160 は土師器の甑の把手で手びねりによる成形のちナデ調整される。表面に繊維の痕跡があり、成形との関係がある可能性がある。

2161 は赤焼け須恵器の杯で、口縁の 1/3 が残る。復元口径が 13.6cm、器高が 3.5cm、復元底径が 9.6cm を測る。2162 は須恵器の小杯で内外器面に自然釉がかかる。2163 は須恵器の杯で復元口径が 13.0cm、器高が 4.0cm、復元底径 8.7cm を測る。2164 は須恵器の皿で、復元口径が 19.4cm を測る。外器面に自然釉がかかる。

(5) 溝状遺構

・SD-2011

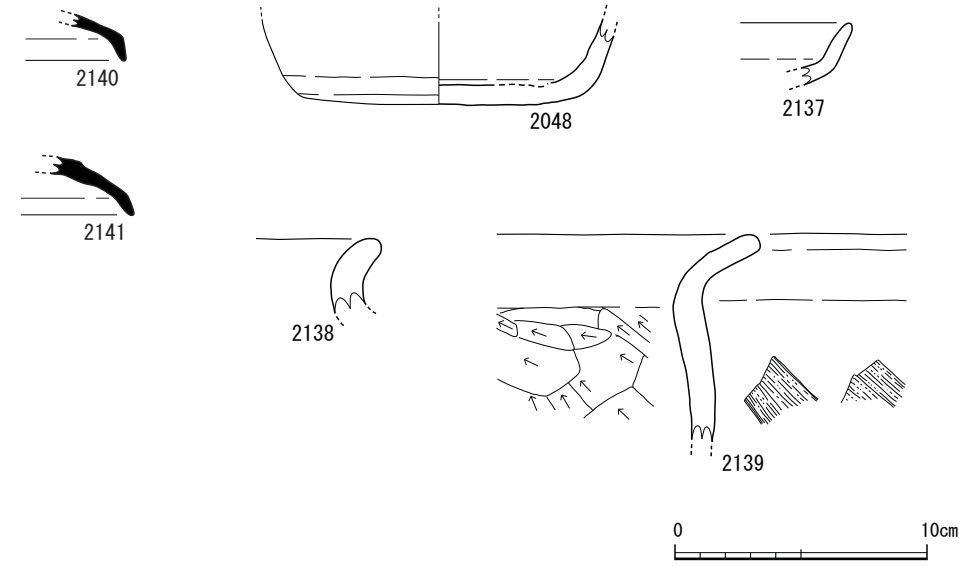
[遺構状況]　140-J・K-16 グリッドで検出。当初 SI-2010 の一部と考えていたが、精査により別遺構と判明した。SI-2010 を切っており、南北に延びる遺構である。南側は撹乱で失われているが、北側には続くようである。確認した範囲での長さは 3.5m、上部幅で 1.2m を測る。深さは浅く 10cm 程度である。

[出土遺物]　2048 は土師器の杯の底部片で、復元底径が 11.3cm を測る。内外器面とも赤彩が施される。2137 は土師器の皿であるが小片のため全体の状況はわからない。内外器面とも赤彩が施される。2138 は土師器の甕の口縁付近のみの破片である。内外器面とも赤彩が施される。2139 も土師器の甕である。口縁はくの字に屈曲するがやや弱い。胴部の張り出しも口径より狭い。

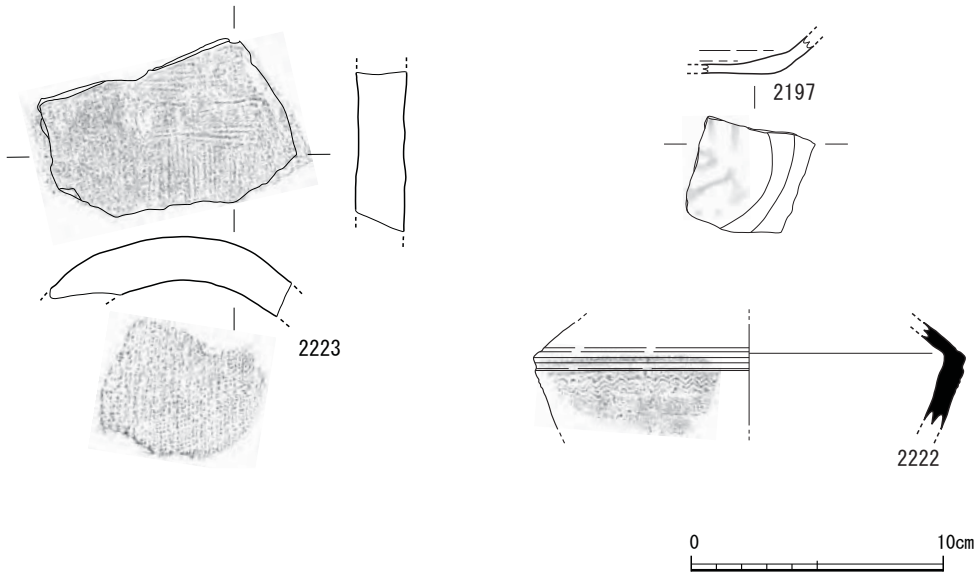
2140・2141 はともに須恵器の杯蓋である。形態的に違いがあり時期差によるものであろうか。2140 は口縁部の屈曲があり、2141 は弱い屈曲のみである。

(6) ピット

40 個程度検出した。掘立柱建物の柱と考えられるものもあったが、調査範囲の狭さから掘立柱建物を想定するまでには至らなかった。



第 215 図　II 区 SD2011 出土遺物実測図



第 216 図　II 区　包含層出土遺物実測図

(6) 調査 II 区遺構外出土遺物

包含層中の出土遺物は多くあったが、ここでは特徴的な 3 点のみを取り上げる。

2223 は丸瓦片で凸部はナデ調整が施され、凹部は布目痕が残る。布目は細かく糸の状況もわかる。模骨痕もみられる。

2197 は土師器の杯で、J-16・17 グリッド包含層のⅣ層から出土した。外器面に墨書を有する。ただ、文字自体は不明である。

2222 は包含層のⅢ層からの出土で、須恵器の長頸壺の肩部である。肩の屈曲部付近に 2 本の沈線がめぐり、その会に 3 本の櫛状工具により丁寧な波状文がめぐる。時期的に異なるものかもしれない。

第４節　調査Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区の遺物

調査Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区は先に述べたように計画変更により表土剥ぎを行い、簡単に精査を一度試みただけで埋め戻した調査区である。ただ、表土剥ぎ時や精査時に若干その場の状況を確認し、遺物の収集を行っているのでそれを簡単にここで簡単に述べる。なお、これらの調査区における層序は、表土として除去した近世まで遡る層までは確認したがそれより遡っては不明であることを付け加える。

いずれも本調査に入っていないため、遺物と遺構の関係は分からないが、Ⅰ区およびⅡ区の出土遺物とそう変わらない。ただ、出土点数は少なく、遺構の検出状況も少なかった。特にⅤ区では砂層が見られⅠ区の東側と同じように近世以降の撹乱が及ぶものと判断できた。そのため、ここは表土剥ぎを多めに行った。

遺物は輸入陶磁器が若干含まれるが、ほとんどは古代以降の土器類が出土している。本調査には入らなかったので出土点数はコンテナで１箱程度で、遺物量は少ない。

第Ⅳ章　自然科学分析

第 1 節　二本木遺跡群第 8 次調査の自然科学分析の自然科学分析

株式会社　吉田生物研究所

1. 試料

ⅰ) 試料は熊本県二本木合同庁舎遺跡から出土した用途不明品 1 点である。

ⅱ) 試料は熊本県二本木合同庁舎遺跡から出土した建築部材 4 点である。

2. 観察方法

ⅰ) 剃刀で木口 (横断面)、柾目 (放射断面)、板目 (接線断面) の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

ⅱ) 剃刀で木口 (横断面)、柾目 (放射断面)、板目 (接線断面) の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

ⅰ) 樹種同定結果 (針葉樹 1 種) の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

表 1　樹種同定結果

遺物番号	品名	樹種
1625	板材	マツ科モミ属

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1 ～ 4 個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ⅱ) 樹種同定結果 (広葉樹 1 種) の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

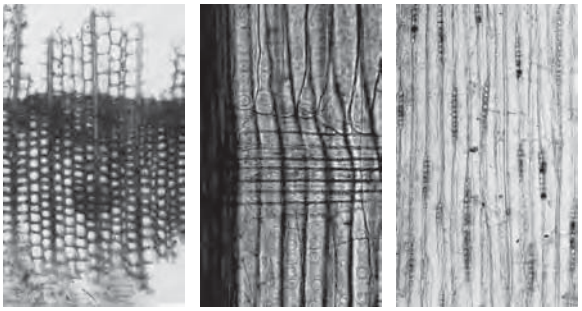
1) クスノキ科クスノキ属クスノキ (*Cinnamomum Camphora* Presl)

表 2　樹種同定結果

遺物番号	品名	樹種
1626	井戸枠 1	クスノキ科クスノキ属クスノキ
1627	井戸枠 2	クスノキ科クスノキ属クスノキ
1628	井戸枠 3	クスノキ科クスノキ属クスノキ
1629	井戸枠 4	クスノキ科クスノキ属クスノキ

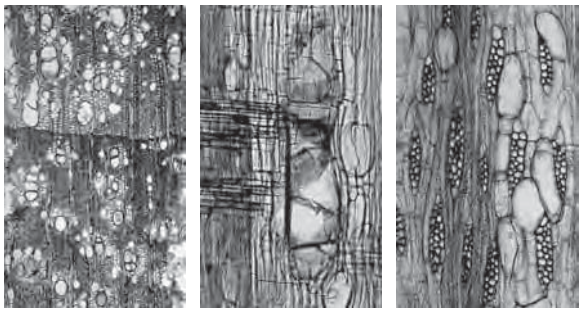
散孔材である。木口では中庸の道管 (～ 200μm) が単独または 2 ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞 (樟脳油貯蔵細胞) がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は 1 ～ 3 細胞列、高さ～ 800 μ m からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州 (関東以西)、四国、九州に分布する。

用途不明品〈1〉

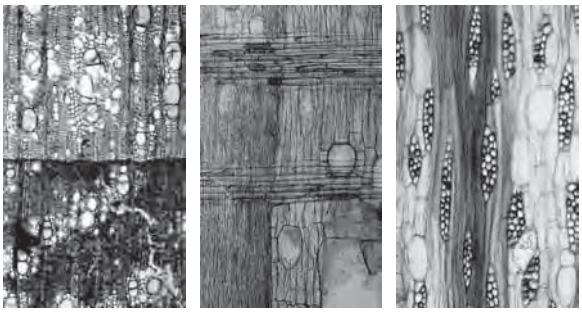


1.マツ科モミ属(遺物 No1625)
a:木口　b:柾目　c:板目
200μm：1a,1c
200μm：1b

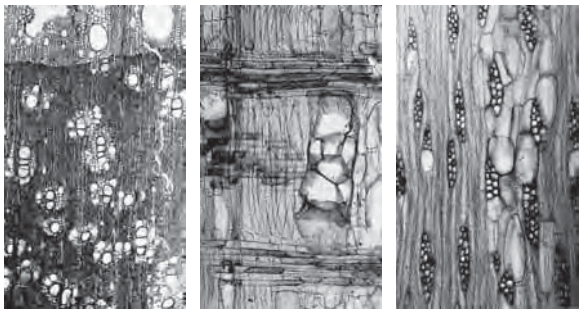
井戸枠材〈1〉



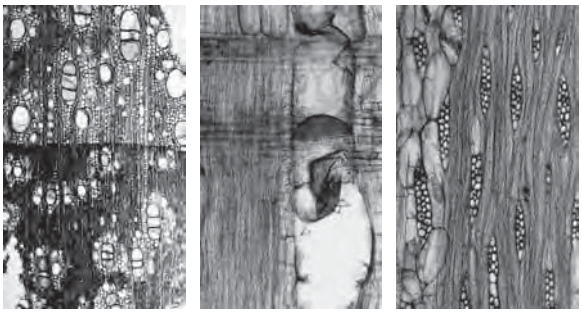
井戸枠材〈2〉



井戸枠材〈3〉



井戸枠材〈4〉



1.クスノキ科クスノキ属 (No1626)2.クスノキ科クスノキ属 (No1627)
3.クスノキ科クスノキ属 (No1628)4.クスノキ科クスノキ属 (No1629)
a:木口　b:柾目　c:板目
100μm：1c,2c,4c,
200μm：1a•b,2a•b,3a～c,4a•b

二本木遺跡群第 8 次調査出土木製品樹種顕微鏡写真

引用文献
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1988)
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社 (1982)
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所 (1999)
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社 (1979)
深澤和三「樹体の解剖」海青社 (1997)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

第２節　二本木遺跡群第８次調査出土の古代・中世人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】: 熊本県、中世人骨、墓壙、井戸跡、溝跡、保存不良

はじめに

熊本市春日２丁目に所在する二本木遺跡群 (合同庁舎) の発掘調査が庁舎改築に伴って、2005 年度 (平成 17 年度) と 2006 年度 (平成 18 年度) におこなわれ、墓壙からは古代末の人骨が、井戸跡と溝状遺構からは中世人骨が出土した。

熊本県では古代に属する古人骨の出土例が次第に増加している。2003 年 (平成 15 年) に二本木遺跡の第 18 次調査区から古代に属する人骨が 1 体出土した (松下、2005)。この人骨は溝から出土した四肢骨の骨片にすぎなかった。2006 年 (平成 18 年) におこなわれた第 28 次調査においても古代末の人骨２体が出土したが、これは大腿骨片と歯のみであった。その他に、2006 年には、大江遺跡群第 97 次調査区から９世紀後半の男性人骨が、また古町遺跡第５次調査区では 10 世紀初頭に属する男性人骨が多くの副葬品 (土師器など) を伴って出土したが、ともに保存状態は著しく悪いものであった。

中世人骨については、二本木遺跡群からはこれまでに、第８次調査区、第 13 次調査区、第 14 次調査区、第 26 次調査区、第 27 次調査区から中世人骨が、第 28 次調査区では中世以降の人骨が出土している。

今回の調査では井戸跡と溝跡から中世人骨が検出されたが、二本木遺跡群では第 27 次調査区、第 35 次調査区、春日地区からも井戸跡から中世人骨が出土している。

熊本県での中世人骨の報告例としては、荒尾市淨業寺 (永井、1965)、宇土市緑川 (故松野・他、1970)、城南町尾窪中世墳墓群 (内藤、1973)、塚原中世墳墓 (内藤、1975)、荒尾市杉谷遺跡 (内藤・他、1978)、興善寺町馬場遺跡 (松下、1980)、深田村灰塚遺跡 (松下、2001)、西合志町船入遺跡 (松下、2004) があるにすぎない。尾窪中世墳墓群から出土した中世人骨は、比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は関東地方だけにみられる地域的特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴であることを示した貴重な例である。

最近は植木町の松山遺跡からも、また熊本市内では、二本木遺跡群の他に上高橋遺跡、南新宮遺跡からも中世人骨が出土している。

今回出土した人骨の保存状態は悪かったが、現場でできる限りの観察などをおこない、取り上げが可能であった人骨については、人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資　料

2005 年度の調査では墓壙 (ST-040) からほぼ完全な 1 体の人骨が、白磁碗２個、白磁皿 1 枚、土師器皿２枚、鉄刀 (小刀)1 振りを伴って出土した。この人骨は男性人骨で、所属時期は副葬品の考古学的所見から 12 世紀初頭に比定されている。2006 年度の調査では井戸跡 (SE-066) と溝状遺構 (SD-178) からそれぞれ 1 個の頭蓋が検出された。両頭蓋とも中世に属する人骨と推定されているが、保存状態が悪く、性別は２体とも不明である。また、同じ年度に別の溝状遺構からも中世の頭蓋と大腿骨が出土した (SD-046)。この人骨を

* Takayuki　MATSUSHITA,** Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

第 217 図　遺跡の位置

(Fig1.Location of the Nihongi(Godochosya) sites, Kumamoto Prefecture)

第 218 図　遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig2.Location of the Nihongi(Godochosya) sites, Kumamoto Prefecture)

精査したところ少なくとも２体分の頭蓋が含まれていることが判明した。従って、SD-046 内から検出された人骨は複数体あるので、骨種別に番号を付けることにした。SK-1(頭蓋) と FE-1(大腿骨) は同一個体の可能性がある。

表１　出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備　　考
ST-40	男性	壮年	12 世紀初頭、仰臥、膝関節屈曲
SE-066	女性	壮年	中世、井戸の埋土から出土
SD-178	不明	不明	中世、溝から出土
SD-046-SK-1	男性	壮年	脳頭蓋
SD-046-SK-2	不明	不明	右側頭頂骨、右側側頭骨
SD-046-SK-3	不明	不明	上顎骨と歯
SD-046-FE-1	男性	不明	左側大腿骨

なお、年齢区分は表２のとおりである。

表２　年齢区分　(Table 2. Division of age)

年齢区分		年　　齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳　(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳～ 15 歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳～ 20 歳　(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳～ 39 歳　(40 歳未満)
	熟年	40 歳～ 59 歳　(60 歳未満)
	老年	60 歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所　見

A　埋葬姿勢

ST-040 人骨 (男性・壮年)

埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。右側の肘関は強屈状態 (上腕骨と前腕の骨が接するぐらい曲げた状態)、左側は約 160 度曲げられている。膝関節は左右とも強屈 (大腿骨と下腿の骨が接するぐらい曲げた状態) して、右側へ倒れている。遺存状態は比較的良好で、ほぼ全身の骨が残っていた。左右の足の骨も確認できたが、骨質は見た目以上に脆く、現状の状態で取り上げることはできなかった。

副葬品として、白磁碗２個、白磁皿１枚、土師器皿２枚、鉄刀 (小刀)1 振りが、顔から右側上肢にかけて置かれていた。この時期の人骨の出土例は少ないが、埋葬姿勢が伸展状態 (膝関節が伸展) ではなく、膝関節を屈曲して埋葬いるのは珍しい。2008 年 (平成 20 年) に熊本市教育委員会が調査をおこなった二本木遺跡群 35 次調査区でも仰臥で、膝関節を屈曲した人骨が黒色土器を伴って出土している。この例も 11 世紀後半から 12 世紀初頭に比定されており、古代末には膝関節を伸展する姿勢と屈曲する姿勢の両方が存在したようである。

SE-066 人骨 (性別・年齢不明)

直径が 2m を超える、規模の大きな井戸の埋土中から頭蓋が検出された。頭蓋の周辺を精査したが、検出できたのは頭蓋のみである。また、下顎骨は存在しない。頭蓋は右側を下にし、顔を北に向けて、横向きで出土した。頭蓋は真横になっていたのではなく右側前頭部が深く埋まった状態だった。また、頭蓋は土厚で潰れることなく、脳頭蓋は丸さを保った状態で検出された。人骨の出土状況からは埋葬状態を保っているとは考えがたい。

二本木遺跡群ではこれまでに井戸跡から人骨が検出されている。1 例は二本木遺跡群第 27 次調査区 (2006 年調査) から 1 個の中世人頭蓋が、2 例目は二本木遺跡群春日地区 (2006 年調査) で、9 世紀代に属すると推測されている 2 個の頭蓋が検出されている。さらに二本木遺跡群第 35 次調査区 (2008 年調査) でも井戸跡の埋土から 2 個の頭蓋が出土した。従って、二本木遺跡群の井戸跡から人骨が検出されたのは本例で 4 例目となり、意図的に井戸跡に頭蓋を入れたようである。

SD-178 人骨 (性別・年齢不明)

溝状遺構から検出された。検出されたのは頭蓋のみで、保存状態は著しく悪い。側頭骨の一部などを現場で確認した。埋葬姿勢や顔の向きなどは不明である。本例は中世初め頃の人骨と推測されている。

B　人骨の形質

ST-040 人骨 (男性・壮年)

ほぼ全身の骨が残っていたが、見た目以上に骨質はもろく、検出状態を保ったまま人骨を取り上げることはできなかった。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

右側半分の取り上げが可能であった。骨壁はかなり厚く、堅牢である。外後頭隆起の発達は良好であるが、乳様突起はかなり小さい。右側の外耳道の観察できたが、骨腫は存在しない。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合とラムダ縫合は内外両板とも開離している。矢状縫合も内外両板とも開離していたようである。計測はできないが、脳頭蓋の径はかなり大きい。また、観察したところ頭型は長頭に近い中頭型と思われる。

(2) 顔面頭蓋

ほとんど取り上げることができなかった。左側上顎骨の観察ができた。歯槽性突顎の傾向がうかがえるが、著しく強いものではない。鼻根部の様態は不明である。下顎骨は右側下顎枝が残っていたが、径はかなり大きい。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/７６５４３２/	１２３４５６７８
/７６５４３２１	１２３４５６７８

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　/: 不明　▽: 先天性欠損、番号は歯種〕
〔1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1(咬耗がエナメル質のみ) ～ 2 度 (咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ) である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

①上腕骨

両側とも骨体が残存していた。三角筋粗面の発達は良好で、骨体は太い。

計測値は、中央最大径が 23mm(左)、中央最小径は 18mm(左) で、骨体断面示数は 78.26(左) となり、骨体の扁平性はあまり強くない。骨体最小周は 65mm(左)、中央周は 70mm(左) で、骨体は太い。

②橈骨・尺骨

両側が残存していた。骨体は太く、骨間縁もよく発達している。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

右側の腸骨が残存していた。大坐骨切痕の角度は小さい。

②大腿骨

左右の骨体が残存していた。長さは長くはないようであるが、粗線の発達は良好で、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が 28mm(右)、30mm(左)、横径は 27mm(右)、27mm(左) で、骨体中央断面示数は 103.70(右)、111.11(左) となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は 87mm(右)、90mm(左) で、左側骨体は太い。また、上骨体断面示数は 77.42(右)、80.65(左) となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

両側とも骨体が残存していた。骨体は太く、ヒラメ筋線の発達もきわめて良好である。骨体の断面形は、右側はヘリチカのＶ型、左側はⅡ型を呈している。

計測値は、中央最大径が 32mm(左)、中央横径は 23mm(左) で、中央断面示数は 71.88(左) となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 81mm(左)、最小周は 87mm(左) で、骨体は太い。

④腓骨

骨体の径は大きく、著しく扁平である。また、稜の発達は良好で、溝も深い。

5. 性別・年齢

外後頭隆起の発達がきわめて良好で、大坐骨切痕の角度が小さいことから、性別を男性と推定した。年齢は、三主縫合が内外両板とも開離していることから壮年と思われる。

SE-066 人骨 (女性・壮年)

残存していたの頭蓋のみであるが、下顎骨は存在しない。前頭骨、上顎骨、側頭骨の一部が残存していた。前頭結節の発達はみられないが、前頭鱗はやや膨隆しており、眉間はやや膨隆してはいるものの眉上弓に隆起はみられない。冠状縫合と矢状縫合の一部の観察ができた。両縫合とも内外両板は開離している。上顎骨は狭く、径は小さい。上顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ 7 ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①　｜　① ② ③ ④ ⑤ 6 ⑦ ⑧

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　/: 不明　▽: 先天性欠損、番号は歯種〕
〔1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) である。また、風習的抜歯の痕跡は認められない。

前頭鱗はやや膨隆しており、眉上弓に隆起はみられないことから、性別を女性と推定した。年齢は観察できた縫合が内外両板とも開離していることから壮年と思われる。

SD-178 人骨 (性別・年齢不明)

残存していたのは頭蓋のみである。側頭骨の一部が残存していたにすぎない。保存状態は著しく悪く、泥化寸前である。性別・年齢はともに不明である。

SD-046 人骨

頭蓋と左側大腿骨のみである。頭蓋は右側側頭骨が 2 体分あるので、頭蓋は少なくとも 2 体分である。

SD-046-SK-1(男性・壮年)

脳頭蓋が残存していた。保存状態は良好で、骨壁はやや堅牢である。外後頭隆起はやや突出している。乳様突起は大きかったようである。三主縫合はともに内外両板とも開離している。また、前頭縫合が認められる。前頭骨は眼窩部を欠損しているので、眉上弓の隆起の様態などは不明である。計測はほとんどできないが、頭蓋の径は大きい。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところ頭型は長頭型である。

頭蓋の径が大きいこと、外後頭隆起がわずかに発達していることから、性別を男性と推定した。年齢は三主縫合の内外両板が開離していることから壮年と思われる。

SD-046-SK-2(性別・年齢不明)

右側頭頂骨の一部 (乳突角部) と右側側頭骨の一部 (下顎窩) のみである。骨壁はしっかりしている。性別・年齢は不明である。

SD-046-SK-3(性別・年齢不明)

上顎骨歯槽部と歯のみである。上顎骨の径は小さい。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

８７／／／③②①　｜　①②③④／６／／

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　/: 不明　▽: 先天性欠損、番号は歯種〕
〔1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) である。

性別・年齢は不明である。

SD-046-FE-1(大腿骨・男性)

左側骨体が残存していた。骨体の径はそれほど大きいものでない。

計測値は、骨体中央矢状径が 28mm(左)、横径は 25mm(左) で、骨体中央断面示数は 112.00(左) となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は 85mm(左) で、骨体はあまり大きくはない。また、上骨体断面示数は 76.67(左) となり、骨体上部は扁平である。骨体はそれほど大きくはないが、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好であることから、性別を男性と推定した。年齢は不明である。

考　察

計測ができた上腕骨、大腿骨、脛骨について、周辺の資料と比較してみた。

1. 上腕骨

表 3 は上顎骨の比較表である。二本木古代人の中央周は 70mm で、表 3 では小倉城二の丸 1 号に次いで大きく、骨体が太いことがわかる。骨体断面示数は、78.06 で、小倉城代米御蔵跡 K-4 に次いで大きく、骨体の扁平性は弱い。

表３　上腕骨計測値 (男性、右、㎜)(Table 3. Comparison of measurements snd indices of male right humeri)

		二本木 (合同庁舎)	大江 111 次	小倉城二の丸		小倉城代米御蔵跡			土井ヶ浜	吉母浜	
		古代人	中世人	中世人		中　世　人			中世人	中世人	
		熊本県	熊本県	福岡県		福　岡　県			山口県	山口県	
		熊本市	熊本市	北九州市		北　九　州　市			豊北町	豊浦町	
			(松下・他)	(松下)		(松下)			(松下)	(中橋・他)	
		ST-040	1 号	1 号	2 号	1 号	2 号	K-4	1402	n	M
5.	中央最大経	23(左)	21	25	24	19(左)	20	19(左)	21	20	22.9
6.	中央最小径	18(左)	15	18	17	14(左)	15	15(左)	14	20	17.3
7.	骨体最小周	65(左)	-	66	61	53(左)	56	56(左)	54	20	62.6
7(a).	中央周	70(左)	62	73	68	57(左)	60	58(左)	60	20	66.4
6/5	骨体断面示数	78.06(左)	71.43	72.00	70.83	73.68(左)	75.00	78.95(左)	66.67	20	75.6(左)

2. 大腿骨

表 4 は大腿骨の比較表である。二本木古代人の中央周は 87mm で、塚原 20 号、小倉城代米御蔵跡 2 号、小倉城二の丸 1 号、吉母浜に次いで大きく、小倉城代米御蔵跡 K-3 と同値で、骨体は大きい。また、吉母浜ともほとんど大差ない。一方、二本木中世人の中央周は 85mm で、この計測値は塚原 45 号、小倉城代米御蔵跡 K-2、小倉城二の丸 2 号と同値で、表 4 では小倉城代米御蔵跡 1 号、土井ヶ浜 1402、塚原 1 号に次いで小さな値である。

骨体中央断面示数は、二本木古代人で 103.70 となり、小倉城二の丸 1 号、小倉城代米御蔵跡 1 号、小倉城二の丸 2 号、小倉城代米御蔵跡 2 号についで大きく、二本木中世人では 112.00 となり、この示数値は小倉城二の丸 1 号、小倉城代米御蔵跡 1 号に次いで大きな値となり、二本木の古代人も中世人も粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。

上骨体断面示数は、二本木古代人で、77.42、中世人で 76.67 となり、両者は大差なく、小倉城代米御蔵跡 K-2 と吉母浜にもっとも近く、骨体上部は扁平である。

表４　大腿骨計測値 (男性、右、㎜)
(Table 4. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		二本木 (合同庁舎)		塚　　原			小倉城代米御蔵跡				小倉城二の丸		土井ヶ浜	吉母浜	
		古代人	中世人	中　世　人			中　世　人				中世人		中世人	中世人	
		熊　本　県		熊　本　県			福　岡　県				福岡県		山口県	山口県	
		熊　本　市		城　南　町			北　九　州　市				北九州市		豊北町	下関市	
				(内　藤)			(松下)				(松下)		(松下)	(中橋・他)	
		ST-040	SD-046-FE-1	1 号	20 号	45 号	1 号	2 号	K-2	K-3	1 号	2 号	1402	n	M
6.	骨体中央矢状径	28	28(左)	25.5	27	27	25	30	26	26(左)	30	28	24	19	27.7
7.	骨体中央横径	27	25(左)	25	28	27.5	22	28	27	30(左)	26	26	26	19	27.5
8.	骨体中央周	87	85(左)	80	90	85	73	90	85	87(左)	89	85	79	19	87.5
9.	骨体上横径	31	30(左)	-	-	-	26	31	30	31(左)	32	30	33	19	32.1
10.	骨体上矢状径	24	23(左)	-	-	-	22	25	23	26(左)	26	24	23	19	24.6
6/7	骨体中央断面示数	103.70	112.00 (左)	102.00	96.43	98.18	113.67	107.14	96.30	86.67 (左)	115.38	107.69	92.31	19	100.6
10/9	上骨体断面示	77.42	76.67 (左)	-	-	-	84.62	80.65	76.67	83.87 (左)	81.25	80.00	69.70	19	76.5

※塚原は左右が判明しない

3. 脛骨

表 5 は脛骨の比較表である。二本木古代人の骨体周は 87mm、最小周は 81mm で、両計測値とも表 5 中では最大値となり、骨体の径はかなり大きい。中央断面示数は 71.88 で、塚原 1 号、大江 111 次 1 号、吉母浜よりも小さいが、土井ヶ浜 1402、小倉城代米御蔵跡 2 号、小倉城二の丸 1 号、2 号よりも大きく、小倉城代米御蔵跡 Y-1 に近い。

表 5　脛骨 (男性、右、㎜)(Table 5. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		二本木 (合同庁舎)	塚　原	大江 111 次	小倉城代米御蔵跡		小倉城二の丸		土井ヶ浜	吉母浜	
		古代人	中世人	中世人	中世人		中世人		中世人	中世人	
		熊本県	熊本県	熊本県	福岡県		福岡県		山口県	山口県	
		熊本市	城南町	熊本市	北九州市		北九州市		豊北町	下関市	
			(内藤)	(松下・他)	(松下)		(松下)		(松下)	(中橋・他)	
		ST-040	1 号	1 号	2 号	Y-1	1 号	2 号	1402	n	M
8.	中央最大径	32(左)	25	30	30	29	31(左)	28(左)	29	20	29.4
9.	中央横径	23(左)	20	23	20	21	21(左)	19(左)	19	20	21.5
10.	骨体周	87(左)	75	83	80	77	83(左)	75(左)	75	20	80.2
10b.	最小周	81(左)	-	75	74	70	76(左)	71(左)	68	20	74.2
9/8	中央断面示数	71.88(左)	80.00	76.67	66.67	72.41	67.74(左)	67.86(左)	65.52	20	73.3
10b/1	長厚示数	-	-	-	21.88(左)	22.22	22.09(左)	-	20.48	14	22.3

要　約

熊本市春日 2 丁目に所在する二本木遺跡群 (合同庁舎) の発掘調査がおこなわれ、墓壙、井戸跡、溝状遺構から人骨が検出された。人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、計測ができた人骨もある。人類学的観察や計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 墓壙からは、白磁碗 2 個、白磁皿 1 枚、土師器皿 2 枚、鉄刀 (小刀)1 振りを伴った 12 世紀初　頭に属する人骨 1 体が埋葬状態で出土した。この人骨は壮年の男性骨である。埋葬姿勢は仰臥で、膝関節は屈曲していた。

2. 井戸跡からは中世に属する壮年の男性頭蓋が 1 個出土した。

3. 溝跡からは、頭蓋の一部 (性別・年齢不明) が、別の溝跡からは少なくとも 2 体分の頭蓋と 1 本の　男性と思われる左側大腿骨が出土した。このうちの 1 個の頭蓋は壮年の男性頭蓋である。溝跡から出土した人骨も中世人骨と推測されている。

4. 井戸跡や溝跡から検出された人骨はいずれも埋葬状態を保っていない。二本木遺跡では調査範囲が広がるにつれて次第に井戸跡や溝跡から人骨が出土するケースが増えてきた。これらの人骨はおそらく遺棄された遺体の一部と思われる。

5. 古代末の頭蓋は長頭に傾いた中頭型で、中世頭蓋は長頭型であった。顔面の特徴は明らかにできなかったが、古代末の人骨には歯槽性突顎の傾向がみられた。

6. 古代末の男性骨は、頭蓋壁が厚く、四肢骨は太くて頑丈である。上腕骨と脛骨には扁平性は認められないが、大腿骨体上部や腓骨は扁平である。大腿骨は、長さは長くはないようであるが、粗線と骨体両側面の後方への発達はきわめて良好である。また、脛骨はとくに径が大きく、ヒラメ筋線の発達もよく発達している。

7. 豪華な副葬品を伴った男性は、四肢が屈強で、逞しい体格をしていたようである。これまで形質的特徴がよくわからなかった平安末期の人々の特徴の一端を明らかにできた意義はきわめて大きい。

謝辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

(古代人骨)
1. 松下孝幸、2005: 熊本市二本木遺跡群第 18 次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群Ⅰ - 第 18 次調査区発掘　調査報告書 -:41-46.
2. 松下孝幸、2007: 熊本市古町遺跡第 5 次調査区出土の平安時代人骨。熊本市埋蔵文化財調査年報第 9 号 :148-152.
3. 松下孝幸、熊本市大江遺跡群第 97 次調査区出土の平安時代人骨。(投稿中)
4. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群第 28 次調査区出土の古代・中世以降人骨。(投稿中)
(中世人骨)
5. 松下孝幸、1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺Ⅰ (熊本県文化財調査報告第 45 集):145-159.
6. 松下孝幸、2001: 熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡 (Ⅱ)(熊本県文化財調査報告第 197 集):239-245.
7. 松下孝幸、2004: 熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡　一般国道 3 号熊本北バイパス改築事業に　伴う埋蔵文化財の調査 (熊本県文化財発掘調査報告第 217 集):91-97.
8. 松下孝幸、2007: 熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅲ - 二本木遺跡群第 26 次調　査区発掘調査報告書 -:126-129.
9. 松下孝幸、2007: 熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群Ⅱ - 二本木遺跡群第 13 次調　査区発掘調査報告書 -:381-393.
10. 松下孝幸・他、熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の人骨。(投稿中)
11. 故松野茂・他、1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌、44:999-1016.
12. 永井昌文、1965: 荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏 (荒尾市文化財報告第 1 集):51-53.
13. 内藤芳篤、1973: 人骨。尾窪 - 熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査 (熊本県文化財調査報告 12):62-78.
14. 内藤芳篤、1975: 塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨について。塚原 (熊本県文化財調査報告第 16 集):317-322.
15. 内藤芳篤・他、1978: 杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡 (熊本県荒尾市文化財調査報告第 3 集):　116-122.
(その他)
16.Martin-Saller,1957:Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag,Stuttugart:429-597.

表 6　脳頭蓋 (㎜)(Calvaria)・二本木 (合同庁舎)

		SD-046-SK-1 男性
1.	頭蓋最大長	-
8.	頭蓋最大幅	134
17.	バジオン・ブレグマ高	-
8/1	頭蓋長幅示数	-
17/1	頭蓋長高示数	-
17/8	頭蓋幅高示数	-
1+8+17/3	頭蓋モズルス	-
5.	頭蓋底長	-
9.	最小前頭幅	-
10.	最大前頭幅	-
11.	両耳幅	-
12.	最大後頭幅	-
13.	乳突幅	-
7.	大後頭孔長	-
16.	大後頭孔幅	-
16/7	大後頭示数	-
23.	頭蓋水平周	-
24.	横弧長	-
25.	正中矢状弧長	-
26.	正中矢状前頭弧長	-
27.	正中矢状頭頂弧長	-
28.	正中矢状後頭弧長	-
29.	正中矢状前頭弦長	-
30.	正中矢状頭頂弦長	-
31.	正中矢状後頭弦長	-
29/26	矢状前頭示数	-
30/27	矢状頭頂示数	-
31/28	矢状後頭示数	-

表 7　上腕骨 (㎜)(Humerus)・二本木 (合同庁舎)

			ST-040 男性
1.	上腕骨最大長	(右)	-
		(左)	-
2.	上腕骨全長	(右)	-
		(左)	-
3.	上端幅	(右)	-
		(左)	-
3(1).	横上径	(右)	-
		(左)	-
4.	下端幅	(右)	-
		(左)	-
5.	中央最大径	(右)	-
		(左)	23
6.	中央最小径	(右)	-
		(左)	18
7.	骨体最小周	(右)	-
		(左)	65
7(a).	中央周	(右)	-
		(左)	70
8.	頭周	(右)	-
		(左)	-
9.	頭最大横径	(右)	-
		(左)	-
10.	頭最大矢状径	(右)	-
		(左)	-
11.	滑車幅	(右)	-
		(左)	-
12.	小頭幅	(右)	-
		(左)	-
12(a).	滑車幅および小頭幅	(右)	-
		(左)	-
13.	滑車深	(右)	-
		(左)	-
14.	肘頭窩幅	(右)	-
		(左)	-
15.	肘頭窩深	(右)	-
		(左)	-
6/5	骨体断面示数	(右)	78.06
		(左)	-
7/1	長厚示数	(右)	-
		(左)	-

表 8　大腿骨 (㎜)(Femur)・二本木 (合同庁舎)

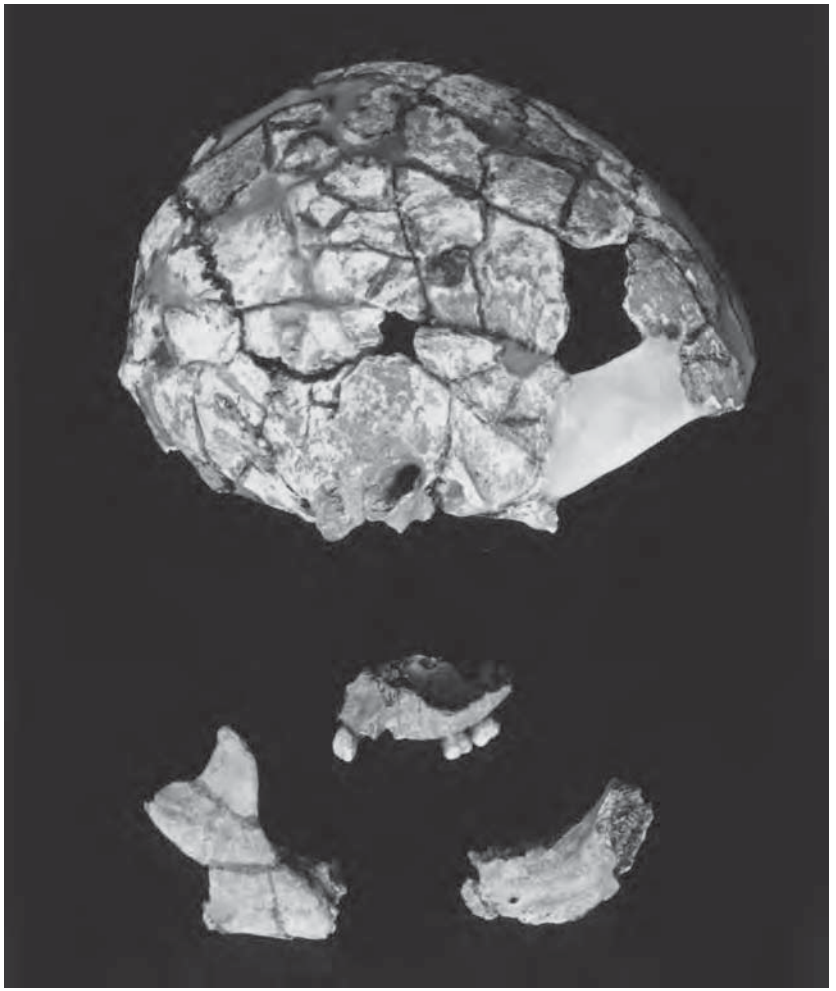
			ST-040 男性	SD-046-FE-1 男性
1.	最大長	(右)	-	
		(左)	-	
2.	自然位全長	(右)	-	-
		(左)	-	-
3.	最大転子長	(右)	-	-
		(左)	-	-
4.	自然位転子長	(右)	-	-
		(左)	-	-
6.	骨体中央矢状径	(右)	28	-
		(左)	30	28
7.	骨体中央横径	(右)	27	-
		(左)	27	25
8.	骨体中央周	(右)	87	-
		(左)	90	85
9.	骨体上横径	(右)	31	-
		(左)	31	30
10.	骨体上矢状径	(右)	24	-
		(左)	25	23
15.	頚垂直径	(右)	-	-
		(左)	-	-
16.	頚矢状径	(右)	-	-
		(左)	-	-
17.	頚周	(右)	-	-
		(左)	-	-
18.	頭垂直径	(右)	-	-
		(左)	-	-
19.	頭横径	(右)	-	-
		(左)	-	-
20.	頭周	(右)	-	-
		(左)	-	-
21.	上顆幅	(右)	-	-
		(左)	-	-
8/2	長厚示数	(右)	-	-
		(左)	-	-
6/7	骨体中央断面示数	(右)	103.70	-
		(左)	111.11	112.00
10/9	上骨体断面示数	(右)	77.42	-
		(左)	80.65	76.67

表９ 脛骨 (㎜)(Tibia)・
二本木 (合同庁舎)

			ST-040 男性
1.	脛骨全長	(右)	-
		(左)	-
1a.	脛骨最大長	(右)	-
		(左)	-
1b.	脛骨長	(右)	-
		(左)	-
2.	顆距間距離	(右)	-
		(左)	-
3.	最大上端幅	(右)	-
		(左)	-
3a.	上内関節面幅	(右)	-
		(左)	-
3b.	上外関節面幅	(右)	-
		(左)	-
4a.	上内関節面深	(右)	-
		(左)	-
4b.	上外関節面深	(右)	-
		(左)	-
6.	最大下端幅	(右)	-
		(左)	-
7.	下端矢状径	(右)	-
		(左)	-
8.	中央最大径	(右)	-
		(左)	32
8a.	栄養孔位最大径	(右)	-
		(左)	36
9.	中央横径	(右)	-
		(左)	23
9a.	栄養孔位横径	(右)	-
		(左)	23
10.	骨体周	(右)	-
		(左)	87
10a.	栄養孔位周	(右)	-
		(左)	94
10b.	最小周	(右)	-
		(左)	81
9/8.	中央断面示数	(右)	-
		(左)	71.88
9a/8a	栄養孔位断面示数	(右)	-
		(左)	63.89
10b/1	長厚示数	(右)	-
		(左)	-

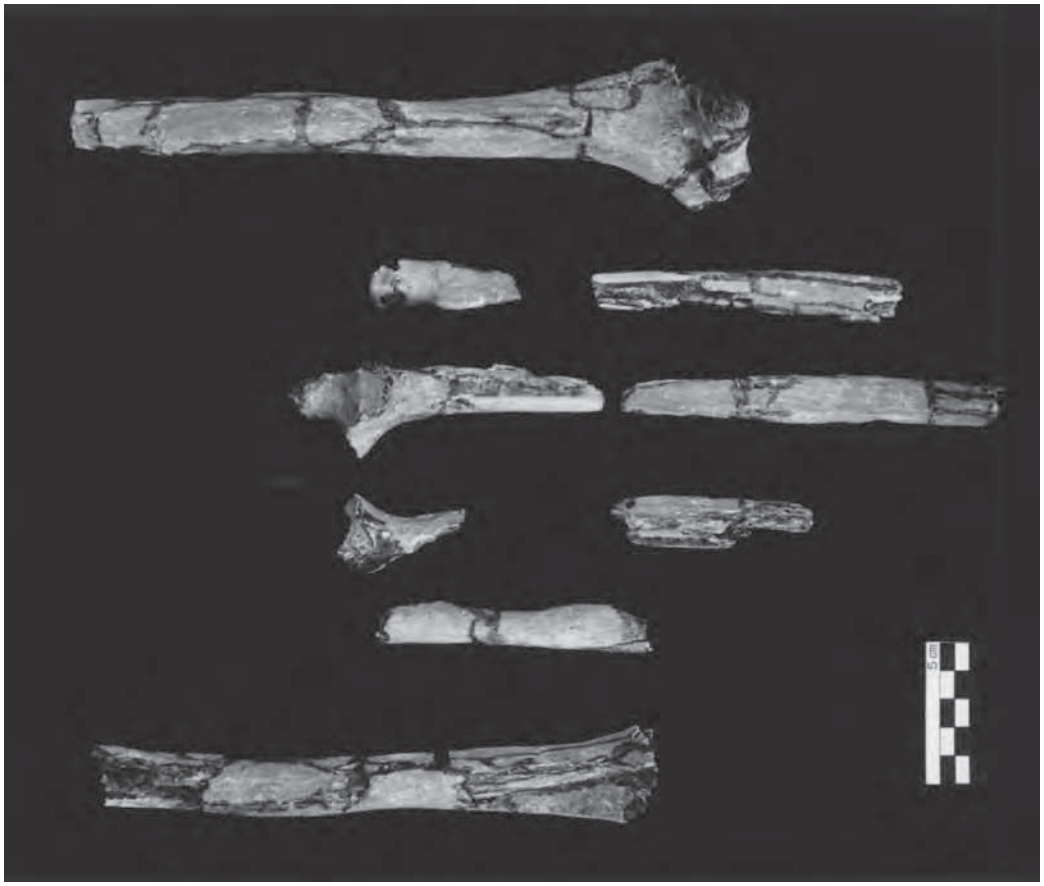
表10 形態小変異 (Non-metoric crania variants)・
二本木 (合同庁舎)

		SE-066 女性		SD-046-SK-1 男性	
		右	左	右	左
1.	Medial palatine canal (内側口蓋管)	-	-	/	/
2.	Pterygospinous foramen (翼棘孔)	/	/	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging (舌下神経管二分)	/	/	/	/
4.	Clinoid bridging (床状突起間骨橋)	/	/	/	/
5.	Condylar canal absent (顆間欠如)	/	/	/	/
6.	Tympanic dehiscence, Foramen of Huschke(>1㎜) (ﾌｼｭｹ孔、鼓室骨裂孔)	/	/	-	/
7.	Jugular foramen bridging	/	/	/	/
8.	Precondylar tubercle	/	/	/	/
9.	Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen) (眼窩上孔)	+	/	/	/
10.	Accesory infraorbital foramen (副眼窩下孔)	/	/	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	/	/	/
12.	Aural exostosis	/	/	-	/
13.	Metopism(前頭縫合)	-		+	
14.	Os incae	/		-	
15.	Ossicle at the lambda	/		+	
16.	Parietal notch bone	/	/	-	/
17.	Transverse zygomatic suture(>5㎜)	/	/	/	/
18.	Asterionic ossicle	/	/	-	/
19.	Occipitomastoid ossicle	/	/	/	/
20.	Epipteric ossicle	/	/	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/	/	/
22.	Biasterionic suture(>10㎜)	/	/	-	/
23.	Mylohyoid bridging (顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	/	/	/
24.	Accessory mental foramen	/	/	/	/
25.	Mandibular torus(副ｵﾄｶﾞ孔)	/	/	/	/
26.	滑車上孔	/	/	/	/



頭蓋 (The skull)
二本木遺跡群 (合同庁舎)ST-040 人骨 (男性・壮年)
(The Nihongi ST-040, young adult male)

頭蓋 (The skull)
二本木遺跡群 (合同庁舎)SE-066 人骨 (女性・壮年)
(The Nihongi SE-066, young adult female)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

下肢骨 (Bones of the lower limb)

二本木遺跡群 (合同庁舎) ST-040 人骨 (男性・壮年)
(The Nihongi ST-040, young adult male)

第Ⅴ章　総括

第１節　遺構について

今回の発掘調査では、竪穴建物がⅠ区で 22 棟以上、Ⅱ区で 6 棟、Ⅰ区で掘立柱建物が 26 棟以上、土坑がⅠ区で 39 基以上、Ⅱ区で 7 基、井戸がⅠ区で 25 基、Ⅱ区で 2 基、Ⅰ区で墓壙 1 基、少なくとも 30 条を越える溝状遺構、不明遺構、多量のピット群など、多量の遺構が検出された。注目されるのは古代・中世の建物群だが、それ以外に古墳時代や近世・近代の遺構がいくらか確認されている。出土遺物の評価を踏まえて、今回検出された遺構について概説概略をまとめる。

今回の調査Ⅰ区・Ⅱ区では遺構・遺物が濃密に分布し、遺構の検出から掘り下げに至るまで調査は困難を極めた。検出層位や重複関係・前後関係の誤認は少なからずあるものと思われる。また、出土遺物が遺構の時期を示さない場合も多い。ここでは、出土遺物・検出層位・重複関係・前後関係・位置関係から時期を想定し得た遺構に関して提示し、さらに遺物をもとに遺構の変遷を述べてみたい。

(1) 竪穴建物

第Ⅲ章で述べたように、Ⅰ区・Ⅱ区において集中して確認できたのはⅠ区西側、Ⅱ区である。そのほかはピット、溝などの後世の遺構により大部分は破壊されていた。わずかにカマドの痕跡（焼土・粘土塊）や壁の立ち上がりにより一部を確認できたものもある。ただ、そのような痕跡を含めても調査区全体の傾向はやはり西側に集中するようである。建物の規模はⅠ区では SI-068、SI-051、SI-090、SI-063 ほか溝状遺構などとの複雑な切りあい関係にある竪穴建物群である。明確な個々の遺構の形態を十分つかむことができなかった。その周囲にある建物で形状がはっきりつかめたものとして SI-052、SI-064 などがある。特に SI-052 は一部古代の井戸や近代の井戸に破壊されているが、形状がつかめる。カマドを北位置に置き、南北長が 5.0m、東西長が 4.5m ある。規模的には SI-052 と SI-064 はほぼ同規模に見える。SI-050、SI-068 なども同規模である可能性がある。Ⅱ区の SI-2010 も一部しか確認できないがこれに近いものであろう。一方、SI-086、SI-087、SI-055 などは先のものより小型で、長軸で 3.0m 程度、短軸では 2.5m 前後である。北方向にカマドを置くようであるが、場所の違いのせいかやや異なる様相を示す。形態的に大きく大小２種類の建物があったことがわかる。この違いが家族のあり方なのか、使用方法の違いなのか、さらに時期的な違いなのかは詳細な遺物や構造の検討が必要であろうが、そこまでの材料を持ち合わせていない。

並んで検出した SI-086 と SI-087 は少ない遺物から検討し、SI-086 → SI-087 という順番を考えている。これに関連すると考えたのが、溝状遺構の SD-056 と SD-057 である。偶然の可能性はあるが、溝状遺構が竪穴建物の西側から北側に区画するように走るように見える。先に SD-057 と SI-086 の関係、後に SD-056 と SI-087 の関係である。現場でもそのような認識をもったので特に記しておく。

他の攪乱を受けた竪穴建物は多くが北側にカマドを置くものを想定している。非常に部分的なものが多く本来の形態的特長は不明である。

これらの竪穴建物の時期は遺物から見る限り古くは 8 世紀前半から 9 世紀前半までにかけてのものが主体と考える。この時期は、熊本市調査の 13 次地区の官衙建物群が成立するころである。

(2) 掘立柱建物

8 世紀後葉～ 9 世紀前葉になると竪穴建物に代わって徐々に掘立柱建物が普及するといわれている。この調査区でも竪穴建物が廃絶し、掘立柱建物へと変わっているようである。ただ、非常に多量の柱穴と考えら

れるピットをすべて組み合わせ、建物として認識できなかった。
想定した建物は主に竪穴建物の集中域よりも南北に走る溝状遺構群の東側に多く検出した。ただ、溝状遺構は必ずしも掘立柱建物の時期から存在するわけではないし、実際溝状遺構中やその間にも確認できることから見かけ上の区分にすぎない。

建物規模としては２間×３間のものが多く、方位を意識した建て方である。中にはSB-10001の倉庫のような総柱のたてもの、またSB-10050のような佛堂を思わせる大型の建物もある。ただ、掘り方の大きさは大きくても50cmぐらいまでで、それよりも小さいものが大部分である。ただ、ごく一部だけ確認できたSB-10054は掘り方が1mを超えるものである。

時期的には古代から中世にかけてのものと考えるが、調査時に十分検出層位や切りあい関係を明確に記録できていないため、遺構ごとの相互関係はつかめていない。この建物群と関係すると思われる井戸やその出土遺物によって掘立柱建物の分布や時期的な傾向を判断できるかもしれない。

完全に確認できていないもののその存在時期は周辺で出土した遺物から９世紀から13世紀までに亘ると考える。多量のピット群の存在からまだ多くの建物があったと考えられ、切りあい関係を多少考慮すると同じ場所に数回の建替えが想定できる。

(3) 墓壙

調査Ⅰ区で検出したST-040については本文中や自然科学的分析で触れられているので、ここでは簡単に触れる。この遺構には人骨が一体分残っていた。北枕、西向きに配置され、足は曲げられていた。さらに供献された輸入陶磁器と土器からこの墓の時期が特定されている。埋葬方法は同じ二本木遺跡群の中にも類例が存在し、一定の社会的階層の埋葬方法としては一般的であったようである。この遺構が検出された場所は、調査区の東側で、掘立柱建物に関係するピット群検出され、さらに東側には、墓壙と同じ時期になる可能性のある大溝状遺構の端の一部が３～4mの間をおいて検出されている。

このような明確な墓とは別に、土坑としている中に調査時に墓壙と考えたSK-116などの例がある。主に調査Ⅰ区のやや中央部東より付近で検出している。これらの遺構は形状が縦長の楕円形を呈し、埋土に多くの炭化物を含むもので火葬墓の可能性を考えた。ただ、骨の痕跡や供献された遺物はなかった。同じタイプの土坑がもう１基あった。時期の特定は困難であったが、埋土の特徴から先の土坑墓と時期的にやや先行する時期で、墓とすれば火葬墓がやや先にあったと推定できる。

明確な埋葬された墓と遺体としての人骨の存在とは別にさまざまな場所、遺構から人骨・獣骨の一部が出土した。遺構内からは、SE-066の井戸や溝状遺構の一角などに頭蓋骨や足の骨の一部が出土している。また、遺物の集中した中に混じって検出したものもあった。これらの人骨の出土は意図的に骨の一部を取り出して何らかの行為に利用したのか、たまたま白骨化した骨を集めて埋めたか、偶然に落ち込みなどに入れたのか特定は難しい。SE-066のように下位に大量の獣骨と中位に頭蓋骨を一つ置くという、井戸廃棄の儀礼と思われる例もある一方で、数時期の遺物が集中する不明遺構の中に骨片として含まれている例もあり、今後の詳細な出土例の検討が必要であろう。

(4) 土坑

土坑としたものには先に記した墓壙と考えられるものもあるが、大部分は何らかの意図をもって掘られていると考える。分布はⅠ区・Ⅱ区とも遺構の集中する部分に多いという偏った状況がある。また、不定形で浅いものが不偏的に見られ、他の遺構（ピットや溝状遺構等）との切り合い関係になるものが多く遺構の確認に苦労した。その一方で方形や円形などの定形的な形状で一定の深さを持つものはまばらにしか見られな

かった。

Ⅰ区では141-M～R-6～9区で多くの土坑を確認した。その大部分が他の遺構と切り合い関係にあり、遺構の性格も不明のものが多かった。

その中で、SK-211は平面形が方形を呈する深さ1mほどの土坑で、明確な方形土坑という意図的な形状で底部まで掘削されている。土坑底部付近で頸部を打ち欠いた須恵器の高台付長頸壺が出土している。形態の特徴と出土状況から骨蔵器の可能性も考えられた。しかし、骨蔵器を埋納するには大きすぎる土坑である点を考慮し、意図的に埋設されていたとすると、祭祀的な行為の痕跡とも考えられる。

Ⅱ区では、SK-2012とSK-2016は、平面形が隅丸方形を呈し、深さも両遺構とも1mほどで、ほぼ同規模の遺構である。両遺構の埋土を観察すると、両方とも掘削したあと一度に埋め戻されたような層状況が分かった。また、SK-2016の埋土上部からほぼ完形の土馬が出土している。土馬が埋土中にあったことを考慮し、祭祀的な土坑と捉えた。

(5) 井戸

先に掘立柱建物との関係を述べたが、セット関係がつかめているわけではない。あくまでも竪穴建物や掘立柱建物に敷設する可能性と出土遺物の傾向により関係するという想定に過ぎない。

井戸は特に集中するわけではないが、出土遺物からいくつかの時期のものに分けられる。ほとんどの井戸は確認した段階では素掘りの状態となっているが、井戸枠を持っていなかったとはいえない状況もある。特に中世の大井戸であるSE-066は底の部分にクスノキの井戸枠が残っていた。さらに古代末の井戸と考えるSE-263では土層観察から井戸枠の存在が想定できた。現在は腐食のため井戸枠が残っていないのではなかろうか。

井戸の中には3mを超えるような大型で、掘削深度の深い井戸として、SE-066、SE-229、SE-249、SE-247などのような井戸がある。大型の井戸を掘削し維持するためには、何らかの集団との関係が考えられ、それに関係する建物群の存在も想定できる。近辺で確認した掘立柱建物群が関係するであろうが、どの建物に関係するかつかめなかった。

井戸の時期と規模・掘削深度との関係については、明確な証拠まで確認したわけではないが大まかな考えをまとめる。時期的に古代と想定した井戸群は規模的に掘り方の径も1m前後で深さも2m程度のものが多かった。現在は湧水はない。かなり大型のものであるSE-222、SE-229、SE-263などがあるが井戸本体の径はさほど大きくなく、深さも2mをやや超える程度である。若干の湧水が見られた。その一方、時期的に中世に入ると想定した井戸は大型のものが多く、掘削された深さも3m前後と深く現在でも湧水する。このような状況から、井戸の規模が当時の水供給を必要とする人々の集団の規模に関係するのではないかということ、深さの違いは掘削時期による湧水面の変化や湧水量の違いなどに規定されたのではないかということを考えた。湧水面の違いはまた自然堆積土層の違いにも起因する。攪乱を除去する過程でわずかな調査区の範囲ですら場所によりまったく堆積状況が異なることが観察でき、湧水との関係もそれにより状況が異なるであろうことが想定できた。したがって、一概に集団規模の違いばかりでなく、自然的な影響も考慮する必要があろう。

(6) 溝状遺構

一概に溝状遺構としたが、その性格は様々であったと考える。通常幅50cm～1m程度で深さも50cmほどのものが大部分で、大きく調査Ⅰ区の141-E～O-3～5グリッドではほぼ南北方向に走り、N-5グリッド付近から南ではN-15°-E前後と方向の変化がみられ、これに直行する溝状遺構が東側へと伸びている。

時期の違いがあると考えるが、完全に溝状遺構の切りあいや前後関係を明確に捉えていなかったためここで簡単に述べることはできない。ただ、この溝状遺構群は竪穴建物や掘立柱建物群との関係は否定できない。先に竪穴建物で想定したことや、掘立柱建物の建て方の方向が溝の走る方向と関連している。竪穴建物にしても掘立柱建物にしてもある時期までは南北を建物配置の基本としているようであるが、ある時期から方位がやや北東 - 南西すなわち N-15° -E を基本とするような変化がみられ、同時に溝状遺構にもその影響があったと考える。詳細な遺構・遺物の検討が不十分であるが大まかな傾向のうえでこのような想定をしてみた。小規模な溝状遺構とは別に調査Ⅰ区北側で検出した SD-041 や SD-896 などは明らかに時期や様相が異なる。幅も 3 ～ 3.3m、深さは 1.3 ～ 1.5m を測り、底面には場所により段状になり深さが異なっていた。SD-041 はほぼ東西方向に走り、SD-896 はそれに直行するように南北方向で SD-041 から北側へ伸びているようである。遺構の時期は遺物から 11 世紀後半～ 12 世紀前葉ほどで平安時代末もしくは鎌倉時代初期に当たる。この大溝の性格は調査中から問題であった。屋敷の周囲の濠や大区画溝など様々な解釈ができる。さらにこの溝の北側に主体があるのか、南側が主体なのかも解釈が分かれるところである。大溝の南側は調査Ⅰ区の遺構の大部分であり、同時期の遺構も多く存在する。北側は調査区外で遺構の状況は他の調査機会にしかわからない。ただ、SD-041 と SD-896 が同時期と考えれば、この両遺構が屋敷等の南西隅と想定でき、この溝状遺構は調査区北側にある何らかの遺構を囲むものと想定できそうである。今後の調査で明確になっていくものと考える。

(7) 遺構のまとめ

調査では非常に多くの遺構に惑わされながらも、調査時から整理作業を通じてまとまってきたことを以上で述べた。現場で遺構の把握が完全にはできなかったこと、整理作業でも多量の遺物に振り回され遺構との関連を十分検討できなかったことなどが残念ではあるが、現在つかめていることを大まかにまとめたつもりである。

ここでは、遺構の変遷を述べていくことにする。

第 8 次調査区では縄文時代晩期の土器が最古の遺物となる。その時期と考えられる石鏃や石斧なども出土している。総量としては少なく遺構の確認もできなかったが､この地で縄文時代晩期の痕跡が残っており、土地利用も開始されたと考える。弥生時代の遺物はほとんど出土していないが、一点のみ前期の刻目突帯文土器の破片と考えられるものが出土している。小片であるため確証はない。ただ、縄文・弥生時代の遺構はいずれも確認されていない。

遺構がみられるのは、8 世紀代以降からである。この時期に位置づけられるものは竪穴建物・井戸・土坑などがあり、竪穴建物は調査Ⅰ区の西側に濃厚に分布し、他の場所でも散漫的に分布しているが、これらの場所の状況は溝状遺構やピットなどで複雑に破壊されている。辛うじてカマドの残存状況から建物の存在を導き出した。また、建物に付随する井戸や溝状遺構も存在する。建物基本方向はやや方向が振れるもののほぼ南北である。井戸跡はあるが、小型のものが多く、深さも 3m を超えない程度である。時代が新しい遺構からもこの時期の遺物は出土しており、本来はもっと多くの生活址が存在していたものが、後出する遺構で破壊されたのであろう。

この後竪穴建物は掘立柱建物に変化し、このとき住民の変化もあった可能性もある。役所と関係するような遺物が出土してくるのも確かである。さらに平安時代末ごろになるとさらに建物群の変化があったと考える。これまでと方位がやや異なる建物群が調査Ⅰ区の南側に出現してくるようである。出土遺物も変化し、輸入陶磁器の出土量も増加してくるようである。そして鎌倉時代初期までは確認できるが、その後はわずかに遺物や遺構の存在はあるもののこの地では建物群のような遺構が近世まで途絶えているようである。近世

でも集落というより畑地などの耕作地などではなかったかと想定できる。さらに近代には工場用地として現代に及んでいる。

第２節　遺物について

(1) 縄文時代の遺物

縄文時代晩期の遺物は包含層からの出土で、良好な状態で出土したのは、141-M・N-1・2 グリッドからの出土である。その付近には暗褐色の包含層と判断した層が薄く堆積し、他の時期の遺物は含まず純粋に縄文晩期の土器片が出土した。全体像のつかめるような破片は少なかった。また遺構も確認できず、ここが縄文時代晩期の中心域ではないと判断した。このグリッド以外でも古代の遺構や遺物に混入して土器・石器が出土しているので、さらに範囲は広がるようである。後代の遺構が濃密に分布するこの一帯で純粋に縄文時代の層や遺構が維持されているのはまれであろう。これまで二本木遺跡群の調査でも遺構の存在までは確認していないようである。

今回の調査では縄文晩期の深鉢形土器・浅鉢形土器などの土器、磨製石斧・スクレイパー・石鏃・凹石などの石器が出土している。

(2) 古代・中世の土器類

この調査区では縄文時代晩期以降 7 世紀前半までの間の遺物はほとんど確認していない。ただ、本文中には報告していないが、弥生時代前期刻目突帯文土器の口縁部の破片かと思われるものを認めた。ただ、小片過ぎて確証がなかったので割愛した。今回の南側では弥生時代後期の集落跡も確認されているが、その時期の遺物も出土してはいない。

なお、今回の調査では古代の土器については熊本市教育委員会の網田龍生氏の一連の報告書・論考による編年を中世については同じく熊本市教委の美濃口雅朗氏の論考などを利用し、時期判定を行っている。したがって、特にこの時期の土器についてあまり深く追求はしていない。

7 世紀代前半から蓋に返しのある須恵器・須恵器模倣土師器と考えられる土器などがわずかに出土している。しかし、土器の大部分は 8 世紀代から出土してくる。8 世紀前半から徐々に遺物が増加し、遺構が十分確認できなかった 12 ～ 13 世紀代まで連綿と土器は出土している。遺構の変遷は同時に出土遺物の変遷でもあり、その出土遺物による遺構時期の確定をしていった。ただ、遺構確認が十分できなったため、包含層出土とした土器類が多量にある。それらに対しては時間的制約があり十分な検討を加える余裕がなかった。また、遺構出土の土器も十分に検討できていないものあり、今後さらに検討が必要と考える。

一括資料と捉えたものとしては、井戸や墓の資料のほか S-041 のような大溝状遺構でも埋土の状況や陶磁器等他の遺物との組み合わせを検討することで、良好な一括資料とすることができる場合もあることが分かった。墓である ST-040 の一括資料も陶磁器と土師器の組み合わせて大よその時期がわかるものである。井戸資料は埋土状況を確認しながらある程度の一括資料として捉えることができることもわかった。

参考文献

1　網田龍生「古代肥後の土器」『大江遺跡群Ⅰ』熊本市教育委員会 1993 年
2　網田龍生「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究　熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集』龍田考古会　1994 年
3　網田龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ　日本中世土器研究会 1994 年
4　網田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ　熊本大学文学部考古学

研究室創設 30 周年記念論文集』龍田考古会　2003 年
5　中島恒次郎「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　日本中世土器研究会　2000 年
6　山村信榮「八世紀初頭の諸問題」『大宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集 . 追悼集刊行会 1995 年
7　山本信夫「統計上の土器 - 歴史時代は時期の編年研究によせて -」『九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会　1990 年

(3) 輸入陶磁器について

この調査区では、調査当初から輸入陶磁器の出土が顕著であった。この陶磁器と出土土器の組み合わせにより遺構の時期判定や遺跡の性格が掴めると判断し、できる限り採集に努めた。その結果、かなりの数量を収集することができた。その資料をもとに整理作業の際に 1 点ごとの分類作業を試みたが、なかなか自力では困難を極めたので、元太宰府市職員で古代の輸入陶磁器に詳しい山本信夫氏を専門調査員に招き、分類作業をお願いした。平成 20 年度と 21 年度に渡り作業を進めていただいた。その結果、大宰府分類による詳細な分類表を作成していただいた。ここでは、その成果を遺構と包含層分けた一覧表として掲載することとした。その中で使用されている分類基準は参考文献 1 に基づき、さらに山本氏が検討を加え改訂を加えられたものによる。さらに分類作業をしていただくと同時に書いていただいた所見を 2 カ年分まとめて以下に掲載する。

・平成 21 年（1 回目）

輸入陶磁の分類・産地、年代とそれらの量的傾向の把握を行った。時代別に量的傾向を押さえることにより、遺跡の画期や肥後の歴史的動向を探る手がかりとなる。

陶磁器の編年・分類は筆者らが行ってきた筑前大宰府の成果を援用するものであるが、北部九州と中部九州との在地土器編年研究との相関性をみることも重要な課題となる。従って陶磁器と肥後産の在地土器を伴う遺構出土品について検討を行った。

一見して陶磁器は多種多様で 8 世紀末以後、16 世紀まで連綿とあり、分類選別にあたっては注意力を要したため、今回は最も選別の難しい白磁に終始した。

8 世紀末～ 10 世紀中頃では極めて上質の刑州窯産とする椀が一定抽出された。

10 世紀後半～ 11 世紀中頃では景徳鎮や福建産といわれる白磁 XI 類の口縁部が数点抽出できたが、上記の時代のものより数は少ない。

11 世紀後半～ 12 世紀前半及び 12 世紀中頃～後半に属する白磁は多数にのぼり、特に 11 世紀後半から 12 世紀にかけてピークに達している点が判明する。13 世紀中頃～ 14 世紀前半には口ハゲと呼称されるⅨ類の一群を除き、白磁は低調となっている。

一応青磁についても概観したところ 8 世紀末、9 世紀前半から 13 世紀中頃までの量が多く出土しており、これらの点から 13 世紀までの遺構密度が高いのではないかと推定できる。井戸・土坑出土の良好な一括性を保持する資料も点検した。SD-041 の溝状遺構出土品は中国陶磁（白磁）と共に豊前系土師器坏・皿が 11 点以上出土しており、両方の型式は 11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置する。まとまった量の豊前系土器が肥後で出土した例は管見の範囲になく、土師器の使用は肥後で十分供給されうるので豊前との交流が現実に確認される点は特筆される。SE247 井戸出土品は中国白磁、青白磁、陶器と瓦器椀、土師器坏、皿、特大坏などであり、型式的に 12 世紀後半の編年資料となる。この期の一括性の高い資料としては過去に鑑定を行った阿蘇安養寺遺跡（阿蘇氏居館と推定）で確認している。肥後中世土器編年研究に基準となる資料も

表１　Ⅰ区　遺構出土輸入陶磁器一覧表

				数		陶磁器時期別点数
SD-001				1		
		青白磁	合子	1	蓋 (1)	C～F:1
SD-003				3		
		白磁	椀	3	Ⅳ (2),V4 ×Ⅷ 1・3(1)	C:2,D:1
SX-004				14	XV 期併行	
		白磁	椀	10	V4 ×Ⅷ 1・3(1), Ⅱ 3 ×４〔内クシ〕(1), Ⅱ 3 ×４(1), Ⅳ (2), Ⅳ～Ⅷ (3),V4b(1),V ～Ⅶ〔内ヘラ〕(1)	C:4,C × D:4,D:2
			皿	4	Ⅱ×Ⅱ Ⅰ(3), Ⅱ I2(1)	C × D:3,D:1
SD-007				1		
		白磁	椀	1	Ⅶ (1)	D:1
SD-008				3		
		白磁	椀	2	V1 ×Ⅷ 1・3(1),V ～Ⅷ〔内クシ〕(1)	C × D:2
青磁	1	龍泉窯系	椀	1	I1 ～ 4(1)	D:1
SD-009				6		
		白磁	椀	3	Ⅳ～Ⅷ (3)	C × D:3
青磁	2	越州窯系	大椀	2	I2a ア？②〔1 片は S247 と接合〕,I2 ウ ?(1)	A:2
陶器	1	中国	蓋？	1	〔A × B 群〕(1)	C～F:1
SD-010				5		
		白磁	椀	4	Ⅳ (1),V1 ×Ⅵ 1 ×Ⅷ 2〔直口〕(1),V4 ×Ⅷ 1・3(1), 破片 (1)	C:1,C × D:1,D:1, 不明 :1
青磁	1	龍泉窯系	椀	1	Ⅱ b(1)	D:1
SD-011				9		
		白磁	椀	3	Ⅱ 1(1), Ⅳ～ V(1), Ⅳ～ Ⅷ (1)	C:1,C × D:2
			皿	1	V ～Ⅶ (1)	C:1
		青白磁	椀	5	〔内クシ〕(1), 破片 (4)	C～:5
SP-012				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1
SP-013				14		
		白磁	椀	6	Ⅳ (1), Ⅳ～Ⅷ (1),V1 × Ⅵ 1 ×Ⅷ 2〔直口〕(2),V2 ×Ⅵ×Ⅶ (1),V4 ×Ⅷ 1・3(1)	C:1,C × D:4,D:1
			皿	6	Ⅱ×Ⅱ Ⅰ(3), Ⅱ I1(1), Ⅵ 2b(1), 森田 D(1)	C:2,C × D:2,D:1,H:1
青磁		越州窯系	椀	1	I2b(1)	A:1
	2	越州窯系 ×同安窯系	椀	1	Ⅰ(1)	A × D:1
SP-028				1		
青磁	1	越州窯系 ×龍泉窯系	椀	1	Ⅰ(1)	A × D:1
SD-034				3		
		白磁	椀	2	V ～Ⅶ ?(1), Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:2
青磁	1	越州窯系	椀	1	I1(1)	A:1
SD-036				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	I1a(1)	A:1
ST-040				5		
		白磁	椀	3	Ⅳ 1a[1],V4c[1],V4 ×Ⅷ 1・3(1)	C × D:1
			皿	1	Ⅱ I1[1]	
青磁	1	越州窯系	椀	1	I2 ウ (1)	A:1
SD-041				35	Ⅹ Ⅱ～Ⅹ Ⅱ Ⅰ期併行	
		白磁	椀	19	Ⅰ(2), Ⅱ 1(1), Ⅱ (2), Ⅳ 1a(1), Ⅳ (3), Ⅳ～Ⅷ (6),V(1),V ×Ⅵ (1),V2 ×Ⅵ×Ⅶ〔外反〕(1), Ⅵ (1),	A:2,C:9,C × D:8,
			小椀	1	Ⅱ (1)	C:1
			皿	1	Ⅵ 1b(1)	C:1
青磁	12	越州窯系	椀	12	I1a(1),I1(1),I1?(1),I2b〔外タテヘラ〕(1),I2 ウ ?〔外反〕(1),I5(1),I〔直口〕(1),Ⅰ(1), Ⅱ 1b ×Ⅱ 2a(1), Ⅱ (2),I ×Ⅱ I〔内ヘラ?〕(1)	A:12
		産地不明		1	破片 (1)	不明 :1
		青白磁	皿	1	破片 (1)	C:1
SD-043				7		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1
青磁	5	越州窯系	椀	6	I(1),I1(2),I2 ウ (1), Ⅱ (2)	A:6
SD-046				11		
		白磁	椀	3	Ⅳ 1a(1),V2b? 〔外ヘラ〕(1),V ×Ⅵ (1)	C:1,C × D:2
			壷類	1	耳壺Ⅱ I(1)	C～:1
青磁	7	越州窯系	椀	6	I2? 〔直口〕(1), Ⅱ 2f ②, Ⅱ (4)	A:6
		越州窯系 ×龍泉窯系	椀	1	椀〔越 I2 ×龍 I1〕(1)	A × D:1
SD-047				2		
		白磁	椀	1	Ⅰ(1)	A:1
青磁	1	越州窯系	椀	1	Ⅱ〔外反〕(1)	A:1
SD-048				1		
青磁	1	越州窯系	大椀？	1	Ⅱ (1)	A:1
SE-049				4		
		白磁	椀	1	V2 ×Ⅵ×Ⅶ〔外反〕(1)	C × D:1
			壷× 水注	1	Ⅱ Ⅰ(1)	C～:1
青磁	2	越州窯系	椀	2	Ⅱ 2(1), Ⅱ (1)	A:2

				数		陶磁器時期別点数
SI-051				1		
		白磁	椀	1	破片 (1)	不明 :1
SD-056				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1
SD-059				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	I1(1)	A:1
SX-062				2		
		白磁	椀	2	Ⅱ 1(1),XI1?(1)	B?:1,C:1
SI-063				1		
		白磁	破片	1	不明 (1)	不明 :1
SE-066				23		
		白磁	椀	13	Ⅱ (2), Ⅳ (1), Ⅳ～Ⅷ (3),V2 ×Ⅵ×Ⅶ〔外反〕(1),V(5),〔C 期～〕(1)	C:3,C × D:9,C～:1
			皿	8	Ⅱ 1a(1), Ⅱ 1a ×Ⅱ I(2), Ⅱ×Ⅱ Ⅰ(1), Ⅱ I1(1),Ⅴ～ Ⅶ (1), Ⅵ 1a(1), Ⅵ 2b(1)	C:3,C × D:4,D:1
青磁	1	龍泉窯系	破片	1	Ⅲ (1)	F:1
		青白磁	小椀 ×皿	1	〔内面陽刻文〕(1)	C～F:1
SK-067				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	I2 ウ (1)	A:1
SD-078				1		
		白磁	椀	1	I1(1)	A:1
SI-087				2		
青磁	2	越州窯系	椀	1	I2〔ウ以外〕×Ⅲ 1(1)	A × B:1
			大椀	1	I2 ウ ?(1)	A:1
SK-104				1		
		白磁	椀	2	Ⅱ b(1)	C:1
SD-106				1		
		白磁	椀	1	V2b(1)	C:1
SD-112				1		
青磁	1	越州窯系	坏	1	Ⅱ (1)	A:1
SK-133				1		
		白磁	皿	1	V ～Ⅶ (1)	C:1
SD-175				1		
青磁	1	同安窯系	皿	1	Ⅰ(1)	D:1
SE-177				2		
		白磁	椀	1	Ⅵ a(1)	C:1
			皿	1	Ⅵ (1)	C:1
SD-185				2		
青磁	2	越州窯系	椀	1	I5(1)	A:1
		龍泉窯系	小椀	1	Ⅱ b(1)	E:1
SE-213				1		
青磁	1	越州窯系	大椀 (鉢)	1	Ⅰ(1)	A:1
SD-234				1		
青磁	1	越州窯系？	椀	1	Ⅰ?(1)	A?:1
SP-239				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	Ⅱ (1)	A:1
SD-241				1		
		白磁	椀	1	V1 ×Ⅷ 2(1)	C × D:1
SE-247				51	XV 期併行	
		白磁	椀	22	I1(1), Ⅳ 1a[1](3), Ⅳ (4), Ⅳ～Ⅷ (3),V1 ×Ⅵ 1 ×Ⅷ 2〔直口〕(1),V4a(1), V4b[1](1),V4(1),V4 ×Ⅷ 1・3(1),V〔内クシ〕(1), V ～Ⅶ〔内クシ〕(1), Ⅷ (1),XI ×Ⅵ～Ⅷ (1)	A:1,B ×C × D:2,C:7,C × D:6,D:6
			皿	6	Ⅱ×Ⅱ Ⅰ(2), Ⅱ I1(1)1,V ～ Ⅶ (1), Ⅵ 1a(2)	C:3,C × D:2,D:1
			壷類	2	耳壺Ⅱ Ⅰ②,壷×水注(1)	C × D:2
青磁		越州窯系	椀	9	I2 ア×イ (1),I2 ウ ' × I5(3), Ⅱ (4),I5[1]	A:9
			大椀	3	I2 ア ?(3)	A:3
			小椀	1	I2 ア〔有文？〕(1)	A:1
			椀× 皿	3	Ⅰ(3)	A:3
		龍泉窯系	椀	1	Ⅰ?(1)	D?:1
		青白磁	椀	5	〔内クシ〕(2), 破片 (3)	C:4,C～F:1
			小壷	1	破片 (1)	C:1
			合子	1	蓋 [1]	C～F:1
	17	白磁× 青白磁	椀× 皿	1	白磁椀 I-1 ×青白磁椀・皿 (1)	A × C～ F:1
陶器	1	中国		1	盤 I1 ②	C～D:1
SE-249				3		
青磁	3	越州窯系	椀	3	I2b(1),I2b ×Ⅱ I1b(1),I1(1)	A:2,A × B:1
SD-253				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1
SD-275				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	Ⅱ (1)	A:1
SI-357				1		
青磁	1	龍泉窯系	椀	1	Ⅳ ?(1)	G?:1
SD-362				1		
		白磁	椀	1	V2a(1)	C:1
SP-444				1		
青磁	1	越州窯系	椀	1	I?(1)	A?:1
SP-497				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1

				数		陶磁器時期別点数
SD-610				7		
		白磁	椀	5	Ⅳ (1), Ⅳ～Ⅷ (3),V1?(1)	C:1,C × D:3,C?:1
		青白磁	椀？	1	破片 (1)	C～F:1
		染付	椀	1	小野 C 群 ?(1)	J?:1
SD-610?				1		
青磁	1	龍泉窯系	椀	1	Ⅳ～ (1)	G～:1
SD-610・612				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ (1)	C:1
SD-611				30		
		白磁	椀	22	Ⅱ (1), Ⅳ (1), Ⅳ× XI1(1), Ⅳ～Ⅷ (10),V1 ×Ⅵ 1 ×Ⅷ 2〔直口〕(1),V2 ×Ⅵ ×Ⅶ〔外反〕(1),V4(1),V4 ×Ⅷ 1・3(3),V ×Ⅵ 1(1),XI4 × 5?(1), 椀 ?(1)	B?:1,C:2,C × B?:1,C × D:13,D:4, 不明 :1
			皿	3	Ⅱ I1(1),V ×Ⅵ 1b(1), Ⅵ 1a(1)	C:2,D:1
青磁		龍泉窯系	椀	2	Ⅰ×Ⅱ (1), Ⅱ a(1)	D × E:1,E:1
		同安窯系	皿	1	Ⅰ?(1)	D:1
	2	青白磁	椀× 皿	1	〔花形口縁〕(1)	C～F:1
陶器	1	中国	破片	1	C 群耳壷Ⅱ Ⅰ×盤 I?)(1)	C～F:1
SD-612				5		
		白磁	椀	3	Ⅱ ?(1), Ⅳ～Ⅷ (1), Ⅳ (1)	C:2,C × D:1
青磁	2	越州窯系	椀	2	I(1), Ⅱ〔直口〕(1)	A:2
SP-658				1		
青磁	3	越州窯系	椀	1	I1b(1)	A:1
SD-661				3		
		白磁	椀	3	Ⅳ～Ⅷ (1),V4b(1),V2 × Ⅵ×Ⅶ〔外反〕(1)	C × D:2,D:1
SP-696				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ～Ⅷ (1)	C × D:1
SP-743				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ (1)	C:1
SP-842				1		
		白磁	皿	1	V ～Ⅶ (1)	C × D:1
SD-876				1		
		白磁	椀	1	V1a × V2a(1)	C:1
SD-896				2		
		白磁	椀	2	Ⅳ～Ⅷ (2)	C × D:1
SD-896				3		
		白磁	椀	2	Ⅳ (1), Ⅵ×Ⅶ (1)	C:1,C × D:1
		青白磁	小壷	1	〔型凸文〕(1)	C～F:1
SK-897				4		
		白磁	椀	4	Ⅳ (1),V1 ×Ⅷ 2(1), Ⅳ～ Ⅷ (1), Ⅵ b(1)	C:2,C × D:2
SP-901				1		
		白磁	椀	1	V1 ×Ⅷ 2(1)	C × D:1
SP-918				1		
		白磁	椀	1	Ⅳ 1a(1)	C:1
カクラン				1		
青磁	1	龍泉窯系	皿	1	I2b(1)	D:1

表２　Ⅰ区　包含層輸入陶磁器一覧表

包含層				陶磁数	1344	
		白磁		椀	514	I1a(6)、I1a?(1)、I1 × 2(3)、I(6)、II1a(15)、II3 × 4(10)、II3 × 4〔内ケジ〕(1)、II4b(2)、II5(1)、II5〔上手〕(2)、II(43)、II?(6)、IV1a(19)、IV(108)、IV × V(6)、IV × VI(2)、IV ～ VIII(1)、V1a × V2a(7)、V1 × VII2(23)、V2a(1)、V2b(2)、V2 × VI × VII〔外反〕(51)、V2 × VI × VII?〔外反〕(1)、V3a(3)、V4a(1)、V4b(4)、V4 × VIII1･3(63)、V〔内ケジ〕(4)、V(17)、V?〔外ケテヘラ〕(6)、V × VI〔内ケジ〕(2)、V ～ VII〔内ケジ〕(49)、VI1a(4)、VI1b(1)、VI b(1)、VI(1)、VI?(1)、VIIc(1)、VIIc?〔内堆線〕(1)、VII〔輪花〕(1)、VII(2)、VIII(16)、IX(1)、XI?(4)、森田C?(3)、C 期～ (5)、明 ?(1)、不明 (5)
				皿	183	II1a(4)、II1 × III(2)、II(3)、II × III(30)、II × IV × VIII(1)、III2(1)、III(9)、IV2b(1)、IV(2)、V2a[1](6)、V(7)、V × VI1b(1)、V ～ VII(32)、V ～ VII?(5)、VI1a(9)、VI1b(4)、VI2 × VII〔有文〕(4)、VI(13)、VIII1a(1)、VIII1b(2)、VIII1(1)、VIII(1)、IX1(11)、IX2(3)、IX(24)、IX?(1)、IX??(2)、森田 D(1)、森田 D 古 ?(1)
				小椀？	1	II(1)
				坏	2	森田 B(1)、森田 B'(1)
				合子	2	蓋 (1)、身 (1)
				小壷	3	II(2)、III(1)
				水注	2	II〔鳳首瓶 ?〕(1)、III(1)
				壷類	7	II(1)、III(5)、III?(1)
			716	不明	2	破片 (2)
		白磁×青白磁	1	壷類	1	破片 (1)
		白磁×青磁	3	皿	3	白磁 VIII ×同安 I2a?(3)
		白磁？	2	椀×皿	2	XI?(1)、〔広東以外〕(1)
		中国白磁？	1	坏	1	馬上坏〔明～〕(1)
青磁		越州窯系		椀	234	I1a[1](10)、I1b(2)、I1(2)、I2b(2)、I2ゥ[1](8)、I2ゥ× I5(1)、I2ゥ× I5?(3)、I2ゥ'(2)、I2ゥ' × I5(2)、I2ゥ?(7)、I2ゥ?〔大形〕(2)、I2〔ゥ以外〕(17)、I2〔ゥ以外〕× III1(2)、I2 × III1(2)、I2? ×皿 I(2)、I5[1](12)、I(29)、I × III(1)、II1b(1)、II1b × II a(2)、II2a(1)、II2f(5)、II2(15)、II(66)、II〔未分類〕(4)、椀 ?II(1)
				椀×皿	26	椀 I2 I ×皿 I(1)、椀×皿 I〔外ケテヘラ〕(1)、椀×皿 I(23)、椀×皿 ?III?(1)
				椀×皿×坏	2	椀×皿×坏 I〔外ケテヘラ〕(1)、椀×皿×坏 I(1)
				皿	6	I1?(1)、I2b〔外ケテヘラ〕(1)、I(4)、
				皿×坏	2	I(2)
				大椀	2	I2(2)
				小椀×皿	1	小椀 I ×坏 I3(1)
				坏	2	I3(1)、II(1)
				鉢？	1	II〔大形〕(1)
				合子	1	I[1]
				合子×香炉蓋	2	I(2)
				壷	1	II〔大形〕(1)
				壷×大形蓋？	1	I(1)
				壷×水注	6	I〔瓜胴ケテヘラ〕(2)、I(1)、II(1)、III(2)
				壷？	1	I(1)
				壷？×水注	1	I(1)
				小壷×水注	1	I(1)
				水注	1	I(1)
			292	壷類	1	II〔褐彩〕(1)
		越州窯系？		椀	3	越×龍椀 I(1)、越？椀 I?(2)
				器種不明	1	器種不明 (1)
			5	皿？	1	I?(1)
		長沙窯系	1	壷×水注	1	〔黄釉褐彩〕(1)
	572	長沙窯系？	1	壷？	1	破片 (1)
		龍泉窯系		椀	204	I1(1)、I1 ～ 3(7)、I1 ～ 4(10)、I2(61)、I2 ～ 3〔内ヘラ〕(1)、I2 ～ 4(2)、I3(5)、I4b(1)、I4(6)、I6(1)、I(9)、I?(2)、I × II(2)、I × IV ～ ?(1)、II a(13)、II b(67)、II C(1)、III2c〔直口〕(2)、III2c〔外反〕(1)、III2c(4)、IV(1)、上田 BIII(1)、上田 BIV(1)、上田 DII(1)、上田 DII ～ (1)、上田 III × IV(2)
				椀×皿	2	IV ～〔元、明〕(2)
				椀×坏	5	III〔外蓮弁〕(4)、III(1)
				小椀	2	I1(2)
				皿	3	I2b(1)、I(2)
				坏	5	III1(2)、III2(1)、III4a(2)
				大坏	1	III(1)
				盤	1	III(1)
			225	壷類	2	IV ～〔元、明〕(2)
		龍泉窯系×耀州窯？	1	椀	1	龍椀 IV ×上田 B・CII ×耀州？〔内型文〕(1)
		龍泉窯系？		椀	1	I?(1)
			3	大形	2	IV ～〔元、明〕(2)
		同安窯系		椀	27	I1b(17)、I(9)、II × III(1)
			38	皿	11	I1a(2)、I2b(3)、I1(2)、I(4)
		同安窯系？	1	椀	1	破片 (1)
		高麗	1	椀	1	I × II(1)
		高麗？	1	椀	1	III(1)
		不明	3	不明	3	破片 (3)
		青白磁		椀	3	(3)
				皿	9	(6)、〔内凸線〕(2)、〔内凸線、輪花〕(1)
				坏	1	森田 B'(1)
				合子	3	身 (3)
				蓋	2	壷蓋〔中型〕(1)、瓶蓋 (1)
				小壷	2	〔型凸文〕(2)
				壷	1	〔薄手〕(1)
			22	壷×瓶	1	(1)
		染付	1	椀	1	〔小野 B 群〕(1)
陶器		中国		合子	1	蓋 (1)
				盤	6	I2b?(1)、I2(1)、Ib(3)、Ib?(1)
				鉢	3	I1b(1)、VI(1)、B 群 (1)
				水注	1	〔長沙褐釉 ?〕(1)
				耳壷	4	III(2)、V × VI(2)
				壷	2	IV(1)、〔磁州×福建 ??〕(1)
				壷？	1	〔中国×国産〕(1)
				小壷	1	〔茶入〕(1)
				大壷	1	C 群 ?(1)
				壷類	1	A ×耳壷 III ×長沙水注類 (1)
			23	破片	2	B 群 (2)
		高麗	1	壷類	1	〔無釉〕(1)
		産地不明		壷類	1	〔国産灰釉×中国〕(1)
	25		2	破片	1	〔三彩〕(1)
						合計

陶磁器時期別点数																														
古代					中世前半													中世後半						中世前半			中世後半			
A	A?	A×B	B	B?	C	C?	C×D	D	D?	D×E	E	E×F	F	F?	F×G	G	G?	H	H?	I	I×J	J	K	C～F	C～	D～F	G～	H～	不明	合計
15	1			4	223	7	161	88					1				3								5				6	514
					87	5	32	15					38	1				1	1					1					2	183
					1																								1
																2													2
					2																								2
					3																								3
					1																				1				2
					1																				6				7
																												2	2
																								1					1
								3																					3
				1																					1				2
																											1		1
227		7																											234
25	1																												26
2																													2
6																													6
2																													2
2																													2
1																													1
2																													2
1																													1
1																													1
2																													2
1																													1
1																													1
6																													6
1																													1
1																													1
1																													1
1																													1
1																													1
	2	1																											3
																												1	1
	1																												1
1																													1
1																													1
								104	2	2	80		8			1		1		1	2	1						1	1	204
																											2			2
													5																	5
								2																						2
								3																						3
													5																	5
													1																	1
													1																	1
																											2			2
																													1	1
									1																					1
																											2			2
								27																						27
								11																						11
									1																					1
					1																									1
						1																								1
																													3	3
					3																									3
					9																									9
															1															1
																									3					3
																									2					2
																									2					2
																									1					1
																									1					1
																		1												1
															1															1
							1																	5		1				6
								1																1		1				3
	1																													1
							2																	2						4
												1													1					2
																												1	1
															1															1
																									1					1
	1																													1
																								2						2
																								1						1
																												1	1	1
																												1	1	1
301	7	8	0	5	331	13	196	254	4	2	80	1	59	1	3	3	3	3	1	1	2	1	0	13	24	1	6	2	19	1344

得られた点は重要である。

・平成 21 年（2 回目）

前回鑑定に続き、輸入青磁、陶器、国産古代施釉陶器、及び白磁、青白磁の追加資料に関して鑑定（分類、型式、産地別仕分け、年代判定）を行った。2 回を通じて分類した陶磁数は約 1700 点強に及ぶ。

輸入陶磁は、8 世紀末（9 世紀前半）から 15 世紀前半（16 世紀が若干）まで幅広い年代のものが出土している。8 世紀末～ 10 世紀中頃では、越州窯系青磁精製品（Ⅰ）は約 200 点、粗製（Ⅱ）は 100 点、長沙窯製品は 2 点で、これらは出土陶磁器中もっとも高い割合を示す。

次に、10 世紀後半～ 11 世紀中頃では、越州窯青磁Ⅲ類、及び白磁 XI 類と思われるものが少数ある。この時期に中国陶磁が減少するのは、全国的傾向である。

以上の古代期に対応する国産陶磁は、緑釉、灰釉で、灰釉陶は東海産に限られるが、緑釉は、防長、畿内、東海、近江産の 4 産地のものがすべて出土し、多産地構成の点で注目すべき点がある。防長、畿内、東海の製品は、古代でも 9 世紀代の古期に比重があり、この点は、中国陶器の年代的なあり方と相関していると考えられる。数も 120 点弱と多い。

中世に入り、11 世紀後半～ 12 世紀前半は、白磁優勢で青磁は、希少となる。この期の青磁としては、高麗青磁の可能性を持つ椀類 2 点、また朝鮮半島産無釉陶器が抽出された。12 世紀中頃～ 13 世紀は、龍泉窯青磁、同安窯青磁が、一定量を占め、元（13 世紀後半～ 14 世紀中頃）、明初（14 世紀後半～ 15 世紀前半）にかけては、急速に中国陶磁量は、減少するが、元代には、陶器茶入（小壺）良質白磁を少数ながら保持しており、一般より多少優位な階層の存在を裏づけるものであろう。

12、13 世紀の青白磁、合子、子壺、瓶、椀、皿も良品で一定の挌を有する。特に注目すべき陶磁としては、越磁Ⅲ類水注の例（10 ～ 11 世紀）、白磁鳳首瓶の 3 点の同一個体片（11 世紀～ 12 世紀前半）で前者は、中、南部九州では初見、後者は全日本で 2 例目（他の 1 例は、岩手県柳之御所跡出土）という貴重な資料となる。

遺跡は、長期間存続のためか各時代の遺構把握が困難な状況があるが、9 世紀前後の陶磁量は、北部九州の重要拠点に匹敵し、おそらくこれまでの 30 年間に調査された中、南部九州の遺跡の中では、最大の量に達する。今後遺物の面から遺跡の性格分析も必要となる。

以上の所見と実際の分類をしていただいたことで、陶磁器の重要度を改めて認識したことと非常に稀な陶磁器が出土していることが分かり、この調査区での遺構のあり方もさらに検討を要することになった。また、一覧表として掲載した資料は、これまで山本氏が全国各地で実見し、検証を重ねてこられた成果と比較する際にこの遺跡の特徴を知るための検討資料となる。

この遺跡の評価の一つとしてこの多量の陶磁器片である。二本木遺跡群ではこれまでも多くの輸入陶磁器が出土している。ただ、熊本市の調査でも、県の調査でもここまでの分類と点数を確認まではしていないようである。調査地点ごとの詳細な調査を実施し、遺構との関係をより詳細に検討することが可能になり、遺跡全体での遺構、すなわち人の営みの状況をより明確に掴むことができそうである。また、所見にあるように在地土器と陶磁器の組み合わせにより遺構のあり方にも一定の意味が加わっていくものと考える。

古期の 9 世紀前後の輸入陶磁の多さは指摘にあったように遺跡の遺物の増加時期と共通し、竪穴建物から掘立柱建物に変化して行く課程につながり、この地の利用方法の変化を伺わせる。掘立柱建物も規模こそ通常に近いものの方位性が高まることは何らかの官的なものへと建物が変化した可能性があり、そこの住民の変化も想定できる。

山本氏が遺物から抽出された重要な遺構のあり方は、調査時においても他の遺物との関係から重要視して

いたものであり、それが具体的に補強されたものである。参考意見を伺うため提示した土器にいみじくも指摘された豊前系土器については改めて精査し直すことでこの調査区では特定の遺構もしくはその時期に関係する場所に集中する傾向があることを認識できてきた。SD-041 は大型の溝状遺構であるが、それに平行する時期と考える SE-066 井戸でもこのタイプの土器が出土している。SX-004 の不明遺構でも出土しており、これらの遺構の同時性を追求することができた。分布域も調査Ｉ区の北側に偏る傾向も把握できた。さらにこの土器がどういうことでこの地にあらわれるのかが問題となろう。

参考文献

１　太宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡 XV- 陶磁器分類編 -』大宰府教育委員会　2000

(4) 硯（獣脚・円面・風字・転用）について

墨書土器とも関連するが、様々な形態の硯が出土している。獣脚硯の可能性のあるもの１点、円面硯（圏足硯）２点、風字硯２点、転用硯 20 点ほどが出土している。熊本市 13 次に比較すれば少なく、同時期のこの場所の使用のされ方の違いによるものであろう。

硯はいずれも須恵器で、陶硯と呼ばれるものである。以前は陶硯の出土をもって官衙遺跡の根拠とする場合もあったが、近年は集落遺跡内等でも出土事例が増加し、必ずしも遺跡全体の性格を示すものではない。熊本県内でも出土事例は多く、円面硯は 30 遺跡以上、風字硯も 10 遺跡以上からの出土が知られている。円面硯のうち獣脚硯は比較的希少で、まだ 10 遺跡に満たないという（脚のみの事例も含む）。また、中空硯が熊本市大江遺跡群と八代市宮地観行寺遺跡から、形象硯が大江遺跡群で出土する等、さらに希少な硯も出土事例が出てきている。転用硯の事例も県内で急増している。熊本市の大江遺跡群・新屋敷遺跡・二本木遺跡群にて出土数が多いのも、遺跡の時期・性格・規模も大きな要因ではあるが、調査件数が多いことと整理時に特に注意していることが最大の要因であろう。

おおむね各種硯の時期としては、獣脚硯が７世紀後半から８世紀前葉、円面硯（圏足硯）が７世紀後半から９世紀前半、風字硯が９世紀前半からで、10 世紀代には石製の硯に変わるとされている。以下は、当調査区において時期がわかるもの、特徴的なもの、出土分布などについて詳述する。

獣脚硯１点は、時期を示せるような出土状況のものではなかった。おおよその径は復元でき、約 20 ～ 21cm で６寸の規格品であろう。脚の外れた跡があるが、獣脚の形態は不明である。県内の須恵器生産地から獣脚硯の出土例はないので、県外からの搬入品と考えられる。

円面硯（圏足硯）は２点が出土している。同一個体ではないと判断した点数である。硯部から足の一部が残るのみで全体は不明である。いずれも包含層中で時期の助けとはならない。調整などの観察は十分にできていないが、成形技法などから荒尾産と思われる。

風字硯は２点が出土した。明らかに別個体で仕切り部分の同位置で判断できる。いずれも、中央に縦の仕切りをもつ二面風字硯で、左に墨、右に朱墨と使い分けていたようである。１点は遺構出土であるが、時期を示せるような状況のものではない。県内の須恵器窯で風字硯が出土しているのは荒尾地域のみで、県内各遺跡でも荒尾産と思われる色調・形態のものが多い。当調査区では荒尾産らしいかどうかの判断はできていない。

転用硯は確認しただけで 20 点ほどが出土している。通常の使用によるとは思えない研磨が顕著なもの、使用面に墨・朱墨が残っているものを転用硯とした。市教委「二本木遺跡群Ⅱ」による見解では「７世紀後葉～８世紀初め頃（あるいは８世紀前半代）には転用硯の使用が始まり、８世紀後半に使用のピークがあって、９世紀前葉まで残っている」といえるとあるが、本調査区での状況も類似している。

丸瓦

凹　面	凸　面	点　数
布目 (大)	縄目 (大)	3
	縄目 (中)	4
布目 (中)	縄目 (大)	3
	縄目 (中)	919
	縄目 (小)	2
布目 (小)	縄目 (中)	38

平瓦

凹　面	凸　面	点　数
巻き上げ痕	縄目 (中)	4
模骨痕	縄目 (中)	8
	格子	1
布目 (中)	格子	11
	斜格子	2
布目 (小)	格子	8

表 3　調査区内出土瓦一覧表

参考文献

1　綱田龍生「古代宇城地域の遺跡の諸相」『新宇土市史　通史編第一巻』宇土市　2003 年

2　横田賢次郎「福岡県内出土の硯について - 分類と編年に関する試案 -」『九州歴史資料館研究論集 9』九州歴史資料館　1983 年

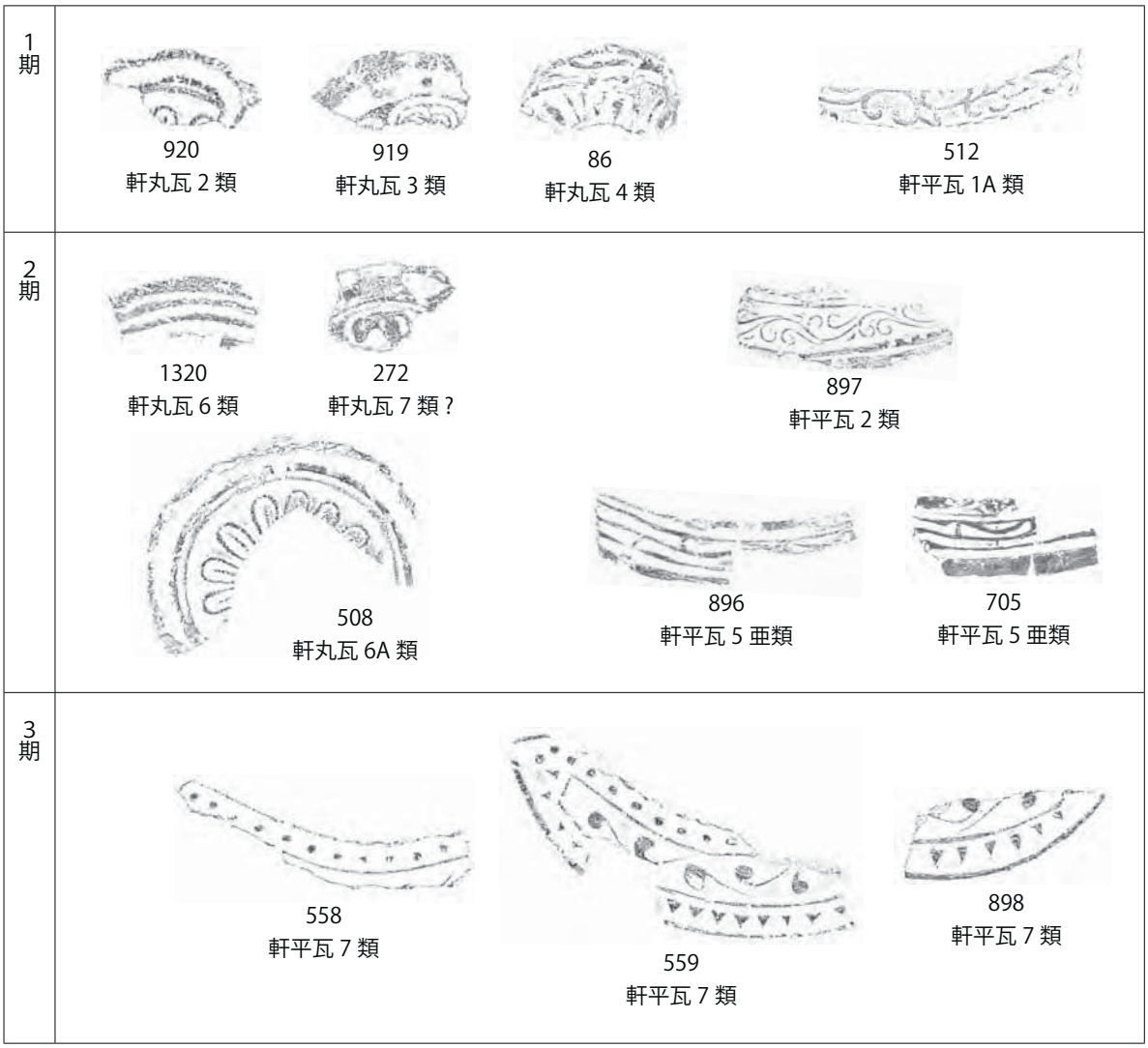
3　『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所　2003 年

(5) 瓦について

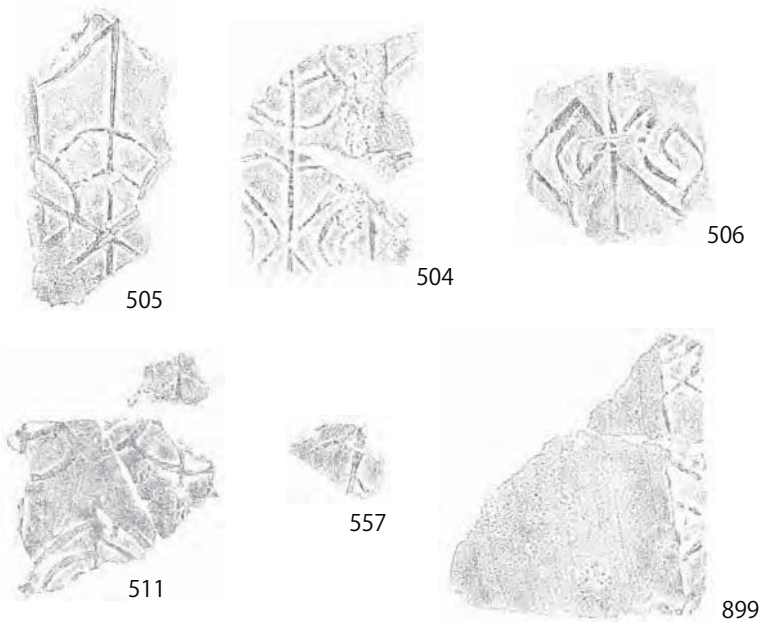
この調査区でも二本木遺跡群の他の調査地でみられるようには瓦の出土がある。出土量は総数 2125 点で、全体の重量は 178.851kg を測る。そのうちの 9 点ほどが軒先瓦で丸瓦 1439 点、平瓦 685 点と数量的には非常に少なく、残りも悪い。文様も十分つかめないものもある。その中には松本雅明氏が紹介した瓦である「延命寺飽田国府附近の瓦」と文様的に共通する (同範か) 平瓦などもある。文様から考えられる瓦の時期は、奈良時代後期から平安時代初期、平安時代末から鎌倉時代のものと考えられてきたことと齟齬はない。

熊本市の二本木遺跡 13 次調査の成果から軒瓦について分類を抜きだしてみると、軒丸瓦 1 類は外縁のみの破片だが、国分寺の創建瓦と考えられ、8 世紀中頃に位置付けられる。軒丸瓦 2 類は国分寺創建に際して国分寺用瓦工房とは別の工房で製作された瓦の一つと考えている。8 世紀中頃に位置付ける。軒丸瓦 3 類も今回初めて知られたが、軒丸瓦 2 類と同様に国分寺瓦用瓦工房とは別工房製作瓦と思われ、8 世紀中頃に位置付ける。軒丸瓦 4・5 類は、小片のみの出土で全体像が不明なため位置付けが難しいが、文様構成や文様の立体感等は古い要素と捉えられ、軒丸瓦 1 ～ 3 類と同時期もしくはやや下る 8 世紀後半に位置付けられるのではないか。軒丸瓦 6 類は、同笵関係のある池辺寺跡堂床地区や岡花関係の可能性がある田島廃寺の出土遺物から 9 世紀前半までには製作されたと考えられる。軒丸瓦 7 類は池辺寺跡軒丸瓦Ⅱ類と同笵であり、9 世紀前半に位置付けられる。軒丸瓦 8 ～ 12 類は、文様は異なるが、大半が弁・外縁を隆起線で表現しており、薄い瓦当と瓦当裏面にめぐらせた土手状の高まりを有する点で一致する。文様表現や技法の特徴から一群の瓦と捉えられるのではないか。時期的な位置付けは現状では難しい。軒丸瓦 13 類も小片で位置付けが難しいが、先の一群に入る可能性もある。軒丸瓦 14 類は、蓮華文を全く意識していない割に文様構成は整然としている。胎土・焼成も他のものとは一線を画しており、古代の瓦の範疇からは外れ、古代末から中世にかけてのものと考える。

軒平瓦 1 類は、二本木遺跡群以外に同笵例は無いが、つぼみを持つ唐草文は立願寺廃寺や稲佐廃寺などで出土したものに近似する。文様構成は崩れておらず、立願寺廃寺出土例と比較しても特に単調化されていない。国分寺創建以前にさかのぼる要素も見当たらず、8 世紀中頃に位置付けられるのか。軒平瓦 2 類は、池辺寺跡軒平瓦Ⅵ類と同笵で 9 世紀前半に位置付けられていた。この軒平瓦は第 13 次調査区周辺の調査区でも複数点出土しており、現状では二本木遺跡群の最多出土軒平瓦である。軒平瓦 3 類は池辺寺跡軒平瓦Ⅱ類と同笵で 9 世紀前半。軒平瓦 4 類は、溝状遺構出土土器の時期幅から 9 世紀中頃から 10 世紀後葉



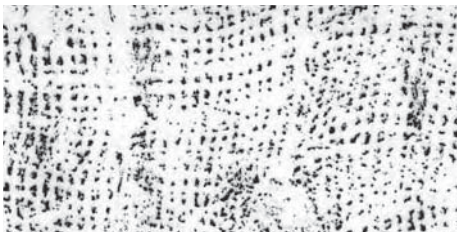
第 219 図　出土瓦編年想定図



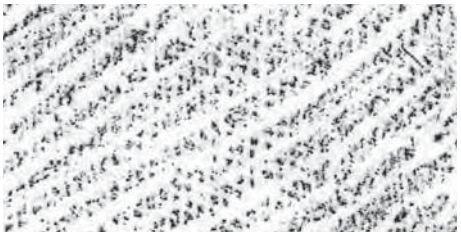
第 220 図　出土葉脈状圧痕瓦拓影

凹面

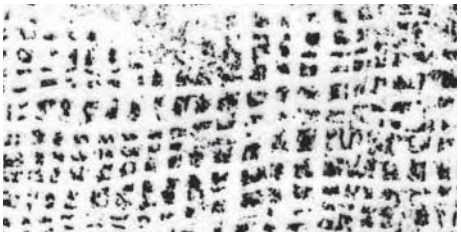
巻き上げ



模骨



糸きり＋布目

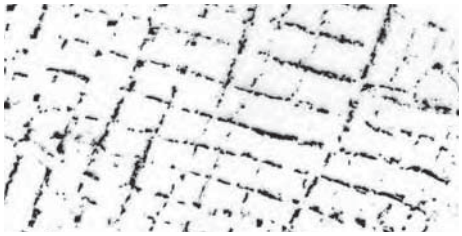


布目（大）

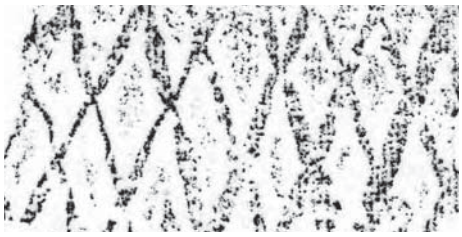
布目（中）

布目（小）

凸面

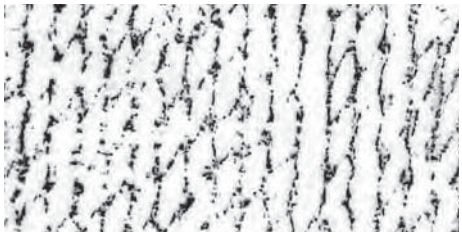


格子

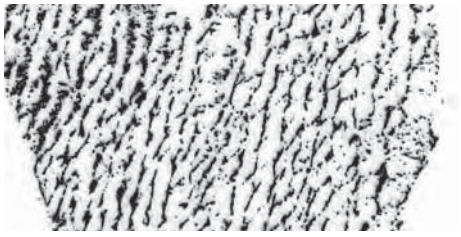


斜格子

縄目（大）



縄目（中）



縄目（小）

第 221 図　出土瓦凡例

までに製作されたものと判断する。軒平瓦５類は小片であり位置付けは難しいが、顎部に丁寧なナデを施している点からは９世紀には下らない可能性がある。軒平瓦６類は、軒平瓦４類と同じ包み込み技法で製作されており、軒平瓦４類と同じ位置付けと考える。軒平瓦７類は、唐草文が簡略化され珠文化しており、外区の明瞭な珠文・鋸歯文とのバランスが合わない。軒丸瓦 14 類と同様に復古的な意識で製作されたものではないか。軒平瓦４類よりさらに下る時期と想定するが、具体的な時期設定の根拠に欠ける。

以上のようになっており本文中にそれぞれの分類に合わせて記述している。すべてのタイプが出土しているわけではないが、ほぼこの分類にしたがって間違いはないようである。中には熊本市の報告内容よりも大きな破片も含まれている。

・他の瓦の分布状況

まず調査区内の分布状況を示す。先述したように総量約 178.851kg の瓦が出土した。遺構内からの出土は少なく、包含層からは約 166.189kg の瓦が出土している。包含層出土の瓦の分布状況をみると、調査区東側に向かって増加している傾向がみてとれる。これは熊本市の 13 次調査区との関係を伺わせるものである。他のグリッドでも同じ傾向を示している。

平瓦･丸瓦については出土位置や簡単な分類を試みた。内外の成形に際してタタキや布目などをもとに行った。本来もう少し詳しい布目の糸の経緯をも行うべきであったが、そこまでの余裕がなかった。その結果は別途表にまとめた。(第３表)

参考文献

1　平野沈香『熊本市史』熊本市役所 1932 年

2　松本雅明「飽田国府」『熊本市南部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1975 年

3　『九州古瓦図録』九州歴史資料館編 1981 年

4　『肥後国分僧寺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第 56 集　熊本県教育委員会 1982 年

5　佐藤伸二「浄水寺跡出土瓦に関する二三の問題」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 1990 年

6　『神園山瓦窯址』新熊本市史編纂委員会 1991 年

7　鶴嶋俊彦「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』肥後考古第８号　肥後考古学会 1991 年

8　『新熊本市史　史料編第一巻　考古資料』新熊本市史編纂委員会 1996 年

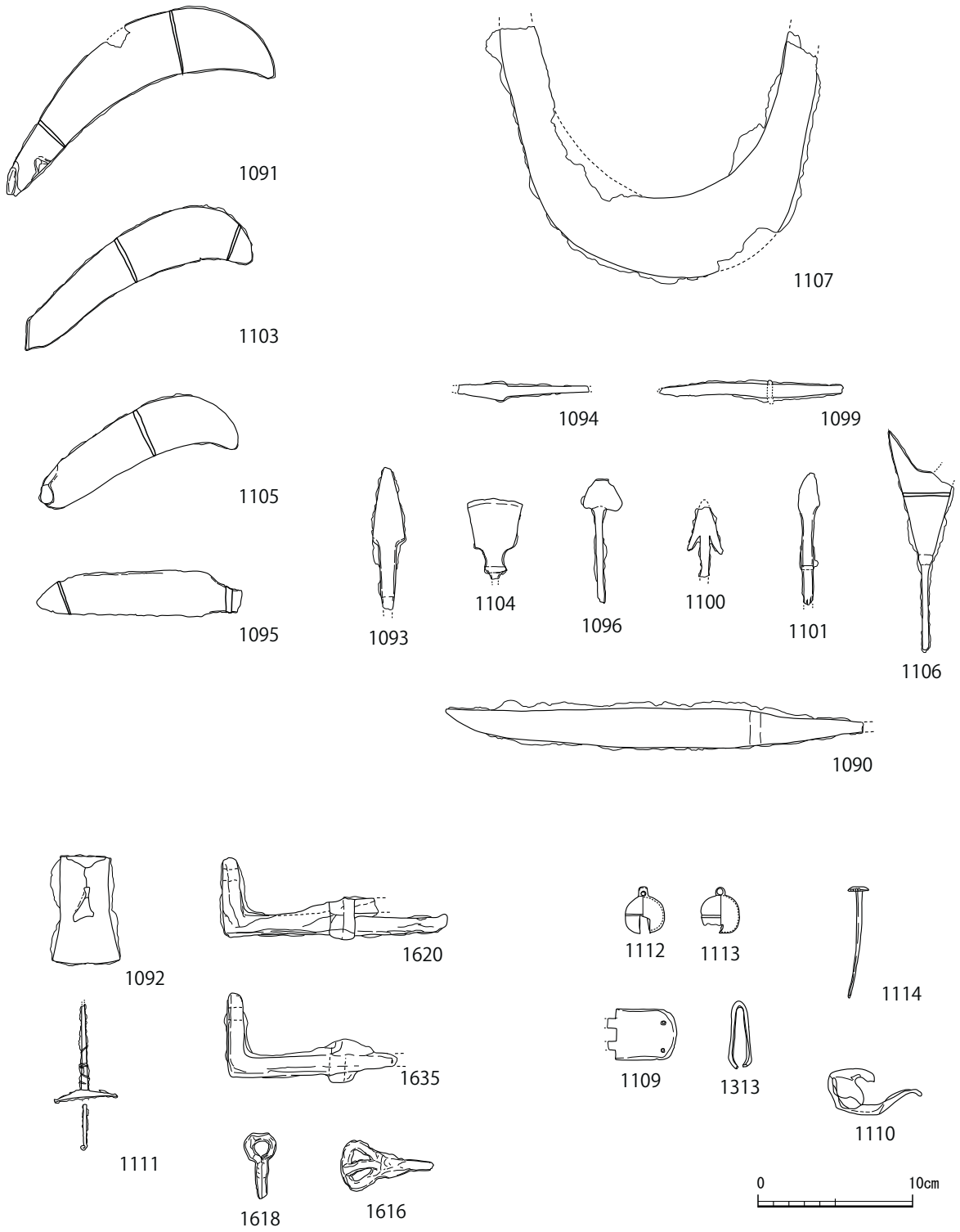
9　『二本木遺跡群Ⅱ - 第 19 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2006 年

(6) 金属製品について

今回の調査では、数量が多量とまではいわないものの、一定量あったのでふれておく。

金属製品では、鉄製品（鎌・刀子・包丁？・鋳具・壺金具・牡金具・紡錘車・鏃）、青銅製品（鈴・帯金具・釘・飾金具？）などである。他に鉄滓もかなりの量出土している。また、坩堝らしきものもあり、その中には溶解銅の一部が付着しているものがあった。

鉄製品では、特に鎌が欠損品も入れると６点ほどになりかなり多めである。中には同一地点で重なるようにして出土したものもあった。これは何らかの保管状態にあったものの廃棄を思わせるものでもある。他には壺金具と牝金具の出土が目を引く。これは整理作業中も終盤になって気づいたものである。壺金具はかなり小型品であるため、小さな箱のような容器に付けられたものと思われる。一方牝金具は２点確認し、タイプが若干異なる。鍵の差し込み部の形状が対称的である。この他にも再度見直せば鍵の部品はあるのかもしれない。このような遺物はかなり役所もしくは富裕層の居宅でなければ出土しないと考えられ、ここの



第 222 図　鉄製品集成図

遺構の意味合いも大きなものとなる。先の鉄鎌にしても鉄製品をもてる階層があったと考えられるので、出土量の多さが意味を持つ。

この他の生産具としての鉄製の紡錘車もあまりなく、鈴、銅釘なども一定の階層の住まう場所の出土としての意味を持つと考える。

整理作業終了間際に鉄器を再度見直していたところ、錠前の一部である牡金具を２点確認した。牝金具は確認していないが、錠前に関係するような金具も他に出土していたので今後再確認すれば、増える可能性がある。このような錠前や壺金具の出土はこの地に鍵をかける必要がある品物を有するもしくは管理する人および施設があったことを示している。他の出土品と合せ、この調査区の重要性の一端を示すものであろう。

参考文献　1. 合田芳正『古代の鍵』ニューサイエンス社　1998 年

(7) 自然科学分析について

今回の調査では、唯一の明確な墓であった ST-040 で良好な状態の一体分の人骨が得られた。このほかに溝状遺構から人骨の一部が出土した。そこでそれらの鑑定を下関市立土井ヶ浜ミュージアムの松下孝幸氏にお願いした。その報告文の抜粋を簡単にまとめる。

・ST-040 人骨 (男性・壮年)

埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。右側の肘関は強屈状態、左側は約 160 度曲げられる。膝関節は左右とも強屈して、右側へ倒れる。遺存状態は比較的良好。ほぼ全身骨残る。左右の足骨の骨質は脆く、現状で取り上げ困難。供献品として、白磁碗２個、白磁皿１枚、土師器皿２枚、鉄刀（小刀）１振りが、顔から右側上肢にかけて置かれる。

・SE-066 人骨（性別・年齢不明）

直径が 2m を超える、規模の大きな井戸(SE-066)の埋土中から頭蓋検出。頭蓋のみで下顎骨は存在しない。頭蓋は右側を下にし、顔を北に向けて、横向きで出土。頭蓋は真横になっていたのではなく右側前頭部が深く埋まった状態。脳頭蓋は丸さを保った状態で検出。人骨の出土状況からは埋葬状態ではない。

・SD-178 人骨（性別・年齢不明）

溝状遺構から検出。頭蓋のみで、保存状態は著しく悪い。側頭骨の一部などを現場で確認。埋葬姿勢や顔の向きなどは不明。本例は中世初め頃の人骨と推測。

・SD-046 人骨

頭蓋と左側大腿骨のみ。頭蓋は右側側頭骨が２体分あるので、頭蓋は少なくとも２体分である。

・1 号人骨 (男性・壮年)

脳頭蓋が残存。保存状態は良好で、骨壁はやや堅牢。外後頭隆起はやや突出。乳様突起は大きかったようである。三主縫合はともに内外両板とも開離している。また、前頭縫合が認められる。前頭骨は眼窩部を欠損しているので、眉上弓の隆起の様態などは不明である。計測はほとんどできないが、頭蓋の径は大きい。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところ頭型は長頭型である。

頭蓋の径が大きいこと、外後頭隆起がわずかに発達していることから、性別を男性と推定した。年齢は三主縫合の内外両板が開離していることから壮年と思われる。

・2 号人骨 (性別・年齢不明)

右側頭頂骨の一部 (乳突角部) と右側側頭骨の一部 (下顎窩) のみである。骨壁はしっかりしている。性別・年齢は不明である。

最後に熊本市の報告によれば、墓の形成は、11 世紀中葉から始まってはいるが、特に 12 世紀代になって集中している傾向がある。また特別に副葬品や供献品に共通するセット関係はみられず、高階層性というわけではないようであるという。

・動物遺体について

次に動物骨は小破片まで含めると 100 点近くになった。ウマ一体分の埋葬を除けば、ほとんどが動物骨の一部分だけの出土であった。専門家の鑑定を仰ぐ予定で選別作業まではしていたが、他の遺物の整理に力を注いだため、獣骨の鑑定を依頼する余裕がなくなってしまった。ただ、発掘作業中に現場で S-066 井戸出土の人骨のみは鑑定してもらっていたのでその分については、種類を特定できていたので、その成果については本文中で示した。

その他の骨については、専門書を参考に調査担当者でできる範囲の特定を試みた。その結果、全体数量までつかむには至らなかったものの、大部分がウマ・ウシで、イヌ・シカ・イノシシなどがわずかに入ることが判った。実際の頭数まではバラバラの状態で見つかっているため、確認はできていない。

遺構からの出土状況をみると、2 箇所の井戸からの他はほとんど溝状遺構内からの出土であった。包含層からの出土も確認できなかった溝状遺構からの出土の可能性が高い。

以上の分析結果を、発掘調査による考古学的成果とからめて検討すると、井戸からの出土状況は井戸に意図的に投入したような状況である。現在でも湧水があるため埋葬ではなく、井戸 = 水に関連した何らかの祭祀行為によるものと考えられる。骨にも意図的な破砕や解体痕はないため、水に関係する祭祀行為を想定しても良いかと考える。一体のみの完全体は飼育されていたものを埋葬したものであろう。熊本市内の各所で同様の出土状況があり、頭部骨の利用が祭祀儀礼にとって一定の役割を果たしていたのであろう。さらにいえば、先にのべた人骨の中にも頭骨のみの出土があり、これも祭祀行為に使用された可能性がある。中世では人骨を利用した祭祀行為について触れた文献資料もあり、実際にそれが行われた証左としてこのような獣骨や人骨の出土となったのであろうか。

参考文献

1　『二本木遺跡群Ⅰ - 第 18 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2005 年
2　『二本木遺跡群Ⅱ - 第 13 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2007 年
3　『二本木遺跡群Ⅲ - 二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2007 年
4　「田崎本町通跡第 1 次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 - 平成 18 年度 -』熊本市教育委員会　2007 年
5　「二本木遺跡群第 22 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報　第 9 号』熊本市教育委員会　2007 年
6　『動物考古学の手引き』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター　2006 年
7　松井　章『動物考古学』京都大学学術出版会　2008 年

第3節　まとめ

二本木遺跡群第8次調査における成果を、二本木遺跡群全体の中でのこの調査区の位置付けをまとめることにする。

これまで二本木遺跡群では、従来の開発行為に加えて、九州新幹線開業に伴う本線部分、JR駅舎、周辺再開発などにより、熊本県・熊本市が多くの発掘調査を実施し、貴重な成果をあげてきている。多くの地点での調査により二本木遺跡群内における遺構の占地状況も徐々に明らかとなっているようである。

今回の調査では縄文時代晩期の遺物は出土したものの遺構は確認できず、弥生時代の遺物・遺構ともに検出はできていない。主体は先にも記したように古代・中世の時期であり、遺構・遺物である。二本木遺跡群では、熊本市の調査成果が多く公表されており、それらを参考に見ていくと、古代の集落は、遺跡群の南側と西側に認められる。竪穴建物が多数検出されているのは熊本市の第4・8・12・16・23・24・26・27次調査区、県では本調査区、新幹線駅舎調査区、熊本駅構内等である。その主体は8世紀後半から9世紀前半であるようである。同じころ熊本市第13次調査の官衙建物群も建設されているという。官衙建物群との関連の深い集落であったと考えられている。実際本調査区でもその時期の竪穴建物に関連する遺物にもその傾向が見られる。また、掘立柱建物群に伴う遺物と考えられる緑釉陶器･越州窯系青磁等も多く認められ、高身分者の居住施設の可能性がある。特に今回の調査では従来にないほどの越州窯系青磁の精製品の出土があり、掘立柱建物等の遺構の出土はこのことをより確かなものとすることのできる可能性が高まったと考える。

中世の「飽田国府」が二本木遺跡群内に存在したとする説は文献資料から確実視されている。場所は「古府中」の字の残る一帯に想定されている。ただ、いつから存在するかについては諸説あり、遺跡そのものが確認されてない現状では解決していない。

発掘調査の成果では、竪穴建物から掘立柱建物への居住の変化に伴い、遺構と遺物の関係が必ずしも密ではなく、遺物の出土傾向から生活状況を想定する作業が必要となる。熊本市の調査成果状況からみると、9世紀後半から10世紀の遺構・遺物はやや密度が薄くなり、10世紀後葉以降になると遺構・遺物の増加がみられるようである。官衙の移動もこの時期以降ではないかと想定されている。土坑等から一括資料がみられるのが10世紀後葉～末で、大量の土師器椀・杯等の出土は「饗宴」の場があったのではないかといわれている。そのような一度期に大量のものの廃棄ができる階層の出現があったものと考える。このことが必ずしも肥後国府の二本木遺跡群内への移動を意味するものではないが、少なくとも高身分階層がこの地に集住していたことは他の地域に比較してもこの地に政治的な勢力が存在するようになったことを意味し、それが国府の官人層であることも想定できる。

本調査区での状況は、11世紀後半～12世紀前半にSD-041の埋土中やそれに関係する遺構で杯や小皿類のまとまった出土が見られ、この地では平安時代末から鎌倉時代初期にかけて、「饗宴」の場があり、使用する食器に青磁・白磁をである点、大溝状遺構や墓の存在は、この調査区の内もしくは周囲に一定の階層が存在している可能性を想定できる。さらに大溝状遺構や周辺から出土した「豊前系」土器の存在は、その階層の出自をうかがわせるものと考える。明らかに外来土器の出土は新たな人の動きも想定する必要があろう。熊本市の調査でも「豊前系土器」の出土があり、周辺調査区での広がりも今後確認する必要があると考える。

また、この調査区から出土した遺物では先にあげた陶磁器の他、金属製品がある。鉄製品では鎌・鋤先などはそう多く出土するものではなく、特に鎌は5点以上出土し、中には2点重なって出土しており何か容器などに納められていた可能性もある。また、錠前や壺金具など容器などに使用された部品の一部の出土は鎌の出土状況と合せて倉庫などの施設の存在も可能性としては考えられる。多量のピット群の出土は多くの

建物群の存在を示すものであり、残念ながらそう多くの建物を見出すことが調査担当者としてできなかったことが悔やまれる。ただ、調査Ⅰ区南側で総柱建物跡を確認しており、これが倉庫と考えてもよいかどうかは疑問であるが特殊な建物の存在は想定できる。

二本木遺跡群は、数百年継続し、中世には国府を迎え都市として機能していたと想定されており、道の集中も見られ、工藤敬一氏による国府の都市構造の想定もされている。本調査区で出土した溝状遺構は中世まで続くものも多く、この溝状遺構が中世においてどのような役割を果たしていたのか、遺跡全体で方位・規模・時期を明確化し比較・検討する必要があろう。今後熊本市・熊本県での調査成果の報告と検討は二本木遺跡群の性格・構造を明らかにしていくうえで重要なことである。

参考文献

1　『二本木遺跡群Ⅱ - 二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書 -』熊本市教育委員会　2007 年
2　工藤敬一「第一編第一章　平安後期の地方政治」『新熊本市史　通史編第二巻　中世』新熊本市史編纂委員会　1998 年

遺 物 観 察 表

表１　Ｉ区　土器類観察表

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
139	461	土師器	杯	-	SD	001	3層	-	-	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
139	462	土師器	小皿	-	SD	001	3層	(8.4)	1.1	(8.0)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
139	503	土師器	鍋（脚）	-	SD	001	下層	-	-	-	ﾅﾃﾞ・指ﾅﾃﾞ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	-	-
139	463	土師器	小皿	-	SD	002	3層	(8.4)	0.9	7.3	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
139	1	土師器	杯	-	SD	003	3層	(12.4)	2.6	(8.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	赤彩（内外面），墨書（底部）	-
139	464	土師器	杯	-	SD	003	3層掘り下げ	-	-	(9.8)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
139	465	土師器	小皿	-	SD	003	3層	(8.2)	1.4	(6.8)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
139	482	土師質	ｶﾏﾄﾞ	-	SD	008	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・工具による調整	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR7/4，にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	煤付着（口縁端部～内面上部）	29
147	750	須恵器	摺り鉢	-	SD	009	-	(25.2)	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾊｹﾒ後摺り目	-	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	摺り目 1.7cm 幅に 7本	-
57	751	土師器	杯	-	SK	030	-	11.3	4.9	6.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	-	23
57	752	土師器	高台付皿	-	SK	030	-	(11.5)	3.45	6.75	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6･5YR6/6	橙 2.5YR6/6･5YR6/6	赤彩（内外面）	-
57	753	土師器	高台付椀	-	SK	030	-	-	-	6.9	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4，橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4，橙 7.5YR7/6	-	23
57	754	土師器	甕	-	SK	030	-	(27.5)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ工具痕	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	煤付着（外面）	-
55	33	土師器	小皿	-	ST	040	-	8.7	1.5	6.9	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	糸切り後粘土痕	3
55	34	土師器	小皿	-	ST	040	-	8.7	1.4	6.5	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状工具によるﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	3
142	135	土師器	小皿	-	SD	041	4層	8.2	1.3	6.6	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	45
142	136	土師器	小皿（灯明皿）	-	SD	041	中～下層	8.4	1.3	6.4	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（内面）	45
141	137	土師器	小皿	-	SD	041	上層	8.1	1.2	6.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6，灰白 5Y7/1	煤付着（外面）	45
141	138	土師器	小皿	-	SD	041	上層	7.9	1.3	6.5	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	-	45
141	139	土師器	小皿	-	SD	041	上層	8	1.2	6.2	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR6/6，にぶい黄橙 10YR7/4	-	45
141	141	土師器	小皿	-	SD	041	-	8.2	1.4	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 10YR7/4，橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	45
141	145	豊前系	小皿	-	SD	041	上層	9.3	1.7	5.0	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	-	45
141	149	土師器	小皿	-	SD	041	6層	8.6	1.3	6.1	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4，橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4，橙 5YR6/6	-	45
141	150	豊前系	小皿	-	SD	041	埋土	8.9	1.4	5.2	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部を打ち欠いている（穿孔）	45
141	151	豊前系	小皿	-	SD	041	3層掘り下げ	8.8	1.45	5.1	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部を打ち欠いている（穿孔）	45

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
142	152	土師器	小皿	-	SD	041	上層	11.5	2.1	7.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	-	45
141	153	土師器	小皿	-	SD	041	4下層掘り下げ	9.6	1.3	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	45
141	156	豊前系	杯	-	SD	041	埋土	15.8	4	6.2	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ後指ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	-	29
141	157	豊前系	杯	-	SD	041	上・中層	15.4	4.1	5.9	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	-	29
141	158	豊前系	杯	-	SD	041	中層	15.3	4.2	6.3	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	-	29
141	159	土師器	杯	-	SD	041	3～5層	(14.0)	3.5	8.4	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
141	483	土師器	小皿	-	SD	041	下層掘り下げ	(9.6)	1.4	(6.8)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	黄橙 10YR7/3,にぶい黄橙 10YR7/3	墨書，穿孔有	45
141	606	土師器	小皿	-	SD	041	上層	(9.6)	2.0	(5.0)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒 N21,ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y1/3	黒 N21,ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y1/3	-	-
141	616	土師器	杯	-	SD	041	下層掘り下げ	(16.0)	4.1	(8.5)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹﾞｽﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y8/2,にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 2.5Y8/2,にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（内外面）	-
141	619	土師器	高台付椀	-	SD	041	-	(16.2)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	風化の為不明	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	研磨 ?（外面）	-
141	620	土師器	杯	-	SD	041	上層	18.7	4.3	10.4	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（内外面），廃棄後に焼けたものか？	29
142	621	須恵器	器台	-	SD	041	上層掘り下げ	-	-	-	ﾍﾗｹﾞｽﾘ	ﾅﾃﾞ	-	-	灰白 5Y8/1	橙 2.5YR6/6	滑石混入？	29
157	38	土師器	杯	-	SD	042	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	-	-
157	39	土師器	杯	-	SD	042	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	-	-
157	40	須恵器	高台付杯	-	SD	042	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾘ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	貼付け高台	-
157	47	土師器	高台付杯	-	SD	043	最下層	(16.1)	5.9	9.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	黄橙 10YR8/4	貼付け高台	29
157	57	土師器	小皿	-	SD	043	-	9.8	1.8	7.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	29
157	58	土師器	小皿	-	SD	043	4層	9.4	2.0	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	29
157	63	須恵器	高台付壺（転用硯）	-	SD	043	-	-	-	12.0	使用痕	ﾍﾗ切り	-	回転ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	貼付け高台	30
157	52	土師器	杯	-	SD	043・233	-	-	-	6.25	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
157	59	土師器	甕	-	SD	043・233	埋土	(28.6)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・工具ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（外面）	30
90	68	土師器	甕	-	SE	045	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR4/2	-	-
90	69	須恵器	蓋	-	SE	045	6層	(14.2)	0.7	-	回転ﾍﾗｹﾞｽﾘ・ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	-	-
90	70	須恵器	長頸壺	-	SE	045	包4層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・不明	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	灰釉（内外面一部）	25

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
90	707	土師器	杯	-	SE	045	-	13.0	3.6	9.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灯明皿，赤彩（内外面），口縁部打ち欠く	25
90	708	須恵器	皿	-	SE	045	7層	(14.0)	2.0	(10.8)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	-	-
90	709	須恵器	高杯	-	SE	045	7層	-	-	-	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐 10YR4/1	灰黄褐 10YR4/2	-	-
146	71	土師器	杯？	-	SD	046	-	-	-	(7.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	灰黄褐 10YR5/2	-	-
146	72	土師器	杯	-	SD	046	-	-	-	(7.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
146	73	土師器	高台付椀	-	SD	046	-	-	-	(8.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	貼付け高台	-
146	74	土師器	高台付杯	-	SD	046	下層掘り下げ	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅｹﾞｽﾞﾘ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	赤彩（内外面），貼付け高台	-
146	75	黒色土器	高台付椀	-	SD	046	-	15.9	5.9	-	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗﾅｹﾞｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰 N3/，灰黄 2.5Y7/2	暗灰 N3/，灰白 5Y8/1	貼付け高台	30
146	76	黒色土器	高台付椀	-	SD	046	掘り下げ	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1	貼付け高台	-
146	77	土師器	杯	-	SD	046	-	-	-	(6.4)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
146	79	土師器	小皿	-	SD	046	-	-	-	4.2	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
146	80	土師器	脚	-	SD	046	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	-	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
146	82	須恵器	蓋	-	SD	046	下層掘り下げ	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黒 N2/	灰 N4/	-	-
146	83	土師器	小皿	-	SD	046	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	上下両面からあけたとみられる穿孔（底部）	-
146	710	土師器	小型甕	-	SD	046	ｻﾌﾞﾄﾚ	(12.7)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	煤付着（外面），赤彩（内外面）	30
157	711	須恵器	高台付杯	-	SD	047	下層	-	-	9.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰 2.5Y8/1	灰 2.5Y8/1	転用硯か？，貼付け高台	-
157	712	土師器	杯	-	SD	047	下層	(14.0)	2.5	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
158	87	土師器	小皿	-	SD	048	-	9.3	1.45	6.8	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	-	30
158	88	豊前系	杯	-	SD	048	-	-	-	(6.5)	ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/3	-	-
158	89	豊前系	杯	-	SD	048	-	-	-	6.0	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/2	-	-
158	90	土師器	杯	-	SD	048	掘り下げ	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅｹﾞｽﾞﾘ	-	ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面）	-
158	91	土師器	小皿	-	SD	048	-	(8.5)	1.55	(6.8)	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	黒斑（内外面一部）	-
122	92	土師器	杯	-	SE	049	3層	(13.2)	3.0	(8.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
122	93	土師器	杯	-	SE	049	2層	15.3	3.5	9.8	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	工具によるﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	25･45
122	94	豊前系	皿	-	SE	049	2層	-	1.4	-	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	-	-
122	713	土師器	小皿	-	SE	049	-	(8.8)	1.65	(6.6)	回転ﾅﾃﾞ	糸離し後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
122	714	土師質	脚	-	SE	049	2層	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	-	-
122	715	土師器	高台付鉢？	-	SE	049	-	-	-	6.6	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	灰白 5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	貼付け高台	-
23	96	土師器	杯	-	SI	050	下層	14.0	2.7	13.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ後ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	赤彩（全面）	22

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
23	98	土師器	杯	-	SI	050	埋土	(11.5)	3.2	(6.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/8	橙 2.5YR6/8	-	-
23	101	土師器	杯	-	SI	050	埋土	-	3.15	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（全面）	-
23	103	土師器	杯	-	SI	050	2層埋土	(14.2)	3.85	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	22
23	106	土師器	高台付杯	-	SI	050	3層掘り下げ	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	明赤褐 2.5YR5/6	-	-
23	109	土師器	杯	-	SI	050	-	(12.8)	4.0	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
23	110	土師器	甕	-	SI	050	掘り下げ	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（全面）	-
24	111	土師器	甕	-	SI	050	ｶﾏﾄﾞ内上～下層	(29.8)	-	-	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/8	にぶい褐 7.5YR6/3	-	-
24	113	土師器	甕	-	SI	050	上層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺ・ﾅﾅﾒ方向のﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
23	116	須恵器	蓋	-	SI	050	埋土	(10.5)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
23	120	土師器	鉢	-	SI	050	3層	-	-	(14.6)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・磨耗している	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩の痕跡（内面）	-
23	123	須恵器	蓋	-	SI	050	3層	14.0	3.6	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	灰黄褐 10YR5/2, にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2, にぶい黄橙 10YR6/4	焼むら（外面）	22
23	124	須恵器	蓋（転用硯）	-	SI	050	埋土	(13.0)	1.1	(12.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	内面に硯の使用痕有	-
23	128	須恵器	高台付杯	-	SI	050	3･3b層掘り下げ	(16.2)	5.7	(10.8)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	貼付け高台	-
24	129	須恵器	甕	-	SI	050	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・格子目ﾀﾀｷ	-	回転ﾅﾃﾞ・同心円文当て具痕	-	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	-	-
23	466	須恵器	高台付杯	-	SI	050	3b層掘り下げ	(13.8)	4.3	(10.3)	回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	貼付け高台	-
26	172	土師器	杯	-	SI	051	上～下層	(14.4)	3.1	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ調整	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR7/6	橙 5YR7/8	-	22
26	173	土師器	杯	-	SI	051	3中層	(14.8)	3.8	(10.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ調整	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
26	174	土師器	杯	-	SI	051	3b上層	(11.8)	3.2	(8.8)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	赤橙 10R6/6	橙 2.5YR6/6	炭化物付着，焼成やや不良	-
26	179	土師器	高台付皿（托）	-	SI	051	3層	(11.6)	1.9	6.5	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	植物葉の圧痕有，貼付け高台	22
26	181	土師器	甕	-	SI	051	上層	(25.3)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/4, にぶい黄橙 10YR6/4	煤付着（外面）	-
26	182	土師器	甕	-	SI	051	下層	(24.8)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	淡黄 5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	焼成不良	-
26	183	土師器？	短頸壺	-	SI	051	3下層	(17.3)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	明黄橙 7.5YR8/4	-	-
26	184	土師器	製塩土器	-	SI	051	ﾄﾚﾝﾁ	(7.0)	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状の調整痕	-	ﾅﾃﾞ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	被熱により表面が剥離している	22
26	189	須恵器	杯	-	SI	051	上層	(15.8)	4.5	10.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 10Y5/1	灰 10Y6/1	ﾍﾗ切り（外底面），非常に雑	22
26	191	須恵器	高台付杯	-	SI	051	2層	(13.0)	4.2	(10.1)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	灰釉（内底面），底面に黒いｶﾞﾗｽ状物質（径 7mm）付着	-
29	193	土師器	杯	-	SI	052	掘り下げ	-	-	(7.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
29	194	土師器	杯	-	SI	052	下層	-	-	(10.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	明赤褐 5YR5/6	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面），煤付着（外面一部）	-
29	197	土師器	高杯	-	SI	052	3b 層	(15.0)	-	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（外面）	-
29	198	土師器	大皿	-	SI	052	下層	(23.0)	2.75	-	回転ﾅﾃﾞ	手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	-	22
29	199	土師器	甕	-	SI	052	ｶﾏﾄﾞ内	(15.5)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
29	201	土師器	甕	-	SI	052	2･4 層	(20.7)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄褐 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	煤付着（内外面）	-
92	206	内黒土器	高台付椀	-	SE	053	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい橙 7.5YR7/4	黒 7.5Y2/1	内黒土器 A	-
31	207	土師器	鉢？	-	SI	055	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ？	-	橙 5YR6/6	橙 .5YR6/6	-	-
31	208	土師器	甕	-	SI	055	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃ方向のﾊｹﾒ	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
31	210	須恵器	蓋	-	SI	055	埋土	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・研磨	-	赤褐 10YR5/4	暗赤褐 5YR3/2	転用硯か？	-
147	211	土師器	高台付椀	-	SD	056	-	11.7	5.5	7.3	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	-	30
147	213	土師器	甕	-	SD	056	4 層掘り下げ	(13.9)	-	-	工具によるﾅﾃﾞ	-	工具によるﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	内：口縁・胴部の一部に使用際に火を受けている	-
147	214	土師器	甕	-	SD	056	-	(21.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/8	灰黄褐 10YR5/2，にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面），煤付着（外面）	-
147	215	須恵器	壺	-	SD	056	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	30
147	216	須恵器	蓋	-	SD	056	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	灰釉（天上部），重ね焼痕	-
147	217	須恵器	甕	-	SD	056	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ・擬格子目ﾀﾀｷ	-	ﾅﾃﾞ・同心円文当て具	-	灰 N4/	灰 7.5Y4/1	-	-
147	218	土師器	杯	-	SD	056･057	-	11.3	4.3	5.8	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	歪み	-
147	219	須恵器	高台付杯	-	SD	056･057	-	-	-	(7.7)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	貼付け高台	-
148	242	須恵器	高台付壺	-	SD	056･057	掘り下げ	-	-	(11.3)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y5/1	灰黄褐 10YR5/2	貼付け高台	-
147	220	土師器	杯	-	SD	057	4 層掘り下げ	13.9	4.5	10.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
148	223	土師器	甕	-	SD	057	4 層掘り下げ	(15.4)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・沈線	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	煤付着（内外面）	-
148	227	土師器	甕	-	SD	057	4 層掘り下げ	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/3	-	-
148	228	土師器	甕	-	SD	057	4 層掘り下げ	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾊｹﾒ・工具ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/8	にぶい黄橙 10YR6/3	赤彩（内外面），煤付着（内面口縁部）	-
147	232	須恵器	蓋	-	SD	057	4 層掘り下げ	(14.0)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
147	233	須恵器	蓋	-	SD	057	4層掘り下げ	-	-	-	ナデ・回転ナデ	-	回転ナデ・ナデ	-	灰 N6/	灰 N6/	灰釉（内外面）	-
148	221	土師器	杯	-	SD	057a	-	13.5	4.2	9.5	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
149	224	土師器	甑	-	SD	057a	-	-	-	-	ナデ	-	ヘラケズリ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4-7/4	-	-
149	225	土師器	甑	-	SD	057a	-	-	-	-	ハケメ・ナデ	-	ヘラケズリ	-	橙 5YR7/6, にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
148	226	土師器	杯	-	SD	057a	-	(13.9)	2.6	(8.9)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	-	回転ナデ・ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面）	-
148	235	須恵器	高台付杯	-	SD	057a	4層掘り下げ	(14.4)	4.9	(9.1)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ・回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	貼付け高台	-
148	237	須恵器	高台付杯	-	SD	057a	-	(13.15)	4.4	(9.0)	回転ナデ・ナデ	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	ナデ	黄灰 2.5Y6/	黄灰 2.5Y6/	貼付け高台	-
148	238	須恵器	杯	-	SD	057a	掘り下げ	14.1	4.6	8.1	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	穴隙（内外器面）（胎土に砂石が入り込み成形時に取欠落？）	30
149	241	須恵器	長頸壷	-	SD	057a	-	-	-	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ	-	回転ナデ	-	灰 N6/	褐灰 10YR5/1	灰釉（外面），焼成時に煤付着？	-
149	716	土師器	高台付椀	-	SD	057b	1層	6.0	8.2	-	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	ナデ	ナデ	-	-	赤彩（内底面），貼付け高台	-
149	717	須恵器	盤（転用硯）	-	SD	057b	4層掘り下げ	(15.0)	-	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	ナデ・回転ナデ・使用痕	灰 10Y5/1	灰 10Y5/1	貼付け高台，朱墨有	30
94	243	土師器	杯	-	SE	060	-	-	-	-	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	-	ヨコナデ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	-
94	244	土師器	甕	-	SE	060	上層	(22.4)	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	-
94	245	土師器	甕	-	SE	060	掘り下げ	(22.3)	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	-	-
94	246	須恵器	杯	-	SE	060	-	(13.3)	3.6	(7.2)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ後ハケナデ・回転ナデ	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	接合面痕跡	-
94	247	須恵器	蓋	-	SE	060	-	(14.9)	3.8	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	-	灰 5Y6/1	灰 7.5Y6/1	転用硯の可能性有	-
25	248	土師器	杯蓋	-	SI	063	上・中層	-	-	-	回転ナデ	-	ナデ・回転ナデ	-	橙 7.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	黒斑（外面），赤彩（内面）	-
25	249	土師器	高台付椀	-	SI	063	下層	-	-	(8.2)	回転ナデ	風化のため不明・回転ナデ	回転ナデ	風化の為不明	灰褐 5YR4/2	橙 5YR6/6	赤彩（内外面），高台貼付け	-
25	250	土師器	鍋	-	SI	063	上・中層	-	-	-	ナデ	-	ナデ・ヘラケズリ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
25	251	土師器	甑	-	SI	063	上層	-	-	-	ナデ	-	ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
25	252	須恵器	高杯	-	SI	063	下層	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	-	-
25	253	須恵器	高台付皿	-	SI	063	中層	(19.6)	3.7	(13.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰 2.5Y3/1	暗赤灰 2.5Y5/3	-	-
25	509	須恵器	高台付杯	-	SI	063	上層	-	-	(11.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	研磨・回転ナデ	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	転用硯か？貼付け高台	-
33	254	土師器	杯	-	SI	064	上層	-	-	-	ヨコ方向ミガキ	-	ヨコ方向ミガキ	-	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	赤彩（内外面）	-
33	255	土師器	杯	-	SI	064	上層	-	-	-	ヘラミガキ	-	ヨコナデ後暗文	-	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	-	-
33	256	土師器	高杯？	-	SI	064	-	(11.2)	-	-	ナデ・ミガキ	-	ヨコナデ後暗文	-	橙 2.5YR6/8	橙 7.5YR7/6	赤彩（外面）	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
33	258	土師器	合子？	-	SI	064	上層	(7.6)	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/6	-	-
124	260	土師器	杯	-	SE	066	6層	(15.5)	4.9	7.7	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内面から打欠いている，黒斑有（外面）	25
124	263	須恵器	杯	-	SE	066	16層	(14.5)	2.9	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状工具	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5YR8/4	-	-
124	266	豊前系	杯	-	SE	066	2層	-	-	6.4	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	-	-
124	267	土師器	椀	-	SE	066	-	(16.0)	-	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	-	-
124	268	瓦器？	杯	-	SE	066	7～9層	(15.4)	3.5	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	褐灰 10YR5/1	灰白 10YR7/1	-	-
124	269	須恵器	瓶	-	SE	066	1層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	-	-
58	758	須恵器	杯蓋	-	SK	067	1層	(13.7)	1.2	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5YR6/1	灰 5Y6/1	-	-
58	764	土師器	杯	-	SK	067	下層	11.6	3.7	6.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5YR7/3	圧痕の痕跡有	-
58	765	土師器	高台付椀？	-	SK	067	下層	(15.25)	5.4	9.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	貼付け高台	30
27	275	土師器	杯	-	SI	068	上層	(15.1)	3.8	(10.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤彩（内外面）	-
27	276	須恵器	長頸壺	-	SI	068	上層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・沈線	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 N5/	灰 N5/	-	-
27	277	須恵器	高台付杯	-	SI	068	下層	-	-	(7.2)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐灰 7.5YR4/1	灰 7.5Y4/1	-	-
60	760	土師器	杯	-	SK	077	5層	13.4	3.4	8.4	回転による暗文	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転よる暗文	回転による暗文	回転による暗文	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	23
60	761	黒色土器	高台付椀	-	SK	077	中層	(14.5)	5.9	7.5	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	板状圧痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒 N2/，にぶい黄橙 10YR6/4	黒 N2/	赤彩（外面一部）	23
35	285	土師器	高杯	-	SI	086	1層	(21.3)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	赤彩（内外面），脚部貼付痕	-
35	286	土師器	杯	-	SI	086	ｶﾏﾄﾞ内中層	(13.8)	2.6	(8.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-
35	287	土師器	杯	-	SI	086	1層	(13.3)	3.5	(6.0)	回転ﾅﾃﾞ	回転による暗文	回転による暗文	回転による暗文	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
35	288	土師器	杯	-	SI	086	1層	-	-	13.2	風化	風化	風化	風化	橙 7.5YR6/6，にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	-
35	289	土師器	杯	-	SI	086	1層	(14.5)	2.8	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8・5YR6/6・7.5YR6/6	橙 5YR6/8	-	-
35	290	土師器	杯	-	SI	086	ｶﾏﾄﾞ内中層	(13.4)	2.95	7.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転による暗文	回転による暗文	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	22
35	291	須恵器	杯	-	SI	086	1層	(12.9)	3.8	(7.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	赤焼け	-
35	293	土師器	鉢	-	SI	086	1層	(18.6)	7.4	(10.1)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転による暗文	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/8・6/8	橙 7.5YR7/6	-	-
35	296	土師器	甕	-	SI	086	1層	(26.3)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	浅黄橙 10YR8/3	浅黄 2.5Y8/3，灰白 10YR8/2	煤付着（外面），粘土巻上げ痕	-
36	297	土師器	甕	-	SI	086	ｶﾏﾄﾞ内下層	(23.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・指頭圧痕	-	浅黄橙 10YR8/3，にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3，にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（外面）	-
38	300	土師器	蓋	-	SI	087	1･2層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	明赤褐 2.5YR5/8	赤褐 5YR4/6	赤彩（内外面）	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
38	301	須恵器	鉢	-	SI	087	2層	-	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	橙 7.5YR6/6･5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤焼け	-
38	302	土師器	杯	-	SI	087	2層	-	-	(6.1)	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	-	-
38	303	土師器	小皿	-	SI	087	中層	(9.85)	1.2	(7.9)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 2.5YR6/6, 暗赤灰 2.5YR3/1	明赤褐 5YR5/6	黒斑（外面）	-
38	304	土師器	盤	-	SI	087	中層	(14.5)	1.5	(12.15)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/3	明赤褐 5YR5/8	赤彩（内外面）	-
38	306	土師器	甕	-	SI	087	2層	(18.8)	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR7/6, にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR7/6	-	-
38	307	須恵器	高台付杯	-	SI	087	2層	13.7	4.35	8.4	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黄灰 2.5YR6/1	黄灰 2.5YR6/1	貼付け高台	23
40	308	土師器	蓋	-	SI	088	3層	(14.0)	-	-	ナデ	-	回転ナデ後暗文	-	橙 5YR7/8	橙 5YR6/8	-	-
40	309	土師器	杯	-	SI	088	下層	(6.9)	3.6	(6.8)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	-	-
40	310	土師器	杯	-	SI	088	1層	-	-	-	回転ナデ・ナデ	-	ヘラミガキ	-	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	赤彩（内外面）	-
40	311	土師器	杯	-	SI	088	3層	(14.1)	3.9	(10.4)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	23
40	312	土師器	杯	-	SI	088	2･3層	(17.2)	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
40	313	土師器	甕	-	SI	088	3層	(24.4)	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ヨコナデ	-	ヨコナデ・ナデ・ハケメ後ナデ	-	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着？（内面口縁部），赤彩（口縁部）	-
40	314	土師器	甕	-	SI	088	3層	(22.0)	-	-	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（外面）	-
40	315	土師器	甕	-	SI	088	3層	(21.6)	-	-	ヘラミガキ痕跡・ヨコナデ	-	ヘラケズリ・ヨコナデ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（外面）	23
40	316	土師器	甕	-	SI	088	3下層	-	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ハケメ後ヨコナデ・ヘラケズリ	-	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	赤彩（内外面），煤付着（内面口縁部）	23
40	317	土師器	小壺	-	SI	088	下層	(6.7)	-	-	ヘラミガキ	-	回転ナデ・ヘラミガキ・ナデ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
41	319	須恵器	大甕	-	SI	088	3層	-	-	-	平行タタキ後ナデ	-	車輪文当て具痕	-	褐灰 7.5YR4/1	褐 7.5YR4/3	-	-
150	321	土師器	甕	-	SD	089	上層	(25.6)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4･5YR6/4	赤彩（外面），煤付着（内面口縁部）	-
61	323	土師器	杯	-	SK	098	下層	15.8	4.0	10.4	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後工具痕・回転ナデ	回転ナデ後工具痕	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y8/4	-	23
62	767	土師器	甕	-	SK	103	-	-	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ケズリ	-	にぶい橙 5YR6/4, 橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4 橙 7.5YR7/6	-	-
62	768	土師器	杯	-	SK	103	-	(13.1)	3.3	(4.6)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR5/3	赤彩（内外面）	-
62	769	土師器	杯	-	SK	103	1層	(14.1)	3.0	(7.1)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-
62	770	土師器	高台付椀	-	SK	103	4層	(13.6)	6.0	7.7	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	24
63	771	土師器	盤	-	SK	104	1層	(15.5)	-	-	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面）	-
63	772	須恵器	杯	-	SK	104	-	14.3	3.8	8.6	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 7.5YR7/6	-	24
63	773	土師器	小型甕	-	SK	104	2層	-	-	-	回転ナデ・ハケメ	ハケメ	ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/6	打ち欠いている・赤彩（外面）	24
63	774	土師器	甕	-	SK	104	1層	(26.6)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ	ヘラケズリ	橙 5YR6/6	橙 5YR7/6	-	-
64	775	土師器	甑	-	SK	104	1層	-	-	(16.4)	ハケメ	-	ヘラケズリ	-	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	-	-
63	776	土師器	把手付鍋	-	SK	104	2層	(27.4)	13.3	-	ヨコナデ・ナデ	ケズリ	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	粘土巻上げ痕	24

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
63	777	須恵器	蓋	-	SK	104	1層	(10.6)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 N5/	黒褐 2.5Y3/1	-	-
63	778	須恵器	高台付杯	-	SK	104	2層	-	-	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰 N4/	黒 2/	灰釉（外面），貼付け高台	-
63	779	須恵器	皿	-	SK	104	1層	(13.8)	1.6	(12.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	外底面に粘土積み上げ痕	-
63	780	須恵器	長頸壺	-	SK	104	上層	-	-	(13.6)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	-	ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1	貼付高台	-
64	781	須恵器	短頸壺	-	SK	104	1層	(10.8)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・畳表状の織物を巻きつけﾀﾀｷ板	-	回転ﾅﾃﾞ・同心円文当具痕	-	灰 N6/0	暗赤褐 5YR3/4	焼き歪み	24
64	782	須恵器	提瓶	-	SK	104	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	灰 N5/	灰 N5/	-	-
65	785	須恵器	蓋（転用硯）	-	SK	107	-	(15.1)	1.25	(13.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	ﾖｺﾅﾃﾞ・使用痕	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰 5Y4/1･5Y5/1	褐灰 10YR4/1	-	-
67	324	土師器	把手付鉢？	-	SK	109	1層	-	-	-	不明	-	不明	-	にぶい橙 7.5YR7/4，橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
67	786	土師器	皿？	-	SK	109	上層	(15.2)	2.1	(17.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	24
67	787	土師器	甕	-	SK	109	2層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 YR5/8	赤彩（外面）	24
67	788	土師器	小型甕	-	SK	109	2層	(10.65)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄 2.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR5/4	赤彩（内外面）	24
67	790	須恵器	蓋	-	SK	109	中層	15.2	2.7	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y6/1･7.5Y5/1	灰 5Y6/1	-	24
69	325	土師器	杯	-	SK	116	1層	15.5	3.5	9.5	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3･7/4	-	24
70	791	須恵器	高台付杯	-	SK	123	2層	(11.7)	3.7	(8.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐 5YR4/3	明赤褐 2.5YR5/6	-	-
71	332	土師器	杯	-	SK	124	-	11.3	3.9	6.65	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/4，にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/4，にぶい黄橙 10YR7/4	黒斑？（底部）	24
73	333	土師器	杯	-	SK	133	-	14.2	2.9	10.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/8	橙 2.5YR6/8	墨書「福」？	24
73	334	土師器	鉢	-	SK	133	包4層	(19.6)	11.9	(12.2)	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	-	24
73	792	土師器	鉢	-	SK	133	-	(22.0)	9.9	(12.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗褐 7.5YR3/3	明赤褐 5YR5/6	赤彩（内外面），煤付着（外面）	-
73	804	土師器	注口土器	-	SK	133･216	ﾄﾚﾝﾁ	(15.8)	-	-	ﾊｹﾒ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/2･7/3	赤彩・煤付着（外面）	-
96	335	須恵器	杯	-	SE	134	5層	14.2	4.1	9.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤焼け	25
96	336	土師器	杯	-	SE	134	最下層	-	-	6.9	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	黒斑（外面～外底面）	-
96	337	土師器	杯	-	SE	134	5層	(18.0)	4.2	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	-	-
96	338	土師器	高台付杯	-	SE	134	最下層	13.6	3.7	(10.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	貼付け高台	25
96	339	土師器	高台付杯	-	SE	134	5層	-	-	(10.6)	回転ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	貼付け高台	-
96	340	土師器	高杯	-	SE	134	9･10層	-	-	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	赤彩（内外面）	-
97	341	土師器	製塩土器	-	SE	134	4層	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ工具痕	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ工具痕	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	26
97	342	土師器	甕	-	SE	134	4～6層	(22.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/3，にぶい黄橙 10YR6/3	赤彩（外面），煤付着（外面）	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
97	343	土師器	甕	-	SE	134	-	(27.0)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
97	344	土師器	甑	-	SE	134	4層	-	-	-	ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ	-	ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
97	345	須恵器	高杯	-	SE	134	5層	-	-	10.8	回転ﾅﾃﾞ・工具による調整	-	回転ﾅﾃﾞ・工具による調整	-	橙 5YR6/8	橙 5YR7/8	赤焼け	-
96	346	須恵器	蓋	-	SE	134	4層	(13.8)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	-	-	暗灰黄 2.5Y4/2	黄褐 2.5Y5/3	-	-
96	347	須恵器	杯	-	SE	134	最下層	11.4	3.9	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N5/-N4/	灰 N5/-N4/	自然釉（内外面），歪み有，付着物（外面）	25
99	350	土師器	杯	-	SE	161	2層	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
99	351	土師器	杯	-	SE	161	3層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	赤彩（内外面）	-
99	352	須恵器	長頸壺	-	SE	161	1層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・櫛描波状文・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	-	灰 10Y4/	灰 10Y4/1	-	-
75	353	土師器	蓋	-	SK	174	3層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
75	354	土師器	小型杯	-	SK	174	3層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
75	355	土師器	小型甕	-	SK	174	3･4層	(15.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	-	-
75	356	土師器	甕	-	SK	174	2層	25.1	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR7/6，黄橙 7.5YR7/8	橙 7.5YR7/6	煤付着（内外面）	24
77	795	土師器	甕	-	SK	187	1層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向のｶｷﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	-	-
77	796	須恵器	高台付壺	-	SK	187	1層	-	-	(11.0)	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	貼付け高台	-
45	368	土師器	甕	-	SI	195	-	(17.6)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4･6/4	煤付着（内外面）	-
45	369	須恵器	蓋	-	SI	195	中層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5YR5/1	黄灰 2.5YR5/1	-	-
45	370	瓦質土器	高台付椀	-	SI	195	中層	-	-	(10.8)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y4/1	灰 5Y5/1	-	-
78	797	土師器	甕	-	SK	196	-	(29.4)	-	-	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞﾊｹﾒ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	灰黄褐 10YR6/2･5/2	にぶい橙 7.5YR6/4，浅黄 2.5Y7/3	煤付着（内面）	24
78	888	土師器	甕	-	SK	196	-	(14.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・多方向のﾊｹﾒ・ｶｷﾒ	多方向のﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞﾀﾃ方向ｹﾞｽﾞﾘ	ﾀﾃ方向ｹﾞｽﾞﾘ	にぶい黄橙 10YR6/3	黒褐 10YR3/2	-	-
79	513	須恵器	高台付壷（転用硯）	-	SK	207	-	-	-	(16.0)	回転ﾅﾃﾞ	使用痕	同心円文当て具痕	同心円文当て具痕	ｵﾘｰﾌﾞ黒 5Y3/1	暗灰黄 2.5Y4/2	貼付高台，外底面に硯としての使用痕有	-
79	798	土師器	甕	-	SK	207	1層	(25.0)	-	-	ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄 2.5Y6/2，にぶい褐 7.5YR5/4	煤付着（内外面）	-
79	799	須恵器	甕	-	SK	207	1層	(19.6)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい赤褐 5YR4/3	灰黄褐 10YR4/2	-	-
82	359	須恵器	高台付長頸壺	-	SK	211	3層	-	-	9.5	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N6/-N5/	灰 N5/	自然釉（肩部），貼付け高台	25

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
82	623	土師器	杯	-	SK	211	2層	14.4	2.7	10.0	回転ナデ沈線・回転による暗文	回転による暗文（摩耗）	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灯明に使用したものか？	-
82	624	土師器	高台付杯	-	SK	211	3層	-	-	7.8	回転ナデ	ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（外面），灯明に使用したもか？煤付着（内底面），貼付け高台	-
82	625	土師器	高台付大杯	-	SK	211	-	21.4	6.25	13.5	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（外面），貼付け高台	-
82	626	土師器	甕	-	SK	211	4層	(21.7)	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	-	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	-	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	-	-
82	669	土師器	杯	-	SK	211	-	10.5	2.8	7.1	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	煤付着（口縁端部）	-
101	360	土師器	蓋	-	SE	213	7層	20.4	4.3	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ	-	回転ナデ・ナデ	-	にぶい赤橙 10R6/4，浅黄橙 10YR8/3	灰赤 10R4/2，赤橙 10R6/6，浅黄橙 10YR8/3	煤付着・黒班（口縁部外面）	26
101	361	土師器	杯	-	SE	213	7層	(13.2)	4.1	(9.0)	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰黄褐 10YR5/2，灰黄 2.5Y7/2	灰黄褐 10YR5/2	煤付着（外器面）	-
101	362	土師器	甕	-	SE	213	7層	(20.0)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（口縁・内外面）	-
101	364	須恵器	甕	-	SE	213	7層	15.5	20.1	-	平行タタキ後ナデ・ヨコナデ	平行タタキ後ナデ	同心円文当て具痕後ナデ・ヨコナデ	ナデ・指頭圧痕	浅黄橙 10YR8/3・5YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	焼成不良	26
101	365	土師質土器	鉢	-	SE	213	上層	-	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
101	366	土師器	鍋	-	SE	213	2上層	(15.4)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR6/6	橙 5YR7/6	煤付着（外面）	-
101	367	須恵器	杯	-	SE	213	7層	15.2	4.4	10.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	灰 5Y4/1，にぶい赤褐 2.5YR4/3	灰褐 7.5YR4/2，褐灰 10YR4/1	ヘラ書き，煤付着（内面）	26
101	468	土師器	杯	-	SE	213	7層	(13.8)	2.9	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	煤付着（内外面一部）	-
103	800	土師器	甕	-	SE	214	5層	(17.45)	-	-	ヨコナデ・ヘラミガキ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-
103	801	土師器	甕	-	SE	214	5層	(22.0)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	26
103	802	須恵器	甕	-	SE	214	2層	(12.0)	-	-	回転ナデ・平行タタキ	-	回転ナデ・同心円文当て具痕	-	灰 10Y4/1	灰 10Y4/1	-	-
83	803	須恵器	蓋	-	SK	215	埋土	(12.9)	2.65	-	回転ナデ・ヘラケズリ	-	ナデ・回転ナデ	-	灰 10N6/	黄褐 2.5Y5/3	輪状つまみ	-
106	371	土師器	高台付杯	-	SE	219	6層	-	-	8.0	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ・回転ナデ	-	ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	貼付け高台	-
106	372	土師器	甕	-	SE	219	中層	-	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコ方向のナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/6	煤付着（外器面）	-
47	706	土師器	杯	-	SI	221	上層	12.8	6.0	-	回転ナデ後ヘラミガキ・ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラケズリ後ヘラミガキ	回転ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	赤 10YR5/6	赤 10YR5/6	赤彩（内外面）	23

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量 (cm)			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
108	384	土師器	杯	-	SE	222	1層	16.0	3.7	9.2	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ後板状圧痕	回転ナデ	ナデ	橙 2.5YR6/6, 灰黄 2.5Y7/2	橙 2.5YR6/6, 灰白 5Y7/1	-	26
108	385	土師器	杯	-	SE	222	7層	(13.3)	3.2	7.4	回転ナデ後回転ヘラミガキ	回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ	回転ナデ後回転ヘラミガキ	ナデ後回転ヘラミガキ	橙 2.5YR6/6,6/8	橙 5YR6/6, にぶい橙 7.5YR6/4	ヘラ記号, 煤付着 (内面)	26
108	386	土師器	杯	-	SE	222	-	(13.6)	3.5	9.3	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤彩 (内外面), 煤付着 (内面口縁部)	26
108	388	須恵器	長頸壺	-	SE	222	-	-	-	13.2	回転ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ	回転ナデ・ナデ	ナデ	?	灰 N6/	灰 N6/	貼付け高台, 自然釉, しぼり痕 (内外)	26
108	805	須恵器	高台付杯	-	SE	222	3層	16.1	4.7	9.2	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ・回転ナデ	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	灰 N4/	灰 N4/	貼付高台	26
109	387	土師器	甕	-	SE	222・229・067	上層トレンチ埋3層～5層	(23.8)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	赤 10R5/8	浅黄 2.5Y7/3, 橙 5YR6/6-7.5YR7/6	赤彩 (内外面), 煤付着 (外面)	26
111	378	土師器	杯	-	SE	229	2層	(13.2)	3.15	(11.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩 (内面)	-
111	379	土師器	小杯	-	SE	229	6・7層	(9.2)	3.15	(5.6)	回転ナデ	回転による暗文	回転ナデ・回転による暗文	回転による暗文	橙 7.5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/2	橙 7.5YR6/6	-	-
111	380	土師器	甕	-	SE	229	8層	(16.2)	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ・ケズリ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外面の胴部磨耗	-
111	381	須恵器	蓋	-	SE	229	1層	(15.2)	4.05	-	回転ヘラケズリ回転ナデ	-	回転ナデ・ナデ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	26
111	382	須恵器	蓋	-	SE	229	6層	8.6	2.1	-	ナデ・ヘラケズリ・回転ナデ	-	回転ナデ	-	灰 N5/	灰 N5/	-	27
111	383	須恵器	杯	-	SE	229	7層	(12.8)	4.1	(8.0)	回転ナデ	剥離痕・ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	高台剥離痕	-
111	389	土師器	杯	-	SE	229	12層	13.2	3.0	9.4	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩 (内外面)	26
111	390	須恵器	鉢	-	SE	229	12層	-	-	11.4	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	-	27
111	470	土師器	杯	-	SE	229	3層	(14.2)	3.4	8.2	回転ナデ・回転による暗文	回転による暗文	回転ナデ・回転による暗文	回転による暗文	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6	471 と同一個体	-
112	472	土師器	甕	-	SE	229	-	(20.0)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR7/6	黄橙 7.5YR7/8	-	-
111	473	土師器	高台付椀	-	SE	229	-	(16.0)	8.0	(8.6)	ヘラミガキ・回転ナデ	ヘラミガキ	回転ナデ	回転による暗文	にぶい橙 7.5YR4/6	赤橙 10R6/6	赤彩 (内外面)	26
112	474	土師質	カマド	-	SE	229	1・2層	-	-	-	ヘラケズリ・ハケメ	-	ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄褐 10YR5/3	-	-
111	478	土師器	杯	-	SE	229	1・12層	(14.0)	3.0	(9.7)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩 (内外面), 煤付着 (内外面)	-
112	481	須恵器	大甕	-	SE	229	1層	-	-	-	平行タタキ後ナデ	-	回転ナデ・ナデ	-	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	櫛描波状文 (外面)	-
112	610	土師器	甑	-	SE	229	-	-	-	-	ナデ・工具ナデ-	-	ヘラケズリ	-	浅黄橙 10YR8/3	浅黄 2.5Y7/3	-	-
112	611	須恵器	大甕	-	SE	229	-	(21.6)	-	-	ナデ・タタキ	-	ナデ・タタキ	-	暗灰 N3/, 灰 N4/	黄灰 2.5Y5/1, 灰 10Y5/1	自然釉 (外面・口縁端部)	27
111	629	土師器	鉢	-	SE	229	3層	(22.4)	-	-	ナデ	-	-	-	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	一部赤彩 (内外面), 摩滅の為調整不明	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
111	631	須恵器	高台付杯	-	SE	229	1層	(14.0)	4.8	(9.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3, にぶい橙 7.5YR6/4	浅黄橙 10YR8/3	貼付け高台	-
111	632	須恵器	高台付椀	-	SE	229	1層	(14.7)	5.7	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N6/0	灰 5Y6/1	貼付高台	27
112	633	須恵器	大甕	-	SE	229	ﾄﾚﾝﾁ	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・畳表状織物のﾀﾀｷ	-	回転ﾅﾃﾞ同心円文当て具	-	灰白 N5/0	灰白 N5/0	-	27
133	394	土師器	小皿	-	SE	247	3層下部	9.4	1.7	7.0	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	45
133	395	土師器	小皿	-	SE	247	3層下部	8.2	1.6	7.2	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄 2.5Y6/4	-	45
133	398	土師器	小皿	-	SE	247	3層下部	9.0	1.4	6.6	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
133	399	瓦器	小皿	-	SE	247	3層下部	10.3	1.9	7.2	回転ﾅﾃﾞ後ﾖｺ方向のﾐｶﾞｷ	糸切り後ﾖｺ方向のﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾖｺ方向ﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾖｺ方向ﾐｶﾞｷ	灰 7.5Y5/1	灰白 5Y7/1	-	27
133	400	瓦器	椀	-	SE	247	3層下部	16.8	5.7	7.2	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰白 7.5Y8/1, 暗灰 N3/	灰 N5/, 灰白 N8/	重ね焼痕有，貼付け高台	27
133	485	土師器	耳皿	-	SE	247	1層	-	2.8	5.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	-	27
133	486	土師器	不明	-	SE	247	1･2層	-	4.6	-	研磨・工具痕	-	-	-	ｵﾘｰﾌﾞ黒 7.5Y3/1	-	-	28
133	636	土師器	杯	-	SE	247	19層	14.5	2.8	10.6	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐 7.5YR5/2	にぶい橙 7.5YR6/4	-	27
133	640	土師器	杯	-	SE	247	3層下部	15.4	3.6	11.0	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	27
133	641	土師器	杯	-	SE	247	3層下部	(15.6)	3.7	(11.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	-	27
133	646	土師器	皿？	-	SE	247	1層北西	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	-	-
133	647	瓦器	椀	-	SE	247	10･13層	(16.4)	6.0	6.0	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・押し出し後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	貼付け高台	27
133	648	土師器	合子・身	-	SE	247	20層	-	4.2	8.2	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	27
133	650	須恵器	甕	-	SE	247	2層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	灰 N4/	灰 N4/	-	-
84	401	土師器	杯	-	SK	248	-	(13.8)	2.8	9.6	回転ﾅﾃﾞ後回転による暗文	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転による暗文	回転ﾅﾃﾞ後回転による暗文	回転ﾅﾃﾞ後回転による暗文	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	-	-
84	653	須恵器	高台付椀	-	SK	248	-	-	-	(7.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄 2.5Y6/2	貼付け高台	-
84	654	須恵器	高台付小杯	-	SK	248	-	-	-	6.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	貼付け高台	-
84	655	須恵器	杯	-	SK	248	-	(12.8)	4.0	(7.3)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	-	-
84	656	須恵器	皿	-	SK	248	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	磨研	灰白 2.5Y7/1	灰白 5Y7/1	転用硯？	-
84	657	須恵器	蓋	-	SK	248	-	-	-	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰白 5Y6/1	灰白 5Y6/1	-	-
138	402	土師器	椀	-	SE	249	-	11.1	4.5	6.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黒斑（内外面）	-
137	403	土師器	小皿	-	SE	249	-	9.5	1.45	7.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾊｹ状ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	-	44
137	404	土師器	脚付鍋	-	SE	249	4層	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
138	659	土師器	杯	-	SE	249	8層	15.5	4.0	10.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	工具によるﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	黒斑（内面）	28
137	660	黒色土器	椀	-	SE	249	1層	(16.9)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	灰 5Y4/1, 黒 5Y2/1	灰 5Y4/1, 黒 5Y2/1	-	-
138	661	土師器	杯	-	SE	249	4層	(16.1)	3.8	(9.8)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄褐 10YR4/3	破棄後に火を受けている	-
138	664	土師器	杯	-	SE	249	1層	(11.4)	3.3	6.05	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/8	-	-
138	665	土師器	杯	-	SE	249	3層	11.5	3.2	7.95	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	-	28
138	666	土師器	杯	-	SE	249	1層	(17.2)	3.8	(10.7)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	工具によるﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	28
138	667	須恵器	杯	-	SE	249	6層	11.4	3.3	6.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	-	-
138	668	土師器	杯	-	SE	249	7層	15.1	3.8	9.1	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6, 浅黄橙 10YR8/3	橙 7.5YR7/6, 浅黄橙 10YR8/3	-	-
137	670	土師器	小皿	-	SE	249	7層	8.6	1.5	6.3	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	-	44
137	671	土師器	小皿	-	SE	249	3層	10.0	2.35	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	板目状圧痕後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	橙 5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/3	橙 5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/3	ﾍﾗﾐｶﾞｷ（内面・外面全面）	28･44
137	676	土師器	小皿	-	SE	249	1層	8.8	1.4	7.05	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/2	橙 7.5YR7/6	ﾍﾗ切りの調整が雑な為に底部の一部が突起している	28･44
137	677	土師器	小皿	-	SE	249	7･8層	9.0	1.7	5.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	-	28･44
137	679	土師器	小皿	-	SE	249	4層	9.3	1.5	6.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ（強い）	橙 7.5YR7/6, 灰白 10YR7/1	橙 7.5YR7/6, 灰白 2.5Y8/2	-	28･44
138	681	土師器	椀？	-	SE	249	5層	11.2	3.9	6.3	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	-	28
138	684	土師器	杯	-	SE	249	8層	10.9	3.8	6.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
137	685	土師器	高台付椀	-	SE	249	2下層	11.0	5.45	6.95	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4, 橙 7.5YR7/6	貼付高台	28
138	686	土師器	杯？	-	SE	249	5層	11.1	4.4	6.1	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	赤彩・調整が雑（外底面）	28
138	687	土師器	杯	-	SE	249	上層	10.8	4.95	6.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
138	691	土師器	高台付椀	-	SE	249	2下層	-	-	8.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面），煤付着（内底面）	-
137	692	土師器	高台付椀	-	SE	249	7層	16.4	8.4	10.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	貼付高台	28
137	693	土師器	高台付椀	-	SE	249	1層	15.7	5.5	5.0	ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	黒斑（内外面），貼付高台	28
137	694	土師器	高台付椀	-	SE	249	-	14.7	6.6	8.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	貼付高台	28
137	696	土師器	高台付皿（托）	-	SE	249	下層	11.8	2.3	7.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	貼付高台	28
137	697	土師器	高杯	-	SE	249	中層	-	-	-	摩耗ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4･10YR7/2	-	-
137	698	内黒土器	鍋（把手）	-	SE	249	1層	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
138	700	土師器	甕	-	SE	249	2層	(28.0)	-	-	ヨコナデ・ハケメ状工具によるナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
137	701	須恵器	小型水注	-	SE	249	1層	-	-	(6.0)	ナデ・回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 7.5Y5/1	灰 5Y5/1	-	-
158	808	土師器	甕	-	SD	252	-	(18.5)	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（内外面）	31
114	405	土師器	杯	-	SE	263	-	10.2	3.9	8.0	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	煤付着？（口縁部）	28
114	406	土師器	甕	-	SE	263	3層	(19.0)	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	29
114	407	土師器	製塩土器？	-	SE	263	3層	(8.0)	-	-	摩滅	-	ナデ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR5/1	-	29
114	408	須恵器	蓋	-	SE	263	1層	12.05	2.4	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ	-	回転ナデ	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	-	29
114	409	須恵器	高台付杯	-	SE	263	3層	-	-	9.3	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	-	ハケメ後ナデ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	体部以上を打ち欠いている（円盤状）高台貼付け	-
114	410	須恵器	大甕	-	SE	263	3層	(23.3)	-	-	回転ナデ・格子タタキ後ナデ・ナデ	-	回転ナデ・同心円文当て具痕	-	灰 N6/	灰褐 5YR4/2	荒尾産？	-
114	487	土師器	鉢	-	SE	263	埋土	-	-	-	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	赤彩（外面）	29
114	488	土師器	甕	-	SE	263	3層	-	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR4/4	-	29
114	818	土師器	鍋	-	SE	263	1層	-	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ヘラ状工具によるナデ・ケズリ	-	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	-	29
114	819	須恵器	高台付杯	-	SE	263	1層	(13.9)	4.5	9.8	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	研磨（内面）	29
114	820	須恵器	蓋（転用硯）	-	SE	263	4層	13.6	-	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ回転ナデ	-	回転ナデ・使用痕	-	褐灰 10YR4/1/, 灰白 7/	褐灰 10YR4/1	灰付着（上面）	29
158	821	土師器	杯	-	SD	265	1層	10.5	4.3	6.25	回転ナデ	ヘラ切り後板目状圧痕	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/6･7/6	橙 5YR7/6, にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
158	822	土師器	高台付椀	-	SD	265	1層	(11.3)	5.1	6.1	回転ナデ・体部巻き上げ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
153	412	土師器	蓋	-	SD	270	1層	18.4	2.9	-	回転による暗文	-	回転による暗文	-	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	-	31
153	413	土師器	杯	-	SD	270	-	(12.8)	3.2	7.8	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-
153	414	土師器	杯	-	SD	270	-	13.2	2.7	9.5	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	橙 5YR6/4	橙 5YR6/4	赤彩	44
153	415	土師器	杯	-	SD	270	-	13.25	3.5	7.7	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	44
153	416	土師器	杯	-	SD	270	埋土･1層	12.7	2.9	7.7	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面体部・外底面一部）	-
153	417	土師器	杯	-	SD	270	1層	12.9	3.2	7.5	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面）	44
153	418	土師器	杯	-	SD	270	1層	12.9	3.4	8.2	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ヘラ状工具によるナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	44
153	419	土師器	杯	-	SD	270	-	13.1	3.3	7.8	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面・外底面一部）	44
153	420	土師器	杯	-	SD	270	-	14.5	4.1	9.2	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	44
153	421	土師器	杯	-	SD	270	1層	13.1	3.8	8.0	回転ナデ・ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面）	44

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量 (cm)			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
153	422	土師器	杯	-	SD	270	1層	(12.3)	3.1	(8.0)	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	44
153	423	土師器	杯	-	SD	270	1層	(12.8)	3.1	(8.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	-
153	424	土師器	杯	-	SD	270	-	12.8	3.5	8.7	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	穿孔痕跡有？（底部）	44
153	425	土師器	杯	-	SD	270	-	12.8	3.0	7.7	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	赤彩（内外面）	44
153	426	土師器	杯	-	SD	270	1層包3･4層	12.0	3.0	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	赤彩（内外面）	44
153	427	土師器	椀	-	SD	270	埋土	-	-	6.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	-	-
153	428	土師器	小杯？	-	SD	270	埋土	(10.8)	4.8	6.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8, にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/4	墨書「三」赤彩（内外面）	-
154	429	土師器	杯	-	SD	270	1層	13.4	4.0	8.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	墨書「三」赤彩（内外面）	31･44
154	430	土師器	杯	-	SD	270	1層	12.2	3.9	8.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	墨書「三」赤彩（内外面）	31･44
154	431	土師器	杯	-	SD	270	1層	(11.8)	3.5	6.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	墨書「三」赤彩（内外面）	31･44
154	432	土師器	杯	-	SD	270	-	(13.1)	2.6	(8.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	墨書「三」赤彩（内外面）	31
155	433	土師器	杯	-	SD	270	1層	13.1	3.2	7.8	回転ﾅﾃﾞ	板目状圧痕・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	墨書・赤彩（内外面）	31･44
155	434	土師器	杯	-	SD	270	-	12.8	3.35	8.8	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	墨書？, 赤彩（内外面）	-
154	435	土師器	杯	-	SD	270	1層	-	-	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	墨書「三」赤彩（内外面）	31
154	436	土師器	杯	-	SD	270	埋土	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	墨書「三」赤彩（内外面）	31
154	437	土師器	杯	-	SD	270	1層	-	-	6.9	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8, にぶい黄橙 10YR7/3	橙 5YR6/8	墨書「三」	31
155	438	土師器	高台付椀	-	SD	270	埋土	11.5	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	貼付け高台，煤付着（内面口縁部・外面）	-
155	439	土師器	椀	-	SD	270	1層	-	-	8.6	回転ﾅﾃﾞ・回転による暗文	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・回転による暗文	回転ﾅﾃﾞ・回転による暗文	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	赤彩（内外面）	-
154	440	土師器	杯	-	SD	270	1層	(12.6)	2.8	8.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	墨書「三」赤彩（内外面）	31
154	441	土師器	杯	-	SD	270	1層	15.6	2.6	10.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	墨書「三」赤彩（内外面）	31
155	442	土師器	皿	-	SD	270	-	16.5	2.7	12.4	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	焼き歪み	31
155	443	土師器	皿	-	SD	270	1層	14.7	2.4	11.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	31
155	444	土師器	皿	-	SD	270	1層	15.7	1.2	13.5	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	にぶい橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	-
155	445	土師器	小皿	-	SD	270	1層	(9.6)	2.4	(6.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
155	446	土師器	小皿	-	SD	270	1層	10.2	2.2	6.7	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR7/6, にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/6, にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
155	447	土師器	甕	-	SD	270	埋土	(18.1)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（外面）	31
155	448	土師器	甕	-	SD	270	埋土	(28.0)	-	-	ナデ・ハケメ	-	ナデ・ハケメ・ケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	31
156	449	土師器	甕	-	SD	270	1層	28.2	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	-	灰黄褐 10YR5/2, にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2, にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（外面）	31
155	450	須恵器	杯	-	SD	270	1層	12.8	3.85	6.6	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	-	31
155	451	須恵器	高台付椀	-	SD	270	1層	14.75	6.8	8.4	回転ナデ・ナデ	ヘラ切り後ナデ・ナデ	回転ナデ	ナデ	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	貼付け高台	31
155	514	土師器	杯	-	SD	270	包3･4層	(14.6)	3.5	9.8	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	墨書「三」	31
86	823	土師器	椀	-	SK	272	上層	11.1	4.6	6.4	回転ナデ	ヘラ切り後板目状圧痕	回転ナデ	回転ナデ	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
86	824	須恵器	蓋（転用硯）	-	SK	272	下層	16.0	2.0	-	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	-	回転ナデ・使用痕	-	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	内面に使用痕有	-
159	825	土師器	杯蓋	-	SD	276	埋土	18.0	-	-	回転ヘラケズリ・回転ナデ	-	回転ナデ	-	橙 7.5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/4	橙 10YR7/6･7.5YR7/6	-	-
117	453	土師器	杯	-	SE	277	中層	-	-	-	ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y8/4	磨耗（内外面），黒斑（外底面）	-
117	454	土師器	杯	-	SE	277	2層	-	-	-	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（内面）	-
49	826	土師器	杯	-	SI	279	1層	(18.5)	3.9	(9.4)	ヘラケズリ・回転ナデ後回転による暗文	回転ナデ後回転による暗文	回転ナデ後回転による暗文	回転ナデ後回転による暗文	橙 2.5YR6/6･5YR6/6	橙 5YR6/6	-	23
49	827	土師器	高台付杯	-	SI	279	1層	-	-	10.2	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転による暗文	回転による暗文	回転による暗文	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	赤彩（内外面）	23
49	828	土師器	高杯	-	SI	279	4層	-	-	(8.5)	回転ナデ	回転ナデ	-	不明	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6･7.5YR6/6	-	23
119	829	土師器	甕	-	SE	288	1層	(16.0)	-	-	回転ナデ・ナデ	-	回転ナデ・ヘラケズリ	-	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	-	-
119	830	須恵器	長頸壺	-	SE	288	1層	(16.1)	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	灰 N6/	灰 N6/	釉（内面・頸部）	-
119	831	須恵器	甕	-	SE	288	5層	25.6	-	-	回転ナデ・平行タタキ	-	回転ナデ・同心円文当て具	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	灰釉（内外面）	29
119	832	土師器	杯	-	SE	288	-	13.55	4.1	9.9	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	29
119	833	土師器	杯	-	SE	288	-	(14.3)	3.0	(8.2)	回転ナデ・回転による暗文	回転による暗文	回転によるヘラミガキ	回転によるヘラミガキ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
119	834	須恵器	高台付杯	-	SE	288	-	-	-	8.6	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	褐灰 10YR5/1	明黄褐 2.5Y6/6	灰釉付着（外底面），貼付け高台	-
160	812	須恵器	高台付杯	-	SD	302	下層	14.8	6.1	9.3	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	灰白 N7/･N6/	灰白 N7/	自然釉（外面），貼付け高台	31
87	722	土師器	高台付盤？	M･N－11･12	SK	342	1･4層	-	-	12.5	回転ナデ	摩滅・回転ナデ	-	ヘラミガキ	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面），ヘラ書き「新」	25
159	841	須恵器	大甕	-	SD	348	4層	-	-	-	擬格子目タタキ	-	同心円文当て具痕	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	-	-
160	811	須恵器	長頸壺	-	SD	356	上層	(10.5)	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ・ナデ	-	暗灰 N3/	灰 N4/	-	-
159	842	須恵器	杯蓋	-	SD	356	1･2層	(16.8)	1.6	-	回転ナデ・回転ヘラケズリ	-	ナデ・研磨	-	黄灰 2.5Y6/1, 灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y6/1, 灰黄 2.5Y6/2	転用硯？	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量 (cm)			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
159	843	土師器	杯	-	SD	366	上層	12.5	3.5	8.6	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面），内・外面砂粒が多く器面が荒い	32
159	845	土師器	杯	-	SD	366	上層	12.1	3.4	7.7	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面）	32
159	457	土師器	高台付椀	-	SD	372	-	-	-	7.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	貼付け高台，底面を打ち欠いている	-
160	850	土師器	椀	-	SD	476	-	-	-	6.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR6/6, にぶい黄橙 10YR7/3	歪み有	-
160	851	土師器	高台付杯	-	SD	494	上層	15.1	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	高台剥離	-
158	862	土師器	杯	-	SD	896	炭化物包含層	(14.4)	2.9	(8.1)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部指痕	-
158	863	土師器	小皿	-	SD	896	炭化物包含層	(8.4)	1.7	(6.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3･6/4	-	-
158	864	土師器	小皿	-	SD	896	-	(8.7)	1.4	(7.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
158	865	土師器	小皿	-	SD	896	埋土	(8.4)	1.5	(6.1)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4･6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
88	866	土師器	小皿	-	SK	897	-	(8.2)	1.2	(6.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4, にぶい黄橙 10YR6/4	灯明皿に転用か？	-
88	867	土師器	杯	-	SK	897	-	-	-	(10.5)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
161	817	内黒土器	高台付椀	-	SB	10004	-	(17.8)	7.0	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ・磨耗のため不明	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰 N/, にぶい黄橙 10YR6/4	黒 N2/	貼付け高台	22
162	499	土師器	高台付椀	-	SB	10009	-	-	-	6.85	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	-	22
21	326	土師器	杯	-	SB	10053	3層掘り下げ	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 回転ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4, 浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黒斑 ?（内面）	22
21	327	土師器	杯	-	SB	10053	上層	(12.1)	2.35	(8.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/6	橙 2.5YR6/6	赤彩（内外面）	-
21	328	土師器	杯	-	SB	10053	下層	-	-	13.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
21	329	土師器	皿	-	SB	10053	上層	(14.2)	1.7	(9.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6･2.5YR6/8	赤彩（内外面）	-
21	330	須恵器	蓋	-	SB	10053	中層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y6/1, 灰 N4/	黄灰 2.5Y6/1	-	-
21	331	土師器	皿	-	SB	10053	4～7層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・不明	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6･5YR6/6	橙 7.5YR6/6･5YR6/6	赤彩（内外面）	-
21	373	土師器	杯	-	SB	10053	上層	-	-	-	摩耗の為不明	摩耗の為不明	不明	不明	にぶい褐 5YR5/4	橙 7.5YR6/6	-	-
21	374	内黒土器	高台付椀	-	SB	10053	上層	-	-	(6.3)	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	橙 7.5YR6/6	黒 N2/	貼付け高台	-
21	375	土師器	高杯	-	SB	10053	上層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
21	376	土師器	小型甕	-	SB	10053	上層	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	煤付着（内外面）	-
21	377	須恵器	椀	-	SB	10053	1層	(12.05)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰黄 2.5Y7/2, 黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y7/2	-	-
164	815	土師器	甕	-	SB	10054	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/3,6/3	にぶい褐 7.5YR5/4	煤付着（内口縁～外面）	22
161	886	須恵器？	高台付椀	-	SP	311	-	10.9	5.3	7.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	貼付け高台	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
162	847	須恵器	高台付杯	-	SP	427	埋土	(15.4)	6.0	(9.9)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y8/1	貼付け高台	-
162	904	土師器	杯	-	SP	435	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4, 橙 2.5YR6/8	にぶい橙 7.5YR6/4 橙 2.5YR6/8	線刻「三」	-
162	809	土師器	高台付椀	-	SP	442	-	(18.6)	10.2	9.6	回転ﾅﾃﾞ後回転によるﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後回転によるﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ後回転によるﾐｶﾞｷ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面）	32
163	848	須恵器	甕	-	SP	442	-	21.6	-	-	回転ﾅﾃﾞ・平行ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ・格子ﾀﾀｷ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・同心円文当て具	-	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	-	32
163	489	須恵器	大甕	-	SP	444	-	(24.5)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・平行ﾀﾀｷ	-	回転ﾅﾃﾞ・同心円文当て具	-	褐灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y6/1	-	-
161	852	土師器	杯	-	SP	521	埋土	11.2	4.6	6.3	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y8/2	灰黄 2.5Y7/2	-	-
161	816	土師器	杯	-	SP	562	埋土	14.2	-	-	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒 10YR2/1, 灰黄褐 10YR6/2	黒褐 10YR3/1, 黄灰 2.5Y6/1	-	32
162	853	土師器	高台付椀	-	SP	562	-	-	-	7.5	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	貼付け高台	-
162	855	土師器	杯	-	SP	591	埋土	11.4	4.1	7.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
164	490	土師器	甕	-	SP	622	-	(21.8)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	橙 5YR7/6, 赤 10R4/6	橙 7.5YR7/6	赤彩・煤付着（外面）	-
161	856	土師器	杯	-	SP	651	-	11.9	3.5	7.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	-	-
161	492	須恵器	杯	-	SP	654	-	12.0	3.5	8.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	-	32
161	857	土師器	杯	-	SP	658	上層	12.0	2.8	8.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	赤彩（内外面），廃棄後に焼けたもの？	32
164	491	土師器	甕	-	SP	682	1層	(33.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ後一部ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	明黄褐 10YR7/6, にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（内外面）	-
164	859	須恵器	長頸壺	-	SP	742	埋土	-	-	9.8	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	磨研？（内底面），外面に沈線有，貼付け高台	32
162	493	須恵器	高台付椀	-	SP	788	-	(14.1)	6.3	7.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	摩滅	摩滅	灰 5Y6/1	灰 6/1	貼付け高台	32
162	494	須恵器	高台付杯	-	SP	788	-	-	-	(8.0)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰黄褐 2.5Y7/2, 灰褐 7.5YR4/2	灰黄 2.5Y7/2	貼付け高台，外面に焼きむら	-
161	495	須恵器？	杯	-	SP	806	-	-	-	(8.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8	黄橙 7.5YR7/8	赤焼け？	-
161	501	土師器	杯	-	SP	820	-	14.0	3.4	-	摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	黒斑（外底面）	33
161	500	須恵器	蓋	-	SP	828	-	(13.8)	1.8	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 N6/	灰 5Y6/1	-	-
162	496	須恵器	皿（転用硯）	-	SP	837	埋土	(15.0)	2.1	(12.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N4/0	灰 N4/0	-	-
161	497	須恵器	蓋	-	SP	847	埋土	20.4	-	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y5/1	灰白 5Y7/1	内面に粘土積み上げ痕跡	-
165	498	土師質	ｶﾏﾄﾞ	-	SP	848	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗ・ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	煤付着（内外面）	33
162	861	土師器	椀	-	SP	871	埋土	11.0	4.8	6.7	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR5/1	-	33

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量 (cm)			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
163	868	須恵器	蓋(転用硯)	-	SP	916	-	15.9	1.3	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・使用痕	-	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	-	33
163	869	須恵器	蓋(転用硯)	-	SP	931	-	(14.2)	-	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・使用痕	-	灰 NY4/0	灰 NY4/0	重ね焼き	33
161	810	土師器	高杯	-	SP	955	埋土	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	しぼり痕・ﾅﾃﾞ	-	明赤褐 2.5YR5/8	灰黄 2.5Y7/2,明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（内外面）	33
162	870	土師器	杯	-	SP	968	-	11.6	4.3	6.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	淡黄 2.5Y8/4,浅黄橙 10YR8/4	淡黄 2.5Y8/4,浅黄橙 10YR8/4	ﾍﾗ切りによる粘土の残痕	-
162	871	土師器	高台付椀	-	SP	969	埋土	11.6	7.0	(7.8)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/8	貼付け高台	33
163	872	土師器	鍋（把手）	-	SP	976	埋土	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
161	873	土師器	杯	-	SP	979	埋土	12.3	3.7	7.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後板目状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	煤付着（外面一部）	33
161	874	土師器	杯	-	SP	991	埋土	(11.0)	4.5	6.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
162	875	土師器	高台付椀	-	SP	991	埋土	(11.8)	4.9	6.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	貼付け高台	33
161	876	土師器	杯	-	SP	999	-	-	3.0	9.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面・外底面一部）	33
161	878	須恵器	高杯	-	SP	1011	-	-	3.8	9.1	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	-	-
164	814	土師器	甕	-	SP	1019	-	(33.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4,黄橙 10YR8/6	黒斑，煤付着（外面）	-
161	881	土師器	杯	-	SP	1051	埋土	(13.0)	3.4	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
162	882	土師器	椀	-	SP	1060	埋土・最上層	(10)	5.4	(6.3)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	-	-
161	883	土師器	杯	-	SP	1070	-	13.3	2.5	8.8	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	赤色顔料・赤彩（内外面）	-
161	884	須恵器	杯	-	SP	1073	-	(11.3)	3.9	(7.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰白 5Y7/1	灰 5Y6/1	-	-
161	885	須恵器	蓋	-	SP	1089	-	16.9	3.2	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y5/1	黄褐 2.5Y5/3	-	-
144	2	土師器	小皿	-	SX	004	3層	8.6	1.35	7.3	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
144	3	土師器	小皿	-	SX	004	3層	7.7	1.8	5.9	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
144	9	土師器	杯	-	SX	004	-	(12.8)	3.1	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
144	10	土師器	小皿	-	SX	004	3層	8.4	1.5	6.8	回転ﾅﾃﾞ	糸切り後板状圧痕	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄 2.5YR6/4	にぶい黄 2.5Y6/4	-	-
144	12	土師器	杯	-	SX	004	3層	(14.9)	3.4	(10.4)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
144	14	土師器	盤	-	SX	004	3層	(17.0)	2.6	(11.5)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
144	20	瓦器	椀	-	SX	004	3層	(17.0)	-	-	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	-	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	重ね焼痕（内外面）	-
144	21	瓦器	椀	-	SX	004	3層	16.3	5.0	(5.9)	ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y8/1	重ね焼痕（内底面・内外口縁部）	-
144	22	瓦器	鉢	-	SX	004	3層	-	-	(9.2)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
144	23	土師器	杯	-	SX	004	3層	-	-	-	-	糸切り	-	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	穿孔（底部）	-
144	26	瓦器	椀	-	SX	004	3層	(16.5)	-	-	回転ナデ後ヘラミガキ・ヘラミガキ	-	ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	灰白 2.5Y7/1	灰白 5Y7/1	重ね焼痕（内外口縁部）	-
144	27	土師器	杯	-	SX	004	3層	-	-	-	回転ナデ	糸切り	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
144	28	土師器	杯	-	SX	004	3層	(16.6)	3.8	11.4	回転ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	-
166	66	土師器	椀	-	SX	044	3層	11.2	4.6	5.3	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/4, にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4, にぶい黄橙 10YR7/3	-	34
166	67	内黒土器	椀	-	SX	044	3層	(17.3)	-	-	ヘラミガキ・回転ヘラケズリ	-	回転ナデ・ヘラミガキ	-	浅黄橙 10YR8/4, にぶい橙 5YR7/4	灰白 5Y7/2・灰 N4/	-	-
166	607	土師器	椀	-	SX	044	3層	(11.6)	4.75	(5.9)	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3, にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
166	608	土師器	杯	-	SX	044	3層	11.3	4.0	6.7	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/4	-	34
167	609	土師器	甕	-	SX	044	3層	(24.8)	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ヨコナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/3・6/3	煤付着（外面）	-
166	703	土師器	高台付椀	-	SX	044	3層	-	-	(6.1)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	貼付け高台，煤付着（内外面）	-
166	763	土師器	甕	-	SX	058	-	(26.9)	-	-	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ後ナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	-	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（外面）	34
166	837	土師器	小皿	-	SX	275	埋土	(9.2)	1.2	(7.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	黒斑（内外面）	-
166	838	土師器	小皿	-	SX	275	埋土	(9.1)	1.05	(6.9)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
166	839	土師器	小皿	-	SX	275	埋土	(9.8)	1.3	(6.9)	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR7/6・5YR6/6	-	-
166	840	土師器	杯	-	SX	275	埋土	-	-	(8.9)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	-	-
166	813	土師器	杯	-	SX	1025	埋土	(13.1)	2.9	8.0	回転ナデ後回転による暗文	ヘラケズリ後回転による暗文	回転ナデ後回転による暗文	回転ナデ後回転による暗文	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4, にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面），煤付着（内低面）	34
170	516	土師器	杯	S・T - 5・6	-	-	包3層	12.95	3.25	8.2	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
170	517	土師器	杯	O・P	-	-	-	10.2	3.2	6.9	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	36
171	518	土師器	椀	Q・R - 7・8	-	-	3層掘り下げ	11.4	4.95	5.95	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	-	36
171	519	土師器	高台付椀	K・L - 7・8	-	-	4層	12.1	5.3	6.2	回転ナデ	ヘラ切り後板目状圧痕	回転ナデ	回転ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	貼付け高台	36
171	520	土師器	高台付椀	R - 8・9	-	-	包4層	-	-	6.5	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	体部粘土巻上げによる成形，貼付け高台	-
171	521	土師器	高台付椀	Q・R - 7・8	-	-	3層	12.75	-	-	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	高台部分打ち欠いてある	-
170	522	内黒土器	高台付椀	R - 8・9	-	-	包4層	(12.4)	5.3	(7.0)	回転ナデ・ヘラミガキ	回転ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 7.5YR6/4, 灰黄 2.5Y6/2	黒 N2/	貼付け高台	-
170	523	内黒土器	高台付椀	Q・R - 7・8	-	-	包3層	(12.8)	4.3	(6.4)	回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 7.5YR6/6	黒 N2/	貼付け高台	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
170	524	黒色土器	高台付椀	O-P-Q-R-	-	-	3層	-	-	(8.0)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒 N2/	黒 N2/	貼付け高台	-
170	525	黒色土器	高台付椀	Q-R-S-8-9-10	-	-	3層	-	-	(7.4)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒 N2/	黒 N2/	貼付け高台	-
171	526	土師器	小皿	O-P	-	-	-	10.2	1.9	6.4	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（口縁部）	37
171	527	土師器	高台付小皿	Q-R-7-8	-	-	包4層	(11.6)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6, 黄灰 2.5YR5/1	-	-
171	528	土師器	高台付皿（托）	O-P-9-10	-	-	-	(12.5)	2.4	7.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	貼付け高台	37
171	529	土師器	高台付鉢	Q-R	-	-	-	(21.0)	5.0	(12.4)	回転ﾅﾃﾞ・風化の為不明	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り離し	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	-
171	530	土師器	高台付大皿	Q-R-9-10	-	-	-	-	-	10.3	回転ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8, にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR6/6	体部打ち欠いてある，赤彩（内外高台除く）	37
171	531	土師器	高台付盤	I-J-1-2	-	-	3層掘り下げ	(25.8)	4.35	(18.6)	回転ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-
170	532	土師器	高台付椀	O-P-9-10	-	-	-	-	-	(11.6)	回転ﾅﾃﾞ・不明	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	赤彩（内外面），貼付高台	-
171	537	土師器	杯	S-T-5-6	-	-	包3-4層	-	-	(7.3)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面），墨書「大」	35
171	538	土師器	杯	S-T-5-6	-	-	包4層	-	-	(9.5)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面），墨書	35
174	545	須恵器	甕（小型）	I-J-1-2	-	-	3-3b層	(14.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ	-	ﾀﾀｷ当て具痕後ﾅﾃﾞ	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤焼け	-
174	551	土師器	小型壺	M-N-5-6	-	-	3層掘り下げ	5.6	3.5	4.2	回転ﾅﾃﾞ	静止糸切り	回転ﾅﾃﾞ後絞り	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	38
172	560	土師器	鉢	O-P-9-10	-	-	3層掘り下げ	-	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	摩滅（外面），煤付着（外面）	-
172	562	須恵質	二面風字硯	O-P-3-4	-	-	4層	-	-	-	-	-	-	-	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	研磨・墨・朱墨（内底下端部）	39
170	563	須恵器	蓋	Q-R-11	-	-	-	(7.2)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 N5/	灰 7.5Y5/1	-	-
171	564	須恵器	香炉	I-J-1-2	-	-	3層掘り下げ	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	-	-
170	567	須恵器	稜椀	O-P-5-6	-	-	3層掘り下げ	-	-	(9.8)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐 7.5YR4/3	にぶい黄橙 10YR6/4	-	38
174	572	須恵器	壷	I-J-5-6	-	-	-	-	-	(9.0)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR5/2	黄灰 2.5YR4/1	ﾍﾗ書き「栄」	35
172	576	須恵器	円面硯	K-L-9-10	-	-	4層掘り下げ	(14.5)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	使用痕	灰 4/	灰 4/	方形透かし（4ヵ所）	39
173	597	土師器	甕	I-J-1-2	-	-	-	28.2	-	25.9	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡黄 2.5Y8/3	浅黄橙 10YR8/3	煤付着（内底部・外面）	38
170	721	内黒土器	高台付椀	I-J-5-6	-	-	-	-	-	6.4	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙 10YR6/4	黒 N2/	貼付け高台，煤付着（外面）	37
171	723	土師器	高台付皿	M-N-11-12	-	-	3層	(12.3)	3.4	6.8	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面），貼付け高台	37

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
171	724	土師器	高台付皿（托）	G･H－7･8	－	－	－	(11.2)	－	－	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	黒斑（外底面）	－
171	727	土師器	高台付椀	M･N－9･10	－	－	4層	16.1	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	煤付着（内面），高台剥離	36
171	728	土師器	鉢	O･P－9･10	－	－	4層	13.9	7.0	8.9	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ	回転ﾍﾗｹﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面）	37
174	731	土師器	小杯	M･N－11･12	－	－	3層	－	－	4.8	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	38
174	733	土師器	小型壷	M･N－9･10	－	－	4層	－	－	4.3	回転ﾅﾃﾞ・手持ちﾍﾗｹﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	－	38
174	735	須恵器	高台付小型壷	Q･R－7･8	－	－	3層	－	－	6.8	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ・沈線	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ絞り痕	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	貼付け高台	38
174	736	須恵器	横瓶	K･L－11･12	－	－	4層	(11.9)	－	－	回転ﾅﾃﾞ・格子ﾀﾀｷ	－	回転ﾅﾃﾞ・同心円文当て具	－	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	－	39
170	737	土師器	高杯	M･N－11･12	－	－	－	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	－	ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	粘土巻き上げ痕	－
170	738	須恵器	高杯	Q･R－11･12	－	－	3層掘り下げ	(21.0)	－	－	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰 N6/	灰 N6/	内器面に灰がかかっている	－
172	739	須恵器	高台付鉢	不明	－	－	－	－	－	(9.0)	ﾊｹﾒ後一部ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰 N5/	灰 N6/	貼付け高台	38
172	740	須恵器	甕	M･N－9･10	－	－	4層	(20.6)	－	－	回転ﾅﾃﾞ・格子ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ・格子ﾀﾀｷ	－	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ当て具痕	－	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	頸部にﾀﾀｷの痕跡	38
174	741	須恵器	瓶	K･L－9･10	－	－	4層	－	－	4.6	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ	静止糸切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	－	39
172	745	須恵器	円面硯	G･H－7･8	－	－	3層	－	－	－	－	－	－	使用痕	灰 N4/	灰 N4/	獣脚か？	39
172	747	土師器	鍋	M･N－9･10	－	－	4層	29.9	－	－	ﾖｺﾅﾃﾞ・工具ﾅﾃﾞ	－	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	－	にぶい橙 7.5YR7/4，にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（内外面）	37
173	806	土師器	甕	G･H－7･8	－	－	4層	26.3	－	25.2	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ？･ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	ﾍﾗｹﾞﾘ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	黒斑（外面）	38
175	807	土師質	ｶﾏﾄﾞ	M･N－11･12	－	－	－	－	－	－	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	－	ﾖｺﾅﾃﾞ	－	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	指頭痕（外面），煤付着（内外面）	37
171	887	土師器	三足盤	O－4	－	－	4層掘り下げ	11.9	3.7	7.1	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	－	37
174	893	須恵器	長頸壷	P－9	－	－	－	(7.8)	－	－	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	－	回転ﾅﾃﾞ	－	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	内：頸部に粘土つなぎ痕	38
171	894	須恵器	小鉢	P－9	－	－	－	(9.6)	6.6	3.4	回転ﾅﾃﾞ・ｹﾞｽﾞﾘ	ｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	－	38
172	908	須恵器	高台付皿（転用硯）	K･L－1･2	－	－	3b層掘り下げ	(16.1)	2.8	(12.6)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	使用痕	黄灰 2.5Y6/1，灰黄褐 10YR6/2	褐灰 10YRY6/1	灰釉（内面口縁・外面）	39
171	909	土師器	皿	K･L－9･10	－	－	4層包含層・3層掘り下げ	－	－	(12.0)	回転ﾍﾗｹﾞﾘ	回転ﾍﾗｹﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	墨書	－
170	921	土師器	蓋	Q･R－7･8	－	－	上層	(16.8)	3.6	－	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	－	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	赤彩（内外面），転用硯で墨痕有，線刻「三」（天井部）	－

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
174	925	須恵器	小型壺	I-J-7-8	-	-	3層掘り下げ	(1.8)	4.0	6.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	不定方向のヘラケズリ	ヨコナデ	-	灰白 2.5YR7/1	灰黄 2.5Y7/2	荒尾産	-
175	926	土師質	土馬	I-J-3-4	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	38
-	1072	土師器	皿	-	SE	039	-	(15.0)	3.0	(4.4)	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	墨書	25
-	1073	土師器	杯	-	SE-SD	039・056	-	13.4	2.6	8.4	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	墨書「三？」，赤彩	25
-	1328	土師器	鉢	-	SD	075	-	(24.0)	-	(13.6)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	30
158	1312	土師質	土馬	-	SD	110・111	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	頭部・四脚・尻部欠失	-
-	1005	土師器	杯	-	SE	247	-	15.0	3.2	12.0	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4・10YR6/2	にぶい橙 7.5YR6	-	27
-	1006	土師器	小皿	-	SE	247	-	9.4	1.2	7.0	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	27
-	1007	土師器	小皿	-	SE	247	3層	8.1	1.6	6.4	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	27・45
-	1008	土師器	小皿	-	SE	247	-	9.0	1.2	8.4	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	浅黄 10RY8/4	浅黄 10RY8/4	-	27
-	1009	土師器	小皿	-	SE	247	-	8.5	1.3	6.4	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	27・45
-	1010	土師器	小皿	-	SE	247	-	8.6	1.7	6.2	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	45
-	1011	土師器	小皿	-	SE	247	-	8.4	1.1	7.0	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	45
-	1015	土師器	小皿	-	SE	247	-	8.4	1.5	6.8	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	27・45
-	1076	土師器	小皿	-	SE	247	-	8.8	2.0	6.6	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	45
-	1014	土師器	小皿	-	SE	249	-	8.8	1.1	7.6	回転ナデ	糸切り後板目状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	44
-	1078	土師器	小皿	-	SE	249	埋5層一括南北ベルト	8.25	1.2	6.8	回転ナデ	ヘラ切離し後ナデ後板状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	44
-	1079	土師器	小皿	-	SE	249	埋4上層	9.0	1.25	6.9	回転ナデ	糸切離し後板状圧痕	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	-	44
-	1080	土師器	小皿	-	SE	249	埋下層	(9.4)	1.15	(7.3)	回転ナデ	ヘラ切離し	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	44
-	1085	土師器	小皿	-	SE	249	埋7層	(9.3)	1.25	(6.8)	回転ナデ	糸切離し後板状圧痕	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	-	44
-	1063	土師器	甑	O-P-9・10	SE	263	-	-	-	-	回転ナデ・ナデ	ﾀﾀｷ後ナデ	ナデ	同心円当具後ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	29
-	1074	土師器	杯	-	SD	366	-	12.2	3.5	8.0	回転ナデ	ヘラ切り後工具によるナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/4	橙 5YR6/4	-	32
-	1075	土師器	杯	-	SD	366	-	12.0	3.5	8.0	回転ナデ	ヘラ切り後工具によるナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/4	橙 5YR6/4	-	32

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
-	1332	瓦器	杯？	-	SD	764	-	12.4	-	12.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	重ね焼き痕	32
-	1064	土師器	盤	S - 7	SP	658	-	-	-	13.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	線刻「三」，赤彩	32
-	1065	土師器	甕	-	SP	1092	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾍｽﾞﾘ	-	灰黄 2.5Y7/2	明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（内外器面口縁），ﾍﾗ書き文様	33
-	534	土師器	杯	I･J - 1･2	-	-	-	(13.2)	3.6	9.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	ﾍﾗ記号「X」（外底面），煤付着（内外面）	35
-	535	土師器	杯	Q･R - 11	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	線刻「大」（内底面）	35
-	536	土師器	杯	Q･R - 11･12	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	ﾍﾗ記号（外底面）	35
-	548	土師器	杯	Q･R - 11･12	-	-	-	-	-	(4.6)	回転ﾅﾃﾞ	糸切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	-	36
-	892	土師器	小型椀	O･P - 9･10	-	-	-	(8.75)	4.2	5.75	暗文	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ後暗文	暗文	暗文	-	-	成形時に回転台を使用（内外面）	37
-	910	土師器	椀	K - 11･12	-	-	-	-	-	(5.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	35
-	911	土師器	杯	M･N - 3･4	-	-	-	17.0	5.2	11.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後工具によるﾖｺﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾖｺ方向後ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	36
-	912	土師器	杯	M･N - 3･4	-	-	-	(17.6)	5.7	12.0	回転ﾅﾃﾞ・口縁付近まで暗文	回転による暗文	回転ﾅﾃﾞ・口縁付近まで暗文	回転による暗文	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	36
-	913	土師器	高台付杯	M･N - 3･4	-	-	-	15.4	4.5	10.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	貼付け高台	36
-	915	内黒土器	高台付椀	M･N - 1･2	-	-	-	15.6	6.7	8.8	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	にぶい橙 7.5YR7/4	黒 N2/	貼付け高台	37
-	927	土師器	鍋足	Q･R - 9･10	-	-	-	-	-	-	指頭圧痕	-	指頭圧痕	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	37
-	930	須恵器	小型壷	M･N - 11･12	-	-	3 層	11.6	5.8	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	-	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	朱墨入れ	39
-	932	須恵器	高台付杯	排土	-	-	-	-	2.2	(8.2)	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・磨耗・使用痕	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	転用硯（朱墨付着）	4
-	933	須恵器	蓋	K･I - 1･2	-	-	-	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	ﾅﾃﾞ・磨耗・使用痕	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	転用硯（朱墨付着）	4
-	934	須恵器	蓋	K･I - 7･8	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・磨耗・使用痕	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	転用硯（朱墨付着）	4
-	935	須恵器	杯	I･J 東側	-	-	-	-	1.2	(6.2)	-	-	-	ﾅﾃﾞ・磨耗・使用痕	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	転用硯（朱墨付着）	4
-	943	土師器	杯	M･N - 1･2	-	-	-	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	竹管文？「◎」（外底面）	36
-	944	土師器	杯？	K･L - 7･8	-	-	-	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ？	-	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	竹管文？「〇」（内底面）	36
-	945	土師器	杯	G･H - 7･8	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	不明	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ？	にぶい橙 7.5YR6/4･10YR6/2	にぶい橙 7.5YR6/4･10YR6/2	ﾍﾗ書き「論」	35
-	946	須恵器	高台付杯？	M･N - 1･2	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	褐灰 10YRY6/1	褐灰 10YRY6/1	ﾍﾗ書き「大」？	35
-	947	土師器	杯	I･J - 5･6	-	-	-	-	2.7	(10.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	内外底面に線刻「三」	35
-	960	土師器	小皿	M･N - 11･12	-	-	3 層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	-	45
-	967	須恵器	風字硯？	K･L - 1･2	-	-	-	-	-	-	-	同心円当具	-	-	灰褐 7.5YR4/2	褐灰 10YR4/1	硯	39
-	968	須恵器	高台付杯	K･L - 5･6	-	-	-	-	-	10.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	転用硯，内器面に磨研	39
-	969	須恵器	不明	K･L - 1･2	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	転用硯？内底面磨研	39

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
-	970	須恵器	杯	M･N－9･10	-	-	-	-	-	(9.6)	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰 7.5YR5/1	灰 7.5YR5/1	転用硯？内底面磨研	39
-	971	須恵器	高台付杯	K･L－1･2	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗｹﾞﾘ	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	転用硯，内外底面磨研	39
-	972	須恵器	高台付杯	K･L－1･2	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	転用硯，貼付け高台	39
-	973	須恵器	高台付壷？	I･J－5･6	-	-	-	-	-	(9.2)	-	ﾍﾗ切り	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰 7.5YR5/1	灰黄褐 10YR4/2	転用硯？内外底面磨研	39
-	974	須恵器	高台付杯	K･L－1･2	-	-	-	-	-	(9.0)	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	黄灰 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y6/2	転用硯？内底面磨研	39
-	975	須恵器	高台付壷？	I･J－5･6	-	-	-	-	-	(12.8)	-	ﾅﾃﾞ・磨耗・使用痕	-	ﾅﾃﾞ・使用痕	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	磨研（内外底面）	39
-	977	須恵器	高台付杯	J･K－1･8	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	使用痕	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	転用硯，貼付け高台	39
-	990	土師器	高台付杯	I･J－3･4	-	-	-	-	-	(7.6)	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	墨書（文字不明）	35
-	991	土師器	甑	M･N－11･12	-	-	-	-	-	-	手づくね	-	ｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	把手基部に穿孔	37
-	998	土師器	高台付皿（托）	M･N 東側	-	-	-	-	1.9	6.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	浅黄 10RY8/3	浅黄 10RY8/3	-	37
-	1002	土師器	不明？	排土中	-	-	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	-	38
-	1003	土師器	杯	M－9･10	-	-	-	14.0	3.4	11.0	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	穿孔有	36
-	1012	土師器	杯？	Q･R－9･10	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り	-	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	墨書「三」	35
-	1067	土師器	杯	M･N－11･12	-	-	-	(12.2)	3.5	(7.6)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外器面から貫通した穴・未貫通穴各1	36
-	1068	須恵器	杯	Q･R－5･6	-	-	-	12.6	3.0	9.0	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 10YRY7/1	灰白 10YRY7/1	墨書「?」	35
-	1070	土師器	蓋	I･J－11･12	-	-	-	-	1.8	輪状つまみ径 7.6	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	36･45
-	1089	須恵器	高台付杯？	Q･R－11･12	-	-	-	-	-	8.3	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	-	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR6/1	貼付け高台，朱墨痕（内底面）打ち欠き	4
-	1326	土師器	杯	I･J－5･6	-	-	-	-	-	9.0	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	ﾍﾗ記号	35
-	1327	土師器	杯	S･T－5･6	-	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/4	橙 5YR6/4	墨書「三」，赤彩（内外器面）	35
-	1330	土師器	小杯	M･N－9･10	-	-	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	36
-	1331	土師器	鍋？	G･H－7･8	-	-	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	ﾍﾗ記号	35

表２　Ⅱ区　土器類観察表

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
184	2001	土師器	杯	-	SI	2001	上層	(13.0)	3.8	(9.4)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	煤付着（内面）	-
184	2002	土師器	杯	-	SI	2001	埋土	(14.0)	3.2	(8.8)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
184	2003	土師器	杯	-	SI	2001	2層	(14.0)	4.0	(10.3)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	-
185	2004	土師器	甕	-	SI	2001	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/8	橙 2.5YR6/8	赤彩（内外面）	-
185	2005	土師器	甕	-	SI	2001	中層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	黒褐色 10YR3/2	灰黄褐 10YR5/2	-	-
185	2006	土師器	甕	-	SI	2001	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/3	-	-
185	2007	土師器	小型甕	-	SI	2001	1層	(13.8)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄 2.5Y6/2	煤付着（内面）	47
184	2008	須恵器	高台付杯	-	SI	2001	床面直上	13.0	4.8	8.0	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	褐灰 10YR6/1	黄灰 2.5Y6/1	貼付け高台	47
184	2009	須恵器	高台付杯	-	SI	2001	上層	(19.0)	4.8	(11.3)	回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	貼り付け高台	-
184	2010	須恵器	高台付杯	-	SI	2001	床面直上	-	-	(10.0)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	貼付け高台（貼付け時に粘土残跡）	-
184	2011	須恵器	高台付杯	-	SI	2001	-	-	-	(9.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	貼り付け高台	-
184	2012	須恵器	高台付杯	-	SI	2001	下層	-	-	(10.2)	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N5/	灰 N6/	屈曲した体部から輪積みが剥離した痕跡，貼付け高台	-
184	2013	須恵器	小杯	-	SI	2001	一括	(8.0)	4.3	(6.0)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	-	-
184	2014	須恵器	杯蓋	-	SI	2001	上層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰黄 2.5Y6/2	浅黄 2.5Y7/3	-	-
184	2015	須恵器	杯蓋	-	SI	2001	ｶﾏﾄﾞ内	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	つまみ	-
184	2016	須恵器	杯蓋	-	SI	2001	下層	(11.4)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	-	-
184	2017	須恵器	蓋	-	SI	2001	中層	(15.4)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	-	-
184	2018	須恵器	蓋	-	SI	2001	2下層	(19.3)	-	-	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 N6/	灰 N6/	つまみの残跡	-
184	2019	須恵器	蓋	-	SI	2001	下層	(10.4)	-	-	ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	暗灰黄 2.5Y5/2･5Y6/1	暗灰黄 2.5Y5/2	重焼き痕跡（外面口縁部）	47
184	2020	須恵器	蓋	-	SI	2001	-	14.1	3.2	-	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ	研磨	黄褐 2.5Y5/3	にぶい黄 2.5Y6/4	輪状つまみ，使用痕有	47
184	2021	須恵器	杯蓋	-	SI	2001	1層	(15.0)	2.6	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰白 N7/	ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY5/1	焼き歪み有	47
184	2023	須恵器	高杯	-	SI	2001	中層	-	-	(12.8)	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐 2.5Y3/3	灰 5Y4/1	脚部	-
185	2024	須恵器	短頸壷	-	SI	2001	包3層下部･ｶﾏﾄﾞ内4･2下層	(11.5)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	磨耗（内外面）	47
184	2050	須恵器	蓋	-	SI	2001	下層床面清掃	(14.6)	-	-	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	磨研？（内面）	-
185	2059	須恵器	甕	-	SI	2001	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y4/1	暗黄灰 2.5Y5/2	-	-
185	2122	須恵器	横瓶	-	SI	2001	埋土下層	(11.4)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・同心円文当て具	-	暗赤褐 5YR3/3	暗赤褐 5YR3/3	-	47

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
187	2033	土師器	盤	-	SI	2002	下層	-	-	(13.2)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面），貼付け高台	-
187	2034	土師器	鉢	-	SI	2002	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	-	-
187	2035	土師器	鉢	-	SI	2002	4下層床面直上	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	黒斑（外面）	-
187	2036	土師器	壷	-	SI	2002	埋土	-	-	-	ﾊｹ後細かいﾐｶﾞｷ	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい橙 7.5YR6/4	赤彩（内外面）	-
187	2037	土師器	甕	-	SI	2002	上層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	-
187	2039	土師器	甕	-	SI	2002	床直上床面	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面），黒斑 or 煤？（外面一部）	-
187	2040	土師器	甕	-	SI	2002	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/6	-	47
187	2049	須恵器	蓋	-	SI	2002	上層	(17.8)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	灰 5Y6/1	-	-
187	2051	須恵器	蓋	-	SK	2002	ｶﾏﾄﾞ内	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 7.5Y5/1	灰 5Y4/1	自然釉？（外面）	-
187	2052	須恵器	杯蓋	-	SI	2002	上層	(12.8)	2.2	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰白 N7/	明赤褐 2.5YR3/2	-	-
187	2053	須恵器	蓋	-	SI	2002	下層	-	1.7	-	不明	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ	-	暗灰 N3/	灰 N4/	-	-
188	2055	須恵器	鉢	-	SI	2002	一括	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｶｷﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状工具による調整	-	灰黄褐 10YR6/2	黄灰 2.5Y6/1	自然釉（外面）	-
187	2056	須恵器	高杯	-	SI	2002	下層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	脚部	-
187	2057	須恵器	高台付杯	-	SI	2002	上層	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	粘土巻上げ痕（底部），貼付高台	-
188	2058	須恵器	短頸壷	-	SI	2002	上層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・平行ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ	-	ｼﾎﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ・同心円文当て具痕	-	黄灰 2.5Y5/1	灰黄 2.5Y7/2	口縁部が頸部から剥離	-
187	2171	土師器	甕	-	SI	2002	1･3 下層	(25.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	-	47
187	2186	土師器	杯	-	SI	2002	ｶﾏﾄﾞ内	(16.3)	5.0	(14.0)	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	暗文後一部・工具による施文	ﾐｶﾞｷ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	廃棄後に火をうけている，煤付着（内外面）	-
187	2187	土師器	杯	-	SI	2002	-	-	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	暗文	-	灰黄色 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	煤付着（内面）	-
191	2043	土師器	鍋	-	SI	2004	6上層	(28.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（外面），口縁部に貼付け痕跡	47
190	2061	土師器	杯	-	SI	2004	一括	(14.2)	3.2	(10.2)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	薄い赤彩（内外面）	-
191	2062	土師器	甕	-	SI	2004	1層	(25.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
191	2063	土師器	甕	-	SI	2004	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 5YR5/6	赤彩（内外面）	-
191	2064	土師器	甕	-	SI	2004	一括	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	明赤褐 2.5YR5/8	橙 7.5YR6/6	赤彩（外面），丁寧なﾐｶﾞｷ	-
191	2065	土師器	甑	-	SI	2004	6層	-	-	-	ﾅﾃﾞ・手びねり	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	黄褐 2.5Y5/3	灰黄褐 10YR4/2	把手	-
190	2066	土師器？	杯	-	SI	2004	下層	(13.0)	4.4	(8.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り痕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	-	-
190	2068	須恵器	高台付杯	-	SE	2004	-	(12.2)	4.55	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR7/4	貼り付け高台，爪型痕（底部）	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
190	2069	須恵器	高台付杯	-	SI	2004	下層	-	-	(8.4)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 5Y7/1	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	貼り付け高台	-
190	2070	須恵器	蓋	-	SI	2004	竈埋土上・下層	-	-	(18.4)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	赤焼け	-
190	2071	須恵器	皿	-	SI	2004	中層	(15.4)	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	黄灰 2.5Y6/1	にぶい黄 2.5Y6/3	-	-
190	2072	須恵器	鉢	-	SI	2004	上層検出面	(9.8)	4.8	(7.4)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・櫛状工具痕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/8	橙 2.5YR6/8	煤付着（外面）	47
190	2073	須恵器	高台付杯	-	SI	2004	6層	(15.2)	7.5	(10.4)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・研磨	ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY5/1	ｵﾘｰﾌﾞ灰 2.5GY5/1	転用硯か？貼付け高台，焼き歪み有	47
190	2074	須恵器	脚付杯	-	SI	2004	上層	-	-	5.6	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y5/1	灰黄 2.5Y6/2	脚一部と脚部から杯部分が打ち欠いてある	-
191	2075	須恵器	横瓶	-	SI	2004	上層	-	-	-	擬格子ﾀﾀｷ・平行ﾀﾀｷ	-	同心円文当て具	-	にぶい黄褐 10YR5/4	橙 5YR6/8	粘土蓋の貼り付け痕	-
190	2076	須恵器	杯	-	SI	2004	下層・ﾍﾞﾙﾄ外し下層	(13.2)	3.2	(10.2)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	赤焼け	-
190	2188	土師器	杯	-	SI	2004	上層	(11.7)	3.8	(9.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	-	赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	赤彩（内外面）	-
190	2189	土師器	杯	-	SI	2004	4上層	(15.3)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	赤褐 5YR4/8	赤褐 5YR4/8	赤彩（内外面）	-
198	2077	土師器	甕	-	SK	2005	一括	(19.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
198	2078	土師器	甕	-	SK	2005	下層	(24.8)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/3	-	-
198	2079	土師器	杯	-	SK	2005	一括	(15.6)	3.6	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り	回転ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
211	2080	土師器	杯	-	SE	2008	上・中層	16.2	4.4	11.3	ﾖｺﾅﾃﾞ	手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	49
211	2081	土師器	杯	-	SE	2008	-	(12.9)	4.4	9.2	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	-	-
211	2082	土師器	杯	-	SE	2008	-	15.6	4.0	10.4	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	明黄褐 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	焼き歪み有，黒斑（外面一部）	49
211	2083	土師器	杯	-	SE	2008	-	(12.4)	3.9	8.7	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	-	49
213	2087	土師器	鉢	-	SE	2008	-	(19.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（内外面）	49
213	2088	土師器	片口鉢	-	SE	2008	上・下層	(19.6)	-	-	ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	暗褐 7.5YR3/3	にぶい黄褐 10YR5/3	赤彩（外面・内面口縁部）	-
212	2089	土師器	甕	-	SE	2008	上・中層1･2層	(26.6)	-	-	ﾊｹﾒ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾊｹﾒ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6，黒褐 7.5YR3/1	煤付着（内面）	49
213	2092	土師器	鍋	-	SE	2008	上層	(25.9)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着（外面）	-
212	2094	土師器	甕	-	SE	2008	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	明赤褐 5YR5/6，にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
211	2095	土師器	甕	-	SE	2008	下層床～10cm	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・工具によるﾅﾅﾒ方向ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	-	49
212	2097	土師器	甕	-	SE	2008	上・中層	(23.4)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	-	-
211	2100	土師器	甕	-	SE	2008	ﾋﾟｯﾄ群地山直上上層	(25.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	49
211	2101	土師器	小型甕	-	SE	2008	上層	(13.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	-	49

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
211	2102	土師器	甕	-	SE	2008	上層・埋土	(29.2)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	-	49
212	2105	土師器	甕	-	SE	2008	下層	(18.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	明赤褐 2.5YR5/6	橙 7.5YR7/6, にぶい黄橙 10YR6/3	赤彩（内外面），黒斑（外面）	49
212	2109	土師器	鍋（甕？）	-	SE	2008	上～下層	-	-	-	ﾊｹﾒ	不明	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR4/2	-	-
211	2111	須恵器	杯	-	SE	2008	埋土	12.3	3.3	9.5	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	-	49
211	2112	須恵器	杯	-	SE	2008	-	13.6	4.7	7.6	回転ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y6/1・N6/	灰 10Y6/1	歪み有	49
211	2113	須恵器	杯	-	SE	2008	埋土	13.2	4,0	9.8	回転ﾅﾃﾞ	回転切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	49
211	2114	須恵器	杯	-	SE	2008	上層	(15.2)	3.8	(11.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
211	2117	須恵器	高台付杯	-	SE	2008	上・中層	(17.7)	7.0	11.0	回転ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	貼付け高台，赤焼け	49
211	2118	須恵器	小杯	-	SE	2008	上層	-	-	(7.6)	回転ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 N4/	灰 N4/	内器面にﾀｰﾙ状の付着物	-
211	2119	須恵器	蓋	-	SE	2008	-	(14.0)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	-	灰 N4/	灰 N5/	焼き歪み有	-
211	2120	須恵器	蓋	-	SE	2008	-	14.9	2.1	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰黄 2.5Y6/2	黄褐 2.5Y5/4	重ね焼き痕（内面），輪状つまみ	49
212	2121	土師器	脚付壷	-	SE	2008	上層 6層	-	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾐｶﾞｷ・ﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	脚部欠損	49
200	2124	土師器	杯	-	SK	2009	上層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
200	2125	土師器	杯	-	SK	2009	床面～10cm	(13.8)	2.9	(9.4)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	赤彩（内外面），墨書？	48
200	2126	土師器	甕	-	SK	2009	床面～10cm	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞｹﾝ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	赤彩（外面）	-
200	2128	須恵器	高台付杯	-	SK	2009	包４層	-	-	8.0	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄灰 2Y6/1	灰黄 2.5Y6/2	貼り付け高台	-
193	2022	須恵器	鉢	-	SI	2010	埋土	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	鉄鉢型	-
193	2129	土師器	杯	-	SI	2010	埋土	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	-	-
193	2130	土師器	高台付杯	-	SI	2010	埋土	-	-	(7.2)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（内外面），貼付け高台	-
193	2131	土師器	高杯	-	SI	2010	-	(18.0)	-	(14.0)	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
193	2132	土師器	鍋	-	SI	2010	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ工具によるﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰黄褐 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	煤付着，刻み目（口縁部）	-
193	2133	土師器	杯	-	SI	2010	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗ状工具によるﾐｶﾞｷ	ﾍﾗ状工具によるﾐｶﾞｷ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
193	2134	須恵器	杯	-	SI	2010	一括	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	-	-
193	2135	須恵器	杯	-	SI	2010	埋土	-	-	(9.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄 2,5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	-	-
193	2136	須恵器	蓋	-	SI	2010	埋土	(13.8)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	にぶい黄褐10YR4/3	暗灰黄 2.5Y5/2	-	-
215	2048	土師器	杯	-	SD	2011	包４層 4層一括	-	-	(11.3)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄褐10YR4/3	赤褐 5YR4/6	赤彩（内外面）	50
215	2137	土師器	皿	-	SD	2011	埋土	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	赤彩（内外面）	-
215	2138	土師器	甕	-	SD	2011	埋土	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾅﾃﾞ	-	赤褐 2.5Y4/6	赤褐 2.5YR4/6	赤彩（内外面）	-
215	2139	土師器	甕	-	SD	2011	-	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	橙 5YR6/8	橙 7.5YR6/6	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
215	2140	須恵器	蓋	-	SD	2011	-	-	-	-	回転ナデ・不明	-	回転ナデ	-	灰 N6/	暗灰 N3/	-	-
215	2141	須恵器	蓋	-	SD	2011	埋土	-	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	灰 5Y4/1	灰白 7.5Y7/1	-	-
202	2142	土師器	甕	-	SK	2012	上層床面～43 cm	(15.8)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 5YR7/6	にぶい橙 10YR6/3	煤付着（外面一部）	-
202	2143	須恵器	杯	-	SK	2012	埋土	-	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	-	-
202	2144	須恵器	蓋	-	SK	2012	2 層	-	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ	-	灰 5Y5/1	褐 10YR4/1	つまみ上部に灰がかかっている	-
202	2145	須恵器	蓋	-	SK	2012	埋土	-	-	-	回転ナデ	-	ナデ	-	黄灰 2.5Y4/1	灰 5Y4/1	つまみ	-
195	2146	土師器	杯	-	SI	2013	下層	-	-	(9.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ	橙 .2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	赤彩（内外面）	-
195	2147	土師器	甕	-	SI	2013	4 上層	-	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 5YR6/6	-	-
195	2148	土師器	甕	-	SI	2013	上層・検出面直下	(22.6)	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	煤付着（内外面）	-
195	2192	土師器	杯	-	SI	2013	上層	-	-	-	ミガキ	-	ヨコナデ・ミガキ	-	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR6/4	-	-
214	2067	須恵器	高台付杯	-	SE	2015	上層	-	-	(9.0)	回転ナデ	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	貼り付け高台	-
214	2151	土師器	鉢	-	SE	2015	8 層以下	17.0	6.5	11.8	ヨコナデ	ヘラケズリ・ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	50
214	2152	土師器	杯	-	SE	2015	8 層以下	14.4	3.4	11.6	ミガキ	ヘラケズリ後ナデ	ケズリ	ミガキ	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	赤彩（外面），廃棄後に火を受けた痕跡による煤付着	49
214	2153	土師器	杯	-	SE	2015	上層	-	-	(9.0)	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	赤彩（内外面）	-
214	2154	土師器	高台付杯	-	SE	2015	8 層以下	(12.8)	-	(9.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	貼り付け高台跡有	-
214	2155	土師器	甕	-	SE	2015	下層 5･7 層	(16.8)	-	-	ヨコナデ・ハケメ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR4/2	-	50
214	2156	土師器	甕	-	SE	2015	8 層以下	-	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
214	2157	土師器	甕	-	SE	2015	埋土	-	-	-	ヨコナデ・ハケメ後ヨコナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
214	2158	土師器	甕	-	SE	2015	1 層	-	-	-	ヨコナデ	-	ヨコナデ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
214	2159	土師器	甕	-	SE	2015	1 上層	(21.4)	-	-	ヨコナデ・ナデ	-	ヨコナデ・ハケメ後ケズリ・ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着（内面）	50
214	2160	土師器	甑（把手）	-	SE	2015	8 層以下	-	-	-	ハケメ・手ひねり・ナデ	-	ヘラケズリ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	成形時にひねり込んで整えた繊維の痕跡	50
214	2161	須恵器	杯	-	SE	2015	5･6 層	(13.6)	3.5	(9.6)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤焼け	-
214	2162	須恵器	小杯	-	SE	2015	上層	-	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	自然釉（内外面）	-
214	2163	須恵器	杯	-	SE	2015	8 層以下	(13.0)	4.0	(8.7)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	-	-
214	2164	須恵器	皿	-	SE	2015	8 層以下	(19..4)	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	にぶい赤褐 5YR4/4	灰黄 2.5Y6/2	自然釉（外面）	-
204	2150	須恵質	土馬	-	SK	2016	埋土	14.4	7.3	-	ナデ	ナデ	ナデ	-	黒褐 2.5YR3/1，黄灰 2.5Y5/1	-	灰釉（上面全体）	3･50
203	2165	土師器	杯	-	SK	2016	埋土	(10.8)	-	-	回転ナデ	-	回転ナデ	-	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	-	-
203	2166	土師器	杯	-	SK	2016	最下層	-	-	(8.8)	回転ナデ	ヘラ離し後ナデ	回転ナデ	ナデ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	-	-
203	2167	土師器	皿	-	SK	2016	埋土	-	-	-	ヘラミガキ	-	ヘラミガキ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	-

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
203	2168	土師器	高台付盤	-	SK	2016	一括４層	-	-	13.8	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾍﾗ状工具によるｶﾞｷ	ﾍﾗ状工具によるﾐｶﾞｷ	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	-	-
203	2169	土師器	甕	-	SK	2016	最下層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR7/6	-	-
203	2170	土師器	甕	-	SK	2016	最下層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	粘土積み上げ痕跡有，煤付着（外面）	-
203	2172	須恵器	杯	-	SK	2016	埋土	-	3.2	-	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗青灰 5B4/1	灰 N4/	ﾍﾗ記号 ?（底部）	-
203	2173	須恵器	高台付杯	-	SK	2016	埋土	-	-	(9.1)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐灰 10YR5/1	暗灰黄 2.5Y5/2	外器面に自然釉痕跡あるが剥落	-
203	2174	須恵器	高台付杯	-	SK	2016	１層 埋土	(15.0)	4.5	(10.3)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y6/1	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	貼り付け高台	47
203	2175	須恵器	高台付杯	-	SK	2016	最下層 包４層	-	-	(9.3)	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	-	-
196	2176	土師器	甕	-	SI	2017	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	-	-
196	2177	土師器	甕	-	SI	2017	埋土	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	-	-
196	2178	須恵器	高台付杯	-	SI	2017	-	13.1	4.5	9.3	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰 5Y5/1	灰 7.5Y6/1	貼り付け高台	47
196	2179	須恵器	蓋	-	SI	2017	埋土	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	-	-
196	2180	須恵器	蓋	-	SI	2017	埋土	17.0	2.3	-	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ	-	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	-	灰 5Y5/1	灰 7.5Y5/1	ﾎﾞﾀﾝ状つまみ	-
196	2181	須恵器	甑	-	SI	2017	包４層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	煤付着（外面）	47
196	2182	土師器	鍋	-	SI	2017	埋土	(25.5)	11.5	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹﾞｽﾞﾘ	ｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	粘土巻上げ後有，焼き歪み，煤付着（外面）	47
206	2025	土師器	杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	(12.7)	3.4	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	-	-
207	2026	土師器	杯	-	SK	2018	-	-	-	(10.0)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面），煤付着（内面）	-
206	2027	土師器	杯	-	SK	2018	-	(13.4)	3.6	(9.0)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	-	48
207	2028	土師器	杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	13.4	4.0	10.1	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤彩（内外面）	48
207	2029	土師器	杯	-	SK	2018	-	13.8	3.7	8.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	赤彩（内外面）	48
207	2030	土師器	杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	12.0	3.4	4.2	回転による暗文	回転による暗文	回転による暗文	回転による暗文	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	48
206	2031	土師器	杯	-	SK	2018	埋土	11.2	3.6	7.5	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	焼きむら（内器面一部）	48
206	2032	土師器	杯	-	SK	2018	-	14.1	4.1	10.05	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黒斑（外面・外底面）	48
207	2038	土師器	甕	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	にぶい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR6/6	-	-
207	2041	土師器	甕	-	SK	2018	-	(25.0)	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ消し	-	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹﾞﾘ	-	明赤褐 5YR5/6	灰黄褐 10YR4/2	赤彩（内面口縁部・外面）	48
207	2042	土師器	甕	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	-	-	10.5	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹﾞﾘ	ﾍﾗｹﾞﾘ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/3	煤付着（内外面）	48
206	2044	須恵器	杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	13.5	4.6	8.9	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	-	48
207	2045	須恵器	杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	(14.4)	3.2	(10.3)	回転ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	-	-
206	2046	須恵器	高台付杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄ内	(14.4)	3.9	(9.5)	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	貼り付け高台	48

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
206	2047	須恵器	高台付杯	-	SK	2018	ｶﾏﾄﾞ内	16.6	4.9	11.6	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	N6/1,褐灰7.5YR4/1,暗赤灰7.5YR3/1	褐灰 7.5YR5/1	付着物（内面），貼付け高台	48
207	2054	須恵器	高台付椀	-	SK	2018	-	-	-	(9.8)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗灰黄 2.5Y4/2	暗灰黄 2.5Y5/2	貼り付け高台	-
209	2183	土師器	杯	-	SK	2019	中～下層1層	(16.15)	4.6	(9.5)	回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/3	-	-
209	2184	土師器	杯	-	SK	2019	2層	-	-	(10.2)	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	赤彩（内外面）	48
209	2185	土師器	高台付杯	-	SK	2019	1層	(14.2)	4.1	(9.15)	回転ﾅﾃﾞ・回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ切り後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	赤彩（内面），貼付け高台	-
216	2197	土師器	杯	J-16･17	-	-	包4層	-	-	-	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	墨書	-
216	2222	須恵器	長頸壷	調査区西側	-	-	3層	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・波状文	-	回転ﾅﾃﾞ	-	灰 10Y4/1	灰 5Y5/1	-	-

表３　Ⅰ区　縄文土器観察表

挿図番号	番号	器種	出土地点		法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
			グリッド	層位	口径	器高	底部径	外器面	外底面	内器面	内底面	外面	内面		
181	553	深鉢	Q・R-3・4	包4層	-	-	-	条痕後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾐｶﾞｷ		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YT6/4	-	-
-	556	深鉢	O・P-5・6	-	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	にぶい黄橙 2.5YR6/4	浅黄橙 2.5YR7/4	口縁部に沈線	42
181	718	深鉢	M・N-1・2	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ・貝殻条痕	-	ﾅﾃﾞ	-	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR4/4	-	42
-	719	深鉢	M・N-1・2	-	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部に沈線	42
-	889	浅鉢	M・N-7・8	-	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部に沈線	42
-	890	浅鉢	O・P-7・8	-	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR5/3	-	42
181	916	浅鉢	M・N-1・2	3層掘り下げ	-	-	-	ﾐｶﾞｷ・沈線	-	ﾐｶﾞｷ	-	黒 7.5Y2/	黒 7.5Y2/	-	42
181	917	浅鉢	M・N-1・2	3b層掘り下げ	-	-	-	ﾐｶﾞｷ・沈線	-	ﾐｶﾞｷ	-	灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y4/2	黒 N1.5/	-	42
-	918	浅鉢	J-8・9	-	-	-	-	ﾐｶﾞｷ	-	ﾐｶﾞｷ	-	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR4/2	口縁部に沈線	42

表４　Ⅰ区　輸入陶磁器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量（cm）			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
55	35	白磁	高台付皿	-	Ⅲ-1	-	ST	040	完形	10.5	2.9	4.6	ｶﾝﾅ削り	ｹｽﾞﾘ出し高台	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	見込み部分に釉を掻き取る	灰白	10Y8/1	体部外面下位底部まで施釉	3
55	36	白磁	大椀	-	Ⅴ-4c	-	ST	040	完形	18.7	7.6	6.7	縦ﾍﾗ花弁文	ｹｽﾞﾘ出し高台	櫛目文	櫛目文・見込みに沈線	灰白	1.2Y7.5/1.6	貫入有	3
55	37	白磁	椀	-	Ⅱ-5	-	ST	040	完形	16.0	6.5	6.8	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	3.6GY8.0/0.9	口縁は玉縁状に胞厚する	3
-	1201	白磁	馬上杯	-	-	K･L 延長	-	-	体部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	2.2Y8.0/1.5	-	12
-	1205	白磁	皿	-	森田 D	-	SP	013	底部	-	-	-	-	施釉	-	-	灰白	10Y8/1	目跡痕跡	8
133	1211	白磁	四耳壺	-	Ⅲ	-	SE	247	口縁	(10.8)	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	8
-	1212	白磁	椀	-	Ⅴ-2b	-	-	-	口縁～体部	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	櫛目文	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	内面に櫛花弁文	6
144	1219	白磁	皿	-	Ⅲ-2	-	SX	004	口縁～底部	(9.9)	(4.3)	2.5	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	-	灰白	10Y8/1	-	6
-	1220	白磁	椀	-	Ⅵa	-	SE	177	底部	-	(5.4)	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	-
-	1222	白磁	椀	-	Ⅳ-1a	-	SE	247	底部	-	(8.0)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	5
-	1223	白磁	椀	-	Ⅷ	-	SE	247	底部	-	(6.6)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	釉をに輪状に掻き取る	灰白	6.8Y7.0/0.9	-	-
161	1225	白磁	皿	-	Ⅴ-2a	東側延長	-	-	口縁～底部	(10.2)	(3.5)	2.8	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	口縁部は横に屈折，無文	7
-	1228	白磁	椀	-	Ⅱ-3 × 4	-	SX	004	底部	-	(5.4)	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	3.6GY8.0/0.9	体部外面下半・底部には施釉無	-
-	1239	白磁	椀	-	Ⅳ-1a	-	SE	247	口縁～底部	(16.0)	(6.8)	(6.4)	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	1.3Y7.8/2.7	口縁部は玉縁状に胞厚，貫入有	5
-	1433	白磁	壺×水注	-	Ⅲ	-	SE	049	体部	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰白	4.0GY7.7/0.5	-	-
-	1434	白磁	椀	-	Ⅴ-2b?	-	SD	046	底部	-	(5.2)	-	縦ﾍﾗ文	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	-	灰白	3.6GY8.0/0.9	体部外面下半，底部には施釉無	-
-	1435	白磁	椀	-	{Ⅴ}×Ⅵ	-	SD	046	底部	-	(6.2	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	体部外面下半，底部には施釉無	-
-	1436	白磁	四耳壺	-	Ⅲ	-	SD	046	横耳	長さ 3.3	幅 1.3	-	-	-	-	-	灰白	6.8Y7.0/0.9	-	-
-	1437	白磁	皿	-	Ⅲ-1	-	SD	611	底部	-	(5.0)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	釉をに輪状に掻き取る	灰白	6.8Y7.0/0.9	-	-
-	1438	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SE	247	口縁	(16.0)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	-
-	1439	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SE	247	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
-	1440	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SE	247	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	9.6GY7.8/0.1	-	-
-	1441	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SE	247	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	-
-	1444	白磁	椀	-	Ⅱ	-	SE	066	体部～底部	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	5.7P7.6/0.5	高台一部に施釉	6
-	1445	白磁	椀	-	Ⅱ	-	SE	066	底部	-	6.6	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	9.7YR8.5/2.2	胎土に黒色粒	-
-	1446	白磁	皿	-	Ⅵ-2b	-	SP	013	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	-

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1447	白磁	皿	-	Ⅲ-1	-	SP	013	底部	-	-	-	-	-	-	見込み部分に釉を掻き取る	灰白	3.7GY7.0/1.1	-	-
-	1448	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SX	004	口縁	-	-	-	下半施釉無	-	-	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	小形の玉縁，釉表面に気泡有	-
-	1449	白磁	椀	-	Ⅱ-3×4	-	SX	004	体部～底部	-	(5.4)	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	1.3Y7.8/2.7	体部外面下半・底部には施釉無	-
-	1450	白磁	皿	-	Ⅲ-1	-	SE	247	底部	-	(4.8)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	釉をに輪状に掻き取る	灰白	3.6GY8.0/0.9	-	7
-	1451	白磁	椀	-	Ⅳ-1a	-	SE	247	体部～底部	-	(6.6)	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	1.6GY7.3/1.1	体部外面下半，底部施釉無	5
-	1452	白磁	椀	-	Ⅴ-4b	-	SE	247	口縁～体部	(16.0)	-	-	-	-	-	-	灰白	9.6GY7.8/0.1	貫入有，無文	-
-	1453	白磁	椀	-	Ⅷ	-	SE	247	底部	-	-	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	釉をに輪状に掻き取る	灰白	1.6GY7.3/1.1	高台はⅥ・Ⅷ類と類似する	-
-	1454	白磁	椀	-	Ⅴ	-	SD	041	底部	-	(6.8)	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ出し高台	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	6
142	1555	白磁	椀	-	Ⅱ-1a	-	SD	041	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	8.5YR7.9/1.6	小さな玉縁，無文	5
-	1556	白磁	椀	-	Ⅰ-1a	-	SD	041	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	小さな玉縁，無文	5
-	1557	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SD	041	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰白	10Y8/1	-	5
-	1558	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SD	041	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰白	10Y8/1	-	5
-	1559	白磁	椀	-	Ⅳ	-	SD	041	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	灰白	10Y8/1	-	5
-	1560	白磁	椀	-	Ⅴ	-	-	-	底部	-	-	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	櫛目文	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	高台に一部施釉	5
-	1561	白磁	椀	-	Ⅴ-4a	-	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	無文	-
161	1562	白磁	椀	-	Ⅴ-4b	K･L-10･11	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	櫛目文	-	灰白	526GY7.2/1.4	内面に短い櫛目文	6
-	1563	白磁	小壺	-	Ⅱ	-	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	5.4Y8.1/1.1	-	8
-	1564	白磁	小壺	-	Ⅱ	K･J-7･8	-	-	体部	-	-	-	-	-	上面に施釉	-	灰白	10Y8/1	-	8
-	1565	白磁	小壺	-	Ⅲ	K･L-7･8	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	-
-	1566	白磁	水注	-	Ⅲ	K･L-5･6	-	-	把手	長さ2.9	幅2.4	-	-	-	-	-	灰白	4.0GY7.7/0.5	肩に四つの横耳の一部	-
-	1567	白磁	壺	-	Ⅲ	I･J-5･6	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
-	1568	白磁	椀	-	Ⅶ	排土	-	-	底部	-	(6.0)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	見込に沈線	灰白	1.6GY7.3/1.1	高台に一部施釉	-
-	1569	白磁	皿	-	Ⅴ	I･J-3･4	-	-	底部	-	-	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	-
-	1570	白磁	皿	-	Ⅴ	M･N-7･8	-	-	底部	-	(3.4	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	-
-	1571	白磁	皿	-	Ⅴ	G･H-5･6	-	-	底部	-	(4.4)	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	見込に沈線	灰白	3.6GY8.0/0.9	-	-
-	1572	白磁	皿	-	Ⅴ	I･J-5･6	-	-	底部	-	(3.4)	-	-	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	見込に沈線	灰白	9.7YR8.5/2.2	-	-
-	1573	白磁	皿	-	Ⅸ-1	G･H-5･6	-	-	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	3.7GY7.0/1.1	-	7
-	1574	白磁	皿	-	Ⅸ-1	排土	-	-	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	にぶい黄橙	5.7P7.6/0.5	-	7
-	1575	白磁	皿	-	Ⅸ-1	I･J-3･4	-	-	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	5.7P7.6/0.5	-	7
-	1576	白磁	皿	-	Ⅸ-1	-	-	-	底部	-	-	-	-	施釉	-	-	灰白	10Y8/1	-	7
-	1577	白磁	皿	-	Ⅲ-1	G･H-7･8	-	-	底部	-	(4,6)	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	釉を輪状に掻き取る	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	7

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1578	白磁	皿	-	Ⅲ-1	G･H-5･6	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	釉をに輪状に掻き取る	-	灰白	2.5GY8/1	外面体部中まで施釉	7
-	1579	白磁	皿	-	Ⅲ-1	G･H-5･6	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	釉をに輪状に掻き取る	-	灰白	2.5GY8/1	外面体部中まで施釉	7
-	1580	白磁	皿	-	Ⅸ-2	M･N-1･2	-	-	底部	-	(5.2)	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	5.7P7.6/0.5	-	7
-	1581	白磁	皿	-	Ⅸ	K･L-1･2	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	3.6GY8.0/0.9	端部口禿げ	-
-	1582	白磁	皿	-	Ⅸ	K･L-5･6	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	3.6GY8.0/0.9	端部口禿げ	-
-	1583	白磁	皿	-	Ⅸ	I･J-1･2	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	3.6GY8.0/0.9	端部口禿げ	-
-	1584	白磁	皿	-	Ⅸ	I･J-5･6	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	3.6GY8.0/0.9	端部口禿げ	-
-	1585	白磁	皿	-	Ⅷ 1b	O･P-7･8	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	見込に沈線	灰白	1.6GY7.3/1.1	-	-
-	1586	白磁	皿	-	Ⅷ-1b	排土	-	-	口縁～底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	1.6GY7.3/1.1	内面見込にﾍﾗ描きで草花文	-
-	1587	白磁	皿	-	Ⅱ-1a	-	SE	066	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
-	1588	白磁	皿	-	Ⅱ-1a	-	SX	004	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
-	1589	白磁	皿	-	Ⅱ-1a	G･H-3･4	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
-	1590	白磁	皿	-	Ⅱ-1a	N-3	-	-	口縁～底部	-	-	-	-	-	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	-	-
-	1603	白磁	合子	-	-	K･L-5･6	-	-	蓋	-	-	-	ﾍﾗか櫛目文様	-	施釉無	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	1604 の身とｾｯﾄ	8
-	1604	白磁	合子	-	-	M･N-11･12	-	-	身	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	-	8
-	1612	白磁	皿	-	Ⅵ-2b	-	SE	066	底部	-	(4,0)	-	-	掻き取り	-	-	灰白	10Y8/1	内底面に有文	-
-	1613	白磁	椀	-	Ⅳ-1b	-	SD	041	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	見込に沈線	灰白	10Y8/1	口径が小さい中形椀	-
-	1614	白磁	小椀	-	Ⅱ	-	SD	041	底部	-	-	-	-	掻き取り	-	-	灰白	10Y8/1	貫入有	6
-	1615	白磁	椀	-	Ⅳ-1a	-	SD	046	底部	-	6.8	-	-	ｹｽﾞﾘ出し高台	-	-	灰白	10Y8/1	-	-
161	1636	白磁	水注×壺	-	Ⅱ	G･H-5･6	-	-	鳳首部	-	-	-	ﾍﾗ刻文	-	-	-	灰白	1.6Y7.2/1.9	鳳首瓶(水注か?)	4
161	1637	白磁	水注×壺	-	Ⅱ	I･J-3･4	-	-	鳳首部	-	-	-	ﾍﾗ刻文	-	-	-	灰白	1.6Y7.2/1.10	鳳首瓶(水注か?)	4
161	1638	白磁	水注×壺	-	Ⅱ	K･L-5･6	-	-	頸部	-	-	-	ﾍﾗ刻文	-	-	-	灰白	1.6Y7.2/1.11	鳳首瓶(水注か?)	4
161	1190	青磁	合子	越州窯	Ⅰ	P･Q-3･4	-	-	完形(身)	4.6	5.35	2.3	合せ目に目跡	目跡有	-	-	灰白	4,7YR6.9/0.6	-	-
161	1191	青磁	水注	越州窯	Ⅲ	L-3･4	-	-	体部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4,7YR6.9/0.6	文様有	-
-	1192	青磁	水注	越州窯	Ⅰ	K･L-7･8	-	-	把手	幅 2.8	長さ 1.5	-	-	-	-	-	灰白	4,7YR6.9/0.6	-	-
-	1218	青磁	椀	越州窯	Ⅰ-5	I･J-3･4	-	-	体部～底部	-	(7.0)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・平底・目跡	-	目跡有	灰白	6.8Y7.0/0.9	体部外面下位に施釉無	9
161	1224	青磁	水注	越州窯	Ⅱ	M･N-11･12	-	-	頸～体部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	7.3YR7.2/1.9	-	-
-	1231	青磁	椀	越州窯	Ⅱ-2	-	-	-	底部	-	(7.0)	-	-	ﾍﾗﾅﾃﾞ・目跡有	-	目跡有	灰白	6.8Y7.0/0.9	円盤状高台，体部外面中位から下位施釉無	10
161	1233	青磁	椀	越州窯	Ⅰ-2ウ	M-1･2	-	-	体部～底部	(19.8)	(9.7)	6.8	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄色	7.3YR7.2/1.9	高台部外側を斜にｶｯﾄ	9
-	1234	青磁	椀	越州窯	Ⅰ-5	Q･R	-	-	底部	-	(7.2)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・平底・目跡	-	目跡有	にぶい黄橙	4.2YR7.2/2.8	体部外面下位施釉無	-

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1236	青磁	椀	越州窯	I-27×(イ)	-	SE	247	底部	-	(8.0)	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	細い目跡が輪状に並ぶ	黄灰	7.15.8/2.8	輪状高台	8
161	1238	青磁	椀	越州窯	I -5	M·N	-	-	口縁～底部	(16.3)	7.2	5.9	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・平底・目跡	-	目跡有	浅黄色	7.3YR7.2/1.9	体部外面下位施釉無	9
-	1401	青磁	椀	越州窯	I -5	-	SE	247	口縁～底部	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	-	-	灰白	6.8Y7.0/0.9	体部外面下位施釉無	10
-	1402	青磁	小椀	越州窯	I -2	-	SE	247	底部	-	(4.6)	-	-	-	-	-	浅黄	2.3Y6.9/4.5	輪状高台	10
-	1403	青磁	大椀	越州窯	I -2ゥ?	-	SD	009	口縁	(14.2)	-	-	-	-	-	-	灰白	7.3YR7.2/1.9	-	-
-	1404	青磁	椀	越州窯	I -1a	-	ST	040	底部	-	-	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	重ね焼きの目跡無	灰白	6.8Y7.0/0.9	蛇の目高台	-
-	1405	青磁	椀	越州窯	II 1b × II 2a	-	SD	041	底部	-	(7.2)	-	-	-	-	-	灰白	5.5Y7.4Y1.4	胎土中に黒色の斑点，円盤状高台の外周近くに段上の線有，外器面高台まで施釉及ばない	-
-	1406	青磁	椀	越州窯	I -1	-	SD	041	底部	-	(6.0)	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	重ね焼きの目跡無	灰白	7.3YR7.2/1.9	蛇の目高台	-
-	1407	青磁	椀	越州窯	I -5	-	SD	041	底部	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・平底・目跡	-	目跡有	灰白	1.1Y5.1/7.6	体部外面下位施釉無	-
-	1408	青磁	椀	越州窯	I -2ゥ	-	SD	043	底部	-	(8,0)	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄色	7.3YR7.2/1.9	高台部外側を斜めにｶｯﾄ	-
-	1409	青磁	杯	越州窯	II	-	SD	112	底部	-	-	-	-	平底	-	目跡有	灰	5Y8/1	体部外面上半に化粧有	-
-	1410	青磁	杯	越州窯	I -3	排土	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	7.3YR7.2/1.9	-	-
-	1411	青磁	皿	越州窯	I	M·N-5·6	-	-	底部	-	-	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄	2.3Y6.9/4.5	輪状の角高台	-
-	1412	青磁	皿	越州窯	I	-	-	-	底部	-	-	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄	2.3Y6.9/4.5	輪状の角高台	-
-	1413	青磁	皿	越州窯	I	K·L-5·6	-	-	底部	-	-	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄	2.3Y6.9/4.5	輪状の角高台	-
-	1414	青磁	壺	越州窯	I	G·H-7·8	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	8.1Y5.0/1.3	-	-
-	1415	青磁	壺	越州窯	I	I·J-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	7.3YR7.2/1.9	-	-
-	1416	青磁	壺	越州窯	I	O·P-3·4	-	-	頸部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4,7YR6.9/0.6	-	-
-	1417	青磁	壺×水注	越州窯	III	K·L-5·6	-	-	底部	-	-	-	-	高台端部外面に面取りの削り	-	-	灰白	4.0GY7.7/0.5	-	-
161	1418	青磁	合子×香炉	越州窯	I	I·J-4·5	-	-	蓋	-	-	-	-	-	口縁に目跡有	-	にぶい黄橙	4,7YR6.9/0.6	底部外面施釉無	-
-	1419	青磁	皿	越州窯	I -2b	Q·R	-	-	体部～底部	-	(6.6)	-	縦ﾍﾗ文	高台外周に目跡	-	-	浅黄色	0.5Y4.4/4.4	重ね焼き	-
161	1420	青磁	椀	越州窯	I -1a	Q·R	-	-	口縁～底部	(15.1)	(6.25)	4.5	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	施釉後高台畳付釉を削取る	-	-	灰白	8.1Y5.0/1.3	蛇の目高台	8
-	1421	青磁	椀	越州窯	I -5	K·L-9·10	-	-	底部	-	(8.8)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・平底・目跡	-	目跡有	灰白	7.3YR7.2/1.9	体部外面下位施釉無	-

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1422	青磁	椀	越州窯	Ⅱ-2	-	-	-	底部	-	-	-	-	ﾍﾗﾅﾃﾞ	-	目跡有	灰白	6.8Y7.0/0.9	円盤状高台，体部外面中位から下位施釉無	-
-	1423	青磁	椀	越州窯	Ⅱ-2	K·L-1·2	-	-	底部	-	-	-	-	ﾍﾗﾅﾃﾞ	-	目跡有	灰白	6.8Y7.0/0.9	円盤状高台，体部外面中位から下位施釉無	-
-	1424	青磁	椀	越州窯	Ⅱ-2	M·N-9·10	-	-	底部	-	(6.0)	-	-	ﾍﾗﾅﾃﾞ	-	目跡有	灰白	6.8Y7.0/0.9	円盤状高台，体部外面中位から下位施釉無	-
-	1425	青磁	椀	越州窯	Ⅱ-2a	I·J-9·10	-	-	体部～底部	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	目跡有	灰黄	6.8Y7.0/0.9	輪状高台	9
-	1426	青磁	椀	越州窯	Ⅱ	I·J	-	-	底部	-	(8.2)	-	-	目跡	-	目跡有	浅黄色	7.3YR7.2/1.9	輪状高台，胎土中に黒色の斑点含む	10
-	1427	青磁	椀	越州窯	Ⅰ-2ウ	I·J-9·10	ST	040	底部	-	(9.2)	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	灰白	5.5Y7.4Y1.4	-	-
-	1428	青磁	椀	越州窯	Ⅰ-2ウ	I·J 延長	-	-	底部	-	-	-	-	施釉後高台畳付釉を削取る	-	目跡有	浅黄色	7.3YR7.2/1.9	高台部外側を斜めにｶｯﾄ	-
-	1160	青磁褐彩	壺	越州窯	Ⅱ	I·J-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	5.4YR4.3/7.1	-	-
-	1161	青磁褐彩	壺	越州窯	Ⅱ	I·J-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	5.4YR4.3/7.1	-	-
-	1162	青磁褐彩	壺	越州窯	Ⅱ	K·L-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	2.8Y3.8/3.6	-	-
-	1163	青磁褐彩	壺	越州窯	Ⅱ	K·L-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	2.8Y3.8/3.6	-	-
-	1170	黄釉褐彩	壺×水注	長沙窯	-	-	SD	135	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	1.07.12.7, 5.4YR4.3/7.1	全面貼付け文様	10
-	1189	黄釉褐彩	合子	長沙窯	-	-	-	-	口縁	-	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	灰白	7.5YR	-	10
-	1599	黄釉褐彩	合子	長沙窯	-	G·H-5·6	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	8.5YR3.5/4.2	-	10
-	1159	青磁褐彩	水注？	長沙窯	Ⅱ	I·J-9·10	-	-	破片	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	5.4YR4.3/7.1	-	-
-	1130	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	I·J-3·4	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	劃花文様	-	灰	8.0Y7.0/0.5	貫入有	11
-	1606	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	I·J-5·6	-	-	口縁	-	-	-	-	-	劃花文様	-	灰	7.7Y7.0/0/7	貫入有	11
-	1607	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	I·J-3·4	-	-	体部	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	劃花文様	-	灰	8.0Y7.0/0.5	貫入有	11
-	1608	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	M·N-1·2	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	劃花文様	-	灰	8.0Y7.0/0.5	貫入有	11
-	1609	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	G·H-5·6	-	-	口縁	-	-	-	-	-	劃花文様	-	灰	7.7Y7.0/0/7	貫入有	11
-	1610	青磁	椀	龍泉窯	Ⅰ-2	ｶｸﾗﾝ	-	-	口縁	(16.0)	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	劃花文様	-	灰	8.0Y7.0/0.5	貫入有	11
-	1135	青磁	皿	同安窯	Ⅰ-2b	-	-	-	底部	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	櫛点描文	灰白	8.0Y7.0/0.5	-	11
-	1136	青磁	皿	同安窯	Ⅰ-2b	K·L-5·6	-	-	底部	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	ﾍﾗによる文様・櫛点描文	灰白	0.2GY7.0/1.1	-	11
-	1137	青磁	皿	同安窯	Ⅰ-2b	排土中	-	-	底部	-	-	-	-	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	ﾍﾗによる文様	灰白	0.2GY7.0/1.1	-	11
161	1188	青白磁	小壺	-	-	I·J-3·4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	型押し成形	11

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1596	青白磁	合子	-	-	G･H-5･6	-	-	身	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	-	11
-	1597	青白磁	合子	-	-	西側	-	-	身	-	-	-	-	-	-	-	灰白	3.1B5.9/3.5	-	11
-	1598	青白磁	合子	-	-	-	-	-	身	-	-	-	-	-	-	-	灰白	0.5B7.2/1.7	側面に菊弁文	11
-	1600	青白磁	小壺	-	-	-	SD	896	身	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	-	11
-	1601	青白磁	瓶×壺	-	-	G･H-5･6	-	-	体部	-	-	-	施釉	-	施釉	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	外器面にヘラ文様	-
-	1602	青白磁	小壺	-	-	K･L-1･2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	-	11
-	1605	青白磁	杯	-	森田 B'	I･J-5･6	-	-	口縁	-	-	-	口縁を釉剥	-	口縁を釉剥	-	灰白	4.5BG8.2/2.5	内面に型打ちの文様有	11
-	1621	青白磁	合子	-	-	-	SE	247	身	(5.6)	-	-	-	-	口縁を釉剥	-	灰白	7.5YR3/3	側面に菊弁文，口に縁有，甲に草花	11
-	1641	青白磁	瓶×壺	-	-	M･N-5･6	-	-	体部	-	-	-	施釉	-	施釉	-	灰白	5.5G8.2/1.4	外器面にヘラ文様	-
-	1611	青花	椀	-	-	-	SD	610	体部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	9.6GY7.8/0.1	景徳鎮窯系	12
-	1194	青花	椀	-	-	-	-	-	底部（やや小形）	-	-	-	-	二重の圏線有	-	-	灰白	（釉）10YR8/1 （染付）5.1BG2.8/2.2	小野 B 群，内底に唐草文様	-
-	1179	陶器	盤	-	Ⅰ-b	-	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	-	1180 と同一個体か，内定面に鉄絵	-
-	1180	陶器	盤	-	Ⅰ-b	-	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	-	内底面に鉄絵	-
-	1429	陶器	壺	-	Ⅳ	-	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	10YR3.2/2.9	-	-
133	1442	陶器	盤	-	Ⅰ-1	-	SE	247	口縁	(31.0)	-	-	-	-	-	-	灰黄褐	7.6Y7.6/5.3	-	12
-	1443	陶器	盤	-	Ⅰ-1	-	SE	247	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	5.5P7.7/0.3	-	12
161	1632	陶器	茶入れ	-	-	K･L-3･4	-	-	口縁	(2.8)	-	-	-	-	-	-	黒褐	3.5Y2.3/1.4	13c ～ 14c 前半	-

表５　Ⅱ　区輸入陶磁器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
187	2224	白磁	皿	-	Ⅴ-1a	-	SI	2002	底部	-	(5.4)	-	-	-	-	見込に沈線	灰白	8.7P7.7/0.4	内外面施釉，気泡多し	-

表６　Ⅰ区　国産陶器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	種別	遺構		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1125	緑釉	椀×皿	防長×洛北	-	-	SP	830	体部	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	1.8GY7.6/4.4	緑彩	13
-	1121	緑釉	椀	洛北	-	K・L-9・10	-	-	口縁～体部	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	1.8GY7.6/4.4	-	14
162	1127	緑釉	皿	東海×洛西	-	-	-	-	口縁～体部	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	3.5G6.2/2.4	-	13
-	1144	緑釉	椀	近江	-	-	SD	112	底部	-	-	-	-	-	見込みに沈線	貼り付け高台・糸切り	灰白	5.4Y3.7/2.8	底部に釉無,10c後～11c,他濃緑	13
-	1148	緑釉	椀×皿	洛西	-	M・N-9・10	-	-	底部	-	5.6	-	-	施釉なし	-	削り出し高台	灰白	1.8GY7.6/4.4	赤彩?(底部),重ね焼き	-
162	1173	緑釉	椀×皿	洛西？	-	I・J-5・6	-	-	底部	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	削り出し高台か？	にぶい黄橙	9.8GY6.1/3.3	ﾍﾗ花文様	-
162	1240	緑釉	皿	洛北	-	R-9	-	-	ほぼ完形	14.6	6.4	3.0	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	1.8GY7.6/4.4	ﾍﾗ記号（底部）	-
162	1591	緑釉	皿	東海	K14×(90)	Q・R-11・12	-	-	口縁	(15.2)	(7.1)	2.6	回転ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	-	-	灰白	3.5G6.2/2.4	-	13
-	1592	緑釉	椀×皿	洛北	-	I・J-3・4	-	-	口縁	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	-	-	-	灰白	1.8GY7.6/4.4	-	-
-	1593	緑釉	椀×皿	防長	-	Q-8	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	2.3G6.5/3.8	-	14
-	1594	緑釉	椀×皿	洛西	-	I・J-5・6	-	-	底部	-	-	-	-	-	-	貼り付け高台・糸切り	灰黄褐	8.8Y3.4/2.2	-	14
-	1595	緑釉	皿	防長	-	-	-	-	口縁	(12.0)	-	-	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	1.8GY7.6/4.4	全施釉	-
-	1640	緑釉	皿？	東海		G・H-3・4			底部						ﾐｶﾞｷ	糸切り	灰ｵﾘｰﾌﾞ	1.1G5.4/2.2		-
-	1642	緑釉	椀×皿	洛西		G・H-7・8			底部								灰黄	2.0GY5.4/2.1		-
-	1643	緑釉	椀×皿	洛西		I・J-1・2			底部								灰黄	8.8Y3.8/2.7		-
-	1158	灰釉	壺	猿投産	-	G・H	-	-	底部	-	(8.8)	-	-	-	-	糸切り	灰黄	6.8Y7.0/0.9	底部に釉無	14
-	1639	灰釉	卸皿	瀬戸			SD	011	口縁								浅黄	1.6Y7.2/1.9		14
-	1153	陶器	壺？甕？	常滑	-	K・L-9・10	-	-	体部	-	-	-	-	-	-	-	灰白	4.0Y6.1/3.2	-	-
-	1213	京焼風陶器	椀	肥前	-	-	SD	010	底部	-	3.2	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	削り出し高台	浅黄橙	(釉)7.0YR7.9/3.7 (染付)3.8YR5.6/2.8	体部外面中位は施釉無	-
-	1168	三彩陶器	？	不明	-	排土	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	浅黄橙	-	全面化粧有,剥落気味	12
-	1185	陶器	卸皿	瀬戸	-	両側ｶｸﾗﾝ	-	-	破片	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	見込にﾍﾗで格子状に卸目を入れる	-	浅黄	1.6GY7.3/1.1	-	14
-	1186	陶器	卸皿	瀬戸	-	G・H-5・6	-	-	破片	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ	見込にﾍﾗで格子状に卸目を入れる	糸切り	灰白	5.7P7.6/0.5	体部内外面と見込に薄い灰釉を掛ける	14
-	1430	陶器	天目茶碗	瀬戸	-	G・H-5・6	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	8.5YR3.5/4.2	内外面に光沢有	12
-	1156	磁器	壺？	-	A×B群	-	SD	009	破片	-	-	-	-	-	-	-	灰白	0.1Y4.0/3.6	-	-
-	1154	陶器	盤	-	Ⅰ-2類	表土	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	5.2Y7.1/2.9	内面に光沢有	12
-	1199	陶器	小型壺	-	-	-	SK	067	口縁	7.0	-	-	-	ﾅﾃﾞ	-	-	灰白	5.4Y8.1/1.1	体部外面中位から下位施釉無	-
-	1432	陶器	鉢	-	Ⅵ類	G・H-7・8	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄橙	0.1Y4.0/3.6	-	-

表７　Ⅰ区　金属製品観察表

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量 (cm/g)				備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重量		
-	1105	鉄製品	鉄鎌	-	SD	361	上層	13.3	3.2	0.4	64.8	-	41
158	1091	鉄製品	鉄鎌	-	SD	896	下層	19.3	4.2	0.3	74.9	-	32
-	1097	鉄製品	鉄鎌	Q・R-7・8	-	-	-	10.6	4.2	0.9	52.0	-	41
179	1103	鉄製品	鉄鎌	M・N-9・10	-	-	-	15.7	0.4	3.0	57.6	-	41
179	1095	鉄製品	包丁？	O-13	-	-	3層	13.3	3.0	0.5	46.4	-	41
179	1107	鉄製品	鋤先	J-8・9	-	-	3層	16.3	5.2	0.6	285.2	-	41
180	1092	鉄製品	鉄斧	K・L-7・8	-	-	3b層堀り下げ	7.1	4.3	1.2	109.8	-	41
36	1094	鉄製品	刀子	-	SI	086	2層	8.4	1.2	0.2	6.4	-	41
41	1099	鉄製品	刀子	-	SI	088	-	11.8	0.9	0.5	13.8	-	41
-	1102	鉄製品	刀子	-	SD	1031	-	6.2	1.0	0.6	5.2	-	41
179	1101	鉄製品	鉄鏃	M・N-9・10	-	-	3層	8.5	1.4	0.5	12.8	-	41
138	1093	鉄製品	鉄鏃	-	SE	249	1層	9.2	2.1	0.6	21.8	有茎三角式	-
158	1104	鉄製品	鉄鏃	-	SD	265	上層	5.2	3.5	0.3	18.5	-	41
179	1096	鉄製品	鉄鏃	東側延長	-	-	-	8.0	2.5	0.5	13.1	方頭斧箭式	41
179	1100	鉄製品	鉄鏃	I・J-7・8	-	-	-	4.5	2.2	0.4	6.1	有茎凹基	41
157	1106	鉄製品	二又鏃	-	-	043	上層（西壁沿い）	14.5	3.5	0.5	25.5	-	41
55	1090	鉄製品	鉄刀	-	ST	040	-	27.2	8.5	0.4	106.9	椀の淵の痕跡	3
144	1111	鉄製品	紡錘車	-	SX	004	-	（最大軸径）0.7	4.1	-	9.4	-	34
133	1618	鉄製品	壺金具	-	SE	247	-	-	-	-	-	-	-
180	1616	鉄製品	-	K・L-9・10	-	-	-	-	-	-	-	-	-
179	1114	青銅品	釘	O・P-9・10	-	-	-	7.2	0.4	0.3	4.0	-	41
179	1313	青銅品	飾り	G・H-7・8	-	-	-	4.4	1.5	0.6	7.1	-	41
179	1109	青銅品	帯金具	J-8・9	-	-	-	4.5	3.3	0.2	11.5	-	41
179	1112	青銅品	鈴	-	-	-	-	3.0	2.6	0.2	24.0	-	41
179	1113	青銅品	鈴	-	-	-	-	3.0	2.5	0.1	5.8	-	41
134	1110	青銅品	不明	-	SE	247	埋土中	-	-	-	2.7	-	41

錠前・牡金具

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				残存状況	法量 (cm/g)					備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位		弦通し孔径	弦受け部長	区長	施錠部長	重量		
79	1620	古代	合田分類B群2類	-	SK	207	-	施錠部欠損	(0.4)	4.1	0.4	3.1	21.1	-	4
180	1635	古代	合田分類B群1類	Q・R-7・8	-	-	3層	施錠部欠損	(0.5)	4.1	0.6	1.3	24.3	-	4

表８　Ⅱ区　金属製品観察表

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量(cm/g)				備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重量		
-	2230	-	鉄滓	-	SE	2015	8層以下	-	-	-	20.2	-	50

表９　Ｉ区　木器観察表

挿図番号	番号	器種	出土地点				法量(cm)			木取り	備考	写真図版
			グリッド	種別	遺構	層位	全長	幅・径	厚さ			
127	1626	井戸枠	-	066	SE	-	73.4	75.4	2.6	-	-	-
127	1627	井戸枠	-	066	SE	-	78.4	55.6	2.6	-	-	-
127	1628	井戸枠	-	066	SE	-	78.6	67.8	2.7	-	-	-
128	1629	井戸枠	-	066	SE	-	65.6	75.4	2.2	-	-	-
128	1630	杭	-	066	SE	-	39.8	3.7	3.7	芯うち丸木	井戸枠の補助杭	-
128	1631	杭	-	066	SE	-	29.7	4.3	4.0	芯うち丸木	井戸枠の補助杭	-
-	1625	板材	-	066	SE	埋土下層	22.2	5.9	0.8	-	-	-

表10　Ｉ区　石器・石製品観察表

石斧

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量(cm・g)				石材	備考	写真図版
			グリッド	種別	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重量			
176	587	磨製	J・K-7・8	-	-	-	12.7	4.7	2.9	240.8	蛇紋岩	-	43
-	749	磨製	-	SX	005	-	11.35	5.15	3	266.7	蛇紋岩	-	43
-	901	磨製	K･L－5･6	-	-	-	10.5	4.3	2.4	174.6	頁岩	敲き石として使用	43
176	743	打製	M・N-3・4	-	-	-	16.35	11.05	3.4	736	安山岩	-	43

砥石

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	幅	厚さ	重量			
134	591	磨製	-	SE	247	-	10.9	8.5	3.1	353	砂岩	-	28
-	602	磨製	-	SE	247		15.2	5.3	1.5	128	安山岩	全体的に研磨	28
115	877	磨製	-	SE	263	-	35	15	4.9	4226	砂岩	側面を使用	29
167	595	磨製	M・N-13	SP	850	-	10.7	3.4	0.9	51.2	結晶片岩	裏面をかなり使用	43

石鏃

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量（cm・g）							残存	石材	備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	幅	厚さ	重量	先端角度	抉り長	抉り幅				
160	584	打製	-	231	SD	上層	2.2	1.8	0.55	1.7	78°	−	−	完形	黒曜石	-	43
160	585	打製	O・P-7・8	-	-	1層	1.85	1.4	0.35	0.7	69°	0.4	0.9	完形	安山岩	-	43

滑石製品

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量（cm・g）					石材	備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	幅	厚さ	重量	孔径			
144	25	石鍋	-	004	SX	3層	-	-	-	-	-	滑石	-	-
146	81	石鍋	-	046	SD	埋土	-	-	-	-	-	滑石	-	-
122	95	石鍋	-	049	SE	2層	-	-	-	-	-	滑石	石鍋片の転用品	25
124	270	石鍋	-	066	SE	17層	-	-	-	-	-	滑石	-	25
124	271	石鍋	-	066	SE	2層	-	-	-	-	-	滑石	-	25
175	583	石鍋	Q.R-7・8	-	-	-	-	-	-	698	-	滑石	-	42
134	651	石鍋	-	247	SE	-	-	-	-	89.3	-	滑石	石鍋片の再加工	28
134	652	石鍋	-	247	SE	5.6層	-	-	-	92.7	-	滑石	石鍋片の再加工	28
84	658	石鍋	-	248	SK	-	-	-	-	226.3	-	滑石	-	-
165	849	石鍋（把手）	-	456	SP	-	-	-	-	-	-	滑石	-	32
-	742	蓋？	M・N-5・6	-	-	-	6.1	7.2	3.5	139.8	-	滑石	石鍋の再加工	42
169	502	分胴形	-	044	SX	-	11.9	7.2	1.9	274.5	-	滑石	-	34
144	24	不明	-	004	SD	3層	-	-	-	-	-	滑石	石鍋片の再加工	-
125	274	不明	-	066	SE	3層	-	-	-	-	-	滑石	-	-
-	744	不明	M・N-9・10	-	-	-	10.7	10.5	1.9	243.6	-	滑石	石鍋片の再加工	42
-	1084	不明	L-11	-	-	-	(6.0)	(2.2)	(1.1)	-	-	滑石	石鍋片の再加工	42

その他

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm・g）					石材	備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	長さ	幅	厚さ	重量	孔径			
134	586	-	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	-	SE	247	-	5.3	3.25	1.3	19.5	-	黒曜石	-	43
-	922	打製	敲き石	-	SE	049	-	16.1	7.7	4.9	567.8	-	安山岩	-	43
176	588	-	凹石	P-7	-	-	-	14.1	9.25	4.3	497.1	-	安山岩	-	43
-	1088	-	有孔石製品	S-5・6	-	-	包４層	5.3	4.5	2.7	82.2	-	安山岩	垂飾品か？	42

紡錘車

挿図番号	番号	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版
		グリッド	種別	遺構	層位	厚み	最大径	重量	穿孔径			
125	273	-	SE	066	３層	1.8	5.4	47.8	0.7	流紋岩	-	42
175	582	I・J-5・6	-	-	-	1.45	5.05	31.7	0.8	凝灰岩	-	42
175	895	K・L-7・8	-	-	-	1.4	3.4	19.1	0.6	凝灰岩	-	42
-	997	M・N-7・8	-	-	３層	1.3	1.4	21	0.6	凝灰岩	-	42
-	1086	S-5・6	-	-	包４層	1.4	1.5	21	0.8	溶結凝灰岩	-	42
-	1087	Q・R-9・10	-	-	３層	1.9	-	26.7	-	凝灰岩	-	42
-	1088	S-5・6	-	-	包４層	2.6	2.9	82.2	0.45	安山岩	-	42

玉類

挿図番号	番号	種別	器種	出土地点				法量（cm・g）				備考	写真図版
				グリッド	種別	遺構	層位	長さ	最大径	穿孔最大径	重さ		
-	1195	石製品	碁石	I・J-5	-	-	ﾄﾚﾝﾁ内堀下げ	2	厚み1.1	-	4.9	-	43
-	1196	石製品	碁石	-	SD	041	上層堀下げ	1.5	厚み0.6	-	1.4	-	43
-	1197	石製品	碁石	-	SE	066	-	1.8	厚み0.8	-	3.2	-	43
-	1198	石製品	碁石	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	-	-	-	1.9	厚み0.8	-	2.9	-	43
-	1321	ｶﾞﾗｽ製品	ｶﾞﾗｽ玉	M-11	-	-	１層	1.1	1.1	0.3	2.1	-	14
-	1322	石製品？	ﾋﾞｰｽﾞ？	O・P-11・12	-	-	３層	0.9	0.9	0.3	0.8	-	14

表 11　Ⅱ区　石器・石製品観察表

挿図番号	番号	器種	出土地点				法量（cm・g）				石材	備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	幅	厚さ	重量			
200	2127	磨石	-	SK	2009	下層	0.7	2.6	2.8	8.6	砂岩	-	-

表12　Ⅰ区　土製品観察表

玉類

挿図番号	番号	器種	出土地点				残存状況	法量（cm）				最大胴径	調整		成形	色調		備考	写真図版
			グリッド	種別	遺構	層位		幅	長さ	厚み	重量		瓦凸面	瓦凹面		表面	裏面		
-	1000	瓦玉	M・N-5・6	-	-	-	ほぼ完形	3.3	2.7	-	-	-	縄目	布目	打ち欠き	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	-	46
-	1001	瓦玉	-	-	-	-	ほぼ完形	2.2	-	-	-	-	縄目	布目	打ち欠き	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	-	46
-	1303	瓦玉	-	SD	043	-	ほぼ完形	-	-	-	-	-	縄目	布目	打ち欠き	-	-	-	46

その他土製品

挿図番号	番号	器種	出土地点				残存状況	法量（cm）				調整		成形	色調		備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位		幅	長さ	厚み	最大胴径	表面	裏面		表面	裏面		
122	622	円盤状土製品	-	SE	049	-	ほぼ完形	-	-	3.85	-	ﾅﾃﾞ	格子目ﾀﾀｷ	-	黄灰 2.5Y5/1	にぶい黄橙 10YR6/3	-	-
-	993	人面	I・J-5・6	-	-	包４層	頭部のみ	-	-	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	-	43
-	994	人面（力士）	表採	-	-	-	顔	-	-	-	1.9	-	-	手づくね	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	-	43
-	995	面子	K・L-5・6	-	-	-	ほぼ完形	幅 3.8	1.0	-	-	-	-	型押し	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	-	43
-	1302	面子	-	-	-	-	完形	-	-	-	-	ﾍﾗ切り	ﾅﾃﾞ	打ち欠き	-	-	土師器杯底部の転用	46
157	64	ﾒﾝｺ状土製品	-	SD	043	掘り下げ	ほぼ完形	-	6.4	-	-	平行ﾀﾀｷ	格子目ﾀﾀｷ	-	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	須恵器甕の転用	30
-	996	ﾒﾝｺ状土製品	K・L-9・10	-	-	３層	完形	-	3.7	-	-	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	-	明黄褐 2.5Y7/6	明黄褐 2.5Y7/6	-	46

紡錘車

挿図番号	番号	出土地点				法量 (cm)			調整		成形	色調		備考	写真図版
		グリッド	種別	遺構	層位	径	厚み	穿孔径							
-	978	M・N-11・12	-	-	-	(1.1)	6.8	0.8	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	-
-	979	I・J-3・4	-	-	-	-	4.7	-	ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	-	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	穿孔土器	42
-	980	G・H-7・8	-	-	-	-	-	-	ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	42
-	981	I・J-9・10	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	-	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	-	42
-	982	M・N-11・12	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	-	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	穿孔土器	42
-	983	M・N-11・12	-	-	-	-	-	-	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 10YR6/3	にぶい橙 10YR6/3	穿孔土器	42
-	984	L-9	-	-	-	-	-	-	ﾍﾗ切り離し	回転ﾅﾃﾞ・ ﾅﾃﾞ	-	にぶい橙 10YR6/3	にぶい橙 10YR6/3	穿孔土器	42

表13　Ⅰ区　土錘観察表

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量 (cm・g)				調整		備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	最大胴径	最大穿孔径	重量	内器面	外器面		
-	85	土製品	-	047	SD	-	4.3	2.0	0.8	15.6	-	ﾅﾃﾞ		46
-	1333	土製品	I・J-2・3	052	SI	-	3.9	0.6	0.4	4.4	-	ﾅﾃﾞ	-	46
149	229	土製品	I・J-1・2	057a	SD	3層	4.3	1.4	0.9	8.1	-	ﾅﾃﾞ		46
-	1340	-	-	071	SD	-	4.8	1.5	0.5	(8.0)	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1334	-	-	320	SD	-	3.9	1.7	0.7	(10.2)	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1029	土製品	Q・R-5・6	449?	SD	-	4.4	0.6	0.3	5.0	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1335	土製品	I・J-1・2	-	-	-	2.6	0.7	0.5	3.0	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1336	土製品	O・P-5・6	-	-	3層	5.4	2.3	0.9	24.2	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1337	土製品	M・N-3・4	-	-	3層	4.2	1.9	0.5	11.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1338	土製品	G・H-3・4	-	-	3層	5.5	2.0	0.5	14.0	-	ﾅﾃﾞ	胴部破損	46
-	1339	土製品	I・J-1・2	-	-	-	4.9	1.2	0.4	7.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1018	土製品	I・J-5・6	-	-	3b層	4.7	2.0	0.5	15.4	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1019	土製品	G・H-5・6	-	-	3層	3.3	1.4	0.5	6.2	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1020	土製品	G・H-5・6	-	-	3b層	5.9	-	1.6	-	-	ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ？	破損片	46
-	1021	土製品	K・L-7・8	-	-	-	3.2	1.8	0.5	6.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1022	土製品	I・J-5・6	-	-	3b層	3.8	1.2	0.3	5.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1023	土製品	G・H-5・6	-	-	3b層	4.4	-	0.8	-	-	ﾅﾃﾞ	破損片	46
-	1024	土製品	I・J-5・6	-	-	3b層	4.2	1.2	0.3	4.9	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1025	土製品	I・J-7・8	-	-	-	3.3	-	0.8	-	-	ﾅﾃﾞ	破損片	46
-	1026	土製品	K・L-7・8	-	-	3b層	5.6	-	1.2	-	-	ﾅﾃﾞ	破損片	46
-	1027	土製品	G・H-5・6	-	-	3b層	2.6	-	1.0	-	-	ﾅﾃﾞ	破損片	46

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量 (cm・g)				調整		備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	最大胴径	最大穿孔径	重量	内器面	外器面		
-	1028	土製品	K・L-5・6	-	-	-	3.9	-	0.8	-	-	ﾅﾃﾞ	破損片	46
-	1030	土製品	K・L-9・10	-	-	3層	4.3	1.5	0.4	8.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1031	土製品	G・H-5・6	-	-	3層	5.1	2.1	0.4	21.6	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1032	土製品	G・H-5・6	-	-	3層	4.4	1.5	0.5	7.7	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1033	土製品	K・L-7・8	-	-	3層	4.5	1.4	0.3	9.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1034	土製品	J・K-7・8	-	-	4層	4.4	1.3	0.3	6.3	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1035	土製品	M・N-5・6	-	-	3層	2.9	2.6	0.7	17.0	-	ﾅﾃﾞ・磨耗	-	46
-	1036	土製品	I・J-5・6	-	-	-	3.2	1.6	0.4	7.9	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1037	土製品	K・L-1・2	-	-	3b層	3.6	1.6	0.5	8.7	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1038	土製品	I・J-3・4	-	-	3b層	5.1	1.3	0.3	7.0	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1039	土製品	M・N-9・10	-	-	4層	3.7	1.1	0.3	3.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1040	土製品	M・N-9・10	-	-	3b層	5.0	1.7	0.4	13.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1041	土製品	M・N-1・2	-	-	3b層	3.9	2.0	0.5	11.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1042	土製品	L-11	-	-	4層	5.9	1.7	0.5	16.0	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1043	土製品	G・H-5・6	-	-	-	3.4	1.3	0.3	4.9	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1044	土製品	G・H-5・6	-	-	-	4.9	1.3	0.3	6.9	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1045	土製品	K・L-5・6	-	-	3層	3.7	1.1	0.4	3.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1046	土製品	I・J-7・8	-	-	3層	4.1	1.1	0.3	3.7	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1047	土製品	K・L-1・2	-	-	掘り下げ	3.0	0.7	0.5	5.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1048	土製品	G・H-5・6	-	-	-	3.6	1.2	0.3	4.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1049	土製品	K・L-9・10	-	-	3層	2.1	0.6	0.3	2.3	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1050	土製品	G・H-5・6	-	-	4層	3.6	1.1	0.3	2.3	-	ﾅﾃﾞ・磨耗	-	46
-	1051	土製品	I・J-3・4	-	-	3層	2.0	0.7	0.3	2.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1052	土製品	K-11・12	-	-	4層	4.2	1.1	0.3	3.9	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1053	土製品	G・H-3・4	-	-	-	4.5	1.0	0.3	3.7	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1054	土製品	G・H-5・6	-	-	3層	3.7	1.1	0.3	4.4	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1055	土製品	I・J-7・10	-	-	3層	3.0	1.0	0.3	2.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1056	土製品	K・L-7・8	-	-	排土中	3.2	0.9	0.3	1.8	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1057	土製品	K・L-7・8	-	-	3層	4.4	1.1	0.3	4.4	-	ﾐｶﾞｷ？	-	46
-	1058	土製品	I・J-9・10	-	-	3層	3.6	1.0	0.3	3.4	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1059	土製品	I・J-5・6	-	-	-	4.5	1.1	0.3	4.1	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1060	土製品	M・N-11・12	-	-	4層	3.9	1.1	0.3	4.0	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1061	土製品	I・J-9・10	-	-	3層	2.5	1.2	0.5	2.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1062	土製品	G・H-7・8	-	-	3b層	2.5	1.1	0.3	2.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1066	土製品	N-12	-	-	3層	5.0	2.7	-	17.2	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1081	土製品	G・H-5・6	-	-	3層	5.4	2.1	0.5	19.2	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1082	土製品	西側凸部	-	-	-	4.2	1.2	0.3	4.4	-	ﾅﾃﾞ	-	46

挿図番号	番号	種別	出土地点				法量(cm・g)				調整		備考	写真図版
			グリッド	遺構	種別	層位	長さ	最大胴径	最大穿孔径	重量	内器面	外器面		
-	1083	土製品	K・L-5・6	-	-	-	5.1	1.4	0.3	9.2	-	ﾅﾃﾞ	-	46
-	1341	土製品	G・H-5・6	-	-	-	4.1	1.0	0.3	3.5	-	ﾅﾃﾞ	-	46

表14　Ⅰ区　古銭観察表

挿図番号	番号	銭貨名	出土地点			法量(cm/g)				初鋳年	備考	写真図版
			グリッド	遺構	層位	外径	穿径	厚さ	重量			
180	1115	開元通寶	I・J-1・2	-	-	2.3	0.7	2	2	唐　621		-
180	1116	皇宋通寶	K・L-5・6	-	-	2.5	(0.7)	1	1	北宋　1037		-
180	1117	元祐通寶	-	-	-	2.4	0.6	1.5	3	北宋　1086		-
180	1118	文久永寶	M・N-7・8	-	-	2.8	0.8	1.5	3.5	江戸　1862		-

表15　Ⅰ区　近世陶器観察表

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土位置			部位	法量(cm)			調整				色調		備考	写真図版
						グリッド	遺構	種別		口径	底径	器高	外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	notation		
-	1431	磁器・染付	椀	肥前	小野C群?	-	SD	610	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	(釉)10YR8/1 (染付)3.6PB7.4/1.1	-	-
-	924	陶器	秉燭	-	-	-	SD	011	完形	5.6	3.8	5.2	-	-	-	-	にぶい橙	3.5Y2.3/1.4	-	34

※陶磁器の分類は、山本信夫氏と参考文献「太宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡 XV- 陶磁器分類編 -』大宰府教育委員会　2000」による。

写 真 図 版

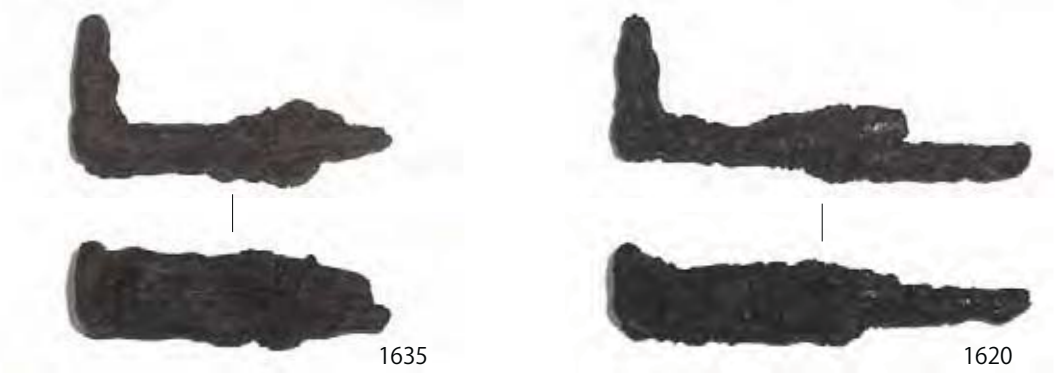
二本木遺跡群周辺航空写真

調査Ⅰ・Ⅱ区

調査Ⅰ区

I 区　ST-040 出土遺物

II 区　SK-2016 内出土　土馬



Ⅰ区　錠前 (牡金具)

Ⅰ区　転用硯

Ⅰ区　鳳首瓶

白磁　SD-041　椀　Ⅰ-1a 類

白磁　SD-041　椀　Ⅱ-1a 類

白磁　SE-247　椀　Ⅳ-1a 類

白磁　SE-247　椀　Ⅳ-1a 類

白磁　SE-247　椀　Ⅳ-1a 類 (内)

白磁　SE-247　椀　Ⅳ-1a 類 (外)

白磁　SD-041　椀　Ⅳ-c 類

白磁　包含層　椀　Ⅴ類

白磁　SD-041　椀　V類

白磁　SE-066　椀　V類

白磁　包含層　椀　V -2b 類

白磁　包含層　椀　V -4b 類

白磁　SD-041　小椀　II類 (内)

白磁　SD-041 小椀　II類 (外)

白磁　SD-004　皿　III -2 類 (内)

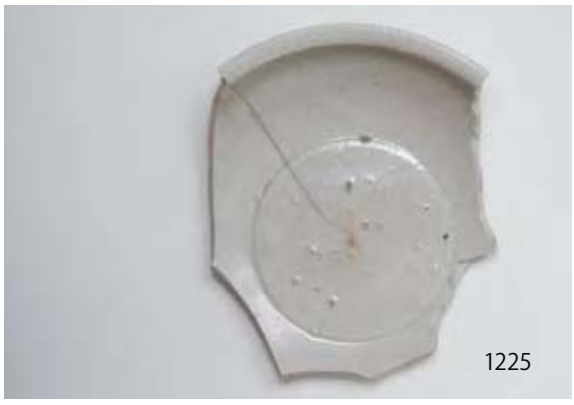
白磁　SD-004　皿　III -2 類　(外)

白磁　SE-247　皿　Ⅲ - 1類 (内)

白磁　SE-247　皿　Ⅲ -1 類 (外)

白磁　包含層　皿　Ⅳ -1 類 (内)

白磁　包含層　皿　Ⅳ -1 類 (外)

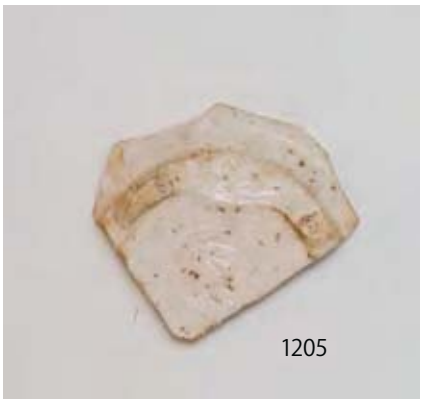


白磁　包含層　皿　Ⅴ -2a 類 (内)

白磁　包含層　皿　Ⅴ -2a 類 (外)

白磁　包含層　皿　Ⅲ -1 類

白磁　包含層　皿　Ⅸ -2 類



白磁　SD-013　皿　森田 D 類

白磁　SE-247　四耳壺　III類

青白磁　包含層　小壺

青白磁　包含層　　合子　上：蓋 / 下：身

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ -1a 類（内）

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ - 1a 類 (外）

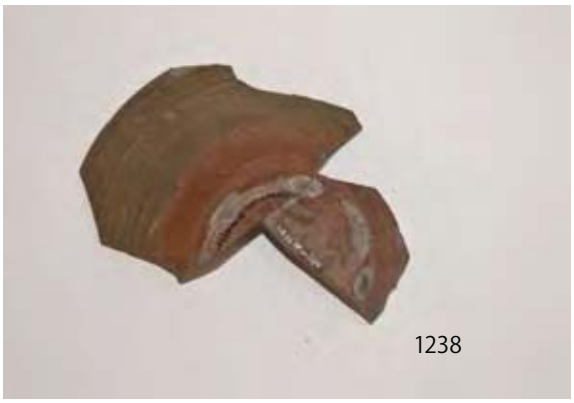
越州窯青磁　SE-247　椀　Ⅰ -2 ァ×（ィ）類（内）

越州窯青磁　SE-247　椀　Ⅰ -2 ァ×（ィ）類（外）

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-2ゥ類(内)

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-2ゥ類(外)

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-5 類(内)



越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-5 類(外)

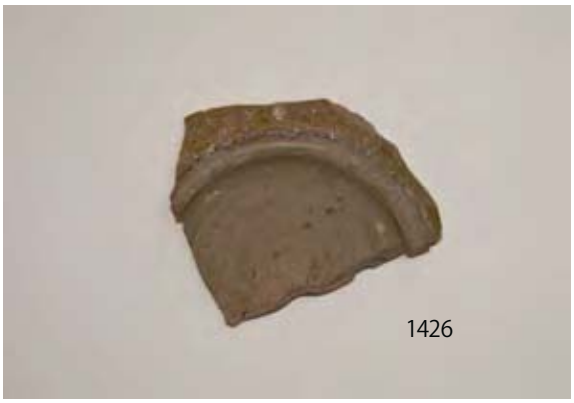
越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-5 類(内)

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅰ-5 類(外)

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅱ-2a 類(内)

越州窯青磁　包含層　椀　Ⅱ-2a 類(外)

越州窯青磁　包含層　椀　II類 (内)

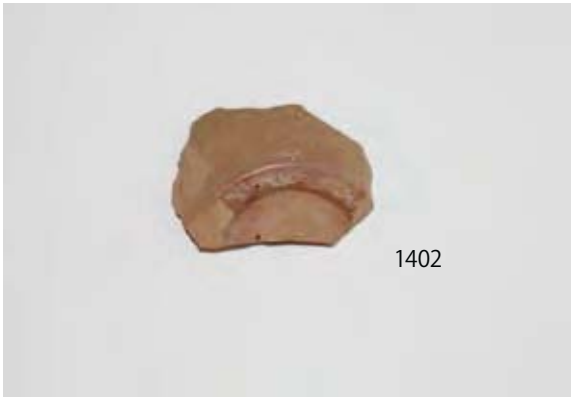


越州窯青磁　包含層　椀　II類 (外)

越州窯青磁　包含層　椀　II -2 類 (内)

越州窯青磁　包含層　椀　II -2 類 (外)

越州窯青磁窯　SE-247　椀　Ⅰ -5 類



越州窯青磁窯　SE-247　小椀　Ⅰ -2 類

長沙窯　SD-135　壺×水注

長沙窯　包含層　合子

龍泉窯　包含層　椀Ⅰ-2 類

同安窯　包含層　皿　Ⅰ-2b 類

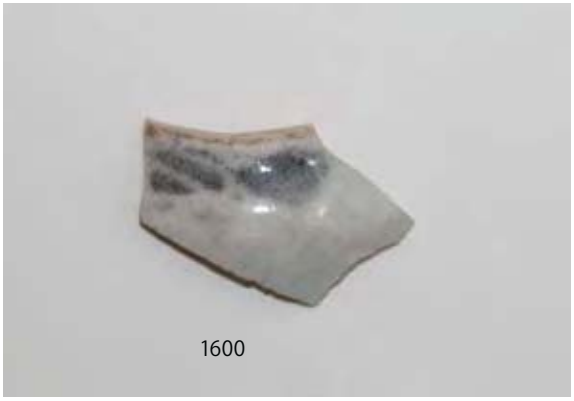
青白磁　SE-247　合子

青白磁　包含層　小壺

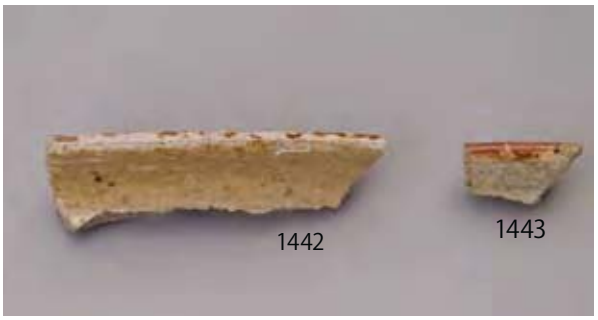
青白磁　包含層　杯　森田 B′ 類 (外)

青白磁　包含層　杯　森田 B′ 類 (内)

青白磁　包含層　合子 (身)



青白磁　SD-896　小壺



陶器　SE-247　盤　Ⅰ-1 類

陶器　表土　盤　Ⅰ - 2 類

包含層　三彩陶器 (外)

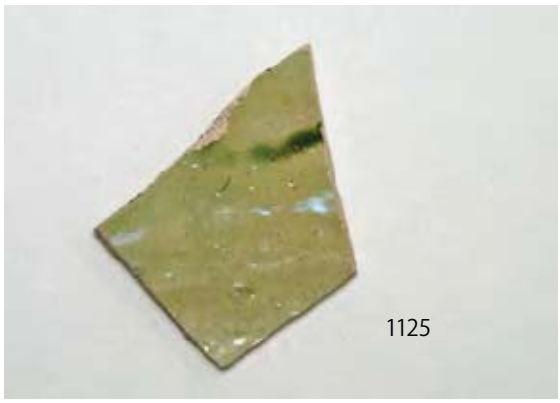
包含層　三彩陶器 (外)

白磁　包含層　馬上杯

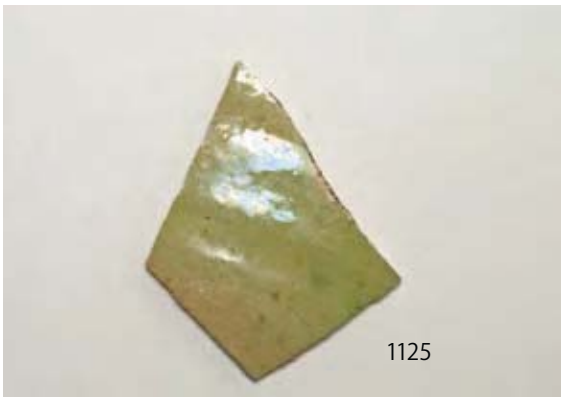
青花　SD-610 椀　（体部）

陶器　包含層　天目茶碗　瀬戸 (内)

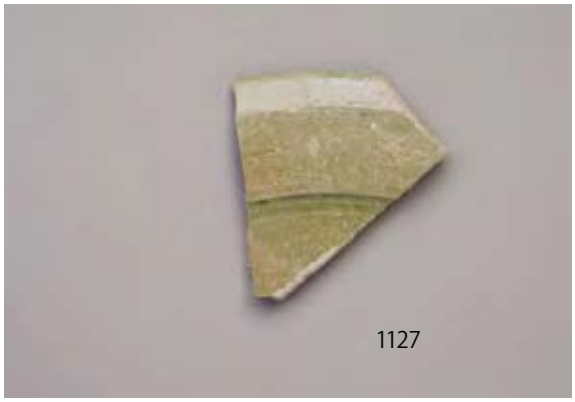
陶器　包含層　天目茶碗　瀬戸 (外)



緑釉　SP-830　椀×皿　防長×洛北



緑釉　SP-830　椀×皿　防長×洛北



緑釉　包含層　皿　東海×洛西 (内)

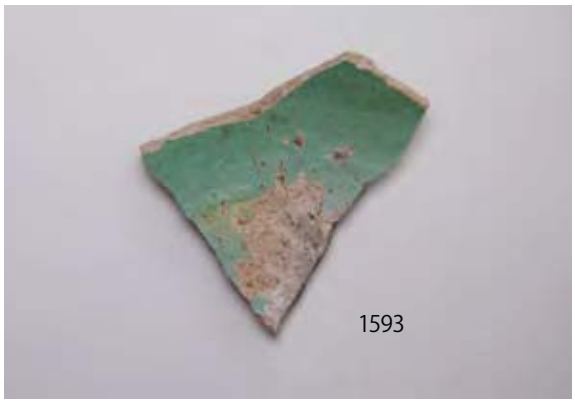
緑釉　包含層　皿　東海×洛西（外）

緑釉　SD-112　椀　近江 (内)

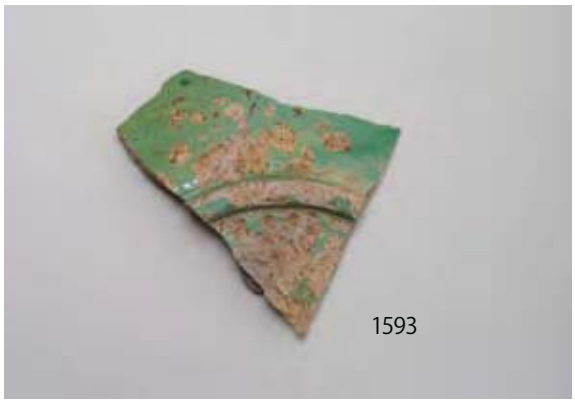
緑釉　SD-112　椀　近江 (外)

緑釉　包含層　皿　東海　K14 × (90)(内)

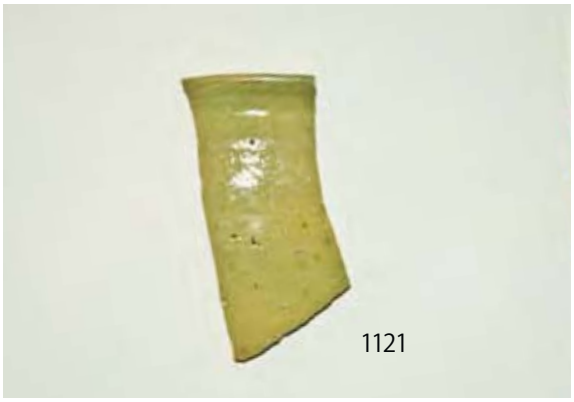
緑釉　包含層　皿　東海　K14 × (90)(外)



緑釉　包含層　椀×皿　防長 (内)

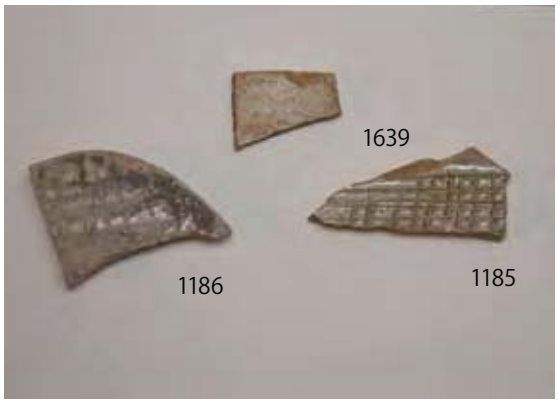


緑釉　包含層　椀×皿　防長 (外)



緑釉　包含層　椀　洛北

緑釉　包含層　椀×皿　洛西



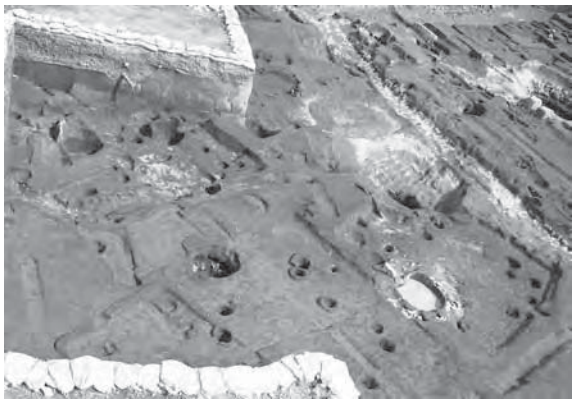
陶器　卸皿　瀬戸 (内)
1186･1185：包含層　1639：SD-011

陶器　卸皿　瀬戸 (外)
1186･1185：包含層　1639：SD-011

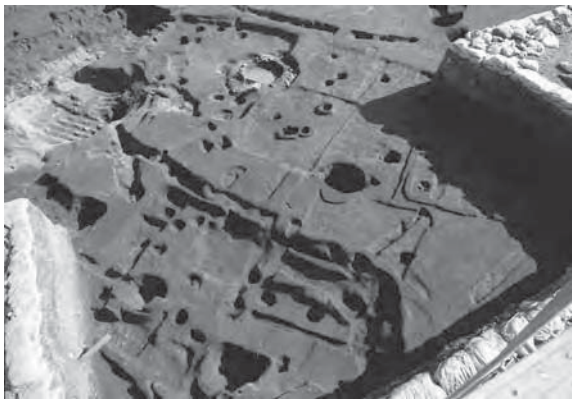
猿投窯　灰釉　包含層　壺

ガラス製品　包含層
ガラス玉

石製品　包含層
ビーズ

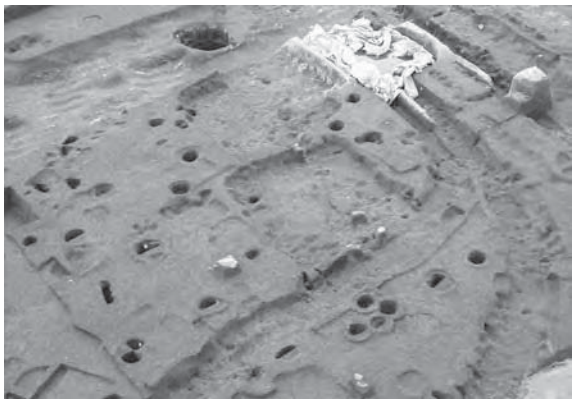


141-I・J-1・2 グリッド竪穴建物群完掘状況



141-I・J-1・2 グリッド SI-064 完掘状況 (北から)

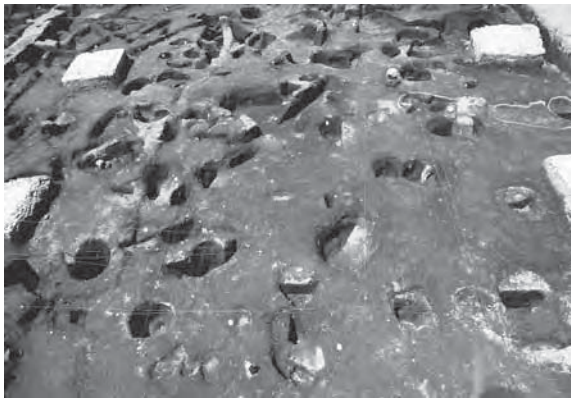
141-I・J-1・2 グリッド竪穴建物群完掘状況 (西から)



SI-086・087 完掘状況 (南から)

141-J・K-3 ～ 10 グリッド SD-240 完掘状況 (東から)

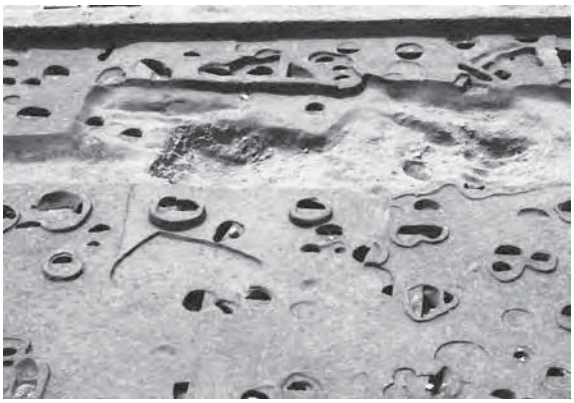
141-K・L-8・9 グリッド
掘立柱建物群検出状況 (南から)



141-M・N-9・10 グリッド
SB-10025 検出状況 (東から)

141-J・K-5 ～ 7 グリッド
完掘状況 (東から)

141-J・K-6 ～ 8 グリッド
掘立柱建物検出状況 (南から)



141-J・K-6 ～ 8 グリッド
掘立柱建物検出状況 (南から)

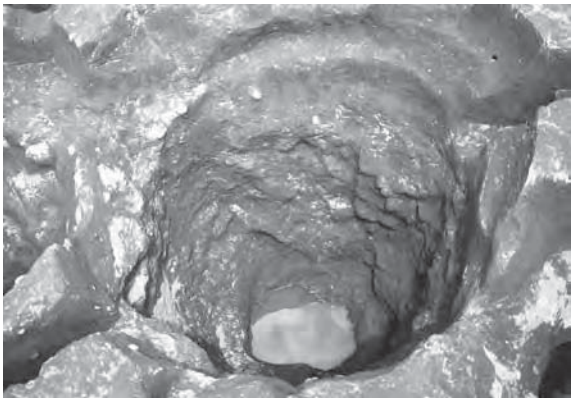
SI-105 カマド断面確認状況 (南から)

SE-222 完掘状況 (北西から)

SE-263 完掘状況 (南東から)

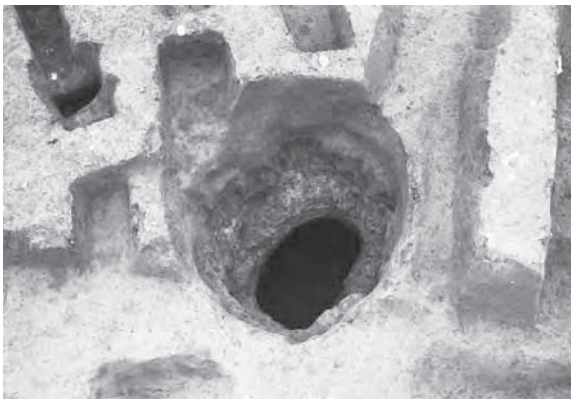
ST-040　人骨出土状況 (南から)

ST-040　人骨出土状況 (西から)



SE-229 完掘状況 (西から)

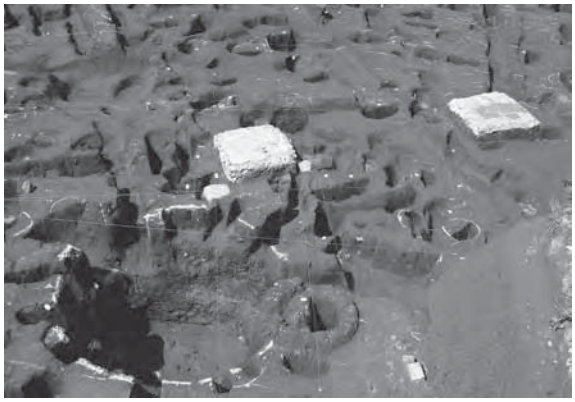
SI-323 カマド断面確認状況



SE-277 完掘状況 (東から)

141-Q・R-9・10 グリッド
SB-10039 他検出状況 (南から)

141-Q・R-5 ～ 8 グリッド
SB-10050 他検出状況 (南から)

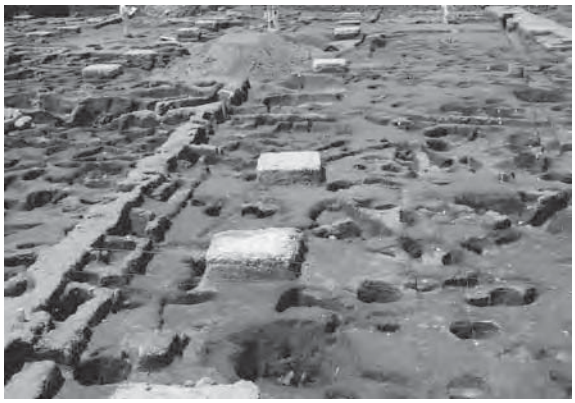


141-Q・R-7・8 他グリッド
SB-10045 検出状況 (南から)

SD-008 獣骨出土状況

141-O・P-7・8 グリッド SE-229 完掘状況 (南から)

141-G-3・4 グリッド
SK-897 獣骨出土状況 (ウマ)(南から)



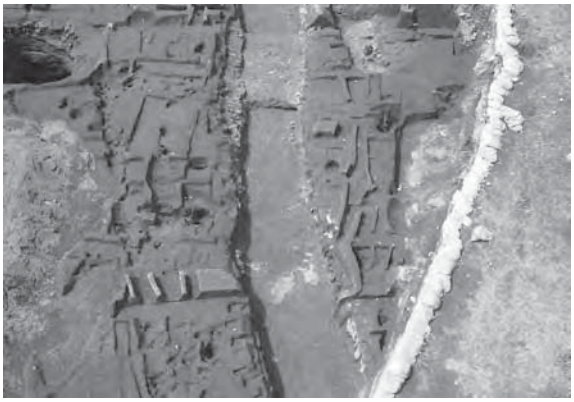
141-M・N・O-9・10 グリッド
SB-10023・10029 検出状況 (東から)

141-G・H-3・4 グリッド SD-213 内人骨出土状況
(北から)

141-G・H-7・8 グリッド遺構検出状況 (北から)

141-G・H-5・6 グリッド遺構検出状況 (北から)

SD-004 検出状況 (南より)(俯瞰)

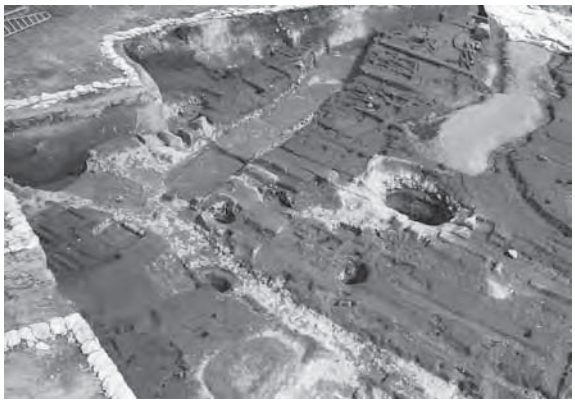


H ～ J-6 ～ 8 グリッド
SD-041 他完掘状況 (東から)

141-I・J-4・5 グリッド遺構群完掘状況

SD-041 他完掘状況

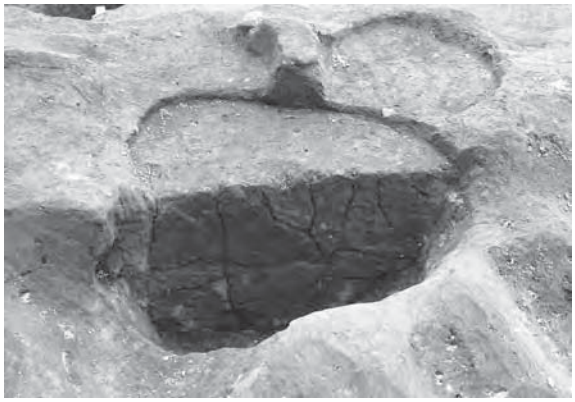
西側竪穴建物・溝完掘状況



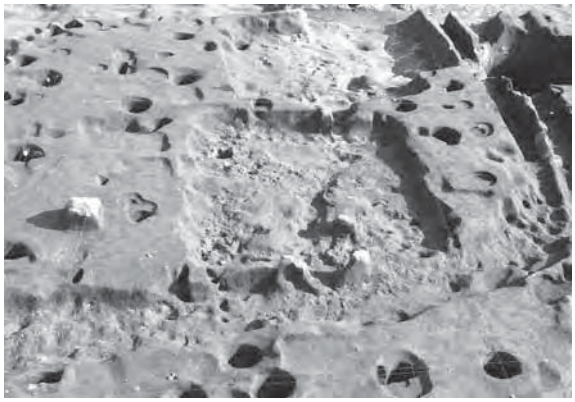
北側完掘状況

141-I・M-8 ～ 11 グリッド遺構群完掘状況

141-I ～ K-7 ～ 10 グリッド
SD-056・057・110 検出状況 (南から)



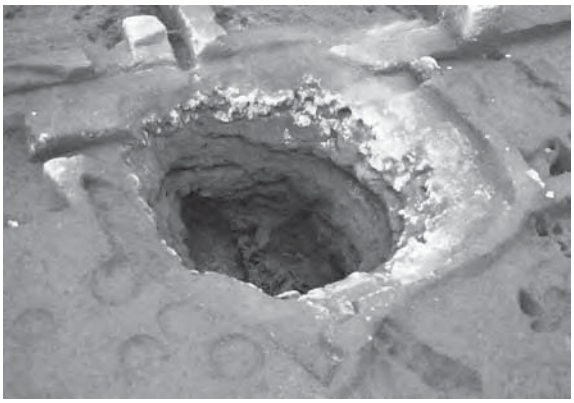
SE-045 土層断面 (北から)



SI-084・087,SB-10009・10010 検出状況 (西より)

SE-066 獣骨出土状況 16 層 (南から)

SE-066 調査状況 (東から)



SE-066 完掘状況 (東から)

SE-066 他溝完掘状況

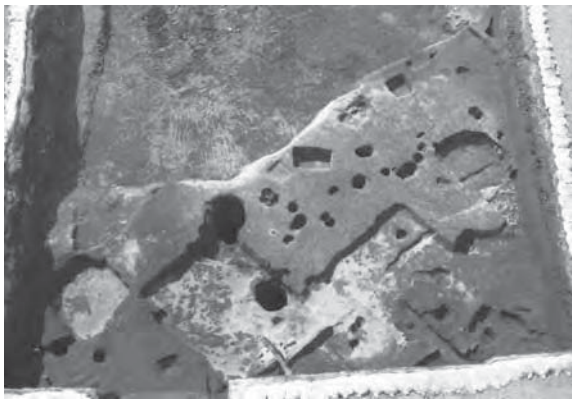
SE-066 人骨出土状況 (南から)

SE-066 井戸枠・獣骨出土状況

SI-279・280 完掘状況

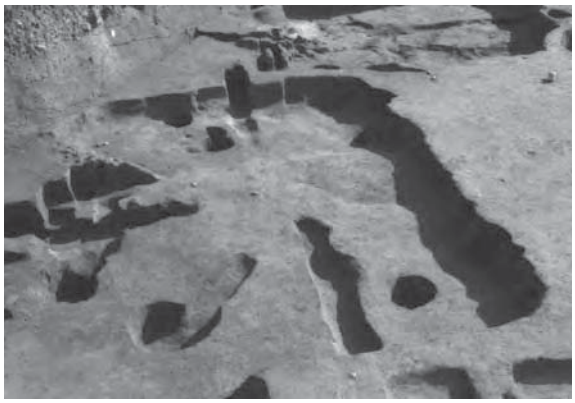
141-O ～ R-5 ～ 12 グリッド
SD-010・011 完掘状況 (西から)

調査 II 区遺構完掘状況 (南から)



調査 II 区北側遺構群完掘状況 (北から)

調査 II 区南側遺構群完掘状況 (南から)



SI-2001 完掘状況 (西から)

SI-2004 硬化面検出状況 (北から)

SE-2008 遺物出土状況 (北から)

SK-2016 土層断面 (南から)

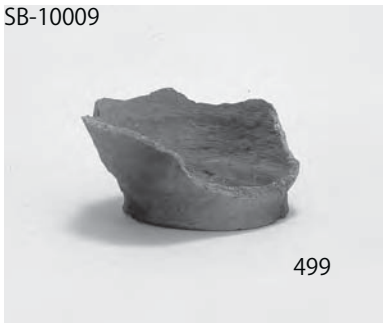
SK-2016 土馬出土状況

P.L - 22

SB-10004

817

SB-10009

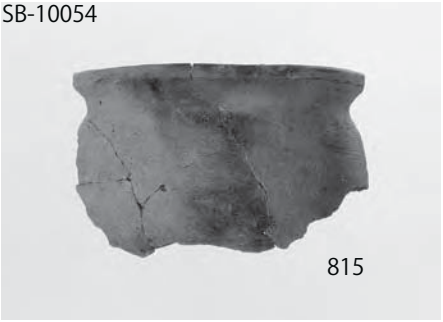


499

SB-10053

326

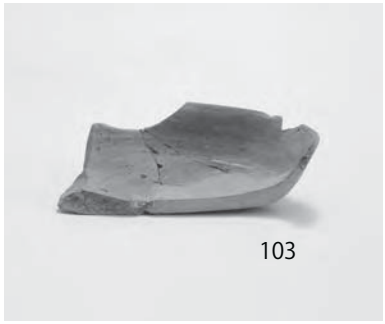
SB-10054



815

SI-050

96



103

123

SI-051

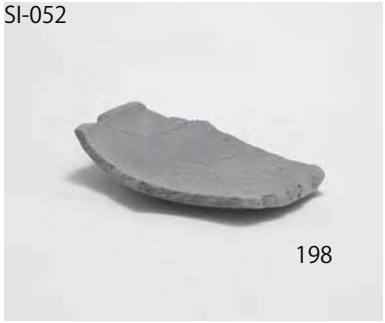
172

189

179

184

SI-052

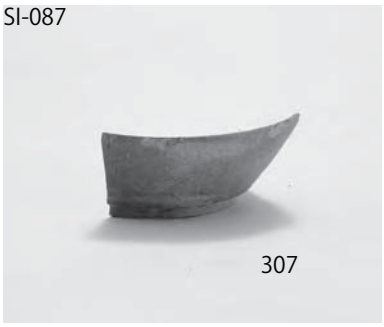


198

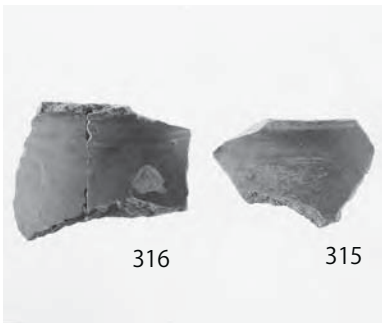
SI-086

290

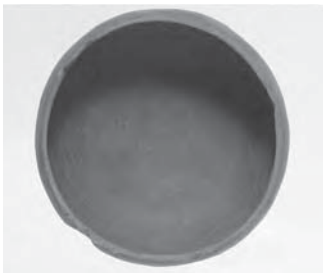
SI-087



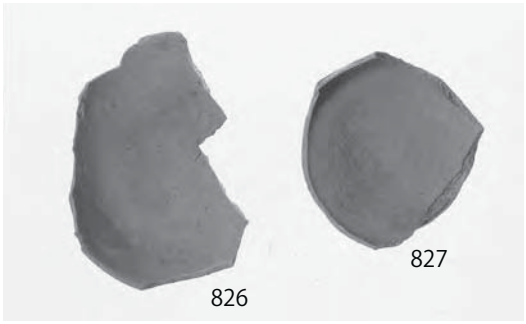
SI-088



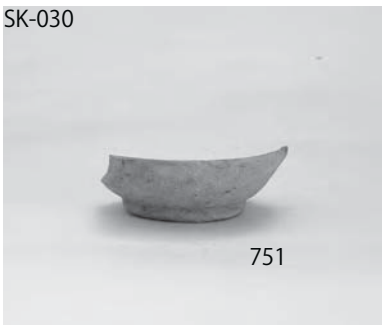
SI-221



SI-279

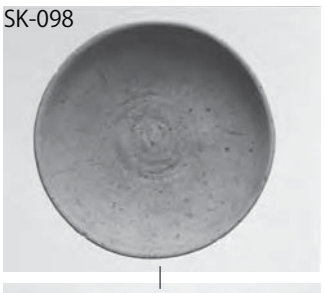


SK-030



SK-077

SK-098



SK-103

770

SK-104

773

776

SK-104

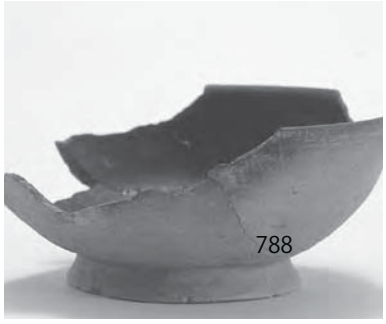
772

781

SK-109

786

787



788

790

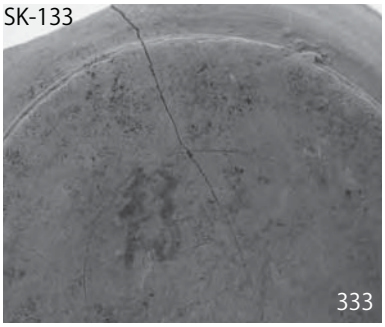
SK-116

325

SK-124

332

SK-133



333

334

SK-174

356

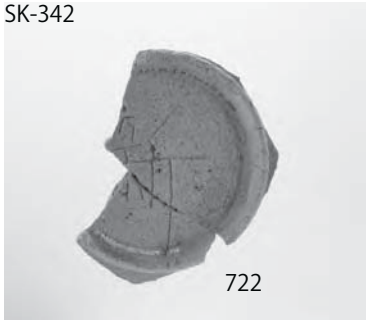
SK-196

797

SK-211

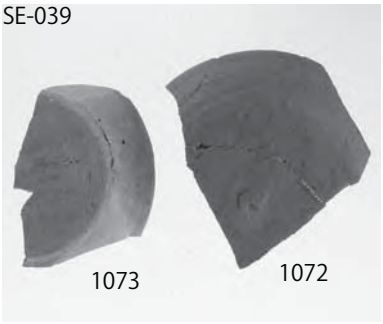
359

SK-342



722

SE-039



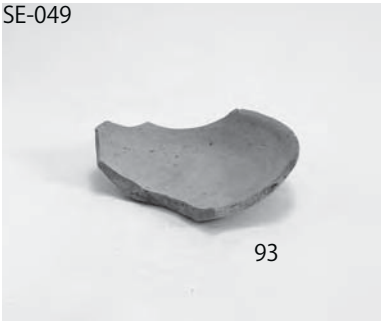
1073 1072

SE-045

707

70

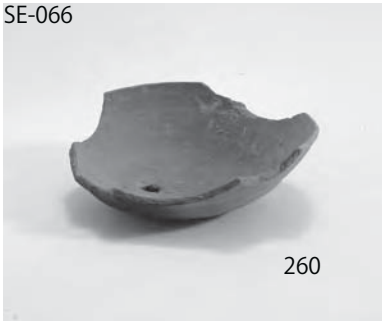
SE-049



93

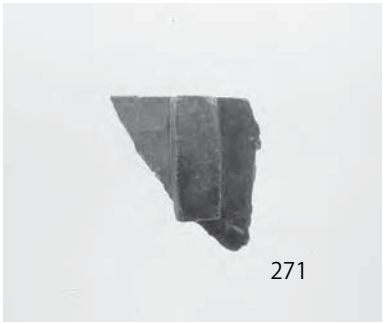
95

SE-066



260

270



271

272

SE-134

347

338

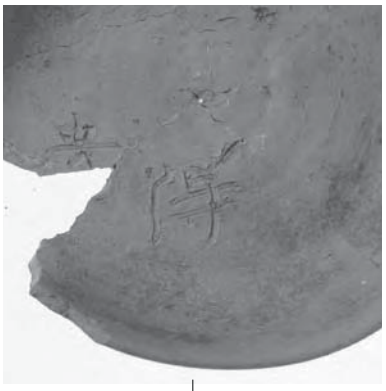
335

SE-134

341

SE-213

360



364

367

SE-214

801

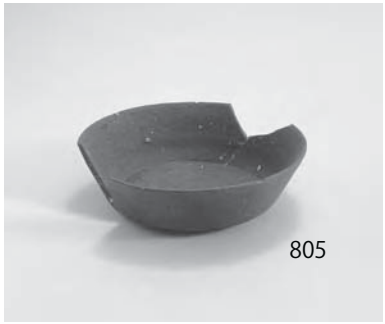
SE-222

386

384

385

387



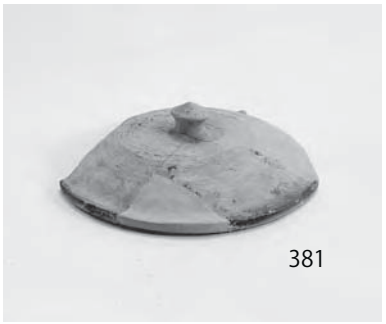
805

388

SE-229

389

473

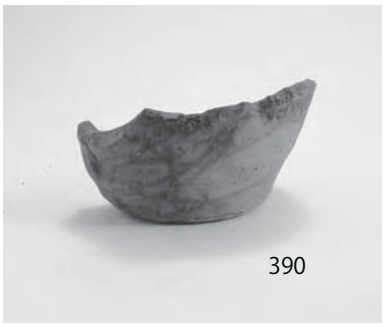


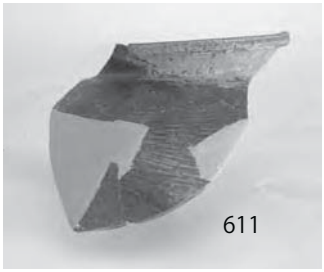
381

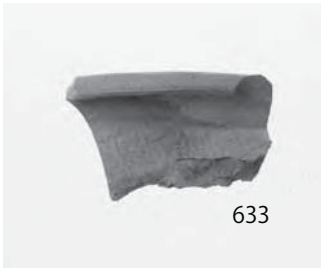
SE-229

382

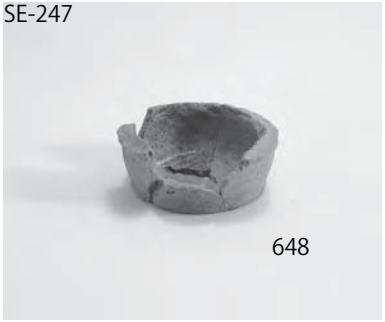
632


390

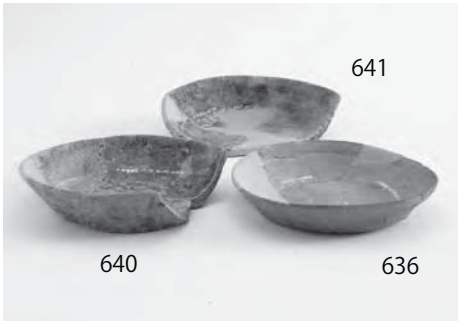

611

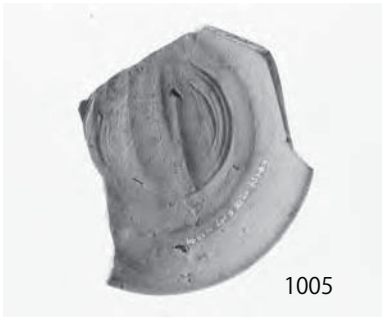

633

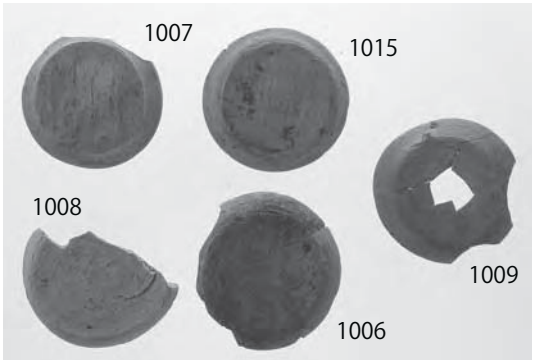
SE-247


648

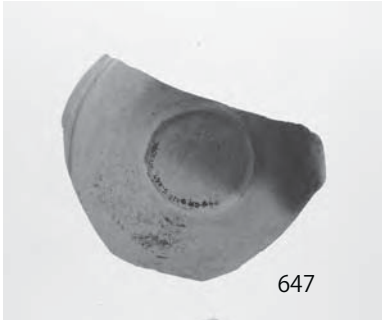
485

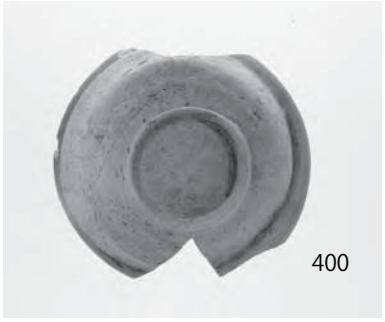

641
640
636


1005


1007
1015
1008
1009
1006

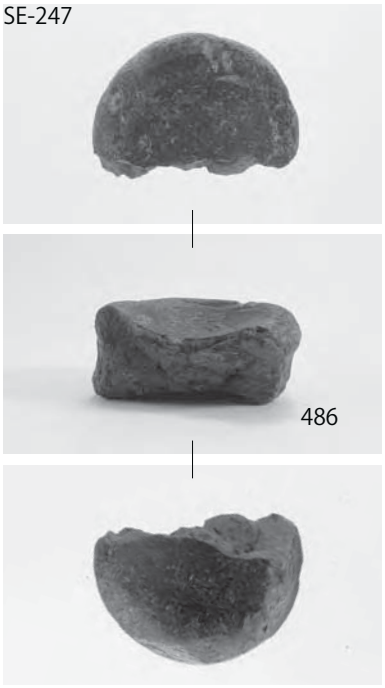
400
399

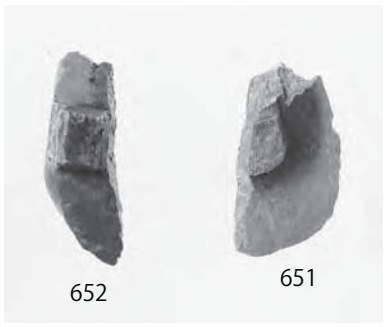

647

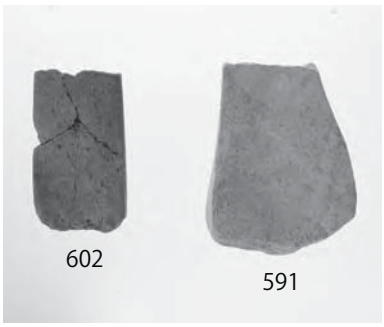

400

399

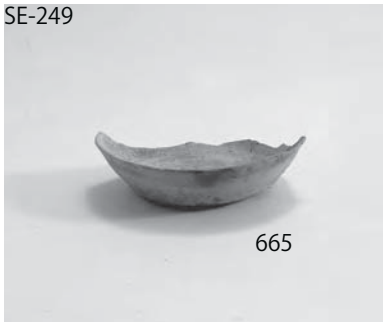
SE-247

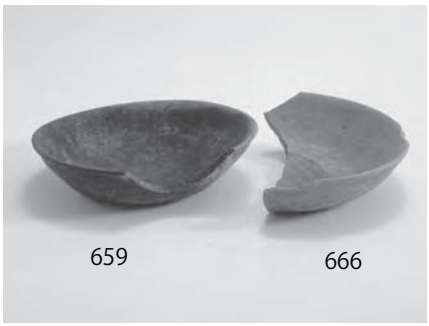






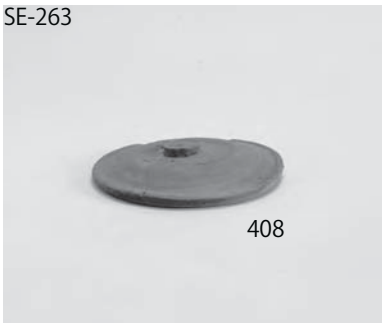
SE-249

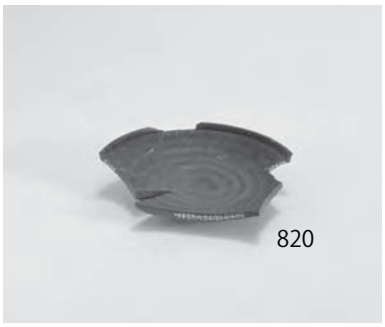


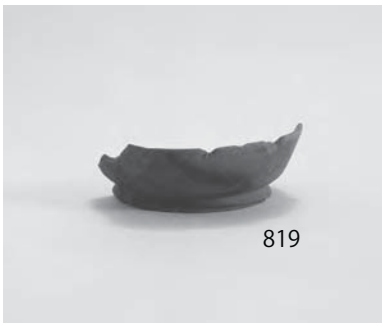


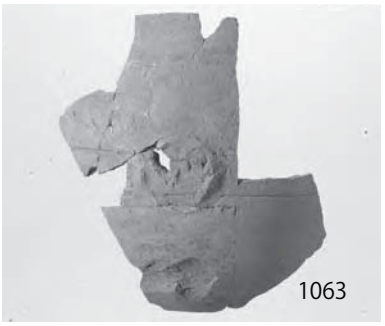
SE-263

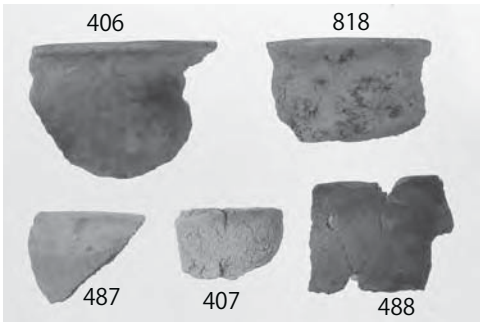
SE-263



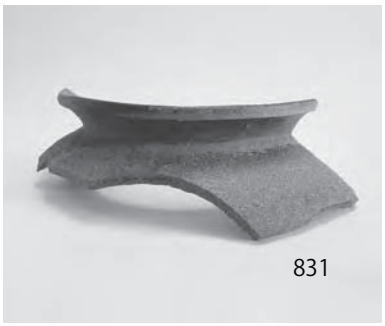




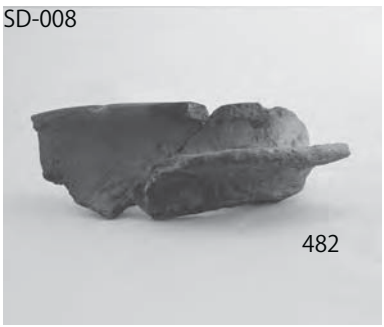




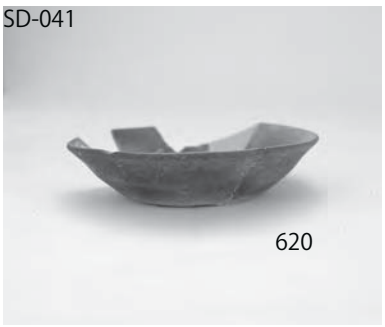
SE-288



SD-008



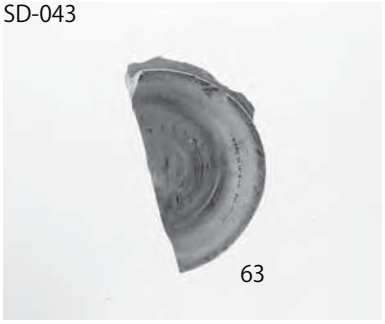
SD-041



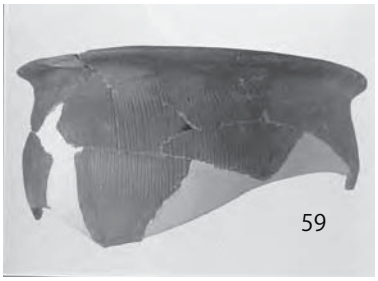
SD-043

P.L - 30

SD-043



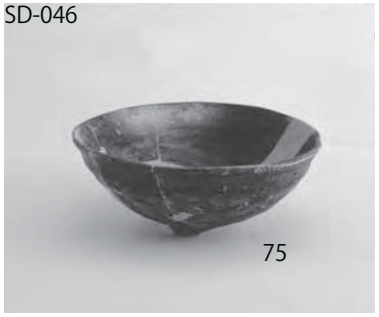
63



59

64

SD-046



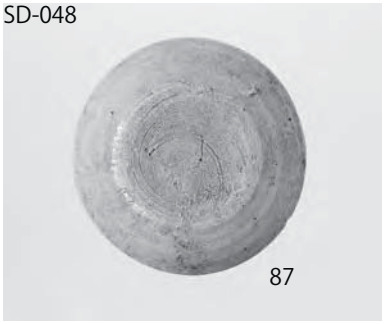
75

710

SD-047

86

SD-048



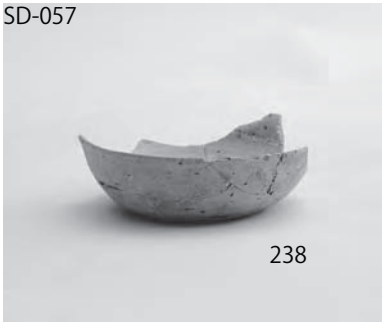
87

SD-056

211

215

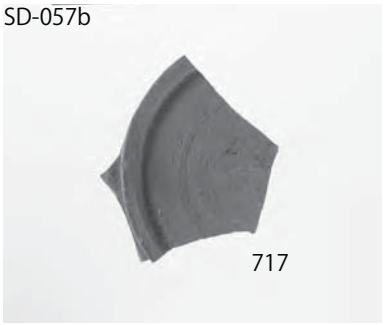
SD-057



238

508

SD-057b

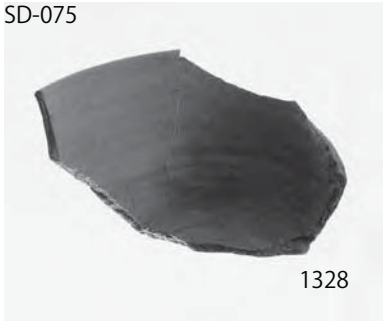


717

SD-067

765

SD-075

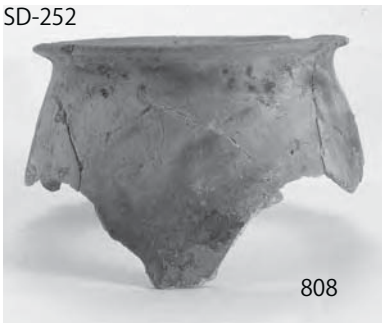


1328

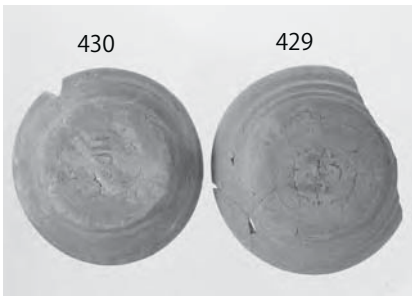
SD-153

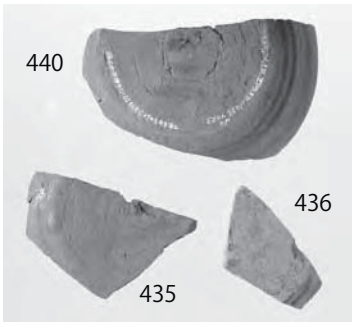
512

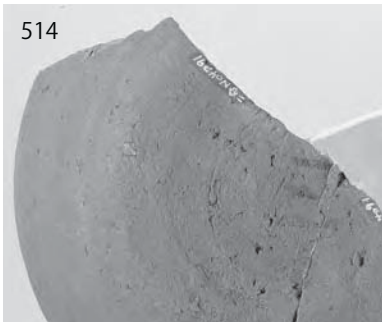
SD-252

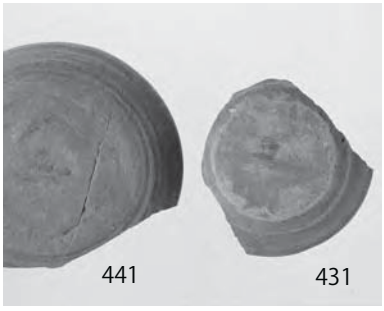


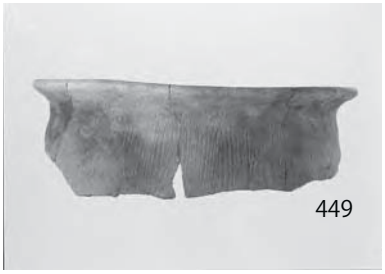
SD-270

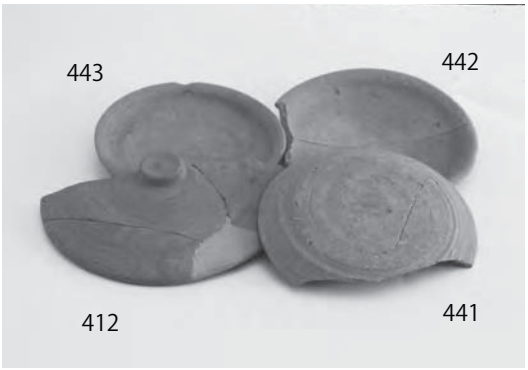




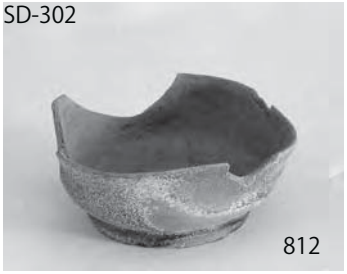








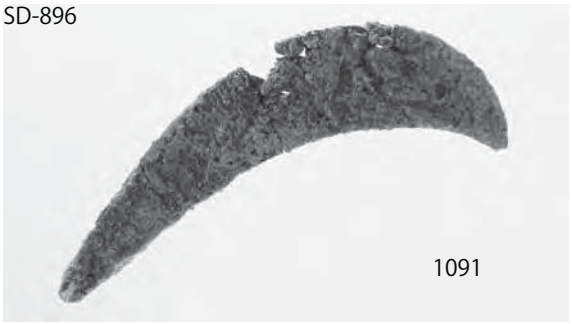
SD-302



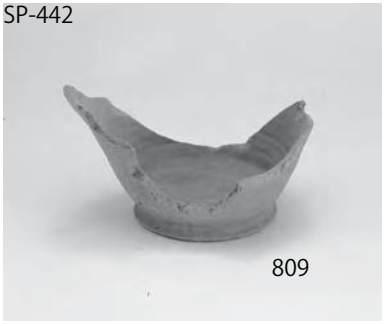
SD-366

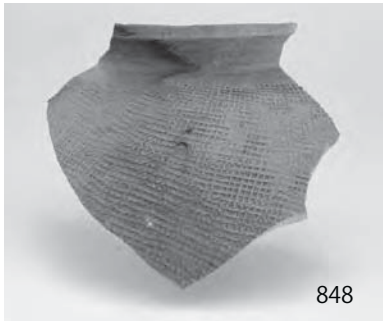
SD-764

SD-896



SP-442



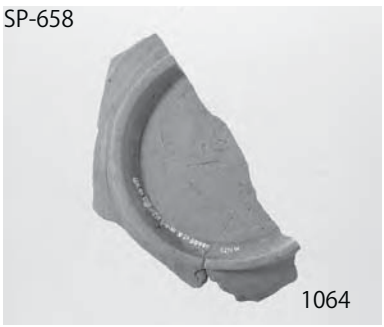


SP-456

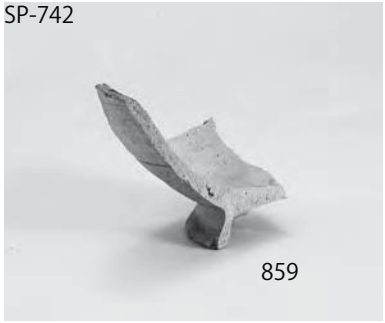
SP-562

SP-654

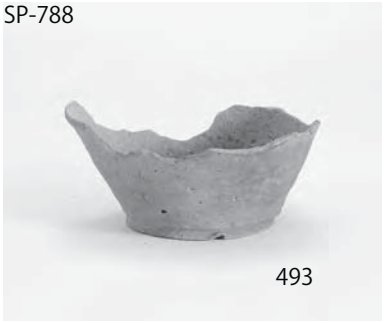
SP-658



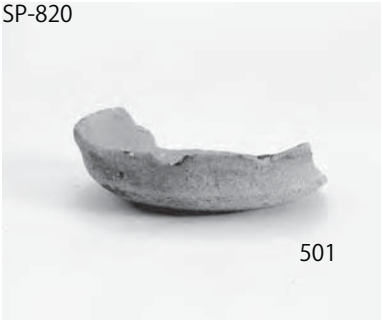
SP-742



SP-788

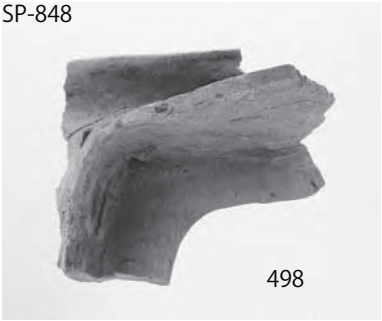


SP-820



501

SP-848

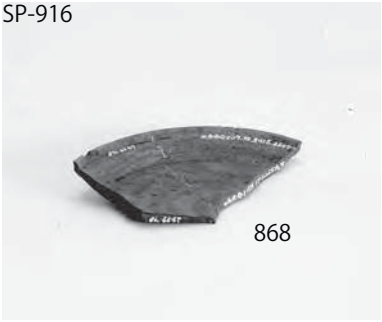


498

SP-871

861

SP-916



868

SP-931

869

SP-955

810

SP-969

871

SP-979

873

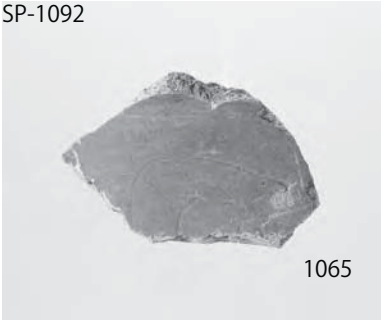
SP-991

875

SP-999

876

SP-1092



1065

P.L - 34

SX-004

1111

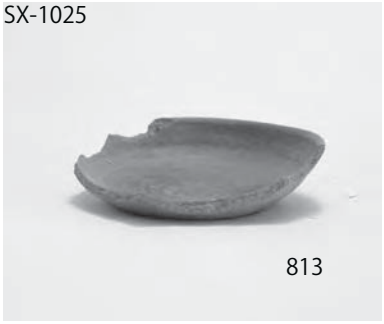
SX-044

608

66

502

SX-1025



813

SX-058

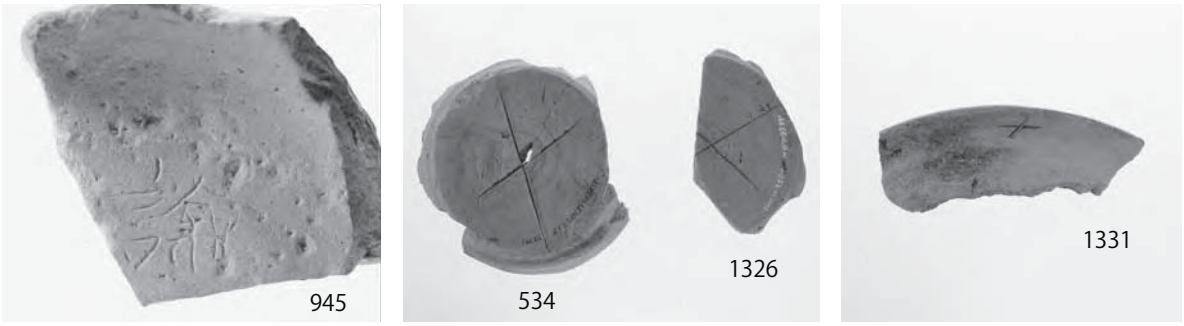
763

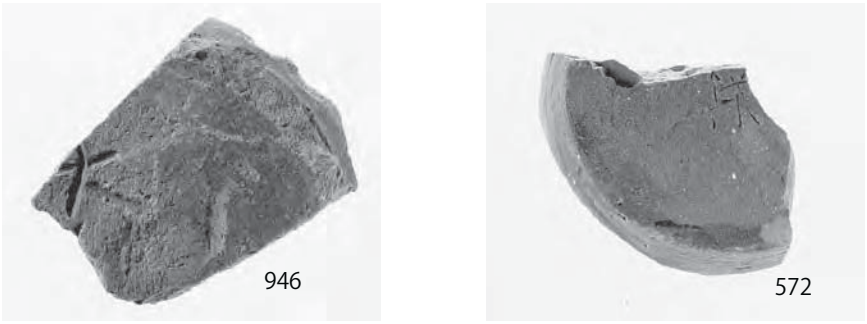
SD-011

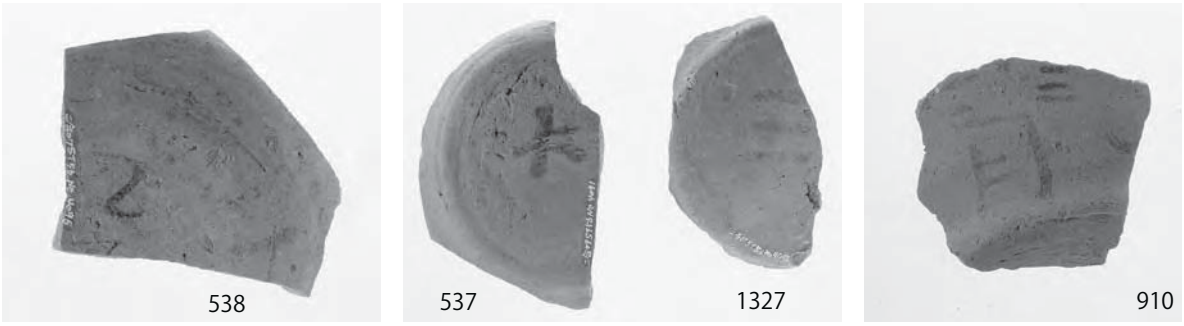
924

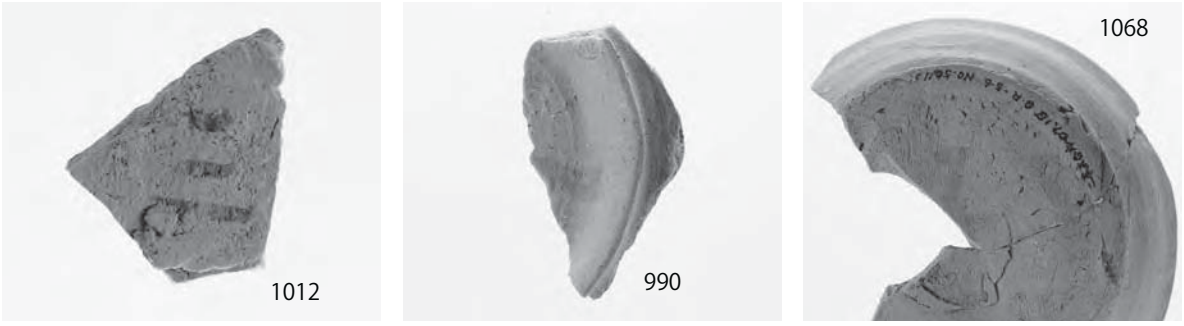
グリッド

947
536
535


945
534
1326
1331


946
572


538
537
1327
910


1012
990
1068

P.L - 36

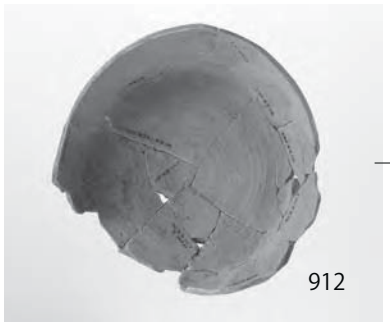
グリッド

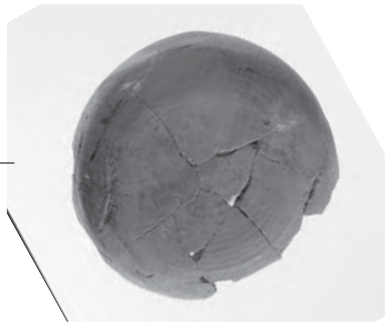
1070

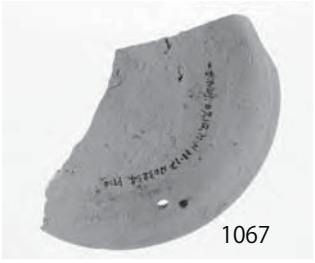
913

911

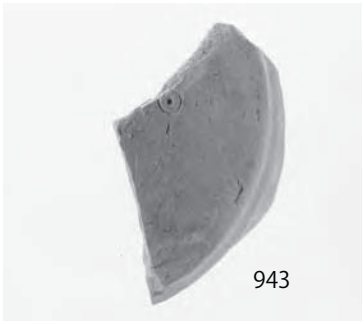
517


912



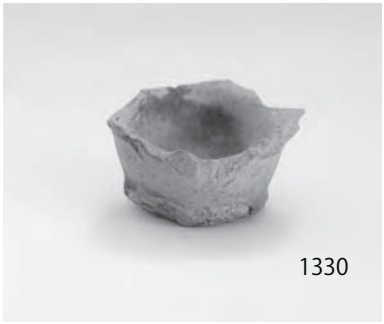

1067

1003


943

944

548


1330

518

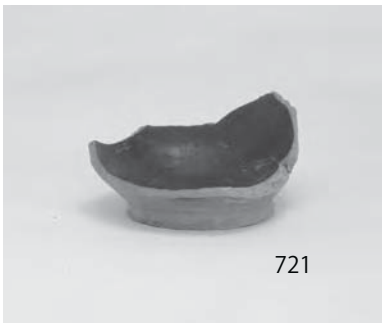
519

727

グリッド

892

915


721

526

530

528

991

723

998

747

927

728

807

887

グリッド

806

597

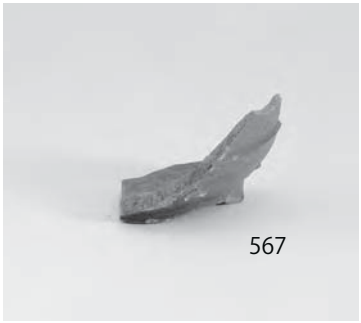
733

551

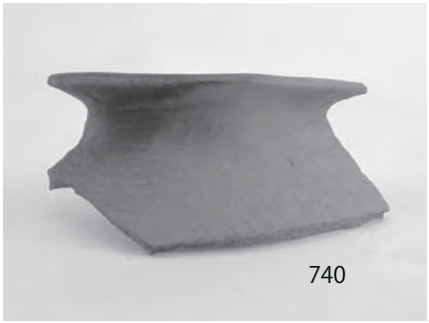
731

1002

926


567

894

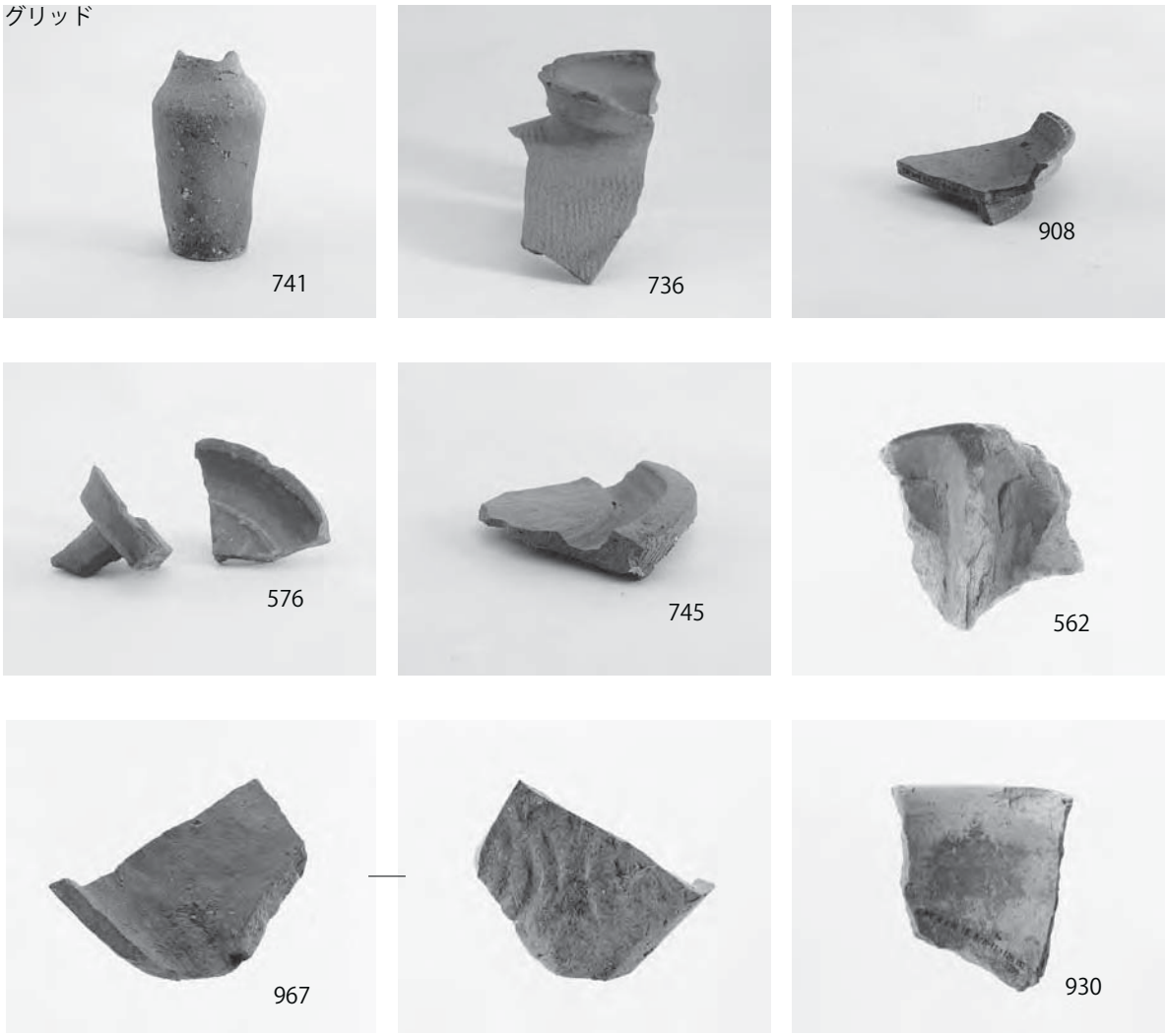

740

739

735

893

グリッド



調査Ⅰ区内出土　転用硯

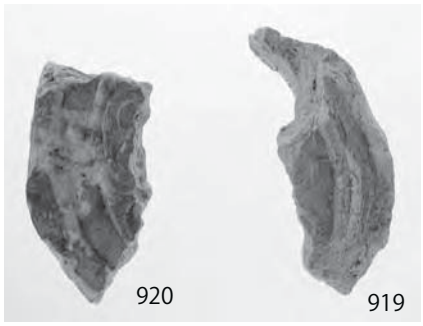
グリッド

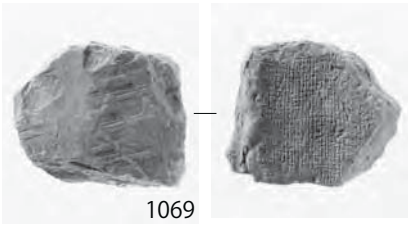
559

896

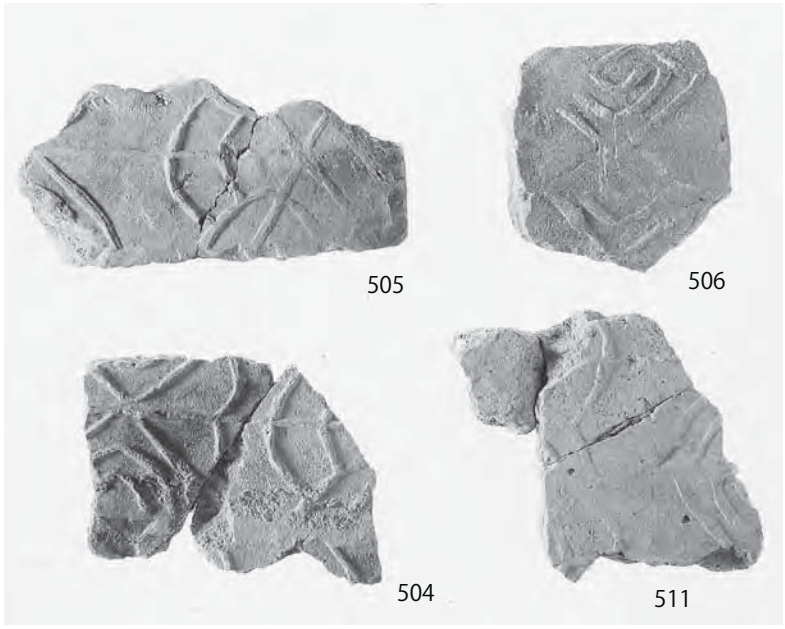
897

1320


920 919


1069

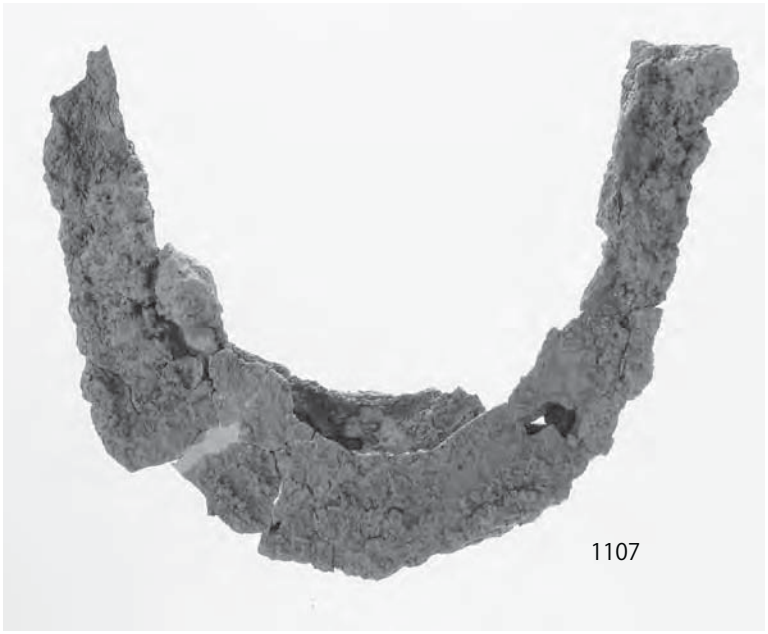
1305 899

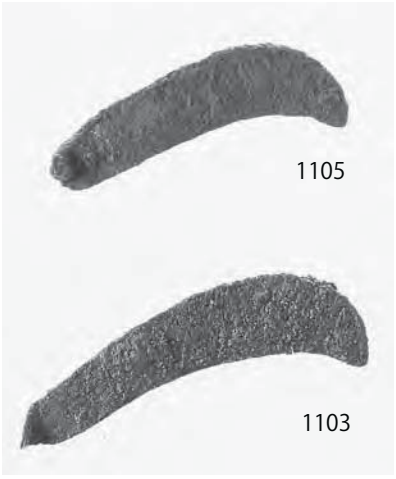

505 506 504 511

調査Ⅰ区内出土　葉脈状圧痕平瓦

1004

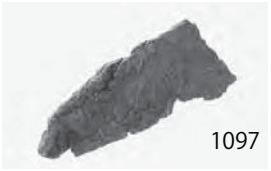
グリッド


1107


1105

1103

1095

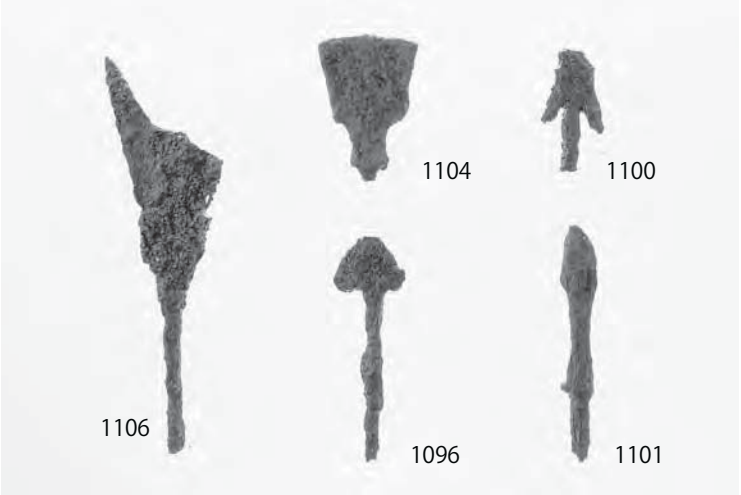

1097

1092

1102

1094

1099


1104

1100

1106

1096

1101

1114

1313

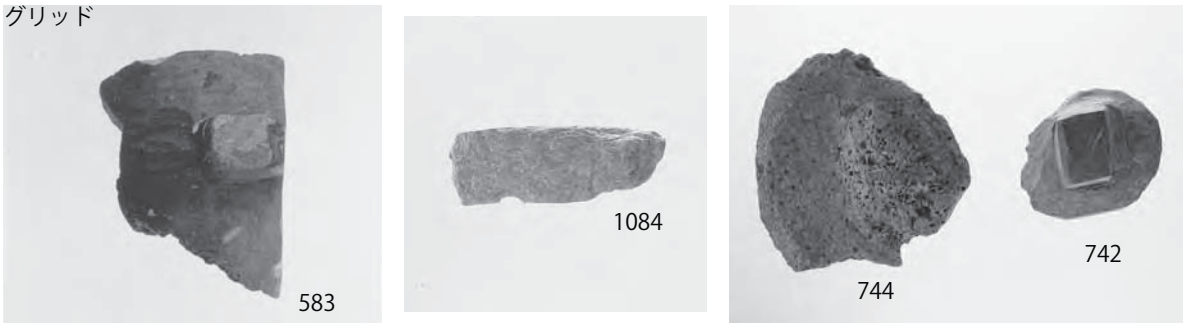
1110

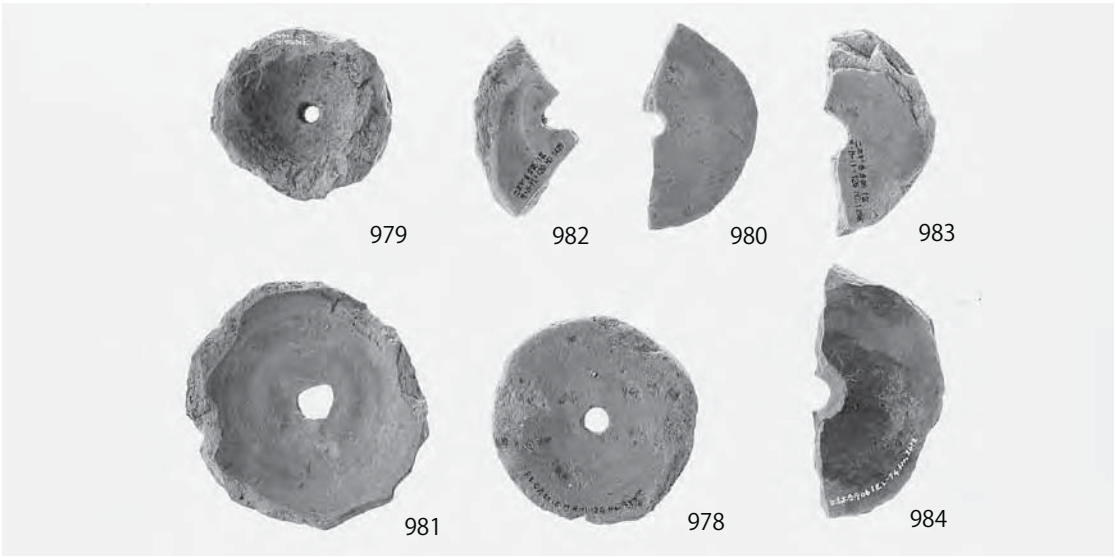
1109

1113

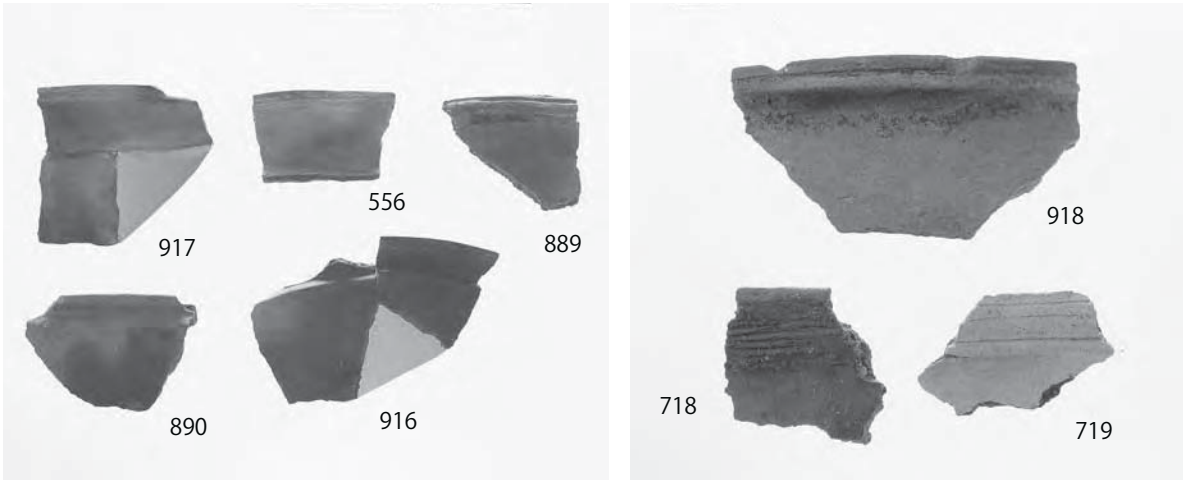
1112

グリッド





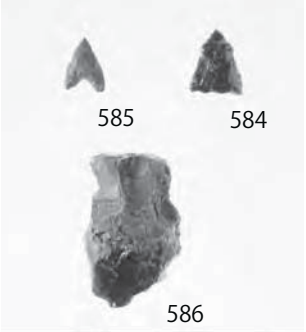
調査Ⅰ区内出土　転用紡錘車



グリッド

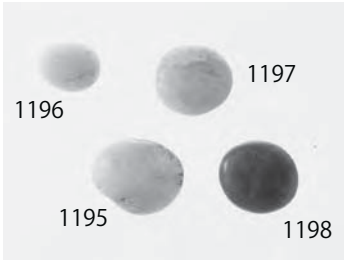
595

588 922


585 584 586

743

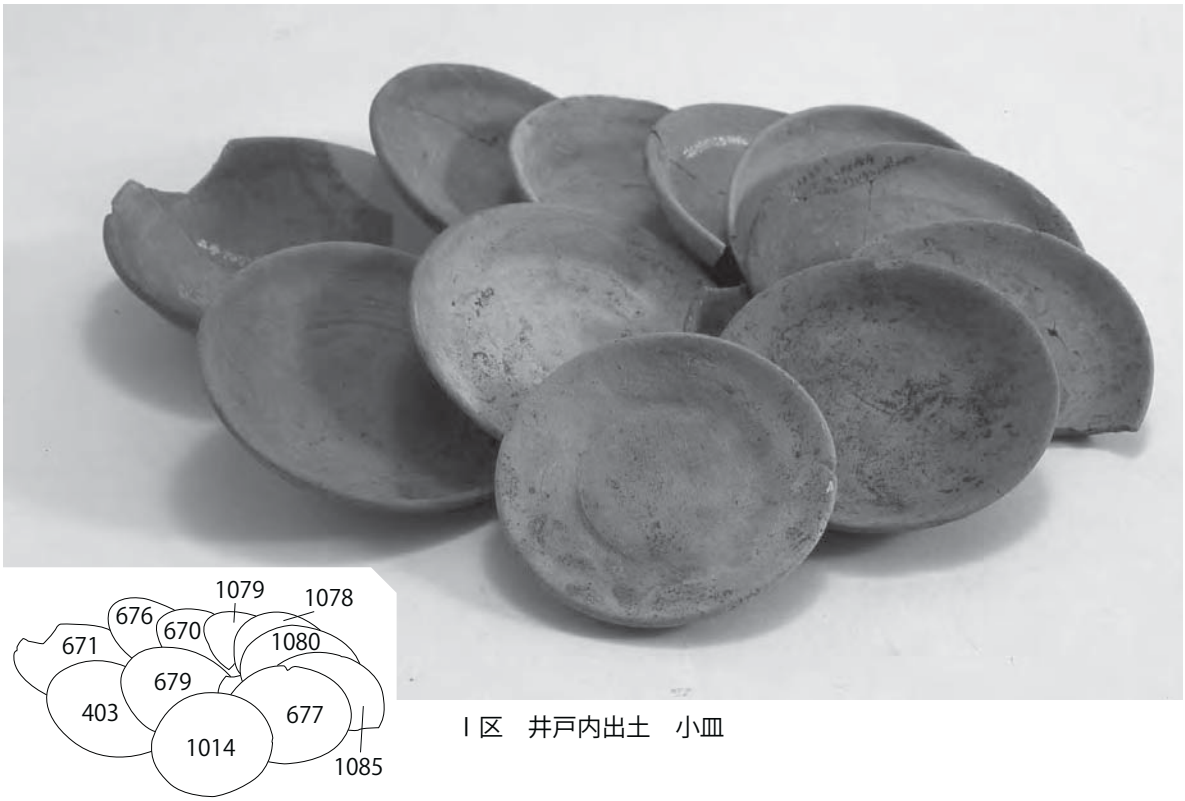
587 749 901


1196 1197 1195 1198

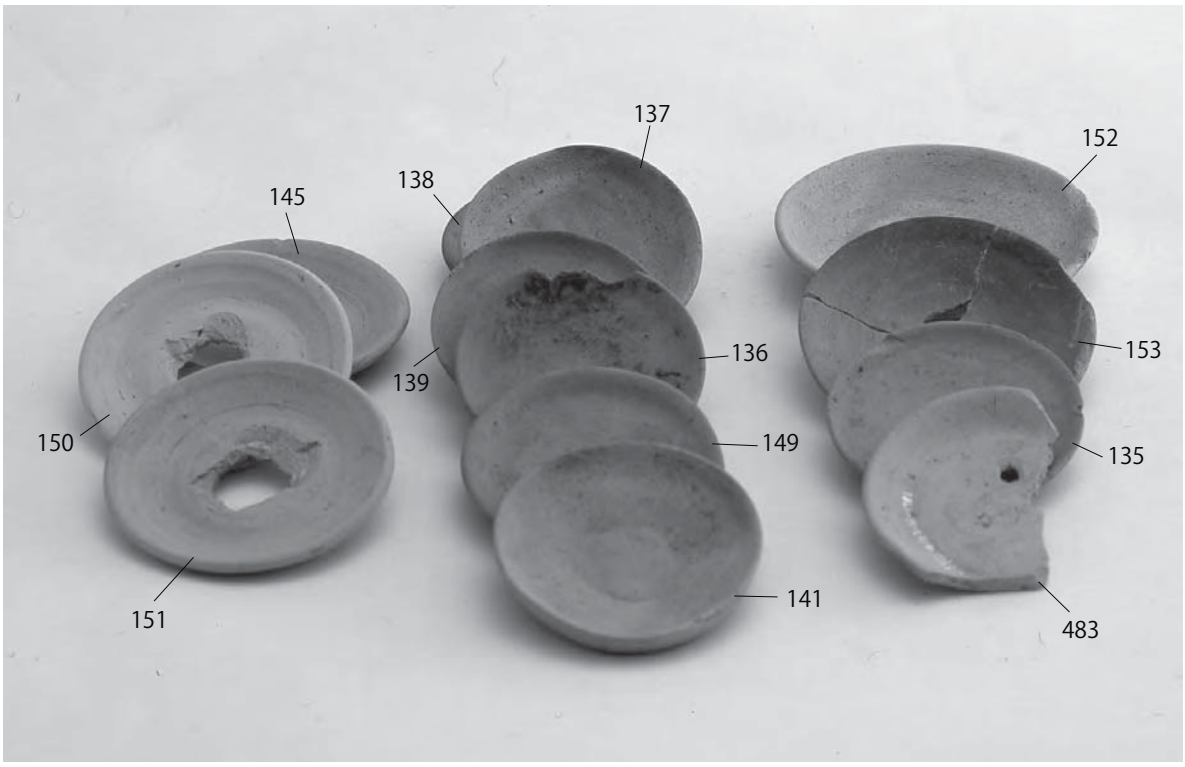
993

994 995

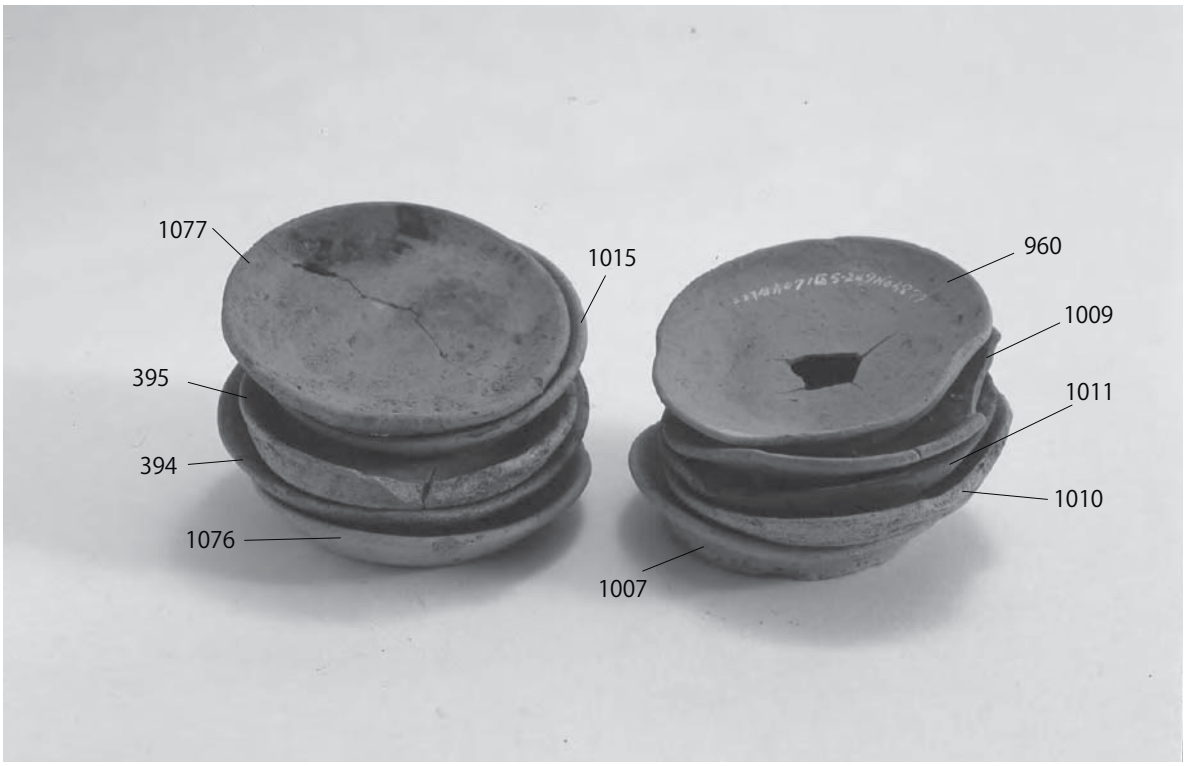
Ⅰ区　溝状遺構内出土　杯



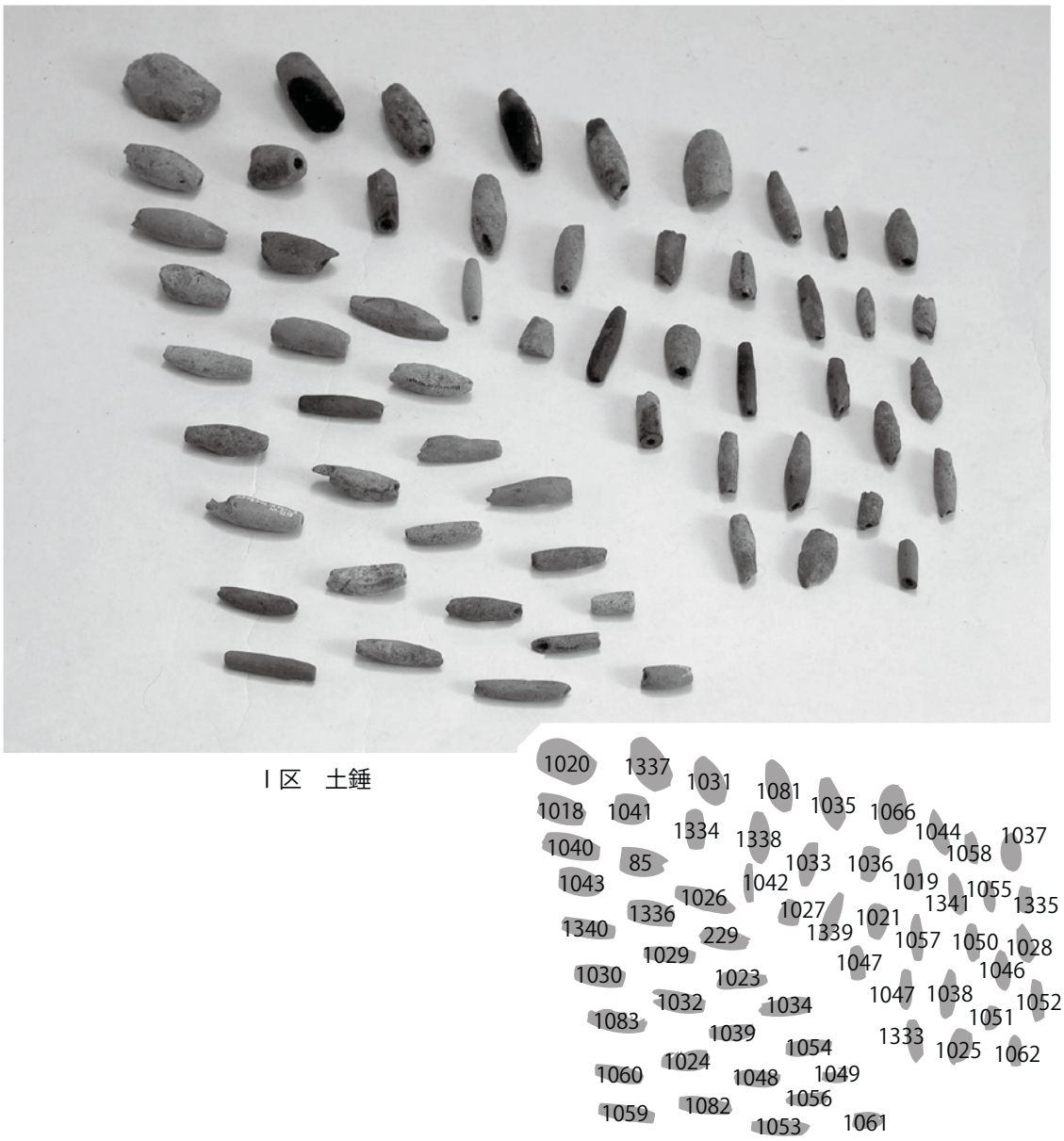
Ⅰ区　井戸内出土　小皿



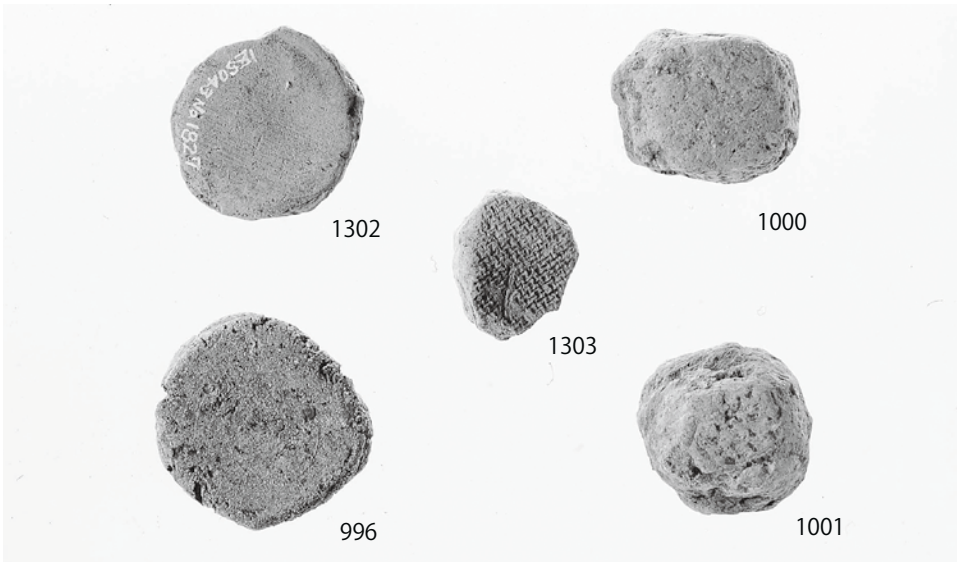
Ⅰ区　溝状遺構内出土　小皿



Ⅰ区　井戸内出土　小皿


1020
1337
1031
1081
1035
1066
1018
1041
1334
1338
1044
1037
1040
85
1033
1036
1058
1043
1042
1019
1055
1026
1027
1341
1335
1336
1021
1340
229
1339
1057
1050
1028
1029
1047
1030
1023
1046
1032
1034
1047
1038
1052
1083
1051
1039
1333
1054
1025
1062
1024
1060
1048
1049
1056
1059
1082
1053
1061

Ⅰ区　土錘


1302
1000
1303
996
1001

Ⅰ区　土製品

SI-2001

2019

2020

2021

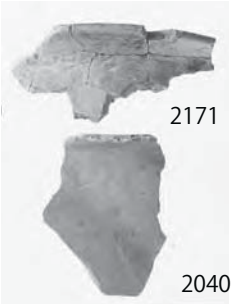
2008

2024

SI-2001

2122

2007



2171

2040

SI-2004

2073

2072

2043

SI-2016

2174

SI-2017

2178

2181

SI-2017

2182

SK-2009

2125

SK-2018

2032

2031

2030

2029

2027

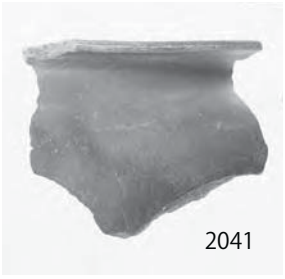
2028

2047

SK-2018

2044

2046



2041

SK-2018

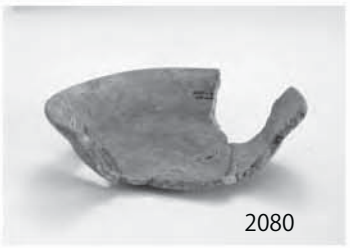
2042

2185

SE-2008

2082

2083


2080

2089

2120

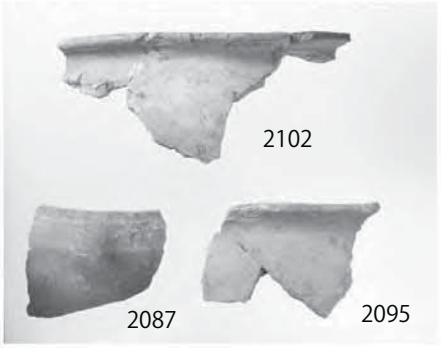
2111

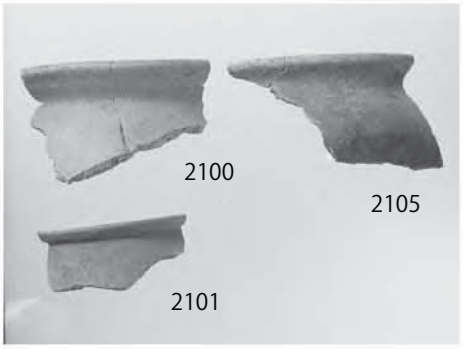
2112

2117

2113

2121


2102
2087
2095

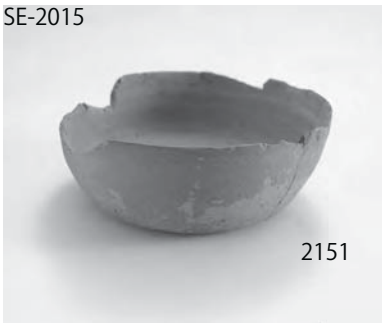

2100
2105
2101

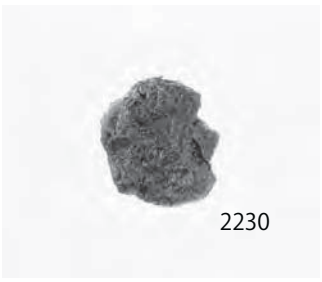
SE-2015

2152

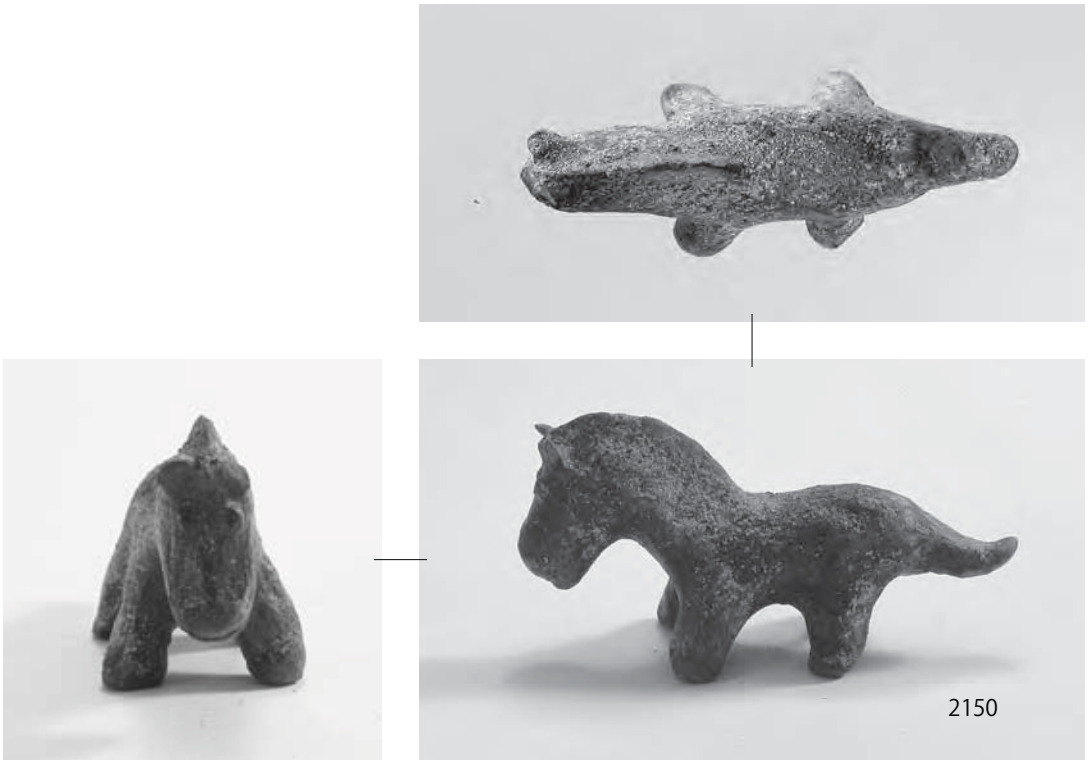
P.L - 50

SE-2015





SD-2011



II区　SK-2016 内出土　土馬

報告書抄録

ふりがな	にほんぎいせきぐんさん
書名	二本木遺跡群Ⅲ
副書名	熊本合同庁舎A棟新営工事に伴う二本木遺跡群春日地区第8次埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第256集
編著者名	坂田和弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2010年3月

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
二本木遺跡群 第8次調査区	熊本市春日 2丁目	43201	265	32° 47' 00"	130° 41' 36"	2005年 6月 ～ 2006年 8月	3,530㎡	合同庁舎 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二本木遺跡群 第8次調査区	屋敷跡 集落 工場跡	古代 中世 近代	掘立柱建物・柱列・土坑・井戸・竪穴建物・墓壙・溝状遺構 建物基礎	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・硯・帯金具・銅製品・鉄製品・石製品・土製品・古銭・骨類・人骨近代陶磁器・煉瓦	古代集落 中世集落 屋敷跡

熊本県文化財調査報告　第256集

二本木遺跡群Ⅲ

熊本合同庁舎A棟新営工事に伴う二本木遺跡群春日地区第8次埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日	平成22年3月31日
編集・発行	熊本県教育委員会 〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷	株式会社　大和印刷所 〒861-8031　熊本県熊本市戸島町920-11 TEL 096-380-0303

21　教委　教文
②　011

二本木遺跡群III　正誤表

本文

ページ	行数	誤	正
P1	28行	× 平成18年3月20日	→ ○ 平成18年1月18日
P1	30行	× 平成18年1月20日	→ ○ 平成18年3月20日
P8	23行	× 竪穴住居跡が＿棟	→ ○ 竪穴住居跡が80棟
P112	キャプション	× 第126図　1区　SE066瓦出土遺物実測図	→ ○ 第126図　1区　SE066出土瓦実測図
P116	キャプション	× 第130図　1区　SE120瓦出土遺物実測図	→ ○ 第130図　1区　SE120出土瓦実測図
P120	キャプション	× 第135図　1区　SE247瓦出土遺物実測図	→ ○ 第135図　1区　SE247出土瓦実測図
P143	キャプション	× 第150図　1区　溝状遺構出土遺物測図	→ ○ 第150図　1区　溝状遺構出土遺物実測図
P151	キャプション	× 第154図　1区　SD270出土実測図	→ ○ 第154図　1区　SD270出土遺物実測図
P152	キャプション	× 第155図　1区　SD270実測図	→ ○ 第155図　1区　SD270出土遺物実測図
P154	キャプション	× 第157図　1区　溝状出土遺物実測図(1106のS=1/2)	→ ○ 第157図　1区　溝状遺構出土遺物実測図(1106のみS=1/2)
P155	キャプション	× 第158図　1区　溝状出土遺物実測図1104・1312(1/2)・他(1/3)	→ ○ 第158図　1区　溝状遺構出土遺物実測図1104・1312(1/2)・他(1/3)
P156	キャプション	× 第159図　1区　溝状出土遺物実測図	→ ○ 第159図　1区　溝状遺構出土遺物実測図
P157	キャプション	× 第160図　1区　溝状出土遺物実測図	→ ○ 第160図　1区　溝状遺構出土遺物実測図
P163	キャプション	× ピット内出土遺物実測図	→ ○ 1区　ピット内出土遺物実測図
P167	キャプション	× SX出土遺物実測図	→ ○ 1区　SX出土遺物実測図
P219	タイトル	× 二本木遺跡群第8次調査の自然科学分析の自然科学分析	→ ○ 二本木遺跡群第8次調査の自然科学分析

遺物観察表

ページ	番号	誤	正
P259	146	× 器種：脚	→ ○ 器種：鍔
P290	1225	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P291	1562	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1636	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1637	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1638	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1190	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1191	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1224	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P292	1233	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P293	1238	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P293	1418	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P293	1420	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P295	1188	× 挿図番号：161	→ ○ 挿図番号：168
P296	1127	× 挿図番号：162	→ ○ 挿図番号：169
P296	1173	× 挿図番号：162	→ ○ 挿図番号：169
P296	1240	× 挿図番号：162	→ ○ 挿図番号：169
P296	1591	× 挿図番号：162	→ ○ 挿図番号：169
P297	1106	× 種別：-	→ ○ 種別：SD
P299	585	× 出土地点：-/-	→ ○ 出土地点：355/SD
P299	502	× 挿図番号：169	→ ○ 挿図番号：167
P299	24	× 出土地点：SD	→ ○ 出土地点：SX

P298 表10 1区 石器・石製品観察表(追加分)

挿図番号	番号	種別	出土地点 グリッド	出土地点 種別	出土地点 遺構	出土地点 層位	法量(cm・g) 長さ	法量(cm・g) 幅	法量(cm・g) 厚さ	法量(cm・g) 重量	石材	備考	写真図版
176	743	打製	M・N-3・4	-	-	-	16.35	11.05	3.4	736	安山岩	-	43

P295 表4 1区 輸入陶磁器観察表(追加分)

挿図番号	番号	種別	器種	産地	分類	出土地点 グリッド	出土地点 種別	出土地点 遺構	部位	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外器面	調整 外底面	調整 内器面	調整 内底面	色調 胎土	色調 notation	備考	写真図版
133	1442	陶器	盤	-	I-1	-	SE	247	口縁	(31.0)	-	-	-	-	-	-	灰黄褐	7.6Y7.6/5.3	-	12
-	1443	陶器	盤	-	I-1	-	SE	247	口縁	-	-	-	-	-	-	-	灰白	5SP77/03	-	12
161	1632	陶器	茶入れ	-	-	K-L 3-4	-	-	口縁	(2.8)		-	-	-	-	-	黒褐	-	13-14c前半	-

写真図版

ページ	誤	正
P.L-6	× 白磁 SD-004 III III-2類(内)	→ ○ 白磁 SX-004 III III-2類(内)
P.L-6	× 白磁 SD-004 III III-2類(外)	→ ○ 白磁 SX-004 III III-2類(外)
P.L-18	× SD-004 検出状況(南より)(俯瞰)	→ ○ SX-004 検出状況(南より)(俯瞰)

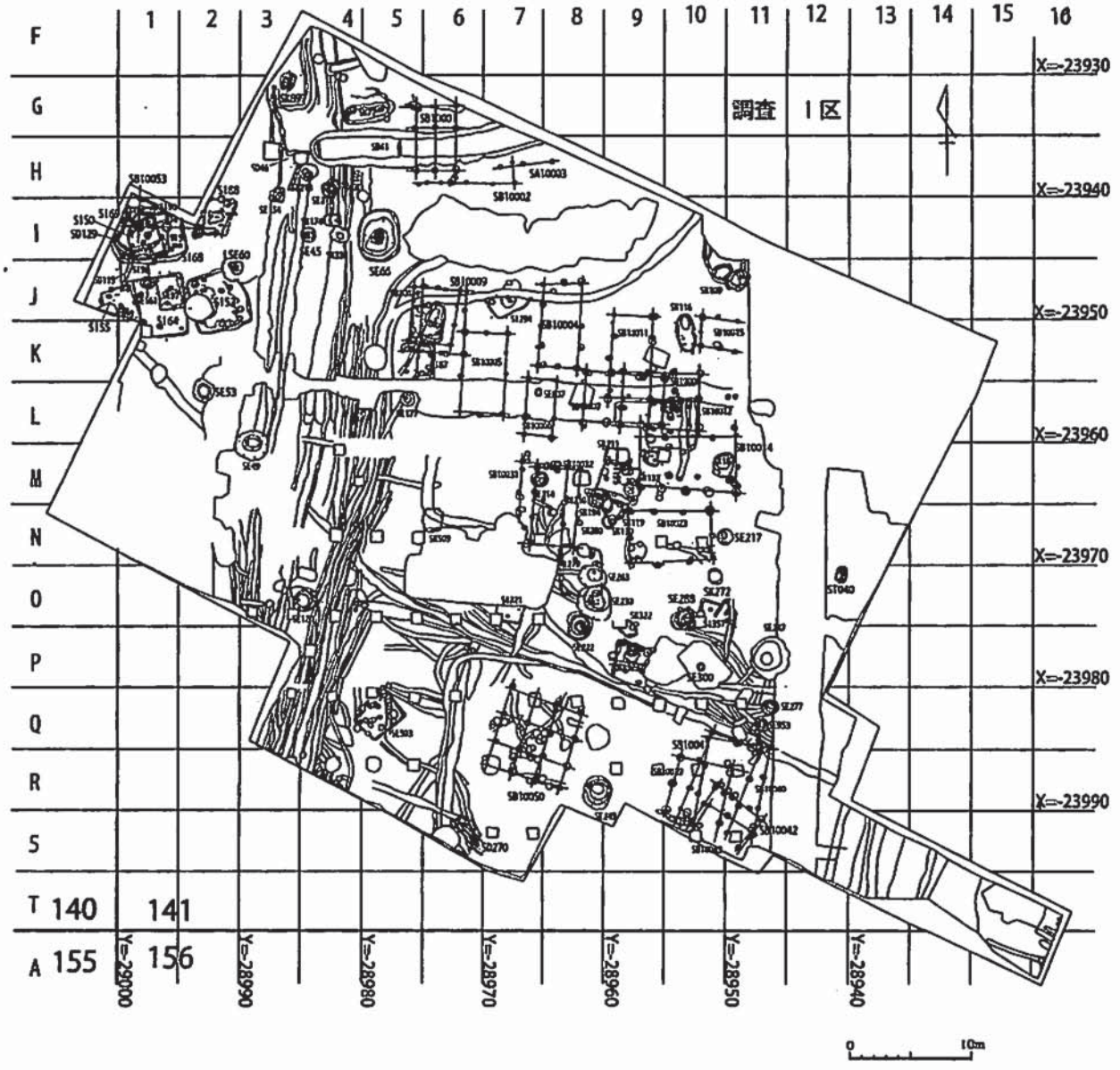
熊本県文化財調査報告書第256集　(2010・3)　二本木遺跡群III　　正誤表2

1. 凡例中

（誤）基準点の選択ミスにより本来の標高より146mm高く

→（正）基準点の選択ミスにより本来の標高より116mm高く

2. P15　第6図　遺構配置図　　下の遺構配置図に差し替え



第6図　二本木遺跡群III　調査I区　遺構配置図

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 256 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：二本木遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/